

常磐自動車道遺跡調査報告 9

タタラ山遺跡
(第 2 次調査)

1996 年 12 月

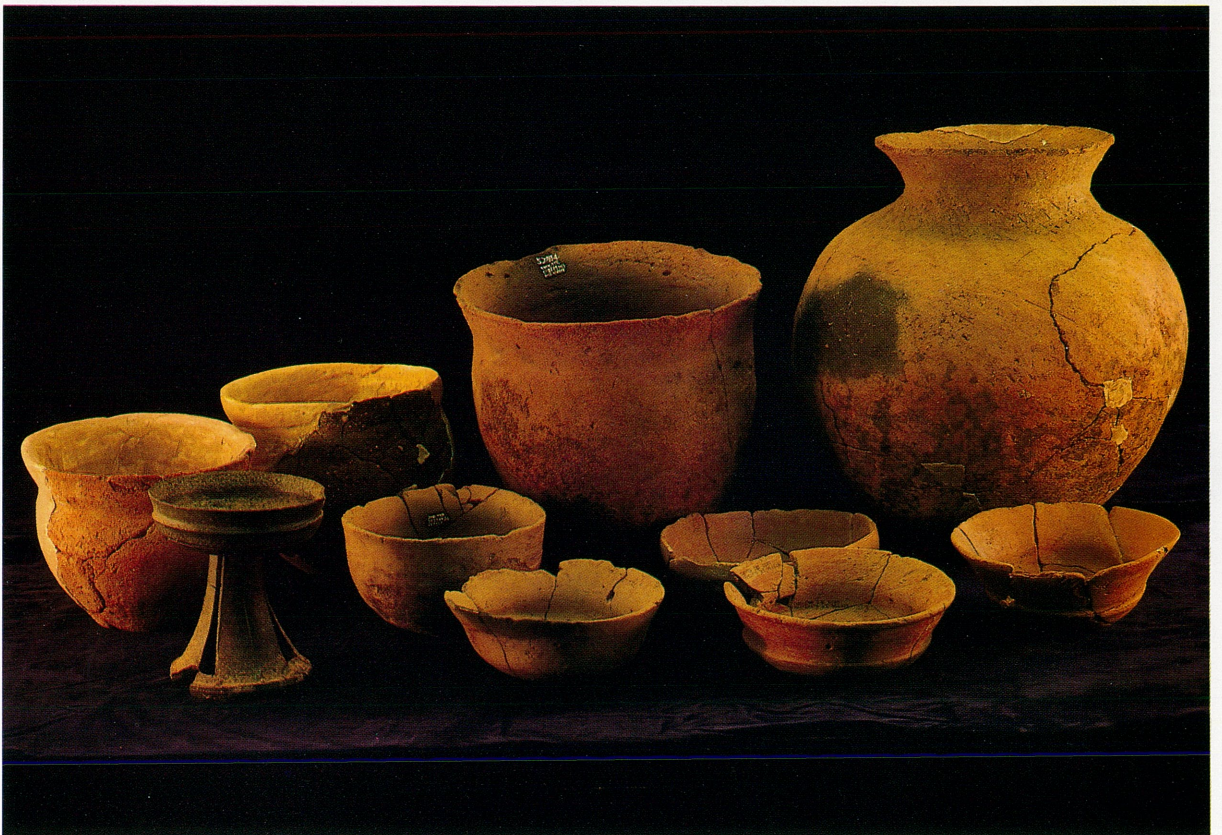
福島県教育委員会
観 福島県文化センター
日 本 道 路 公 団

常磐自動車道遺跡調査報告 9

タタラ山遺跡
(第 2 次調査)



口絵1 タタラ山遺跡全景(東から)



口絵2 タタラ山遺跡出土土師器・須恵器



口絵3 タタラ山遺跡出土縄文土器

序 文

福島県では、「新世紀ふくしま」の新しい交通体系の確立をめざし、高速交通網の整備をすすめておりますが、それに伴う開発による発掘調査も増加してまいりました。福島空港関係や、磐越自動車道関係でも多くの遺跡の発掘調査が実施され、貴重な埋蔵文化財が記録として保存されております。

常磐自動車道は、昭和63年に埼玉県三郷～いわき中央間まで開通し、現在は、いわき中央～いわき四倉間の建設工事が行われております。

この常磐自動車道いわき中央～いわき四倉間にも、先人が残した数多くの文化遺産が埋蔵されており、いわき市教育委員会が平成元年度に分布調査を実施し、周知の埋蔵文化財包蔵地を含め29遺跡を確認しました。

平成5年度、福島県教育委員会はこれらの埋蔵文化財包蔵地の範囲や性格を確かめるための試掘調査を行い、その結果を基に、日本道路公団東北支社いわき工事事務所と遺跡の保存協議を重ねましたが、現状保存が困難なタタラ山遺跡については、平成7年度に発掘調査を実施いたしました。

本報告書は、いわき市四倉町に所在するタタラ山遺跡の発掘調査についての報告書であります。今後この報告書が地域の歴史を解明するための基礎資料として利用されるとともに、生涯学習の研究資料として広く県民の皆様に活用していただければ幸いと存じます。

最後に、発掘調査から報告書刊行まで、ご協力いただいた日本道路公団、(財)福島県文化センターをはじめとする関係機関並びに関係者各位に対し感謝の意を表すものであります。

平成8年12月

福島県教育委員会

教育長 渡 邊 貞 雄

あ い さ つ

財団法人福島県文化センターでは、福島県教育委員会からの委託により、埋蔵文化財の調査業務を行っております。そのひとつである常磐自動車道いわき中央～いわき四倉間については、平成5年度から本格的に行い、平成7年度までに、16の遺跡の試掘調査と10の遺跡の発掘調査を実施いたしました。

本報告書は、平成6年度から2カ年にわたって発掘調査したタタラ山遺跡の調査成果をまとめたものです。この遺跡からは、縄文時代早期（およそ8500年前）～平安時代前期（1100年前）までの長い時代にわたる遺構・遺物が発見されています。特に縄文時代早期の遺物、古墳時代後期の集落跡、平安時代前期の須恵器窯跡などの生産遺構は、本県浜通り地方においても類例が少なく、貴重な資料になるものと考えております。今後この調査成果が、地域における歴史研究の基礎資料として広く活用していただければ、幸いと存じます。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまで、ご指導、ご協力いただいた関係諸機関ならびに関係各位に、深く感謝の意を表します。

平成8年12月

財団法人 福島県文化センター

館長 新妻 威男

緒 言

1. 本書は、平成7年度常磐自動車道（いわき中央～いわき四倉間）関連遺跡調査の発掘調査報告書である。
2. 本書には、福島県いわき市四倉町山田小湊字角田に所在する、タタラ山遺跡の調査成果を収録した。
3. 本事業は、福島県教育委員会が日本道路公団の委託により実施し、調査は財団法人福島県文化センターに委託した。
4. 財団法人福島県文化センターでは、事業第二部遺跡調査課の次の職員を配し調査を実施した。

文化財主査	安田 稔	文化財副主査	高村亮一郎
文化財副主査	渡辺 悦子	文化財主事	大竹 正浩
文化財主事	国井 秀紀	文化財主事	今野 徹
5. 本書の執筆は、調査を担当した調査員が分担して行い、各原稿の文末に文責を明記した。
6. 本書掲載の自然科学分析・考察は、次の諸氏・諸機関に協力いただいた。

胎土分析	: 三辻 利一（奈良教育大学教授）
カルシウム分析	: パリノ・サーヴェイ株式会社
木炭樹種同定	: パリノ・サーヴェイ株式会社
滑石産地同定	: パリノ・サーヴェイ株式会社
石器石質鑑定	: 真鍋 健一（福島大学教授）
7. 本書に使用した地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万5千分の1地形図・20万分の1地勢図を複製使用した。「(承認番号)平5東複,第21号」
8. 引用・参考文献は、巻末に敬称を略して掲載した。
9. 本書に収録した遺跡の調査記録および出土資料は、福島県教育委員会が保管している。
10. 発掘調査から本書作成まで、次の機関と研究者からご指導・ご助言をいただいた。

いわき市教育委員会・財団法人いわき市教育文化事業団・馬目順一・高田 勝

用 例

1. 本書で使用した略号は以下の通りである。

いわき市… IWK	タタラ山… TTR	グリッド… G	遺構外堆積土… L
遺構内堆積土… <i>l</i>	竪穴住居跡… SI	土坑… SK	焼土遺構… SG
溝 跡… SD	土器埋設遺構… SM	性格不明遺構… SX	
ピット… P	掘立柱建物跡… SB	須恵器窯跡… SR	木炭窯跡… SC

2. 遺構図の用例は次の通りである。

- (1) 図中の北方位は、座標軸経線の北と一致する。
- (2) 遺構平面図は、原則として座標軸経線の北を上にして割り付けを行った。
- (3) 縮尺率はスケールの脇に表記したが、原則として竪穴住居跡 1/50, 土坑 1/40 である。
- (4) 図中の破線は推定線及び透過した下端を表し、一点鎖線は住居床面の貼床範囲あるいは踏み縮まり範囲, 二点鎖線は床面遺存範囲を表している。また、遺構が重複している場合には、客体遺構を優先遺構より細線で表記した。

(5) 遺構外自然堆積土はローマ数字, 遺構内堆積土は算用数字で表記した。

(例) 遺構外自然堆積土 LI・II… 遺構内堆積土 l1・2…









- (6) 断面図における水準線脇の数値は標高である。
- (7) 遺構平面図中の網点は特に断らない限り焼土の範囲を示している。

3. 遺物実測図の用例は次の通りである。

- (1) 縮尺率はスケールの脇に表記したが、原則として土器を 1/3, 石器 1/2・1/3, 拓影 2/5 である。
- (2) 土器の断面図は、縄文土器の胎土に繊維を含むものについてのみ網点で表示し、それ以外の縄文土器・弥生土器・土師器は白ぬき, 須恵器は黒つぶしで表記した。
- (3) 土師器における黒色処理は、その処理面を網点で表記した。
- (4) 遺物番号は挿図版ごととし、下記のように省略して表記している。

[例] 第1図2番の土器：図1-2

4. 遺構・遺物実測図で使用した網点記号は以下の通りである。

			
繊維土器断面	羽口溶着滓	石器敲打痕	柱 痕
			
土師器内黒	石器擦痕	スサ入り粘土	粘 土

目 次

第1章 調査経緯	1		
第1節 調査に至るまでの経緯	1		
第2節 地理的環境	3		
第3節 歴史的環境	5		
第2章 調査の経過と方法	9		
第1節 位置と地形	9		
第2節 調査経過	10		
第3節 調査方法	12		
第3章 I区の遺構と遺物	14		
第1節 基本土層	14		
第2節 竪穴住居跡	16		
9号住居跡 (16)	10号住居跡 (22)	11号住居跡 (30)	12号住居跡 (35)
13号住居跡 (39)	14号住居跡 (42)	15号住居跡 (48)	16号住居跡 (54)
17号住居跡 (60)	18号住居跡 (62)	19号住居跡 (66)	20号住居跡 (73)
21号住居跡 (76)	22号住居跡 (78)	23号住居跡 (80)	25号住居跡 (82)
26号住居跡 (85)	27号住居跡 (89)	28号住居跡 (93)	
第3節 土 坑	96		
34号土坑 (96)	40号土坑 (96)	50号土坑 (97)	51号土坑 (97)
52号土坑 (98)	61号土坑 (98)	67号土坑 (98)	70号土坑 (100)
71号土坑 (100)	76号土坑 (101)	83号土坑 (101)	84号土坑 (103)
85号土坑 (103)	96号土坑 (103)	98号土坑 (104)	99号土坑 (106)
107号土坑 (106)	112号土坑 (107)	121号土坑 (107)	130号土坑 (108)
157号土坑 (108)	175号土坑 (111)	大型円形土坑 (113)	
第4節 その他の遺構	152		
1号土器埋設遺構 (152)	2号溝跡 (153)	3号溝跡 (154)	
1号性格不明遺構 (154)	2号性格不明遺構 (157)	3号性格不明遺構 (159)	
4号性格不明遺構 (159)	5号ピット (160)	6号ピット (160)	7号ピット (161)
第5節 遺構外出土遺物	162		
第4章 II区の遺構と遺物	215		
第1節 基本土層	215		
第2節 竪穴住居跡	216		
3号住居跡 (216)	6号住居跡 (221)		

第3節	土 坑	223
	16号土坑 (223)	
	20号土坑 (224)	
	21号土坑 (224)	
	22号土坑 (226)	
	25号土坑 (226)	
	29号土坑 (226)	
	30号土坑 (227)	
	31号土坑 (227)	
	32号土坑 (229)	
	33号土坑 (229)	
	34号土坑 (230)	
第4節	溝 跡	230
	7号溝跡 (230)	
第5節	遺構外出土遺物	231
第5章	考 察	251
第1節	I区縄文時代の遺構と遺物	251
第2節	II区縄文・弥生時代の遺構と遺物	257
第3節	古墳時代の遺構と遺物	260
第4節	奈良・平安時代の遺構と遺物	273
第5節	ま と め	279
付編1	タタラ山遺跡出土須恵器の蛍光X線分析	285
付編2	タタラ山遺跡における自然科学分析調査報告	287

挿 図 目 次

図 1	常磐自動車道(いわき中央～いわき四倉)位置図	1	図 51	I区27号住居跡カマド	91
図 2	いわき市四倉・久之浜地区地質図	4	図 52	I区27号住居跡出土土師器・石製品・土製品・石器	92
図 3	周辺の遺跡	6	図 53	I区28号住居跡, 出土縄文土器	95
図 4	発掘調査遺跡位置図	9	図 54	I区34・40・50～52・61・67号土坑	99
図 5	タカラ山遺跡2次調査区位置図	13	図 55	I区70・71・76・83～85号土坑	102
図 6	I区基本土層図	15	図 56	I区96・98・99・107・112号土坑	105
図 7	I区9号住居跡	17	図 57	I区121・130・157・175号土坑	109
図 8	I区9号住居跡カマド, 出土土師器	18	図 58	I区土坑出土縄文土器	110
図 9	I区9号住居跡出土土師器・石製品・鉄製品	19	図 59	I区東部円形土坑配置図	113
図 10	I区9号住居跡出土石製品	20	図 60	I区29～33・35号土坑	120
図 11	I区10号住居跡	24	図 61	I区36～38号土坑	121
図 12	I区10号住居跡カマド, 出土土師器	25	図 62	I区39・42～44号土坑	122
図 13	I区10号住居跡出土土師器・須恵器・石製品	26	図 63	I区45～47号土坑	123
図 14	I区10号住居跡出土石製品	27	図 64	I区48・49・53・54号土坑	124
図 15	I区11号住居跡	31	図 65	I区55～59号土坑	125
図 16	I区11号住居跡カマド, 出土鉄製品・土師器	32	図 66	I区60・62～64号土坑	126
図 17	I区11号住居跡出土土師器	33	図 67	I区65・66・68・69・72号土坑	127
図 18	I区12号住居跡	36	図 68	I区73～75・77・78号土坑	128
図 19	I区12号住居跡出土土師器	37	図 69	I区79～82号土坑	129
図 20	I区13号住居跡	40	図 70	I区86～88号土坑	130
図 21	I区13号住居跡出土土師器・須恵器・石製品	41	図 71	I区89～93号土坑	131
図 22	I区14号住居跡A床面	43	図 72	I区94・95・97・100号土坑	132
図 23	I区14号住居跡B床面	44	図 73	I区101～104号土坑	133
図 24	I区14号住居跡カマド	45	図 74	I区105・106・108～110号土坑	134
図 25	I区14号住居跡出土土師器・石製品・縄文土器	47	図 75	I区111・113～115号土坑	135
図 26	I区15号住居跡	49	図 76	I区116～118・120号土坑	136
図 27	I区15号住居跡カマド, 出土石製品・土師器	50	図 77	I区122～125号土坑	137
図 28	I区15号住居跡出土土師器	51	図 78	I区126～129・131号土坑	138
図 29	I区16号住居跡	55	図 79	I区132～136号土坑	139
図 30	I区16号住居跡出土土師器(1)	57	図 80	I区137～142号土坑	140
図 31	I区16号住居跡出土土師器(2)	58	図 81	I区143～147号土坑	141
図 32	I区17号住居跡, 出土土師器・須恵器	61	図 82	I区148～153号土坑	142
図 33	I区18号住居跡	63	図 83	I区154～156・158～160号土坑	143
図 34	I区18号住居跡カマド, 出土鉄製品・土師器	64	図 84	I区161～167号土坑	144
図 35	I区18号住居跡出土土師器	65	図 85	I区168～172号土坑	145
図 36	I区19号住居跡	67	図 86	I区173・174号土坑	146
図 37	I区19号住居跡カマド, 出土土師器・石製品	68	図 87	I区36号土坑出土土師器	147
図 38	I区19号住居跡出土土師器(1)	69	図 88	I区円形土坑出土土師器・石製品・石器	148
図 39	I区19号住居跡出土土師器(2)	70	図 89	I区1号土器埋設遺構, 出土縄文土器	152
図 40	I区20号住居跡	74	図 90	I区2号溝跡	153
図 41	I区20号住居跡出土土師器・須恵器・縄文土器・弥生土器	75	図 91	I区3号溝跡, 出土縄文土器・須恵器	155
図 42	I区20号住居跡出土石器	76	図 92	I区1号性格不明遺構, 出土土師器	156
図 43	I区21号住居跡, 出土縄文土器	77	図 93	I区2号性格不明遺構, 出土縄文土器	157
図 44	I区22号住居跡, 出土縄文土器	79	図 94	I区3号性格不明遺構, 出土石製品・土師器	158
図 45	I区23号住居跡, 出土土師器・石製品	81	図 95	I区4号性格不明遺構	159
図 46	I区25号住居跡, 出土縄文土器	83	図 96	I区5～7号ピット	161
図 47	I区25号住居跡出土縄文土器・石器	84	図 97	I区西部遺構外出土縄文土器遺物分布図	163
図 48	I区26号住居跡	86	図 98	I区遺構外出土縄文土器(1)	164
図 49	I区26号住居跡出土土師器・須恵器・石製品	88	図 99	I区遺構外出土縄文土器(2)	165
図 50	I区27号住居跡	90	図 100	I区遺構外出土縄文土器(3)	166

図 101	I 区遺構外出土縄文土器 (4)	167	図 139	II 区基本土層図	216
図 102	I 区遺構外出土縄文土器 (5)	168	図 140	II 区遺構配置図	217
図 103	I 区遺構外出土縄文土器 (6)	169	図 141	II 区 3 号住居跡, 出土土師器	220
図 104	I 区遺構外出土縄文土器 (7)	170	図 142	II 区 3 号住居跡出土須恵器	221
図 105	I 区遺構外出土縄文土器 (8)	171	図 143	II 区 6 号住居跡, 出土土師器	222
図 106	I 区遺構外出土縄文土器 (9)	173	図 144	II 区 16・20~22・25・29 号土坑	225
図 107	I 区遺構外出土縄文土器 (10)	174	図 145	II 区 30~34 号土坑	228
図 108	I 区遺構外出土縄文土器 (11)	175	図 146	II 区 7 号溝跡	231
図 109	I 区遺構外出土縄文土器 (12)	177	図 147	II 区遺構外出土遺物分布図	232
図 110	I 区遺構外出土縄文土器 (13)	178	図 148	II 区遺構外出土縄文土器 (1)	234
図 111	I 区遺構外出土縄文土器 (14)	179	図 149	II 区遺構外出土縄文土器 (2)	235
図 112	I 区遺構外出土縄文土器 (15)	180	図 150	II 区遺構外出土縄文土器 (3)	236
図 113	I 区遺構外出土縄文土器 (16)	181	図 151	II 区遺構外出土弥生土器 (1)	239
図 114	I 区遺構外出土縄文土器 (17)	182	図 152	II 区遺構外出土弥生土器 (2)	240
図 115	I 区遺構外出土縄文土器 (18)	183	図 153	II 区遺構外出土弥生土器 (3)	241
図 116	I 区遺構外出土縄文土器 (19)	185	図 154	II 区遺構外出土弥生土器 (4)	242
図 117	I 区遺構外出土縄文土器 (20)	187	図 155	II 区遺構外出土弥生土器 (5)	243
図 118	I 区遺構外出土縄文土器 (21)	188	図 156	II 区遺構外出土弥生土器 (6)	244
図 119	I 区遺構外出土縄文土器 (22)	189	図 157	II 区遺構外出土弥生土器 (7)	245
図 120	I 区遺構外出土縄文土器 (23)	191	図 158	II 区遺構外出土弥生土器 (8)	246
図 121	I 区遺構外出土縄文土器 (24)	193	図 159	II 区遺構外出土弥生土器 (9)	247
図 122	I 区遺構外出土縄文土器 (25)	194	図 160	II 区遺構外出土弥生土器 (10)	248
図 123	I 区遺構外出土縄文土器 (26)	195	図 161	II 区遺構外出土弥生土器・土師器	249
図 124	I 区遺構外出土縄文土器 (27)	196	図 162	II 区遺構外出土石器・羽口	250
図 125	I 区遺構外出土縄文土器 (28)	197	図 163	I 区縄文時代遺構変遷図	255
図 126	I 区遺構外出土縄文土器 (29)	199	図 164	古墳時代 (IV a・IV b 群) の土器 (1)	261
図 127	I 区遺構外出土縄文土器 (30)	200	図 165	古墳時代 (IV c・IV d 群) の土器 (2)	262
図 128	I 区遺構外出土縄文土器 (31)	201	図 166	古墳時代 (IV e・IV f 群) の土器 (3)	263
図 129	I 区遺構外出土縄文土器 (32)	203	図 167	古墳時代 (IV 期) の遺構変遷図 (4)	265
図 130	I 区遺構外出土縄文土器 (33)	204	図 168	石製模造品製作工程図	271
図 131	I 区遺構外出土縄文土器・弥生土器	205	図 169	石製紡錘車製作工程図	272
図 132	I 区遺構外出土弥生土器	206	図 170	奈良・平安時代 (V 期) の土器群 (1)	274
図 133	I 区遺構外出土土師器 (1)	208	図 171	奈良・平安時代 (V 期) の土器群 (2)	275
図 134	I 区遺構外出土土師器 (2)	209	図 172	奈良・平安時代 (V 期) の遺構変遷図	278
図 135	I 区遺構外出土石器 (1)	211			
図 136	I 区遺構外出土石器 (2)	212	付図 1	タタラ山遺跡遺構配置図	
図 137	I 区遺構外出土石器・金属製品・石製品	213	付図 2	I 区遺構配置図	
図 138	I 区遺構外出土石製品	214			

写真目次

1	I 区西部作業風景 (北西から)	299	12	I 区 11 号住居跡	304
2	I 区西部基本土層 (南から)	299	13	I 区 12 号住居跡全景 (西から)	305
3	I 区全景 (東から)	300	14	I 区 12 号住居跡	305
4	I 区東部全景 (南から)	300	15	I 区 13 号住居跡全景 (南から)	306
5	I 区西部全景 (東から)	301	16	I 区 13 号住居跡	306
6	I 区西部全景 (南から)	301	17	I 区 14 号住居跡検出状況 (西から)	307
7	I 区 9 号住居跡全景 (南から)	302	18	I 区 14 号住居跡	307
8	I 区 9 号住居跡	302	19	I 区 14 号住居跡全景 (西から)	308
9	I 区 10 号住居跡全景 (南から)	303	20	I 区 14 号住居跡	308
10	I 区 10 号住居跡	303	21	I 区 15 号住居跡 1 号カマド全景 (西から)	309
11	I 区 11 号住居跡全景 (南西から)	304	22	I 区 15 号住居跡	309

23	I区16号住居跡全景(南から)	310	78	II区基本土層(北から)	337
24	I区16号住居跡	310	79	II区3号住居跡全景(東から)	338
25	I区17号住居跡全景(南から)	311	80	II区3号住居跡	338
26	I区17号住居跡	311	81	II区6号住居跡全景(南東から)	339
27	I区18号住居跡カマド遺物出土状況(南から)	312	82	II区6号住居跡	339
28	I区18号住居跡	312	83	II区25・29号土坑	340
29	I区19号住居跡全景(南西から)	313	84	II区30~32号土坑	340
30	I区19号住居跡	313	85	I区9号住居跡出土土師器	341
31	I区20号住居跡全景(南から)	314	86	I区9・10号住居跡出土土師器	342
32	I区20号住居跡	314	87	I区10号住居跡出土土師器・須恵器	343
33	I区21号住居跡全景(南から)	315	88	I区11号住居跡出土土師器	344
34	I区21号住居跡断面(BB')	315	89	I区11・12号住居跡出土土師器	345
35	I区22号住居跡全景(南から)	316	90	I区12・13号住居跡出土土師器・須恵器	346
36	I区22号住居跡	316	91	I区14号住居跡出土土師器	347
37	I区23号住居跡全景(西から)	317	92	I区15号住居跡出土土師器	348
38	I区23号住居跡	317	93	I区15・16号住居跡出土土師器	349
39	I区25号住居跡全景(南から)	318	94	I区16号住居跡出土土師器	350
40	I区25号住居跡	318	95	I区16・17号住居跡出土土師器	351
41	I区26号住居跡全景(南東から)	319	96	I区17・18号住居跡出土土師器・須恵器	352
42	I区26号住居跡	319	97	I区18・19号住居跡出土土師器	353
43	I区27号住居跡全景(南西から)	320	98	I区19号住居跡出土土師器	354
44	I区27号住居跡	320	99	I区19・20号住居跡出土土師器	355
45	I区28号住居跡全景(南から)	321	100	I区22・26・27号住居跡出土土師器・須恵器・ 縄文土器	356
46	I区28号住居跡	321	101	I区27・28号住居跡出土土師器・縄文土器, 土坑出土土師器(1)	357
47	I区東部土坑群全景(東から)	322	102	I区土坑出土土師器(2)	358
48	I区東部土坑群全景(南から)	322	103	I区土坑出土土師器(3)・縄文土器, 土器埋設遺構出土縄文土器	359
49	I区東部土坑群全景(南から)	323	104	I区遺構外出土土師器(1)	360
50	I区東部土坑群全景(南東から)	323	105	I区遺構外出土土師器(2)	361
51	I区34・40・67号土坑	324	106	I区遺構外出土土師器(3)	362
52	I区70・96・98号土坑	324	107	I区遺構内・遺構外出土石製品・金属製品	362
53	I区107・112・121号土坑	325	108	I区遺構内・遺構外出土石製品	363
54	I区130・157・175号土坑	325	109	I区遺構外出土縄文土器(1)・石器	364
55	I区29・33・35号土坑	326	110	I区遺構外出土縄文土器(2)	365
56	I区36号土坑	326	111	I区遺構外出土縄文土器(3)	365
57	I区35~38・43号土坑	327	112	I区遺構外出土縄文土器(4)	366
58	I区45・46・49号土坑	327	113	I区遺構外出土縄文土器(5)	366
59	I区53・54・58・59号土坑	328	114	I区遺構外出土縄文土器(6)	367
60	I区60・64・66号土坑	328	115	I区遺構外出土縄文土器(7)	367
61	I区68・69・72号土坑	329	116	I区遺構外出土縄文土器(8)	368
62	I区74・75・77・78号土坑	329	117	I区遺構外出土縄文土器(9)	368
63	I区81・86・87号土坑	330	118	I区遺構外出土縄文土器(10)	369
64	I区90~92・94号土坑	330	119	I区遺構外出土縄文土器(11)	369
65	I区94・95・100・102・103号土坑	331	120	I区遺構外出土縄文土器(12)	370
66	I区105・106・108・113号土坑	331	121	I区遺構内・遺構外出土石器	370
67	I区113~116号土坑	332	122	II区住居跡出土土師器・須恵器, 遺構外出土 弥生土器	371
68	I区117・118・120号土坑	332	123	II区遺構外出土縄文土器(1)	372
69	I区122~124・126・128・132号土坑	333	124	II区遺構外出土縄文土器(2)	372
70	I区133・136・141・144号土坑	333	125	II区遺構外出土弥生土器(1)	373
71	I区147・148・152~154号土坑	334	126	II区遺構外出土弥生土器(2)	373
72	I区158~163・167号土坑	334	127	縄文土器の細部と縄文原体	374
73	土器埋設遺構, 2・3号溝跡	335			
74	I区1~4号性格不明遺構	335			
75	I区遺構外遺物出土状況	336			
76	I区遺構外遺物出土状況	336			
77	II区全景(東から)	337			

表 目 次

表 1	常磐自動車道発掘調査一覧	3	表 4	タタラ山遺跡出土石製品石質一覧	259
表 2	タタラ山遺跡周辺の遺跡一覧	7	表 5	いわき市石製模造品出土遺跡一覧	269
表 3	円形土坑一覧	149	表 6	タタラ山遺跡滑石片出土量一覧	270

第1章 調査経緯

第1節 調査に至るまでの経緯

昭和44年埼玉県三郷～茨城県千代田石岡間の基本計画に始まった常磐自動車道は、その路線を徐々に北に延ばし、昭和63年3月には基本計画茨城県千代田石岡～福島県いわき四倉間の内、いわき中央インターチェンジ（以下、ICと言う）までが開通している。未開通であったいわき中央IC～いわき四倉までの区間については、遅れて平成元年に整備基本計画路線となり、現在平成11年の供用開始にむけて建設計画が進められている。なお、いわき四倉以北の延伸分については、宮城県亘理までの基本計画がすでに決定しており、平成5年には福島県いわき四倉～福島県富岡間の施行命令が出されている。

財団法人福島県文化センターが、常磐自動車道に関わる埋蔵文化財の調査に携わったのは、平成5年2月に持たれた福島県企画調整部総合交通課・日本道路公団東北支社いわき工事事務所・福島県教育委員会文化課・いわき市教育委員会文化課・いわき市都市整備課・財団法人いわき市教育文化事業団・財団法人福島県文化センターの7者協議からである。協議ではいわき中央IC～いわき四倉間の自動車道路線内に所在する埋蔵文化財の取扱について話し合われ、その結果好間町および平赤井・平窪地区に所在する13遺跡についてはいわき市教育委員会文化課並びに財団法人いわき市教育文化事業団が調査を実施し、四倉町大野地区に所在する16遺跡については福島県教育委員会並びに財団法人福島県文化センターが調査を担当することを確認した。

上記経緯の中で福島県教育委員会では平成5年度から新規事業として常磐自動車道関連埋蔵文化財調査に着手し、福島県文化センターにその調査を委託している。

平成5年度の常磐自動車道関連埋蔵文化財調査は手始めとして試掘調査計画が策定され、福島県文化センターでは地権者からの承諾書が揃うのを待って、10月20日から担当分である16遺跡の総面積162,600㎡を対象に調査を開始している。その結果、12月23日までに9遺跡69,900㎡の路線内要保存面積を

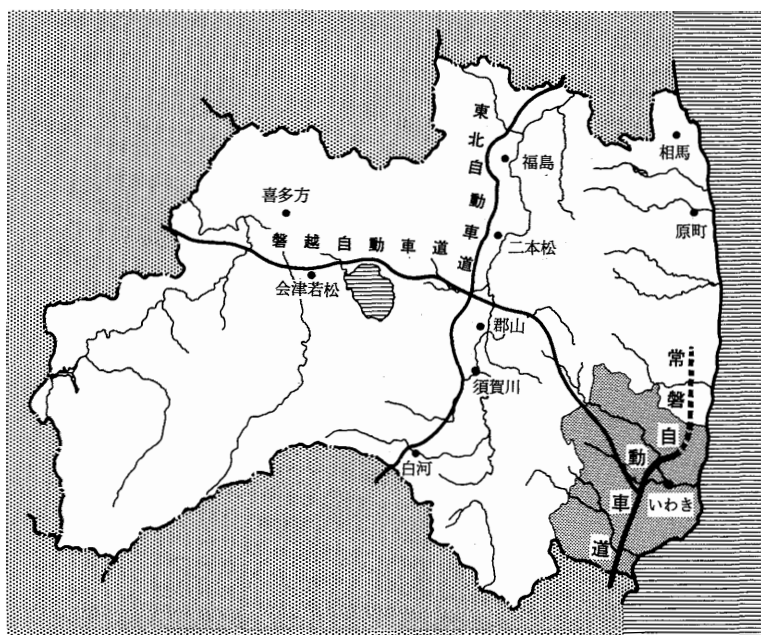


図1 常磐自動車道（いわき中央～いわき四倉）位置図

第1章 調査経緯

確定したが、調査条件が整わず試掘が実施できなかった箇所や、調査対象範囲外まで遺跡範囲の拡張が認識できた遺跡については、後日の再調査によって保存面積を確定することとした。

平成5年度調査計画の中でタタラ山遺跡の試掘対象面積は22,000㎡であり、50本のトレンチを設定した調査の結果、竪穴住居跡・土坑・須恵器・土師器などが検出され、7,000㎡を要保存範囲として確定した。さらに調査結果を踏まえるならば、タタラ山遺跡の保存必要範囲は事業開始段階の調査対象範囲より東側に延びていくことが判断され、そのことも併せて調査結果報告としている。

なお、タタラ山遺跡は平成4年福島県いわき市教育委員会発行『いわき市埋蔵文化財分布図』ではタタラ山館跡として登録されているが、上記試掘調査においては館跡として認知可能な遺構・遺物の確認ができなかったことを踏まえ、以後路線内の範囲についてはタタラ山遺跡として扱うことを平成6年福島県教育委員会発行『常磐自動車道遺跡分布調査報告3』の中で報告し、周知を計っている。

平成6年度常磐自動車道関連埋蔵文化財調査事業では、5遺跡の追加試掘と5遺跡の発掘調査を実施している。タタラ山遺跡に関する調査は、平成5年度調査範囲の東側地区16,700㎡を対象とした試掘調査を発掘調査に先行して行い、47本のトレンチによって竪穴住居跡・土坑・縄文土器・弥生土器などを検出した。検討の結果、遺構・遺物が検出された16,000㎡を要保存範囲とし、平成5年度確定部分と合わせて合計23,000㎡の範囲をタタラ山遺跡の要保存範囲として報告している。

発掘調査は試掘結果を受けて同年度7月から開始され、調査区西側のⅠ区では古墳時代～平安時代の竪穴住居跡・須恵器窯跡・木炭窯などが検出され、東側のⅡ区からは縄文時代の居住施設と考えられる遺構と、数多くの縄文・弥生土器が調査されている。調査終了日は開始時期の遅れもあって12月22日となり、完了した調査面積は14,700㎡である。

平成7年度は発掘調査を中心に事業規模が拡大したことから、調査員30名というこれまでに例のない調査体制がしかれ、4月中旬の調査開始を目指して年度初め早々から準備作業に着手している。4月11日における日本道路公団東北支社いわき工事事務所・福島県教育委員会文化課・財団法人福島県文化センターの協議では、調査開始までに調整が必要な全体的問題として、未買収地の存在・伐採木の処理・排土置き場の確保などがあげられたが、タタラ山遺跡については伐採木の処理という点で調整が必要であった他は、前年度からの継続調査ということもあって他の遺跡に比すれば問題は少ないほうであった。また、4月12日にはいわき市教育委員会文化課・財団法人いわき市教育文化事業団・福島県教育委員会・財団法人福島県文化センターの4者で調査地区が隣接する白岩堀ノ内遺跡について、福島県文化センター側から調査計画を説明するという形で協議を行い、調整を計っている。

平成7年度タタラ山遺跡の発掘調査は、上記協議の翌日である4月13日より表土除去作業を開始したが、全スタッフの本格的な作業始動は4月18日であった。 (安 田)

表1 常磐自動車道発掘調査遺跡一覧

調査年度	遺跡名	所在地	時代	種別	調査面積㎡	備考
平成6年度	久原A遺跡	いわき市四倉町駒込	近世	集落跡	3,300	
	久原B遺跡	いわき市四倉町駒込	近世	散布地	700	
	駒込遺跡	いわき市四倉町駒込	近世	集落跡・木炭窯跡	4,800	
	馬場A遺跡	いわき市四倉町駒込	近世	集落跡・木炭窯跡	7,600	
	タタラ山遺跡	いわき市四倉町山田小湊・玉山	縄文～平安	集落跡・窯跡	17,000	
平成7年度	馬場B遺跡	いわき市四倉町駒込	近世	木炭窯跡	3,100	
	大久保A遺跡	いわき市四倉町駒込	平安・中世	集落跡	4,000	
	大久保F遺跡	いわき市四倉町駒込	平安	集落工房跡・窯跡	12,100	
	タタラ山遺跡	いわき市四倉町山田小湊・玉山	縄文～古墳	集落跡・窯跡	10,300	
	大猿田遺跡	いわき市四倉町中島	古墳～平安	集落跡・水田跡・窯跡	9,000	水田跡は面数により面積換算
	白岩掘ノ内遺跡	いわき市四倉町中島	弥生～平安	集落跡・水田跡・製鉄跡	34,300	水田跡は面数により面積換算

第2節 地理的環境

タタラ山遺跡は、福島県いわき市四倉町に所在する。いわき市は、県土の海沿いを縦長にのびる浜通り地方の南部に位置し、双葉郡・田村郡・東白川郡・石川郡・茨城県北茨城市と接している。

福島県の地質は、阿武隈高地の西縁を堺として、東側の非グリーンタフ（非緑色凝灰岩）地域、西側のグリーンタフ（緑色凝灰岩）地域に大別される。本地域は非グリーンタフ地域に属し、岩沼－久之浜構造線を堺にして太平洋沿岸低地域のなかでも常磐地域に分けられる。太平洋沿岸低地域は中生代・古第三紀・新第三紀の地層が丘陵をつくって分布し、それらが浸食された谷の中に、第四紀層が段丘地形や平野をつくって発達している。いわき地域は北西から南西方向に平行して配置される二ッ箭・赤井・湯ノ岳の断層によって北から双葉地区・石城北部地区・石城南部地区・多賀地区に分けられる。四倉町は石城北部地区にあり、新生代の地層が内陸に入り組んだ形をしている。そのため、山地が西方にずれ、平地が東側に発達している。四倉町を北西から南東方向に二ッ箭断層が走り、北と南で大きな違いを見せている。断層の北側に位置する玉山・中島・白岩地内の地質は基盤層（花崗岩質岩石、八茎変成岩類等）の上に、固結堆積物からなる高倉山層群、双葉層群、白水層群と、半固結堆積物からなる仙台層群が、西から東へ整然と堆積している。これらの地層は、古生代二畳紀から新生代新第三紀にかけて形成されたものである。一方、断層の南側に位置する仁井田川周辺の地質は、固結堆積物からなる白水層群、湯長谷層群、白土層群と、半固結堆積物からなる仙台層群が複雑に入り組みながら堆積している。これらの地層は、断層の北側よりも相対的に新しい新生代古第三紀から新第三紀にかけて形成されたものである。なお、特異な地層として、玉山から八茎地域にかけての丘陵地帯に、固結度のいちじるしく低い袖玉山層（新生代第四紀）が発達している。仁井田川とその流域では、これらの層をさらに覆って未固結堆積物からなる洪積層と沖積層（いずれも新生代第四紀）が堆積している。

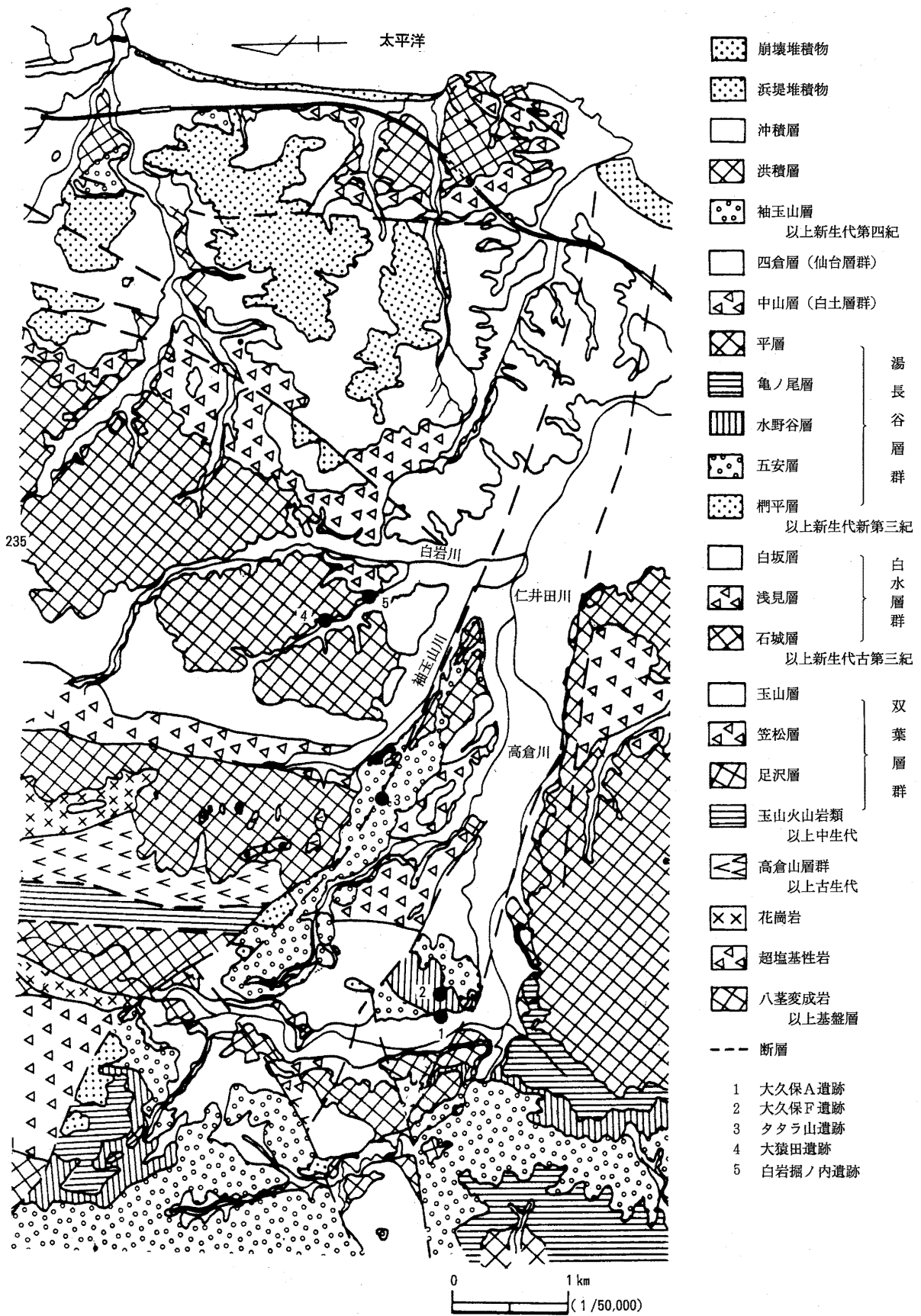


図2 いわき市四倉・久之浜地区地質図

遺跡が所在する四倉町は、市の中心平地区の北隣りに位置する。地形を見ると北に標高 295 m の高倉山、南に標高 225 m の石森山を臨み、その間を仁井田川とその支流が流れている。これらの川は、阿武隈高地東縁から海岸に向かって広がる丘陵地帯を開析しながら東に流れ、流域には幅の狭い谷底平野と丘陵袖部に部分的に小規模な段丘を形成している。谷底平野は、仁井田川中流域の駒込・上柳生地内でよく発達し、山田小湊地内でその幅を広げながら下流域に広がる海岸平野へと続いている。段丘は駒込地内の仁井田川右岸や薬王寺地内の高倉川両岸で見ることができる。遺跡は海岸線から約 6km 内陸にはいつている。気候は、暖流が流れる暖温帯気候に属する。(渡辺)

第3節 歴史的環境

タタラ山遺跡周辺地域では当遺跡が調査されるまで縄文時代の発掘調査例が少なく、時期の比較的良く知られるものとしては縄文中期後半からの済戸・片寄・森戸貝塚などが認められていた。済戸貝塚では、大木 9 ～ 綱取Ⅱ式期の土器と土器片錘が発見されており、網漁が行われた可能性が考えられ、片寄貝塚では大木 8 a ～ 綱取Ⅱ式土器が出土している。これらの貝塚が現在の沖積地を見下ろす丘陵斜面に立地することは、縄文時代前期に最大となった海進が中期までには各貝塚を結ぶ線上まで後退したことを示している。他に縄文時代の散布地としては石器類が採集された日陰遺跡や和具遺跡が一般によく知られているところである。

弥生時代においては稲作に関連する遺跡が出現する。特に中期に属する遺跡が多く、戸田条里遺跡では中期前半の龍門寺式期に比定される水田跡が検出され、水田耕作土壌からは炭化米が検出された。片寄貝塚では弥生土器・石庖丁・管玉、袖作遺跡では初痕のある土器片や石庖丁・柱状石斧が発見されている。丘陵部には中期後半の天神原式の土器棺が出土した玉山遺跡があり、同じく丘陵上に立地するタタラ山・白岩堀ノ内遺跡からも天神原式に属する土器や石器が出土している。弥生時代の散布地としては玉山・林崎・大苗代遺跡などがある。

古墳時代において注目される遺跡は、玉山古墳群中の主軸線全長約 118 m を測る玉山 1 号墳（前方後円墳）である。形態や採集遺物などから 5 世紀（古墳時代中期）代の築造と推定されているこの古墳は県内第 2 位の規模で、墳丘上には葺石を備えている。また、玉山古墳群では円筒埴輪も採集されている。後期古墳では、箱式石棺を伴う円墳で構成される御城古墳群がある。さらに丘陵斜面には永田・白岩・川子田・作ノ内・山田作など多くの横穴墓群が築造されており、中でも山田作横穴墓にはガラス玉・水晶製切子玉・刀子・鉄鏃などが出土している。集落遺跡では前期の竪穴住居跡が検出された内宿・中里遺跡、後期の竪穴住居跡が検出された戸田条里・白岩堀ノ内遺跡などがある。古墳時代の貝塚として伊勢前貝塚があり、同時期の貝塚を含む中里遺跡の存在は古墳時代前期における海岸線の位置を知ることができる。また、祭祀遺跡では、中塩祭祀遺跡・日陰遺跡があり、石製模造品や手捏ね土器などが発見されているが、今回タタラ山遺跡でも古墳時代の石製模造品や手捏ね土器の他、6 世紀前半と比定される東北地方でもあまり出土例のない須恵器の高杯が

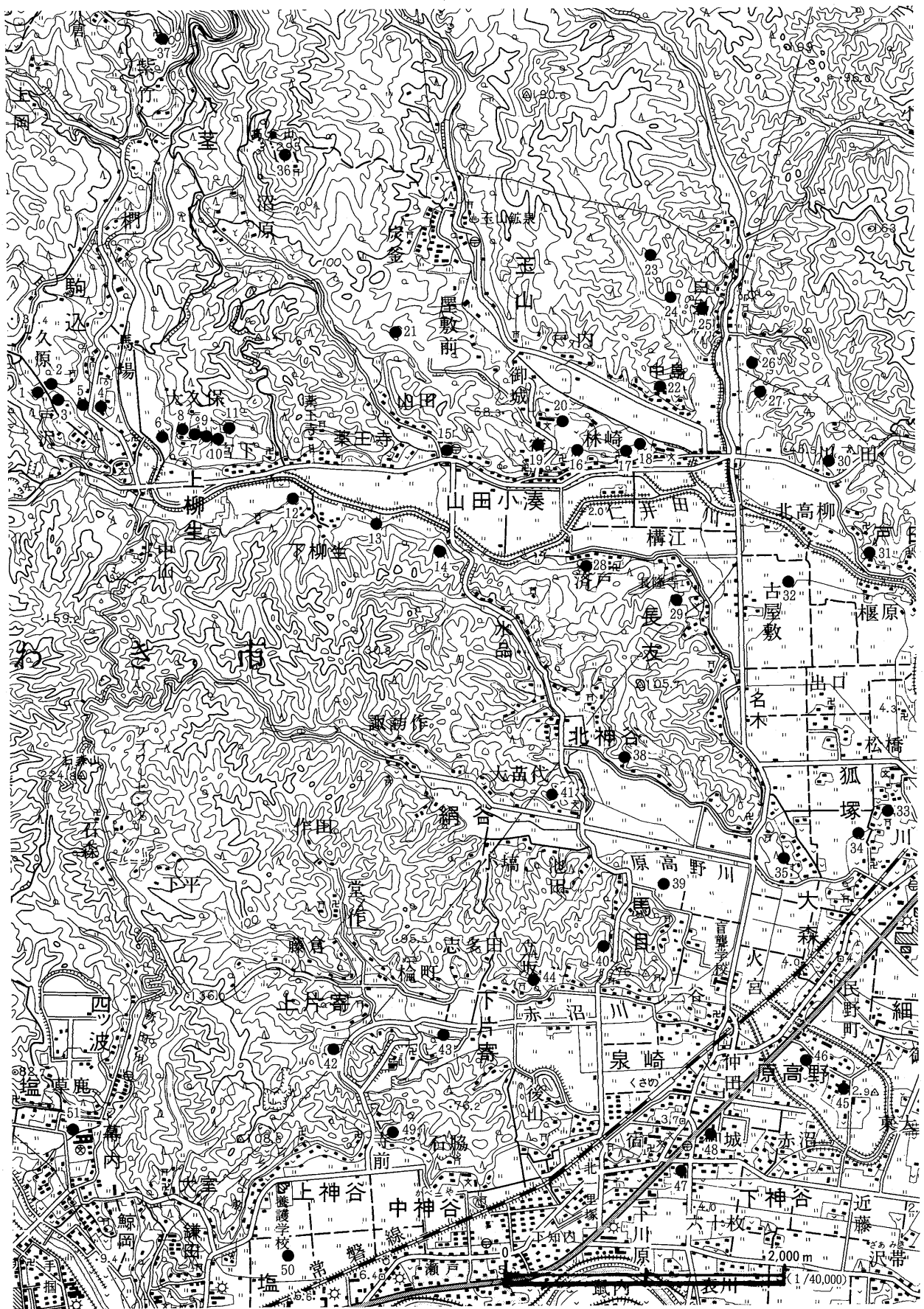


図3 周辺の遺跡

表2 タタラ山遺跡周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	遺跡の概要
1	久原A遺跡	四倉町駒込字久原	近世の散布地 平成6年度発掘調査
2	久原B遺跡	四倉町駒込字久原	近世の散布地 平成6年度発掘調査
3	駒込遺跡	四倉町駒込字久原	縄文～平安時代の散布地 平成6年度発掘調査
4	馬場A遺跡	四倉町駒込字馬場	古墳～平安時代の散布地 平成6年度発掘調査
5	馬場B遺跡	四倉町駒込字馬場	平安～近世の散布地 平成7年度発掘調査
6	大久保A遺跡	四倉町駒込字大久保	古墳～近世の集落跡 平成7年度発掘調査
7	大久保C遺跡	四倉町駒込字大久保	縄文～平安・近世の散布地 平成5年度試掘調査
8	大久保E遺跡	四倉町駒込字大久保	古墳～平安時代の散布地 平成5年度試掘調査
9	大久保F遺跡	四倉町駒込字大久保	奈良・平安時代の集落跡 平成7年度発掘調査
10	大久保G遺跡	四倉町駒込字大久保	縄文～平安・近世の散布地 平成5年度試掘調査
11	粟刈沢遺跡	四倉町粟王寺字粟刈沢	古墳～平安時代の散布地 平成5年度試掘調査
12	日陰遺跡	四倉町下柳生字六反田	古墳時代の祭祀跡
13	和具遺跡	四倉町下柳生字和具	縄文時代の散布地
14	比丘尼館跡	四倉町山田小湊字馬上	中世の城館跡
15	山田小湊遺跡	四倉町山田小湊字小湊	古墳～平安時代の散布地
16	玉山遺跡	四倉町玉山字牧ノ下・林崎・塚後	弥生～古墳時代の散布地
17	玉山古墳群	四倉町玉山字林崎	古墳 玉山1号墳(全長118mの前方後円墳)を含む
18	林崎遺跡	四倉町玉山字林崎	弥生～古墳時代の散布地
19	玉山館跡	四倉町玉山字御城	中世の城館跡
20	御城古墳群	四倉町玉山字御城	古墳
21	タタラ山遺跡	四倉町玉山字北タタラ山・小高倉・勝倉他	縄文～近世の集落跡・須恵窯跡 平成6・7年度発掘調査
22	中島館跡	四倉町中島字中島	中世の城館跡
23	大猿田遺跡	四倉町中島字大猿田	縄文～平安時代の集落跡 平成7年度発掘調査
24	白岩堀ノ内遺跡	四倉町中島字三反田・大久保	縄文～近代の集落跡 平成7年度発掘調査
25	白岩堀ノ内館跡	四倉町白岩字堀ノ内・北ノ作他	中世の城館跡
26	永田横穴墓群	四倉町白岩字永田	古墳～平安時代の横穴墓・散布地
27	白岩横穴墓群	四倉町白岩字上川子田・永田	古墳～奈良時代の横穴墓
28	済戸貝塚	四倉町長友字済戸・熊ノ作	縄文時代の貝塚
29	長友館跡	四倉町長友字大町・大宮作	中世の城館跡
30	川子田横穴墓群	四倉町戸田字川子田	古墳時代の横穴墓
31	戸田館跡	四倉町戸田字仲作	中世の城館跡
32	戸田条里遺跡	四倉町戸田地内	弥生～近世の水田遺構他 昭和63年・平成元年発掘調査
33	狐塚館跡	四倉町狐塚字古川	中世の城館跡
34	西原遺跡	四倉町狐塚字西原	奈良・平安時代の遺物包含地 昭和58年調査
35	大森館跡	四倉町大森字館	中世の城館跡
36	汐見館跡	四倉町八茎字高倉	中世の城館跡
37	八茎寺供養碑	四倉町八茎字片倉	中世の石造物 正応4年(1291)銘
38	袖作遺跡	平北神谷字袖作	弥生・平安時代の散布地
39	町田古墳	平馬目字町田	古墳
40	作ノ内横穴群	平馬目字作ノ内	古墳時代の横穴墓
41	大苗代遺跡	平網谷字大苗代	弥生～中世の散布地 網谷館跡を含む
42	山田作横穴墓群	平上片寄字山田作	古墳時代の横穴墓 昭和51年発掘調査
43	森戸貝塚	平上片寄字森戸	縄文時代の貝塚
44	片寄貝塚	平下片寄字立坂・志多田・北作	縄文時代の貝塚
45	中里遺跡	平原高野字中里	古墳～平安時代の散布地
46	伊勢前貝塚	平原高野字伊勢前	古墳時代の貝塚
47	内宿遺跡	平下神谷字内宿	古墳時代の集落跡 昭和55年発掘調査
48	出口遺跡	平下神谷字出口	奈良・平安時代の散布地
49	館遺跡	平上神谷字館	中世の城館跡
50	上神谷条里制遺構	平上神谷, 平塩地内	奈良・平安時代の条里制遺構
51	中塩祭祀遺跡	平中塩字一水口	古墳時代の散布地・祭祀跡 昭和37年発掘調査

出土している。古墳時代の散布地として他に、山田小湊・玉山・林崎遺跡がある。

奈良・平安時代の遺跡では、土坑や溝跡などが検出された西原遺跡、昨年度の1次調査で竪穴住居跡や須恵窯などが確認されたタタラ山遺跡、土師器片・須恵器片が出土した馬場A遺跡がある。平成5年度に行われた試掘調査では、馬場B・大久保A・大久保F・大猿田・白岩堀ノ内遺跡が奈良・平安時代の集落跡であることがわかった。該期の条里制遺構としては戸田条里遺跡・上神谷条里制遺構などが知られ、山田小湊・長友・馬目から絹谷、片寄に於いても条里制地割が見られる。戸田条里遺跡では平安時代の水田跡が検出されている。その他、大久保C・E・G・出口・山田小湊・大苗代・中里遺跡など、多数の散布地がある。

中世において当地域は文治2年(1186)岩城郡内に設定された好嶋荘に含まれる。好嶋荘は本家が岩清水八幡宮、領家が鎌倉幕府である関東御領で、承元2年(1208)に東荘と西荘に分割された。当地域は衣谷郷、大野郷からなる好嶋東荘に属し、千葉氏の一族である大須賀氏が絹谷に政所をおき預所職を務めた。元久元年(1204)の「八幡宮領好嶋荘田地目録注進状写」によれば、片寄・大森・戸田など村々の地頭が8~10丁の給田を所持していたことが知られる。また、これらの村々は鎌倉~室町期にかけて飯野八幡宮の造営や祭礼の負担を課せられていたが、貞和2年(1346)には、「預所中難波族在之」として、絹谷・大森・岩城・田富・比佐・富田などの地頭が同八幡宮に対する祭礼の負担を拒否している様子が窺える。建武元年(1334)の「八幡宮造営注文」には、「絹谷村 佐竹上総入道、同彦四郎入道兩人役所也」とあり、当地域における大須賀氏の没落と佐竹氏の進出が窺える。また、上記村落領主層の他、南北朝期に白岩氏、室町~戦国期の玉山氏、四倉氏などが知られる。文安3年(1446)岩城隆忠は薬王寺を再興し、門前の地と八茎村を当寺に寄進し、永録10年(1567)岩城親隆は「白岩之内堂井之在家一字」を当寺阿弥陀堂に寄進している。

岩城氏の信仰厚い薬王寺には、国指定重要文化財である木造文殊菩薩騎獅像(鎌倉時代)・絹本著色弥勒菩薩像(鎌倉時代)・厨子入金銅宝篋印舍利塔(南北朝時代)のほか多数の仏教美術品を所蔵しているほか、鎌倉期から室町時代初期の板碑が27基確認することができる。当地域最古の板碑として建長4年(1252)銘のある八茎の紫竹供養塔があり、付近には正応4年(1291)銘を持つ八茎寺供養塔がある。当地域の中世の城館跡としては、比丘尼館・中島館・白岩堀ノ内館・長友館・戸田館・狐塚館・大森館・汐見館・絹谷館・座主館などが丘陵部や浜堤上に分布している。

近世においては当初岩城領、慶長7年(1602)鳥居氏、元和8年(1622)内藤氏の岩城平藩領、延享4年(1747)幕府領となり、中神谷代官所の支配、寛延2年(1749)井上氏の常陸笠間藩領、安永6年(1777)幕府領、翌7年安藤氏の岩城平藩領、寛政2年(1790)以降笠間藩領となり中神谷陣屋が支配した。当地域は廃藩置県後、明治4年(1871)磐前県に所属、同9年(1876)福島県に合併吸収所され、同22年(1889)の町村制施行により、磐城郡四倉町、大浦村、大野村となり、同29年(1896)岩城郡に属した。昭和30年(1955)前記の1町2村が合併して四倉町が成立した。

昭和41年(1966)には5市・四倉町を含む岩城郡の6町村、双葉郡の2町村が合併していわき市四倉町となり、日本一の規模を持つ広域都市の一角として現在に至っている。(佐久間・高村)

第2章 調査の経過と方法

第1節 位置と地形

タタラ山遺跡は、福島県いわき市四倉町大字玉山の北タタラ山・小高倉・勝倉地内に所在する。四倉町はいわき市の北東部に位置し、遺跡はJR常磐線いわき駅から北北東に7.6km、四倉駅から西方向に5.1kmの距離にある。また、南に約550mの所に県道小野四倉線が、北東に約100mの所に県道八莖四倉線が、東へ約1.5kmの所に県道いわき浪江線が通っている。南へ約1kmの所には四倉町内を東西に流れる仁井田川がある。

遺跡周辺の表面地質は、中粒砂からなる未固結堆積物層である袖玉山層が分布する。この層は、周辺に分布する新第三紀の白水層群、中世代の双葉層群を傾斜不整合におおっており、第四紀更新世初期に、入り江に注ぐ河口付近に堆積したものと推定されている。層厚は約50mである。

本遺跡は四倉町の海岸線から約6km内陸部に入っており、舌状の丘陵地の南緩斜面に位置する。眼前にある南タタラ山とは沢によって堺され、周辺は混交林におおわれている。また、仁井田川の支流である袖玉山川が東側に、同じく高倉川が遺跡の西側に流れている。遺跡の北側には標高295mの高倉山が、はるか南には標高224.8m石森山がある。同じ四倉町内には、玉山1号墳や戸田条

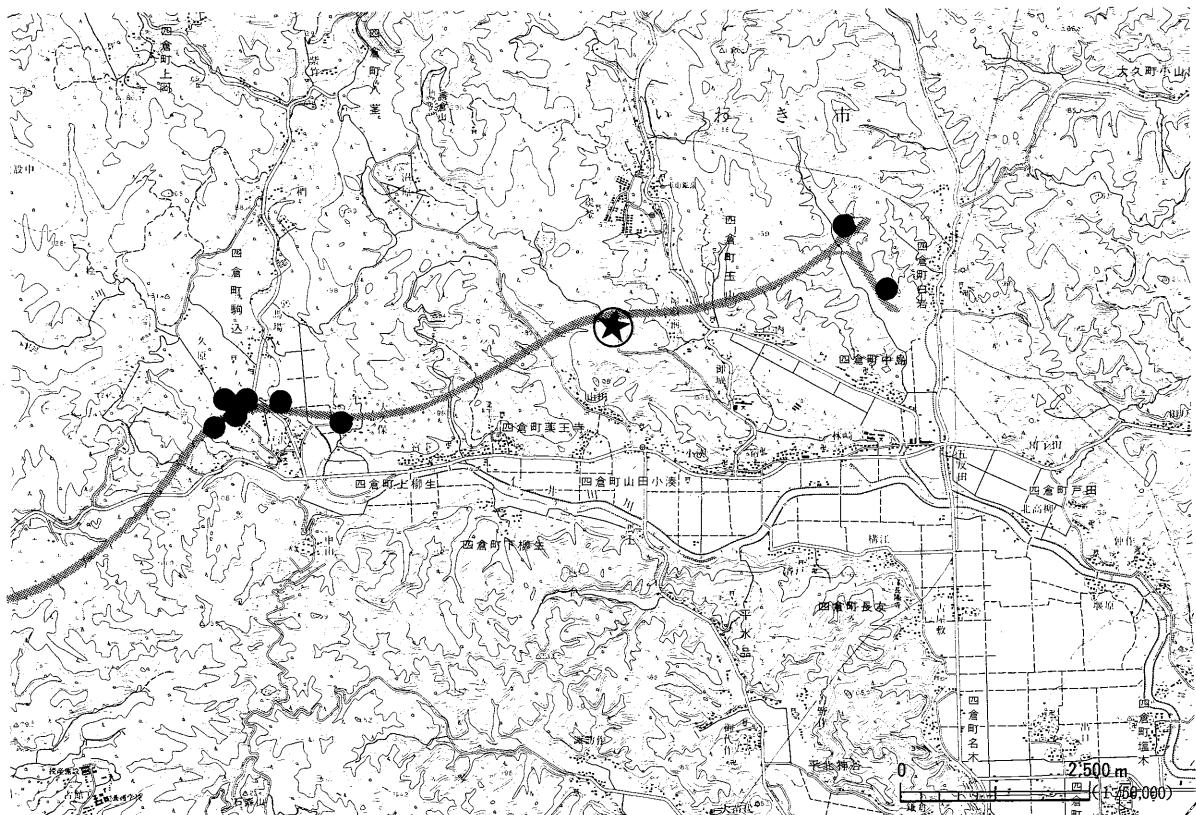


図4 発掘調査遺跡位置図

理遺跡も所在する。

調査範囲は一次調査と同様に、市道北タタラ山・炭釜線を挟んで西側にⅠ区・東側にⅡ区とした。常磐自動車道予定地内における本年度の調査面積は10,300㎡で、昨年度調査区からそれぞれ東西に延びている。Ⅰ・Ⅱ区ともに比高差が大きく、Ⅰ区は尾根部で77m西部端の沢部で45m、Ⅱ区は尾根部で73m東端沢部で49mとなっている。(渡 辺)

第2節 調査経過

タタラ山遺跡は、当初タタラ山館跡として登録されている。平成5年度から財団法人福島県文化センターが常磐自動車道遺跡発掘調査事業として調査にあたり、平成6年度までに38,700㎡の試掘調査と、14,700㎡の発掘調査を実施している。試掘調査では、調査対象地区内に館跡としての痕跡は発見されず、遺跡の西側(Ⅰ区)が古墳～平安時代の集落跡、東側(Ⅱ区)が縄文・弥生時代を中心とした集落跡であることが確認され、そのことを踏まえ遺跡名をタタラ山遺跡に改め、路線内の23,000㎡を要保存範囲として報告している(常磐自動車道遺跡分布調査報告)。

発掘調査は平成6年度後半から実施され、試掘結果にたがわず縄文～平安時代の集落跡が確認されたが、Ⅰ区では須恵器窯・木炭窯なども検出され、平安時代においては須恵器あるいは木炭の生産活動を中心とした遺跡であったことが見通されている(常磐自動車道遺跡調査報告4)。

平成7年度の調査は6年度調査の継続という性格が強いもので、4月13日より重機による表土ハギを開始した。3月下旬の現地確認段階では立木伐採後の搬出作業が終了しておらず、作業開始に遅れを来すのではないかと懸念されたが、調査区部分は1週間前には片付き予定通りの調査開始となった。Ⅰ区(Ⅰ区東部)においては大木の切り株が多く、根が遺構にからんでいる可能性が高かったことから、重機では切り株を残して表土ハギを行い、最終的抜根は人力で行うこととした。4月中は表土ハギと切り株を処理しながらの精査作業が中心となったが、Ⅰ区東部では数軒の住居跡も検出されている。Ⅱ区については重機を必要とする表土の移動は前年度に終了しており、人力による粗精査から作業を開始した。

5月より遺構の掘り込みに徐々に移行したが、最初に掘り込んだ11号住居跡からは古墳時代の遺物が良好な状態で出土し、その後の調査に方向付けを与えた住居跡となった。中旬に入ると大雨に見舞われ、土砂流出の危険が生じたことから防災対策を余儀なくされ、重機による水の誘導や人力による土のう積みなど懸命な防災作業を行った。5月下旬から6月初旬にかけては9～12号住居跡の調査が進み、石製模造品や須恵器杯・高杯などが出土し、Ⅰ区東部では古墳時代の住居跡が集落を形成していることが判明した。Ⅱ区では東端沢部に形成されている包含層の調査が進み、縄文早期・後期・弥生中期の遺物を中心に多くの遺物が検出されている。また、Ⅰ区西側の未調査区において新たに縄文土器が表採されたことから協議検討がなされ、その結果、丘陵斜面の緩やかな部分を要保存範囲とし、2,000㎡を今年度調査分(Ⅰ区西部)として加える追加調査の指示があった。

6月にはⅡ区の調査が終了したが、Ⅰ区西部にⅡ区調査スタッフをそのままの態勢で移動し、全スタッフでⅠ区調査を実施することとした。下旬には古墳時代と考えられる住居跡が密集して11軒まで確認されたが、遺物及び重複状況から大きく2時期の変遷が考えられ、古い住居跡は火災にあってることが炭化材などから判断された。なお、中旬以降は本格的な梅雨となり、日によっては100mm以上の雨に見舞われ、防災対策に労力の大半を割かざるおえない日が続くことも多かった。引き続き土砂の流出には土のう積み、しがらみ・フトンカゴ・仮沈砂池の設置、シートによる養生などで辛うじて対応した。

7月初旬もはっきりとしない天候であったが、雨天の合間をぬって古墳時代住居跡密集区の全体清掃を行い、12日にはⅠ区全景写真の撮影をバルーンによる空中撮影によって実施した。また各住居跡内においては遺物の遺存状況が良好であったことから公開が望まれ、22日にはⅠ区東部を中心に現地説明会を開催した。説明会終了以後は、Ⅰ区東部は住居跡内の遺物の取り上げ、カマド調査に入り、Ⅰ区西部は縄文後期を中心とする包含層の調査を再開した。

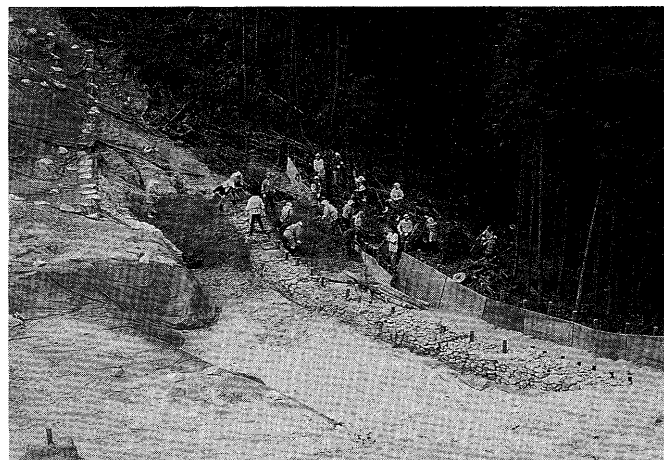
8月2日にはいわき市中教研社会科専門部の遺跡見学に当遺跡が選ばれ、中学校社会科教員30名の来訪があった。Ⅰ区西部の縄文後期の面は8月末で終了の目算がついたが、部分的に早期の遺物が出土する地点があり、トレンチを設定して検討したところ下層に縄文早期の包含層が存在することが確認された。そこで、縄文後期面調査終了の後、再び重機による間層の除去から早期面の調査に着手する計画を立て、9月4日には重機による作業を開始した。

9月15～17日には戦後最大の台風12号に見舞われたが、事前の防災対策が功を奏し、大きな被害までにはいたらなかった。Ⅰ区東部の古墳時代の遺構調査は終了に向ったが、住居床下から次々と大型の円形土坑が検出され、Ⅰ区西部同様下層面の調査が必要となった。ただし遺構の状況としては重機を導入できる状態ではなかったことから、人力によって斜面下位に堆積したLⅢの掘り下げを実施した。9月下旬にはⅠ区西部包含層から縄文早期の良好な遺物が出土している。

10月はⅠ区東部において足場の踏み場もないほどに大型円形土坑が検出されたため、土坑中心の作業が展開した。Ⅰ区西部では包含層の掘り込みも大半が終了し、住居跡検出に向けて精査を継続した。この時点で包含層から出土した早期縄文土器は、県内でも有数の資料として十分な質と量を有するものであった。

全体として密度の濃い調査であったといえ、11月2日にはすべての調査を終了した。なお、11月7日には日本道路公団仙台建設局いわき工事事務所を相手に現場の引き渡しを行っている。

(安 田)



土砂流出復旧作業

第3節 調査方法

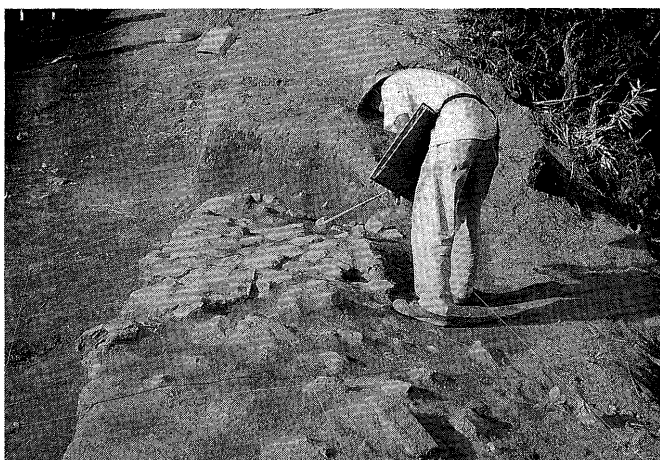
平成7年度タタラ山遺跡の調査は前年度からの継続調査であることから、調査方法についても前回方法を踏襲している。調査地区は東西に長く、中央に調査不要地を挟んで2地区に分かれることから、中央を走る林道を目安として西側をI区（当初調査区をI区東部、追加調査区をI区西部とした）、東側をII区としている。今回の調査はI区西半とII区東端部が対象である。

調査で使用する座標の設定にあたっては、国土座標 $X=124,000$ ・ $Y=97,000$ の地点をN S00・E W00の測量原点とし、XをN（北）、YをE（東）と読み替え、国土座標の下3桁を用いて調査区内の座標を表示することとした。つまり、測量原点から北に720m・東に350mの位置はN720・E350と表示している。

グリッドの設定にあたっては、座標の設定によってできた南北10m・東西10mのマスを一単位とし、南北にアルファベットA・B・C……、東西にアラビア数字1・2・3……という記号を与え、この組み合わせで表示することとした。ただし、東西側の最初の設定がI区西端の列を1としたため、今回さらに西側に追加された地区には新たな番号が必要となり、対応策として1の西隣の列を50'とし、順次西へ49'・48'……と表示することにした。なお、平成7年度の調査区はI区が南北J～R、東西48'～7の範囲、II区が南北J～Q、東西35～47の範囲である。

遺跡の掘り下げに際しては、表土のみを重機で除去し、表土以下の土層の掘り下げ及び精査は人力を基本として作業を行った。各遺構の掘り込みは、住居跡については遺構軸を基本に4分割法を用い、土坑や小遺構については2分割法を使用した。検出された遺物は、遺構外出土のものについては上記のグリッドを単位として基本層位を基準に、遺構内出土のものについては土層観察用ベルトの層位を基準に取り上げ、良好な出土状況については写真撮影及び出土状況の作図を行った。

遺構調査の記録写真は調査の進捗に併せて、検出状況・土層観察用ベルト・遺物出土状況・完掘状況の順で撮影を行った。遺構図面は上で述べた座標を基準とした簡易遣り方測量で1/20の縮尺



遺構図面作成状況

を基本として作図し、カマドなどの細部については1/10の縮尺も採用した。なお、遺跡全体写真はバルーンによる空中撮影を実施し、地形図については1/200の縮尺で作図した。

発掘調査で得られた記録・遺物資料は当センターの整理基準に準拠して整理を行い、それぞれの台帳を作成し収蔵施設に保管している。 (安田)

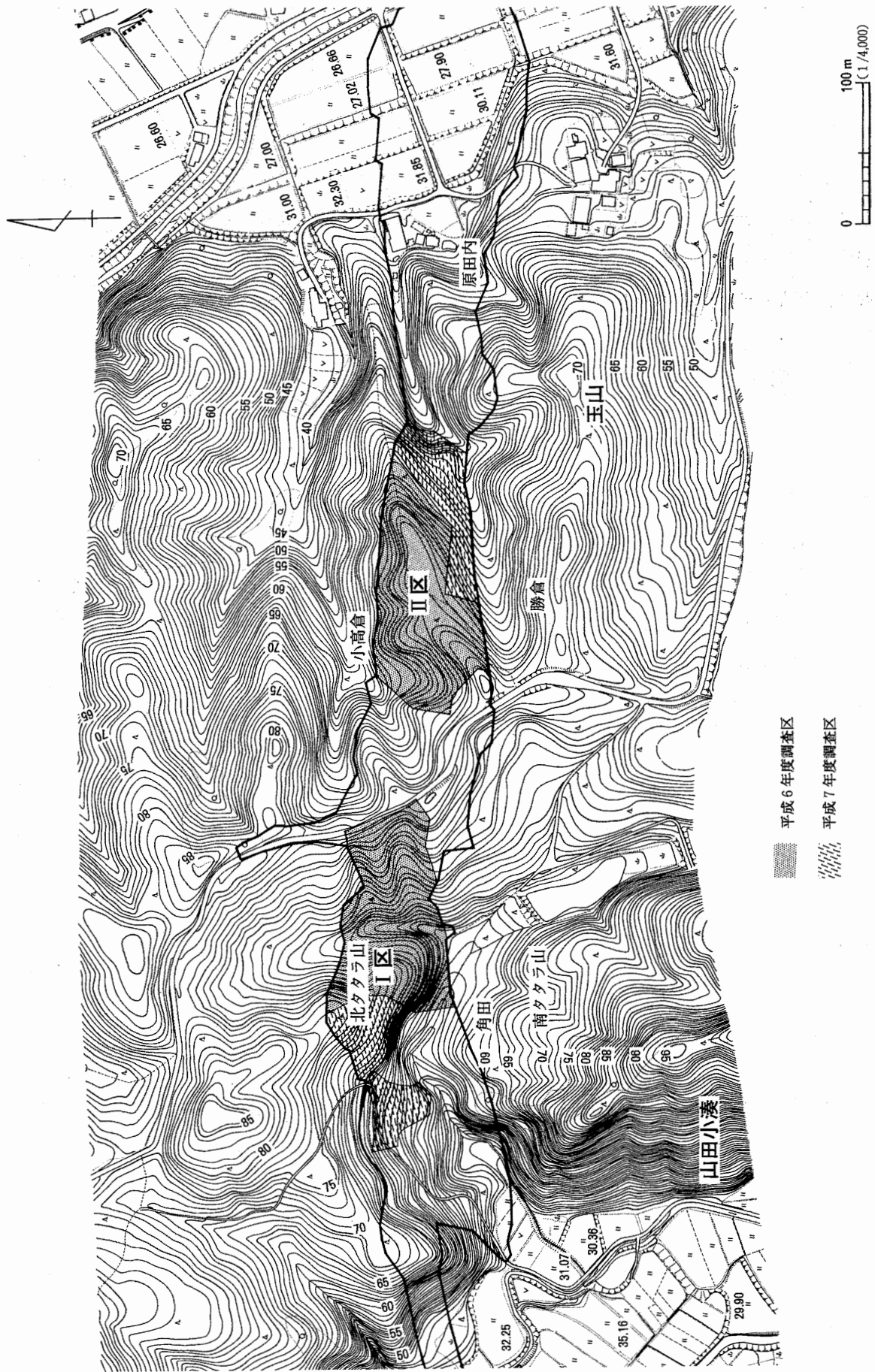


図5 タタラ山遺跡2次調査区位置図

第3章 I区の遺構と遺物

I区は東部と西部に分かれ、主な遺構として東部では古墳時代を中心とした竪穴住居跡と縄文時代と考えられる大型の円形土坑が集中して検出され、西部では縄文時代早期中葉の包含層と中期・後期の竪穴住居跡が4軒検出されている。竪穴住居跡の総数は19軒、土坑総数146基を数え、遺構番号は平成6年度第1次調査からの連続番号となっている。

第1節 基本土層

タタラ山遺跡調査I区は、東部斜面東側の昨年度の基本土層を参考にし、西部斜面においては、調査区の西側、北側及び中央部にベルトを設定し、土層の観察を行った。

I区では、基本土層が下記のように分層され、その色調及び分布は次の通りである。

- L I ……暗褐色砂質シルト (10YR 3/4)。表土で、調査区全体に分布する。柔らかい腐食土で、一部欠損している箇所があるが、尾根部や沢部で厚い堆積を示している。層厚は5～20 cmを測る。遺物は各時代を含む。
- L I a ……黄褐色砂質シルト (10YR 5/6)。西部斜面の中央部にのみ分布し、色調はL IVに似ており、畑地造成による整地層とみられる。層厚は15～35 cmを測る。
- L I b ……暗褐色砂質シルト (10YR 3/3)。西部斜面の全体に分布し、層厚は5～15 cmを測る。腐食土のため、L I aが堆積する前の表土とみられる。
- L II ……暗褐色砂質シルト (10YR 3/4)。色調はL Iに似ており、L Iに比べしまりがあり、木根があまり認められない。主に調査区の東部斜面全体に分布し、層厚は10～30 cmを測り、遺構外遺物の土師器・須恵器は主にこの層より出土している。
- L II a ……にぶい黄褐色砂質シルト (10YR 4/3)。西部斜面全体に分布し、比較的厚い堆積を示している。層厚は30～60 cmを測り、遺物は、縄文中期～晩期にかけての縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器などを含む。
- L II b ……褐色砂質シルト (10YR 4/6)。西部斜面の北半分に分布する層で、礫を多量に含んでいる。層厚は約60 cmを測り、L II b上面が平安時代の住居跡の検出面である。この層は、縄文中期・後期の土器を含んでおり、L II bの下部で縄文後期の遺構を検出している。
- L II c ……暗褐色砂質シルト (7.5YR 3/4)。西部斜面の北半分に分布する層で、礫を多量に含んでおり、層厚は20～130 cmを測り、沢部には厚く堆積している。この層は縄文早期中葉の土器を多量に含んでいる。
- L III ……褐色シルト (7.5YR 4/4)。東部斜面の東側の中位から裾部にかけて堆積し、尾根部及び

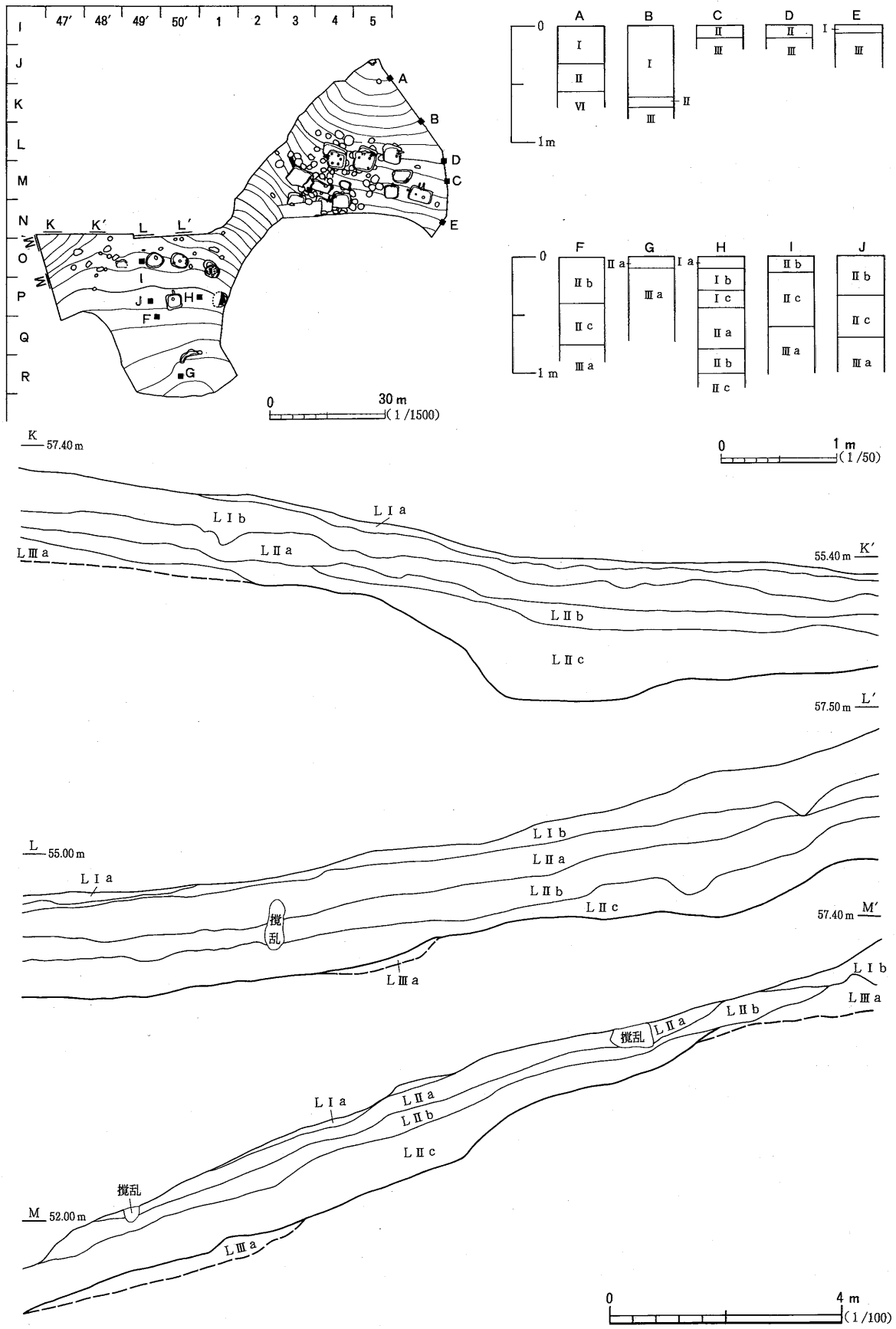


図6 I区基本土層図

第2節 竪穴住居跡

西側においては欠損している。層厚は10～50cmで、斜面裾部では非常に厚く堆積しており、古墳時代の住居跡の検出面である。調査区東部の遺跡の基底面であることから、LⅢ以下は無遺物層である。なお、東部斜面の土坑集中部付近は、住居跡や土坑の構築排土とみられる整地層が、層厚約70cmで堆積している。また、斜面裾部にはLⅢの再堆積層が、約50cmで堆積している。

LⅢ a…明黄褐色砂質シルト(10YR 6/6)。西部斜面全体に分布する層で、人頭大の礫を多量に含んでいる。縄文早期の遺構の検出面で、調査区西部の遺跡の基底面である。

LⅣ……明褐色砂質シルト(7.5YR 5/8)。東部斜面全体に分布し、LⅤが風化したものである。

LⅤ……橙色砂質シルト(7.5YR 6/8)。本遺跡の基盤を形成している。(大竹)

第2節 竪穴住居跡

第2次調査I区で検出された竪穴住居跡は19軒である。内訳は6世紀～8世紀初めまでの住居跡が15軒でI区東部において14軒が密集して存在し、縄文時代後期2軒、縄文時代中期2軒の計4軒がI区西部で確認されている。遺構番号は、昨年度第1次調査からの継続番号とし、本報告では9号住居跡から始まり、24号は欠番である。

9号住居跡 S I 09

遺 構 (図7, 写真8・9)

調査区東部のL4・M4グリッドで検出された竪穴住居跡で、南側が下がる比較的急な斜面に構築されている。遺構検出面はLⅣである。北側にある13号住居跡及び53・62・68・74・75・78・81・88・89・110・150号土坑と重複しているが、いずれも本遺構の方が新しい。このため、遺構の遺存状態は良好である。

遺構内堆積土は、5層に細分され、いずれも自然埋没状態を示している。l1・2は黒褐色・暗褐色砂質シルトで炭化物を多量に含んでおり、他の堆積土とは異なっている。l3は褐色砂質シルトで最も厚く堆積し、住居の床面を覆っていることから、住居廃絶当時、周辺は地山が露出していた可能性が考えられる。

平面プランは、長軸方向がほぼ真北をさす隅丸方形を呈し、その規模は、東壁4.84m、西壁4.80m、南壁3.90m、北壁4.80mを測る。周壁は、全体的に良く整っており、最も遺存する北壁の壁高は、90～98cmである。

床面は、北側がLⅤ、南側がLⅣを使用しているが、細かい凹凸が多く認められるもののおおむね平坦である。南側では、重複する68・74・75・81号土坑の堆積土まで一部掘り過ぎたが、踏み締まりと思われる範囲は認められなかった。

カマドは、住居跡の西壁中央で検出され、遺存状況は良好である。燃焼部の規模は、焚口幅90cm、

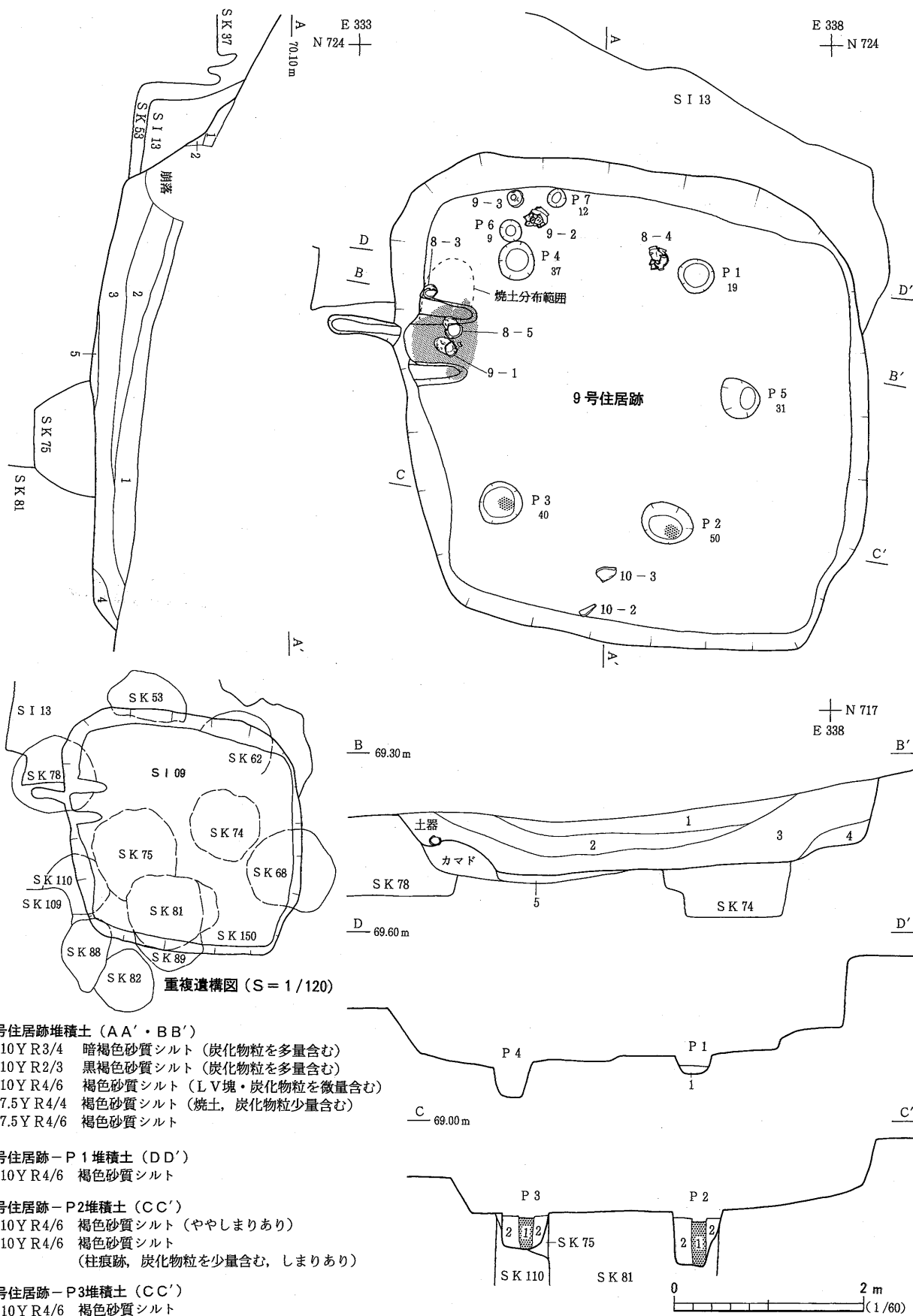


図7 I区9号住居跡

第2節 竪穴住居跡

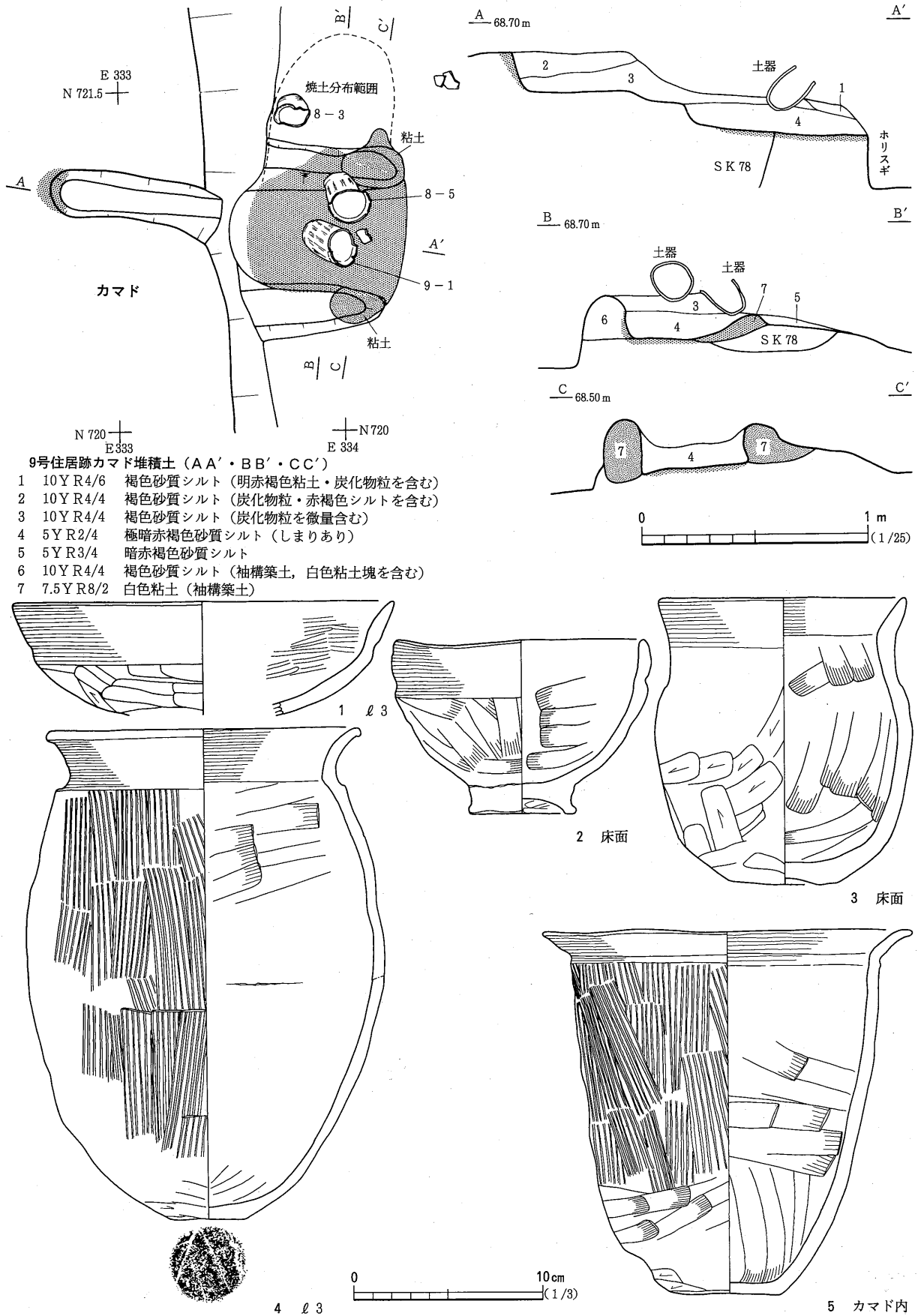


図8 I区9号住居跡カマド, 出土土師器

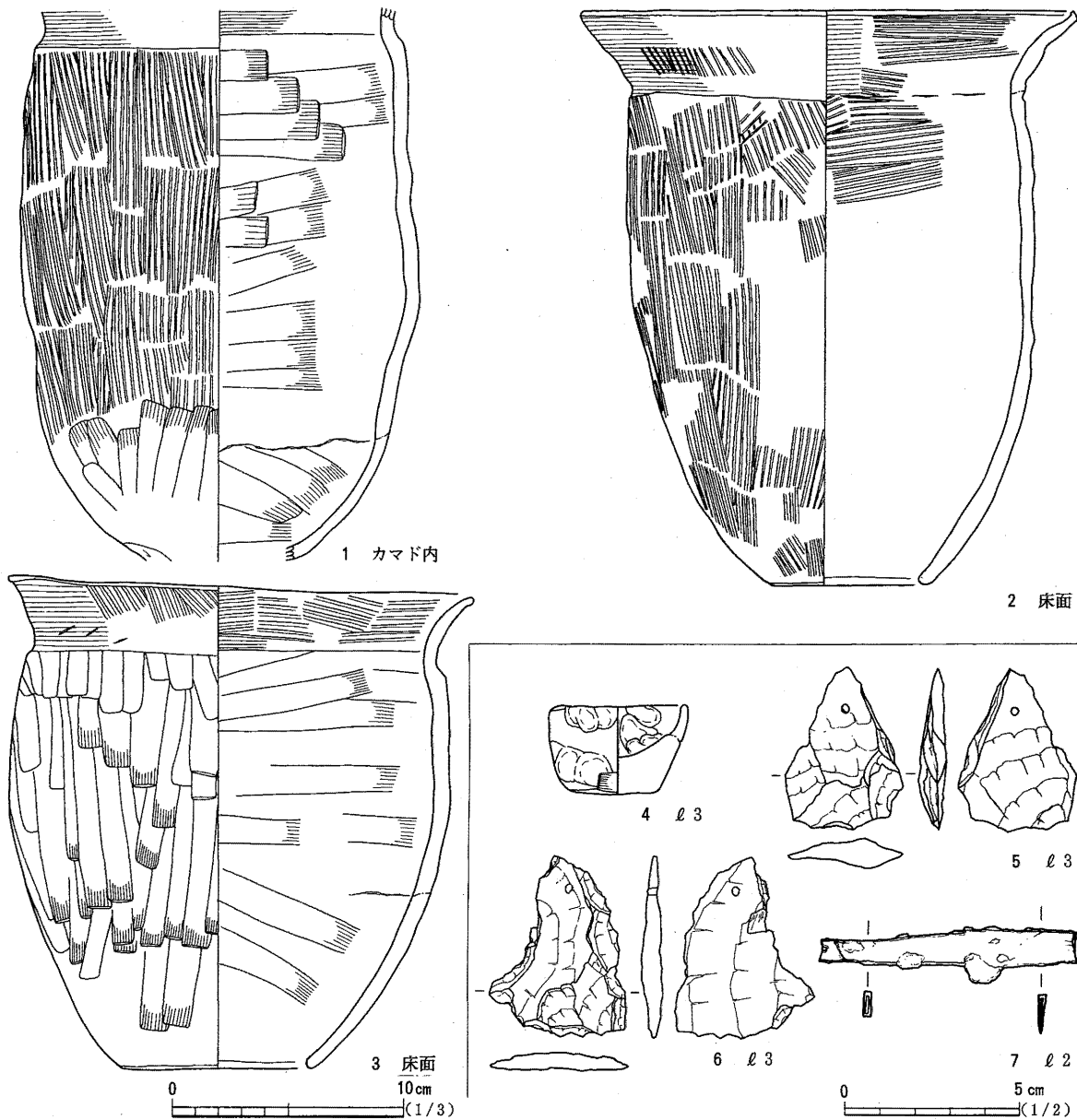


図9 I区9号住居跡出土土師器・石製品・鉄製品

焚口から奥壁までの長さ136cmを測り、煙道の規模は、上端幅40cm、奥壁からの長さ153cmである。カマド袖の先端には、白色粘土が認められる。カマド底面から袖内側にかけて焼土化した部分が認められ、最大5cmの厚さまで及ぶが、煙道先端部では最大8cmまで及んでいる。カマド内からは、2個体の土師器甕が並列し、焚口側にやや倒れた状態で出土している。これらの土器は、カマド底面のやや上面から出土し、一部欠損しているが潰れずに残っており、おそらく、カマドに取り付けられていた土器がカマドの崩落によりカマド上面で確認されたものと考えている。

床面からは、7基のピットを検出している。P1からP4のピットは、円形基調の径38～56cmの大きさでまとまりがあり、深さは19cm～50cmである。これらのピットを結ぶと方形基調となることから支柱穴と考えている。柱間寸法は芯々間でP1-P2間2.27m、P2-P3間1.78m、

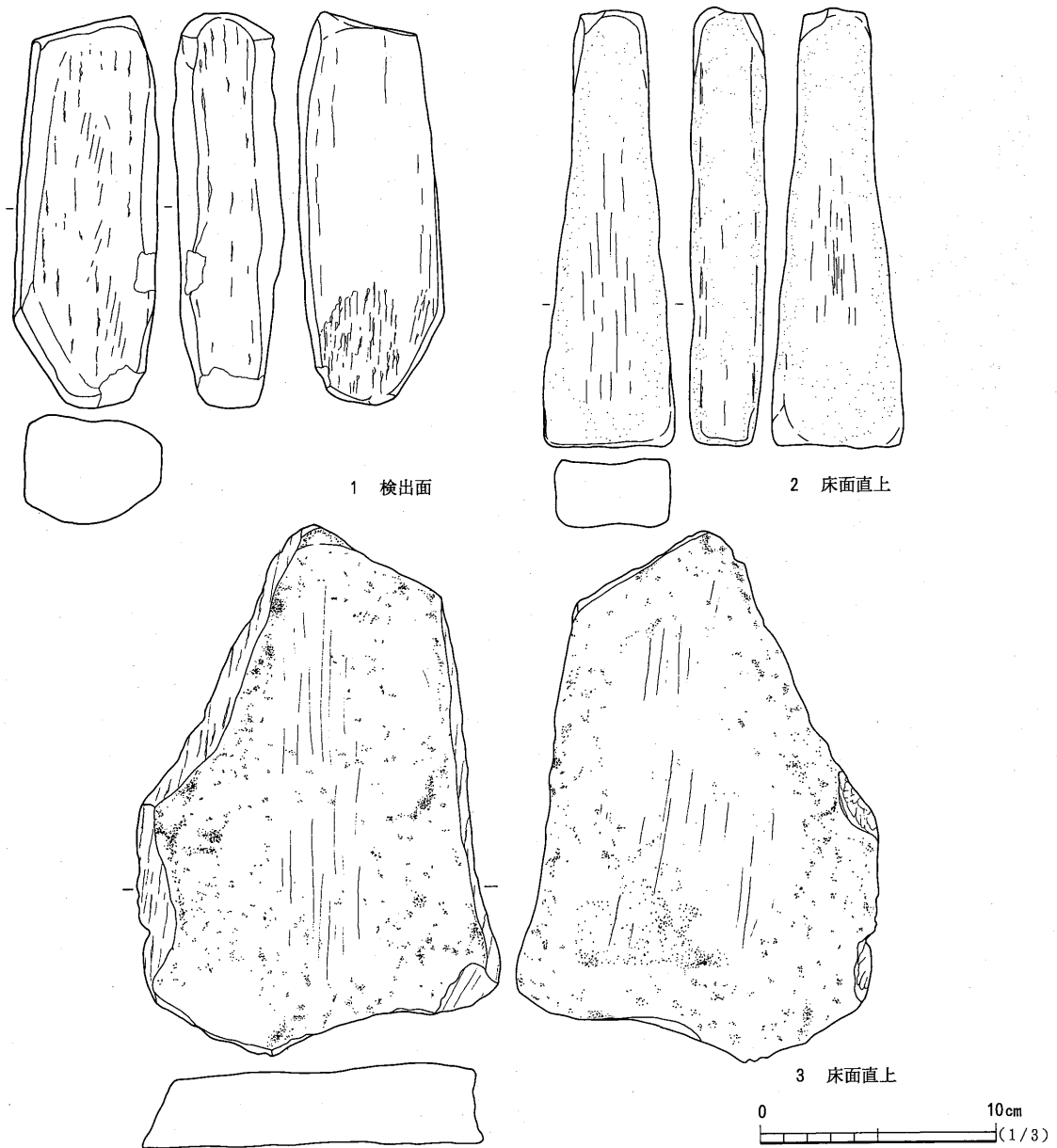


図10 I区9号住居跡出土石製品

P3-P4間2.60m, P4-P1間1.92mである。P3・P4からは柱痕が確認された。P5は、P1~P4の大きさに近く、また、P6・P7は、小型のピットでいずれも性格については不明である。

遺物 (図8~10, 写真85・86・107・108)

遺物は、土師器片669点、手捏ね土器1点、石製品4点、金属製品1点、滑石剥片少量、微量のコハク剥片少量が出土している。遺構に伴う遺物は、土師器と石製品があり、土師器がカマド内出土の2個体、カマド脇出土の1個体、床面出土の3個体、石製品が床面出土の2個である。堆積土からは、主にℓ3から遺物が多く出土している。このうち図示できたのは、図8-1~5, 図9-1~7, 図10-1~3である。

図8-1は、土師器杯である。重複する13号住居跡と接する部分から出土しているため、13号

住居跡に伴う可能性が高い。底部を欠損するが、丸底から体部上半の段でくびれ、外傾する口縁部を有する器形である。調整は、口縁部外面にヨコナデを行い、体部下半にヘラケズリが加えられ、内面にはヘラミガキが加えられる。口縁部外面と内面には、赤彩が部分的に認められる。胎土には砂粒を含み、焼成は良好であり、橙色の色調を呈する。推定口径 20.3cm、残存高 6.0cmを測る。

図8-2~5、図9-1は土師器甕である。2は小型で浅めの甕である。床面より出土し、約半分が遺存している。胴部は半円状を呈し、頸部で弱いくびれをもつ器形である。器面調整は、胴部内面にヘラナデを加えた後、口縁部外面にヨコナデを施している。内面にはヘラナデが加えられる。底部は、後から取り付けたように台状に作り出し、上げ底となっている。全体が比較的薄手に作られている。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で、色調は橙色を呈する。推定口径 13.4cm、残存高 9.2cm、推定底径 5.4cmを測る。3は小型の土師器甕でカマド脇から出土している。土器内からは、コハクが1点出土した。口縁部の一部を欠損し、約7割が遺存する。器面調整は、口縁部内外面にヨコナデを行い、胴部外面にヘラケズリ、胴部内面にはヘラナデが加えられる。胴部には、火を受けた部分と粘土の付着が認められる。胎土には砂粒と凝灰岩粒を含み、焼成は良好である。色調は黄橙色を呈する。推定口径 13.2cm、残存高 15.0cm、底径 5.8cmを測る。4は長胴甕である。口縁部と胴部の一部を欠損し、7割が遺存する。小さな底部から胴部がやや膨らみをもち、外反する口縁部と胴部の境に強い段をもつ。口縁部にはヨコナデ、胴部外面にはハケメ、胴部内面にはヘラナデが加えられる。胴部には、黒斑が認められ、底部には木葉痕が認められる。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は橙色を呈する。推定口径 16.8cm、残存高 26.1cm、底径 4.0cmを測る。5は大型甕でカマド内から出土している。ほぼ完形である。底面から口縁部にかけて内湾ぎみに外傾し、胴部上端で弱いくびれをもって口縁部に至る。口縁部内外面にはヨコナデ、胴部外面にはハケメ、胴部内面にはヘラナデが加えられ、胴部内外面には黒斑、胴部外面には粘土の付着が認められる。胎土には砂粒と凝灰岩粒を含み、焼成は良好である。色調は橙色を呈する。推定口径 19.6cm、残存高 19.2cm、底径 5.7cmを測る。図9-1は、カマド内から出土した長胴甕である。約6割が遺存する。胴部は長胴で、胴部下端の状況から小さな底部になると思われる。口縁部外面にはヨコナデ、胴部外面上半にはハケメ、胴部外面の下半にはヘラナデが加えられ、胴部内面にはヘラナデが見られる。胴部内外面には黒斑、胴部外面の下半には粘土の付着が認められる。胎土には砂粒と凝灰岩質の粒を含み、焼成は良好である。色調は橙色を呈する。残存高 24.2cmを測る。

図9-2・3は、ほぼ完形の土師器甕である。いずれも北壁側の床面から2が横になってつぶれた状態、3が逆さの状態でも出土している。2は胴部上半の摩滅や剥落が著しい。口縁部外面にはハケメ調整後にヨコナデ、胴部外面にはヘラナデが加えられる。口縁部内面にはハケメ調整後にヨコナデを加え、胴部内面にはハケメが観察される。口縁部と胴部の内外面には黒斑が認められる。口径 21.4cm、器高 24.8cm、底径 6.6cmを測る。3は口縁部外面にはハケメ調整後にヨコナデを加え、胴部外面にはヘラナデが見られる。口縁部内面にはハケメ、胴部内面にはヘラナデが加えられる。胴部内面は滑らかである。口縁部と胴部の内外面には黒斑が認められる。胎土には土器焼成に赤化

第2節 竪穴住居跡

した粒を含み、焼成は良好である。色調は橙色を呈する。口径 20.1 cm，器高 20.8 cm，底径 8.0 cm を測る。

図 9-4 は、ほぼ完形の手捏ね土器である。内面には、指オサエによる調整痕が残り、指紋が認められる。底部は平底である。器厚は、底部が最も厚く、口縁部に向かって薄くなる。口径 4.0 cm，器高 2.5 cm，底径 2.5 cm を測る。

図 9-5・6 は滑石製の石製模造品の未成品である。いずれも ℓ 3 から出土しており、剥片の端側に単孔が認められるが、表裏面と側面に面取り調整がないことから製作途中のものと思われる。5 は、孔の形状から片側からのみ開けている。5 は最大遺存長 5.1 cm，最大遺存幅 4.0 cm，最大遺存厚 0.6 cm，重量 9.9 g，6 は最大遺存長 4.6 cm，最大遺存幅 3.3 cm，最大遺存厚 0.7 cm，重量 9.9 g である。大きさや石製模造品の未成品の状態から、同じ製作工程段階のものと考えられる。

図 9-7 は鉄製品で、刀子の欠損品であるが、茎から刃部にかけて最大 7.4 cm 遺存している。

図 10-1～3 は石製品で、いずれも砥石である。1 は検出面から出土しているが、2・3 は床面から出土している。1・2 は直方体に近く、1 が各面に研磨が見られ、2 は表裏面のみ研磨が認められる。2 は原石から切り取った際の僅かな加工痕が側面部分に認められる。3 は大型の砥石で表裏面ともに平らな面で、両面は丁寧な研磨による調整がある。おそらく、床面に置いて使用したと思われる。石質は 1 が凝灰岩、2 が砂岩、3 が中粒砂岩である。

ま と め

本遺構は 4 本の支柱穴をもつ竪穴住居跡である。カマドからは、カマドに取り付けられた 2 個体の土師器甕がカマド天井が崩落した状態で出土している。本遺構の時期は、出土した土師器から 7 世紀の中葉の所産と考えられる。 (国 井)

10 号住居跡 S I 10

遺 構 (図 11・12, 写真 9・10)

本遺構は、調査区の L・M5 グリッドに位置し、東部斜面中央部の中腹から検出された竪穴住居跡である。検出段階で北側に位置する土坑との重複関係が明確でなかったため、トレンチを 3 か所設定し、新旧関係を確認しながら、調査を進めた。検出面は住居跡の東側は L III 上面、北側及び西側は L IV 上面、南側は整地層上面である。北側で 17 号住居跡及び 9 基の円形土坑と重複しているが、本住居跡が最も新しい。

遺構内堆積土は 5 層に分かれ、斜面上位より流れ込んだ自然堆積の状況を示しており、 ℓ 4 の上層は炭化物を多く含んでおり、特に ℓ 2 には炭化物が均一に混入していた。

住居跡の平面形は、やや崩れた隅丸長方形であり、規模は南北軸 4.10 m，東西軸 4.60 m を測る。住居跡の北壁と南壁の midpoint を結んだ主軸方向は、真北に対して東に約 10° 傾いている。

周壁は床面よりやや緩やかに立ち上がり、周壁の最大遺存高は、東壁 68 cm，西壁 55 cm，南壁 22 cm，北壁 100 cm を測る。床面はほぼ平坦で、北側では L V を削り出して床面として使用しており、

南側では土坑の位置する部分を整地して床面を構築しているが、明瞭な踏み締まりは確認できなかった。

ピットは、住居跡内に4個(P1～P4)検出された。P1の平面形は隅丸方形で、長辺55cm、短辺50cm、床面からの深さ24cmである。住居跡内の位置関係や規模から貯蔵穴と考えている。検出段階で土師器の甕がつぶれた状態で出土した。P1から遺物は出土していないが、上部に白色粘土が混入していた。P2～4は、柱痕跡は確認できなかったが、P2とP3を結んだ線が東壁と、また、P2とP4を結んだ線が北壁とそれぞれ平行しており、その配置からみて住居跡に伴う支柱穴と考える。柱間寸法は、P2-P4で2.8m、P2-P3で2.6mである。規模は、P2は長径37cm、短径32cm、深さは44cm、P3・4は床面を下げて検出しており、その遺存値は、P3が長径45cm、短径37cm、深さは28cm、P4が長径47cm、短径26cm、深さは47cmである。住居跡の南西側ではピットを検出することができなかった。

カマドは、新旧の2つが検出された。旧カマドは、北壁中央部のやや東寄りに位置し、煙道部と燃焼面のみ遺存している。粘土が燃焼面上にあることや周辺に粘土を含んだ土が広がっている点から、新カマドの構築の際、壊されたものと考えている。燃焼面の規模は、奥行き59cm、幅37cmで、酸化面の厚さは4cmであり、遺存状況から旧カマドの規模は新カマドとほぼ同じと考えている。煙道部は、遺存状態があまり良くなく、遺存長60cm、上端幅15cmであり、煙道堆積土中には焼土があまり認められなかった。

新カマドは、旧カマドの西側に位置する。カマドの下に位置する60号土坑の堆積土を一部掘り窪めてカマド北側に軽い段を構築して、ここに袖部の褐色シルトを含んだ白色粘土で構築している。カマドの規模は、焚口幅62cm、奥行き75cm、袖部の遺存値は、左袖59cm、右袖72cmである。燃焼面はカマド中央部が特に強く焼けており、その規模は、長さ29cm、幅20cm、厚さ5cmである。また、この燃焼面の上に炭化物を含む暗赤褐色シルト層が4cmの厚さで堆積している。煙道部は、検出できなかった部分があり、17号住居跡の完掘の際、床面に薄く赤化した部分があり、17号住居跡の北壁に煙道が掘り込まれているのを検出した。遺存長120cm、幅16cmを測る。煙り出し口は、重複している60号土坑の周壁を掘り込んで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

新カマドの燃焼面より土師器の甕(図13-2)が、横たわった状態で出土している。出土位置や甕の外表面が被熱により酸化した痕跡が顕著なため、カマドに使用されていたものと考えている。

住居跡西側中央部で、2か所の酸化面を検出した。範囲は、北側が46cm×30cm、南側が24cm×15cmで、北側が5cm、南側が3cmの厚さである。遺物の出土もないため、性格の特定はできなかった。

遺物の出土状況は、住居跡の北側壁際のℓ4より杯(図12-3、12-5)が、逆さの状態でも重なりあって出土しており、その位置が、17号住居跡の床面とほぼ同じレベルであるため、17号住居跡からの流れ込みの可能性もある。また旧煙道部の検出段階で土師器の甕(図13-3)がℓ3より出土している。

遺物 (図12～14、写真86・87)

図12-1は、ℓ4より出土した土師器杯で、口縁部の一部のみ遺存している。内面と外面の口縁

第2節 竪穴住居跡

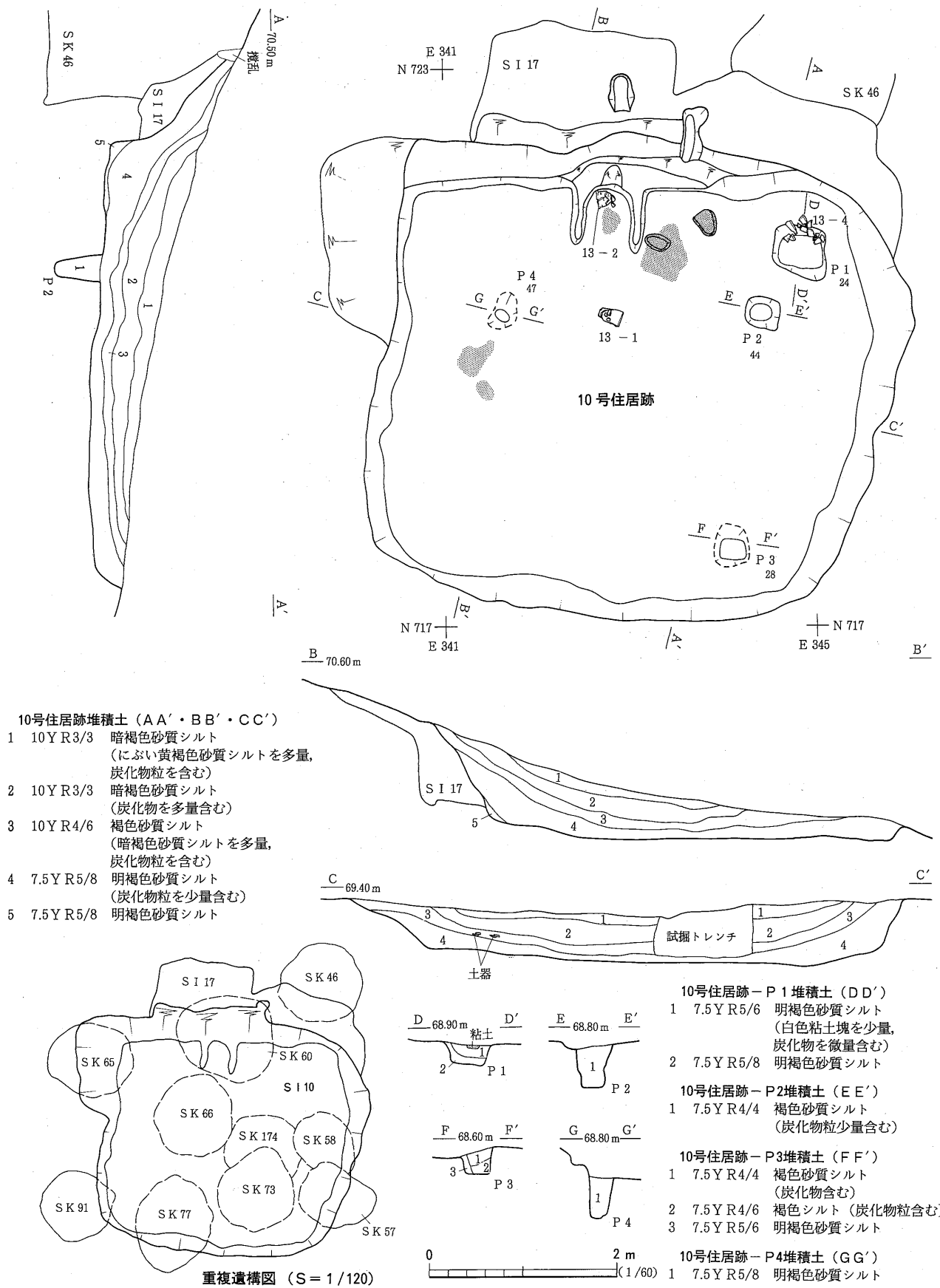


図11 I区10号住居跡

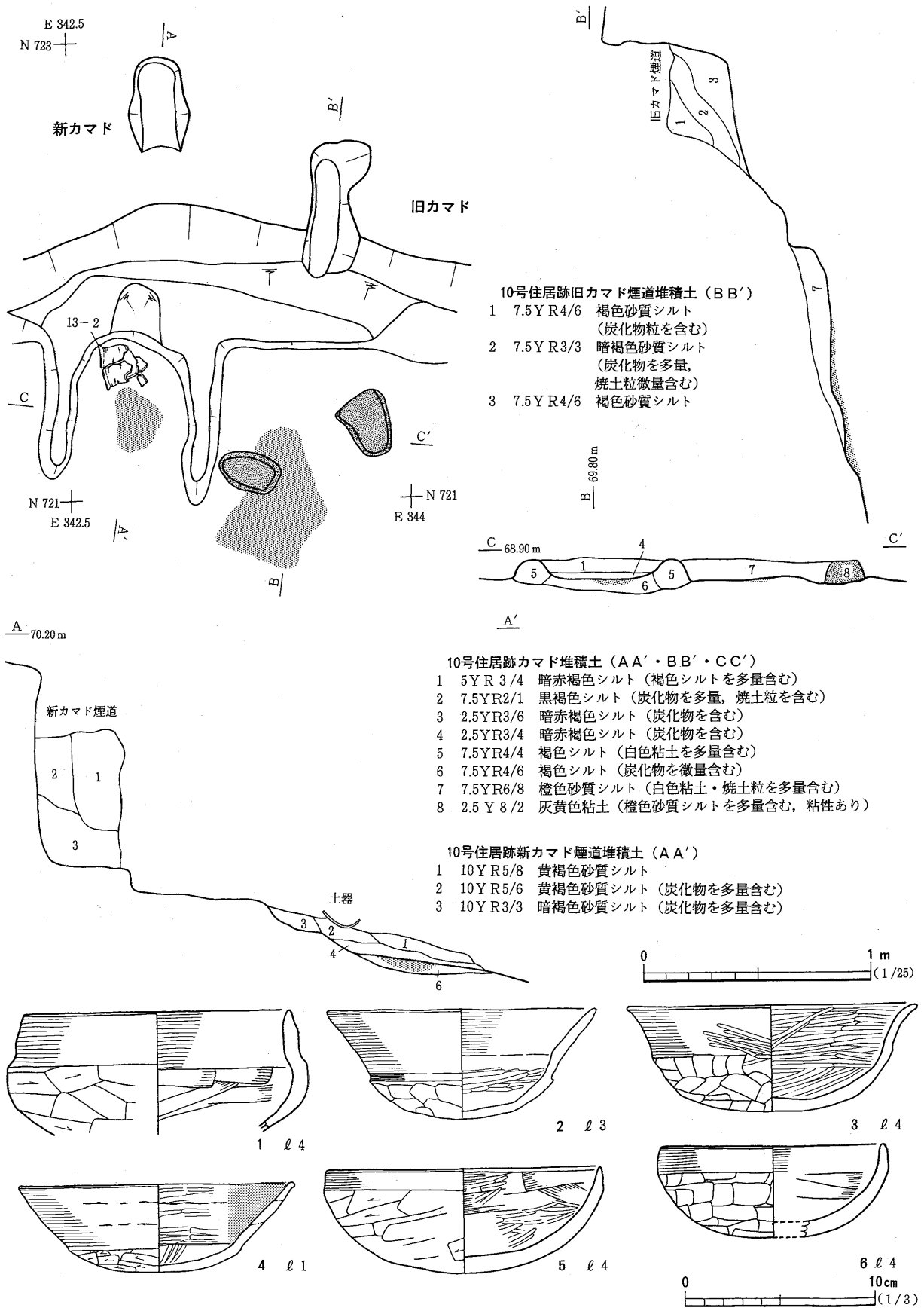


図12 I区10号住居跡カマド, 出土土師器

第2節 竪穴住居跡

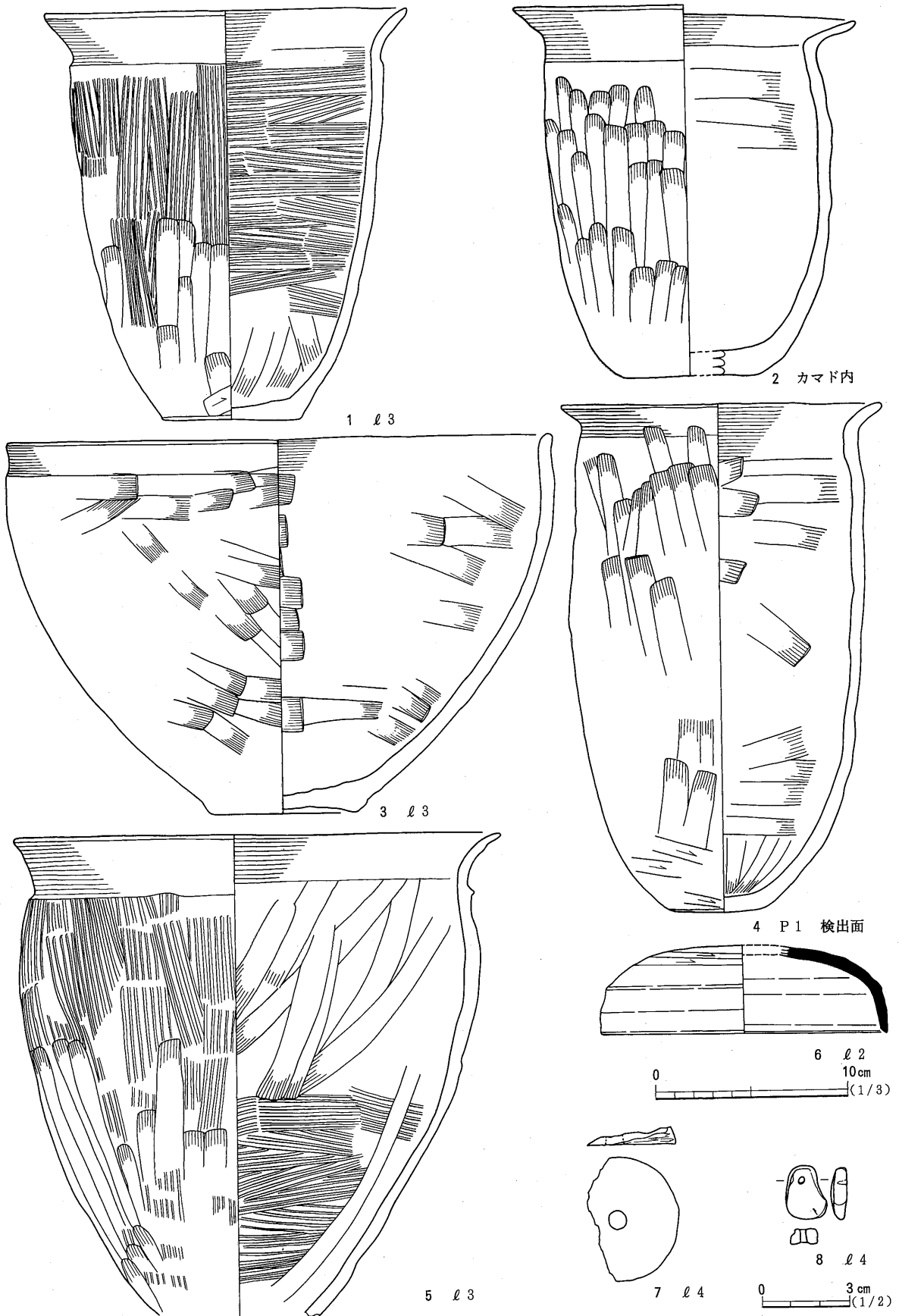


図13 I区10号住居跡出土土師器・須恵器・石製品

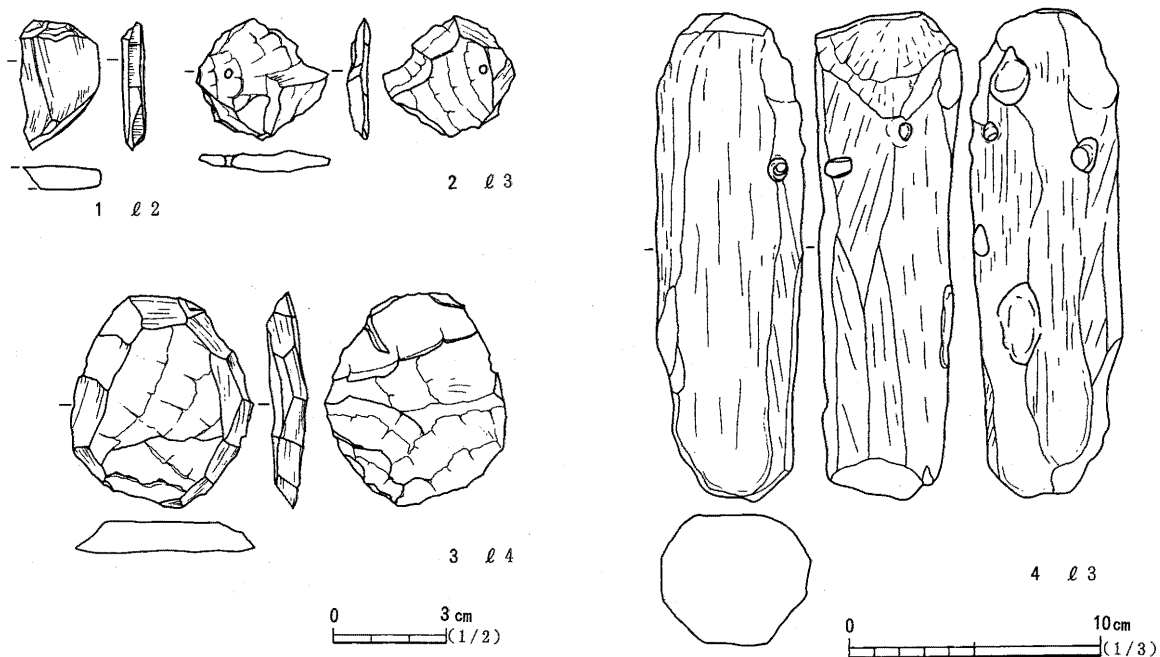


図14 I区10号住居跡出土石製品

部に赤彩を施している。器形は、底部より体部にかけて内湾して立ち上がり、体部と口縁部の境に段を持ち、口縁部が内傾して立ち上がる。器面が荒れていて調整が不明瞭であるが、口縁部がヨコナデ、体部内面がヘラナデ、体部外面がヘラケズリである。胎土には、砂粒を含んでおり、遺存する器高6.4cm、推定口径14.2cmを測る。

図12-2は、住居跡北東部のl3より出土した土師器杯で、口縁部の一部が欠損している。器形は、丸底で体部下半に段を持ち、口縁部は、緩やかに外傾ぎみに立ち上がる。口縁部がヨコナデ、体部内面がヘラミガキ、体部外面がヘラケズリで、口縁部の段の上部には狭い幅のナデがみられる。胎土は緻密で、焼成は良好である。口径14.2cm、器高5.7cmを測る。

図12-3は、図12-5と重なって、北東壁際のl4より出土した土師器杯で、約半分が遺存する。丸底で、口縁部と体部の境に稜を持ち、口縁部が緩やかに外反する。内面は、底部に縦方向のヘラミガキを施した後、口縁部に横方向のヘラミガキを施している。底部中央には整形段階での指オサエの痕跡がみられる。外面は、底部から体部にかけてヘラケズリ、口縁部はヨコナデを施した後に一部にヘラミガキを施している。胎土は緻密で、焼成は良好である。推定口径は15.4cm、遺存高は5.6cmを測る。

図12-4は、l1より出土した土師器杯で、口縁部の一部のみ欠損している。器形は、丸底で体部下半に軽い段を持ち、口縁部にかけて外傾して立ち上がる。内面を黒色処理しており、底部に縦方向にヘラミガキを施した後、口縁部に横方向のヘラミガキを施している。外面は、底部にヘラケズリ、口縁部にヨコナデを行っている。また、外面に粘土積み上げ痕が残っている。胎土には細かい砂粒を含んでおり、焼成は良好である。口径14.7cm、器高4.6cmを測る。

第2節 竪穴住居跡

図12-5は、北壁際のℓ4より出土した土師器杯で、内面と外面の口縁部に赤彩が施されており、口縁部の一部のみ欠損している。底部より体部にかけて緩やかに立ち上がり、口縁部が短く、軽く内傾する。内面は、口縁部がヨコナデ、体部がヘラミガキで、口縁部付近はヘラナデの痕跡が残っている。外面は、口縁部がヨコナデ、体部がヘラケズリである。胎土は緻密で、焼成は良好である。口径14.5cm、器高5.5cmを測る。

図12-6は、北側中央部のℓ4より出土した土師器杯で、遺存は約1/4程度で、底部は欠損している。器形は、底部より体部にかけて緩やかに立ち上がり、口縁部が短く、わずかに内傾する。器面が荒く調整が不明瞭であるが、口縁部がヨコナデ、体部内面がヘラナデ、体部外面がヘラケズリである。胎土にはわずかに細かい砂粒を含んであり、焼成は良好である。推定できる口径は、11.7cm、遺存高4.8cmを測る。

図13-1は、住居跡の北側中央部のℓ3より出土した土師器甕で、底部より口縁部にかけて遺存しているが、半分は欠損している。器形は、胴部が外傾ぎみに立ち上がり、胴部と口縁部の境に軽い稜を持ち、口縁部は直立ぎみに立ち上がり、その後外反する。胴部最大径は上方に位置する。器面が荒く調整が不明瞭な部分があるが、内面調整は、口縁部がヨコナデ、胴部が横方向のハケメ、胴部下方がヘラナデ、外面調整は、胴部にハケメ調整を施した後、胴部下半にヘラナデを施し、胴部下端にヘラケズリを施している。胎土には大きい砂粒を多く含み、焼成は良好である。口径19cm、器高21.5cm、底径7.6cmを測る。

図13-2は、新カマド内より出土した土師器甕で、底部が一部欠損している。器形の、胴部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁部が強く外反する。胴部最大径はやや上方に位置する。器面が荒く調整が不明瞭な面が多いが、口縁部がヨコナデ、胴部内面と胴部外面がヘラナデである。胎土には大きな砂粒を含み、焼成は良好である。口径は18.0cm、器高は19.4cm、推定底径は7.2cmを測る。外面は被熱の痕跡が顕著であり、カマドでの使用をうかがう事ができる。

図13-3は、北側中央部の壁際のℓ3より出土した土師器甕で、1/4程度の遺存である。器形は底部より緩やかに内湾しながら立ち上がり、体部と口縁部の境に軽い段を有し、口縁部が軽く外反する。調整は、口縁部がヨコナデ、体部内外面ともに、ヘラナデが施されている。底部はヘラケズリで再調整している。胎土には細かい砂粒を含み、焼成は良好である。推定口径は28.7cm、遺存高19.6cm、底径7.7cmを測る。

図13-4は、P1の検出面より出土した土師器甕で、ほぼ完形に近い。胴部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がり、口縁部は強く外反する。内面は、胴部はヘラナデ、口縁部はヨコナデ、外面は、口縁部はヨコナデ、胴部下端はヘラケズリ、胴部はヘラナデである。胴部下半の片側に弱い被熱の痕跡があり、内面の胴部下半には、黒色の斑点状の付着物がみられる。胎土には、砂粒を多く含み、焼成は良好である。口径16.7cm、器高26.7cm、底径4.6cmを測る。

図13-5は、住居跡中央部南側のℓ3より出土した土師器甕で、9割程度の遺存ではあるが、底部が欠損している。底部より口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、口縁部に段を持ち、口縁部

が外反して立ち上がる。内面は、胴部下半にハケメを施した後、胴部上半にヘラナデを施している。外面は、ハケメを施した後、胴部下半にヘラナデを施している。口縁部はヨコナデである。胎土は砂粒を含んでおり、焼成は良好である。口径 25.6 cm、遺存の器高は、25.2 cmを測る。

図 13 - 6 は、北側中央部の $\ell 2$ より出土した須恵器蓋で、遺存は 1/3 程度である。器形は、天井部が比較的 low、偏平な感じである。口縁部は外反して下がり、軽い稜を持ち、口縁部端部に面が残る。天井部の調整は、回転ヘラケズリを 2/3 ほど施している。推定口径は 15.0 cm、遺存高 4.6 cm である。内外面ともに青灰色をしており、割れ口断面は、外側が青灰色、中が暗赤灰色をしている。胎土分析をおこなった資料である。

図 13 - 7 は、 $\ell 4$ より出土した紡錘車の欠損品である。径 4.3 cm、遺存の幅 3.1 cm、遺存の厚さ 0.6 cm、石質は、結晶片岩である。熱を受けて、非常に脆く、外面が黒色化している。

図 13 - 8 は、住居跡北側中央部の $\ell 4$ より出土した石製模造品である。長さ 1.9 cm、幅 1.4 cm、厚さ 0.5 cm、孔径 0.2 cm、重さ 1.9 g、石質は滑石片岩である。

図 14 - 1 は、住居跡北東側の $\ell 2$ より出土した石製模造品の未成品の欠損品で、有孔円盤になるものと思われる。1/3 程度遺存し、研磨痕が斜位に 2 方向認められ、表裏とも同じ程度の研磨を施している。側面は、横方向に研磨されている。長さ 3.3 cm、遺存の幅 2.1 cm、厚さ 0.6 cm を測り、重さは 6.1 g である。

図 14 - 2 は、 $\ell 3$ より出土した石製模造品で、形状から剣型製品と考えている。穿孔はしてあるものの、仕上げ段階の研磨痕がみられない。長さ 3.5 cm、幅 3.2 cm、厚さ 0.5 cm、孔径 0.2 cm を測り、重さは 6.8 g である。

図 14 - 3 は、住居跡の南東側の $\ell 4$ より出土した石製模造品の未成品と思われる。楕円形に工具で側面を加工した痕跡が顕著である。最大長 5.5 cm、幅 4.8 cm、厚さ 0.9 cm を測り、重さは 31.7 g である。

図 14 - 4 は、住居跡北側の $\ell 3$ より出土した石製品である。長さ 19.2 cm、幅 5.8 cm、厚さ 5.2 cm、石質は凝灰岩である。熱は受けておらず、面取りをしているものの、未成品であるため、使用目的が明確でない遺物である。

本住居跡からは、図示した以外に土師器片 615 点、須恵器片 1 点、紡錘車 1 点、滑石片 302.6 g が出土している。

まとめ

本住居跡は、カマドと P 1 の検出面より出土した遺物により、8 世紀初頭の年代が与えられる。今回の東部調査区では最も新しく、14 号住居跡の最も新しいカマドの時期と昨年度調査の 3 号住居跡と同時期と思われる。カマドの造り替えが認められ、旧カマドは、燃焼度合いが強くないことから短期間の使用を考えているが、新カマドでは、焼土を含む層が堆積していることから長期間の使用がうかがえる。P 1 検出面出土の土師器甕には、被熱の痕跡がみられるため、カマドで使用されていた可能性がある。

第2節 竪穴住居跡

堆積土中より出土した遺物には、6世紀前半の年代を与えられるものがあり、これらは出土位置が10号住居跡の北側及び壁際に集中し、壁際の中位で出土した遺物は重複する17号住居跡の床面とほぼ同じレベルであることから17号住居跡からの流れ込みと考えている。(大竹)

11号住居跡 S I 11

遺 構 (図15・16, 写真11・12)

本遺構は、調査区東部L5・6, M5・6グリッドにまたがり検出された竪穴住居跡であり、北側の山頂部より南側の沢方向に下る傾斜地に位置している。遺構検出面はLⅢである。他の遺構との重複関係は54・56・72・104号土坑との間に認められ、これらの土坑よりも本住居跡の方が新しい。なお、本住居跡の西側に10号住居跡、南東側に12号住居跡が隣接している。遺構内堆積土は6層に区分される。l2についてはl2a, l2b, l2cの3層に分割した。l1からl3まではいずれも自然堆積であり、特にl2からは木炭片や木炭粒が多量に出土した。更にl3はLⅣに近い褐色砂質シルトで、最大60cmと他の層より厚く堆積している。l4は貼床である。

住居跡の平面形は、方形で各辺はやや膨らみをもっている。各辺の遺存する長さは、北辺が上端で440cm, 東辺で410cm, 西辺で418cm, 南辺は床面で370cmを計測する。北辺と南辺の中点を結ぶ軸方位はほぼ真北を向いている。壁は、斜面下方にあたる南壁が認められない。北壁が垂直から45°, 西壁がほぼ垂直, 東壁が60°でそれぞれ立ち上がる。各壁高は北辺が112.5～129.0cmと最も高く, 東辺が最大121.0cm, 西辺が最大103.0cmである。東西壁とも北から南にかけて低くなり最後は遺存する床面に緩やかに接する。

床面における遺構内施設として壁溝とピット2基(P1・2)を検出した。壁溝は北壁に沿って幅12cm～22cm, 深さ4cmの規模で巡り、住居跡のほぼ中央部にあるP1につながっている。P1の平面形は隅丸方形を呈し、その規模は南北に長軸214cm, 東西に短軸112cm, 深さは最大12cmである。P1の性格は明確にできないが、住居跡中央において住居スペースを阻害していることから、居住に際しては、P1をふさぐ床施設が想定される。カマド南側で検出したP2は長径68cm, 短径38cm, 深さは最大30cmあり、その形状や規模から貯蔵穴であると考えられる。その他西壁中央部分には、幅52cm, 奥行160cmの外側に張り出した部分が確認され、固く踏み締まっていることから、本住居跡の出入り口である可能性が高い。

床面はほぼ平坦であるが、やや南に傾いている。また、床面中央からカマド付近にかけて貼床が確認された。最も厚い部分で12cmを測り、南に行くにつれ徐々に薄くなる。貼床の土には、締めりや粘性のある褐色シルトが用いられていた。

カマドは東壁のほぼ中央部で検出し、地山を削り出した袖を持つ。カマドの全長は70cm, 焚口幅は45cm, 奥行きは55cmである。煙道は東壁上端より104cm住居跡外にのび、その先端部に長径30cmの煙出し口がある。燃焼部は61×62cmのほぼ楕円形状を呈し、その酸化面の厚さは最大12cmある。また、カマド内から土師器甕3点が正立した状態で出土しているが、特に南側から出土し

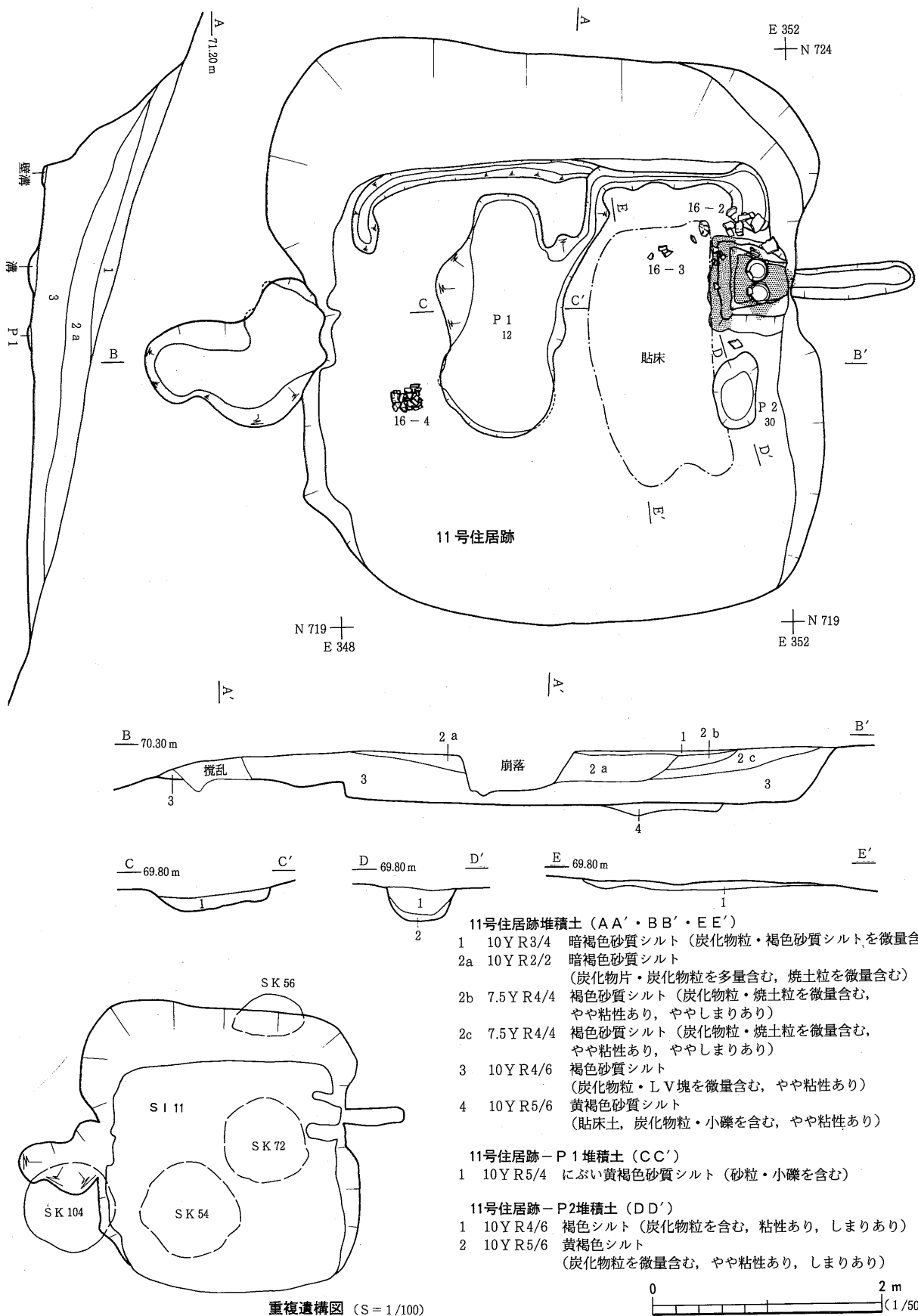


図 15 I区 11号住居跡

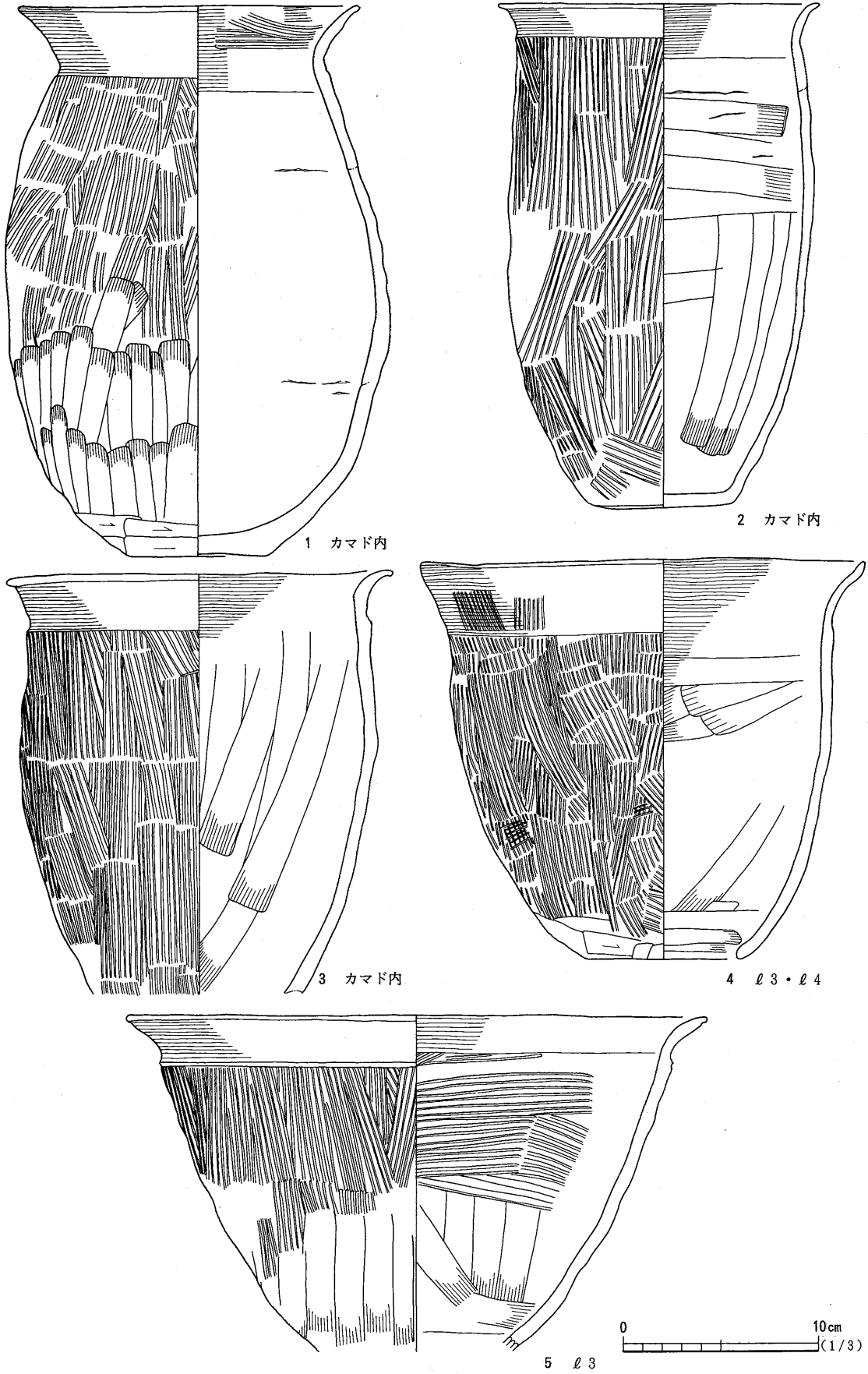


図17 I区11号住居跡出土土師器

第2節 竪穴住居跡

た土師器甕は(図17-2)が(図17-3)の中に入った状態で出土した。その他、カマド付近のℓ3や床面直上からは土師器杯や土師器甕が割れた状態で出土した。またℓ3下部の床面直上より土師器甕が口縁部を西側に向けつぶれた状態で出土している他、ℓ3からは鉄製品の一部が出土した。ℓ1及びℓ2からは遺物はほとんど出土しておらず、図示できなかつた破片資料はカマド付近を中心に出土している。

遺物 (図16・17, 写真88・89)

本住居跡からは、土師器が263点、鉄製品1点が出土した。本住居跡に伴う遺物は、カマド内から正立した状態で出土した土師器3点である。そのうちの図17-1はカマド内北側からほぼ完形の状態出土した土師器甕である。器形は平底で、胴部中位に最大径を有する卵形を呈し、口縁部はくの字形に強く外反する。口径17.4cm、底径6.8cm、器高28.1cmを測る。調整は口縁部にヨコナデを施し、内面については更にハケメが上部に入る。胴部は外面にハケメとヘラナデが見られるが、胴部中央から下部についてはハケメで調整した後、ヘラナデを施し、最後に底部をヘラケズリして仕上げている。胴部内面は、単位の見えないナデ調整が施され、積み上げ痕が胴部中央の上下に2か所確認される。色調は外側が黄燈褐色、内側が黄燈色で胎土は粗粒砂が全体的にまばらに見られる。焼成については、ほぼ良好である。カマド内南側から出土した図17-3は土師器甕である。ほぼ完形であるが、底部が積み上げ痕のところから欠落している。器形は、口縁部に最大径を有し、胴部中央で緩く内傾しながら頸部に続き、口縁部は外傾する。口径19.8cm、遺存高21.8cmを測る。

調整は口縁部が内外面ともヨコナデで、胴部外面にハケメ調整が上下にていねいに施されている。胴部内面は、ヘラナデが下から口縁に向かって施されている。色調は外面が明褐色に鈍い赤褐色と黒褐色が混じり、内面は明褐色に暗褐色が混じる。胎土については粗粒砂が全体に見られ、焼成は比較的良好である。図17-3の甕内で見つかった図17-2の土師器甕もほぼ完形の状態である。

器形は平底で、口縁部に最大径を有する長胴形を呈し、底部から緩く内湾して胴部中央部からはほぼ垂直に立ち上がり、口縁部で緩く外反する。調整は口縁部が内外面ともヨコナデで、胴部外面はハケメで上下に調整し、底部に一部ヘラナデ調整痕が確認された。胴部内面は、頸部に近い部分に積み上げ痕が1か所認められたほか、上部にヘラナデが水平方向に見られ、その後中央から底部にかけて下から上方向のヘラナデ跡が確認された。色調は外側が明黄褐色に黒く燃焼した部分が見られ、内側は鈍い黄橙色を呈する。胎土は、粗粒砂が全体に見られ焼成は良好である。また、カマド北側の袖上部から西へ向かう床面にかけて、土師器甕、土師器甕、土師器杯2点が出土している。

図17-4は袖上部から出土した無底の土師器甕で、ほぼ完形である。器形は口縁部に最大径を有し、底部より緩く内湾しながら口縁下部稜線に続く。口縁部は外湾した後、口唇部で更に内湾する。口径12.8cm、底径8.0cm、器高20.0cmを測る。調整は、口縁部はヨコナデであるが、外面には以前のハケメ調整が確認される。胴部外面は底部にヘラケズリの跡が見られるが、全体としてはその後、ハケメで上下に調整している。胴部内面は、頸部付近と底部にヘラナデ痕が確認された。

図17-5は同じく袖上部から出土した土師器甕で、底が欠損しており、遺存率40%と低い。口

径 30 cm, 遺存高 17 cm を測る。器面調整は口縁部が内外面ともにヨコナデを施し、胴部外面はハケメで調整した後、底面から胴部中央にかけてヘラナデ調整をしている。胴部内面は外面と逆にヘラナデした後にハケメ調整した跡が確認された。色調は橙色で、胎土は粗粒砂が見られるが焼成は良好である。カマド手前の床面直上から出土した土師器杯 2 点のうち、図 16 - 3 は、遺存率 70 % と比較的遺存状態は良い。器形は有段丸底の土師器杯で、口径 16.0 cm, 器高 4.2 cm を測る。調整は口縁部外面がヨコナデ、内面はヘラミガキの後、黒色処理が施されている。また、底部外面は外側に向かって、ヘラケズリされている。図 16 - 2 は、底部が一部欠損しており、遺存率はほぼ 40 % である。

器形は有段丸底の土師器杯で、口径は 18.0 cm, 遺存高 4.5 cm を測る。口縁部外面はヨコナデ調整し、内面はヘラミガキの後、黒色処理が施されている。体部外面はヘラケズリで器面調整している。2 つの杯には内面のヘラケズリの後、黒色処理している点など共通性が見られるが、底部の外面のヘラケズリの方向に違いがある。

図 16 - 4 は住居跡西側の入り口付近の床面に近い ℓ 3 から出土した土師器甕である。底部が一部欠損しており、遺存率は 80 % である。器形は口縁部に最大径を有する長胴形を呈し、底部よりほぼ垂直に立ち上がり口縁部の稜線にいたる。口径は 17.0 cm, 底径推定値 8.0 cm, 器高 23.2 cm を測る。器面調整は、口縁の内外面がヨコナデ、胴部の外面はていねいにハケメ調整を施した後、底部にヘラケズリの調整が見られる。胴部内面は、ハケメ調整の後ヘラナデを横方向に入れている。色調は、黄橙色で、胎土は粗粒砂が全体に見られるが、焼成はほぼ良好である。

その他に住居のほぼ中央部の床面に近い ℓ 3 より T 字状の鉄製品の一部が出土した。横軸 3.9 cm 縦軸 3.7 cm, 厚さ 1.1 ~ 1.2 cm を計測したが、その形状や規模からベルトの止め具とも考えられる。

ま と め

本住居跡は、タタラ山東部の南斜面に位置し、東辺にカマドを持ち、対する西辺に住居の出入口と北辺に P 1 とつながる除湿用の壁溝を持つ隅丸方形の竪穴住居跡である。本住居跡に伴う遺物は、カマド内とその付近から出土した土師器甕と土師器甗、及び土師器杯であり、その時期は 6 世紀後葉に比定される。また、少ないながら鉄製品の一部が見つかったことは、生活の中での鉄の実用化がうかがわれる。

(高 村)

12 号住居跡 S I 12

遺 構 (図 18, 写真 13・14)

本住居跡は平成 7 年度調査区では西側の M 6 グリッドに位置している。地形的には丘陵南斜面の急傾斜部から緩やかな傾斜へ移行する場所が選地されており、周囲に近接して 11・14・16 号住居跡が認められ、床下からは 59 号土坑が検出されている。

検出面は L III 赤褐色土面で、遺構内の下層には褐色土が斜めに堆積し、上層には暗褐色土がレンズ状にみられることから、壁際の土が徐々にくずれながら入り込んだ後、斜面上位から多量の土が流入して埋没したものと考えられる。堆積土中に含まれる炭化物は、前時期の住居跡に火災痕跡が

第2節 竪穴住居跡

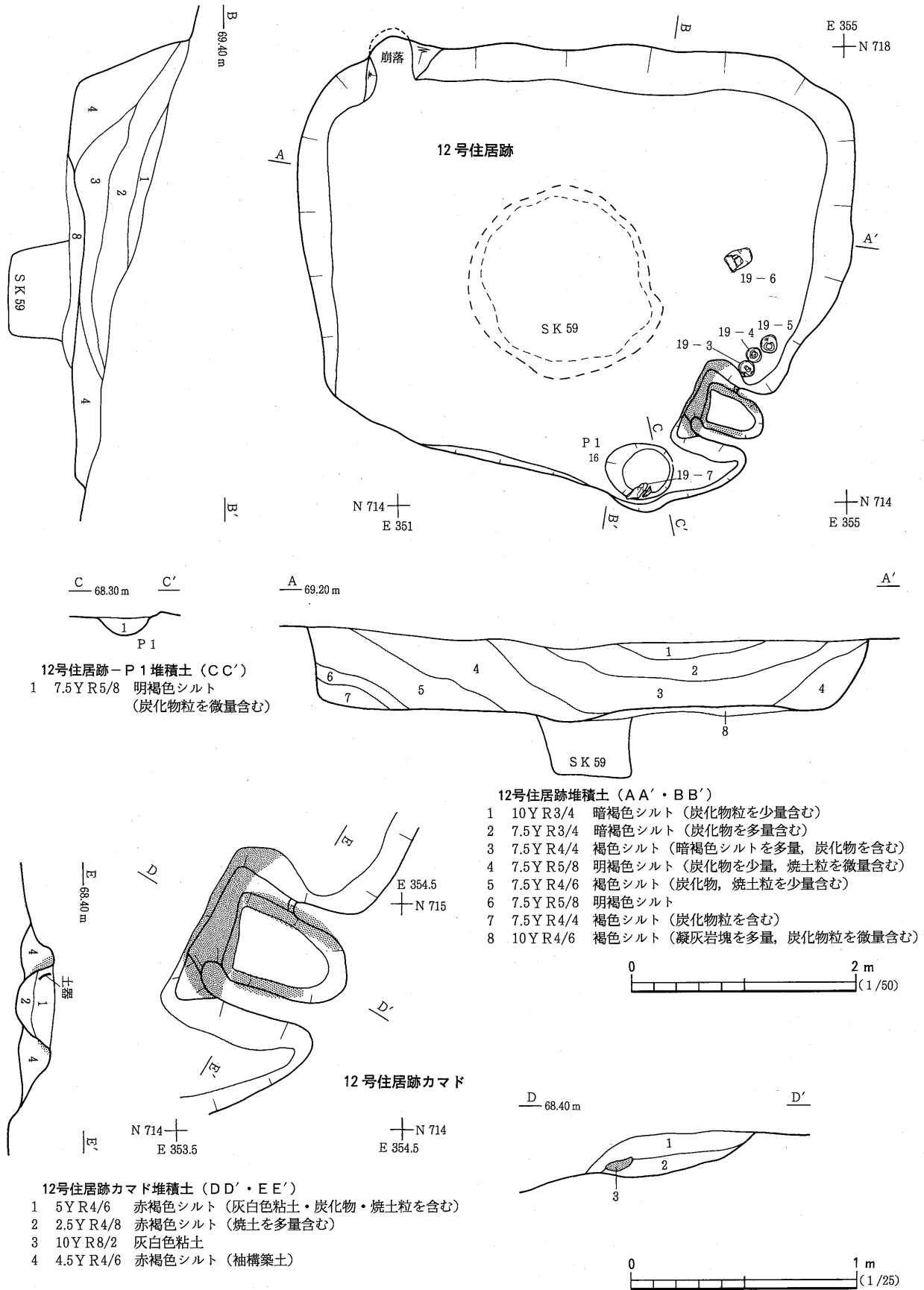


図18 I区12号住居跡

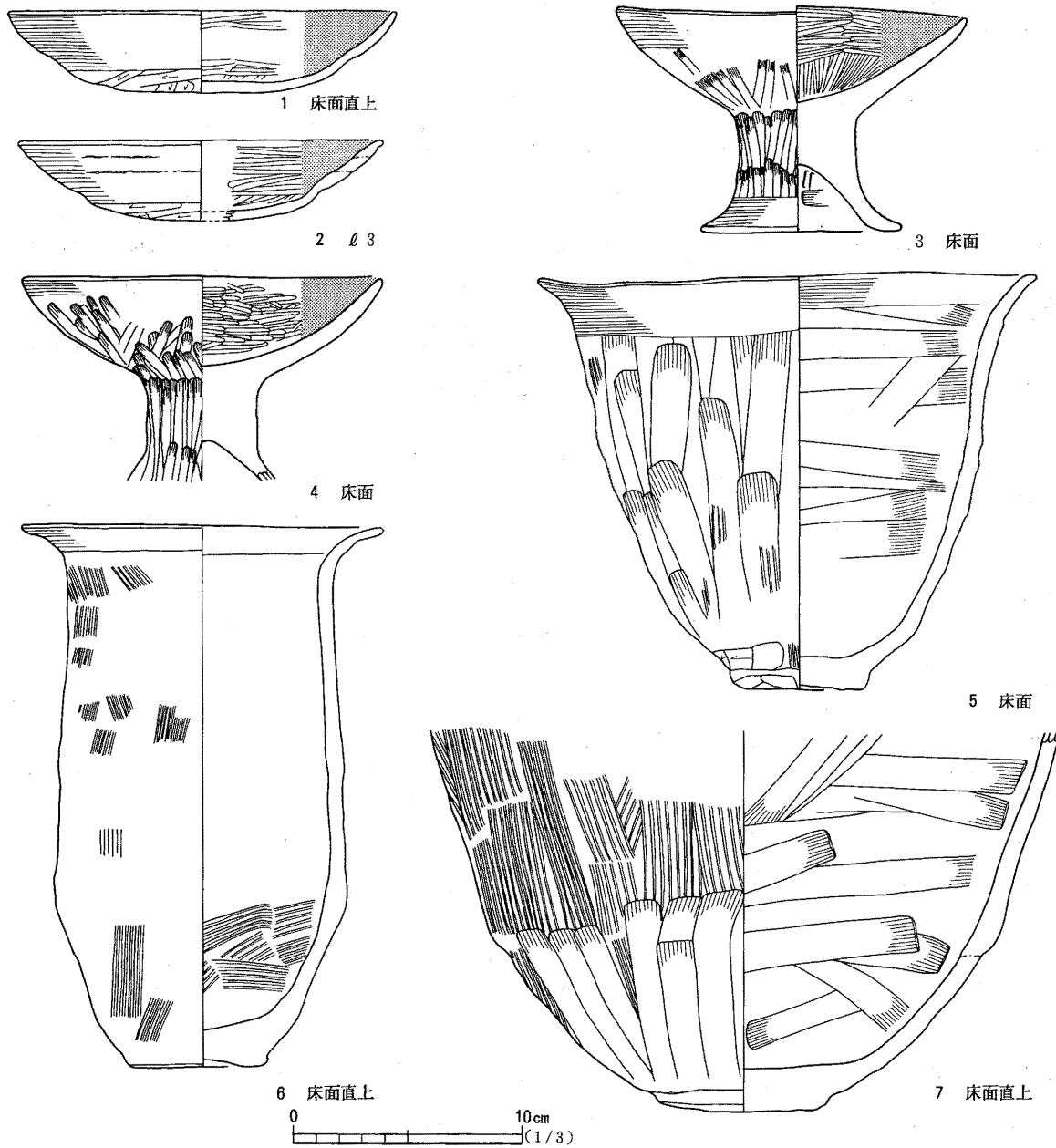


図19 I区12号住居跡出土土師器

認められることから、火災時の炭化物が時を経て混入したものと考えられる。

全体の平面形は下端ラインで東西軸4.25m、南北軸3.40mの方形を基本としているが、カマド位置の関係で北東コーナー部がやや変形している。壁高は斜面上位の北壁が100cmの高さまで認められるのに対して、南壁側は残りの良い部分で10cm程しか遺存しないという状況で、東壁及び西壁は、北壁側から南壁側に向かって斜面の傾斜にしたがって高さを減じている。

床面は中央から東側にかけて、灰白色土ブロックを含む褐色土が水平に堆積しており、地盤の緩い部分に貼り床がなされたものと考えられる。ただし、床面全体の締まりは弱く、その検出作業は難儀な作業であった。

第2節 竪穴住居跡

カマドは東壁北側に位置するが、1号ピット(P1)をセットと考えるならば住居北東コーナーを意識して設置されたものと考えられる。カマド自体は住居跡プラン内に燃焼部を持つ両袖タイプのもので、袖の両端を整形した灰白色粘土で掛け渡して焚口としている。ただ検出時は灰白色粘土がカマド底面まで崩れ落ちており、袖端の灰白色粘土を支持する部分においては袖構築土である赤褐色土と遺存粘土が混土となった状態で確認されている。両袖によって確保された燃焼部の規模は、下端ラインで焚口幅約30cm、奥行き約60cmを測り、焚口底面から灰白色粘土天井までの高さは20cm前後に復元される。燃焼部底面には焼土が5cm前後の厚さで堆積し、側壁も火を受けて酸化していることから、頻度の高い使用が想定される。なお、隣接する同時期の住居跡例からすると煙道が付属していたと思われるが、当住居跡では確認されずカマド位置が斜面下位であることからおそらく後世の浸食などによって失われたものと考えられる。

カマド南脇で確認されたP1はいわゆる貯蔵穴と考えられるもので、造り付けることによって住居跡の南辺ラインがやや乱れている。単独規模としては長軸60cm、短軸50cmの楕円形を呈し、床面からの深さは16cmを測る。おそらくカマドに付属する形で設けられたものと思われる。

その他の施設として予想される壁溝や柱穴などは、完掘後に床面の断ち割りを実施したが検出されなかった。

遺物 (図19, 写真89・90)

出土遺物は土師器のみで堆積土及び床面で検出されている。図19-1・2は堆積土及び床面直上より出土した杯で、扁平気味の底部から口縁部は内湾しながら外傾して立ち上がり、体部との境にはくびれが認められる。1の口径17cm、器高3.5cm、2の復元口径16.0cm、推定器高3.5cmを測り、調整は口縁部ヨコナデ、体部から底部にはヘラケズリがみられ、内面はヘラミガキの後黒色処理が施されている。図19-3・4はカマド左脇の床面で杯部を伏せた状態で検出された高杯で、短い脚部とわずかに内湾しながら外傾する杯部からなっている。3の口径15.8cm、残存高8.9cm、4の口径15.8cm、器高8.9cm、脚部裾径7.0cmを測る。調整は外面がヨコナデと単位の細いナデ調整で、杯部内面はヘラミガキの後黒色処理が施され、脚部内面はナデ調整である。

図19-5は図19-3・4と並んでやはり伏せた状態で検出された甕で、底部から口縁部に向かって開き気味に立ち上がり、頸部にわずかな段を有している。口径21.7cm、器高18.0cm、底径5.7cmを測り、調整は口縁部がヨコナデ、体部はヘラナデである。図19-6はカマドから1mほど離れた北側で検出されたものであるが、摩耗の状態からカマド内で使用されたと考えられる長胴の甕である。口径17.7cm、器高23.7cm、底径6.3cmを測り、調整は口縁部がヨコナデ、体部にはハケメが観察される。図19-7はP1上面より検出されたもので、2もほぼ同位置から出土している。体部下半しか遺存しないがかなり大型の甕で、底径7.3cm、残存高16.5cmを測り、調整はハケメとヘラナデが観察される。

まとめ

本住居跡はプラン全体が把握される遺存状態の比較的良好な遺構で、図示した遺物も一括性の高

いものである。遺物の特徴からすると今年度調査された住居跡の中では時期の下るグループに属し、7世紀後半の時期が考えられる。(安田)

13号住居跡 S I 13

遺 構 (図20, 写真15・16)

調査区東部のL4グリッドで検出された竪穴住居跡で、南側が下がる比較的急な斜面に構築されている。遺構検出面はLIVであるが、9号住居跡の掘り込み途中で北壁側に重複する状態で確認した。9号住居跡の他に37・49・53・62・63・78号土坑と重複しており、9号住居跡より古く、いずれの土坑より新しい。遺構は、9号住居跡に切り込まれているために遺構の北側のみを残し、その他のほとんどを失っている。

遺構内堆積土は、5層に細部される。ℓ1～3は、LIV・LVからなる明褐色砂質シルトが凸レンズ状に堆積している。ℓ4は褐色の砂層でLV塊を多量含んでいるが、人為堆積土とは考えがたく、人為的に掘られた土の一部が上面から自然流入したものと考えている。ℓ5は床面上の堆積土で、焼土・木炭粒が多量に認められ、火災にあった状況を示している。

遺構は、遺存する北壁、東壁と西壁の一部の状態から方形基調となる竪穴住居跡と推測される。西壁の軸方向は真北から17°東に傾いている。規模は、北壁6.62m、東壁遺存長1.35m、西壁遺存長2.75mである。最も遺存する北壁の深さは79～102cmである。床面は、僅かな凹凸が認められるがおおむね平坦である。LVを床面として使用しており、貼り床と踏み締まり部分は認められなかった。

床面からは2基のピットを検出している。P1は、重複する9号住居跡の床面下で、P2は、本住居跡の床面で検出している。このため、検出面からの深さに差があるものの、P1とP2の底面のレベル差があまりない。平面形は円形を呈しており、P1の径が33cm、P2の径が38cmを測る。P1-P2の芯々間の距離は3.88mで、P1-P2を結んだ線は、北壁に平行する。このことから、P1・P2については支柱穴の可能性が考えられる。

床面上からは、住居跡の北西側で土師器・滑石剥片・石製模造品の未成品が出土している。滑石剥片については、火を受けたと思われ滑石が薄く剥がれるような状態で出土している。カマドは認められなかった。

遺 物 (図21, 写真90・108)

遺物は、土師器片186点、須恵器4片、石製品1点、滑石剥片が出土している。遺構に伴う遺物は、土師器と石製品がある。堆積土からは、主にℓ3と床面から遺物が多く出土している。このうち、図示できたのは、床面から出土した図21-1～4である。

図21-1は、完形の土師器杯である。丸底で体部上半で緩くくびれて、口縁部に至る器形である。口縁部外面にはヨコナデ後にヘラミガキ、体部外面下半にはヘラケズリが加えられる。内面全体にはヘラミガキが加えられる。口縁内外面に黒斑が認められる。胎土には土器焼成時に赤化した

第2節 竪穴住居跡

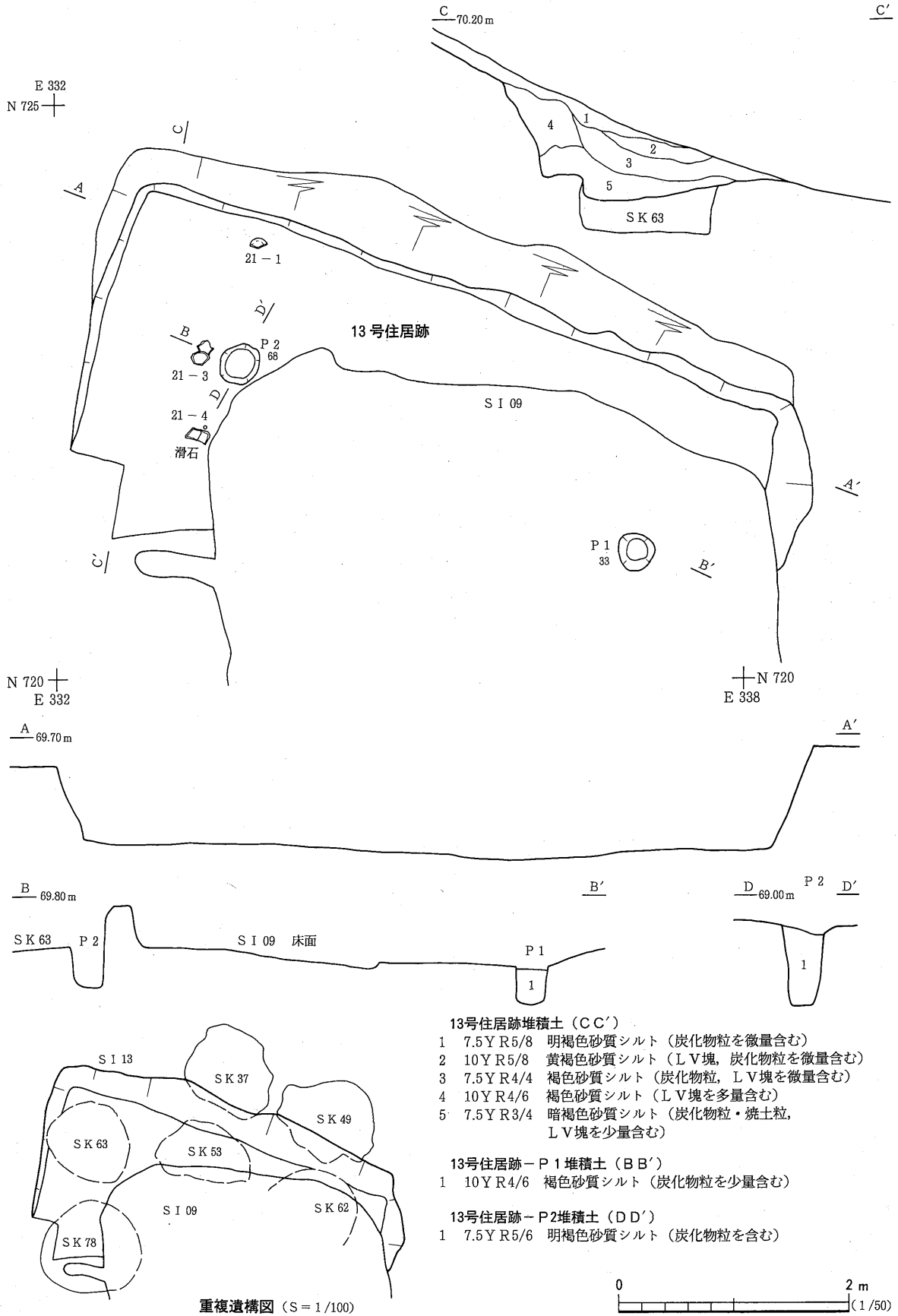


図20 I区13号住居跡

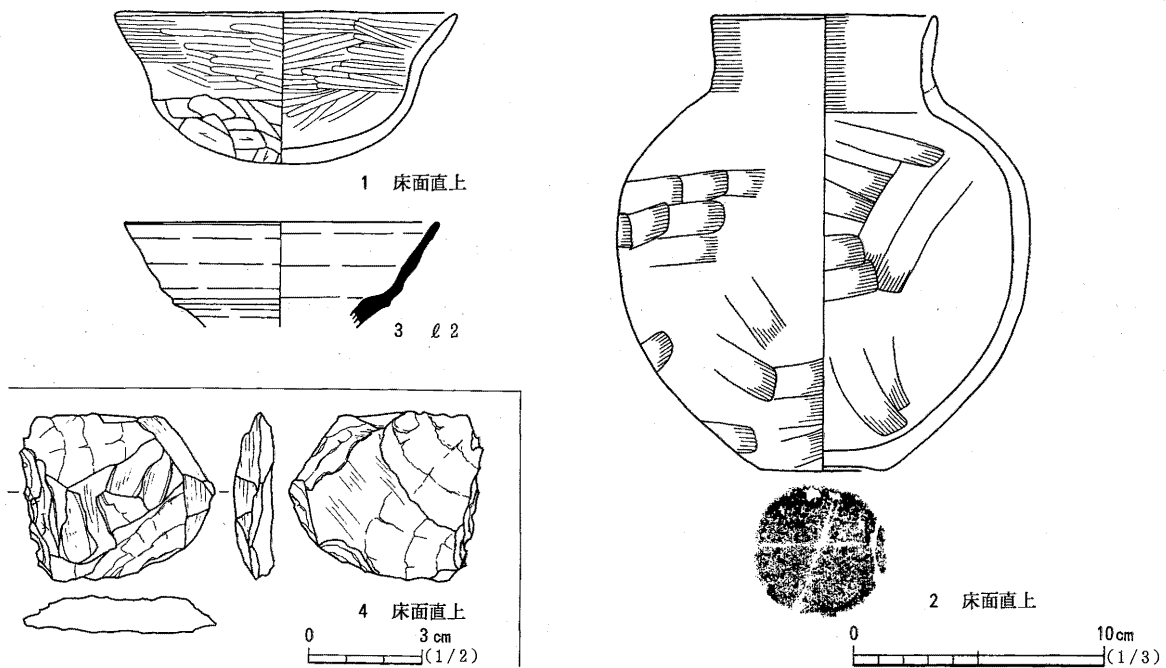


図 21 I区 13号住居跡出土土師器・須恵器・石製品

粒を含み、焼成は良好で、橙色の色調を呈する。口径 13.6 cm，器高 6.0 cm を測る。

図 21 - 2 は、床面から出土した土師器甕である。約 6 割が遺存している。底部には、「X」の線刻を施している。胴部は球状をなし、口縁部が直に立ち上がる器形である。調整は、口縁部にヨコナデ、胴部にヘラナデが加えられる。外面は摩滅が著しく、胴部の一部に火を受けた跡が認められる。胎土には土器焼成時に赤化した粒が 1 の胎土と同様に含まれている。焼成は良好であり、橙色の色調を呈する。口径 9.0 cm，器高 18.1 cm，底径 5.0 cm を測る。

図 21 - 3 は 2 から出土した須恵器甕である。口縁部の約 4 分の 3 ほどの破片で、胎土分析を行った結果では大阪府陶邑の製品ということである。口縁部端部は丸みをもち、口縁部下には弱い段が認められる。色調は、割れ口断面の色と同じ灰白色である。胎土は緻密で、焼成は堅緻である。推定口径は 12.6 cm を測る。

図 21 - 4 は石製模造品の未成品である。石質は滑石で、被熱により酸化している。側面部をわずかにえぐるように削って加工している。厚さがないため紡錘車にはならないだろう。最大遺存長 5.2 cm，最大遺存幅 4.5 cm，最大遺存厚 0.9 cm，重量 32.7 g である。

ま と め

本遺構は、重複する遺構によりその大半を失っている住居跡であるが、2 個の支柱穴を確認することができた。床面から滑石剥片と石製模造品が出土していることから、石製模造品を製造していた可能性が高い。床面上から多量の焼土や木炭粒が認められ、近接する 17・23・26・27 号住居跡と同様に焼失家屋と考えられる。本遺構の時期は、床面から出土した遺物から 6 世紀前半の所産と考えられる。

(国 井)

14号住居跡 S I 14

遺 構 (図22～24, 写真17～20)

本住居跡はM6グリッドとN6グリッドにまたがって検出され、西側には12・16号住居跡が隣接している。調査区全体が急斜面となっているI区東部の中では最も緩やかな箇所位置しているが、5m南側は高倉川の支流によって侵食された落差20m以上の急崖である。

検出面はLⅢ赤褐色土面で、炭化物を含む褐色土が長方形プランで比較的明瞭に認められた。長方形プランを4分割するように十字に土層観察用のベルトを残して掘り込んだ結果、西壁と北壁に2基のカマドがレベル差を持って検出され、堆積土層の検討を行ったところベルト中位(ℓ3上面)に、やや締まりのある面が確認された。このことから本住居跡はプランを変えずに2面の床面が存在し、上面(A面)に西壁のカマドが付属し、下面(B面)に北壁のカマドが付属することが判明した。ただし、掘り込みに際してはB面まで一気に掘り込んでしまったことから、平面プランは損なわないもののカマド以外のA面の詳細までは調査が及ばなかった。

A面までの遺構内堆積土は壁際に赤褐色土が斜めに堆積し、上層に褐色土が南側に向かって広く堆積していることから、壁際の土が徐々にくずれながら入り込んだ後、斜面上位から多量の土が流入したものと考えられる。堆積土中に含まれる炭化物は、前時期の住居跡に火災痕跡が認められることから、火災時の炭化物が時を経て混入したものと考えられる。B面はカマド崩落土を除くと明褐色土がほぼ均一に堆積しており、おそらく上面構築時に手が加えられたものと考えられる。

住居跡平面形は下端ラインで東西軸5.50m、南北軸3.40mの長方形を呈し、壁高は斜面上位の北壁で70～30cm、南壁で30～10cm程を測り、全体として北西コーナーから南東コーナーに向かって徐々に壁の高さを減じている。

A面の床面は前で述べたようにB面をかき上げたもので、土層観察で若干の締まりが認められた。B面は掘り込んだ地山をそのまま床としているものであるが全体の締まりは弱く、同様の傾向が近接する12・16号住居跡でも見られたことからすると、締まりの弱さは地山が砂質であることに起因すると考えられる。

A面のカマド(1号カマド)は西壁の中央よりやや北側に位置し、袖部を地山に近い赤褐色土で築いている。袖部は北側と南側で遺存度が異なり、残りの良い北袖で住居跡内に50cm飛び出し、カマド底面から約10cmの高さまで遺存している。燃烧部は遺存する両袖端部での幅40cm、煙道へ移行する部分までの奥行き約40cmを測る方形を基本とした平面形で、底面は煙道に向かって段差を持たずに緩い角度で登り、結果的に燃烧部底面と煙道端部底面は約25cmのレベル差となっている。煙道は地下式であり、20cm弱の幅でカマド奥から110cm程住居跡外方へ向って伸びている。また、燃烧部と煙道の壁面は強く火を受けており、厚いところで3～4cmの酸化壁が形成されている。

B面のカマド(3号カマド)は北壁の中央よりやや西側に位置し上部は崩れ、甕2個体が放置されつぶれた状態で検出されている。構築方法として両袖の端部に直方体の粘土を立て、その上端に直

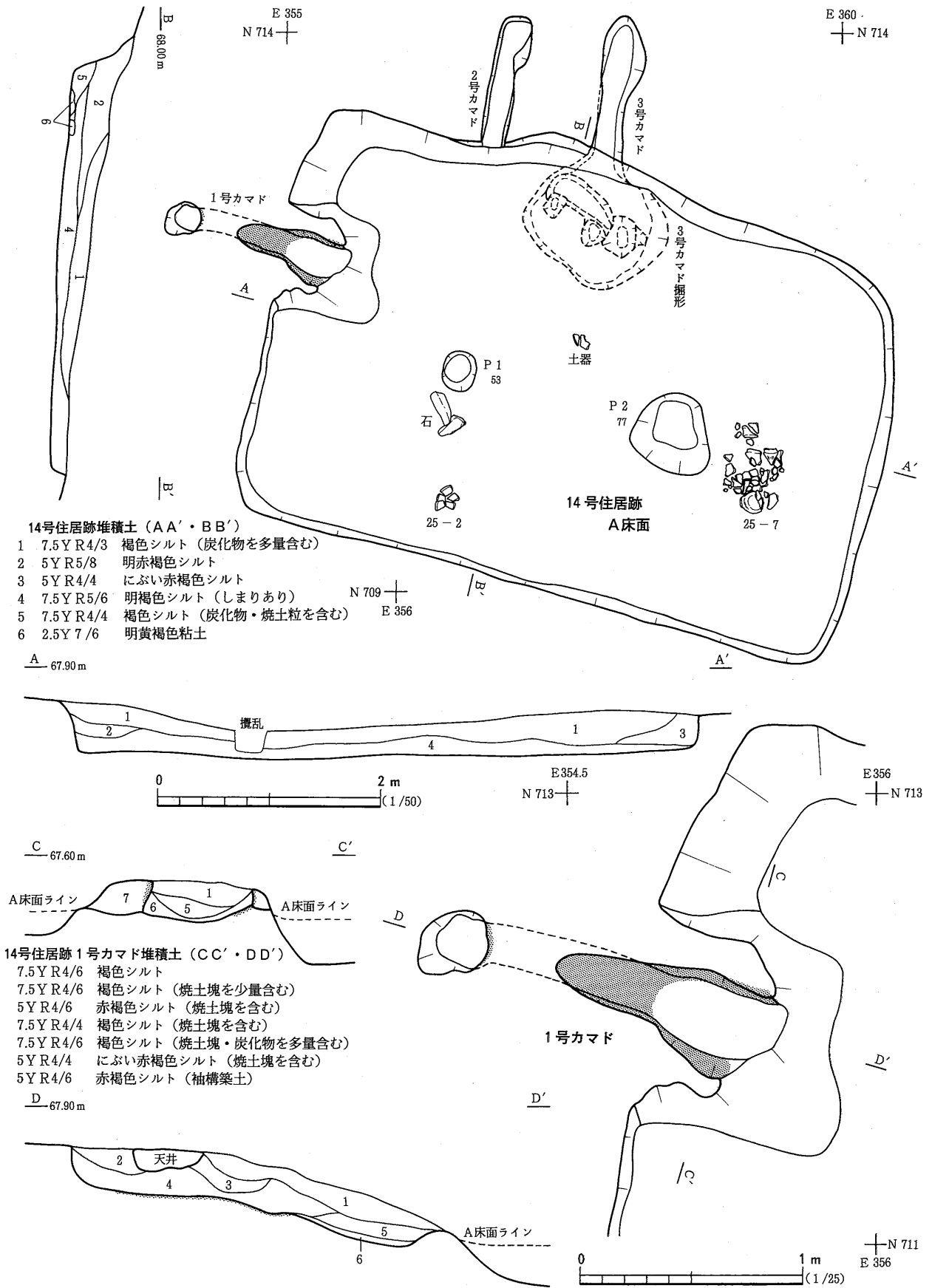


図22 I区14号住居跡A床面

第2節 竪穴住居跡

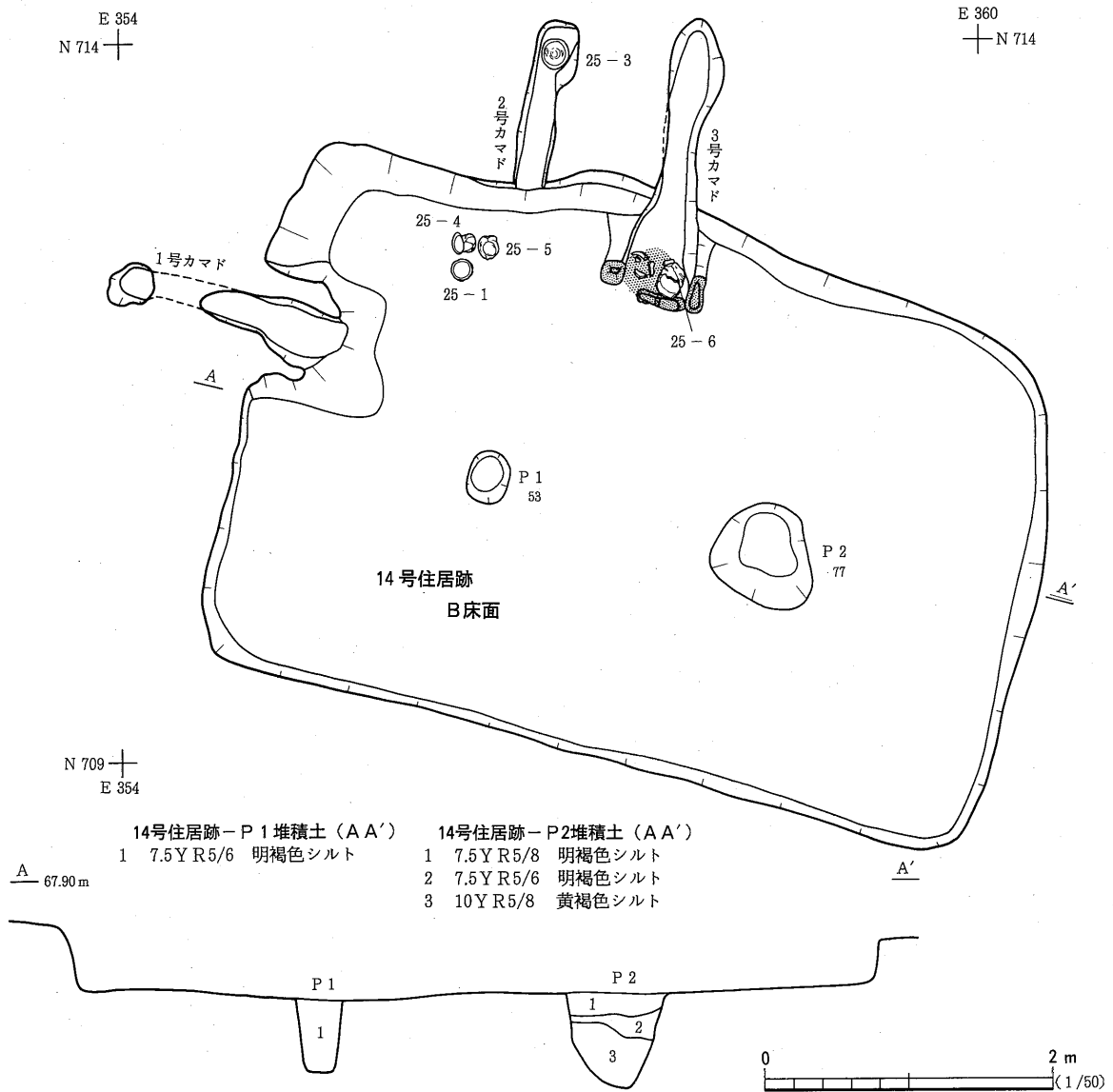


図23 I区14号住居跡B床面

方体粘土を掛け渡して焚口を作るものであるが、検出時には掛け渡した粘土はすでに崩れ落ちた状態であった。住居跡壁から端部の粘土までは明褐色土で袖を築いているが、基部のみが4～6cmの高さで遺存するだけである。燃焼部規模は焚口幅46cm、奥行き約50cmを測り、つぶれた甕の位置には2本の支脚が設置されている。煙道は下端幅15～25cmの間で北壁から住居跡外方へ向って120cm伸びており、底面は燃焼部と段差を持たず一連の緩い傾きで住居跡外へ向かって上っている。堆積土上層には天井を形成していた地山明褐色土がずり落ちて堆積していることから地下式であったと考えられる。なお、最終的に断ち割りを行ったところ床下には楕円形基調のカマド掘り形が確認され、袖端部の直方体粘土を据えた小穴も確認されている。

本住居跡にはさらに煙道だけが遺存する2号カマドが存在し、3号カマド西脇の北壁に最終床面より20cm高い位置から掘り込まれている。堆積土は上層に天井を形成していた明黄褐色土がやや

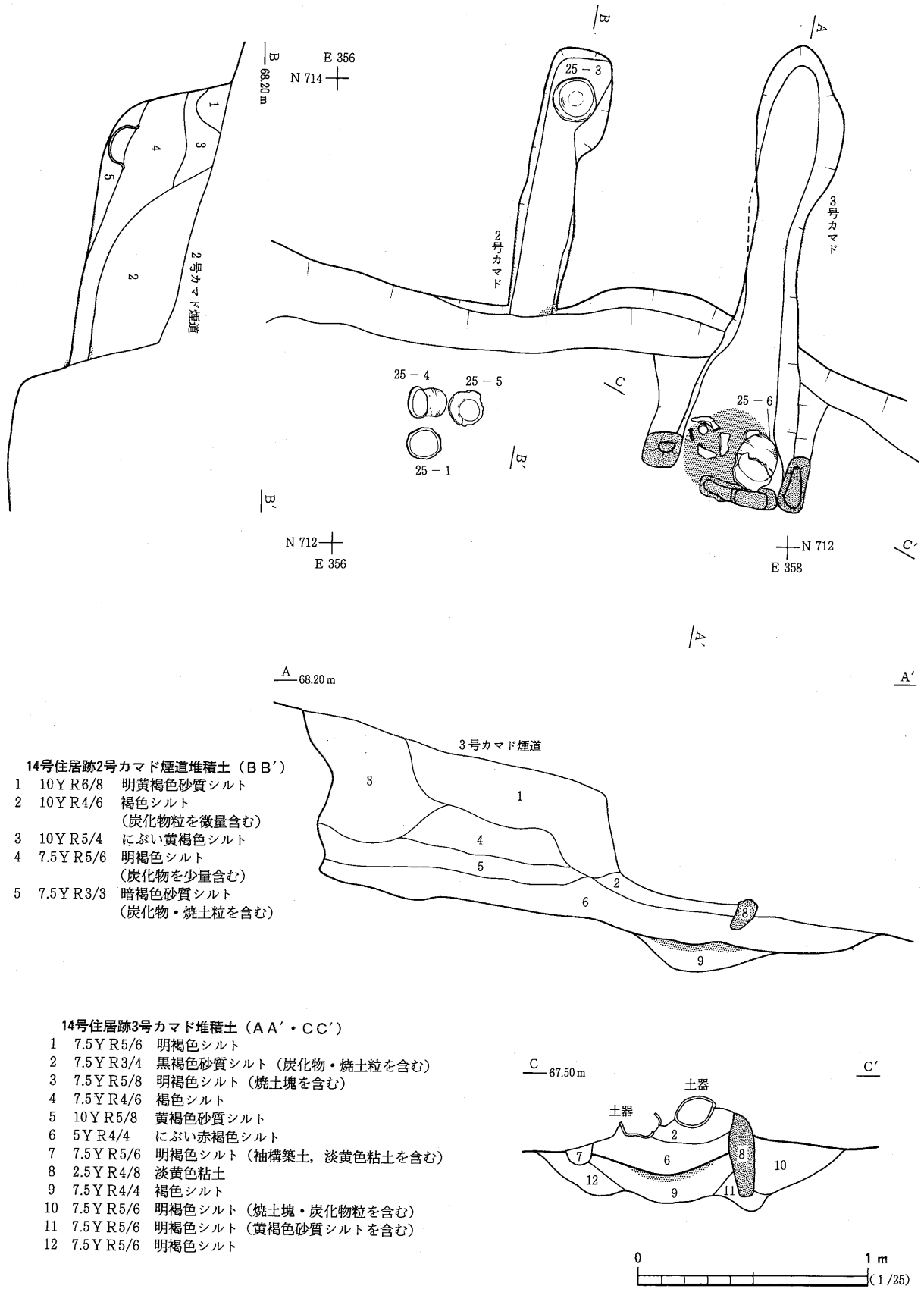


図24 I区14号住居跡カマド

第2節 竪穴住居跡

ずり落ちて堆積していることから地下式であったことが判断され、北端底面では完形の土師器鉢が検出されている。下端幅20cm弱、全長約120cmを測り、北壁から5cm程度入ったところまで酸化範囲が確認される。当カマドは最終床面との落差を考慮すると、A面に付属する可能性が高く、使用不可能になった段階で1号カマドを新築したものと思われる。

柱穴は東西軸線上で2基(P1・2)確認され、柱穴間は2mの間隔を持っている。西側に位置するP1は長径35cm、短径30cmの楕円形で深さ53cmを測り、P2は長径77cm、短径70cmの不整形で深さは77cmである。おそらく、この2本は棟木まで通っていたものと考えられる。

遺物 (図25, 写真91)

出土遺物には土師器・縄文土器・石製品があり堆積土及び床面で検出されている。図25-1・4・5は北西コーナーにおいて密接して検出されたもので、床面レベルからするとB面にとまなう遺物である。図25-1は丸底から内湾しながら立ち上がる口縁部を有す杯で、口縁部と体部との境には明瞭な段が認められる。口径14.8cm、器高3.9cmを測り、調整は口縁部ヨコナデ、体部から底部にはヘラケズリがみられ、内面はヘラミガキの後黒色処理が施されている。図25-5は小型の甑で口径16.2cm、器高11cm、底径6.9cmを測る。調整は口縁部ヨコナデ、体部外面にはハケメ、体部内面にはヘラナデが観察される。図25-4は小型の甕であるが、台状底部の内面が上げ底となり高台状を呈するのが特徴的である。口径13.8cm、器高15cm、底径6.8cmを測り、調整は口縁部ヨコナデ、体部外面にはヘラナデとヘラケズリ、体部内面にはヘラナデが観察される。全体的に火を受けてもろくなっており、大きさからカマドにおいて図25-5とセットで使用された可能性が高い。

図25-6は3号カマド内に2固体並列に設置されていたうちの東側のもので、西側のものはもろくてすべて復元できず図示できなかった。6は体部が直線的に外傾し口縁部が開くもので、火を受けてもろくなっている。口径18.8cm、器高17.6cm、底径5.9cmを測り、調整は口縁部ヨコナデ、体部外面にはハケメとヘラケズリ、体部内面にはヘラナデが観察される。

図25-2・3は鉢と考えられるもので、3が2号カマド煙道内より出土し、2がB床面よりやや浮いた状態で出土したものである。3は口径19.1cm、器高9.0cm、底径7.7cmを測り、調整は口縁部ヨコナデ、体部外面はハケメとヘラケズリがみられ、体部と口縁部の境には明瞭な段が形成されている。内面はヘラミガキの後黒色処理が施されている。2は口径21.6cm、器高11.2cm、底径7.8cmを測り、調整は口縁部ヨコナデ、体部外面にはハケメとヘラケズリ、体部内面にはヘラナデが観察される。

図25-7はP2の東脇においてB床面よりやや浮いた状態で出土したもので、最大径を胴部に有す大型の甕である。口径21.5cm、器高39.1cm、最大径32.9cmを測り、調整は口縁部ヨコナデ、体部外面にはハケメ、体部内面にはヘラナデが観察される。

図25-8は堆積土中から出土した滑石製品で、最大長3.1cm、最大厚0.45cmを測る双孔円盤である。ただし、研磨によって完全に角がとれているわけではなく多角形となっている。孔径0.2cm弱、孔間は1cm弱を測り、一方の孔の脇にはうがち損じた孔が微小なくぼみで認められる。本住居

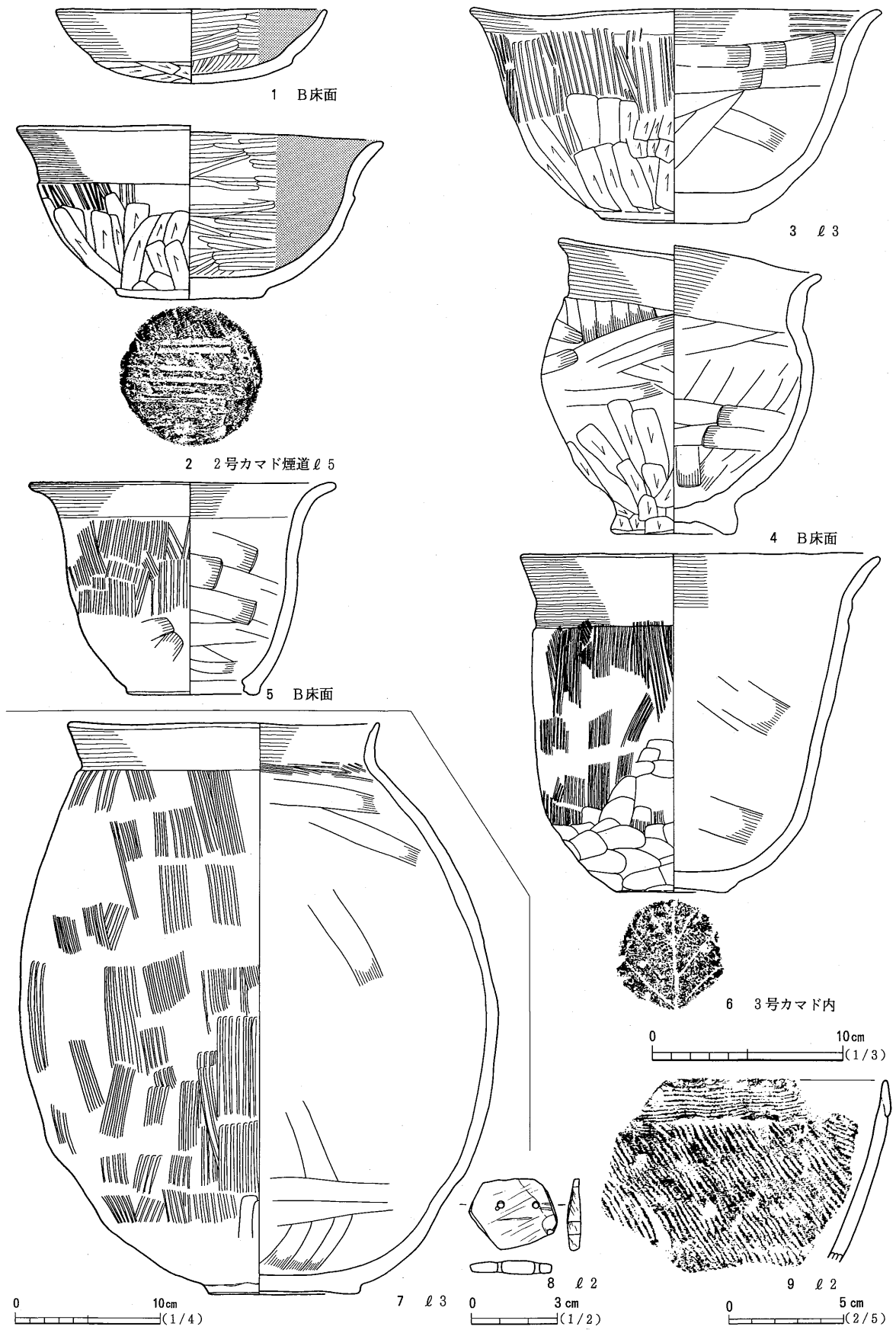


図25 I区14号住居跡出土土師器・石製品・縄文土器

第2節 竪穴住居跡

跡に伴う遺物とは考えられず、住居埋没時に混入したものと思われる。

図25-9は北壁側のℓ2から出土したものである。口縁部は折り返しによる複合口縁で横方向の撚糸文がみられ、体部は斜めの撚糸文が施されている。縄文晩期のものと考えられ、住居埋没時に混入したと思われる。

まとめ

本住居跡はカマドのあり方からすると3時期の変遷が認められ、床面も2面確認されている。下層面であるB床面の時期は出土土器から7世紀前半、上層面のA床面は7世紀中葉以降と考えられる。また、1号カマドには他の住居跡のカマドにみられるような灰白色粘土の使用が認められないことから、時期がやや下る可能性を指摘できる。(安田)

15号住居跡 S I 15

遺構 (図26・27, 写真21・22)

調査区東部のM3グリッドで検出された竪穴住居跡である。南西側が下がる比較的急な斜面に構築され、この地区の住居跡の中で最も西側に位置する。遺構検出面はLIVである。遺構検出の段階で木炭粒を含む暗褐色の範囲を確認し、広い範囲で何度か検出を行ったが明瞭な形が確認できないため、木炭粒範囲を掘り下げていった。

本遺構については、調査当初、床面で2基のカマドを確認し住居の拡張と考えて調査を行なったが、調査終了後に出土遺物などを検討した結果、A・B面でやや時期差のある重複と判断した。このため、新しい住居跡を15号A面、古い住居跡を15号B面として分けて説明するが、遺物については、取り上げに方に問題があるため、15号A・B面をまとめて説明することにする。

15号A面は、94・95・106・128・133・137号土坑の他3号性格不明遺構と重複しており、いずれの土坑より新しく、3号性格不明遺構より古い。遺構の東側では、3号性格不明遺構の掘り込みにより東壁を失い、また、傾斜面下にあたる南壁が確認されず、遺存状態は良好ではない。

遺構内堆積土は4層に細分される。ℓ1～3は凸レンズ状に堆積し、ℓ4は北壁の崩落土であるため、いずれも自然堆積土と考えられる。

平面プランは、木根による攪乱が部分的にあるものの遺存する壁から隅丸方形を呈するものと推測される。西壁の主軸方向は真北から34°東側に傾いている。大きさは、周壁遺存部で北壁5.00m、西壁3.75mを測る。周壁は、斜面上方側の北壁が最も残りが良く、遺存高は31～71cmである。床面は、細かい凹凸が認められるがおおむね平坦であり全体が、北側から南側に向って緩く下がっている。床面では、貼り床や踏み締まりが認められなかった。ピットは検出されていない。

カマドは北壁側中央で検出し、周辺から多くの土器が出土している。検出状態は、焚口部付近に白色粘土が確認され、燃焼部付近には、焼土化した範囲が確認された。木根より上面が全体的に攪乱されており、袖はわずかに遺存するだけである。規模は、焚口幅が50cm前後で、焚口から奥壁までの長さは80cmを測る。燃焼部の焼土化した範囲は33×46cmで、その厚さは最大8cmまで及

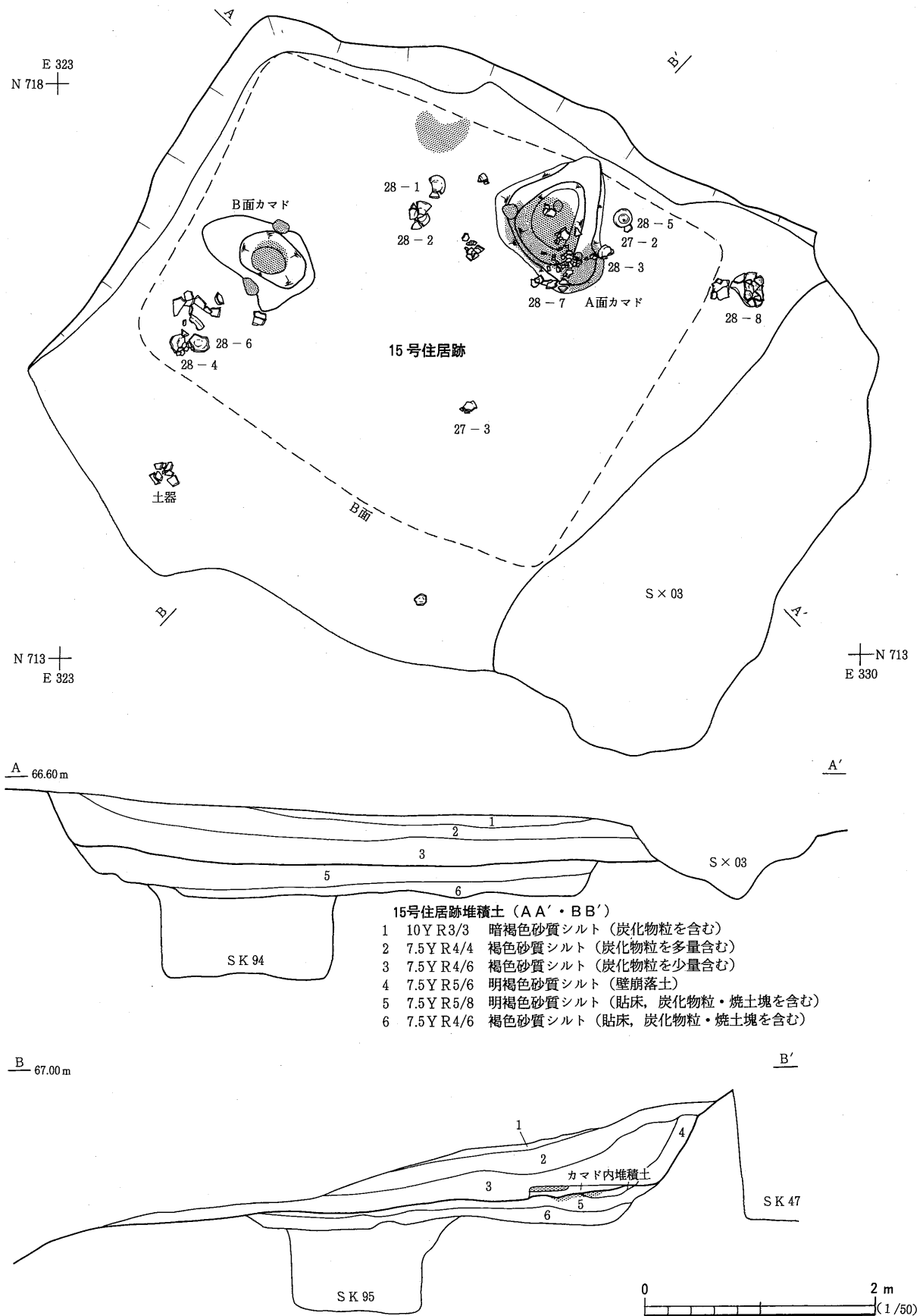


図26 I区15号住居跡

第2節 竪穴住居跡

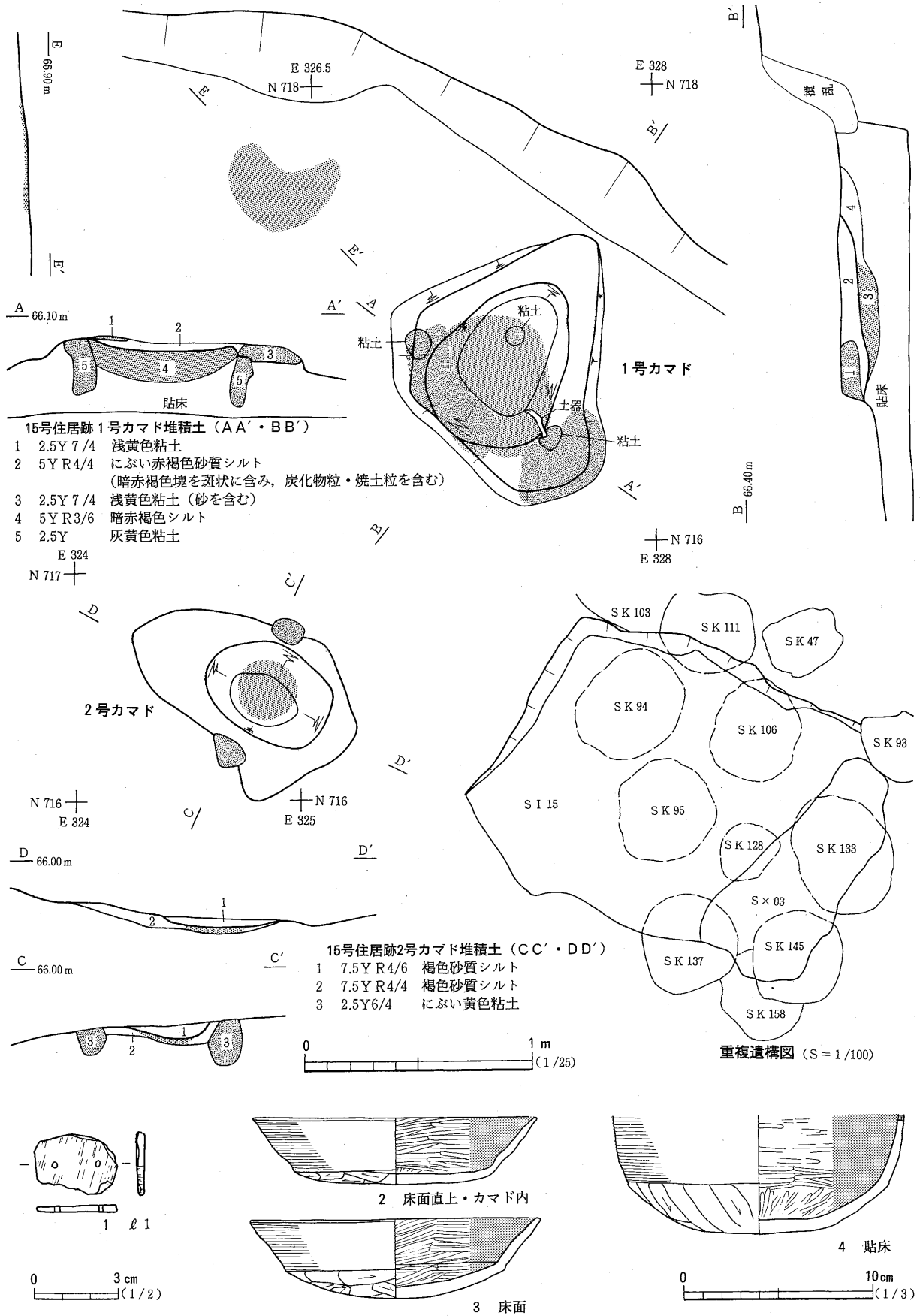


図27 I区15号住居跡カマド, 出土石製品・土師器

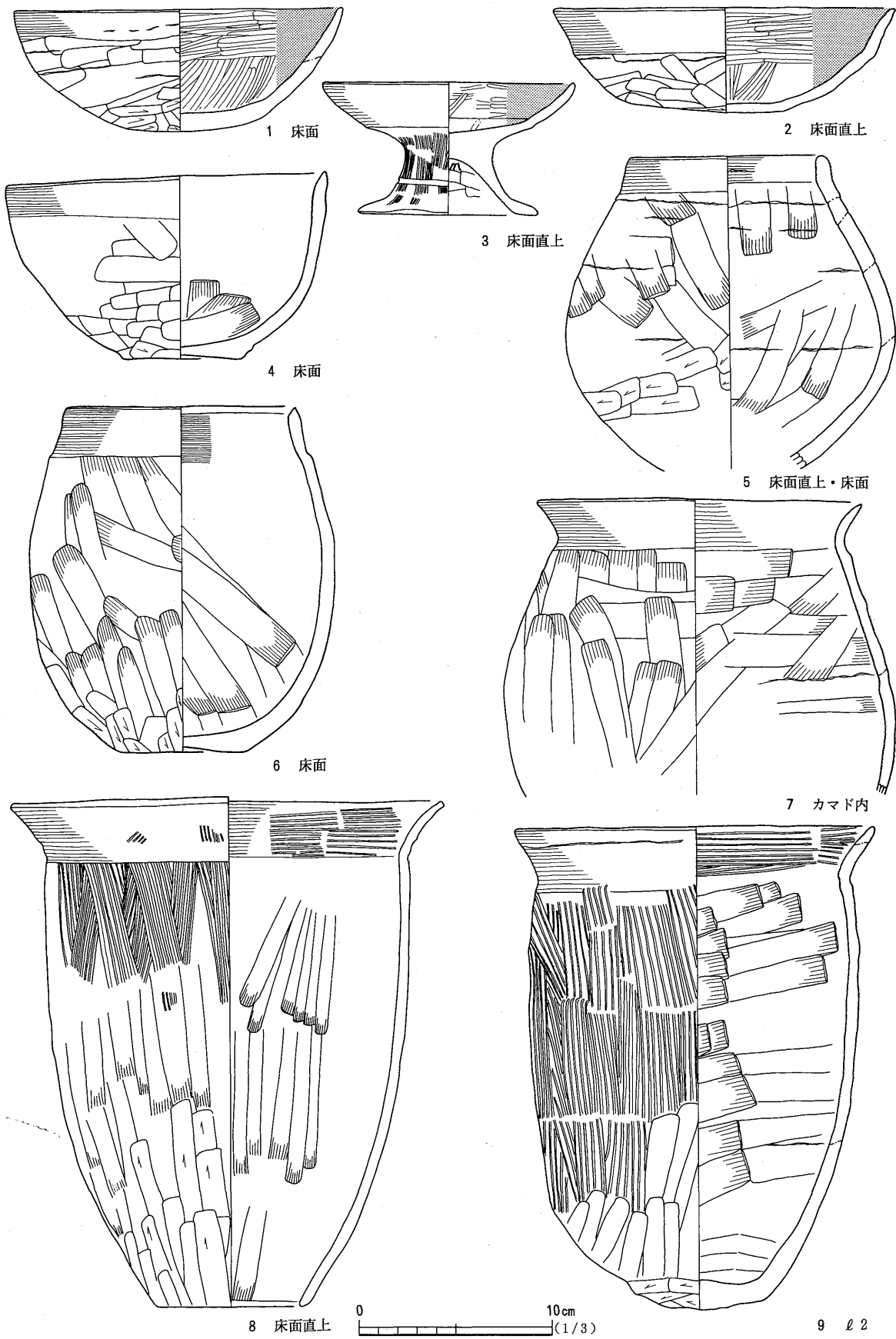


图 28 I区 15号住居跡出土土師器

第2節 竪穴住居跡

び、燃焼部底面は堅く締まりがある。燃焼部中央には、白色粘土で作られた円柱状の支脚が埋め込まれた状態で認められた。焚口付近の袖には、芯材として白色粘土が両側に埋め込まれている。煙道は確認していない。その他に、カマド北西側に焼土化した部分が24×44 cmの範囲で確認され、その厚さは3 cmまで及ぶ。

15号B面は、15号A面の下層で確認され、遺存状態は悪い。遺存部から復元される遺構プランは、推定ラインで図26に破線で示した。

堆積土は2層からなり、いずれも褐色系の砂質シルトからなるが、状況からA面で整地している可能性が考えられる。

平面プランは、遺存部から方形基調と推測され、規模は、東西壁4.34 m、南北壁3.48 mで、壁高は13～46 cmを測る。床面は、小さな起伏が認められるがおおむね平坦である。LIVを床面に使用しているが、貼り床や踏み締まりは認められなかった。ピットは検出できなかった。

カマドは西壁側で検出したが、燃焼部底面・カマド袖部の芯材・カマド掘り形が認められるだけで、遺存状態は悪い。燃焼部の焼土化した部分は、径26 cmの円形の範囲で確認され、その厚さは3 cmまで及ぶ。袖部の芯材は、15号A住居跡と同様に白色粘土からなる。

遺物 (図27・28, 写真92・93・108)

遺物については、15号A面・B面を合わせた点数で報告するが、明らかに分けることのできる遺物については、分けて説明する。

遺物は土師器片737点、滑石剥片262.4 gが出土している。15号A住居跡遺構に伴う遺物は、土師器があり、15号A面カマド西側から出土した2個、カマド東側から出土した5個である。15号B面に伴う遺物は、カマド南側の床面で出土した2個、住居跡中央の床面から出土した1個である。遺物は、主にℓ2と床面から多く出土している。このうち、図示できたのが図27-1～4、図28-1～9、である。

図27-2～4、図28-1・2は、土師器杯である。図27-2は、床面直上とカマド内から出土した土器が接合したものである。偏平な底部で、口縁部下端に弱い段をもち、口縁部が外傾する器形を呈する。調整は、口縁部外面にヨコナデ、体部から底部外面にはヘラケズリが加えられる。内面には、底部に放射状にヘラミガキ後、口縁部にかけて横方向のヘラミガキを行っている。また、内面には黒色処理を施しているが、再酸化により一部認められない部分がある。土器外面は摩滅・剥落が著しい。焼成は堅緻であり、橙色の色調を呈する。口径は15.0 cm、器高は3.5 cmを測る。3は、床面とカマド内から出土した土器が接合し、約半分が遺存する。丸底で体部上端に稜を持ち、口縁部がやや外反ぎみに立ち上がる。調整は、口縁部外面にヨコナデ、体部から底部外面にヘラケズリが加えられる。内面にはヘラミガキが加えられ、黒色処理が行われている。胎土は緻密で、焼成は堅緻であり、橙色の色調を呈する。底部外面と口縁部外面には黒斑が認められる。口径は15.4 cm、器高は4.2 cmを測る。4は、ℓ6から出土し約4割が遺存する。丸底で体部上端に弱い段を持ち、口縁部は直立ぎみに立ち上がる器形である。調整は、口縁部外面にはヨコナデ、体部から底部

外面には縦方向のヘラケズリが加えられる。内面には底部に放射状のヘラミガキ後、口縁部にかけて横方向のヘラミガキを行っている。また、内面に黒色処理が行われている。胎土には、土器焼成時に赤化した粒を多く含み、焼成は良好で、橙色の色調を呈する。残存器高は6.3cmを測る。図28-1・2は、床面から出土したものである。1は約7割ほど遺存し、2はほぼ完形である。1は底部から口縁まで半球状に立ち上がる器形で、2は丸底で体部上端に稜を持ち、口縁部がやや外反する器形である。調整は、口縁部外面にヨコナデ、体部から底部外面にヘラケズリが加えられる。内面にはヘラミガキが加えられ、黒色処理が行われている。外面には粘土帯の継ぎ目が認められ、器面は摩滅や剥落が著しい。内面の底面付近には使用痕と思われる傷が認められる。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で、橙色の色調を呈する。1の口径は17.1cm、器高は6.3cm、2の口径は18.7cm、器高は5.4cmを測る。

図28-3は土師器高杯である。床面から出土し約9割が遺存する。杯部の下端から口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、脚部は、裾部が強く広がる形態を呈している。

調整は、杯部の口縁部外面にヨコナデ、杯部内面にヘラミガキが加えられ、黒色処理が行われている。脚部外面には、脚柱から裾にかけて縦方向の目が細かいハケメを加え、脚部内面には、ナデツケ、ヘラナデが観察できる。色調は橙色に赤味がかっており、胎土は緻密で焼成は堅緻である。口径は13.2cm、器高は6.8cmを測る。

図28-4は、土師器鉢で口縁から体部の一部が欠けている。床面から出土し、約8割が遺存する。平底の底部から口縁部にかけて丸みを帯びて内湾する器形である。調整は、口縁部外面にヨコナデ、体部外面にヘラケズリを行っている。内面には、底部から口縁部にかけて摩滅が著しく体部下端のみにヘラナデが観察される。胎土は緻密で焼成は堅緻で、色調は橙色である。口径は16.7cm、器高は9.4cm、底径6.3cmは測る。

図28-5～7・9は土師器甕である。5・6は小型の甕で、5が底部、6が胴部と口縁部の一部を欠いている。5は胴部下端から胴部中位にかけて最大幅となり、胴部中位から口縁部にかけて内傾して口縁部が狭くなる器形を呈する。6は、5に比べ胴部に膨らみがなく、口縁部は狭くなる器形を呈する。調整は、口縁内外面にヨコナデ、胴部内外面にヘラナデを加えている。5には内外面に粘土帯の継ぎ目が残っている。また、外面は全体的に摩滅しているが、胴部下半と胴部から口縁部にかけての一部に黒斑が認められる。6の外面は胴部に火を受けた跡が認められ、内面には、ていねいな調整を行っている。5・6の色調は明るい橙色であり、胎土は緻密で焼成は堅緻である。5の推定口径は10.1cm、残存器高は16.2cmを測る。6の推定口径は11.8cm、器高は17.8cm、底径6.7cmを測る。7はカマドと床面から出土し、胴部上半の破片である。胴部がやや膨らみをもつ。調整は、口縁部外面にヨコナデ、胴部外面にはヘラナデ後ヘラケズリを行っている。胴部内面にはヘラナデを行っている。胴部下半外面は剥落が著しい。色調はにぶい赤褐色であり、胎土は緻密で焼成は堅緻である。口径は16.8cm、器高は15.3cmを測る。9は ℓ 2から出土し、約5割が遺存している。底部が丸みのある平底で、口縁が最大径の広口となる長胴形を呈する形態である。調整は、

第2節 竪穴住居跡

口縁外面にヨコナデ後に胴部外面にヘラナデを加え、胴部下半外面にヘラケズリが観察される。口縁部内面には、細かいハケメ、胴部内面にはヘラナデを加えている。底部には、ヘラケズリが観察されるが、底部が平らでないために立つことができない。色調は明るい橙色で、胎土は緻密で焼成は堅緻である。口径は18.6cm、器高は25.0cmを測る。

図28-8は無底の甑である。完形の状態で床面から出土した。口縁が最大径の広口となる長胴形を呈する形態である。調整は、口縁部外面にハケメ後ヨコナデ、胴部外面にはハケメ後ヘラナデを行ない、その後、胴部下端から上方に向かってヘラケズリが行なわれている。口縁部外面にハケメ後ヨコナデ、胴部内面には、丁寧なヘラナデを行っている。胴部外面の一部に黒斑が認められ、胴部下半から上半に摩滅・剥落痕が認められる。器厚は比較的薄い。色調はやや赤味を帯びた橙色であり、胎土には土器焼成時に赤化した粒を含み、焼成は堅緻である。口径は22.5cm、器高は26.4cm、底径7.1cmを測る。

ま と め

本住居跡は、2基のカマドを検出したことから住居の拡張があったものと判断して調査を行なったが、調査終了後に出土遺物から時間差のある2面として判明した。なお、遺物については、取り上げて2面の遺物が混同しているため、2つの住居跡をまとめて報告した。2軒面のカマド周辺から出土した土師器より、住居跡の所属時期は、7世紀後葉～8世紀初頭の中で推移したものと考えられる。(国 井)

16号住居跡 S I 16

遺 構 (図29, 写真23・24)

本遺構は、調査東部のM5・6グリッドから検出された竪穴住居跡である。地形的には、北側の山頂部より南側の沢方向に下る山の中腹部の緩やかな傾斜地に位置しており、遺構検出面はLⅢである。本住居跡の周囲には、北東側に12号住居跡、東側に14号住居跡、北西側に108号土坑の各遺構が隣接している。

遺構内堆積土は4層に区分される。各層位については、いずれも山側の北から南に向かって流れ込んだ自然堆積である。東側のみに見られる $\ell 1$ は、LⅢに近い褐色砂質シルトである。特に $\ell 2$ 層の暗褐色砂質シルトからは木炭粒が多量に出土している。また、締まりや粘性を持つ黄褐色シルトの $\ell 4$ は最大38cmと東西と南北とも壁際を中心に比較的厚く堆積し、中心部には見られない。

住居跡の平面形は方形で、各辺はやや膨らみをもっている。各辺の遺存する長さは、北辺が上端で342cm、東辺で300cm、西辺で260cm、南辺は床面で340cmである。主軸方位はほぼ真北を向いている。

周壁は北壁が60°西壁及び東壁がほぼ垂直に立ち上がる。南壁は東側の遺存する部分でごく緩やかに立ち上がる。各壁高は北辺が41.0～52.0cm、東辺が12.0～51.5cm、西辺が3.5～43.0cmであり、東壁と西壁は、北から南にかけて低くなる。南壁は、遺存する部分で2.0～5.0cmである。

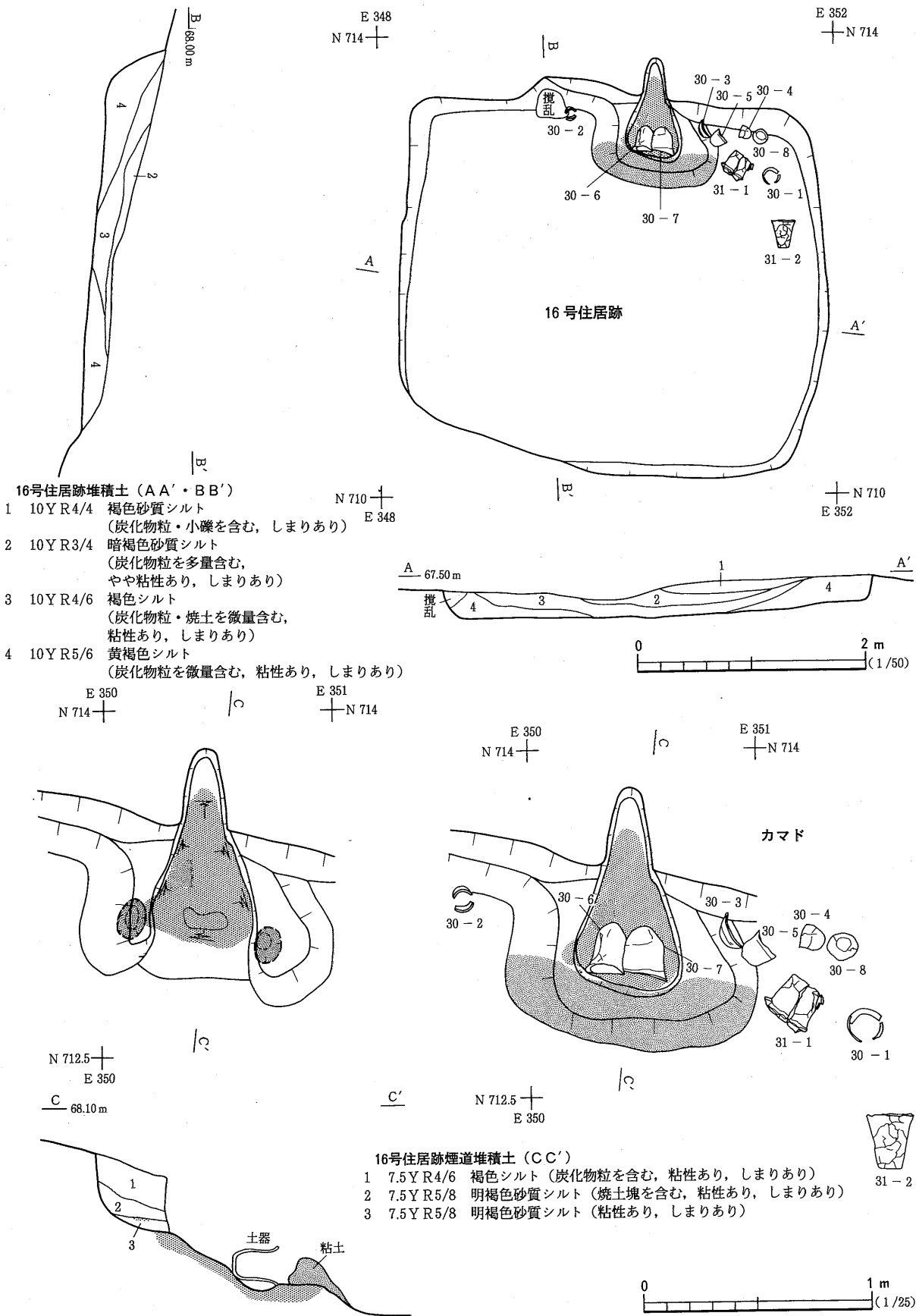


図 29 I区 16号住居跡

第2節 竪穴住居跡

北壁は、東西に著しい高低差は認められない。壁溝やピットは見られず、床面は平坦であるが、やや南に傾いている。カマドは北壁のほぼ中央部で検出した。カマドの全長は焚口より70.0cm、焚口幅52.0cm、奥壁までが65.0cmで、煙道の長さは北壁上端より35.0cmと比較的短い。その先端部に長径22.0cmの煙出し口がある。燃焼部はカマド内床部で幅45.0cm、煙道方向に65.0cm、外形はほぼ二等辺三角形を呈し、その酸化面の厚さは3.0cm～13.0cmである。支柱に使った粘土埋込穴の規模は、南北に長い楕円形で12.0cm×15.0cm、深さ4.0cmあり、支柱に支えられた粘土板はカマド焚口部分に崩落していたが、白色の粘性土で遺存値は、幅10.0cm×厚さ10.0cm×長さ100cmを測る。

カマド内で並列して図30-6・7の土師器甕が2点、口縁部を南側に向け倒れた状態で出土した。また、カマドの東側の北壁に沿った床面直上から小型の土師器鉢が3点出土した。図30-3、図30-5は口縁部を北東方向に向け横に倒れた状態で、また図30-4は口縁部を西に向け横に倒れた状態でそれぞれ出土し、カマドの東側の床面直上より土師器甕が3点出土した。図30-8の甕は口縁部を下に伏せた状態で北壁寄りに出土し、図31-1は口縁部を南西方向に向け横につぶれた状態で出土した。カマドからやや離れた東壁寄りに図31-2の甕が口縁部を北に向け横に倒れた状態でほぼ完形のまま出土した。更にカマドを挟んで東と西の床面直上にそれぞれ図30-2、図30-1の土師器杯がそれぞれ口縁部を上に向けた状態で出土した。遺物の出土状況についてはおおよそカマド内とその側の床面直上に限られる。

遺物 (図30・31, 写真93~95)

本住居跡からは、図示した他に土師器片148点が北壁沿いのカマドを中心に東側にかけて出土している。図30-6・7はともにカマド内から出土した土師器甕である。西側に位置する図30-6の甕は口縁部に最大径を有する長胴形を呈し、木葉痕が認められる平底の底部から緩く内湾しながら口縁部に続きその後強く外湾する。口径15.4cm、底径5.5cm、器高25.2cmを測る。調整は口縁部の内外面はヨコナデが入り、胴部外面の上半部はハケメ調整した後、下半部にヘラナデ調整を加えている。胴部内面の上半部に一部ハケメの痕跡が確認できるが、全体的に不明瞭であった。胴部内面の下半部は、ハケメ調整後のヘラナデが横方向に見られた。また、胴部中央付近の4か所で積み上げ痕を確認した。色調は明黄褐色に黒斑現象が内外面ともに見られ、胎土には小礫が少量見られる。図30-7はカマド内東側で出土した土師器甕で、器形は口縁部に最大径を有し、胴部が比較的短く、木葉痕が認められる底部から胴部に丸い膨らみを持ちながら口縁下部の稜線に続き、その後ゆるく外反する。口径19.0cm、底径6.8cm、器高21.5cmを測る。調整は、口縁部の内外面はヨコナデが入り、胴部外面は上下にハケメが走り、底部はその後ヘラケズリを入れ仕上げている。胴部内面は上半部を中心に横方向にヘラナデ痕が認められる。色調は橙色に黒斑現象が内外面ともに見られ、胎土には小礫が少量見られる。焼成は比較的良好である。

図30-3・4・5の土師器鉢と図30-8・図31-1・2の土師器甕はカマド東側の袖から東の床面直上にかけて検出され、カマド内の甕とともに本住居跡に伴う遺物と考えられる。図30-3は小型の土師器鉢でほぼ完形の状態出土した。器形は高台風に加工された平底の底部から内湾

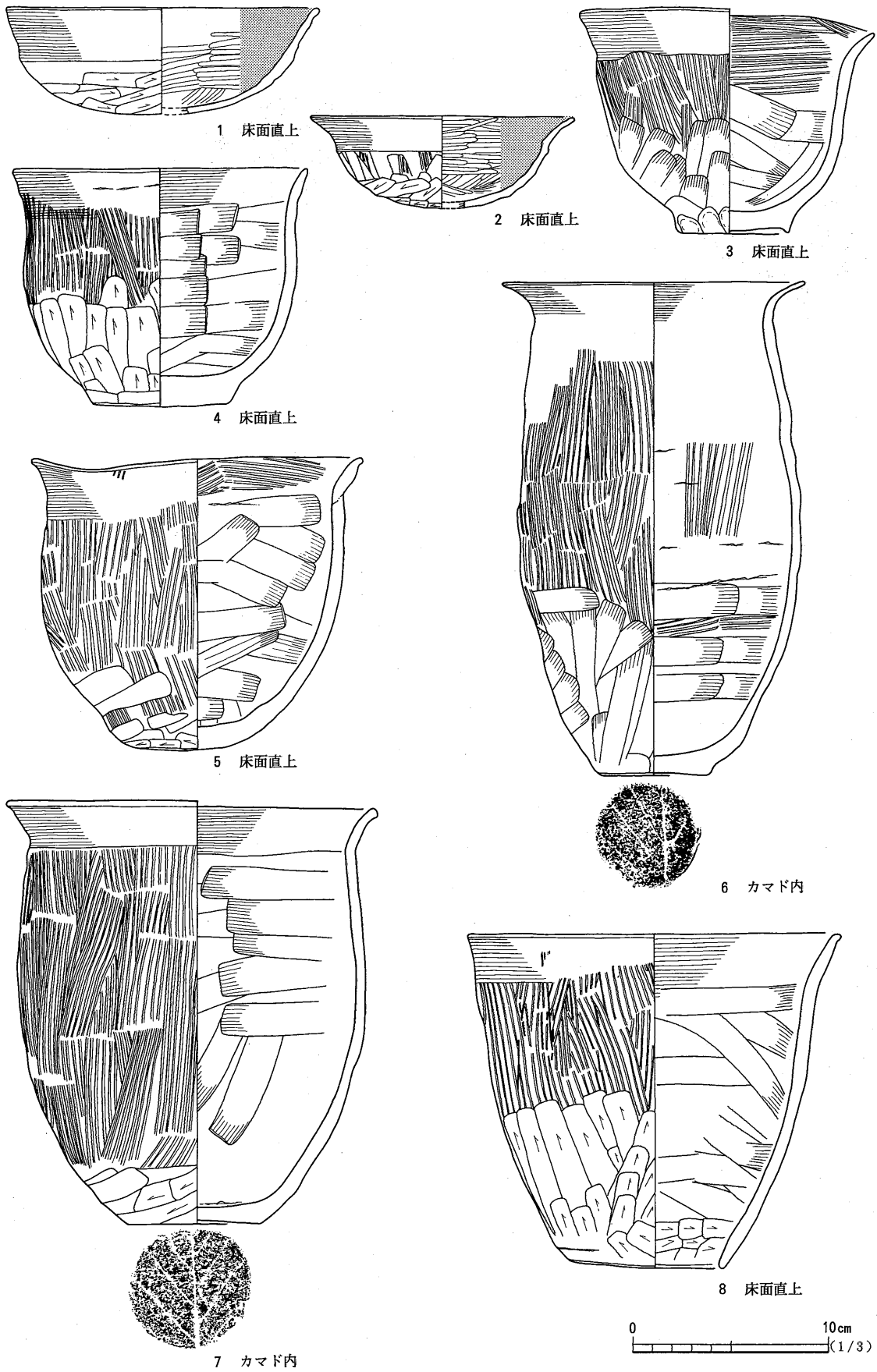


図30 I区16号住居跡出土土師器(1)

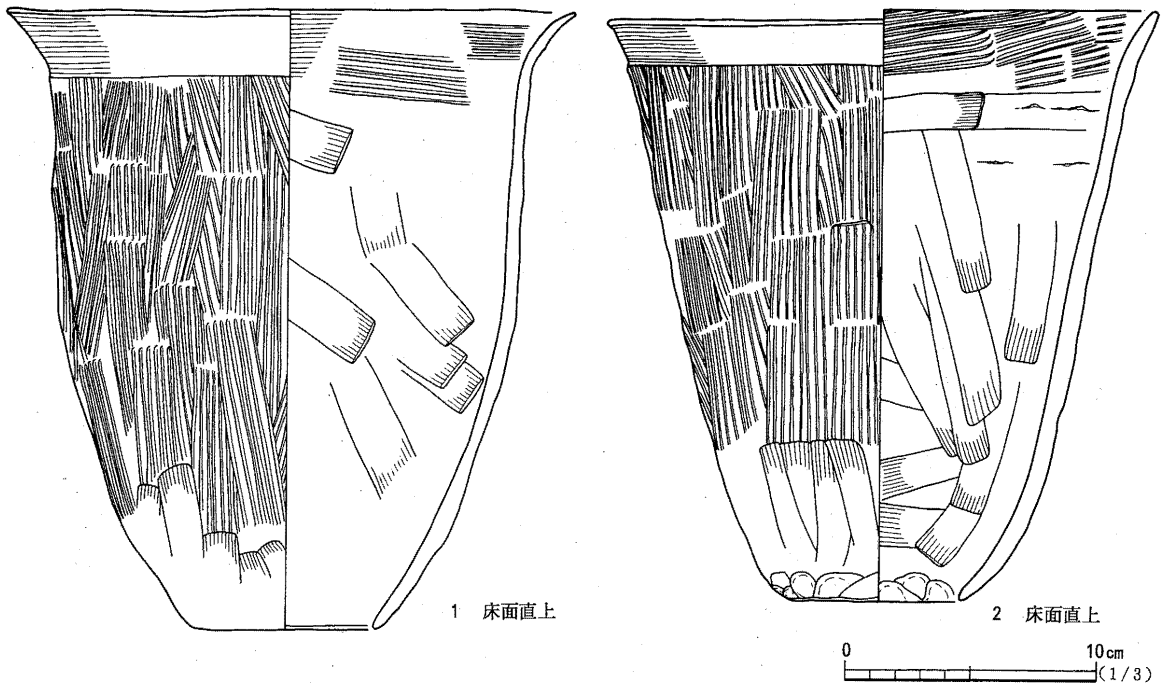


図31 I区16号住居跡出土土師器(2)

気味に外傾して口縁下部の稜線に続き、口縁でゆるく外反する。口径 15.1 cm，底径 5.8 cm，器高 11.4 cm を測る。器面調整は、口縁部外面はヨコナデ、内面はハケメ調整を施し、胴部外面はハケメ調整の後、胴部中央から下半部にかけて上から下にヘラナデ調整が入る。底部は更に指オサエ痕が認められる。胴部内面は口縁部から胴部上半部にハケメ調整し、その後下半部にヘラナデ調整痕が見られる。色調は外面が、にぶい赤褐色とにぶい黄褐色に黒斑が見られ、内面の色調はにぶい黄褐色を基調として黒斑と炭化物の付着が確認された。胎土は粗粒砂が見られ、焼成は比較的良好である。

図30-5は、図30-3の土師器鉢と並んで出土したもので、器形は底部から緩く内湾しながら立ち上がり、口縁部でゆるく外反する。口径 17.0 cm，底径 6.4 cm，器高 14.8 cm を測る。器面調整は口縁部の外面はヨコナデ調整、内面はハケメを入れ、胴部外面は上下をハケメ調整し、その後底部付近をヘラナデ及びヘラケズリで調整している。胴部内面は全面水平方向にヘラナデ調整が施されている。口縁下部に1カ所積み上げ痕が確認された。色調は外面がにぶい赤褐色と明赤褐色を基調で、内面は明褐色の胴部に一部黒斑が見られる。胎土は粗粒砂がまばらに見られるが、焼成はほぼ良好である。

図30-4は、土師器鉢である。カマド東側の床面直上から横に倒れた状態で出土した。器形は、図30-5の鉢に似ているが、図30-3の鉢の頸部に見られるような段がなく、胴部の外傾の開きも顕著でなく、厚みのある底部から口縁部にかけて緩い内湾を経た後、口縁部で直線的に緩やかに外反する。口径 15.2 cm，底径 6.8 cm，器高 15.2 cm を測る。器面調整は、口縁部は内外面ともヨコナデ調整が施され、その後胴部外面上半部はハケメ、下半部はヘラケズリ調整が下から上に入り、底部では更に横方向にヘラケズリをして器形を整えている。胴部内面はほぼ全体が横方向のヘラナデに

よる調整を受けている。色調は、外面が橙色の基調に黒色が部分混入し、内面は黒色である。胎土は粗粒砂が見られるが、焼成は良好である。図30-8は、北壁沿いの床面直上から口縁部を下に伏せた状態でほぼ完形のまま出土した土師器甑である。器形は口縁部に最大径を有し、無底の底部から直線的に外傾する胴部を経て、口縁部でごくわずかに外反する。口径19.2cm、底径7.9cm、器高17.0cmを測る。器面調整は口縁部の内外面がヨコナデ、胴部外面の上半部はハケメ調整の後、下半部にヘラケズリが下から上に入る。胴部内面はヘラナデを施した後、底部に水平方向にヘラケズリの痕跡が認められる。色調は外面が明赤褐色で、内面は明赤褐色ににぶい黄色を基調としている。胎土は粗粒砂をまばらに含み、焼成は良好である。

図31-1はカマド東側の床面直上から出土した土師器甑である。器形は口縁部に最大径を有し、無底の底部から長胴形の胴部中央にかけ緩やかに外傾し、その後垂直に立ち上り口縁部で更に深く外反する。口径22.6cm、底径7.2cm、器高24.8cmを測る。器面調整は口縁部の内外面がヨコナデで、その後内面にはハケメ調整が入る。胴部外面は上下にハケメで調整した後、底部に一部ヘラナデが入る。胴部内面は部分的にヘラナデ調整の痕跡を見ることができる。図31-2東壁に近い床面直上から出土した土師器甑である。器形は口縁部に最大径を有し、無底の底部から直線的に外傾して口縁下部の稜線部を経て、直線的に口唇部に至る。口径22.0cm、底径6.2cm、器高23.6cmを測る。器面調整は、口縁部の外面がヨコナデ、内面がハケメで処理されている。胴部上半部を中心に上下にハケメ調整を施し、下半部でヘラナデ、その後指オサエの調整が見られた。口縁部内面の下部付近には積み上げ痕が2か所確認された。色調は内外面とも橙色に黒色が混じり、胎土は粗粒砂が全体に見られ、焼成は比較的良好である。

図30-1・2の土師器杯は、それぞれカマド東の東壁とカマド西の北壁に近い床面直上からいずれも口縁部を上にして出土した。図30-1は有段丸底の土師器杯であり、底部が一部欠損しており遺存率は70%である。器形は丸底の底部から内湾して立ち上がり、口縁部の稜線で直線的に外傾する。口径16.0cm、遺存高5.5cmを測る。器面調整は口縁部の外面がヨコナデ、内面が一部ヘラミガキをし、体部外面は横方向にヘラケズリの調整が施されている。体部内面はヘラミガキ前に底部に一部ハケメが見られるが、全体としては口縁部と同様ヘラミガキの後、黒色処理が施されている。また、図30-2は有段丸底の土師器杯であり、底部が一部欠損しており、依存率は70%である。器形は丸底底部から内湾して立ち上がり、口縁部の稜線で緩く外湾する。口径は13.4cm、遺存高4.7cmを測る。調整は、口縁部の外面がヨコナデ、内面がヘラケズリが見られる。体部外面はハケメ調整の後、底部を中心に横方向にヘラケズリを施し、内面はヘラミガキで横方向に調整した後、黒色処理が施されている。外面の色調は橙色を基調にしており、胎土は粗粒砂が含まれるが、焼成はほぼ良好である。図示した10点の土師器はいずれもほぼ完形に近い形で出土し、その出土状況から住居跡に伴う遺物と考えられる。

ま と め

本住居跡は、タタラ山の中腹南斜面に位置し、隣接する12号住居跡や14号住居跡に比べ小規模

第2節 竪穴住居跡

な遺構である。北側にやや張り出す北壁を有し、壁のほぼ中央に煙道の短いカマドを持つ他は、これに付随するようなピットや溝などの施設が見られない非常にシンプルな造りの竪穴住居跡である。本住居跡に伴う遺物は、カマド内とその東脇の床面直上からまとまって出土した。土師器甕・甑・鉢・杯など関係品10点から、その時期については7世紀前葉であると考えられる。(高村)

17号住居跡 S I 17

遺 構 (図32, 写真25・26)

調査区のL・M5グリッドに位置し、東部斜面中央部の中腹から検出された竪穴住居跡である。検出面はLIV上面である。10号住居跡調査時に設定したトレンチを掘り込み中に、北壁側に重複して、本住居跡の床面を検出した。土層観察の結果、本住居跡より10号住居跡が新しく、46・60号土坑が古いことが判明した。

遺構内堆積土は3層に分かれ、斜面上位から流れ込んだ自然堆積の状況を呈する。ℓ3には炭化物が混入している。この炭化物は床面上に散らばっていた。

住居プランはほとんどが10号住居跡によって壊されているため、住居跡の北側約1/5しか遺存していない。北壁と遺存する東壁・西壁から、方形基調のプランが推定され、規模は北壁で4.5mを測る。遺存する北壁の主軸方向は真北に対して東に約110°傾いており、遺存する最大壁高は78cmを測る。

床面はほぼ平坦であり、壁溝が住居跡の北壁から東壁に沿って検出された。幅20cm、深さ8cmで、断面形は鍋底状を呈している。住居跡東側寄りに壁溝から直角に南側に延びる溝を検出している。幅22cm、深さ13cm、遺存長45cmである。溝の性格については、遺存している部分が少なく、明確にはできない。

遺物は、ℓ2から流れ込みと考えている土師器杯(図32-1)と床面より須恵器高杯(図32-2)が、横に倒れた状態で出土しており、杯部内にはLV塊を含んだ明褐色砂質シルトが入り込んでいる。

遺 物 (図32, 写真95・96)

図32-1は、ℓ2より出土した土師器杯で、ほぼ完形に近い。器形は丸底で、口縁部は、直立ぎみに立ち上がり、口唇部が軽く外反する。内面は、口縁部がヨコナデ、体部がヘラナデを施した後、ヘラミガキを施している。口縁部にも一部ヘラミガキが施されている。外面は、底部がヘラケズリ、体部がヘラナデを施した後、ヘラミガキを施している。口縁部はヨコナデである。口径13.1cm、器高7.9cmである。

図32-2は、床面より出土した須恵器無蓋高杯で、ほぼ完形に近い。杯部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁部が外反し、口縁部外面に段を持つ。体部外面に波状文がみられ、波状文の下に沈線を描き、底部にカキ目調整がみられる。杯部内面は、窯変のため色調が橙色になっている部分があり、底部が特に顕著である。脚部は、杯部の底部より外反しながら広がり、端部下端に段を持ち、やや

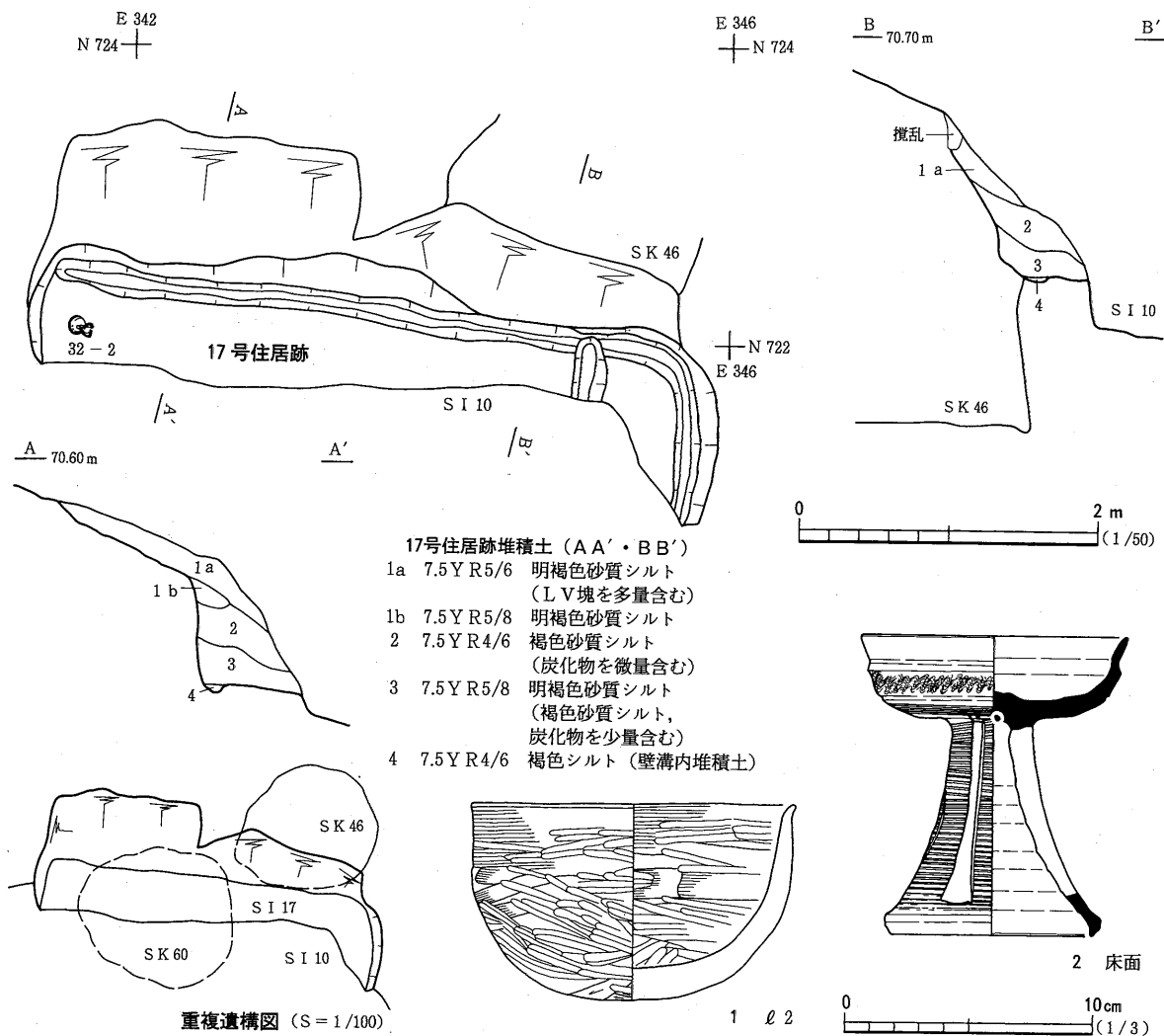


図32 I区17号住居跡，出土土師器・須恵器

内側に折り返している。段の上方には、沈線を持つが、窯変によるガラス質化が顕著なため不明瞭である。杯部と脚部の接合後、三方向に透かしを入れている。脚部の端部から杯部の方向に向かってカキ目が見られる。透かし切り込み時の、はみだした粘土を削り取った痕跡が外面に残っている部分もあるが、内面ではその痕跡はみられない。透かしの位置は、同間隔ではなく、端部の中心線上で二つの透かしを入れた後、幅の広い方に残りの透かしを入れたことがうかがえる。透かしの間には、ヘラ状工具による縦の沈線が三方向に入っているが、一方向は、窯変のため不明瞭である。色調は、外面は、暗青灰色をしているが、欠損している断面の色調は、暗赤灰色を呈している。口径10.7cm，器高12.0cm，底径8.1cmである。胎土分析をおこなった資料である。

本住居跡からは、図示した以外に、土師器片18点，滑石片142.0g出土している。

まとめ

本住居跡は、重複する10号住居跡により、その大半を失っている住居跡であるが、床面で壁溝を確認している。床面より出土した高杯はMT 15～TK 10に比定され、6世紀前半の時期が与え

第2節 竪穴住居跡

られる。また壁面が軽く酸化し床面近くに炭化物が多く混入していることや、他の同じ時期の住居跡の状況を考慮すると火災にあったものと想定される。また、重複関係を考慮すると10号住居跡の北側より出土した遺物は、17号住居跡に伴うものと考えている。(大竹)

18号住居跡 S I 18

遺 構 (図33・34, 写真27・28)

本住居跡はM4グリッドとN4グリッドにまたがって検出され、27号住居跡の北東コーナーを壊して西壁が築かれている。また、当グリッドは大型円形土坑の密集区であり、122号土坑を初めとして多数の土坑が当住居跡下層から確認されている。

検出面はLⅢ赤褐色土面であるが、南辺ラインは浸食による急崖に消えており、長年の崩落によって南壁は失われたものと判断される。遺構内の堆積土状況からすると、初めに褐色砂質土が多量に流れ込んだ後、続いて有機質を比較的多く含む土が流入したことを知ることができ、特に堆積土内に含まれる炭化物は斜面上位にある火災住居(17・23号住居跡など)に起因する可能性が高い。

全体の平面形は方形基調であり、下端ラインでの規模は東西軸4mを測り、南北軸は南側の床面が遺存する部分までの長さで2.8mである。壁高は斜面上位の北壁で140cmの高さまで認められる部分があるが、床面からの立ち上がり急勾配である部分は50cm前後の高さであり、そこから上位はやや緩い勾配となっている。堆積土の状況からすると構築当初から段階的に掘り込まれたものと考えられる。東壁及び西壁は、北壁側から斜面の傾斜に従って高さを減じている。

床面は北壁よりの部分ではI区の基盤である黄褐色砂岩が表れているが、中央から南側では下層に土坑が多数存在する関係で褐色土基調となっている。床面全体としての締まりは弱いですが、カマド周囲においては焼土粒を含む土が締まりの強い状態で確認されている。

カマドは北壁の北西コーナーよりの部分に位置し、住居プラン内に燃焼部を持つ両袖タイプのものである。本遺跡の住居跡に特徴的に見られる両袖の端部に直方体の粘土を立て、その上端に直方体粘土を掛け渡して焚口を作るものであるが、検出時は焚口自体がかなり崩落しており、袖部を断ち割った土層観察でそのことを明確にすることができた。袖によって確保された燃焼部は、下端ラインで焚口幅約50cm、奥行き約75cmを測るが、燃焼部壁は比較的残りの良い袖基部で20cm弱の高さしか遺存しておらず、崩落している焚口付近の高さは不明である。煙道は、明確な遺存部としては燃焼部奥壁から35cm伸びた部分までしか確認できなかったが、本来は住居プラン外に伸びていた先端部が崩落したものと考えられる。なお、燃焼部には土師器の甕2個体が並列して据えられており、甕の前面となる焚口底面は火を受けて強く酸化しているのが観察された。

遺 物 (図34・35, 写真96・97)

出土遺物には土師器と鉄器があり堆積土及びカマド・床面で検出されている。図34-2はカマド脇において床面よりやや浮いた状態で出土した大型の杯あるいは鉢で、口縁部と体部の境には明瞭な段が認められる。復元口径21cm、残存高6.8cmを測り、調整は口縁部ヨコナデ、体部から底部

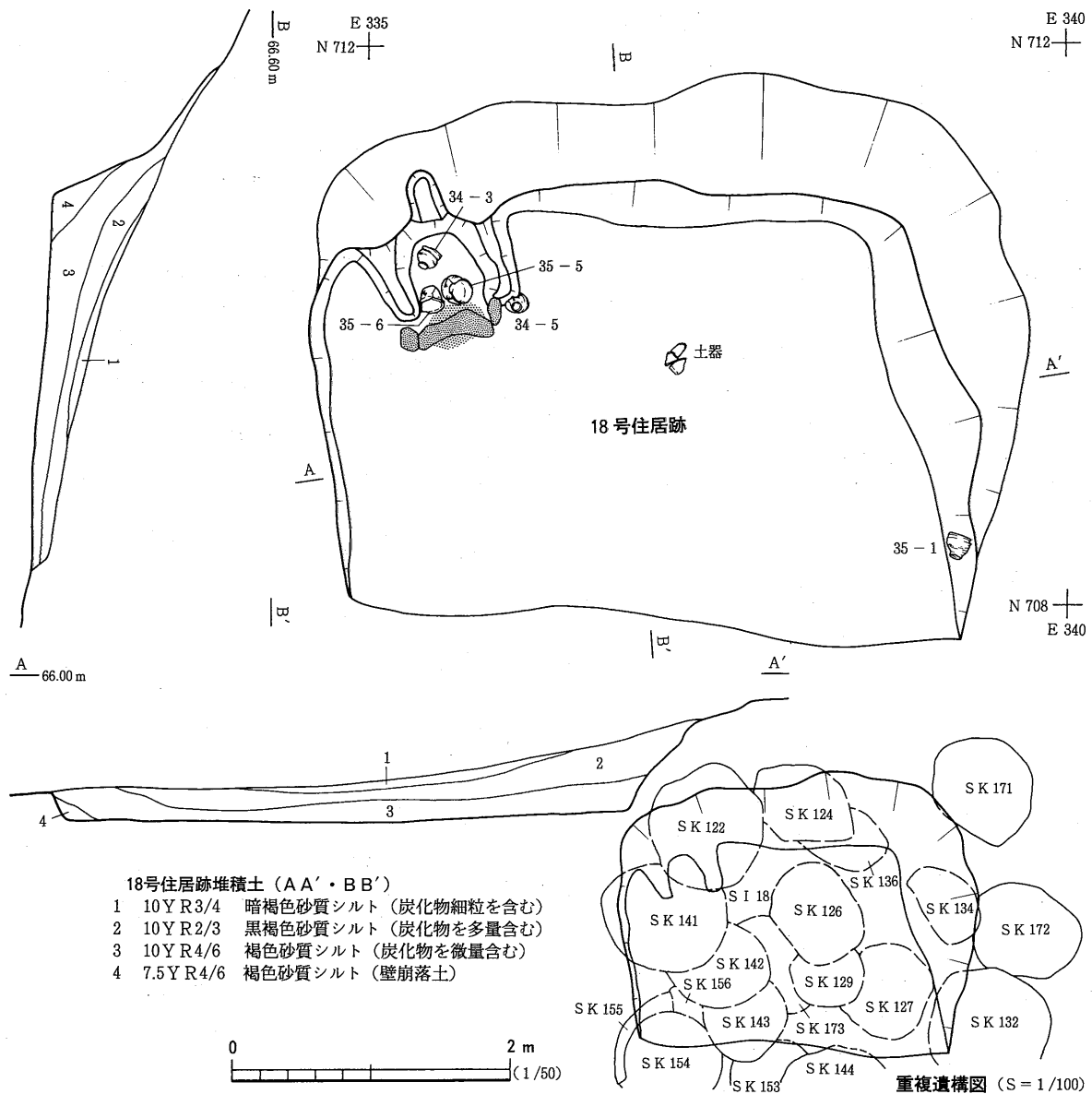


図33 I区18号住居跡

にはヘラケズリがみられ、内面はヘラミガキの後黒色処理が施されている。

図34-3・4・5は上げ底の台状底部を有す小型の甕で、3点ともカマド周辺から出土している。4はカマド検出時に出土したもので口縁部と体部の境には明瞭な稜が認められる。口径16.4cm、器高14.1cm、底径6.8cmを測り、調整は口縁部ヨコナデ、体部外面にはヘラナデと指によるオサエ、体部内面にはヘラナデが観察される。3はカマド内堆積土上層から出土したもので、火を受けてもろくなっている。口径14.1cm、器高12.8cm、底径5.6cmを測り、調整は口縁部ヨコナデ、体部外面にはハケメ、体部内面にはヘラナデが観察される。図34-5はカマド右袖脇から出土したもので、口径16.6cm、器高14.8cm、底径7.0cmを測り、調整は口縁部ヨコナデ、体部外面にはハケメ、体部内面にはハケメとヘラナデが観察される。

図35-1・2・3は小型の甕であるが、それぞれ異なる特徴を有している。1は住居跡東辺の

第2節 竪穴住居跡

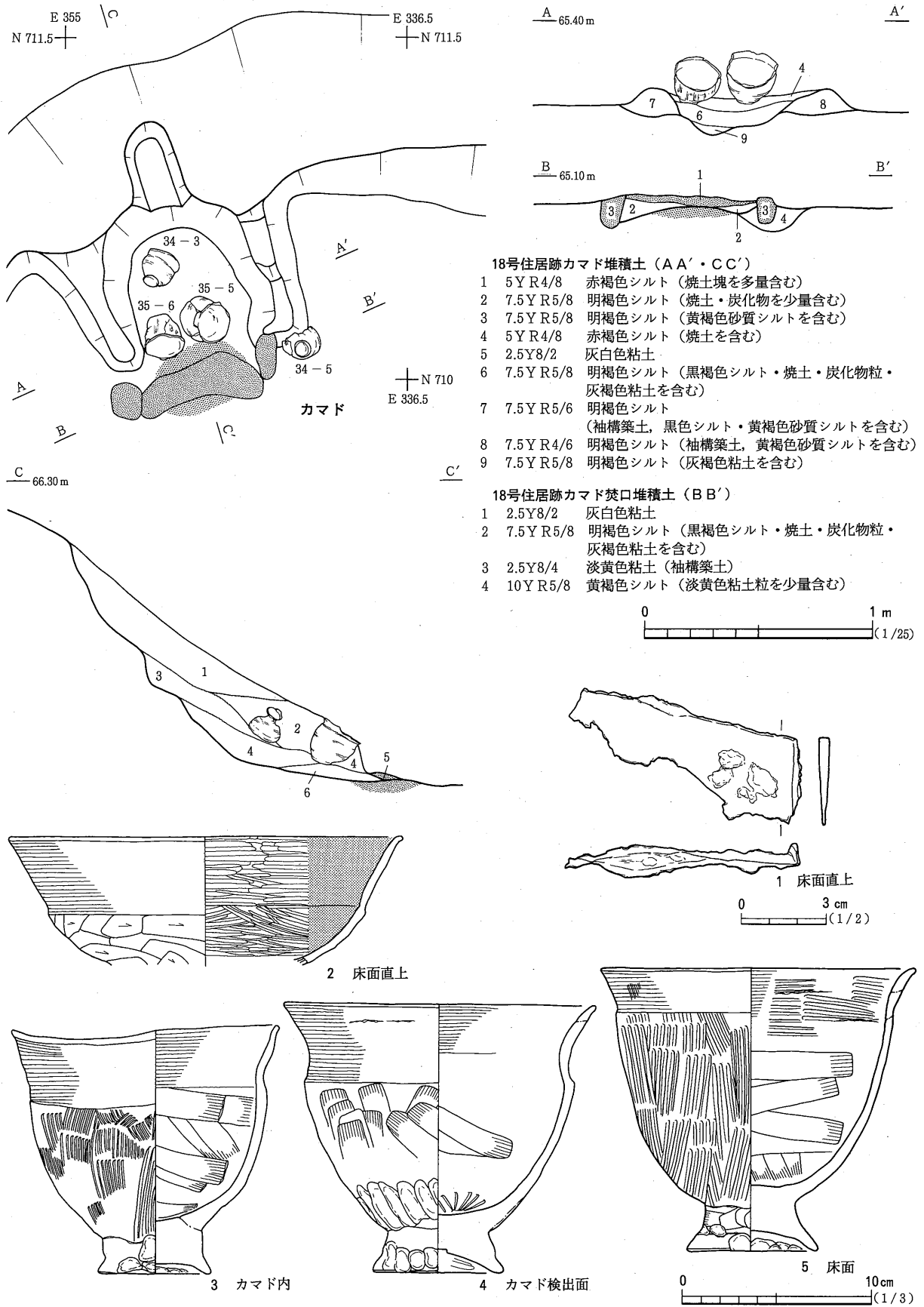


図34 I区18号住居跡カマド, 出土鉄製品・土師器

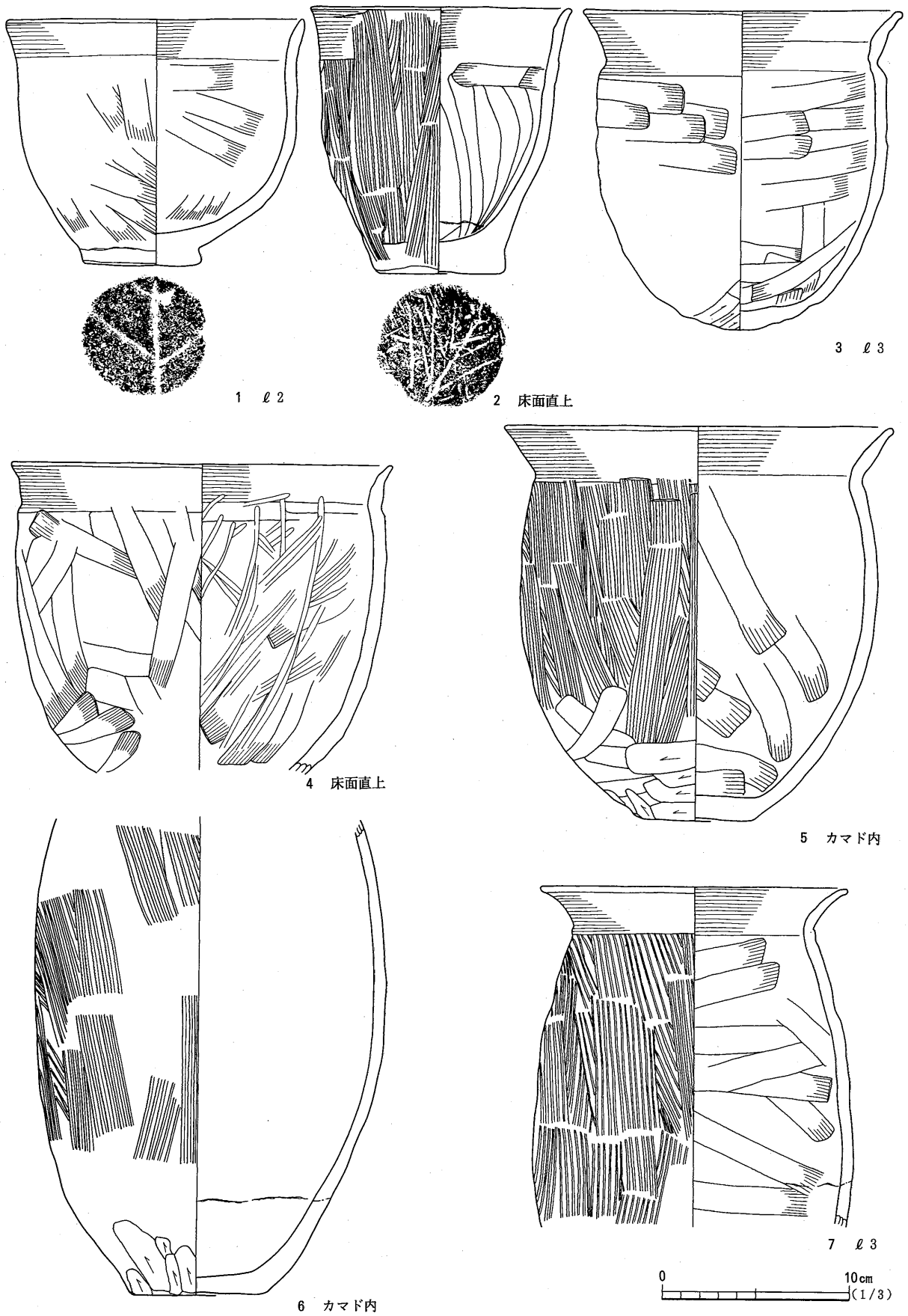


图 35 I区 18号住居跡出土土師器

第2節 竪穴住居跡

壁際からやや浮いた状態で出土したもので、火を受けた痕跡が認められる。口径16.0cm、器高13.1cm、底径6.2cmを測り、調整は口縁部ヨコナデ、体部にはヘラナデが観察される。2は住居跡北東コーナーよりの床面で確認されたもので、口径14.0cm、器高14.1cm、底径6.6cmを測り、調整は口縁部ヨコナデ、体部外面にはハケメ、体部内面にはヘラナデが観察される。3は住居跡内堆積土最上層から出土したもので流入の可能性が高い。ヘラケズリによって丸底風に仕上げているのが特徴で、口径17.1cm、器高17.0cmを測り、調整は口縁部ヨコナデ、体部にはヘラナデが観察される。

図35-5・6はカマド内に2個体並列に設置されていた甕で、6は頸部から口縁部を欠いている。図35-5は口径20.7cm、器高21.0cm、底径5.9cmを測り、口径と器高の差がほとんどないので焚口側の側面が、火を強く受けている。調整は口縁部ヨコナデ、体部外面にはハケメとヘラケズリ、体部内面にはヘラナデが観察される。6は長胴のもので全体が火を受けてもろくなっており、調整も外面のハケメとヘラケズリが部分的に観察されるだけである。残存高25.3cm、底径7.0cmを測る。図35-7は住居跡内堆積土第3層から出土したもので、長胴の甕である。口径16.4cm、残存高17.9cmを測り、調整は口縁部ヨコナデ、体部外面ハケメ、体部内面にはヘラナデが観察される。

図35-4は床面より出土したもので底部付近を欠くが甕と考えられる。口径20.4cm、残存高16.4cmを測り、調整は口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラナデ、体部内面にはヘラナデの後にやや雑なヘラミガキが観察される。

図34-1は床面から出土した鉄製の鎌で、先端部は欠損している。基部には装着のための折り返しがあり、基部から先端部に向かって徐々に身幅を減じ、刃部側がわずかに湾曲し背側は刃部に比べて直線的である。遺存長9.1cm、基部幅2.9cmを測り、欠損部断面の観察では折り返し鍛練がうかがわれる。

ま と め

本住居跡は調査区南側の急崖間近に位置しており、住居跡南辺は流出して失われている。現在の状況からすると住居を構築するには不適當な立地と思われるが、当時はまだそれほど浸食が進んでおらず、南側に余裕があったものと考えられる。遺物はカマド周辺を中心にまとめて出土しており、その特徴からすると7世紀後半の時期が考えられる。(安田)

19号住居跡 S I 19

遺 構 (図36・37, 写真29・30)

調査区東部のM3・N3グリッドで検出された竪穴住居跡である。南西側が下がる急な斜面に構築されている。遺構は、伐採木搬出に伴う掘削により住居跡の約半分が失われているため依存状態が悪い。掘削された断面で確認され、遺構掘り込み面はLIVである。遺構のプランは、明瞭な形が確認できなかったが、木炭粒を含む範囲で確認された。42・43・135号土坑と重複しており、いずれも床面で検出していることから本遺構より古い。本遺構では、北壁中央部と東壁よりの床面で2基のカマドを検出した。それぞれの検出したレベル差とカマドの依存状態から判断して、北壁側に

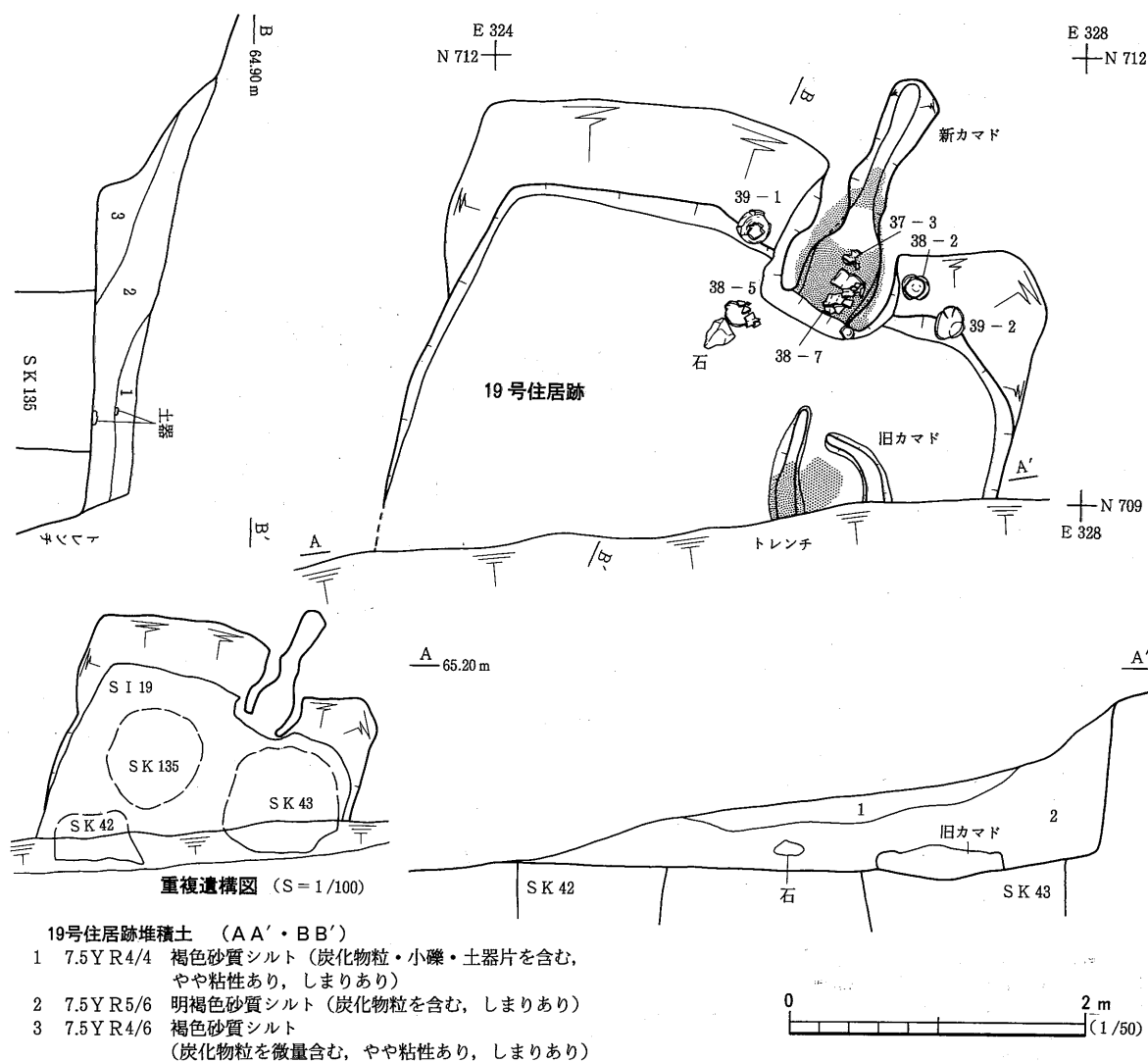


図 36 I区 19号住居跡

取り付くカマドの方が新しい。断面で確認したカマドは、レベル差から見て、床下に遺存していたと思われる、遺存状態も悪いことから住居跡の拡張が行なわれたものと考えている。ただし、平面と断面観察から遺構の切り合いが確認できなかったため、本遺構では1軒の住居跡として報告する。ここでは、北壁側のカマドを新カマド、床面検出のカマドを旧カマドとして説明する。

遺構内堆積土は、3層に細分される。③は、LIVに相当する黄褐色砂質シルトが壁際に堆積する壁の崩落土で、いずれも自然埋没状態を示している。

遺構は遺存する壁から隅丸方形を呈する住居跡と推測される。西壁の主軸方向は、真北から26°東に向って傾いている。規模は、北壁3.80m、遺存西壁2.38m、遺存東壁0.72mを測る。周壁は、LIV・Vを掘込んでおり、LVまで達する部分は壁の形状を良くとどめている。斜面上方の北壁が最も遺存しており、壁高は北壁で74～83cmを測る。床面は、LVを使用し細かい凹凸が認められるがおおむね水平である。ピットは検出できなかった。

新カマドは住居跡の北壁中央で検出し、遺存状態は良好である。カマドの規模は、焚口部から奥

第2節 竪穴住居跡

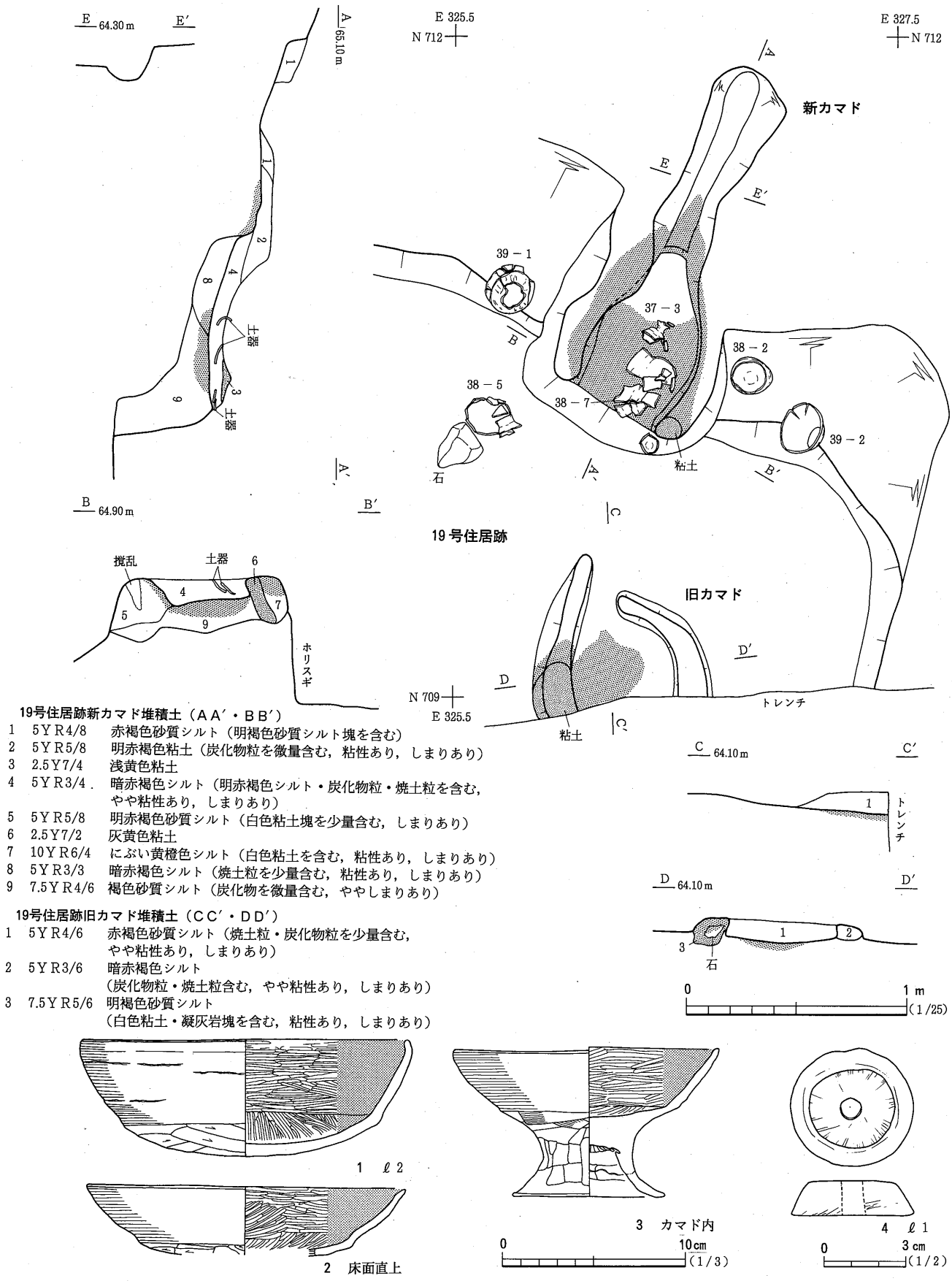


図37 I区19号住居跡カマド, 出土土師器・石製品

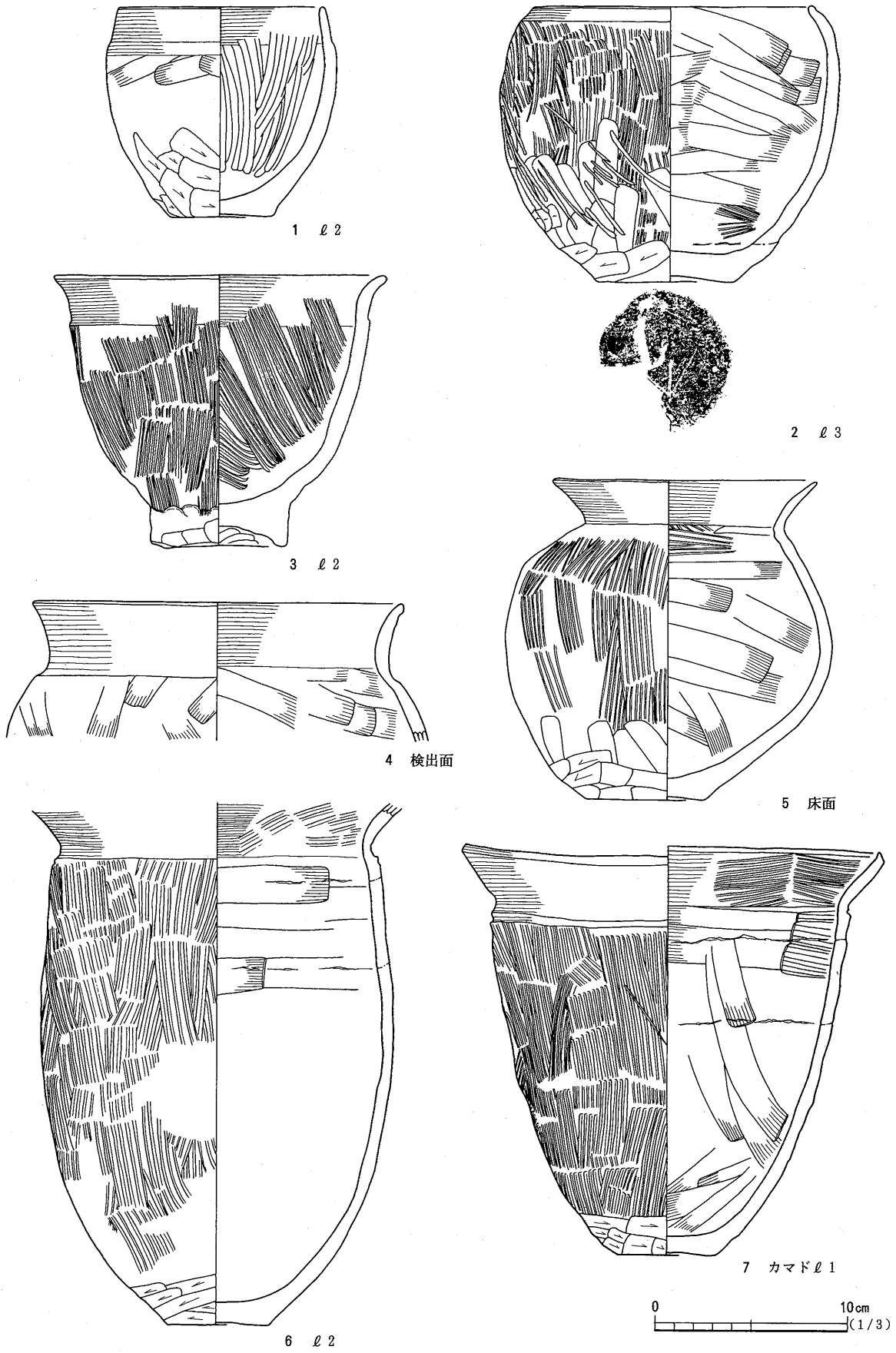


図38 I区19号住居跡出土土師器(1)

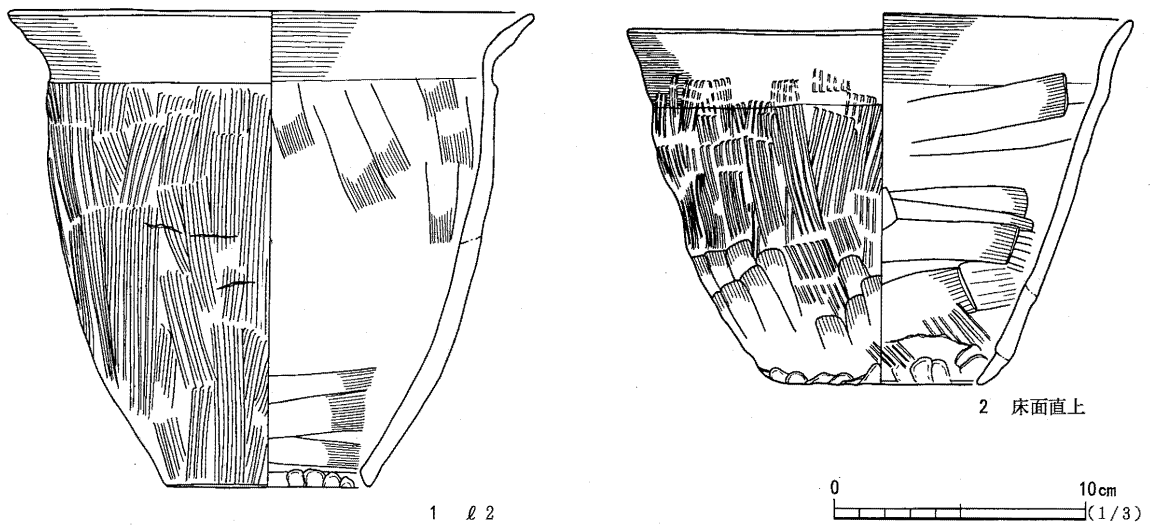


図39 I区19号住居跡出土土師器(2)

壁までの長さ75cm、焚口幅40cm、煙道の長さは、カマドの奥壁から88cmを測る。燃焼部底面から袖の内側、奥壁から煙道に接する部分にかけて焼土化した部分が認められ、最大8cmの厚さまで及んでいる。カマド内からは、図37-3・図38-7に示した土師器が横になりつぶれた状態で出土していた。カマドの左側袖の先端付近には、袖の芯材として縦長の白色粘土が埋め込まれている。西側袖については、崩落のために袖を失ったものと考えている。土層観察から貼り床らしい土は認められなかったため、床面から新カマド燃焼部までの高さは40cm前後である。

旧カマドは、床面で検出しているが、南側の掘削により一部壊され、袖部がわずかに残るだけで遺存状態が悪い。カマド袖間の長さは42cmで、カマド底面中央からカマド東側袖にかけて焼土化した範囲が認められ、厚さは最大3cmまで及ぶ。カマド東側袖の先端付近には、白色粘土が確認され、おそらくカマドが崩落したものと考えられる。

遺物 (図37~39, 写真97・98・108)

遺物は、土師器片231点が出土している。遺物は、主にℓ2と床面から多く出土しているが、図示できたものは、図37-1~4, 図38-1~7, 図39-1・2の13点である。遺構に伴う遺物は、土師器があり、カマド内から出土した2個体、カマド付近から出土した3個体、床面から出土した1個体である。

図37-1・2は、土師器の杯で約半分が遺存する。1はカマドとℓ2, 2は床面直上とℓ2から出土している。1は、丸底で体部上端に稜を持ち、口縁部が外傾ぎみに立ち上がり口端で内傾する器形である。2は、偏平な底部と体部上端に弱い段を有し、口縁部は内湾ぎみに立ち上がる器形を呈する。1・2の調整は、口縁外面にヨコナデ、体部から底部外面にヘラケズリを施している。内面には、底面に放射状のヘラミガキ、体部から口縁部にかけて横方向のヘラミガキを加え、黒色処理を行なっている。1には、粘土帯の継ぎ目が認められる。1の胎土には、土器焼成時に赤化した粒が含まれる。胎土は緻密で焼成は堅緻である。1の口径は18.0cm, 器高6.4cm, 2の口径は

17.6 cm, 残存高 3.7 cm を測る。

図 37 - 3 は, 土師器高杯で口縁部の一部を欠損するのみである。カマド内から出土している。杯部は, 体部上端に弱い段を持ち, 口縁部が外傾ぎみに立ち上がり, 脚部は杯部から下端にかけて裾が強く広がる形態を呈している。調整は, 杯部外面の口縁部にヨコナデ, 体部外面にヘラナデを施している。杯部内面には, ヘラミガキが加えられ, 黒色処理が行われている。脚部外面には, 脚柱にヘラケズリが加えられ, 脚部下半には摩滅が著しいが, 脚部内面には, ナデツケ, ヘラナデが観察される。胎土には, 土器焼成時に赤化した粒が含まれる。色調は橙色を呈し, 胎土は緻密で焼成は堅緻である。口径は 14.5 cm, 器高 8.2 cm, 底径 8.3 cm を測る。

図 38 - 1 ~ 7 は, 土師器甕である。1 は小型の甕で, 約 7 割が遺存する。平底の底部から立ち上がり, 胴部と口縁部の境に弱い段をもち, 口縁部は内湾する器形である。調整は, 口縁部にヨコナデ, 胴部外面には胴部上半にヘラナデ, 下半にヘラケズリを加えている。胴部内面には幅のあるヘラミガキを加えている。胴部外面下半では摩滅が著しく, 火を受けた跡が認められる。色調は橙色を呈し, 胎土は緻密で焼成は堅緻である。口径は 10.8 cm, 器高 10.8 cm, 底径 5.4 cm を測る。2 は, 鉢型の甕でほぼ完形である。平底の底部から球状の胴部を呈し, 口縁部は短く内傾する器形である。調整は, 口縁部外面にヨコナデ, 胴部外面には, ハケメ後, 胴部下半にヘラケズリを行ない, その後, まばらに斜め方向のヘラミガキを行っている。内面には, ハケメより目が粗くないヘラナデが加えられている。底部には木葉痕が認められる。胎土には, 土器焼成時に赤化した粒が含まれる。色調は橙色に赤味があり, 胎土は緻密で焼成は堅緻である。口径は 14.6 cm, 器高 14.2 cm, 底径 7.0 cm を測る。3 は, 小型の甕で約 8 割が遺存する。底部は上げ底で台状に作り出して胴部が外傾するように立ち上がり, 頸部でえぐるような段を有し, 口縁部が開くように強く外反する器形である。調整は, 口縁部にヨコナデ, 胴部にハケメを加え, 胴部下端から台状の底部には指頭痕とケズリが観察される。底部内面は, 指ナデにより粗雑に作られている。胎土には, 凝灰岩の粒が含まれている。色調は橙色に赤味があり, 胎土は緻密で焼成は堅緻である。口径は 17.4 cm, 器高 14.0 cm, 底径 7.2 cm を測る。4 は, 大型の甕で, 口縁部から胴部上半まで遺存する破片である。検出面から出土し, 胴部に膨らみを持ち, 頸部でえぐるような段を有し, 口縁部が外反する。調整本遺構に伴わない可能性が高い。口縁部にヨコナデ, 胴部にヘラナデが加えられている。胎土には, 土器焼成時に赤化した粒が微量含まれる。口径は 17.6 cm, 残存高 3.7 cm を測る。5 は, 床面から出土し, 約半分が遺存する。胴部は球形を呈し, 頸部がすぼまり口縁部は大きく開き外傾する器形である。調整は, 口縁部にヨコナデ, 胴部外面には, ハケメ調整後下端付近にヘラケズリを施している。胴部内面には, 上端にハケメが認められ, 全体にヘラナデを加えている。胴部外面には, 火を受けた跡が認められる。胎土には, 土器焼成時に赤化した粒が含まれる。色調は橙色に赤味があり, 胎土は緻密で焼成は堅緻である。口径は 13.8 cm, 器高 16.5 cm, 底径 6.0 cm を測る。6 は, 長胴甕で約 8 割が遺存する。検出面と 2 から出土している。底部の小さい平底で砲弾型の胴部を呈し, 頸部にえぐるような段を有する。口縁部は遺存部分から外傾する。調整は, 口縁部外面にヨコナデ後, 胴部外

第2節 竪穴住居跡

面にハケメを加え、胴部下端にヘラケズリを施している。口縁部内面には、ハケメ調整後にヨコナデを加え、胴部内面にはヘラナデを施している。胴部外面には、黒斑が認められる。色調は橙色に赤味があり、胎土は緻密で焼成は堅緻である。推定口径は19.0cm、残存高26.9cm、底径5.3cmを測る。7はカマドの中からつぶれた状態で出土した完形の甕である。底部から頸部に向かって広がる胴部形で頸部にえぐるような段を有する。口縁部は外傾し最大径となり、口端で摘み上げたように内傾する。調整は、口縁部外面にヨコナデ、胴部外面にハケメを加え、胴部下端にヘラケズリを施している。口縁部内面には、ハケメ調整後にヨコナデを加え、胴部内面にはヘラナデを施している。胴部には、粘土の付着が認められ、また、火を受けた跡と黒斑が観察できる。色調は橙色に赤味があり、胎土は緻密で焼成は堅緻である。口径は22.0cm、器高21.1cm、底径5.0cmを測る。

図39-1・2は無底の土師器甕で、いずれも完形に近いものである。1は、カマド西側の ℓ 2で逆さの状態出土した。底部から頸部に向かって広がる胴部形で頸部にえぐるような段を有する。口縁部は外傾し最大径となる。調整は、口縁部にヨコナデ、胴部外面にハケメを加えている。胴部内面には、胴部上半に縦方向のヘラナデ、胴部下半に横方向のヘラナデを施している。また、胴部内面下端には、指オサエの痕跡が認められる。胴部外面には黒斑が観察できる。胎土には、土器焼成時に赤化した粒と凝灰岩粒が含まれる。色調は橙色に赤味があり、胎土は緻密で焼成は堅緻である。口径は21.0cm、器高18.9cm、底径8.0cmを測る。

図39-2は、カマド東側の ℓ 3で正位の状態出土した。底部から口縁部にかけて外傾する器形で、口縁部で最大径となる。調整は、口縁部外面にヨコナデ後、胴部外面にハケメ後ヘラナデを加えている。口縁内面にはヨコナデ、胴部内面にはヘラナデ後ハケメが加えられる。胴部下端には、内外面の両側を同時に指で押さえたためかユビオサエの痕が観察される。胴部には火を受けた跡と黒斑が認められる。色調はやや明るい橙色を呈し、胎土は緻密で焼成は堅緻である。口径は20.2cm、器高14.7cm、底径8.0cmを測る。

図37-4は、 ℓ 1から出土した泥岩製の紡錘車である。紡輪の中央には貫通孔が穿たれ、断面形は台形基調である。中央の貫通孔は正円形で垂直にうがたれ、孔内面はていねいに仕上げられている。調整を見ると、表裏面とも研磨によりていねいに仕上げられているが、表面外端にのみ、成形時にできた放射状の削り痕が認められる。側面下半には、成形時にできた斜め方向の削り痕が認められる。最大幅9.6cm、最大厚2.4cmを測る。

まとめ

本遺構は、伐木搬出時における削平により全体の約半分を失っている住居跡である。2基のカマドを検出し、新・旧が推定されることから住居の拡張を行なったものと考えられ、拡張後の新カマドは、床面からやや高い位置に造られている。新カマド燃焼部とその周辺からは、遺構に伴う土師器が良好な状態で出土している。遺構の所属時期については、7世紀前半から7世紀中葉の幅で考えておきたい。

(国 井)

20号住居跡 S I 20

遺 構 (図40, 写真31・32)

本住居跡は、北壁にカマド1基を構えた小型の住居跡である。本区西部のほぼ中央、P 50'グリットに位置する。周囲は南に下る緩斜面で、I区で最も平坦な場所に立地する。本住居跡との関連が考えられるものとして、本住居跡の西北西21mに84・85号土坑が、南方15mには99号土坑がある。本遺構は試掘調査の際、その一部がL II b中位で検出された。トレンチの断面で土層を観察したところ、L II b上面から掘り込まれていることが確認された。重複する遺構はない。

堆積土は3層に細分できる。ℓ 1・2は、斜面に沿って緩やかに傾斜する堆積状況を示すため、自然堆積土である可能性が高い。ℓ 3は南壁直下にだけ観察され、壁からの崩落土と考えられる。

平面形はほぼ正方形を呈し、東西・南北長とも3.9mを測る。北辺と南辺の midpoint を結んだ線を住居の主軸方位とすると、主軸方位はN25°Wを示す。掘り込みはL II cの中位に達し、周壁はほぼ垂直に立ち上がる。周壁の残存高は、残りのよい北壁で50cm、最も残りの悪い南壁では20cmである。床面に凹凸は無く、斜面の下方に向かってごく緩やかに傾斜している。貼床が構築された形跡はなかったが、若干の踏み締まりがみられた。付属施設として、カマド1基とピット1基を検出した。壁溝は、検出を試みたが確認できなかった。

カマドは北壁中央のやや東寄りに位置する。遺存状態が悪く、袖部は確認できなかった。ただカマドの周囲の床面に、被熱したことによるとみられる変色が観察された。被熱した箇所からみて、袖部があったのではないかと考えている。燃烧部は周壁を38cm掘り込んで作られ、その幅は30cmである。また調査当初、煙道が確認できなかったためトレンチを設定して掘り下げた。煙道部の規模は、長さ88cm、幅42cm、深さは10cmを測る。煙出し部は底部だけが遺存し、直径28cmの円形を呈している。カマド内の堆積土は、ℓ 1が天井部の崩落土、ℓ 2は天井部が崩落する以前に流入した土とみられる。煙道部内に被熱した箇所は無く、焼土も確認できなかった。このような状況から、カマドはあまり使用されなかったと推察される。

P 1は、住居跡の中央やや北西寄りに位置する。円形を呈し、直径70cm、深さ16cmを測る。P 1の上面は被熱し、図41-2に示した鉢が出土している。このような在り方は、P 1が炉のような用途に用いられたか、あるいは何らかの祭祀的な意味を持つものと推察される。

遺 物 (図41・42, 写真99)

縄文土器6片、石器12点、弥生土器2片、土師器4点、須恵器の甕2片を図示した。この他に、縄文早期の土器31片、中後期の土器120片、弥生土器3片、土師器219片、須恵器15片、石鏃3点、剥片類114点が出土している。

図示した中で遺構に伴う可能性が高いのは図41-1~3である。1は完形のロクロ土師器の杯である。口径13.4cm、底径7.6cm、器高6.3cmを測る。体部が直線的に外傾し、口縁部がわずかに外反する器形を呈する。外面の調整をみると、体部下端に横方向のヘラケズリが施されている。ま

第2節 竪穴住居跡

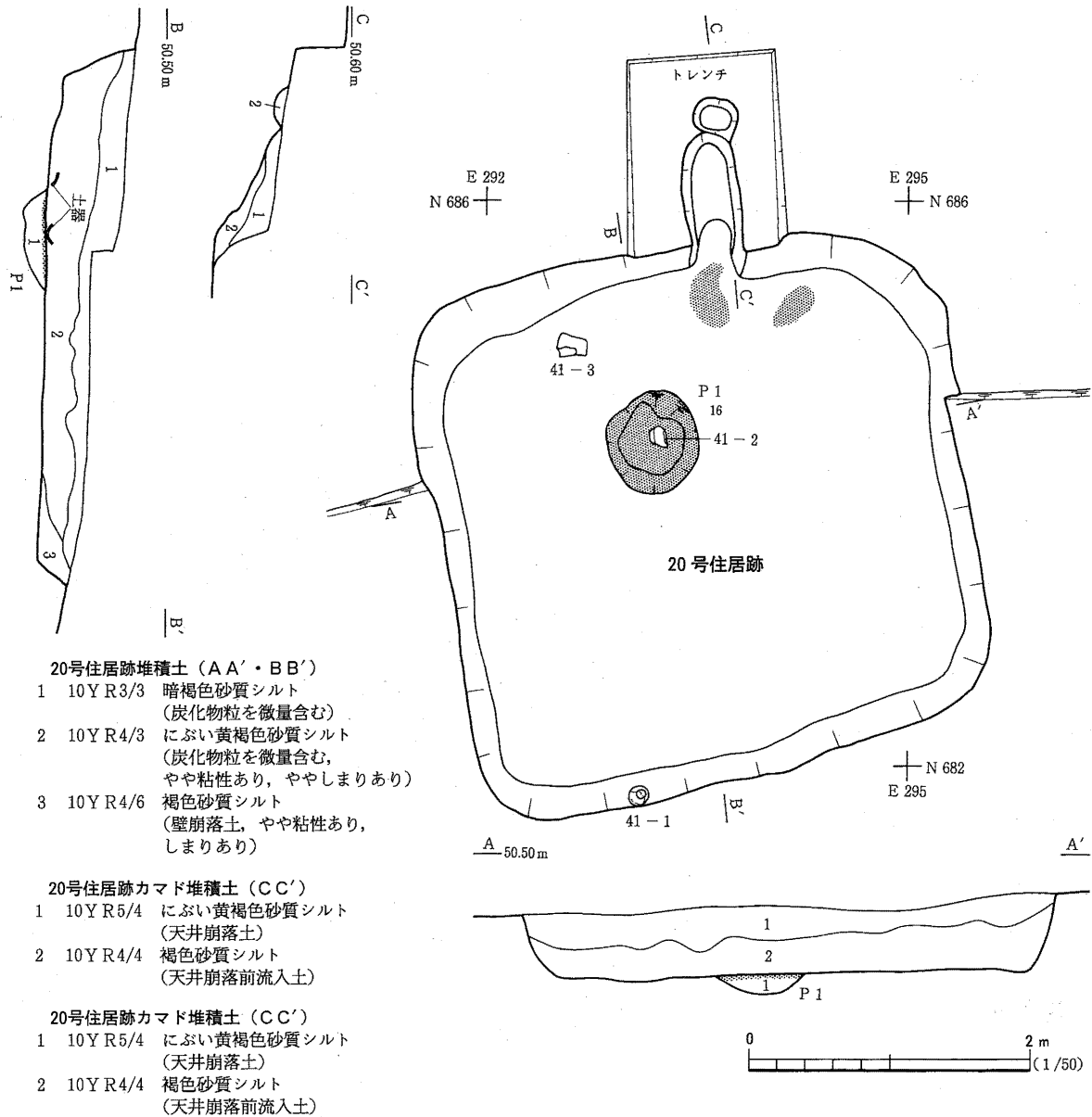


図40 I区20号住居跡

た、底部に回転糸切り痕が残る。内面は黒色処理が施され、底面は格子状の、体部は横方向のヘラミガキがなされている。2は非ロクロ整形の土師器鉢である。口径11.9cm、底径6.3cm、器高6.2cmを測る。体部はやや内湾して立ち上がり、輪積み痕が明瞭に残る。口縁部の内外面に横ナデ、体部内外面にヘラナデ調整が施されている。さらに体部外面の下端には、手持ちヘラケズリが加えられている。また底面に木葉痕がつく。色調は明黄褐色であるが、外面の一部が橙色に変色し、二次的に被熱している可能性がある。3は土師器の甕で、口径18.3cm、底径8.1cm、器高18.3cmを測る。胴部が内湾気味に外傾し、口縁部が弱く外反する器形を呈する。外面の調整をみると口縁部に横ナデが施され、胴部上位にハケメ、中位以下にヘラナデ、下端にケズリが加えられている。内面の調整は横方向のヘラナデである。また、底面に木葉痕が残る。

4は土師器の口縁部片から頸部にかけての破片であるが、瓶のような器形ではないかと推察して

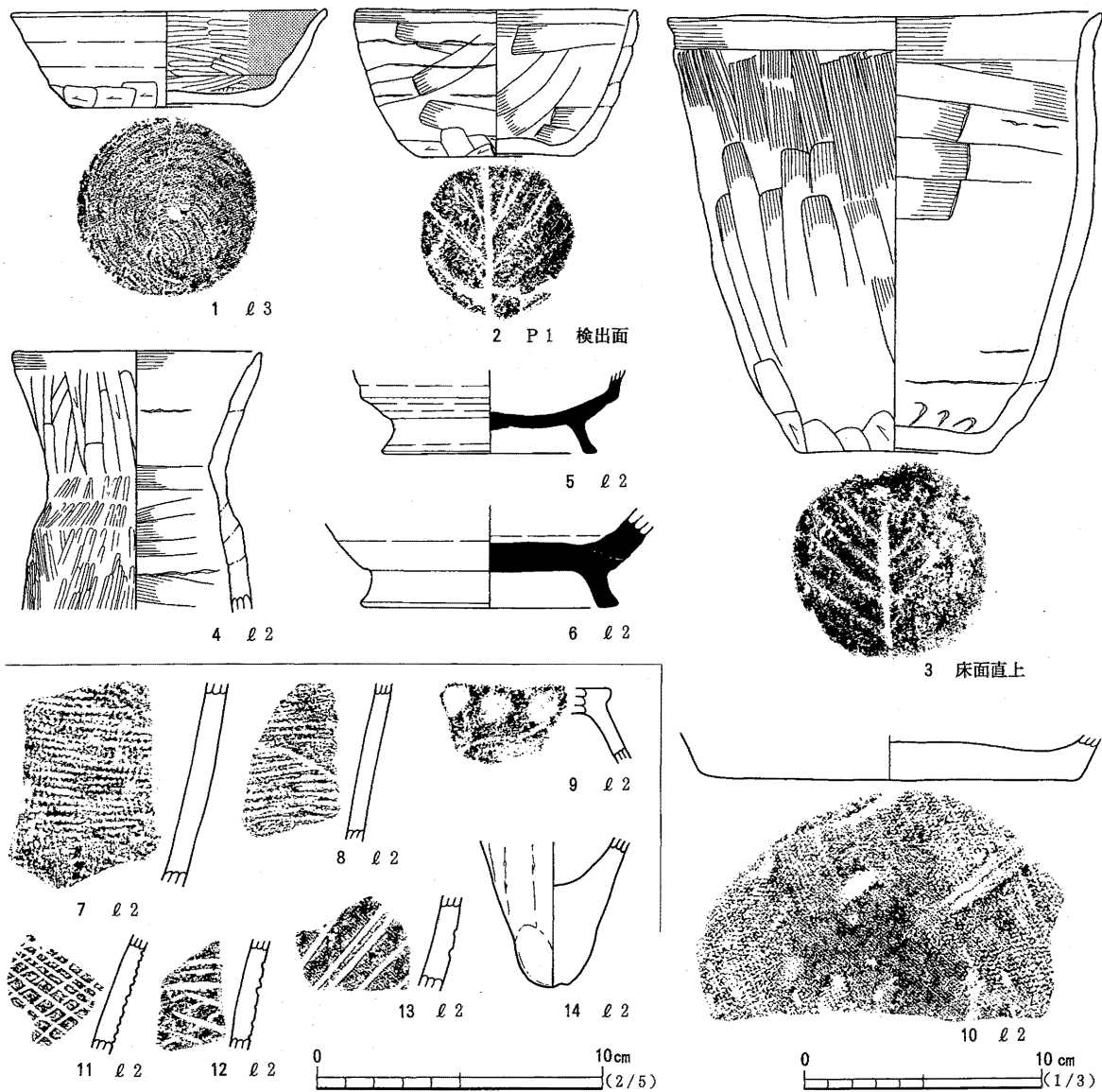


図41 I区20号住居跡出土土師器・須恵器・縄文土器・弥生土器

いる。口径は10.5cmと推定される。外面は入念に磨かれ、光沢を帯びているが、内面はナデ調整が主体である。5は底径9.1cmを測る高台付きの須恵器・杯である。6は須恵器・甕で、底径は10.8cmを測る。7は縄文土器の胴部片である。比較的厚手で、原体の粒が小さいことから後期の所産と思われる。8～10は弥生土器の破片である。8の原体は付加条縄文とみられる。9は蓋と推定され、天井部の側縁に指頭圧痕が巡る。10は底面に布目痕が残されている。11～14は縄文時代早期の所産と考えられる。11・12に格子目文が、13には斜行沈線が施文されている。14は底部片で、縦方向のケズリが施されている。

図42-1～10は石鏃である。1・2は有茎、3～9は無茎で凹基、10は平基である。いずれの石鏃も、表裏の調整が鏃身に達している。7は基部寄りの側面が膨らむ、特徴的な形状を呈している。11・12は石錐で、11の方が比較的細身の形状を呈している。石質は流紋岩・玉髓が多い。

第2節 竪穴住居跡

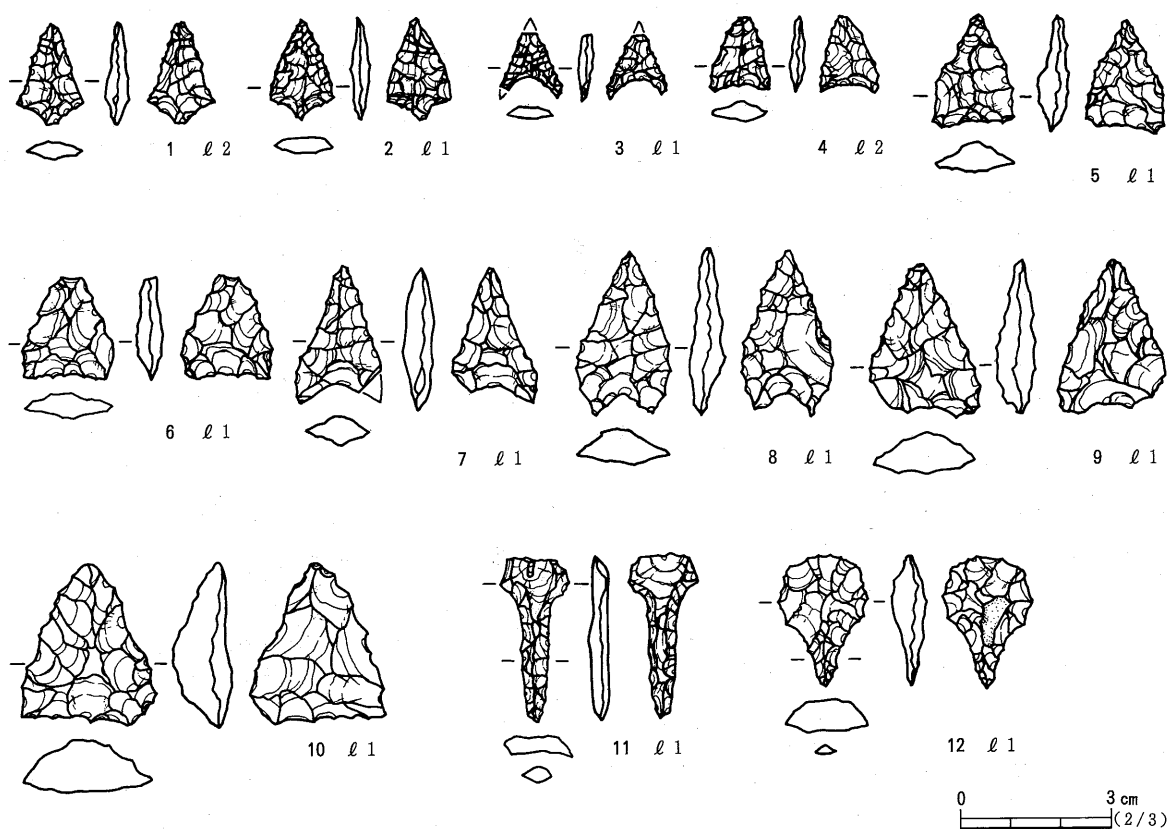


図42 I区20号住居跡出土石器

まとめ

図41-1~3の杯・甕の年代観から、本住居跡は9世紀中葉に機能していたと推定される。後述する木炭焼成土坑や、1次報告の第6期に区分された住居跡との関連が推察される。縄文時代の遺物が多く出土したのは該期の遺物包含層内に住居跡が掘り込まれているためであろう。(今野)

21号住居跡 S I 21

遺構 (図43, 写真33・34)

本遺構は、I区西部北寄りのO50'グリッドに位置し、北から南に下る緩やかな斜面に掘り込まれている。本遺構の西方2mの地点に22号住居跡、東方5mに28号住居跡があり、この3軒の住居跡は、標高51mと52mの等高線に挟まれる形で東西に並んでいる。検出面はL II b下位で、黄褐色土の円形のプランで確認したが、北側のラインが不明瞭であったため、北端にトレンチを入れたところ、壁の立ち上がりが確認された。床面までの掘り込みはL II c中位に達している。なお、本住居跡と重複する遺構はない。遺構内堆積土は大略3層に分かれ、l1・2は斜面の傾斜に沿ったなだらかな堆積であることから自然流入土と考えられる。l3は壁際に堆積しているしまりのない土で、壁面からの崩落土とみられる。堆積土はいずれもL II bに類似し、炭化物粒を微量含んでいる。

住居跡の平面形は東西に長い楕円形で、長軸方位はN 60° Eを指す。長軸の長さは4.9m、短軸

第2節 竪穴住居跡

と小規模である。柱痕は確認できなかったが、位置的にみて柱穴の可能性はある。P5は位置的に炉跡の可能性はあるが、堆積土中に焼土などは確認されなかった。また礫を抜き取った痕跡も確認されなかった。ただ北壁際の床面からは、炉に使用されたとみられる礫が出土している。この礫は長さ約50cmの長方形で、その片面が赤く焼けていた。さらに礫の周辺の床面には、被熱したことによるとみられる変色が観察された。しかし、図示したように床面の被熱範囲は広範囲に渡り、炉跡のようにはみえない。よって焼礫は、炉から抜き取られ遺棄されたものである可能性が高い。

遺物 (図43)

縄文土器6片を図示したが、この他に縄文早期の土器10片、中後期の土器99片、土師器2片、剝片1点などが出土している。図43-1~3は深鉢形土器の口縁部片である。1・2は平縁で、LRが横位回転施文されている。2には3本歯の工具による斜行沈線がみられる。3は波状口縁の波頂部だが、外面にLRが施文されている。4は胴部片で、LRの施文は横回転である。5・6は底部片である。5は底径6.5cmで、外反気味に胴部がつく。6は底径11.9cmと推定される。底面に木葉痕がつき、胴部下端は垂直に立つ。5・6とも胴部は無文である。いずれも破片資料であるため年代は確定できないが、3・5は縄文時代後期中葉の所産と考えられる。その他についても縄文時代後期に属すると思われる。

まとめ

本遺構の機能した時期は、遺構に伴う遺物が出土していないため明確にできないが、検出層位や住居の形態、堆積土中出土の遺物などから、縄文時代後期中葉に機能したものと推察される。隣接する22号住居跡は、同様の特徴を有し関連が想定される。(今野)

22号住居跡 S I 22

遺構 (図44, 写真35・36)

本遺構は、I区西部の北寄り、O49'・50'グリッドに位置し、北から南に下る緩やかな斜面に掘り込まれている。本遺構より東方2mの地点に21号住居跡、北西方向1.5mに1号土器埋設遺構がある。検出面はL II b中位で、褐色土の円形プランとして確認されたが、重複する52号土坑の方が本遺構より古いと判断されたため、52号土坑の調査を先行した。本遺構の床面までの掘り込みはL II cに達し、遺構内堆積土は大略3層に分かれた。堆積土はいずれもL II bに類似するが、 $\ell 1 \cdot 2$ は斜面の傾斜に沿ってなだらかな堆積であることから自然流入土と考えられる。 $\ell 3$ は北壁際にだけ堆積しているが、周壁の土に比べ色調が暗いため人為堆積土の可能性もある。

住居跡の平面形は歪んだ楕円形で、長軸の長さは4.4m、短軸方向の最大幅は3.7mである。北寄りの壁はほぼ垂直に立ち上がるが、他の箇所ではやや緩やかである。周壁は斜面上位の北側で最も遺存状態が良く残存高57cmを測るが、斜面下位に向って高さを減じ、最低残存高は7cmである。床面に凹凸はないが、床全体が8°前後南に傾斜している。床面の北東隅1/4程の範囲に、若干の硬化が観察された。炉やピットなどの施設は、床面を精査したが確認できず、焼土等もみられなかつ

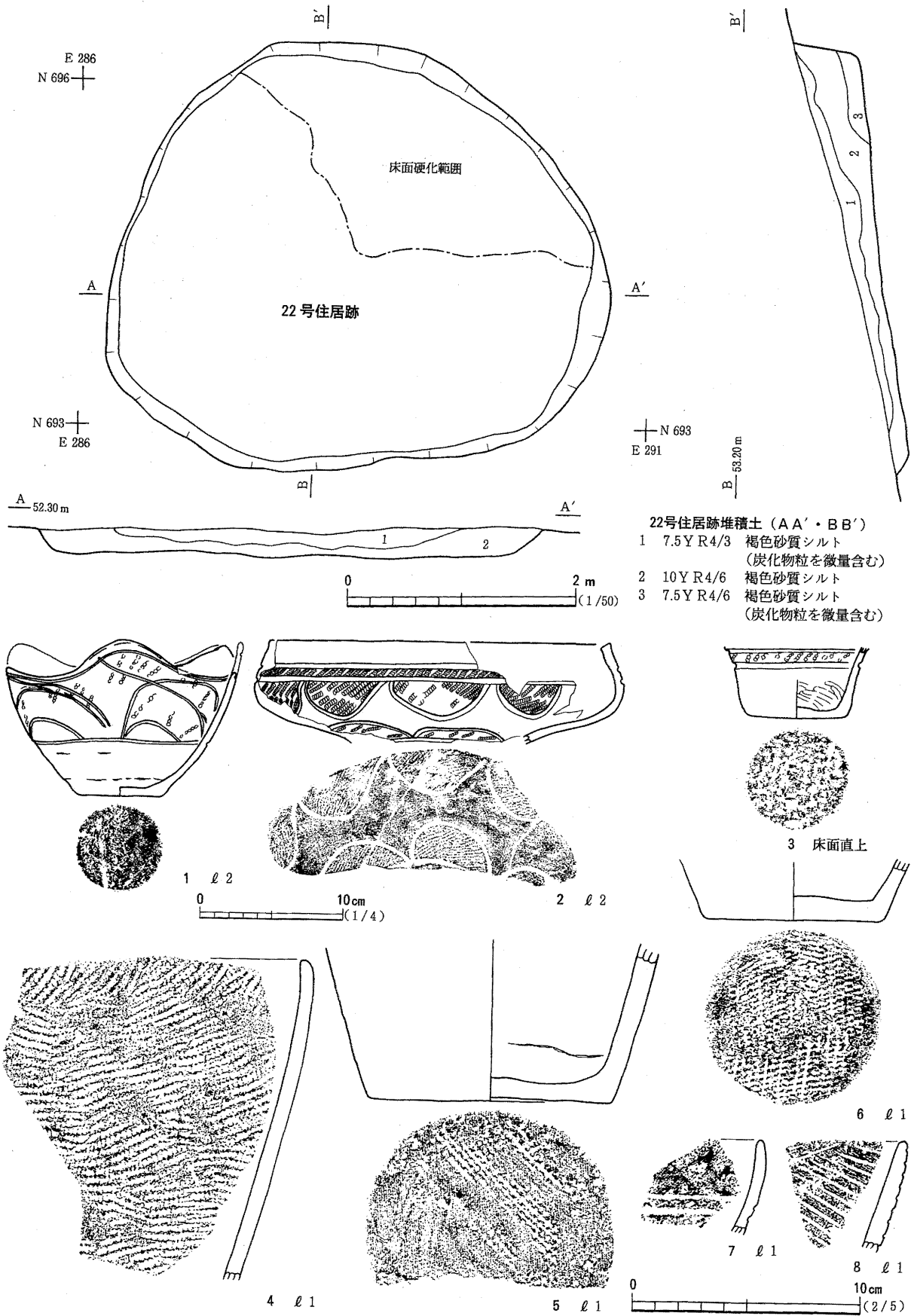


図44 I区22号住居跡, 出土縄文土器

第2節 竪穴住居跡

た。

遺物 (図44, 写真100)

本遺構からは図示した8点の他に、縄文土器15片、土師器6片、剥片類2点などが出土している。遺構の掘り込みがLⅡcに達しているため、縄文時代早期の遺物も出土している。図144-1は3単位の波頂部をもつ鉢形土器である。口径16.4cm、底径6.0cm、器高10.6cmを測る。体部上半に文様帯を持ち、連弧文が表出されている。波頂部が3単位なのに対し、文様は4単位で体部を巡る。文様の沈線は細く、描き損じとみられるはみ出しが目立つ。また、文様帯の全面に施した縄文が粗く磨消されている。同図2は浅鉢形土器の、約1/3ほどの破片である。口径23.6cmに復元図示した。大きく開いた体部から口縁部が内傾する器形を呈している。口縁部に無文帯を持ち、体部に充填縄文による連弧文が巡る。3は小型土器の底部片で、底径4.3cmを測る。破片の上端に幅の狭い帯縄文がみえる。4は縄文のみが施文された深鉢の口縁部片である。5・6は深鉢の底部片で、ともに網代痕が明瞭に残る。7は大きな波状口縁を呈する深鉢の細片で、口縁部直下に帯縄文が施されている。8は斜行する平行沈線文が描かれた深鉢の口縁部片である。遺物の年代は、1～7が縄文時代後期中葉、8が早期中葉と考えられる。

まとめ

本遺構の機能した時期は、遺構に伴う遺物が出土していないため明確にできない。しかし堆積土中から出土した遺物や検出面からみて、縄文時代後期中葉に機能したものと推察される。ただし、該期の住居跡に特徴的な石囲い炉や壁柱穴は確認できなかった。本遺構は、恒常的使用痕跡の稀薄な住居跡といえる。

(今野)

23号住居跡 S I 23

遺構 (図45, 写真37・38)

23号住居跡はM4グリッドで検出された遺構で、当遺構を挟んで斜面上位には19号住居跡、斜面下位には18号住居跡が位置している。また、当グリッドは下層において大型円形土坑の密集する地区であるが、本住居跡の位置はちょうど間隙となっており、わずかに120号土坑と重複するだけである。

検出作業はLⅢ赤褐色土面を精査することで行い、褐色土の広がりや遺構プランを確認した。遺構内堆積土は斜面上位からの流れ込みを基本とするが、北壁の中央付近では崩落による乱れが観察され、最下層には火災によって生じたと思われる炭化物と焼土が混在している。

全体の平面形は斜面下位の南壁側は流出して失われているが方形を呈すと考えられ、遺存プラン下端での長軸は3.10m、短軸は1.60mを測る。壁の立ち上がりは北壁で45cm前後の高さで遺存し、東及び西壁は斜面の傾斜にしたがって徐々に高さを減じている。

カマドは東壁に設置されており、住居プラン内に燃焼部を持つ両袖タイプのものである。本遺跡の住居跡に特徴的に見られる両袖の端部に直方体の粘土を立て、その上端に直方体粘土を掛け渡し

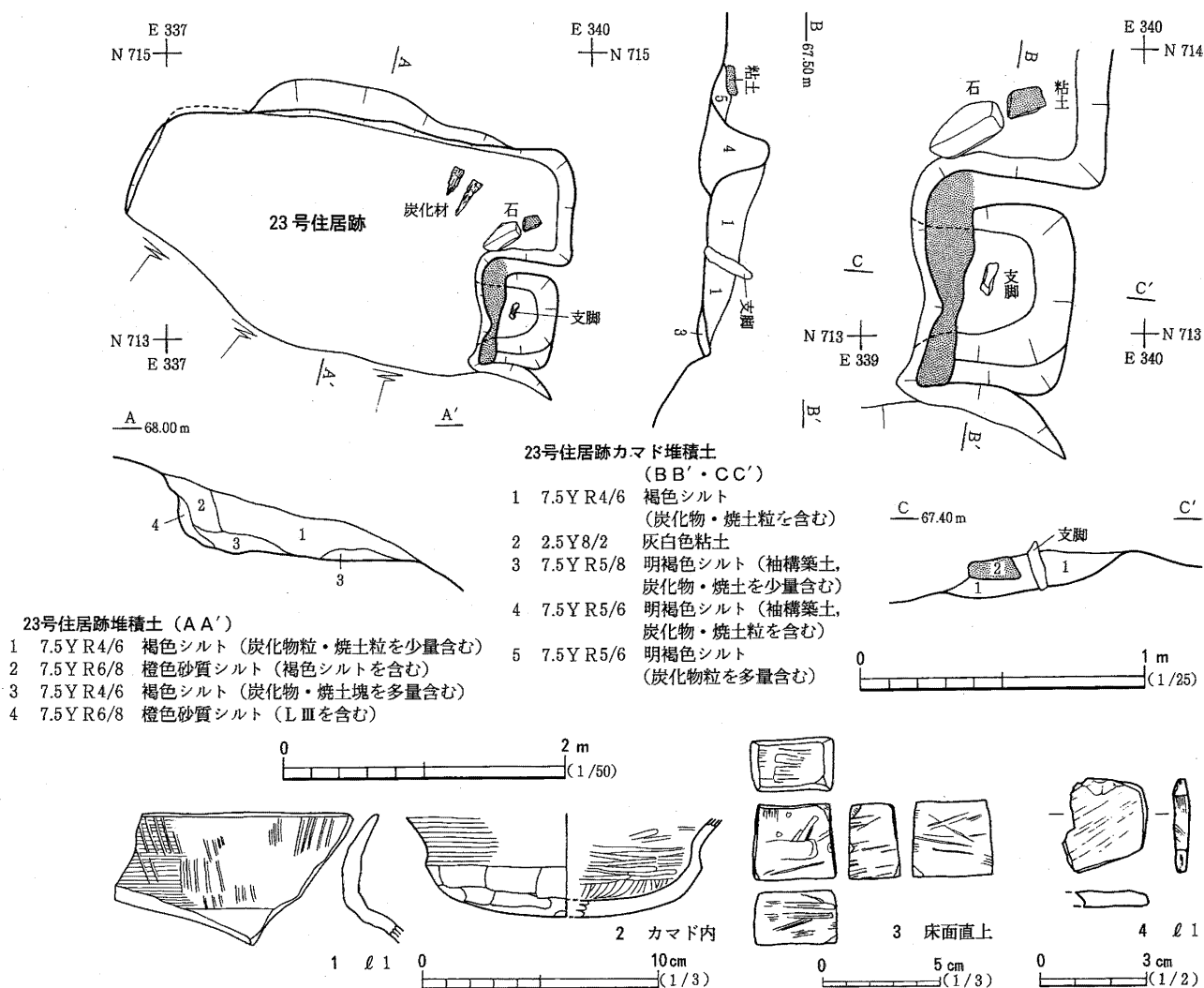


図45 I区23号住居跡, 出土土師器・石製品

て焚口を作るもので、つぶれ加減であるが掛け渡した粘土も比較的良く残っている。燃烧部平面は方形を基調とし下端での焚口幅約40cmを測るが、内壁はすり鉢状に立ち上がっており下端での奥行きは40cmと短くなっている。底面の中央には石製の支脚が設置されているほか、北袖の脇からはスサ入りの焼けた粘土が認められており、カマドの構築に際して利用された部分があったものと考えられる。なお、煙道は他の住居跡例からすると住居外方に伸びていた可能性が高いが、流出したのか確認できなかった。

床面及び床面上層には炭化材及び焼土が広く分布していたことから、当住居跡が火災に見舞われたことが知られたが、床面及び壁面が酸化状態となっている部分は認められず、また炭化材も小片となったものが大半で上屋を復元できるほどの良好な資料は得られなかった。

遺物 (図45)

図45-1はカマドより出土した土師器杯の破片で、火を受けて器表面がかなり荒れているが、外面には部分的にヨコナデとヘラケズリが観察される。図45-2は住居跡堆積土中から出土した

第2節 竪穴住居跡

土師器甕の口縁部片である。肩の張る器形が推定され、やや直立気味の口縁部外面にはヨコナデと楕状のハケメが観察される。

図45-3は住居跡北壁に貼り付いた状態で検出された凝灰岩の砥石で、本住居跡に伴う可能性が高い。形状は直方体を呈し、1辺約3cmのほぼ正方形の2面と、約2×3cmの長方形4面からなっている。全ての面に摩耗痕があり、部分的に1～2mm幅の溝状の研ぎ痕跡も認められる。溝状の痕跡は石製模造品の研磨に使用された可能性も考えておくことにしたい。

図45-4は堆積土中出土した石製品で、全体の半分ほどが欠損している。全面が荒く研磨され製品としては有孔円盤が想定されるが、孔は認められず多角形の形状である。遺存最大長2.7cm、最大厚0.4cmを測る。

まとめ

本住居跡は全体プランの南側3分の1程が流出しているが、遺存部から復元される規模は調査区内で最も小さいものである。出土遺物は少ないが土器の特徴からすると当遺跡古墳時代古段階の住居跡グループに属すると考えられ6世紀中葉頃の年代が想定される。(安田)

25号住居跡 S I 25

遺構 (図46, 写真39・40)

本遺構は、I区西部のP1グリッドで検出した敷石住居跡で、崖線に近い北から南に下る斜面に立地する。本住居跡は当初の調査区より外にあり、縄文時代早期の調査にむけて上面との間層を剥ぎながら調査区を拡張した際に検出されていることから、その存在に気付いた時点ではすでに住居跡の西側半分を掘削によって失ってしまっていた。住居跡を断面で観察した結果、L II bから掘り込まれ、掘り形はL II cに達していることがわかった。本住居跡と重複する遺構はないが、関連が推測される遺構として28号住居跡が本住居跡の北方4mに位置する。遺構内堆積土は大略3層に分かれる。l1はL II bに類似し、斜面の上方からの流入土とみられる。l2も自然流入土だが、色調から見て壁面からの崩落土が多く混入していると推察される。l3は厚さ10～30cmの床面構築土で、その上面に石が敷設されていた。

住居跡の平面形は円形を呈していたものと推定されるが、その直径は3.7m、東西方向の残存長は1.5mである。周壁は北寄りの部分しか残存していないが、周壁は急峻に立ち上がり、残存高は48cmである。南側の壁面は斜面に沿って消えているが、これは本住居跡が崖際にあり、壁の崩落・浸食が著しかったためであろう。

床面は、検出面の傾斜に一致した方向で6°南に傾いている。そのほぼ全面に石が敷かれているが、床面の縁辺部では石に乱れや隙間がみられる。なかには図のように、住居跡外から出土している石もあるが、恐らく壁の崩落・流出に伴って、敷石の一部も攪乱されたのであろう。敷石は径10cm程度のものから最大40cmのものまで、主に偏平な角礫を用い、小さな円礫をその隙間に埋めるように敷き詰めている。敷石の中には、図47-7と8の磨石も含まれている。なかには粗く割っ

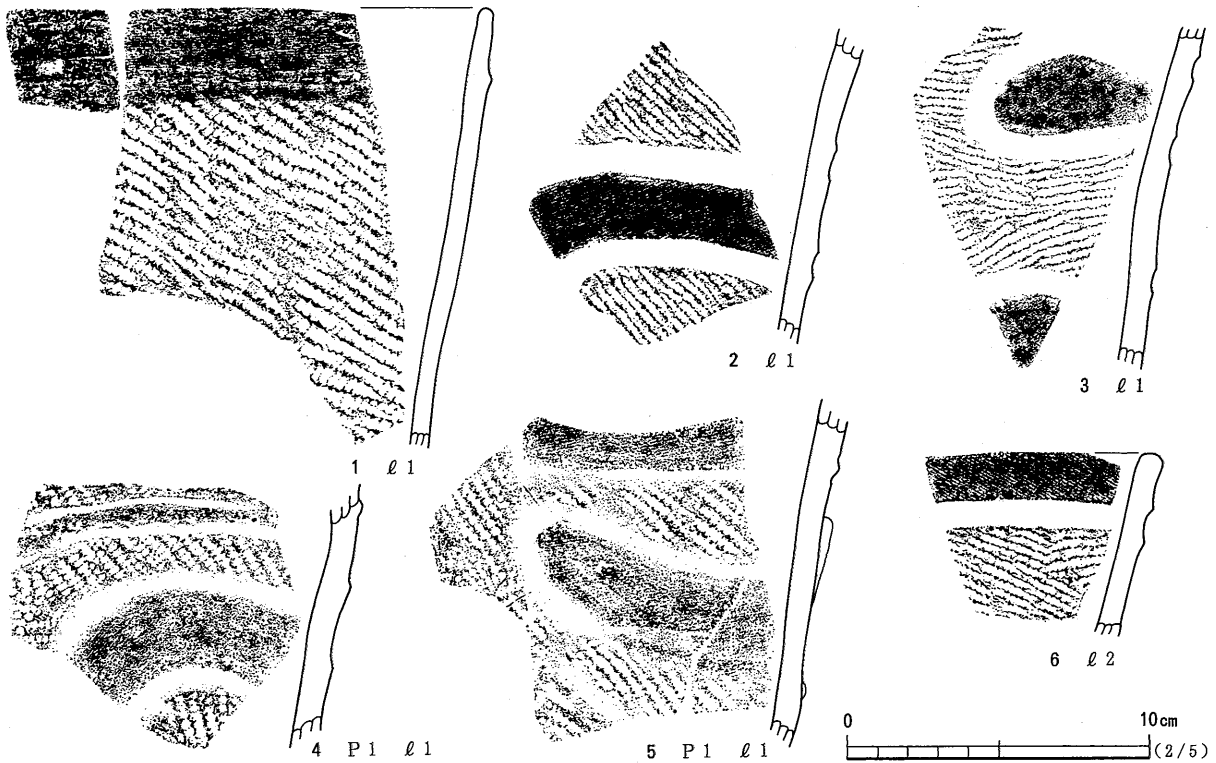
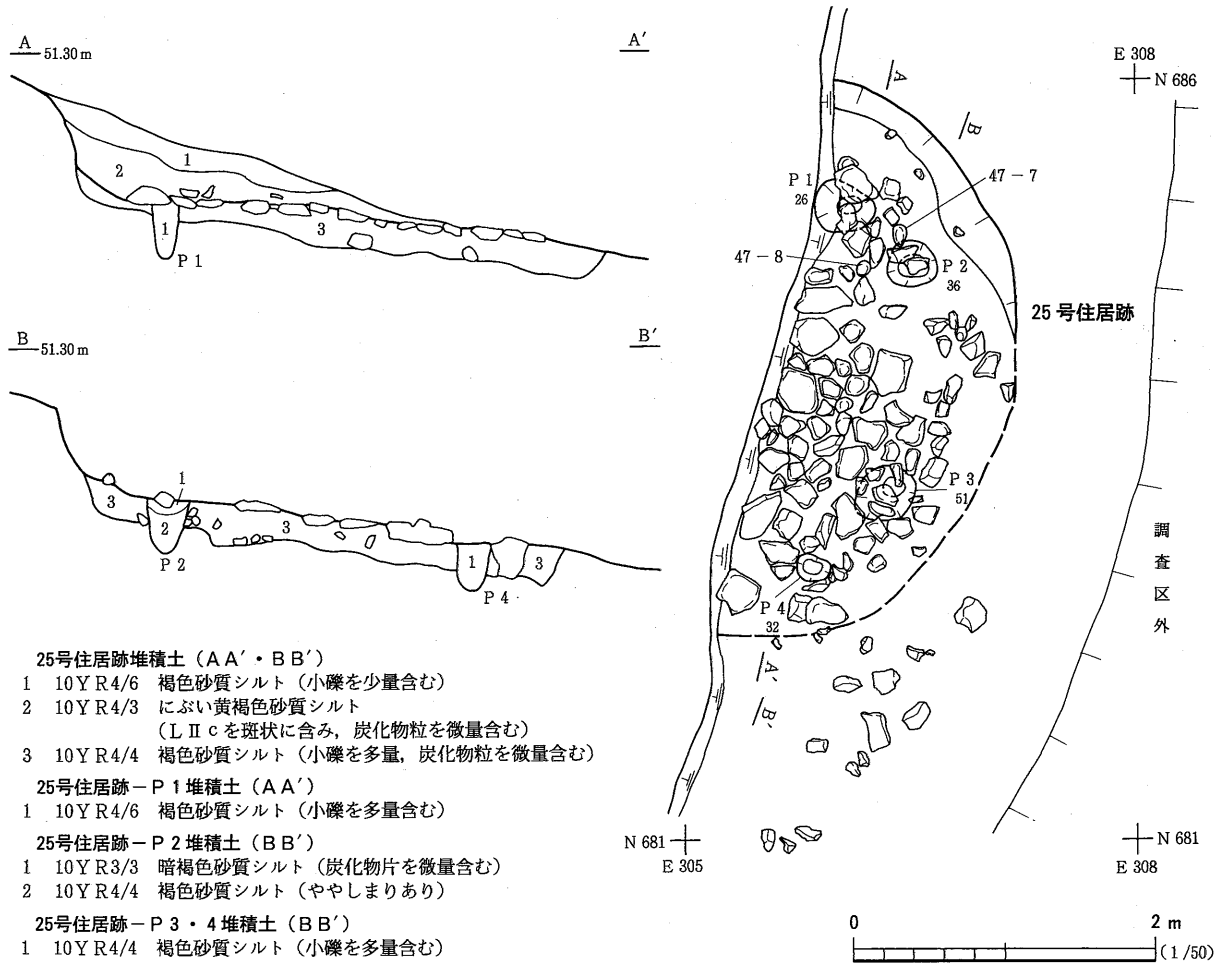


図46 I区25号住居跡, 出土縄文土器

第2節 竪穴住居跡

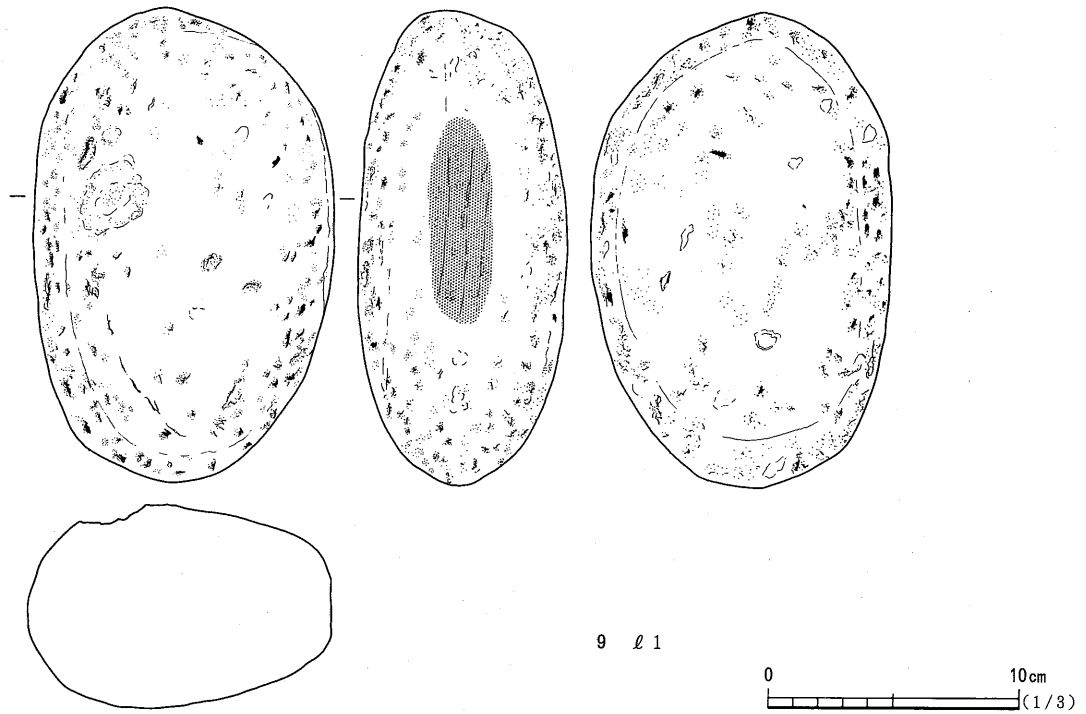
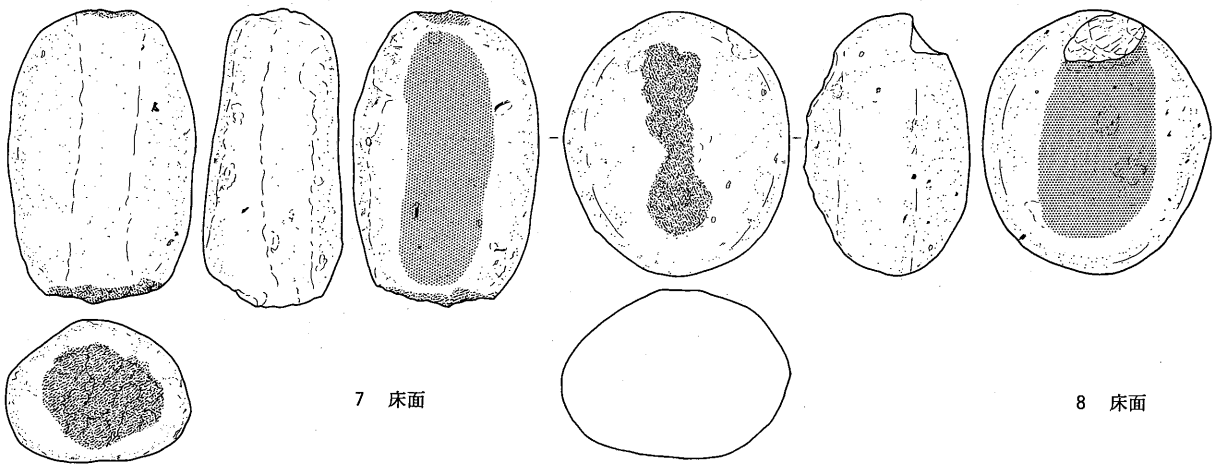
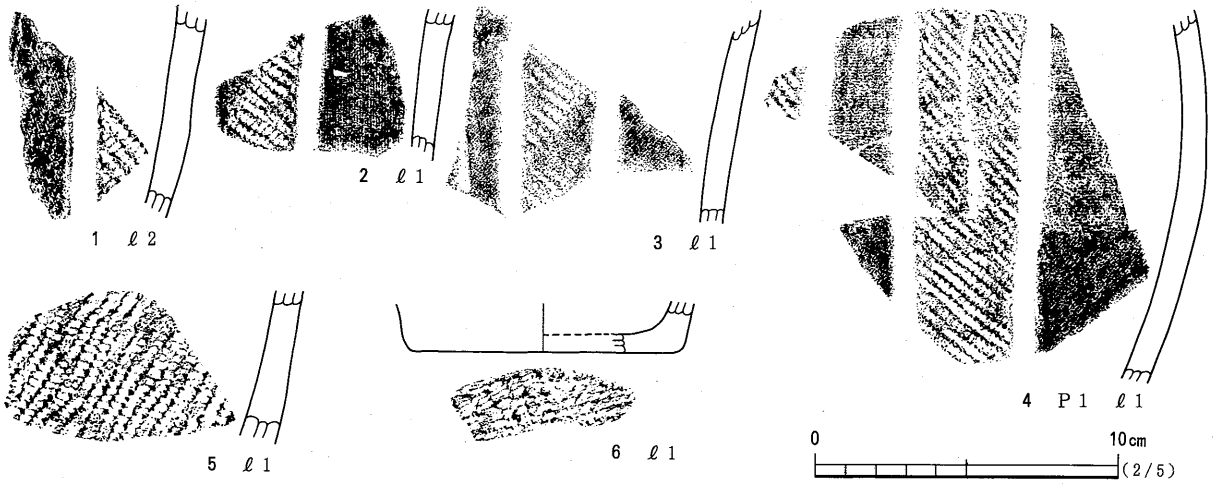


图47 I区25号住居跡出土縄文土器・石器

た可能性のある石も散見される。石の厚さは5～20cmとばらつきがあるが、各石の上面が平坦になるように埋めている。敷かれている石の数は約90個である。敷石の供給源については、N2グリッドの急斜面には石の露頭が見られ、それらの石と敷石の石質にはなんら変わる所がないことから、供給源は近在である可能性が高い。

炉跡は検出できなかった。この時期の住居跡には複式炉が伴う例が多いが、焼土や立て掛けられた石等は確認できず、削平してしまった可能性が高い。ピットは床面上で2基、敷石を剥がした段階で2基の計4基が確認された。ピットの径は22～42cm、深さは26～51cmである。明瞭な柱痕を持つピットは無く、ピット内の堆積土が人為堆積かどうかも判然としなかったが、いずれも周壁寄りに位置することから柱穴と推察される。P1～3の直上には敷石が見られるが、これは敷石が乱れたためか、あるいは柱の建て替えが行われたためであろう。

遺物 (図46・47)

図46-1・6は、口縁部に無文帯を持つ深鉢片である。1は稜線によって、2は沈線によって文様帯が区画されている。図46-2～4、図47-3・4は凹線によって文様が描かれている。図47-5は脇に綾をもつ凹線によって区画文が表出されている。図46-2～5は無文部、図47-3・4は縄文部で文様が描かれている。また、縦位に縄文が回転施文されるものが多い。図46-1～6、図47-1～4の年代は、大木10式の中でも古い段階に位置するものと考えられる。図47-6は網状痕が残る底部片である。縄文時代後期に属するものであろう。図47-7～9は磨石である。7は円筒状を呈し、両端に顕著な敲打痕がみられる。図示した他に、縄文早期の土器1片、中後期の土器34片、土師器31片などが出土している。

まとめ

本遺構の機能した時期は、遺構に伴う遺物が出土していないため明確にできないが、敷石住居跡であることから縄文時代中期末葉か後期初頭と考えられる。また後期初頭とみられる遺物は、遺構外からごくわずかしか出土しておらず、堆積土中から出土した図46-1～6、図47-1～5の年代観から、縄文時代中期末葉に機能したのものと考えたい。(今野)

26号住居跡 S I 26

遺構 (図48, 写真41・42)

調査区東部のM3・4グリッドで検出された竪穴住居跡である。南西側が下がる急斜面に構築されている。窯跡あるいは溝跡の可能性があると判断したため、一部トレンチ掘りをしたところ、トレンチの断面から遺構壁の立ち上がり、底面近くでは、水平に堆積する焼土・炭化材・炭化物を含む層土の範囲から住居跡として確認した。遺構検出面はLIVである。西側で3号性格不明遺構と重複し、本遺構の方が古く、その他に、116～118・133・139・140・145・147・149号土坑を確認しており、いずれの土坑より本遺構の方が新しい。この重複によって北壁の一部と西壁のすべてを失っていることから本遺構の遺存状態は悪い。

第2節 竪穴住居跡

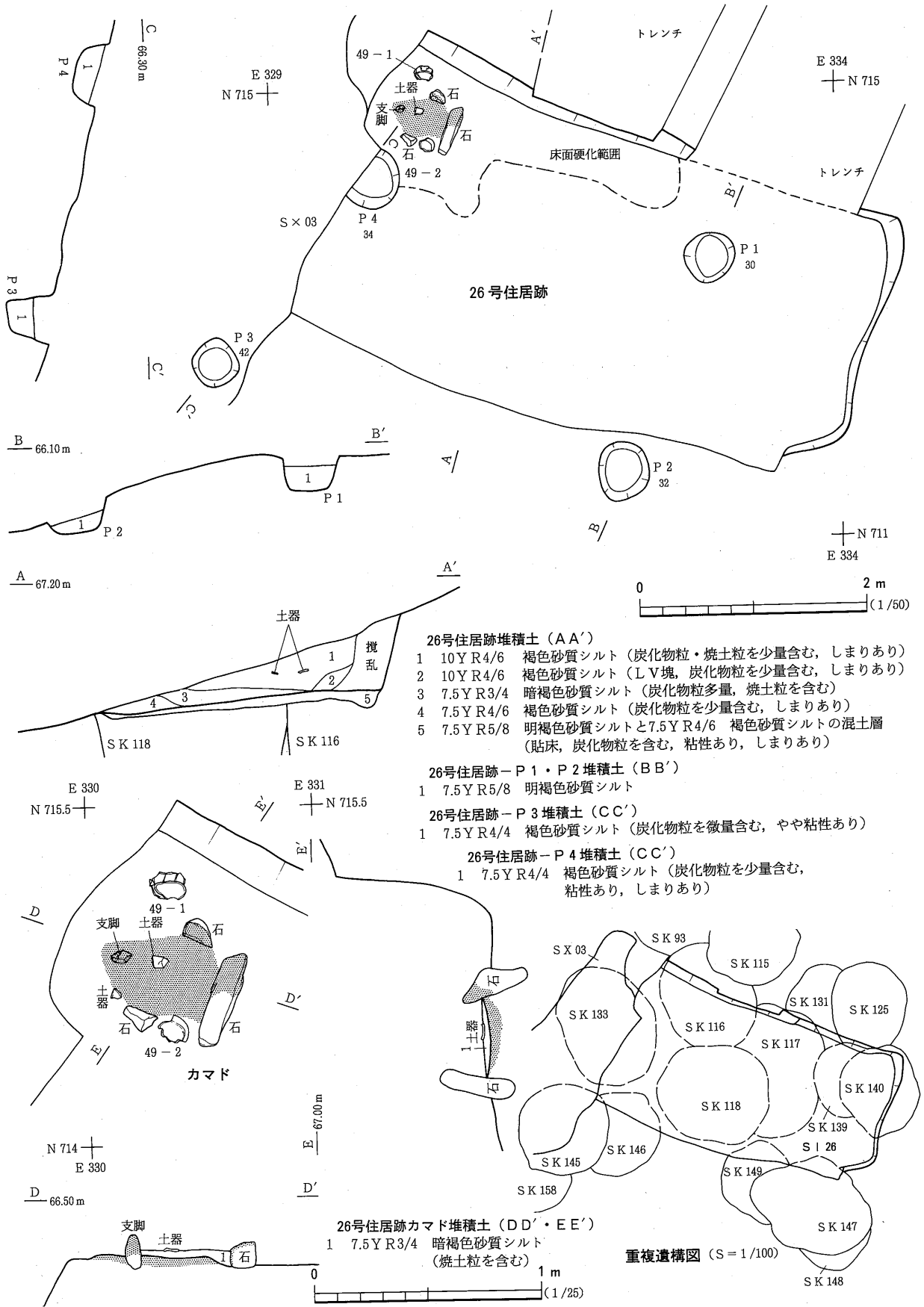


図48 I区26号住居跡

遺構内堆積土は、掘り形内堆積土を含めて5層に細分される。ℓ2は、LV塊を含み壁際に堆積することから、壁の崩落土と考えている。ℓ3は、床面直上に堆積する層で、多量の炭化物と焼土を含んでいることから、火災があった状況を示している。ℓ5は掘り形内堆積土で貼床である。ℓ5を除く堆積土は、いずれも自然埋没状態を示している。

遺構は、遺存する北壁と東壁から方形基調となる住居跡と推定される。西壁の主軸方向は、真北から23°東に向って傾いている。規模は、周壁遺存部で北壁4.70m、東壁2.00mを測る。周壁は、斜面上方側が最も遺存しており、壁高は北壁で65cm前後を測る。北壁では、重複する土坑の堆積土を掘り込んでいるためか、壁は整っていない。床面は、細かい凹凸が認められるもののおおむね平坦であり、北側から南側に向かってわずかに下がり傾斜となる。カマド付近の床面北側では、踏み締まり範囲を確認した。

カマドは、北西側で検出した。袖石、燃焼面範囲内の支脚を確認し、遺存状態は悪い。カマド周辺から白色粘土は確認されなかった。正確な規模は不明であるが、遺存する袖石間の長さは36cm、燃焼面の範囲は52×35cmを測る。袖石は、縦に長い石の平らな面を燃焼側に向けて半分から1/3を床下に埋め込まれ、燃焼面から9～20cm突き出ている。支脚は長さが16cmあり、これも、袖石と同様に床下に埋め込まれ、燃焼面から9cmほど突き出ている。袖石燃焼側と支脚には被熱による赤化が認められる。東側で長さ43cmのある角柱状の礫は一部が被熱により赤化しており、おそらく、焚口部天井を支えていた石と考えている。このことから、カマドの焚口は東側にあり、カマドは西壁に取り付けていたものと考えている。

ピットは床面から4基検出している。P1～4は径40～54cmの円形を呈し、深さは30～42cmを測り、P1～4の規模と深さにはまとまりがある。このうち、P1～P2を結ぶんだラインは、住居跡の東壁に平行し、北壁と直交する。また、住居跡内の位置から判断してP1・P2は支柱穴の可能性が高い。P1～P2の芯々間の距離は2.10mを測る。P3・P4は、カマドが西壁に取り付けていたと考えられ、西壁を推定するとP3が住居跡の外側に出る可能性が高く、P4がカマドに近接することから支柱穴ではないと思われる。ピットの堆積土はいずれも褐色系の砂質シルトで、締まりはさほど感じられない。

遺物 (図49, 写真100)

遺物は図示した図49-1～4の他に、土師器片65点が出土している。遺物は、主にℓ1と床面から出土している。確実に遺構に伴うと考えられる遺物は、カマド周辺から出土した2個体の土師器甕である。

図49-1・2は、土師器甕で小型のもので約半分が遺存する。1・2はカマド周辺から出土している。1は、平底の底部から球状の胴部形を呈し、頸部がすぼまり、口縁部は直に立ち上がる器形である。調整は、口縁部にヨコナデ、胴部外面下端にヘラケズリが認められる。胴部内面には、横方向のヘラナデが認められる。推定口径は12.5cm、器高13.8cm、底径5.0cmを測る。2は、平底の底部から半球状の胴部形を呈し、頸部で段を持ち、口縁部は開くように外傾する。調整は、口縁

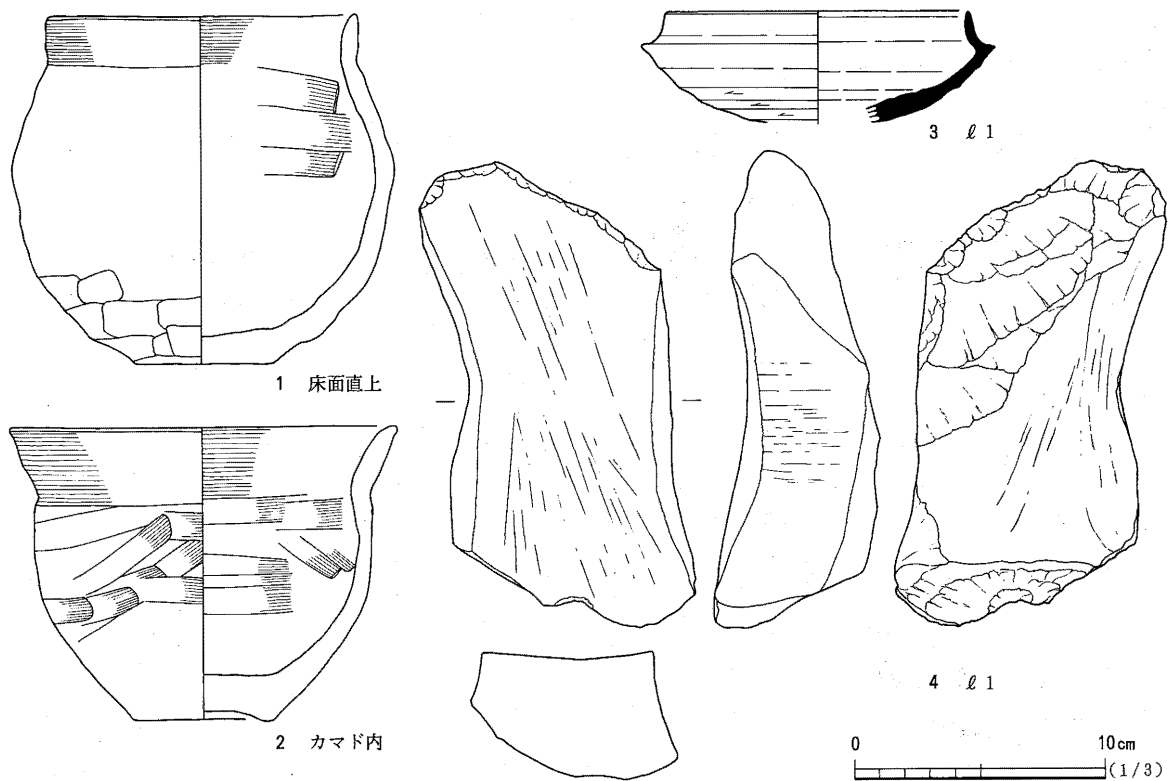


図49 I区26号住居跡出土土師器・須恵器・石製品

部にヨコナデ，胴部にヘラナデが認められる。1・2の胴部外面には火を受けた跡が観察され，全体的に摩滅している。胎土には粗い砂粒が多く含まれる。推定口径は15.5cm，器高11.6cm，底径5.5cmを測る。

図49-3は須恵器杯である。ℓ1から出土した破片で，胎土分析を行なった資料である。丸底で丸みをもって立ち上がり，断面三角形の受部にいたる。立ち上がりは，内傾してからやや外反している。調整は，体部外面下半に回転ヘラケズリが施されている。器厚は底部付近が厚い，体部上半に向かって薄くなる。色調は，灰色または灰白色で，割れ口断面では極暗赤褐色を呈する。胎土は緻密で，焼成は堅緻である。推定口径は12.0cm，残存器高4.5cmを測る。

図49-4はℓ1から出土した石製品の砥石である。石質は中粒砂岩である。表裏面と側面には，研磨が認められるが，端部の割れ口が研磨痕より古いことから，砥石として使用する以前に適当な大きさに割った痕と思われる。研磨面には，金属製品などを研いだと思われる鋭い傷が認められる。最大長18.5cm，最大幅10.4cm，最大厚6.5cmを測る。

まとめ

本遺構は，重複する遺構とトレンチにより遺存状態の悪い焼失家屋である。カマドは，周辺の他の住居跡カマドに比べ袖に相当する部分に白色粘土を使用しておらず，石を利用する点が異なっている。本遺構の時期については，カマドと床面直上から出土した土師器，及び須恵器杯から6世紀前半と考えられる。

(国 井)

27号住居跡 S I 27

遺 構 (図50・51, 写真43・44)

本住居跡はN4グリッドで検出され、18号住居跡によって北東コーナーを削りとられている。また、当グリッドは大型円形土坑の密集区であり、45号土坑を初めとして多数の土坑が当住居跡下層から確認されている。

検出面はLⅢおよびLⅣであるが、南辺ラインは浸食による急崖に消え、さらに西壁の一部は表土及び木材搬出のための取り付け道路によって削平されるなど、検出プランとしては北西コーナーから北壁ラインのみが確認されるものである。

遺構の掘り込みは上記の削平部分で土層観察ができるような形で行い、堆積土の観察では自然の流入土によって当遺構の埋没したことが理解され、併せて最下層に多量の炭化物と焼土が混入していることから火災住居跡であることが判断された。

全体の平面形は遺存する床面の範囲から方形を呈すると考えられ、遺存する部分の下端での東西長は4.6mを測り、南北長は3.1mまで認められる。壁は北西コーナーから北辺にかけて遺存し、西側から東側に向かって70～50cmの高さで徐々に高さを減じている。東及び南壁側は表土下で床面が検出される状態であり、壁は急崖方向に流出したものと考えられる。床面は北半ではI区の基盤である黄褐色砂岩が表れているが、中央から南側では下層に土坑が存在する関係で褐色土基調となっている。また床面のほぼ全体から炭化物と焼土が多量に検出されたが、小片が大半で建築部材として復元できるものは認められなかった。

カマドは北壁の中央よりやや東側に位置し、住居プラン内に燃焼部を持つ両袖タイプのものである。構築方法として両袖の端部に直方体の粘土を立て、その上端に直方体粘土を掛け渡して焚口を作るもので、遺存状態は良好である。掘り込みは初めに燃焼部に堆積した土の除去から行ったが、掘り込み中にスサ入りの粘土が上層に薄く認められ、さらにカマド内に設置された土師器甕の肩部やカマド袖部にも貼り付くように堆積しているのが観察された。この状況からするとカマド燃焼部上面はスサ入り粘土で密封されていたと思われ、設置された甕も粘土で固定され取り出しできない構造であったことが理解される。焚口は掛け渡した粘土が東袖側でずり落ちてやや変形しているが形状を良く止めており、断ち割った結果では袖端部の粘土は床面に掘られたピット状の掘り形に据えられているのが把握された。崩れを修復して焚口を計測すると、幅50cm前後、高さ約20cmに復元され、掛け渡した粘土(焚口天井)の下面は薄く酸化している。燃焼部は袖基部に赤褐色土が三角堆積していることから袖頂部は稜線となり、内壁はすり鉢に立ち上がっている。煙道は堆積土から地下式であったと判断され、燃焼部奥から155cmの長さで住居跡外に伸び、燃焼部側から煙出し側に向かって徐々に幅を増す形態となっている。また焚口部と煙道部入り口付近には火を受けたことによる酸化範囲が認められることから、燃焼部内の火回りは良好であったと考えられる。

カマド西脇の床面では他の部分より10cm前後高くなったベット状の高まりが認められたが、下

第2節 竪穴住居跡

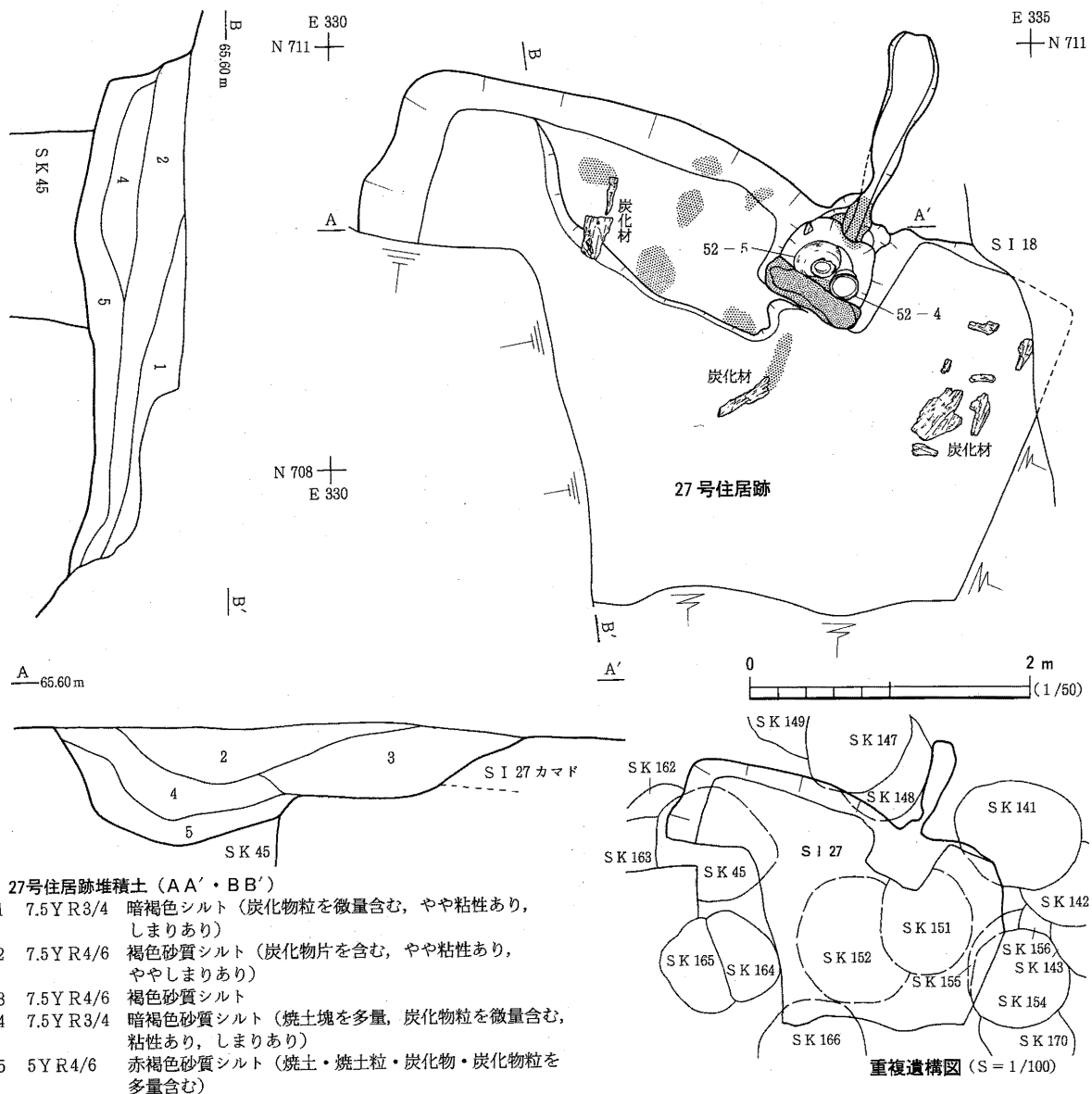


図50 I区27号住居跡

層に存在する土坑との重複状況を考慮すると、ベット状の部分には土坑が存在しないことから、必然的な地盤沈下によって生じた段差をそのまま利用したものと考えられる。なお、火災による床面の酸化部がベット状部分に集中するが、地山をそのまま床としていることから酸化範囲が遺存しやすいと思われる。また柱穴は確認できなかったが、土坑との重複部に存在した場合は状況として検出困難であり、その有無は不明としておきたい。

遺物 (図52, 写真58・59)

図52-1～5は住居跡内及びカマドから出土した土師器である。図52-1はカマド脇の3から出土した杯で、丸底から口縁部と体部の境に段を形成して立ち上がり、口縁部が外反するものである。口径15.0cm, 残存高5.8cmを測り、調整は全体にヘラミガキが施されているが、外面では下地調整のヨコナデとヘラケズリが観察される。図52-2は煙道内から出土した杯であるが、朱彩が

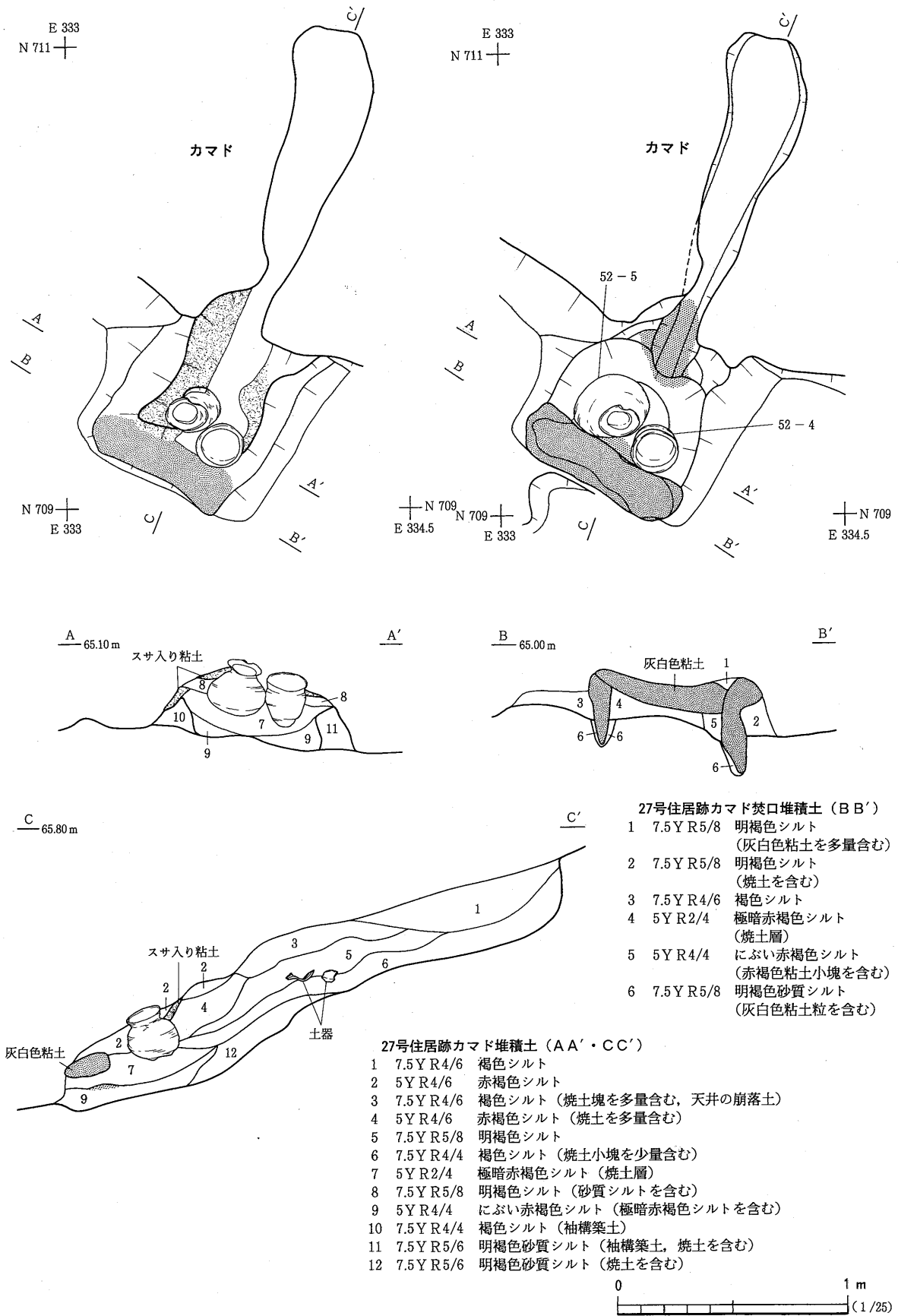


図51 I区27号住居跡カマド

第2節 竪穴住居跡

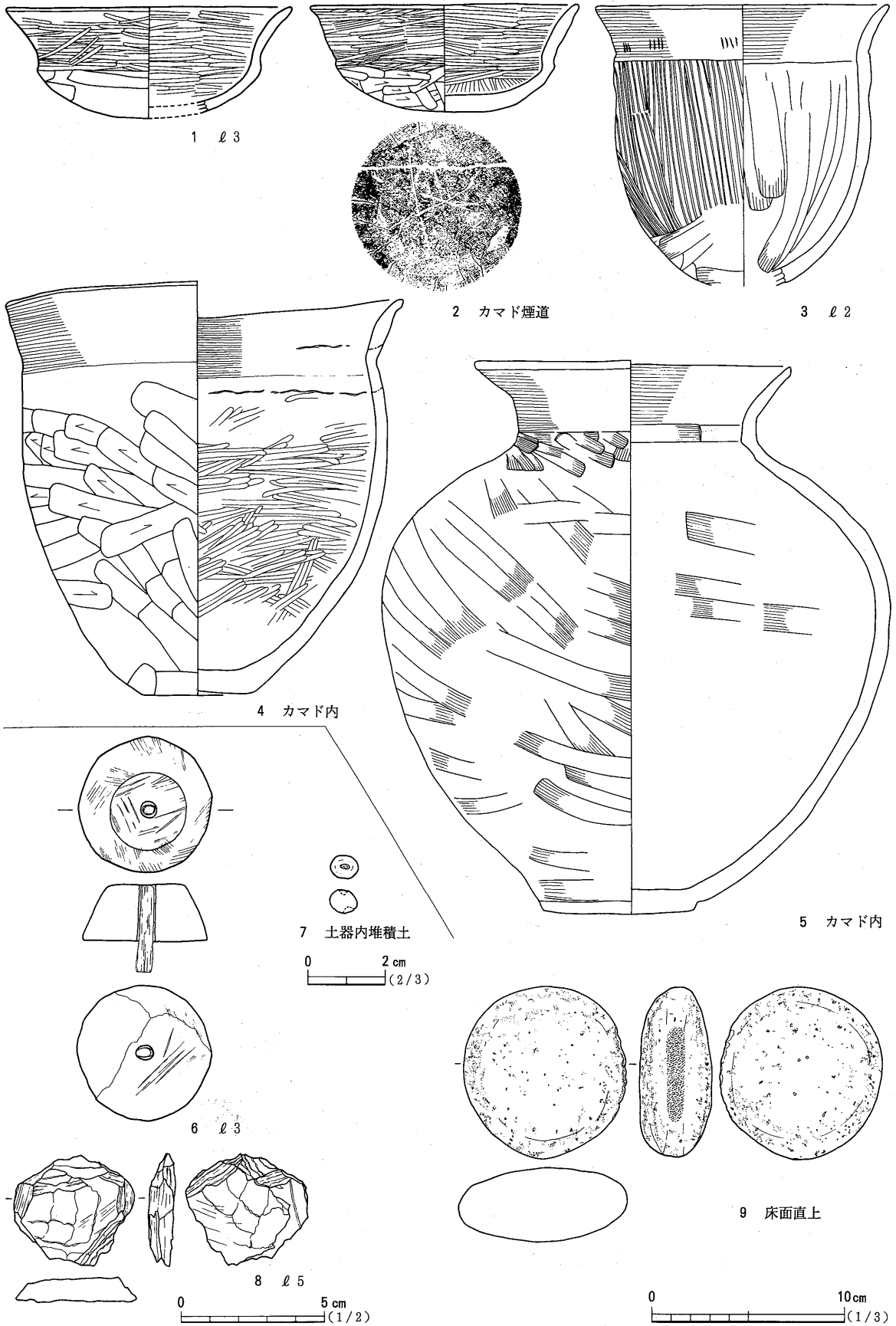


図52 I区27号住居跡出土土師器・石製品・土製品・石器

認められ火を受けていないことからカマド廃絶後に入り込んだものと考えられる。図52-1に比べ口縁部の開きが弱く、口径14.0cm、器高5.6cmを測る。調整は全体にヘラミガキが施されている。

図52-4・5はカマド内に併置されていた甕であるが、設置されてまもなく廃絶したためか器表面はさほど荒れていない。図52-4は口径20.9cm、器高21.5cm、底径5.3cmで口径と器高の差がほとんど無く、頸部のすばまりも弱いものである。調整は口縁部ヨコナデ、体部外面にはヘラケズリとヘラナデ、内面はヘラミガキが観察される。図52-5は最大径(26.9cm)を張りのある肩部に有し、口径16.4cm、器高28.9cm、底径7.8cmを測る。調整は口縁部がヨコナデ、体部外面はヘラケズリの後にヘラナデ、内面はていねいなヘラナデが観察され、外面にはカマド構築粘土の付着している部分がある。また、図52-5内の土から長さ3.5cmのイガイと思われる貝殻と土玉状の小さな球形品(図52-6)が1点ずつ出土しているが、当初から甕内にあったのか、後に混入したのかは不明である。

図52-3は住居跡内堆積土上層から出土した底部を欠いた小型の甕で、口径15.4cm、残存高14.5cmを測る。調整は口縁部がヨコナデ、体部外面にはハケメ、体部内面にはヘラナデが観察され、内面は比較的ていねいな仕上げとなっている。

図52-7は石製の紡錘車で床面より出土している。断面台形を呈す上辺の径は2.6cm、下辺の径4.6cm、高さ1.9cmを測り、中央に径0.55cmの孔がうがたれ、全体に作製時のものと考えられる擦痕が観察される。中央の孔には断面楕円形の炭化した軸木が遺存しており、軸木は上辺側より下辺がやや偏平になり、長径を増す傾向にある。おそらく火災に遭い炭化することによって遺存したものと考えられる。

図52-8は住居跡内堆積土下層から出土したもので、石製模造品の未製品と考えられ、長径4.2cmを測る偏平で多角形の滑石である。測縁を研磨して角を調整している部分がみられ、形状などからして完成品は有孔円盤が想定される。

図52-9は床面よりややういた状態で出土した長径9cmの円礫で、縁辺の一部に敲打痕が観察される。形状としては縄文時代の敲石と変わらないもので、おそらく住居埋没時に混入したものと思われる。

ま と め

本住居跡は削平によって住居プランの失われている部分も多いが、幸いにもカマド付近の遺存状態が良好であり、カマドには2個体の甕が設置された状態で検出されている。また、当遺跡古墳時代古段階住居跡の例にもれず本住居跡も火災にあっており、その時期は土器の特徴からすると6世紀前半が考えられる。

(安 田)

28号住居跡 S I 28

遺 構 (図53, 写真45・45)

本遺構は、I区西部のO1グリッドに位置する竪穴住居跡である。北東から南西に下る急斜面

第2節 竪穴住居跡

が、やや緩やかに変化する所に掘り込まれている。175号土坑と重複するが、本住居跡の方が古い。検出面はL II bの下位で、褐色土の円形プランとして確認されたが、検出段階ですでに敷石の一部が露出していたため、遺存状態の悪さが予想された。掘り込みはL II cに達していたが、やはり周壁の残存状態は悪く、炉跡も確認できなかった。遺構内堆積土は大略3層に分かれる。ℓ 1はL II b上部の土に類似し、斜面の上方からの流入土とみられる。ℓ 2も自然流入土だが、L II b下部の土に似ているため、壁面からの崩落土が多く混入しているとみられる。ℓ 3は厚さ5～15cmの床面構築土で、L II b下部の土に、L II cに類似した土のブロックが混入していた。

住居跡の平面形は、南西寄りの周壁が遺存しないため不確定だが、円形または楕円形を呈するものとみられる。東西方向の直径は3.7m、南北方向の残存長は2.6mである。周壁の立ち上がり角度は60°前後と比較的緩やかで、最も残りが良い斜面上位の部分の残存高は33cmを測る。周壁は斜面下位ほど残りが悪く、南側の壁面はすでに遺存していなかったが、これは本住居跡が斜面にあり、周壁の崩落・流出が著しかったためであろう。床面は検出面の傾斜と一致した方向で、7°南西に傾いている。図のように石が床面全体に散在しているが、住居跡の中央やや西寄りの箇所は、明らかに石が敷かれた状態であった。敷石は径10cm程度のものから最大30cmの角礫を用い、石と石の隙間に埋めたとみられる小さな円礫もみられる。石の厚さは5～15cmとばらつきがあり偏平なものばかりではないが、各石の平坦な部分が上になるように埋められている。遺構内の石の中で、意図的に敷かれていると判断できた石の数は約40個である。その他にも40個程の石が床面から突出した状態で散在しているが、本住居跡のある斜面上方のN2グリッドには石の露頭があり、これらの石は斜面上方から流れ込んだ可能性もある。ただ、ℓ 3に半ば埋まっていること、南側の周壁が遺存しないほど崩落・流出が進んでいることから、これらの石も敷石が攪乱を受けたものである可能性が高い。恐らく、床面構築土の多くが流出しているのであろう。

炉跡は、複式炉の存在が想定されたが、いくつかの痕跡が観察されたに止まった。まず、図53-2に示した深鉢は、炉の埋設土器であった可能性が高いが、平面図や写真46-2のように横に潰れた状態で出土している。また、この土器の約30cm北側から出土した大きな円礫は、一部が被熱していた。さらに土器の西方約70cmの地点に、直径30cmほどの広さで焼土化した箇所がみられた。また、この焼土化した箇所の北側に隣接する偏平な石は、被熱が原因とみられる表面の劣化が著しかった。以上のような痕跡から、複式炉が本住居跡の中央やや南寄りに存在したと推察される。炉跡が遺存しなかったのは、前述のように本住居跡が激しい攪乱を受けたためであろう。

ピットは床面上で3基、床面構築土除去後に4基の計7基が確認された。ℓ 3除去後に検出されたP1・4・6・7は、上端を破線で示した。ピットはいずれも周壁寄りに位置することから、柱穴である可能性が高い。特にP1の堆積土は炭化した木片を含み、人為堆積土と判断された。ピットの長軸長は20～38cm、床面上で検出されたピットの深さは16～27cmである。その他のピットの深さは13～27cmだが、仮に床面から計測すると27～46cmとなる。この様にℓ 3除去後に検出された柱穴は、床面で検出されたピットより深い傾向にあることから、柱の建て替えが行われたの

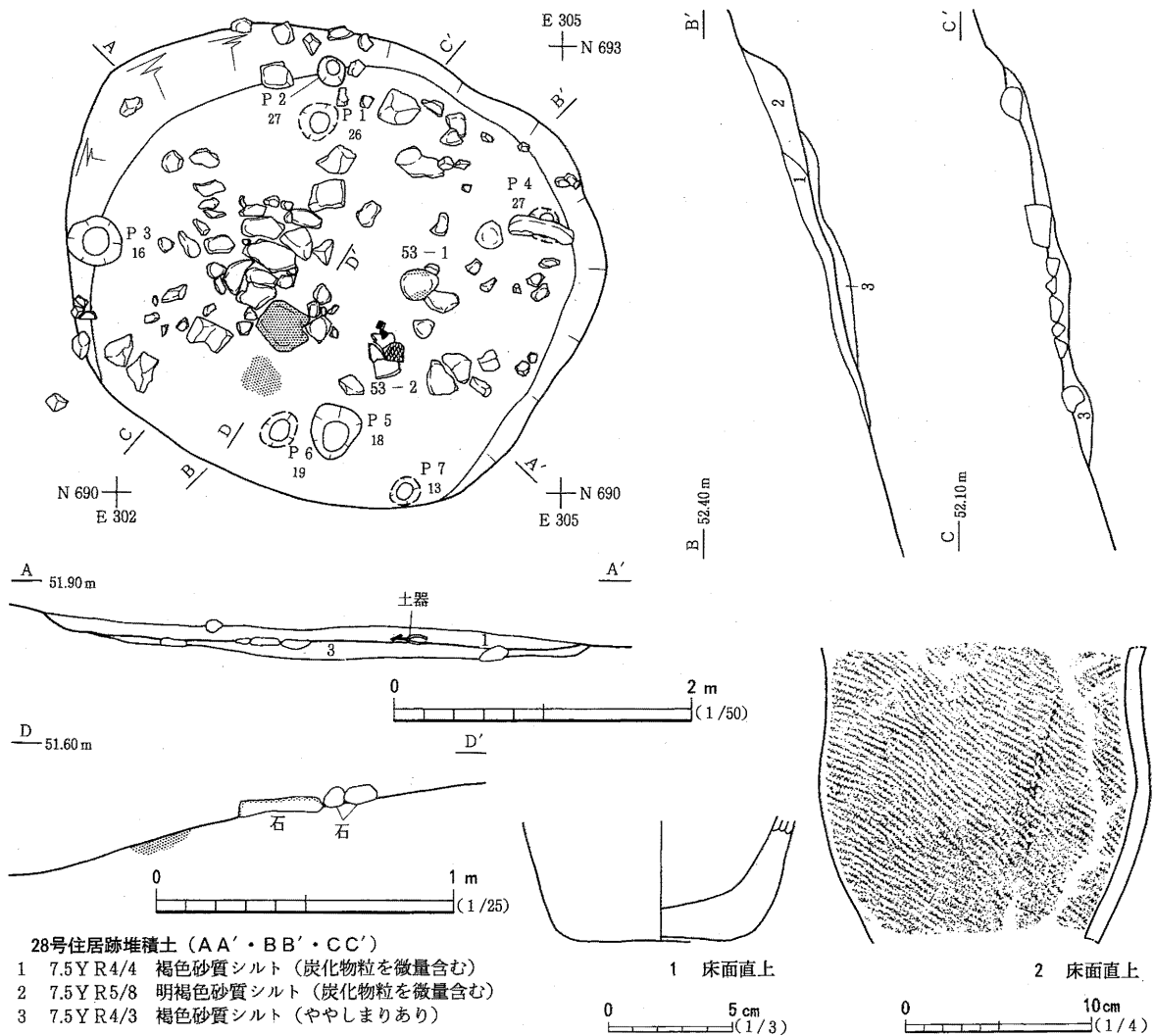


図 53 I区 28号住居跡，出土縄文土器

かもしれない。

遺物 (図 53, 写真 59)

床面から出土した2点を図示したが，この他に縄文時代中・後期の土器片 18 片，土師器 2 片が出土している。図 53 - 1 は厚手で無文の底部片で，底径 5.2 cm を測る。同図 2 は深鉢形土器の胴部で，胴部最大径は 15.9 cm である。胴部上位が緩く括れる器形を呈する。土器の割れ口は，輪切りにしたかの様にきれいに整っている。器面全体に，原体 RL の縄文が，縦位に施文されている。1 は縄文時代中期，2 は中期末葉と考えられる。

まとめ

本遺構の機能した時期は，部分的ではあるにせよ敷石がみられることと，床面から出土している図 53 - 2 の年代観から，縄文時代中期末葉と考えられる。隣接して存在する 25 号住居跡との関連が推察される。また，I区東部に密集して存在する大型円形土坑とは，直接につながりをしめす資料は出土していないが，両者間の関連が予想される。

(今野)

第3節 土 坑

第2次調査I区で検出された土坑は146基である。その中で124基の大型円形土坑はI区東部において密集して存在し、大半が古墳時代竪穴住居跡の下層から検出されていることから縄文時代の遺構と考えられる。遺構番号は平成6年度第1次調査からの継続番号で、今回は34号(SK34)から始まっている。なお、円形土坑については形態が近似していることから、本報告では節の後半にまとめて記述することとした。

34号土坑 SK34

遺 構 (図54, 写真51)

本遺構は、O50'グリッドのLⅢa上面で検出されている。後述するように、遺物や堆積土からみてLⅡbの下部で検出できた可能性もあるが、表土剥ぎの際に上部を削平してしまったのであろう。周囲は南西に下る斜面で、本遺構の斜面下方3.5mには21号住居跡がある。また西方1.8mには、本遺構と規模及び平面形がよく似た40号土坑がある。堆積土は2層に分かれた。ℓ1はLⅡbによく似た自然堆積土である。ℓ2は壁の直下に緩やかに堆積し、LⅢaに類似しているため、周壁からの崩落土であろう。

本遺構は東西にやや長い隅丸の方形を呈し、長軸長84cm、短軸長65cmの平面規模を有する。底面に凹凸は無く、若干南側が低い。周壁はほぼ垂直に立ち上がる。周壁の残存高は8～13cmで、検出面から底面最深部までの深さは25cmである。

遺 物 (図58)

図58-1・2は同一個体で、ℓ1から出土している。全体の約1/3が遺存しているが、約80片に細かく割れていたため、接合しきれなかった。平縁に隆帯を有し、胴部は縄文地に横沈線が施されている。遺物の年代は加曽利B式期とみられる。

ま と め

堆積土中からではあるが図58-1が出土していること、ℓ1が同期の遺物を包含するLⅡbに類似していることから、縄文時代後期中葉の土坑である可能性が高い。その性格については明らかにできなかったが、壁が崩落しているなど覆土は自然堆積土と判断される。このことから、本遺構が墓坑である可能性は低いと言えよう。 (今野)

40号土坑 SK40

遺 構 (図54, 写真51)

本土坑は、I区西部のO50'グリッドに位置し、34号土坑が東方に近接する。検出面はLⅢa上面で、他の遺構との重複はない。2層の堆積土は、34号土坑に近似した小礫混じりの土で、いず

れもレンズ状の堆積を示し、自然堆積の状況を呈する。

平面形は隅丸方形で、長軸 57cm、短軸 51cmの平面規模を有する。壁の立ち上がりは緩やかで、底面は椀状を呈する。検出面から底面最深部までの深さは 28cmを測る。

ま と め

本土坑は出土遺物がなく、その機能時期は不明だが、34号土坑と堆積土や平面規模が類似しているため、縄文時代後期中葉の所産と考えられる。覆土が自然堆積の様相を呈することから、墓坑の可能性は低いと判断される。(渡 辺)

50号土坑 SK50

遺 構 (図54)

本土坑は、I区西部のO50'グリッドに位置し、南西方1.9mに21号住居跡が近接する。LIIb上面で検出され、他の遺構との重複はない。遺構内堆積土は2つに分層され、 $\ell 1$ はLIIaに近似し、 $\ell 2$ はLIIaとLIIbの中間的な色調で5cm大の礫数個を含んでいる。2層ともにレンズ状の堆積を示し、自然堆積の状況を呈する。

遺構の平面形は楕円形で、長軸 90cm、短軸 76cmの平面規模を有する。底面はほぼ平坦で斜面に沿って緩やかに傾斜している。壁は南東部でやや急峻に立ち上がり、検出面から底面最深部までの深さは 36cmを測る。

遺 物

縄文後期の土器 1片が出土しているが、細片のため割愛した。

ま と め

本土坑の性格については不明であるが、検出面や堆積土から判断して、その機能時期は古墳～平安時代頃と考えたい。(渡 辺)

51号土坑 SK51

遺 構 (図54)

本土坑は、O49'・50'グリッドにまたがって位置し、本土坑の南方 1.3mに22号住居跡が近接する。LIIbで検出し、他の遺構との重複はない。遺構内堆積土は2つに分層され、 $\ell 1 \cdot 2$ ともにLIIbに似ており、堆積状況からいずれも自然堆積である可能性が高い。遺構の平面形は楕円形を呈し、長軸 104cm、短軸 80cmの平面規模を有する。底面は比較的平坦で、壁はやや急に外傾しながら立ち上がっている。検出面から底面最深部までの深さは 42cmを測る。

遺 物

弥生土器 2片、土師器 1片が出土したが、細片のため図示しなかった。

ま と め

遺構に伴う遺物がないため、その年代および性格については不明である。(渡 辺)

52号土坑 SK52

遺 構 (図54)

本土坑は、I区西部のO49'グリッドに位置する。22号住居跡と重複し、本土坑の方が新しい。遺構内堆積土は、2つに分層された。ℓ1は流入土、ℓ2は壁際のみ堆積しているため壁の崩落土とみられる。遺構の平面形は不整楕円形を呈し、長軸121cm、短軸85cmの平面規模を有する。底面は平坦で、斜面に沿って南に傾いている。壁は急峻に立ち上がり、検出面から底面最深部までの深さは39cmを測る。

ま と め

本土坑からの遺物はなく、その所属時期および性格については不明である。重複関係から、縄文時代後期中葉以降の所産と考えられる。(渡 辺)

61号土坑 SK61

遺 構 (図54, 写真51)

本土坑はI区西部のO48'グリッドに位置し、本遺構の南方1mに70号土坑が近接する。LIIb上面で炭化物粒が混入した土の不整形な広がりが見られた。そのため精査を行ったところ、黒色土の楕円形プランが確認された。遺構内堆積土は2層に分層され、いずれもレンズ状に堆積し自然堆積の状況を呈する。ℓ1・2とも炭化物粒を含み、ℓ2からは長さ8cm程の木炭が出土した。遺構の平面形は隅丸方形を呈し、長軸192cm、短軸141cmの平面規模を有する。底面は椀状を呈し、壁は緩やかに立ち上がっている。検出面から底面最深部までの深さは74cmを測る。

ま と め

本土坑から木炭以外の遺物は出土していない。遺構の性格は不明だが、近在に木炭焼成土坑が営まれた時期には、本土坑が開口していたと推察されることから、所属時期については平安時代頃と考えられる。(渡 辺)

67号土坑 SK67

遺 構 (図54, 写真51)

本遺構は、O1グリッドのLIIIa上面で検出されている。南西に下る傾斜角28°の急斜面に立地する。重複する遺構はなく、本遺構の南東方向1.2mに157号土坑が、南西方向3.5mには28号土坑が隣接する。堆積土は1層のみで、壁からの崩落土等は観察されなかった。ℓ1はLIIcとLIIIaがブロック状に混入していることから人為堆積土の可能性が高い。

平面形は南西側の壁が遺存しないため判然としないが、東西に長い楕円形を呈していたものと推察される。南西側の壁は、本遺構が斜面に立地するため流出したのであろう。平面規模は長軸240cm、短軸の残存長150cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁の高さは最も残りの良い北東側で

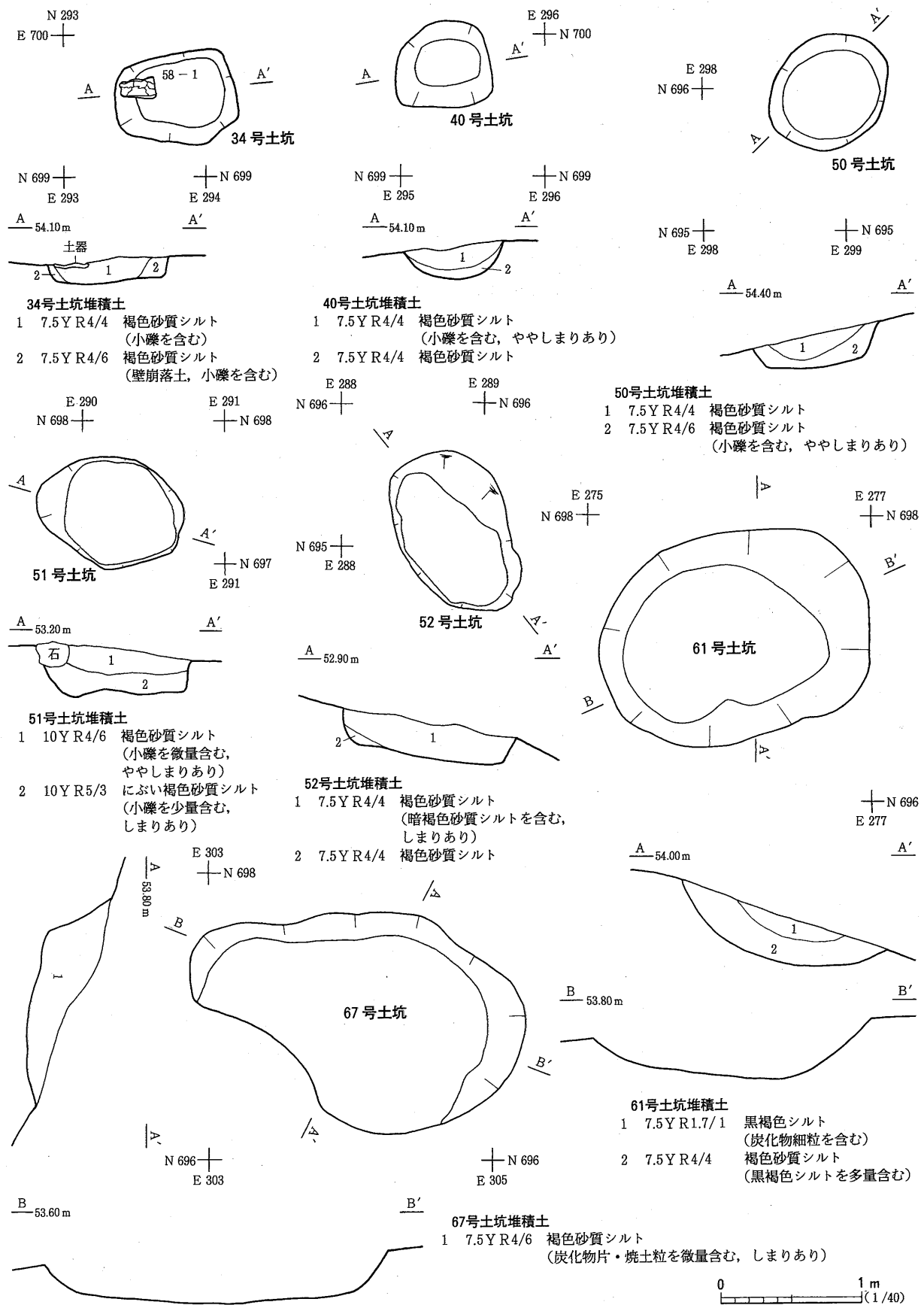


図54 I区34・40・50～52・61・67号土坑

第3節 土 坑

46cm, 検出面から底面最深部までの深さは56cmである。底面は土坑の中央に向かってごく緩やかに傾斜している。底面に細かい凹凸は無く, また踏み締まり等も観察されなかった。

遺 物 (図58)

縄文土器の細片が17点出土している。うち4点を図示した。3は平行沈線が横走り, 沈線に沿うように「D」字状連続刺突が施文されている。4は胴部上位の破片とみられ, 格子目文が施されている。5も緩く外反することから胴部上位の破片とみられる。平行沈線間に斜線を施した文様帯区画線が横走る。その上位に弧状刺突の充填文が, 下位には角棒状工具による刺突文が施されている。6は胴部下位の破片とみられ, 文様帯区画線の下位に丸刀状工具による短沈線が横位に施文されている。3~6の年代は, いずれも縄文時代早期中葉と考えられる。

ま と め

検出面がLⅢaであること, 縄文時代早期中葉の遺物を少量ながら出土することから該期に属する遺構である可能性が高い。その性格についてだが, 遺物が少ないことからゴミ捨て穴ではないであろう。規模は大きい, 覆土が人為堆積土であることから墓坑であった可能性もある。(今 野)

70号土坑 SK70

遺 構 (図55)

本土坑はI区西部O48'グリッドのLⅡb中位で検出されている。重複する遺構はなく, 本遺構の北方1mに61号土坑が近接する。遺構内堆積土は2つに分層された。木炭とみられる炭化物片をℓ1・2とも含んでいるが, 人為堆積か否かは判然としなかった。遺構の平面形は隅丸方形を呈し, 長軸95cm, 短軸94cmを測る。底面は平坦で, 周壁は急峻に立ち上がっている。周壁の所々に焼けて硬化した箇所が確認されるが, やや緩やかに立ち上がる南東壁には焼け面がみられず, 周壁の崩落した様子うかがえる。

ま と め

本土坑に遺物の出土はなく, 所属時期を特定するのは困難であるが, 壁のようすから木炭焼成土坑の可能性が高い。 (渡 辺)

71号土坑 SK71

遺 構 (図55)

本土坑は, I区西部のO47'グリッドに位置する。LⅡb下位で検出され, 他遺構との重複はない。遺構内堆積土は2層に分層された。ℓ1・2ともにLⅡbに類似し, ℓ1は斜面上位からの流入土, ℓ2は周壁からの崩落土と考えられる。

遺構の平面形は不整楕円形を呈し, 長軸210cm, 短軸154cmの平面規模を有する。底面に顕著な凹凸はないが, 全体的に南に向かって大きく傾斜している。周壁は比較的緩やかに立ち上がり, 残存高は10~51cmを測る。

遺物

土師器4片が出土しているが、細片であるため図示しなかった。遺物の年代は不明である。

まとめ

本土坑に明確に伴う遺物が出土していないため、所属時期は不明であり、その性格についても明らかにできなかった。(渡辺)

76号土坑 SK76

遺構 (図55)

本土坑はN7グリッドに位置し、1m西側には14号住居跡が認められる。検出面はLⅢ赤褐色土面で、堆積土は炭化物を含む黄褐色土1層だけである。平面形は楕円形基調のもので上端ラインで長軸100cm、短軸80cmを測り、深さは23cmである。壁の立ち上がりは緩やかで断面は皿状を呈し、底面全体が比較的平坦である。

まとめ

本遺構からの出土遺物はなく年代比定の決め手を欠くが、検出段階にプラン周囲から隣接する14号住居跡と同様の特徴を有す土師器片が出土している。おそらく両遺構は同時に機能していたと考えられるが、性格については不明である。(安田)

83号土坑 SK83

遺構 (図56)

本遺構は、O48'グリッドのLⅡbで検出されている。周囲は南に下る緩斜面で、本遺構の南東1.6mに4号性格不明遺構が、南方2.8mには84号土坑がある。堆積土は2層に分かれた。ℓ1・2ともLⅡbに似た自然堆積土である。ℓ2は壁の直下に堆積するため、壁からの崩落土である可能性が高い。

遺構の平面形は不整楕円形を呈し、長軸154cm、短軸87cmの規模を有する。底面は直径約50cmと上端に対して小さく、不整円形を呈している。壁は急峻に立ち上がるが、南西方向では比較的緩やかである。検出面から底面最深部までの深さは116cmと深い。

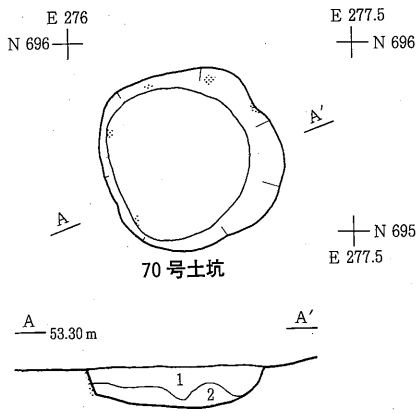
遺物

縄文早期の属するとみられる土器片1点が出土しているが、細片のため割愛した。本遺構の掘り込みがLⅡcに達しているため、流入したものであろう。

まとめ

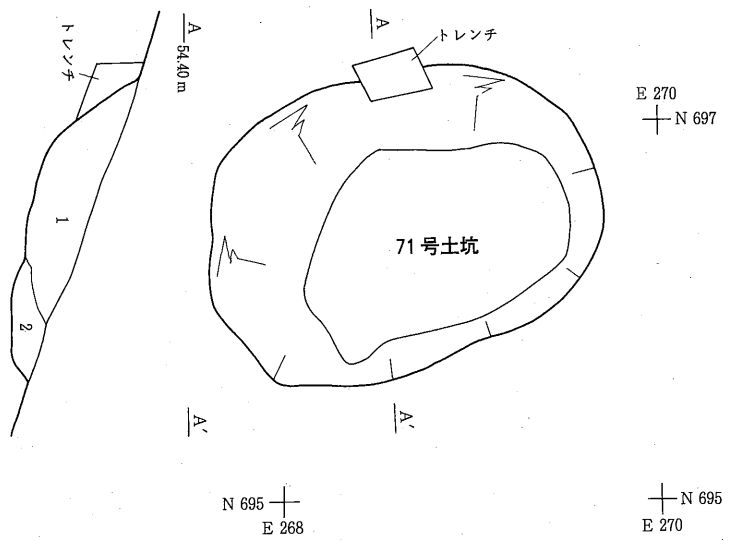
遺物が出土していないため、その所属時期は不明である。ただ、LⅡbに類似した土が堆積していることから、縄文時代中・後期の土坑である可能性が高い。その性格についても明らかにできなかったが、近在では群を抜いて深いこと、壁の一方が緩やかであることから、柱状のものを抜き取った痕跡とも考えられる。(今野)

第3節 土 坑



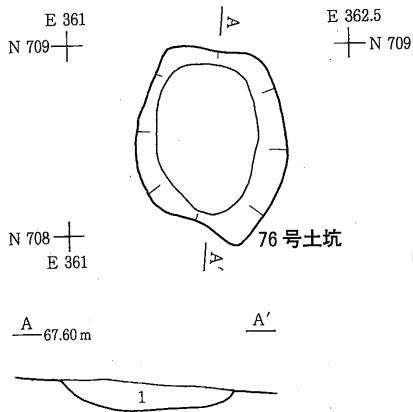
70号土坑堆積土

- 1 7.5Y R3/2 黒褐色砂質シルト
(黒褐色シルト塊・炭化物片を微量含む)
- 2 7.5Y R2/2 黒褐色砂質シルト
(褐色シルト・炭化物片を少量含む)



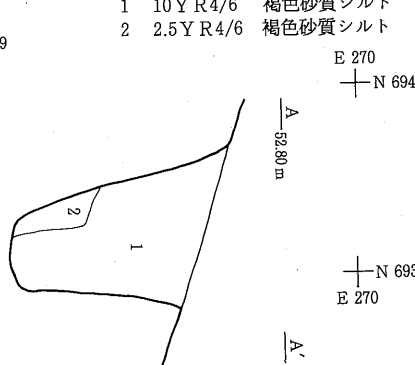
71号土坑堆積土

- 1 10Y R4/6 褐色砂質シルト
- 2 2.5Y R4/6 褐色砂質シルト



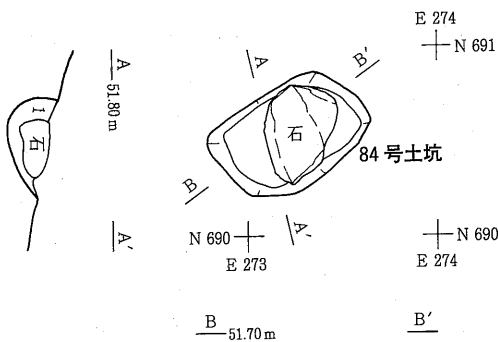
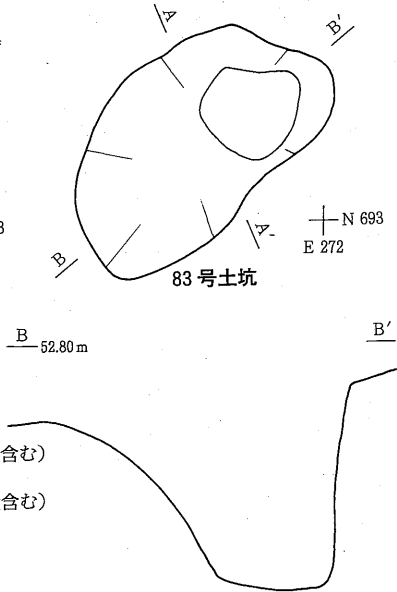
76号土坑堆積土

- 1 10Y R5/6 黄褐色シルト
(炭化物粒を少量含む)



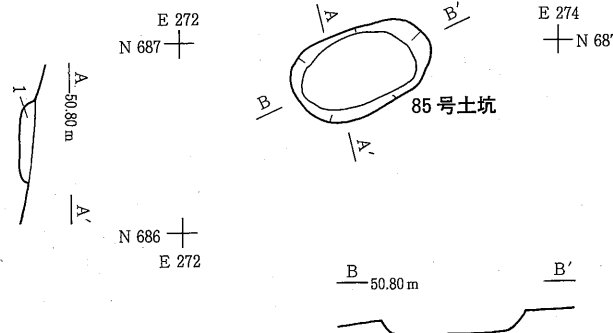
83号土坑堆積土

- 1 7.5Y R3/4 暗褐色砂質シルト
(明褐色砂質シルトを斑状に少量含む)
- 2 7.5Y R5/6 明褐色砂質シルト
(暗褐色砂質シルトを斑状に微量含む)



84号土坑堆積土

- 1 7.5Y R3/2 黒褐色砂質シルト
(炭化物片を多量, 焼土を微量含む)



85号土坑堆積土

- 1 7.5Y R3/2 黒褐色砂質シルト
(炭化物片を多量含む)

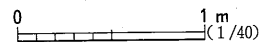


図 55 I 区 70・71・76・83～85号土坑

84号土坑 SK84

遺 構 (図55)

048'グリッドで検出した土坑である。検出面はLⅡbの下部だが、壁の残存高からみてより上位で検出できた可能性が高い。重複する遺構はないが、南方3.0mに85号土坑が、北西方向5.0mには70号土坑があり、本遺構との関連が推察される。堆積土は1層のみである。LⅡaに似ているが自然堆積土か否かは分からなかった。木炭と見られる炭化物片が出土したが、原材の形を止めるものは認められなかった。

本遺構は、長軸80cm、短軸52cmの長方形を呈している。長軸方向はN50°Eを指す。周壁はオーバーハング気味に立ち上がるが、周壁の残存高は9～13cmと遺存状態が悪い。底面は船底状を呈し、検出面から底面最深部までの深さは27cmである。底面からは直径50cmの礫が突出している。この礫は土坑の底面よりさらに40cm背ほどLⅡbに食い込んでいるため、土坑掘り込み後に遺棄されたものではない。礫の露出している部分は、表面が黒く煤けていた。

ま と め

遺存状態が不良なためその性格について明確にはできなかった。しかし、堆積土が木炭片と焼土を含んでいる点とその形態から、木炭を焼成した土坑の底部である可能性がある。本遺構からの出土遺物がないため、遺構の正確な年代は不明であるが、平安時代頃と考えたい。(今野)

85号土坑 SK85

遺 構 (図55)

84号土坑に隣接するP48'グリッドで検出した土坑である。検出面はLⅡbの下部である。重複する遺構はない。堆積土は1層のみである。70・85号土坑に良く似た黒褐色土で、木炭と見られる炭化物片を多く含んでいた。平面プランは隅丸長方形を呈し、規模は長軸78cm、短軸46cmを測る。長軸はN65°Eを指し、84号土坑と方向を揃えている。周壁の残存高は4～8cmで遺存状態が非常に悪い。底面は全体的に水平で細かい凹凸もなく、整形されている可能性がある。

ま と め

遺存状態が不良だが、70・84号土坑によく似た黒褐色土が堆積していること、底面が水平に保たれていることから木炭焼成土坑の底部とみられる。本遺構からの出土遺物はないが、遺構の年代は平安時代頃と考えたい。(今野)

96号土坑 SK96

遺 構 (図56, 写真52)

本遺構は、048'グリッドのLⅡb下位で検出されている。重複する遺構はないが、東側に70号土坑が隣接する。また、本遺構の東方9.0mには22号住居跡がある。堆積土は2層に分かれた。

第3節 土 坑

ℓ 1 は L II b に類似し、ブロック状の土等は見られなかった。ℓ 2 は南壁の直下にだけ堆積している。本層はいわゆる三角堆積を成していないため、周壁からブロック状に崩落したか、人為的に投棄されたものとみられる。

検出面での平面プランは東西にやや長い楕円形を呈し、長軸 72 cm、短軸 62 cm の規模を有する。底面は直径約 40 cm の円形を呈し、全体が斜面に沿って南に緩やかに傾斜している。周壁は急峻に立ち上がり、検出面から底面最深部までの深さは 31 cm である。図示したように、本遺構からは完形の深鉢形土器が出土している。土器は底部が土坑の底面に接し、斜面下方に傾いた状態で出土した。土器内の堆積土と ℓ 1 を比較したが、判別はつかなかった。また土器内から遺物は出土していない。

遺 物 (図 58)

本遺構から出土した遺物は図 58 - 17 の深鉢形土器のみで、口径 23.0 cm、底径 7.4 cm、器高 22.7 cm を測る。胴部が直線的に開き、中位でわずかに括れる器形を呈する。胴部全体に、櫛歯状工具による粗雑な格子文が描かれている。工具の幅は 3.5 cm、歯の数は 8 本ほどである。底部には網代痕がみられる。遺物の年代は縄文時代後期中葉とみられる。

ま と め

土器埋設遺構と考え調査したが、土器に比べ平面プランが大きいため土坑として扱った。堆積土が人為堆積であるという積極的な根拠を確認できなかったが、出土した土器が意図的に埋設された可能性も捨てきれない。遺構の所属時期は図 58 - 17 から縄文時代後期中葉と考えている。(今 野)

98 号 土 坑 S K 98

遺 構 (図 56, 写真 52)

本遺構は、O48' グリットの L III a 上面で検出されている。ただ、本遺構が基本土層観察用のベルトにかかっていたため、掘り込み面は L II c 上面であることを確認している。北に向かって斜面が急峻にかけあがる箇所に立地する。重複する遺構はなく、本遺構の南方 1.4 m には 61 号土坑が隣接する。堆積土は 5 層に細分された。ℓ 1 から ℓ 4 は L II c に近似しているがブロック状を呈し、堆積状態も不自然なことから人為堆積土の可能性が高い。ℓ 5 は壁面で観察された基本土層と近似していたため壁からの崩落土と考えられる。

検出面でみると平面形はやや角張った楕円形を呈し、本来は方形であったものと推察される。規模は長軸 116 cm、短軸 102 cm で東西方向に長い。掘り込みは L III 上面より 30 cm 下位に達している。底面はおおむね平坦だが中央が若干窪む形状を呈している。壁はほぼ垂直に立ち上がる。検出面から底面最深部までの深さは 60 cm だが、掘り込み面からの深さは 94 cm を測る。

遺 物 (図 58)

出土遺物は図示した縄文土器 1 点のみである。深鉢形土器の口縁部片で口唇部の断面形は円頭状である。器壁は 4 ~ 5 mm と比較的薄く、表裏に細かい条痕文が施されている。遺物の年代は、槻木式期と考えている。

第3節 土 坑

ま と め

本遺構は、掘り込み面や堆積土からみて、縄文時代早期中葉をさほど下らない時期に属するものであろう。これは、遺物の年代と合致するものだが、本調査区から出土したこの時期の遺物はわずかである。遺構の性格については明らかにできなかった。主な覆土が人為堆積土ではあるが、壁の崩落土も観察されるため墓坑の可能性は低いと言えよう。(今 野)

99号土坑 SK99

遺 構 (図56)

本土坑は、I区西部南端のQ1グリッドに位置する。LⅡb上面で検出され、3号溝跡と重複するが、本土坑の方が新しい。遺構内堆積土は3層に分かれ、いずれも自然堆積土と判断される。ℓ1は木炭とみられる炭化物片を含み、ℓ2からは焼土ブロックも出土している。ℓ3は周壁際にわずかに見られた褐色土で、周壁からの崩落土と思われる。遺構の平面形は隅丸長方形を呈し、長軸105cm、短軸73cmの平面規模を有する。底面は平坦で、周壁は緩やかに立ち上がる。周壁に被熱した箇所はなく、残存高は18～26cmを測る。

遺 物 (図58)

図示した他に、縄文土器6片、弥生土器3片、土師器1片が出土しているが、いずれも流れ込みと考えられる。図58-8は、ℓ2より出土した縄文時代中期末葉とみられる土器の胴部片である。縦位に隆凹線が走り、縦回転のRLが施されている。大きく内湾する形状から、注口形土器の破片と推定される。

ま と め

遺構の年代は、検出面や堆積土から奈良・平安時代頃と考えられる。周壁に被熱した箇所が確認されていないが、近在に木炭を排出する遺構は認められず、規模や堆積土から木炭焼成土坑の可能性が高い。(渡 辺)

107号土坑 SK107

遺 構 (図56, 写真53)

I区東部のM2グリッドで検出された土坑である。遺構が集中する地区の西端にあたり、地形的には、南西に向って下がる急斜面で、本遺構の長軸方向は等高線とほぼ平行する。遺構検出面はLⅤである。他の遺構との重複はない。

遺構内堆積土は3層に細分され、締まりはないが自然埋没状態を示している。遺構の形状をとどめている底面の平面形は隅丸長方形を呈し、長軸方向は真北から51°西に傾いている。規模は、開口部の長軸160cm、短軸68cm、底面の長軸125cm、短軸29cmを測る。検出面から底面最深部までの深さは94cmである。短軸の断面形は、下半部が直に立ち上がり、上半部が崩落のために開口部に向かって外傾する。底面は僅かな凹凸があるがほぼ平坦で、底面からピットは確認されなかった。

ま と め

本遺構は、掘り込みの深い隅丸長方形の土坑であるが、時期を決定する遺物が出土していないため遺構の時期は不明である。堆積土に締まりがないが、その形状から縄文時代の落とし穴と考えておきたい。(国 井)

112号土坑 SK 112

遺 構 (図56, 写真53)

本遺構は、O47'グリッドのLⅢa上面で検出されている。重複する遺構はなく、本遺構の南東方向5.4mに4号性格不明遺構がある。堆積土は2層に分かれた。堆積土はいずれもLⅡcに近似し、斜面上位から流れ込んだような堆積状況を呈していたため、自然堆積土と判断している。ℓ2には、周壁からの崩落土も含まれているとみられる。

平面形は、長軸128cm、短軸104cmの楕円形を呈している。壁は急峻に立ち上がり、斜面上位の北西側の残りが良い。壁の残存高は12～36cm、検出面から底面最深部までの深さは46cmである。底面は平坦で、全体が斜面と同方向に緩やかに傾斜している。

遺 物 (図58)

図58-9に示した尖底土器の底部1片が出土している。胴部に対して底部が厚いが、いわゆる天狗の鼻状は呈していない。縦方向のミガキが外面に入り、文様帯区画線とみられる平行沈線が横走る。この遺物は田戸下層式期の所産と考えられる。

ま と め

図58-9は遺構に伴うものではないが、検出面や堆積土からみて、本遺構は遺物の年代に近い時期に属すると考えている。遺構の性格については明らかにできなかった。(今 野)

121号土坑 SK 121

遺 構 (図57, 写真53)

本遺構は、O48'グリッドのLⅢa上面で検出されている。重複する遺構はなく、本遺構の南東方向0.5mに2号性格不明遺構が隣接する。堆積土は2層に大別される。ℓ1はLⅡcに近似し、ブロック状の土等が見られないことから自然堆積土と判断された。ℓ2は周壁際に三角堆積を成しているため、壁からの崩落土であろう。

平面形は、若干角張った楕円形を呈している。長軸170cm、短軸108cmの平面規模を持ち、主軸方位はN65°Eを指す。周壁はほぼ垂直に立ち上がる。周壁の残存高は25～65cmで、斜面上位にあたる北側の残りが良い。底面は平坦に整形されている。

遺 物

縄文時代早期に属するとみられる土器片が1片出土しているが、細片で摩滅も著しいことから図示しなかった。

第3節 土 坑

ま と め

遺構の機能を推定できるような調査所見は得られなかった。所属時期についても遺物が出土していないため明確にできなかったが検出面や堆積土から判断して縄文時代早期とみている。(今 野)

130号土坑 SK 130

遺 構 (図57, 写真54)

I区東部のL2・3グリッドで検出された土坑である。遺構が集中する地区の西端にあたり、前述した107号土坑と酷似する遺構で、本遺構との直線距離は約20mを測る。地形的には、南西に向って下がる急斜面で、本遺構の長軸方向は等高線とほぼ平行する。遺構検出面はLIVである。他の遺構との重複はない。

遺構内堆積土は3層に細分され、いずれも締まりがなく自然埋没状態を示している。遺構の形状をとどめている底面の平面形は隅丸長方形を呈し、長軸方向は北から65°西に傾いている。規模は、開口部で長軸192cm、短軸107cmで、底面で長軸104cm、短軸48cmを測る。検出面から底面最深部までの深さは95cmである。周壁は、底面から直立ぎみに立ち上がる。底面は自然石が露出するがおおむね平坦である。底面からピットは確認されなかった。

ま と め

本遺構は、掘り込みの深い隅丸長方形の土坑であるが、時期を決定する遺物が出土していないため遺構の時期は不明である。また、近接する107号土坑の形状や堆積土が本遺構に酷似することから、本遺構も同様に縄文時代の落とし穴と考えておきたい。(国 井)

157号土坑 SK 157

遺 構 (図57, 写真54)

O1グリットのLIIc上面で検出された土坑である。周囲は南西に下る急斜面で、本遺構の斜面下方2.0mに28号住居跡がある。また西方1.3mには67号土坑が隣接する。堆積土は単層で、LIIbによく似ている。周壁からの崩落土が確認できなかったため、比較的短時間に埋没した可能性が高い。ただ、ブロック状の堆積土はみられず、人為堆積土か否かは判然としなかった。

本遺構は直径約90cmの円形を呈している。底面は斜面に沿って若干南西に傾くが、ほぼ平坦と言ってよい。周壁は垂直に立ち上がる。周壁の残存高は20～52cmで、検出面から底面最深部までの深さは62cmである。

遺 物 (図58)

図-10に示した土器片が1点のみ出土している。内湾する器形の鉢形土器の破片とみられ、口縁部に無文帯を有する。細片のため判然としないが、縄文時代後期中葉のものであろう。

ま と め

堆積土がLIIbに類似していることから、縄文時代中・後期の土坑である可能性が高い。遺構の

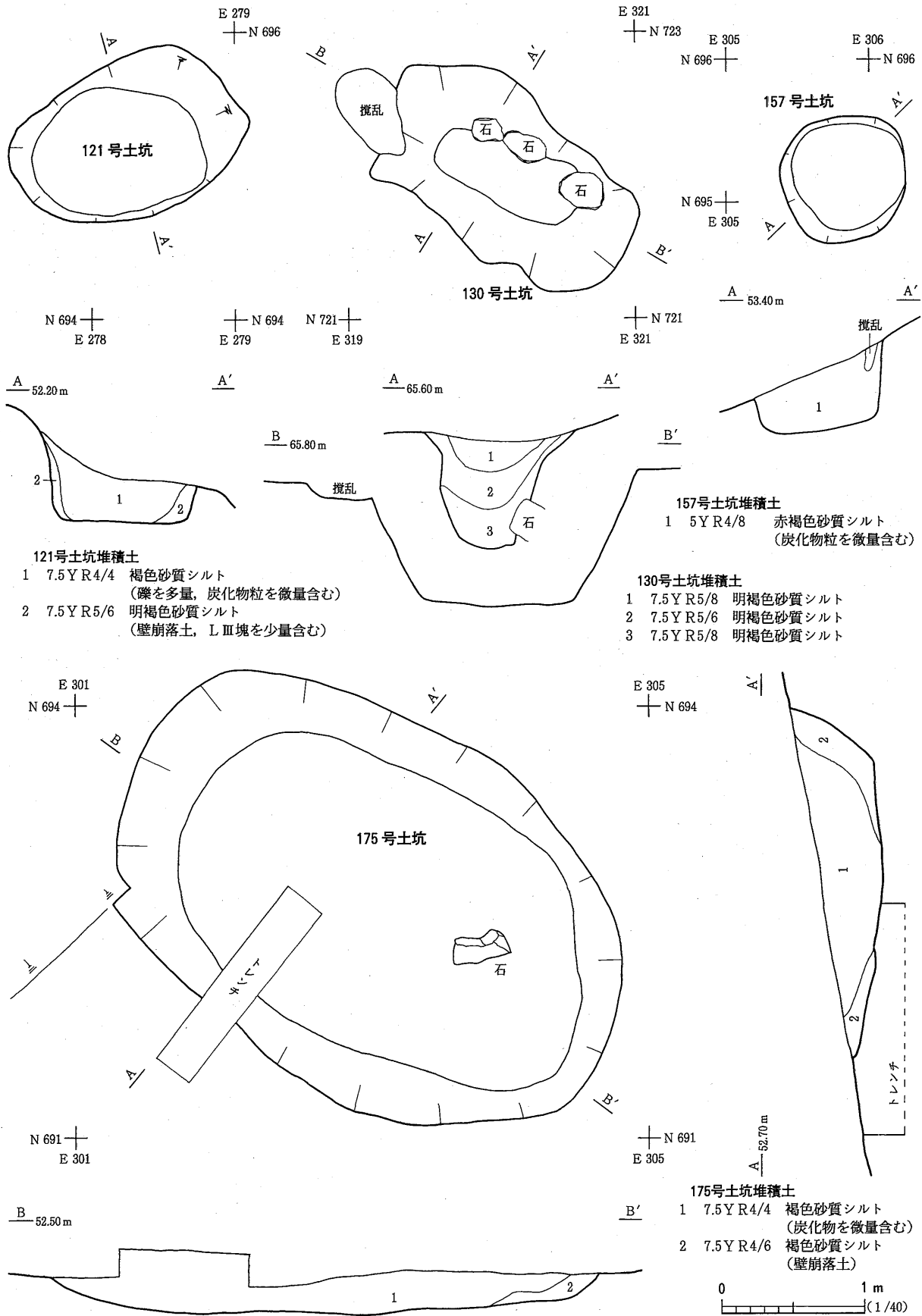


図 57 I区 121・130・157・175号土坑

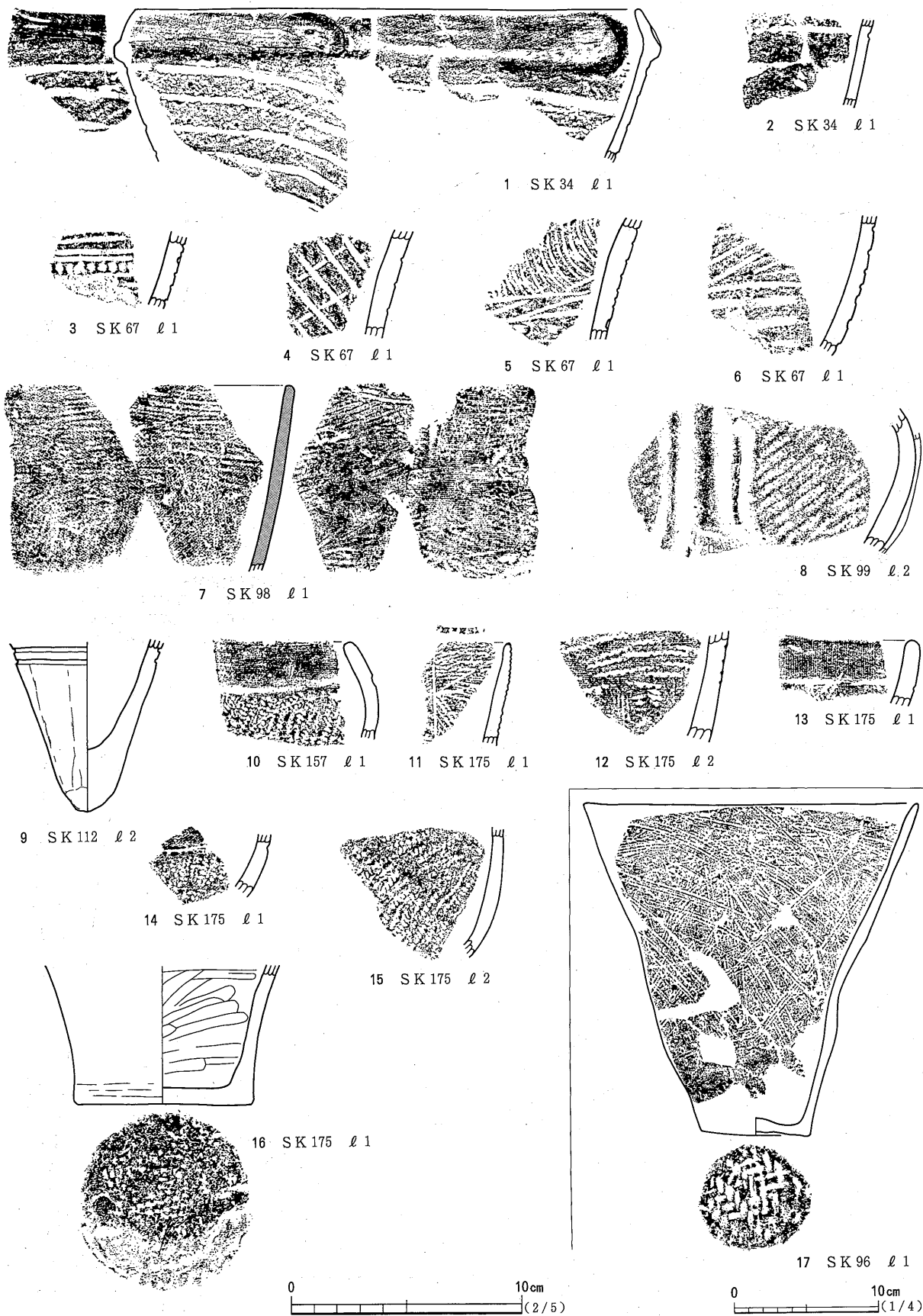


图 58 I 区土坑出土繩文土器

性格については明らかにできなかったが、比較的短時間に埋没していることから墓坑である可能性もある。 (今野)

175号土坑 SK175

遺構 (図57, 写真54)

○1グリッドのLⅡb下位で検出された大型の土坑である。28号住居跡と重複し、本遺構の方が新しい。堆積土は2層に大別されるが、いずれもLⅡbに近似している。ℓ1は斜面上位から流れ込んだ様な堆積状況を示している。ℓ2は壁際に緩やかに堆積している。以上の様相からいずれも自然堆積土と判断される。

平面プランは整った楕円形を呈している。長軸384cm、短軸262cmの規模を持ち、長軸方向はN54°Wを指す。底面は土坑の中央に向かって緩やかにくぼむ形状を呈し、踏み締まり等は確認されなかった。周壁の立ち上がりが不明瞭であったため、サブトレンチを設定した。その結果、本遺構はLⅡcを若干掘り込んでいることが分かった。周壁は60°程の角度をもって立ち上がる。本遺構は斜面に立地するため南西側周壁の遺存状態が悪く、周壁の残存高は9～48cmである。検出面から底面最深部までの深さは67cmを測る。

遺物 (図58)

縄文早期の土器9片、後期の土器25片、土師器1片が出土している。そのうち6片を図示した。図58-11は口縁部片で沈線区画内に貝殻腹縁文が充填されている。12は胴部下端の破片とみられ、貝殻腹縁文が横位に施文されている。13～15は同一個体の可能性がある。口縁部は無文で、胴部にLRが回転施文されている。16は深鉢形土器の底部片で、底面に網代痕が残されている。

まとめ

遺構の重複関係から、本遺構は縄文時代中期末葉より新しい。検出面や堆積土から判断して、縄文時代後期の土坑である可能性が高い。当初は竪穴住居跡と考えて調査したが、炉や柱穴などの付帯施設が確認できず、焼け面や踏み締まりといった生活の痕跡もみられなかった。 (今野)

円形土坑

ここで円形土坑と総称したものは、平面形が大径の円形でI区東部のL3～5、M3～5、N3～5グリッドで検出された総計123基の土坑である。南側に下がる丘陵急斜面に掘り込まれており、狭い範囲内に集中しているため重複するものが多い。なお、土坑確認範囲の南縁は崖面となるが、この付近から多くの土坑を確認していることから、土坑が機能していた時期には、南側部分はもう少し浸食されずに斜面を下位に延ばしていたものと考えている。土坑内部の形状は、平坦な底面から壁がオーバーハングあるいは直に立ち上がるものである。また、遺構どうしの重複によって、土坑の上位部分を著しく欠損しているものがあり、中には計測する位置によって断面形と平面形が変化するものがある。

記述の繁雑をさけるため形態・堆積土・規模・重複関係などについては、表3に示し、土坑の個別の図は図60～86に示した。分類については、上端の形状からみた平面形と断面形とに分けて下記のように示し、これらを組み合わせて分類を表記した。

〈平面形〉		〈断面形〉		
A 円形	B 楕円形	1 フラスコ形	2 円筒形	3 鍋底形
C 不明		4 不明		

平面形は、上端の形状から判断して円形と楕円形とに分けた。平面形の分類基準は、便宜的に長径と短径の比が1.2未満のものを円形とし、それ以外は楕円形と判断した。平面形で不明としたものは、重複などにより平面形が判断できなかったものである。断面形の分類基準は、1のフラスコ形で、周壁がオーバーハングして立ち上がるもの、2の円筒形は周壁が直立に立ち上がる深い土坑で、深さと開口部径の比が0.4以上のものである。3の鍋底形は外傾ぎみに立ち上がるものである。さらに、2に近いが深さと開口部径の比が0.4未満のものも3に含めた。4は分類に該当しないものを一括した。以下、分類ごとに説明する。

形態による分類

A1類(円形×フラスコ形)は、33・35・37・43・46・47・53・60・62・65・66・68・69・74・79・90・91・101・103・111・113・114・135・144号土坑が該当する。総計24基である。その多くは、標高67～72mで確認している。遺構検出面はLIVあるいはLVである。重複する土坑は少ない。このうち35・60号土坑は、上端径が200cm以上である大型の土坑で、オーバーハングが強い35・46・60号土坑は、最も斜面上方に位置する。最も深さのある46号土坑では、最大257cmの深さを測る。35・46号土坑の断面形は明確なフラスコ形を呈する。全体的に見ると、上端径150cm前後のものが多く、最も小さい土坑は135号土坑で上端径135cmである。本類の平均的な大きさは、上端径が150cm前後のものである。底面は平坦である。

A2類(円形×円筒形)は、42・44・45・54・64・75・78・82・86・87・92・95・100・104・105・108・110・118・120・122・123・127・132・133・137～140・142・143・145～149・151・152・154・158・160・168・171号土坑が該当する。総計42基で分類の中で本類が最も多い。その多くは、標高65～69mの範囲で検出しており、A1類の土坑より斜面下に位置するものが多い。遺構検出面はLIVあるいはLVである。土坑が最も集中する部分で確認しているため、重複する土坑が多い。64・118・133・152号土坑は大型のもので、上端径が200cmを超え、深さは64号土坑が最大207cmを測る。多くの土坑は上端径が150cm前後である。下端の平面形が、楕円形を呈するものは、75・87・147・151・158号土坑である。底面は平坦である。

A3類(円形×鍋底形)は、32・59・63・72・109・115・128・129・165・174号土坑が該当し、総計10基である。標高65～71mの広い範囲に散在し、遺構検出面はLIVあるいはLVである。上端径が200cm以上の大型のものはなく、上端径が150cm前後のものが多く、多くの土坑は、重複する遺構やトレンチにより土坑の上半が失われているため、深さは50cm前後のものが多く、下

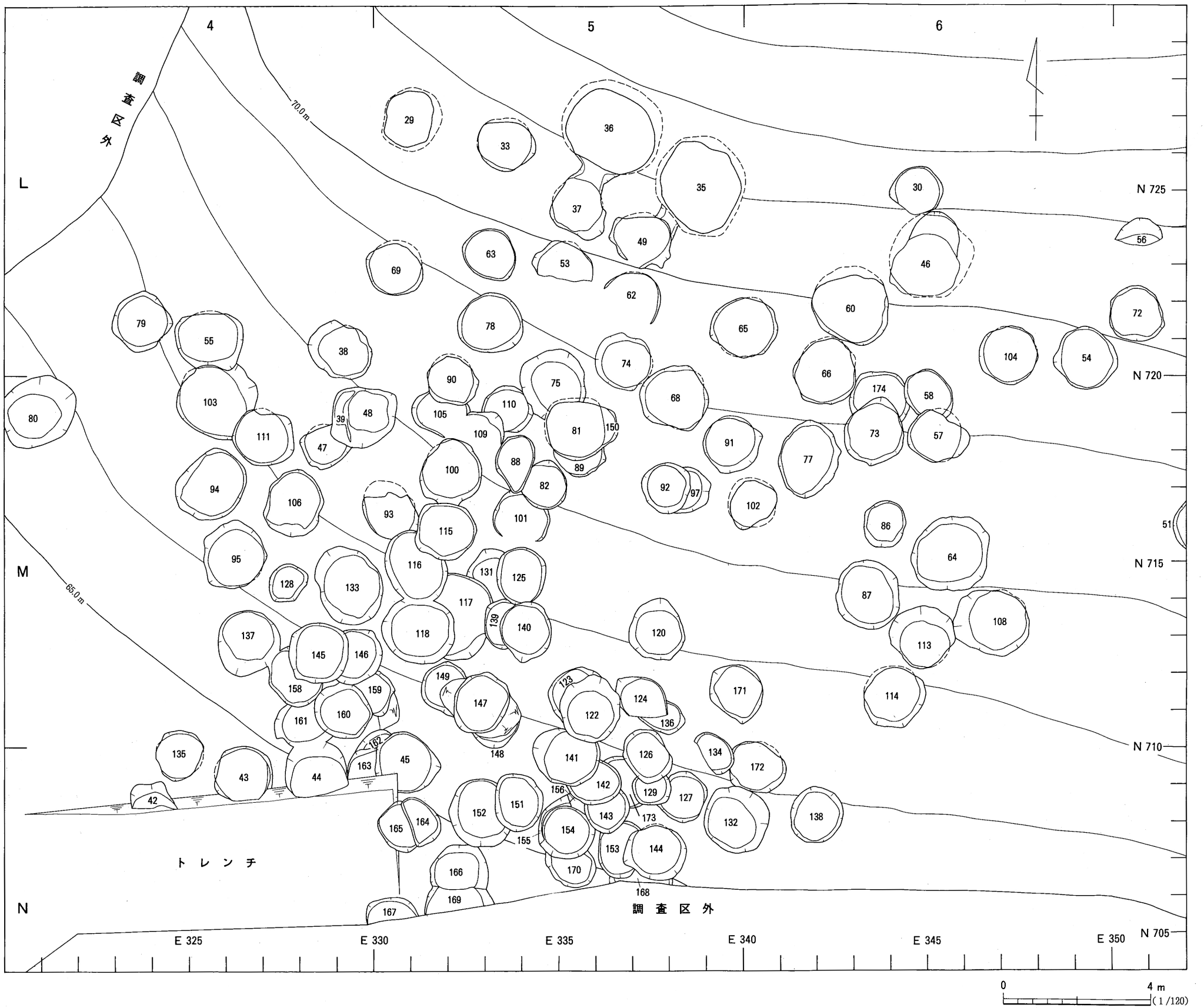


図 59 I 区東部円形土坑配置図

端の平面形は、いずれの土坑も上端の平面形と同じである。底面は平坦である。

B 1 類(楕円形×フラスコ)は、29・36・38・49・55・57・81・88・93・102・172号土坑が該当し、総計11基である。その多くは、標高67～72mの範囲で検出しており、形態分類したA 1類と同様に他の土坑に比べ斜面上方で確認している。遺構検出面はL IVあるいはL Vである。大型のものには、36号土坑があり、上端径が277cm、深さは最大196cmを測る。A 1類の35号土坑の西側に位置し、規模や形態的に見て近似している。断面形が明確なフラスコ形を呈する29・36号土坑は、A 1類と同様に斜面の最上方に位置する。下端の平面形は、いずれも楕円形を呈し、底面は平坦である。

B 2 類(楕円形×円筒形)は、30・39・48・94・97・106・116・117・124・134・141・153・161・164・166・169号土坑が該当する。総計16基で、標高64～72mの範囲内に散在している。94・116・117号土坑は、上端径が200cm前後の大型の土坑であるが、古墳時代の住居跡との重複によって土坑の上部を失っているため、深さは82～115cmと浅いのに対し、重複していない48号土坑の深さは、最大164cmを測る。下端の平面形が楕円形を呈するものは、94・116・117・153・161号土坑である。底面は平坦である。

B 3 類(楕円形×鍋底形)は、56・58・73・77・80・89・125・126・131・136・159・167・170・173号土坑が該当し、総計14基がM 4・5、N 4グリッドに散在している。77号土坑は上端径200cmと最も大きく、125号土坑の深さは、最大158cmを測る。下端の平面形は楕円形を呈するものが多く、底面は平坦である。

C 5 類(不明×不明)は、150・155・156・162・163号土坑が該当し、総計5基である。これらは、遺構が集中する地区に位置し、重複する遺構が多いために遺存状態が悪く、形状が不明なものである。本類は、重複する遺構を掘り上げた段階で確認され、土層の観察もできなかったものである。底面はいずれも平坦と思われる。

堆積土による分類

土坑の堆積土は、L IVあるいはL Vが主体となる褐色・黄褐色系の土層からなり、重複が多いものは、人為堆積と自然堆積の見分けが困難な場合も多いが、遺存部の状況や出土遺物などからできる限り堆積土の状態を判断していくことにする。堆積土については、下記のように分類する。eについては、a～dと重複するものがある。

- | | |
|--------------------|--------------------|
| a. 自然堆積からなる土坑 | b. 人為堆積からなる土坑 |
| c. 自然堆積と人為堆積からなる土坑 | d. 堆積状況が判断できなかった土坑 |
| e. 埋没後、掘り込んだ土坑 | |

a 類(自然堆積からなる土坑)は、30・32・37・42～46・48・49・54・56～58・60・62・65・66・68・73・77・79・80・87・88・91～95・102・106・109・111・114～117・120・122～129・131～148・151～154・158～161・164～166・168～172号土坑の総計81基で、円形土坑の大半を占めている。堆積土はL IVあるいはL Vの褐色・黄褐色系の土層が主体で、周壁からの流れ込みの

第3節 土 坑

ため凸レンズ状の堆積状態を示すものが多い。46号土坑は、A1類に分類した土坑で、フラスコ形の断面形を呈するため堆積土の中央が山形となる自然堆積を示している。79号土坑は6世紀前半の2号溝跡と重複し、本土坑の方が新しいため、本土坑の時期は、6世紀前半以降と考えている。80号土坑は、底面付近の $\ell 1$ から6世紀前半の土師器杯が出土しているため古墳時代の土坑と考えている。93号土坑は、15号住居跡と3号性格不明遺構と重複し、本土坑から出土した遺物は、重複する遺構に伴うものと考えている。

b類(人為堆積からなる土坑)は、90・149号土坑の2基である。堆積土のすべてが混土層からなるものを人為堆積とした。90号土坑については、堆積土に乱れは認められないが、すべて混土層であることから人為堆積とした。149号土坑は、単層の混土層からなり一気に埋め戻されたものと考えている。

c類(自然堆積と人為堆積からなる土坑)は、33・81・100・103・104・110号土坑の6基で、上層が自然堆積土で、下層がブロック土を含む混土層である。81・100・104号土坑は最上面に人為堆積土が認められることから、周辺の遺構を構築した時に埋め戻されたものと考えている。33号土坑は、堆積土が3層からなり、各層の上面が水平であるため、斜面上方からの堆積と考えられない。104号土坑は、 $\ell 1$ にLVを多量に含んだ明褐色砂質シルトが厚く堆積し、その中に近接する17号住居跡に伴うと考えられる土師器杯が出土している。したがって、本土坑は6世紀前半の遺構に埋め戻された可能性が高い。110号土坑は、混土層が底面上に厚く堆積し、その上層が乱れていることから、土坑廃絶後に埋め戻したものと考えている。

d類(堆積状況が判断できなかったもの)は、38・39・47・53・55・74・75・82・86・89・97・101・105・118・150・155・156・162・163・167・173・174号土坑が該当し、総計22基である。混土層を含むが、遺構構築排土の流入の可能性が有り、人為か自然か明確に判断できなかったものである。38・39号土坑は、両土坑の $\ell 1$ が近似していることから、同時期に構築排土が流入あるいは埋め戻されたものと考えている。この他に、167号土坑は、細かい木根による攪乱が入っているために堆積土を細分することができなかった。

e類(土坑埋没後、再度掘り込んだ土坑)は、35・36・63・64・69・72・78・108号土坑の総計8基である。これらは、堆積土の状況から判断して埋没後に再度土坑上部を掘り込んだものと考えており、このうち、35・36・78号土坑は、古墳時代に再利用したと考えている。35号土坑は、 $\ell 1$ のみが下層と異なる堆積状態を示し、 $\ell 1$ 下面が水平になっている。多量の滑石剥片も $\ell 1$ からのみ出土している。これらの滑石剥片は、人頭大から拳大のものや約40個の石製模造品を作る適当な大きさの剥片であるため、本遺構の性格は、近接する13号住居跡に伴う滑石の置き場と考えられ、時期は6世紀前半と考えている。36号土坑は、35号土坑の西側で検出し、35号土坑と同様に $\ell 3 \cdot 4$ 上面を使用面として土坑を再利用している。 $\ell 3 \cdot 4$ 上面からは、図87-3~6の土器が出土しており、遺物の出土状態は、図87-4・5が東壁際、同図-3・6が土坑の北壁際でそれぞれ2個体づつが出土している。いずれも6世紀前半の土器である。図87-4の下側の $\ell 3$ 上面は焼

土化しており、また、北壁の一部が焼土化していた。ℓ2には、多量の木炭粒、微量の焼土が含まれている。ℓ6からは、滑石剥片が少量出土しており、堆積土の状態から、本土坑は、本来の土坑を再利用するためにすべて掘り上げ後、ℓ3まで埋め戻して使用面としたと考えている。63号土坑は、13号住居跡の床面で検出しており、本土坑のℓ1は、LV塊を含む褐色砂質シルトで締まりがなく、埋め戻されていると考えられる。64号土坑は、ℓ1の部分を掘り込んでいると考えられ、遺物はℓ1と、ℓ1と接するℓ2・4から土師器と石製模造品の完成品と未成品が出土している。土師器片が128点出土しているが、その多くはℓ1からである。69号土坑は、当初攪乱と判断していたため一部掘りすぎている。ℓ1から土師器が出土しており、壁がオーバーハングし堆積土に締まりがないことから、一度掘り込まれていた土坑を古墳時代に掘り込んで再利用したものと考えている。78号土坑は、堆積土の状態が、ℓ1とその下層に違いが認められ、ℓ1下面はおおむね平坦にして再利用していたと考えている。遺物は、いずれもℓ1上面から3個の手捏ね土器と多量の細かい滑石剥片が出土している。13号住居跡に伴うものと考えている。108号土坑は、ℓ1から土師器片が32点出土しており、ℓ1部分のみ掘り込んでいると考えている。

遺構の重複

円形土坑は、図59に示したように重複が著しいが、ここでは時期の認定が可能な9・19・23・26・27号住居跡、3号性格不明遺構、2号溝跡との重複関係を中心に説明することにしたい。

遺物から6世紀前半と考えられる13・17・23・26・27号住居跡より古い土坑は、37・45・46・49・53・62・63・78・117・118・120・139・140・147・148・149・151・152・164・165・166号土坑である。6世紀後葉～7世紀初頭と考えられる11号住居跡より古い土坑は、54・56・72・104号土坑である。7世紀中葉と考えられる9・15(古)・19号住居跡より古い土坑は、42・43・68・74・75・81・89・94・95・110・135・150・161号土坑である。7世紀後葉～8世紀初頭と考えられる12・15(新)・18号住居跡より古い土坑は、59・106・122・123・124・126・127・128・129・132・133・134・136・137・141・142・143・153・154・155・156・173号土坑である。8世紀前葉と考えられる10号住居跡、3号性格不明遺構より古い土坑は、57・58・60・65・66・73・77・91・145・146・158・159・160・174号土坑である。2号溝跡より新しい79号土坑の時期は、6世紀前半以降と考えられる。このように、重複関係から半数以上の土坑は6世紀前半から8世紀前半の遺構より古いことになる。

重複回数は、18号住居跡の床面下で検出した土坑の切り合いから最大6回を確認しているが、これらは一連の土層断面で確認したものではないため、確実性にやや欠ける部分がある。また、直接の切り合い関係では、時期差が3時期のもの2時期のものを確認している。以下では重複関係については(古)→(新)で示すこととする。3時期の重複を確認した土坑は、101→82→88のみである。2時期の重複を確認した土坑は、47・48→39, 146→145, 105→90, 89→81, 97→92, 123・124→122, 125→140, 131→125, 143→142, 148・149→147, 152→151, 155→154, 159・161→160, 165→164, 166→169である。この他に164・165号土坑は45号土坑の底面付

第3節 土 坑

近で段差が確認されたため土坑と判断した。

この他に、75・101・116号土坑は、土層の観察から堆積土内で重複があるように確認されたが、確実に2基の重複といえる根拠がないため、1基として取り扱った。36号土坑は、周壁に重複する遺構と思われる掘り込みが確認されたが、堆積土で確認できなかったため、1基として取り扱った。

遺 物 (図87・88, 写真101～103・108)

土坑から出土した遺物は、縄文土器片3点、土師器片595点、滑石剥片4148.0gが出土している。この他に、図示できたのは、図87-1～6、図88-1～14の土師器・石製品・石器である。以下、土坑の番号順に説明する。

29号土坑では、 ℓ 2から土師器1点が出土している。31号土坑では、 ℓ 1から土師器1点が出土している。図88-1は、土師器甑である。調整は、口縁部外面にヨコナデ、胴部外面にヘラナデ後ヘラミガキを行っている。推定口径は17.2cmを測る。胎土には、土器焼成時の酸化により赤化した粒が含まれている。

35号土坑では、 ℓ 1から土師器18点、滑石4148.0gが出土している。

36号土坑では、 ℓ 1・4から土師器146点、滑石476.9gが出土している。図87-1は、完形の手捏ね土器である。内外面にユビオサエによる調整が認められる。口径4.6cm、器高5.2cm、底径4.5cmを測る。図87-2は、 ℓ 1から出土した土師器杯で、約6割が遺存する。調整は、口縁部外面にヨコナデ、胴部外面にヘラケズリを行っている。内面には、ヘラナデ後部分的にヘラミガキが認められる。推定口径17.9cm、遺存高4.7cmを測る。図87-3～5は、土師器甕でいずれも完形に近い状態である。図87-4・5は2個体が並んだ状態(写真56-3)で出土している。胴部は球状をなし、口縁部は直に立ち上がるが、図87-3・4については、口縁部がやや外反する。調整は、口縁部外面にヨコナデ、胴部外面にヘラケズリあるいはヘラナデ後ヘラケズリを行っている。胴部外面のヘラケズリは、いずれも底部側から口縁部側に向かって行っている。口縁部内面にはヨコナデ後ヘラナデ、胴部内面にはヘラナデを加えている。いずれにも胴部の中半から底部付近にかけて黒斑と火を受けた跡が観察される。3は口径11.6cm、器高23.5cm、底径5.4cm、4は口径16.3cm、器高28.0cm、5は口径14.5cm、器高29.2cm、底径7.3cmを測る。図87-6は完形の無底の土師器甑である。図87-3とともに2個体が並んだ状態(写真56-4)で出土している。調整は、口縁部外面にヨコナデ、胴部外面に縦方向のヘラケズリを行っている。頸部から胴部内面には、ヘラミガキを加えている。内面は丁寧に調整されているため滑らかである。底部付近には、黒色の付着物が認められる。胎土には、土器焼成時に赤化した粒が含まれている。口径21.5cm、器高23.5cm、底径8.2cmを測る。

41号土坑では、 ℓ 2から滑石6.4gが出土している。

45号土坑では、 ℓ 1から土師器1点が出土している。

49号土坑では、 ℓ 1から土師器8点が出土している。図88-2は、土師器高杯である。高杯は杯部が口縁部と体部の境に段が認められ、短い脚柱に裾がやや広がる器形を呈する。杯部の調整は、

口縁部外面にヨコナデ、体部外面にヘラケズリが行われている。内面にはヘラミガキが加えられ、黒色処理を行っている。脚部の調整は、外面にヘラケズリ後、裾部にヨコナデを行っている。内面にはユビオサエ後ヘラケズリを行い、最終調整として裾部にヨコナデを行っている。推定口径18.0cm、器高8.7cm、底径9.6cmを測る。

54号土坑では、 l 1から土師器2点が出土している。

57号土坑では、 l 1から土師器1点が出土している。

59号土坑では、 l 1から土師器20点が出土している。図88-3は、土師器甕の底部破片である。調整は、胴部外面にハケメが施されている。底径10.0cmを測る。

61号土坑では、 l 2から滑石3.4gが出土している。

63号土坑では、 l 1から土師器1点が出土している。

64号土坑では、 l 1・2から土師器148点、 l 1・4から滑石27.6gが出土している。この他に図88-4～6・10～13の土師器と石製品が出土している。図88-4は l 1から出土した土師器杯である。丸底で口縁部と体部の境に稜を持ち、口縁部は直に立ち上がる。全体的に摩滅が著しい。調整は、口縁部外面にヨコナデ、体部外面にヘラケズリが観察される。内面には、わずかにヘラミガキが認められる。胎土には、土器焼成時に赤化した粒が含まれている。推定口径13.8cm、遺存器高4.4cmを測る。図88-5・6は、 l 1から出土した土師器甕である。5は、胴部が長胴になるものと思われ、口縁部が外傾ぎみに開く器形である。調整は、口縁部外面にヨコナデ、胴部外面にハケメ、胴部内面には、ヘラナデが行われている。推定口径17.7cm、残存高10.5cmを測る。6は、口縁部を欠損し、球状の胴部を呈する。調整は、胴部外面にヘラケズリ、胴部外面にヘラナデを行なっている。遺存高7.8cm、底径6.5cmを測る。

図88-10～13は石製模造品である。図88-10は楕円形を呈する双孔の有孔円板である。側面は研磨による面取りを行ない、表裏面には、同方向の研磨痕が認められる。最大長3.1cm、最大幅2.6cm、最大厚0.3cmを測り、重さ5.0gである。図88-11～13は、石製模造品の未成品である。同図11は l 1、同図12・13は l 4から出土している。側面と表裏面を研磨し、円形または楕円形に整形している。10・11の色調は暗灰色、12・13は暗青灰色を呈しており、それぞれ同一の母岩からなるものと考えられる。10・11・13の表裏面には粗い研磨が認められる。同図11は最大長3.4cm、最大幅2.6cm、最大厚0.3cmを測り、重さ5.5gである。同図12は最大長2.5cm、最大幅2.0cm、最大厚0.4cmを測り、重さ5.3gである。同図13は最大長3.5cm、最大幅4.0cm、最大厚0.5cmを測り、重さ14.6gである。

68号土坑では、検出面・ l 1から土師器57点、検出面から滑石2.3gが出土している。69号土坑では、 l 1から土師器2点が出土している。

78号土坑では、 l 1から滑石152.3gが出土している。この他に図88-7～9は、 l 1から出土した手捏ね土器である。底部付近に厚みがあり、口縁部に向かって摘み上げるようにして作り出したものと考えている。いずれにも胎土には、土器焼成時に赤化した粒が含まれている。7は口径

第3節 土 坑

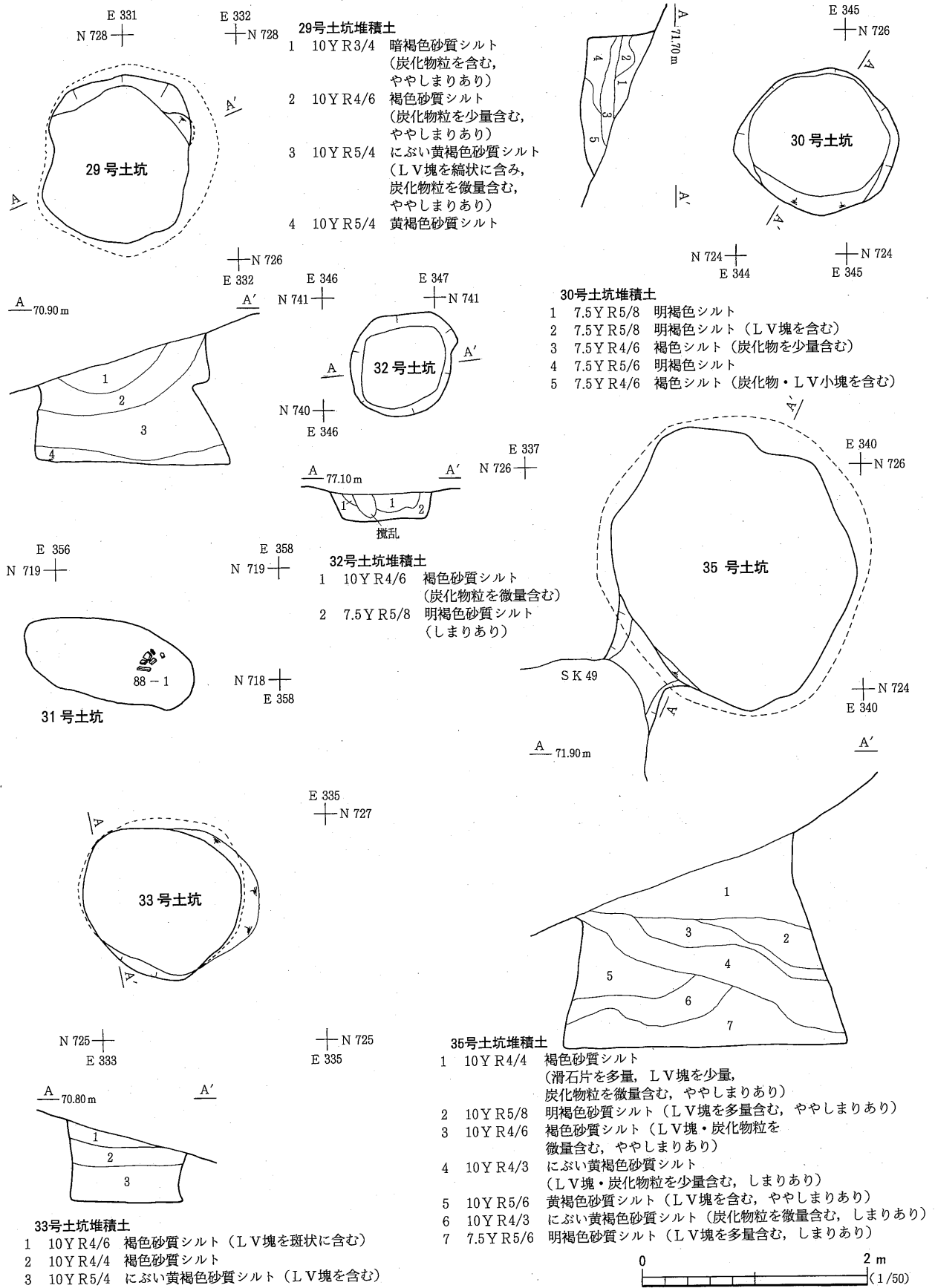


図60 I区29～33・35号土坑

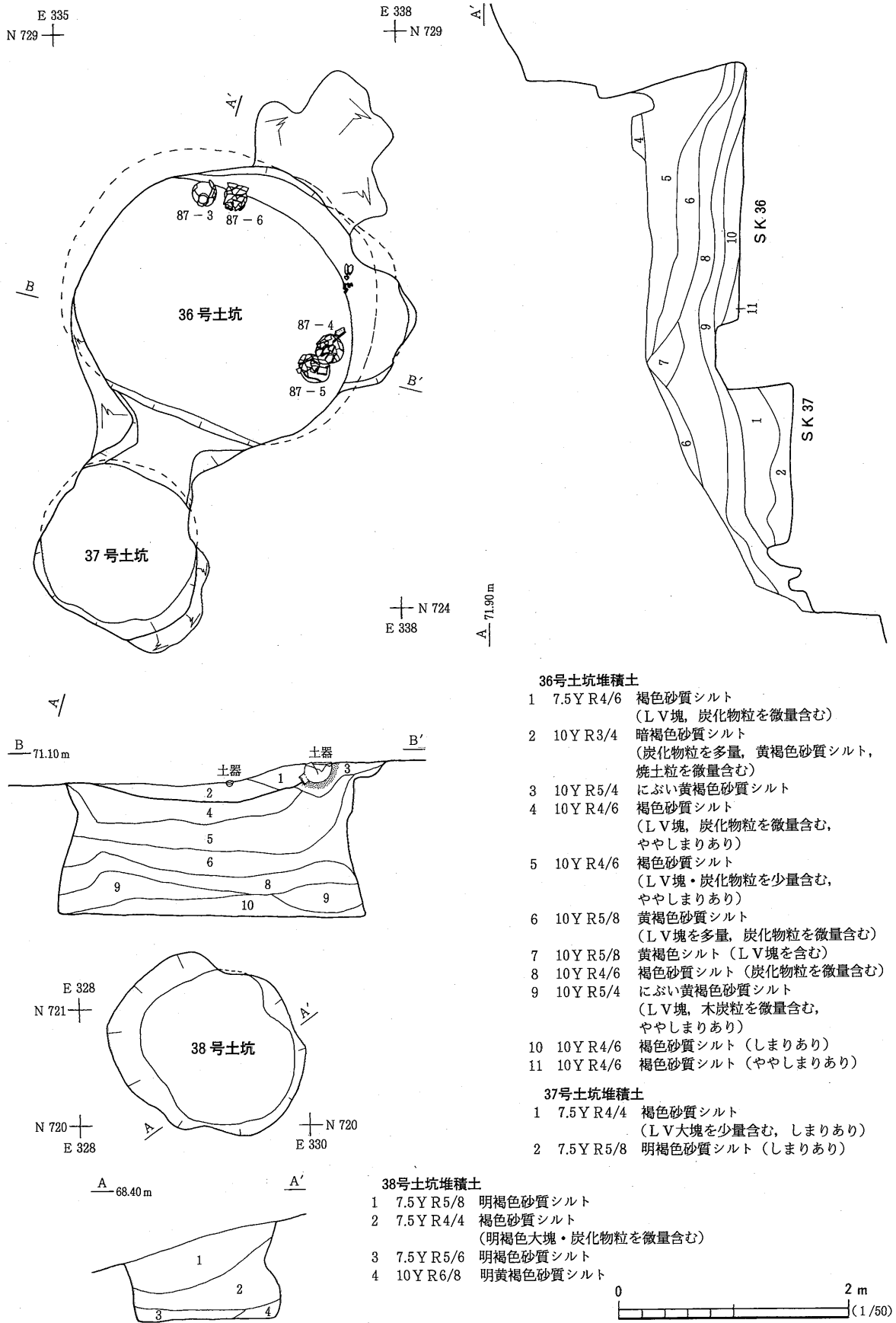


図61 I区36～38号土坑

第3節 土 坑

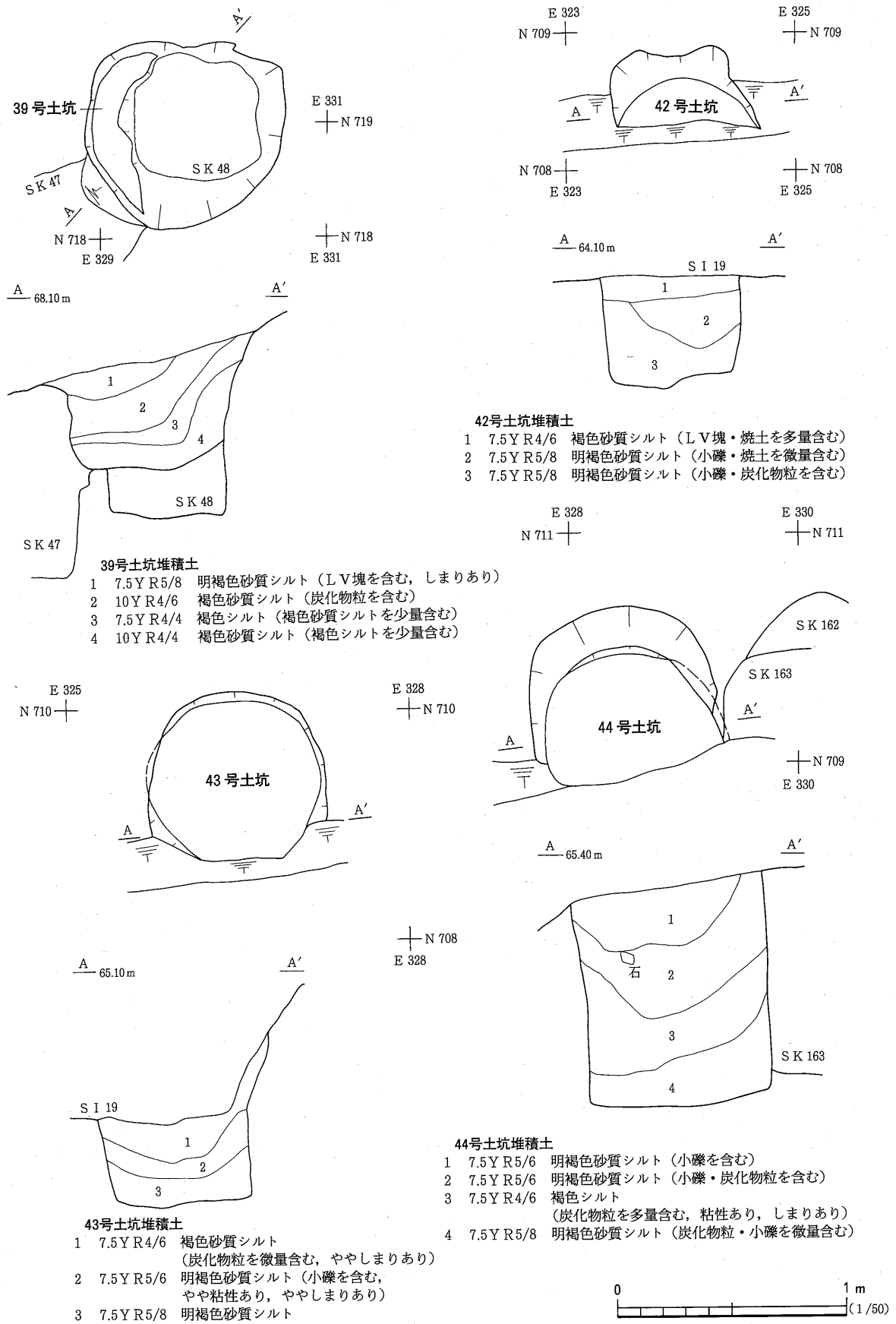


図 62 I 区 39・42～44 号土坑

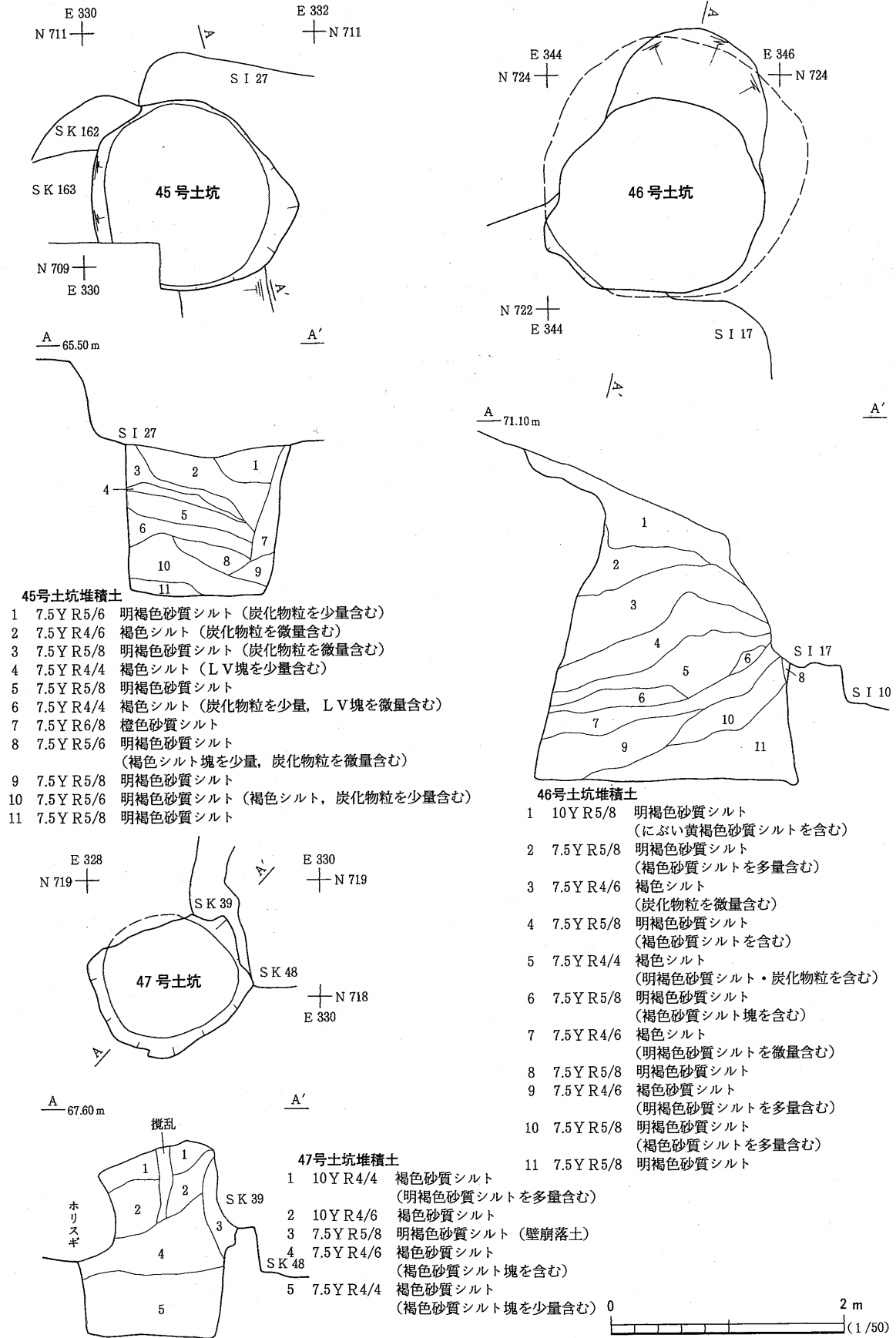


図 63 I区 45～47号土坑

第3節 土 坑

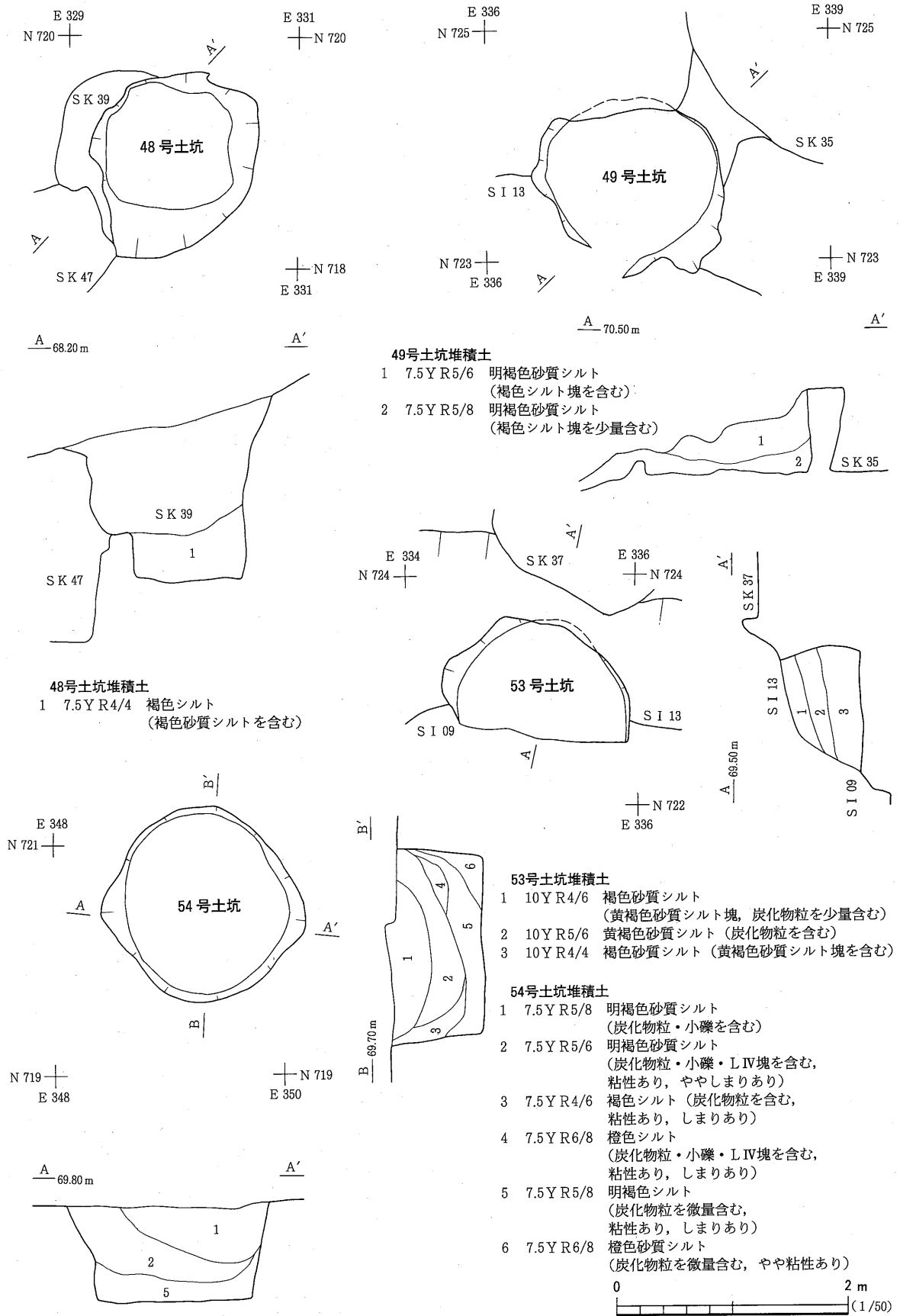


図 64 I 区 48・49・53・54 号土坑

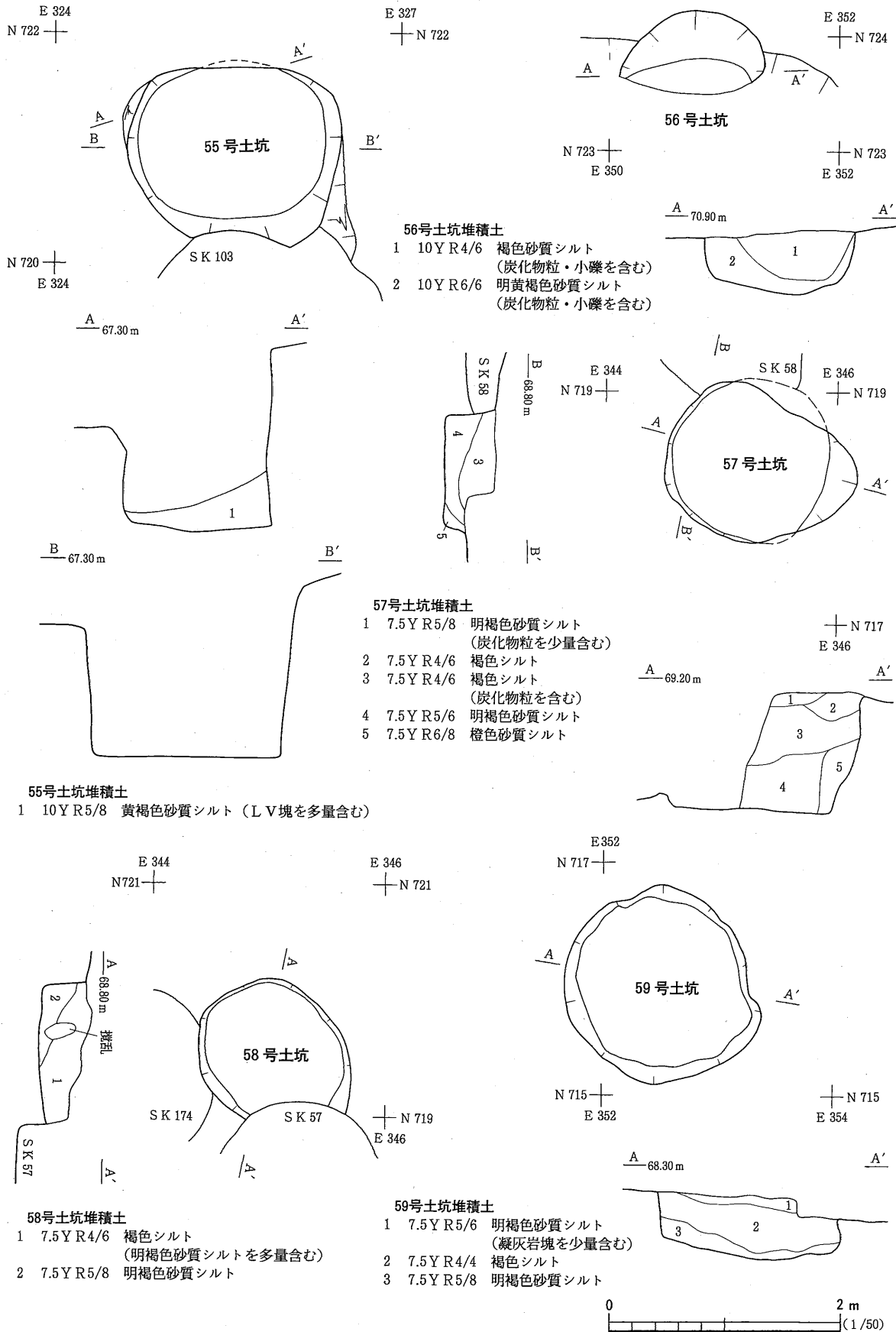


図 65 I区 55 ~ 59号土坑

第3節 土 坑

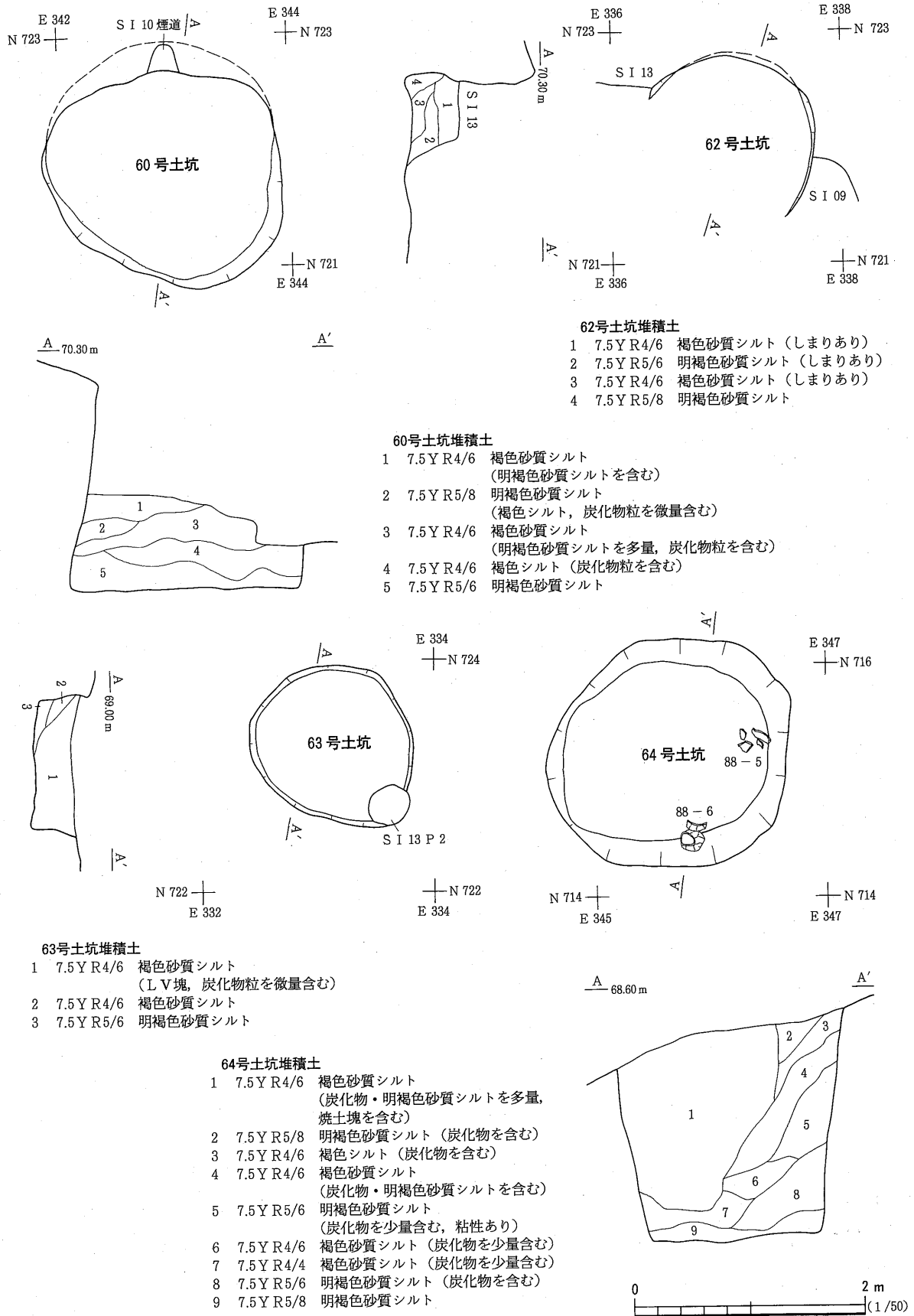


図 66 I 区 60・62～64 号土坑

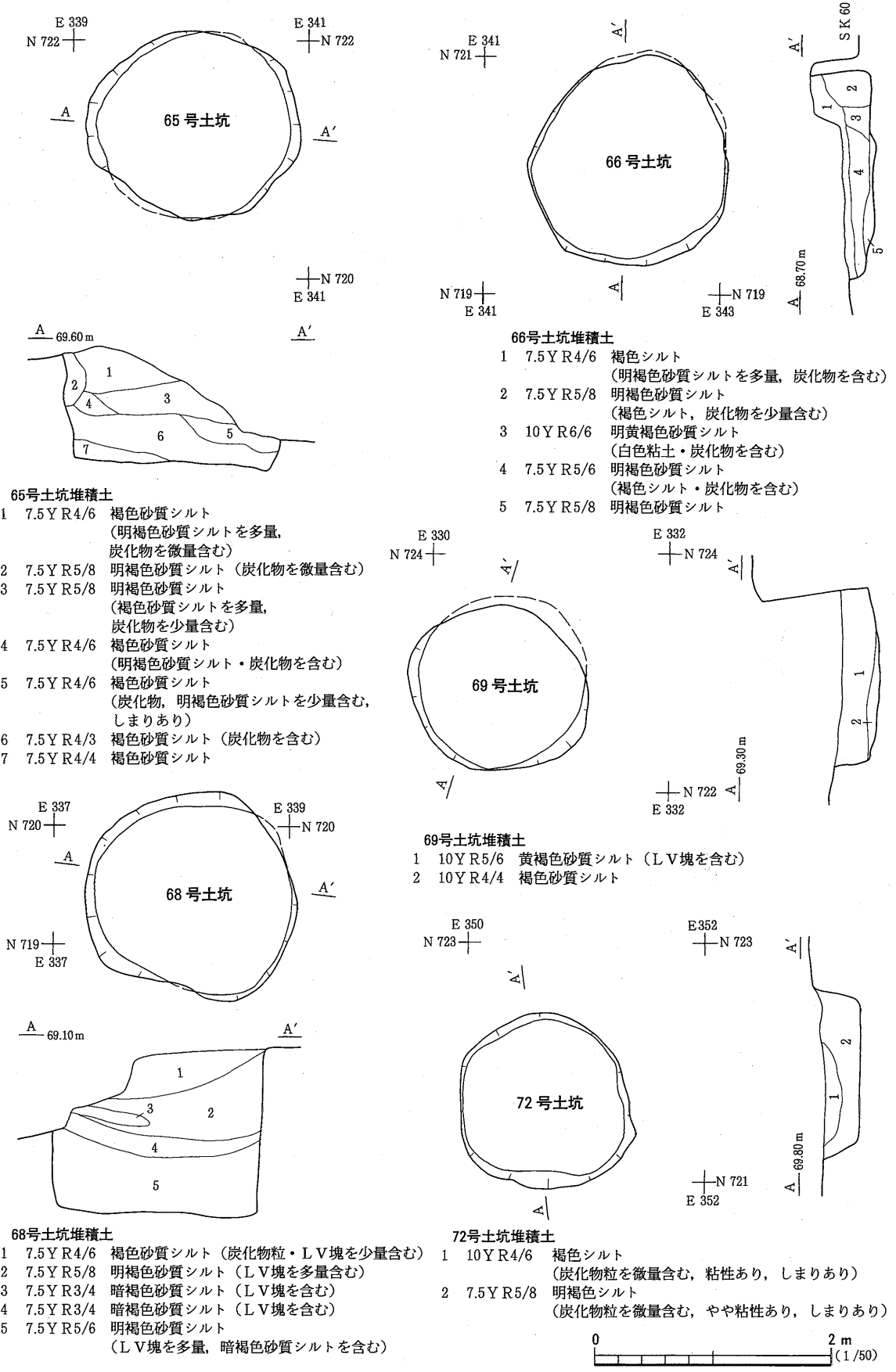


図 67 I区 65・66・68・69・72号土坑

第3節 土 坑

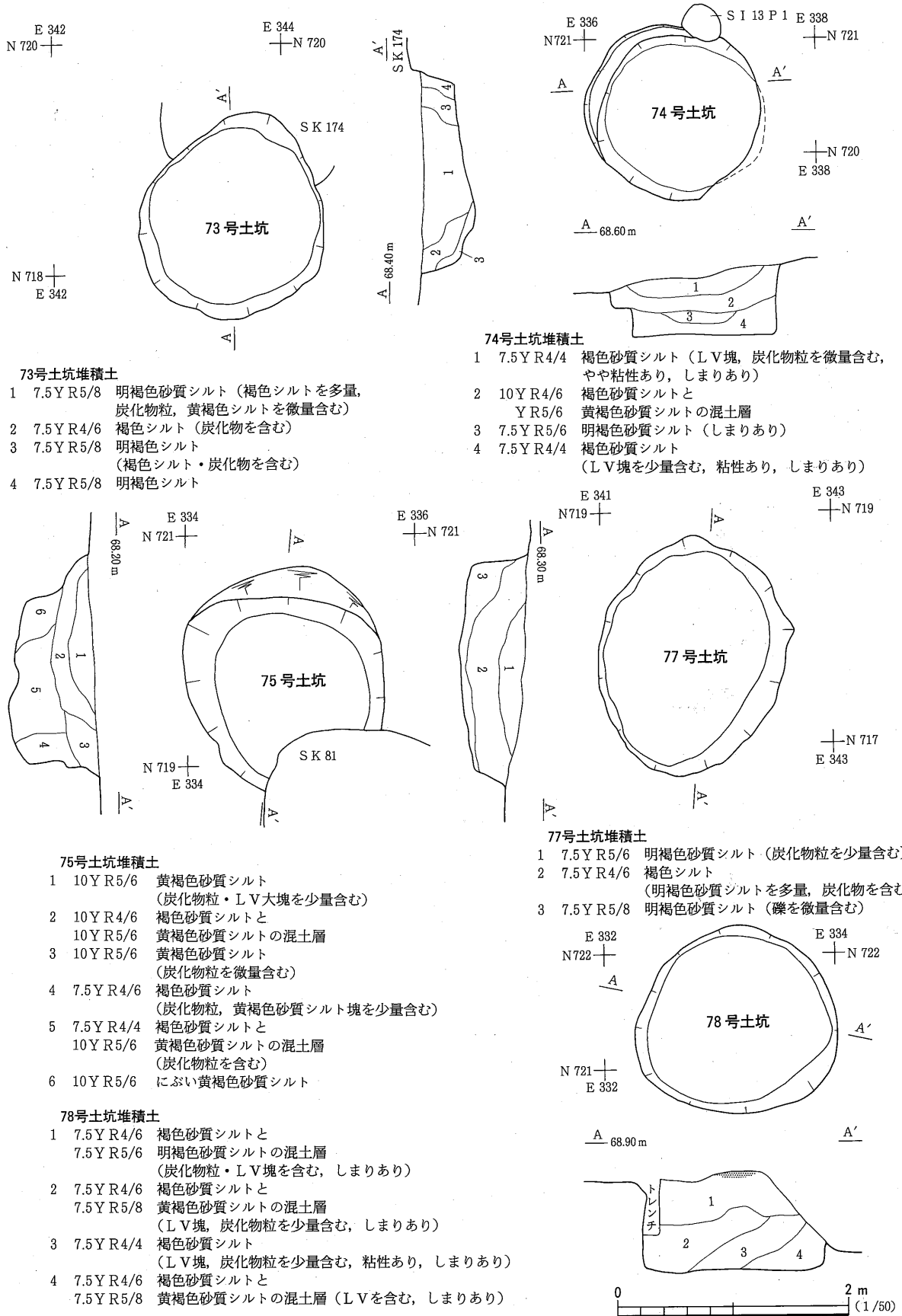
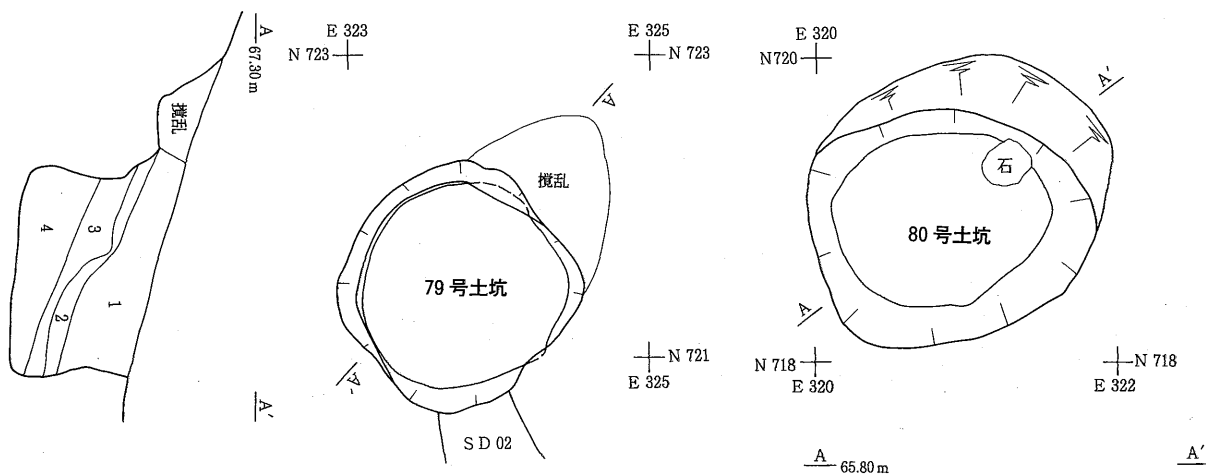


図 68 I 区 73 ~ 75・77・78 号土坑



79号土坑堆積土

- 1 7.5Y R4/6 褐色砂質シルト (小礫を少量, 炭化物粒を微量含む, やや粘性あり, しまりあり)
- 2 7.5Y R5/6 明褐色砂質シルト (ややしまりあり)
- 3 7.5Y R4/6 褐色砂質シルト (LV塊を少量, 炭化物粒を微量含む, やや粘性あり, しまりあり)
- 4 7.5Y R5/8 明褐色砂質シルト (ややしまりあり)

E 334
N 720

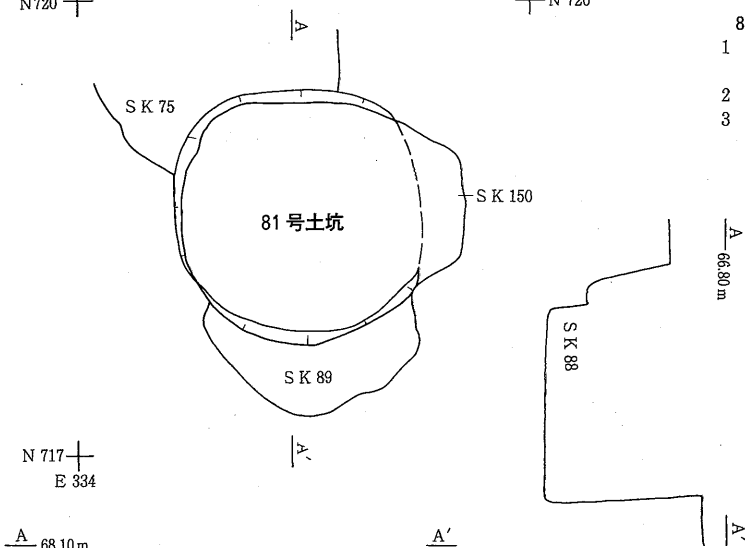
E 337
N 720

80号土坑堆積土

- 1 7.5Y R4/6 褐色砂質シルト (炭化物粒・焼土粒・LV塊を少量含む)
- 2 7.5Y R4/4 褐色砂質シルト (LV塊を少量含む)
- 3 7.5Y R5/6 明褐色砂質シルト (しまりあり)

E 333
N 718

E 335
N 718



N 717
E 334

A 68.10m

82号土坑堆積土

- 1 7.5Y R4/6 褐色砂質シルト (LV塊を少量含む, やや粘性あり, しまりあり)
- 2 7.5Y R5/8 明褐色砂質シルト (褐色シルトを少量含む)
- 3 7.5Y R4/6 褐色砂質シルト (LV塊を少量含む, 粘性あり, しまりあり)
- 4 7.5Y R5/8 明褐色砂質シルト

E 333
N 718

E 335
N 718

B 67.90m

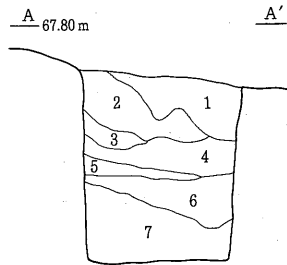
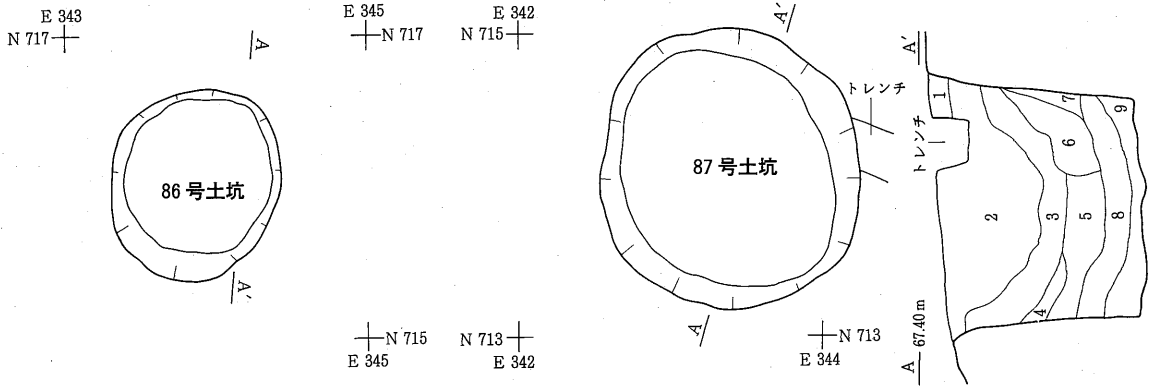
81号土坑堆積土

- 1 7.5Y R5/8 明褐色砂質シルトと 7.5Y R4/6 褐色砂質シルトの混土層
- 2 7.5Y R4/6 褐色砂質シルト (LV小塊を含む, しまりあり)
- 3 7.5Y R4/4 褐色砂質シルトと 7.5Y R5/8 明褐色砂質シルトの混土層 (やや粘性あり, しまりあり)
- 4 7.5Y R4/4 褐色砂質シルト (明褐色砂質シルト塊を少量含む, 粘性あり, しまりあり)
- 5 7.5Y R5/8 明褐色砂質シルト (壁崩落土)
- 6 7.5Y R4/6 褐色砂質シルト (粘性あり)
- 7 7.5Y R4/6 褐色砂質シルト (炭化物粒を含む, 粘性あり)



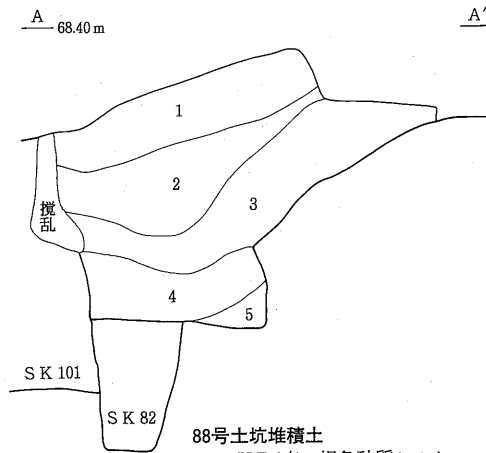
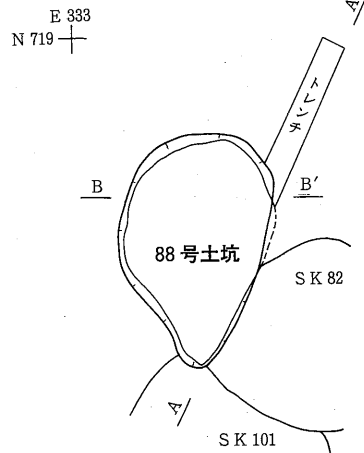
図 69 I区 79～82号土坑

第3節 土 坑



- 86号土坑堆積土**
- 1 7.5Y R5/6 明褐色砂質シルト
 - 2 7.5Y R4/6 褐色砂質シルト (炭化物を含む)
 - 3 7.5Y R5/8 明褐色砂質シルト
 - 4 7.5Y R4/6 褐色砂質シルト (明褐色砂質シルトを多量含む)
 - 5 7.5Y R5/8 明褐色砂質シルト (炭化物を微量含む)
 - 6 7.5Y R4/6 褐色砂質シルト (明褐色砂質シルトを含む)
 - 7 7.5Y R5/8 明褐色砂質シルト (褐色砂質シルトを多量, 炭化物を微量含む)

- 87号土坑堆積土**
- 1 7.5Y R5/8 明褐色砂質シルト (炭化物を含む)
 - 2 7.5Y R4/6 褐色砂質シルト (明褐色砂質シルトを多量, 炭化物を含む)
 - 3 7.5Y R5/8 明褐色砂質シルト (炭化物を多量, 褐色砂質シルトを含む)
 - 4 7.5Y R4/6 褐色砂質シルト (明褐色砂質シルトを多量, 炭化物を含む)
 - 5 7.5Y R5/8 明褐色砂質シルト (褐色砂質シルト・炭化物を含む)
 - 6 7.5Y R5/6 明褐色砂質シルト (明褐色砂質シルトを含む)
 - 7 7.5Y R5/8 明褐色砂質シルト (褐色砂質シルトを少量含む)
 - 8 7.5Y R5/6 明褐色砂質シルト (褐色砂質シルトを含む)
 - 9 7.5Y R5/8 明褐色砂質シルト



- 88号土坑堆積土**
- 1 7.5Y R4/4 褐色砂質シルト (炭化物粒を少量含む, 粘性あり, しまりあり)
 - 2 7.5Y R4/6 褐色砂質シルトと 7.5Y R5/8 明褐色砂質シルトの混土層 (しまりあり)
 - 3 7.5Y R4/4 褐色砂質シルト (LV塊を含む, しまりあり, 粘性あり)
 - 4 7.5Y R4/6 褐色砂質シルトと 7.5Y R5/8 明褐色砂質シルトの混土層 (やや粘性あり, ややしまりあり)
 - 5 7.5Y R4/6 褐色砂質シルト (粘性あり, しまりあり)

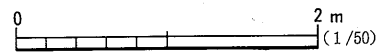


図 70 I区 86～88号土坑

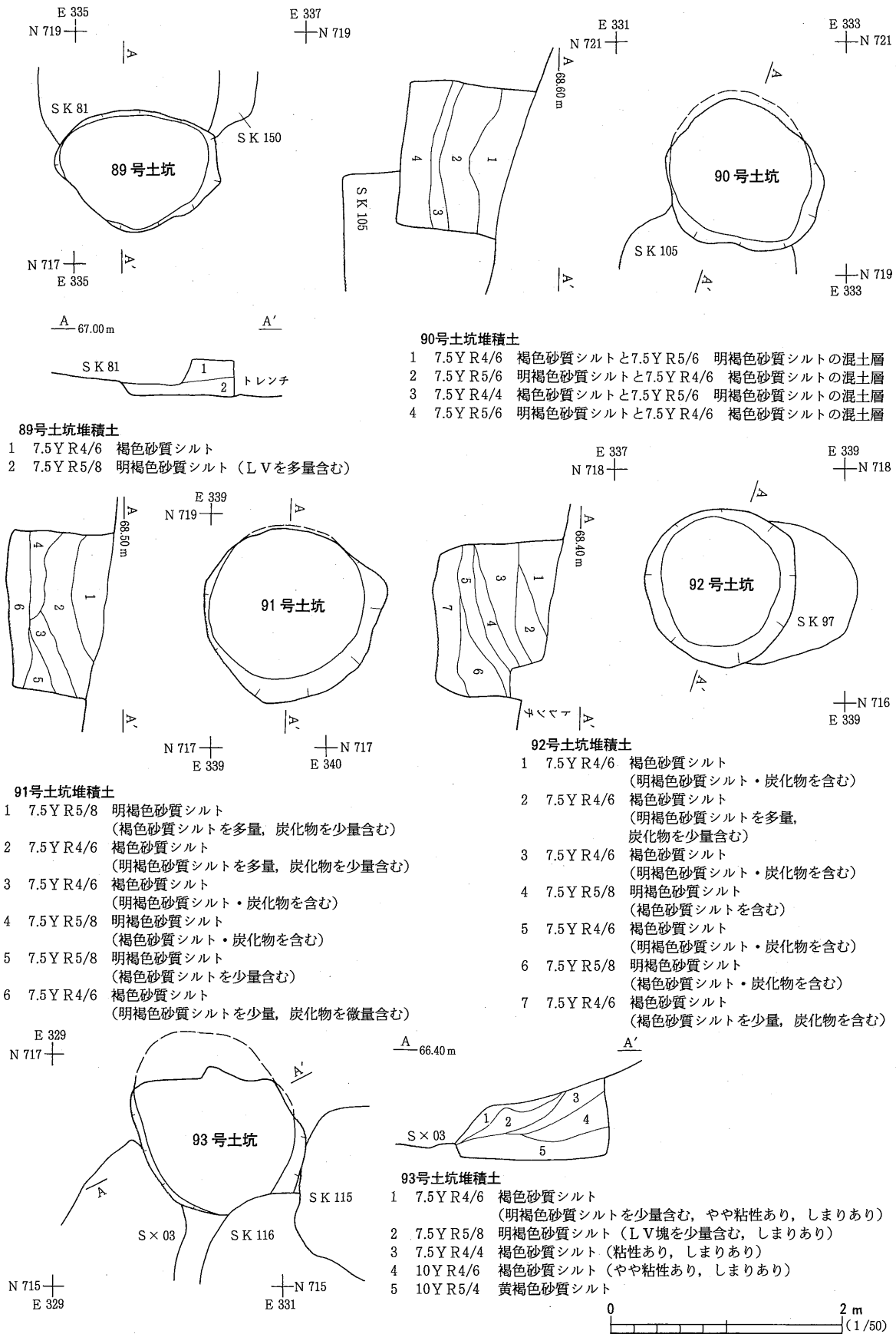


図71 I区89～93号土坑

第3節 土 坑

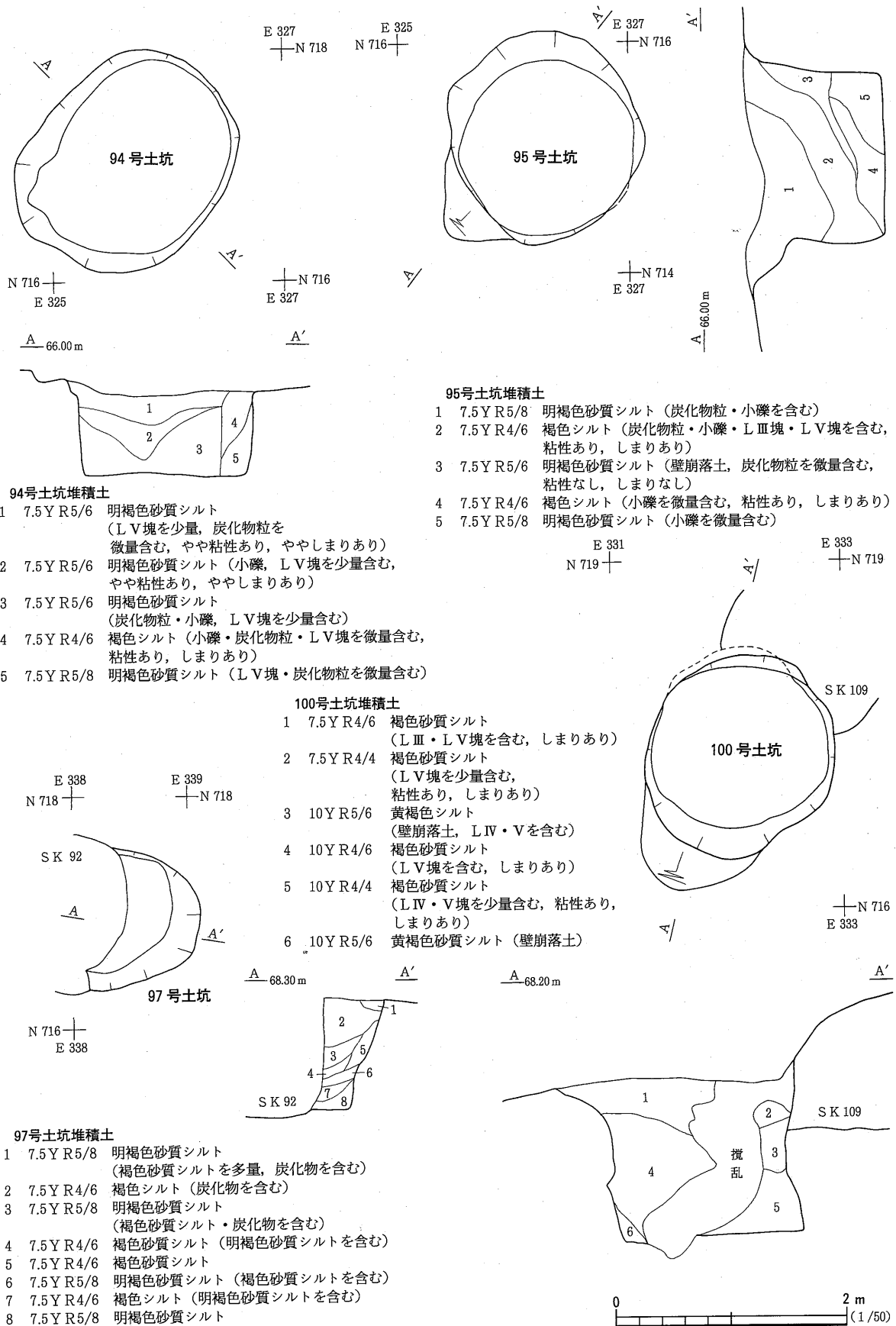
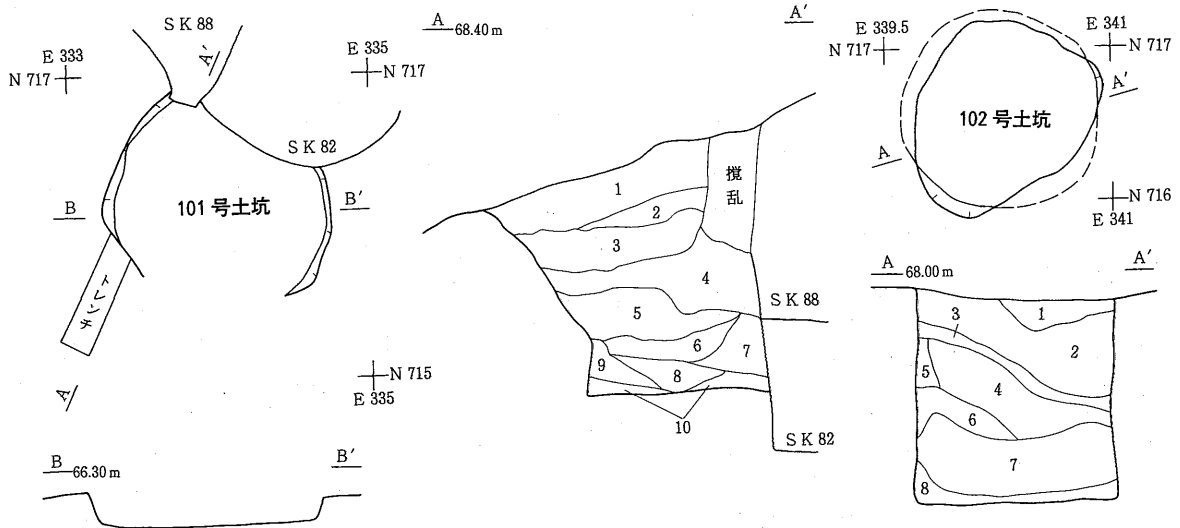


図 72 I 区 94・95・97・100 号土坑

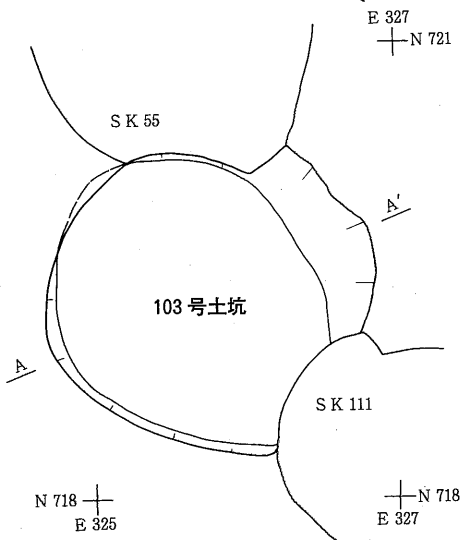


101号土坑堆積土

- 1 10YR4/6 褐色砂質シルトと10YR5/8 黄褐色砂質シルトの混土層 (小礫、炭化物粒を少量含む、しまりあり)
- 2 7.5YR4/4 褐色砂質シルトと10YR4/6 褐色砂質シルトの混土層 (やや粘性あり、しまりあり)
- 3 7.5YR4/6 褐色砂質シルトと10YR6/8 明黄褐色砂質シルトの混土層 (しまりあり)
- 4 7.5YR4/6 褐色シルト (炭化物粒を含む、粘性あり、しまりあり)
- 5 10YR4/6 褐色砂質シルト (やや粘性あり、しまりあり)
- 6 10YR5/8 黄褐色砂質シルト (褐色砂質シルトを含む)
- 7 10YR5/6 黄褐色砂質シルト (褐色砂質シルト塊を少量含む)
- 8 10YR4/6 褐色砂質シルト (炭化物粒を少量含む、ややしまりあり)
- 9 10YR5/8 黄褐色砂質シルト (壁崩落土)
- 10 10YR4/6 褐色砂質シルト (炭化物粒を少量含む、粘性あり、しまりあり)

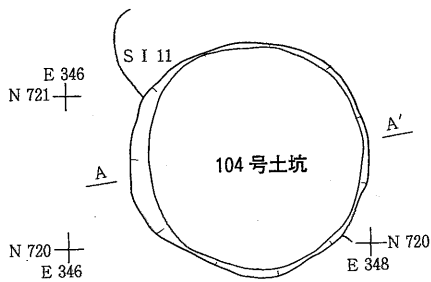
102号土坑堆積土

- 1 7.5YR5/6 明褐色砂質シルト (褐色砂質シルトを多量含む)
- 2 7.5YR5/8 明褐色砂質シルト (炭化物を含む)
- 3 7.5YR4/6 褐色砂質シルト (明褐色砂質シルトを含む)
- 4 7.5YR5/8 明褐色砂質シルト (炭化物を含む)
- 5 7.5YR4/6 褐色砂質シルト (明褐色砂質シルトを多量、炭化物を含む)
- 6 7.5YR5/8 明褐色砂質シルト (褐色砂質シルト・炭化物を含む)
- 7 7.5YR4/6 褐色砂質シルト (炭化物を含む)
- 8 7.5YR5/8 明褐色砂質シルト (褐色砂質シルトを多量含む)



103号土坑堆積土

- 1 10YR5/8 黄褐色砂質シルトと 10YR4/6 褐色砂質シルトの混土層 (凝灰岩礫を含む、やや粘性あり、しまりあり)
- 2 10YR5/8 黄褐色砂質シルト (しまりあり)
- 3 10YR5/6 黄褐色砂質シルト (やや粘性あり、しまりあり)



104号土坑堆積土

- 1 7.5YR5/8 明褐色砂質シルト (LV塊を多量含む)
- 2 7.5YR4/6 褐色砂質シルト (明褐色砂質シルトを含む)

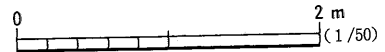


図73 I区101～104号土坑

第3節 土 坑

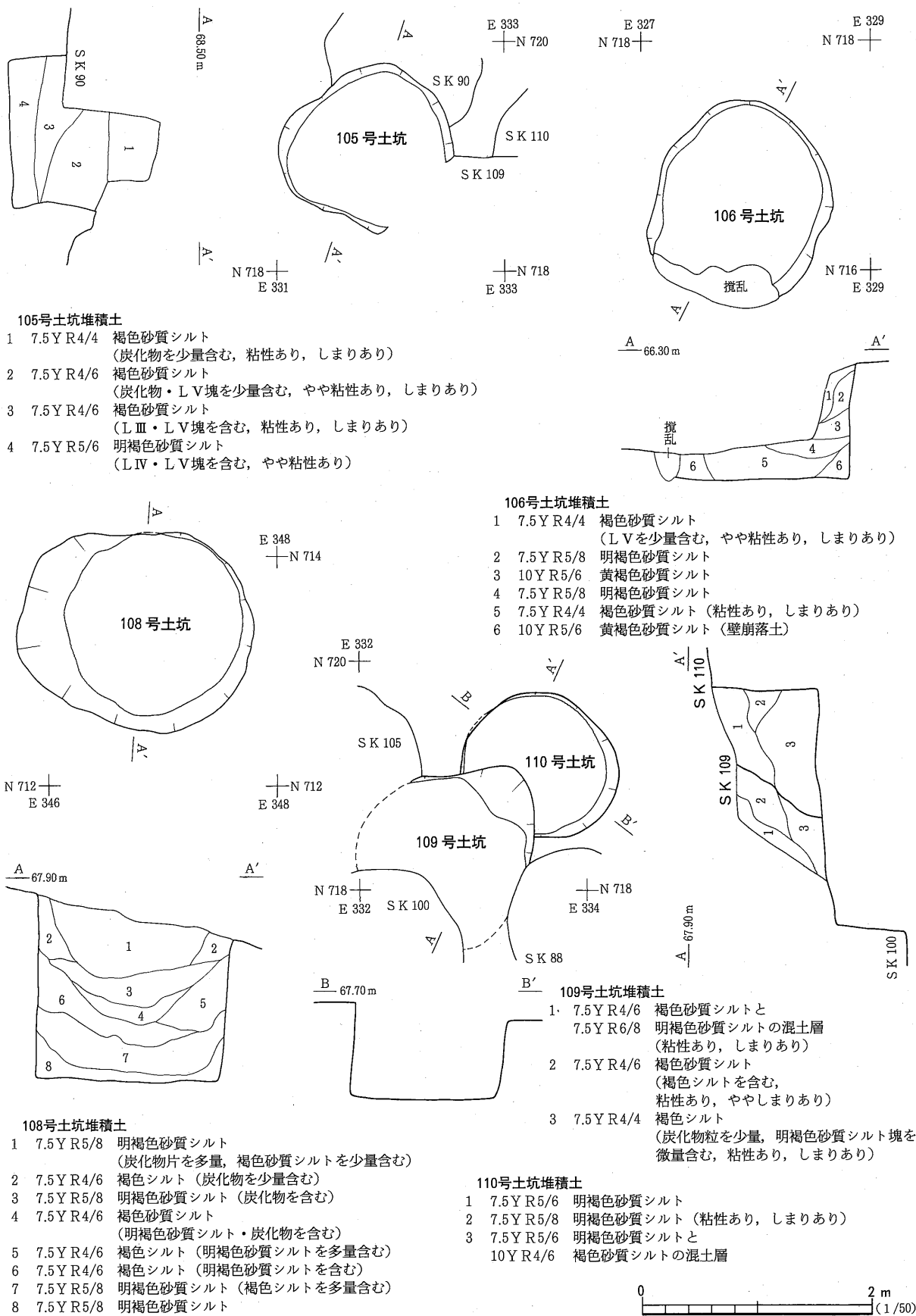


図 74 I 区 105・106・108～110 号土坑

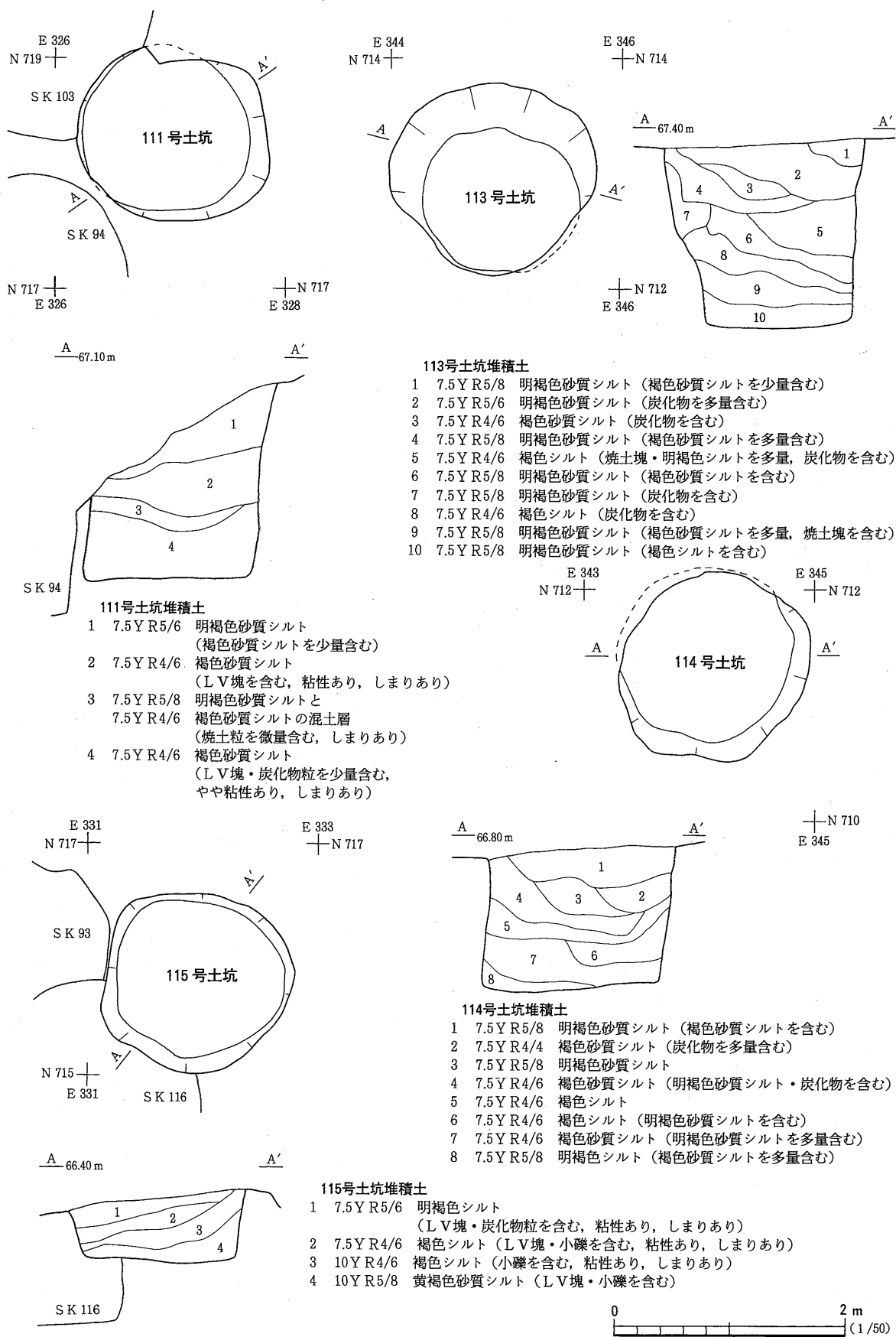


図75 I区111・113～115号土坑

第3節 土 坑

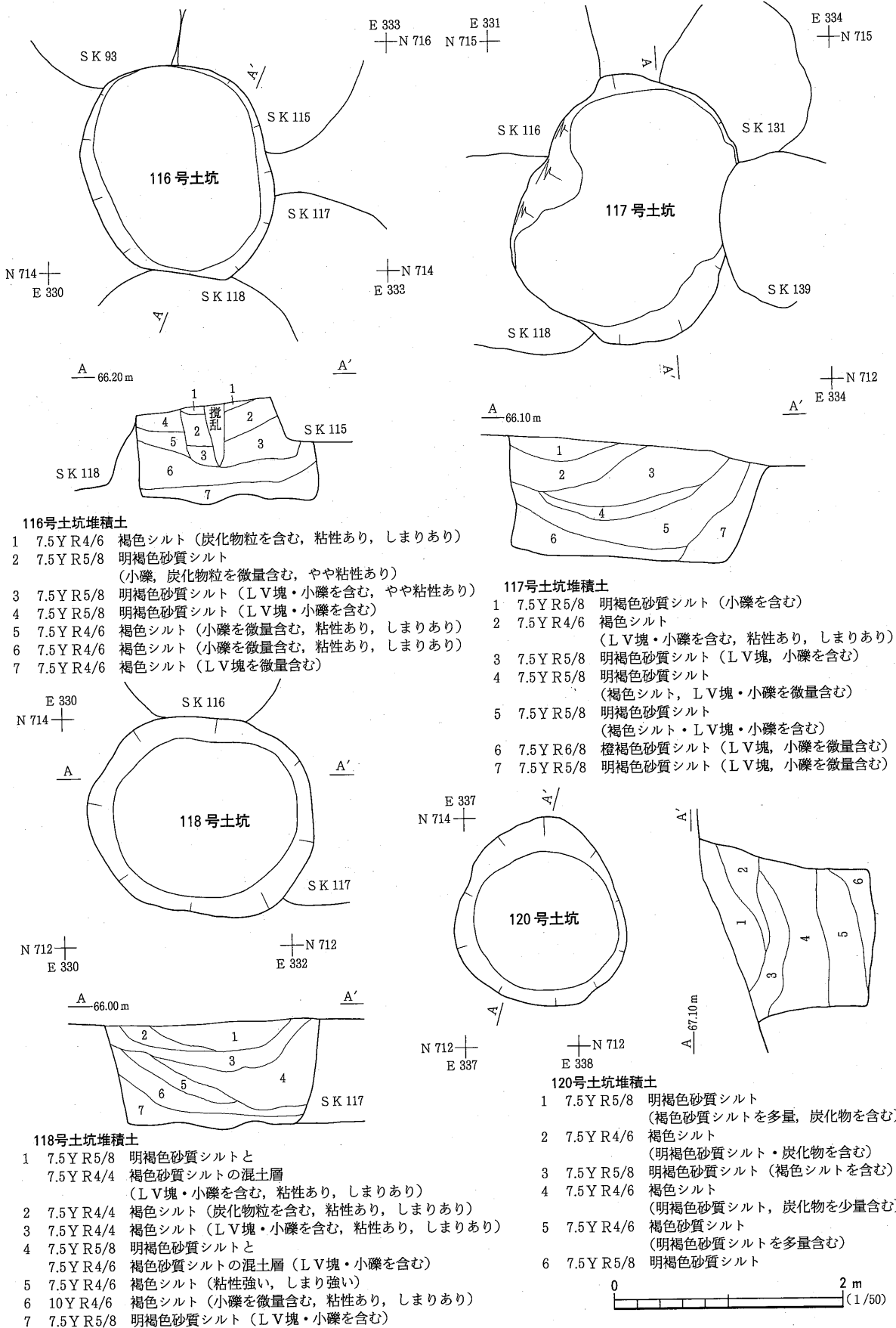


図 76 I 区 116 ~ 118・120 号土坑

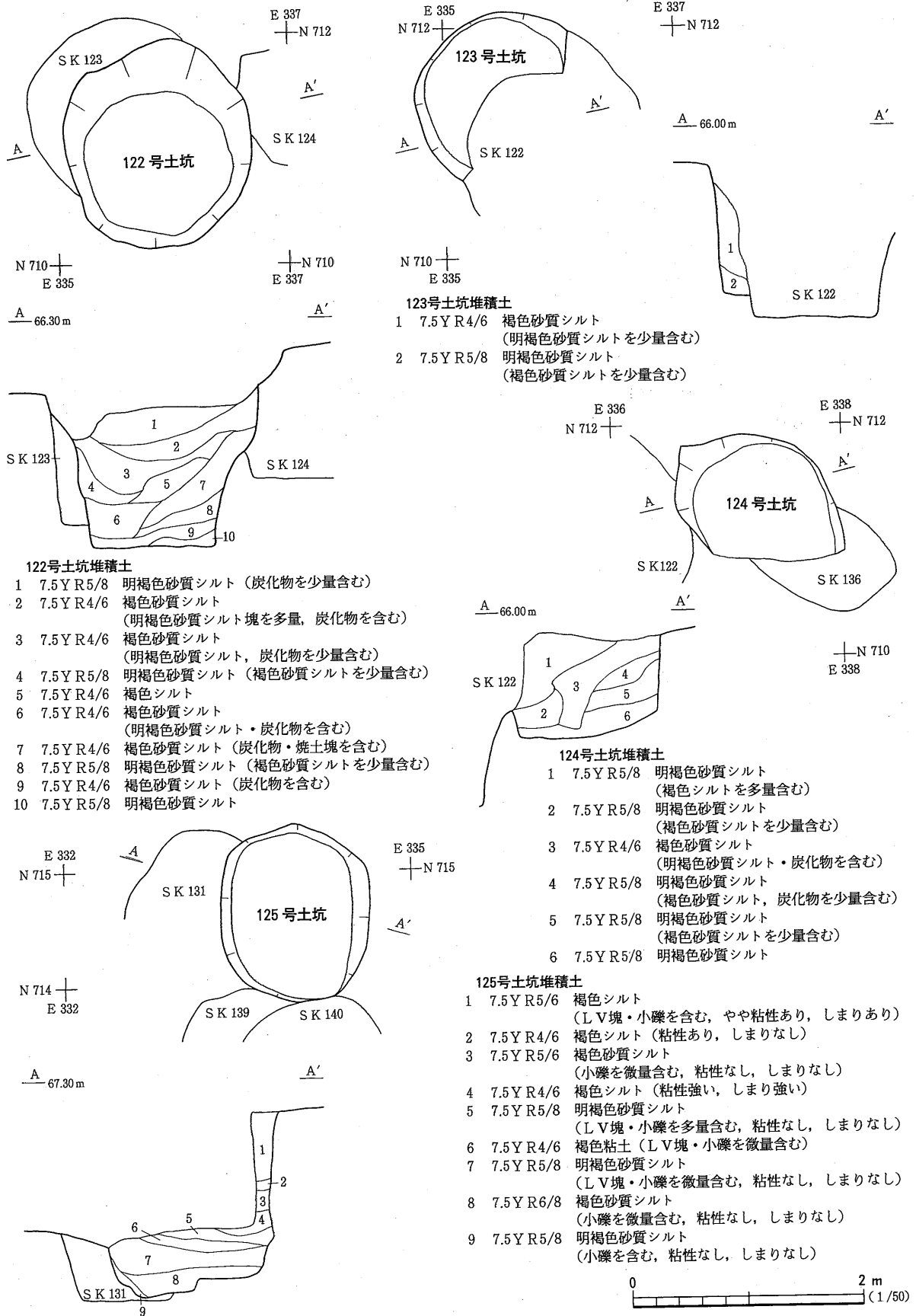


図77 I区122～125号土坑

第3節 土 坑

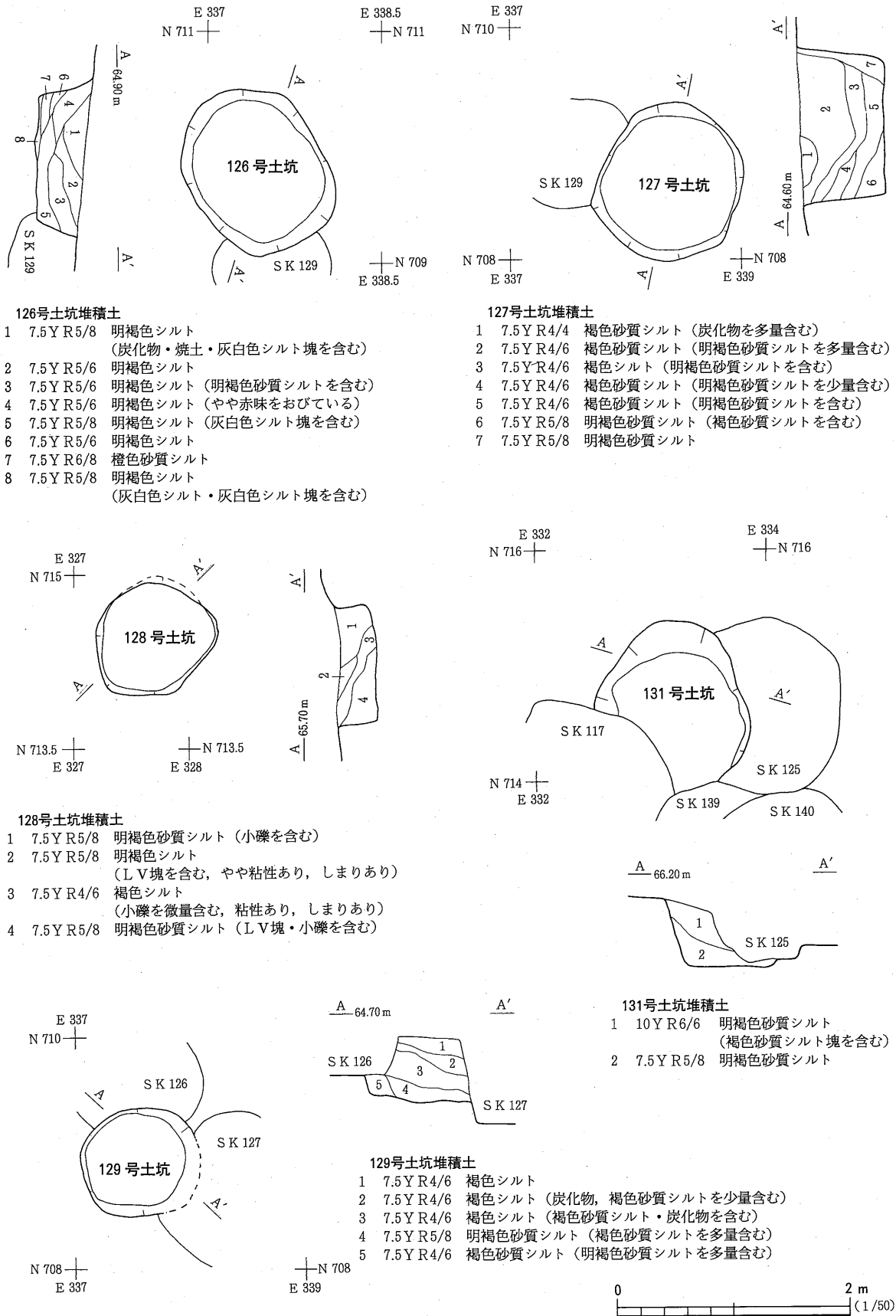


図78 I区126～129・131号土坑

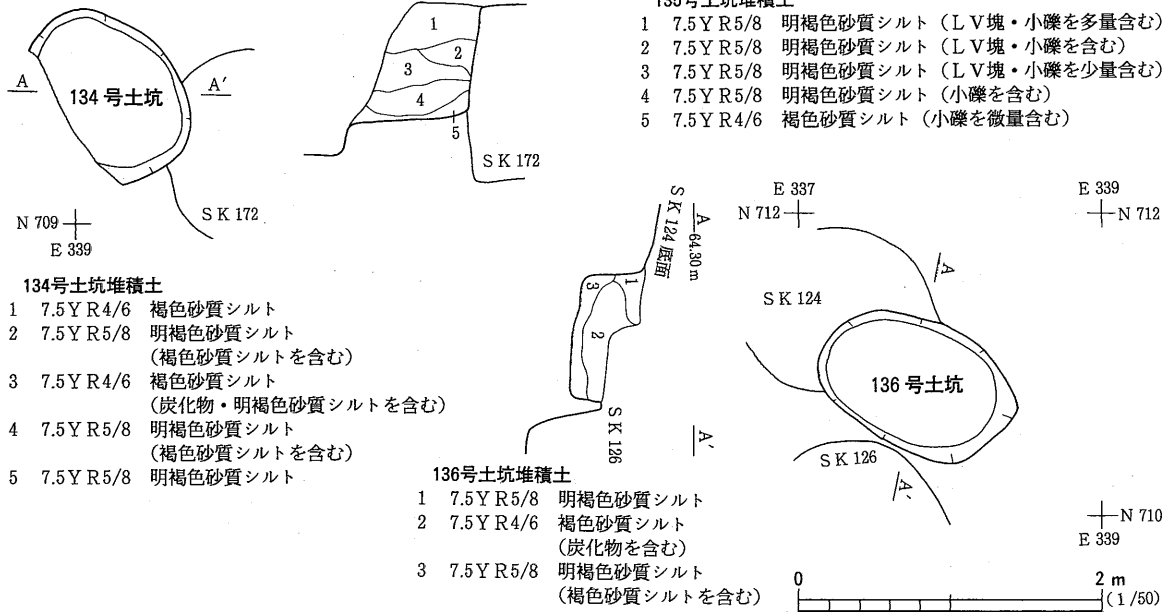
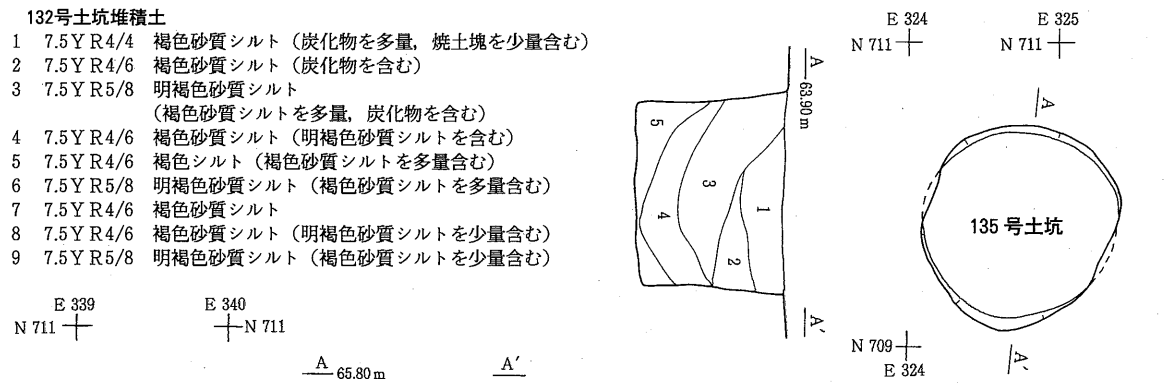
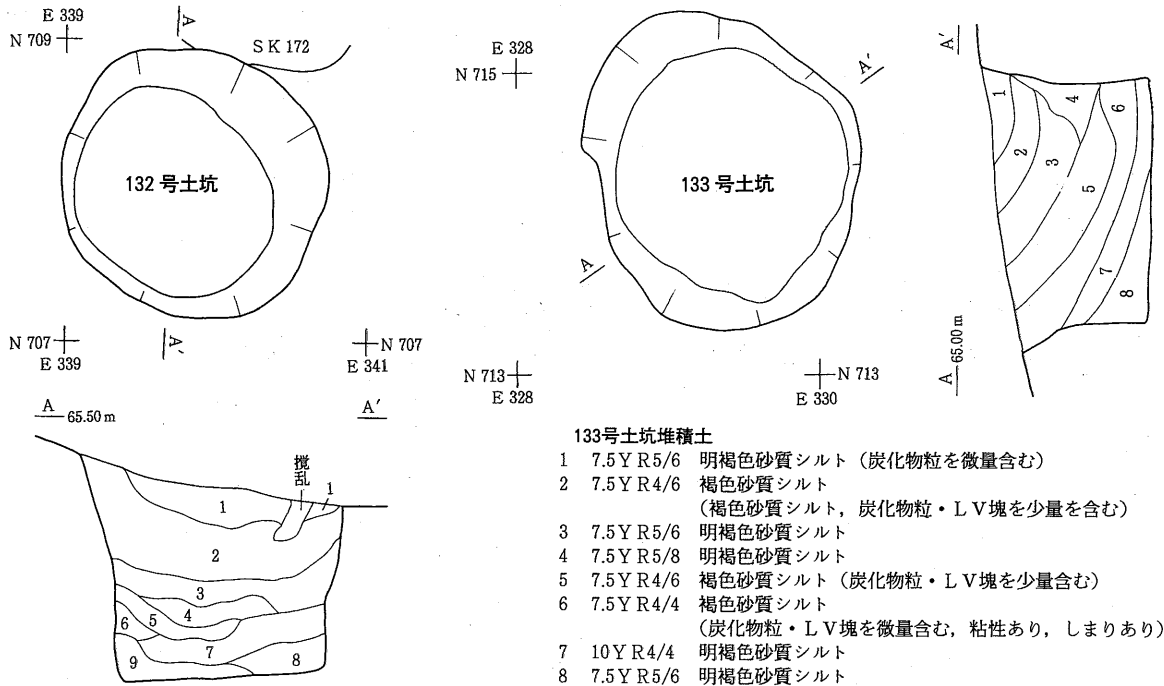


図 79 I区 132 ~ 136 号土坑

第3節 土 坑

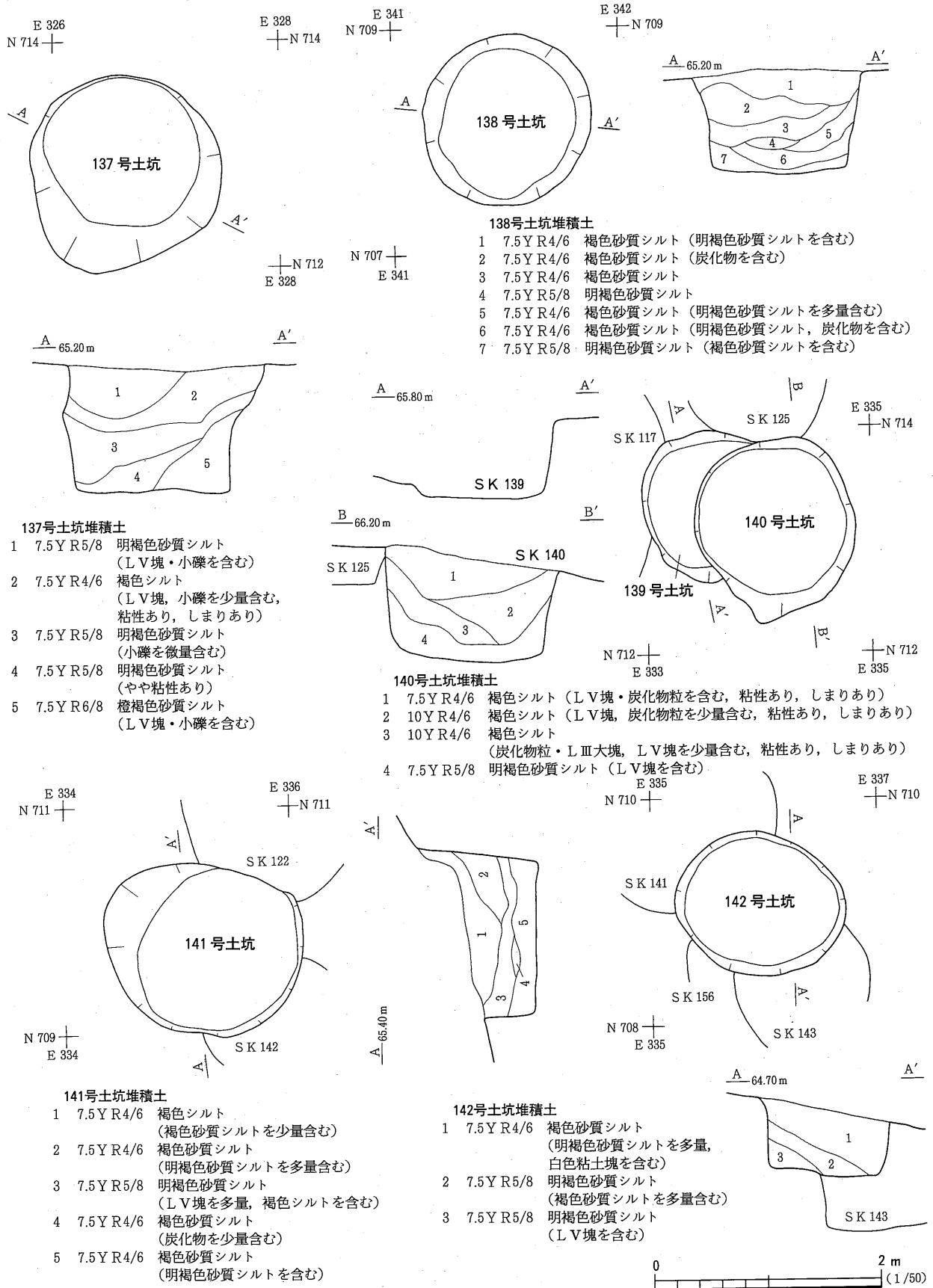


図 80 I 区 137 ~ 142 号土坑

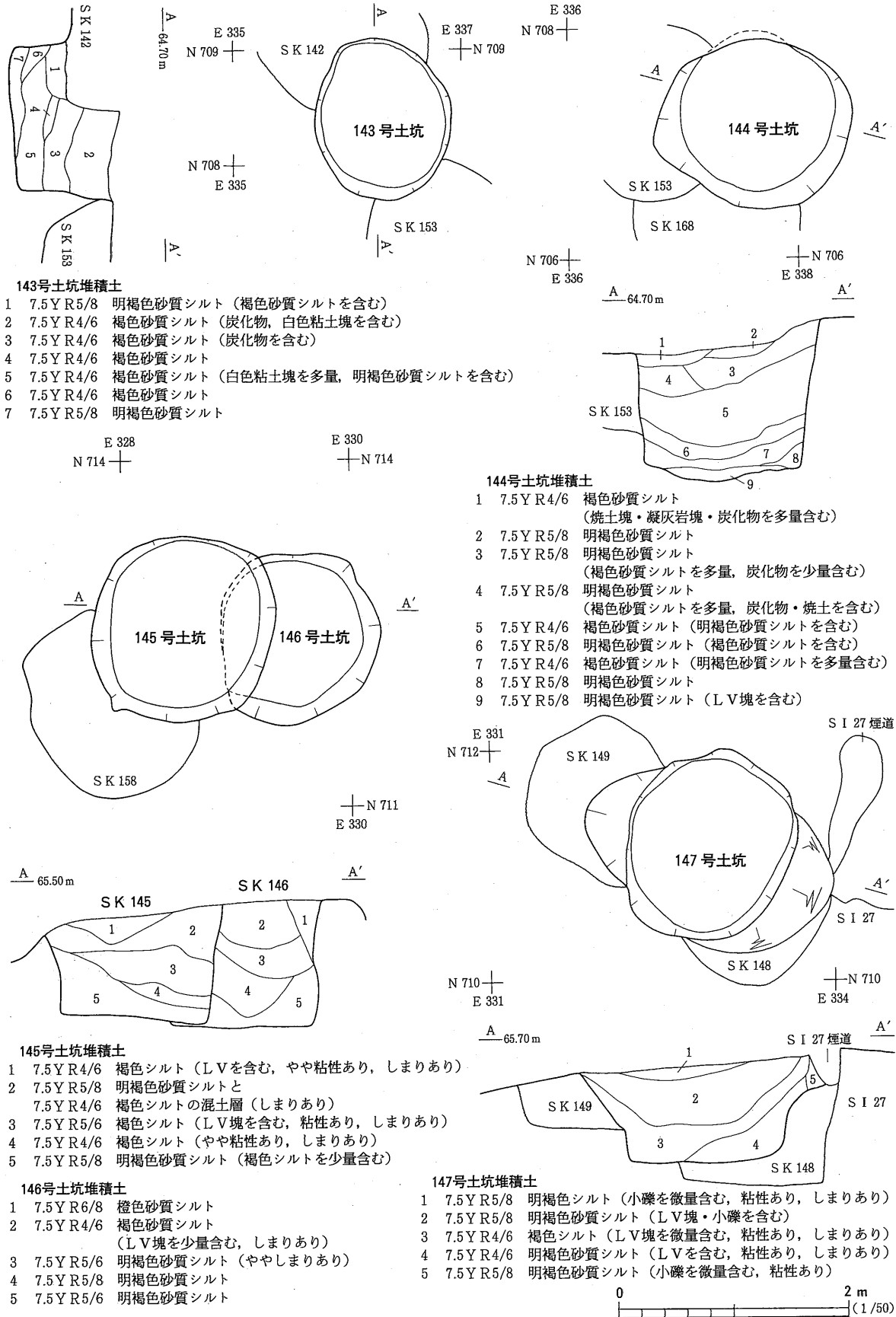


図81 I区143～147号土坑

第3節 土 坑

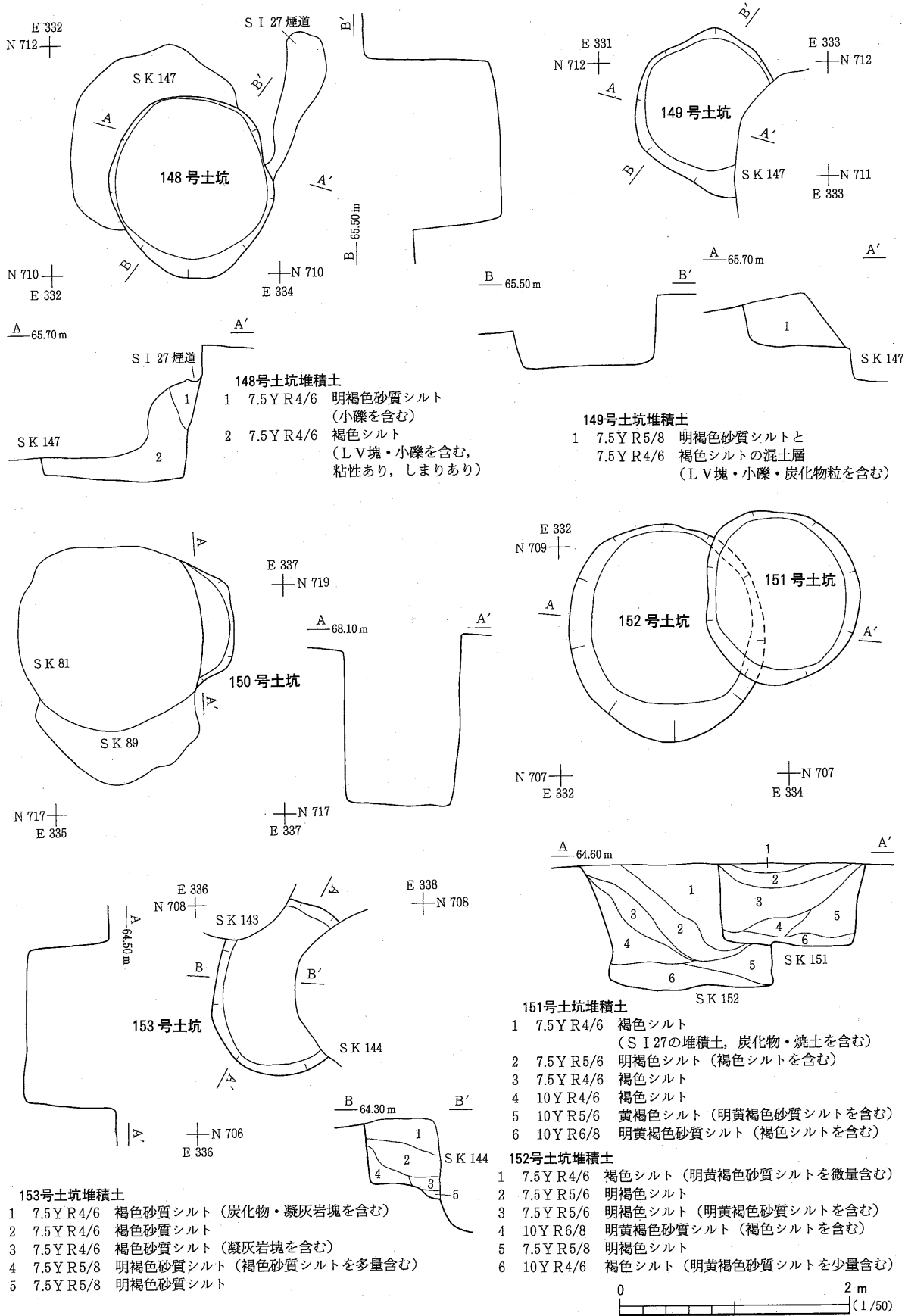


図 82 I 区 148 ~ 153 号土坑

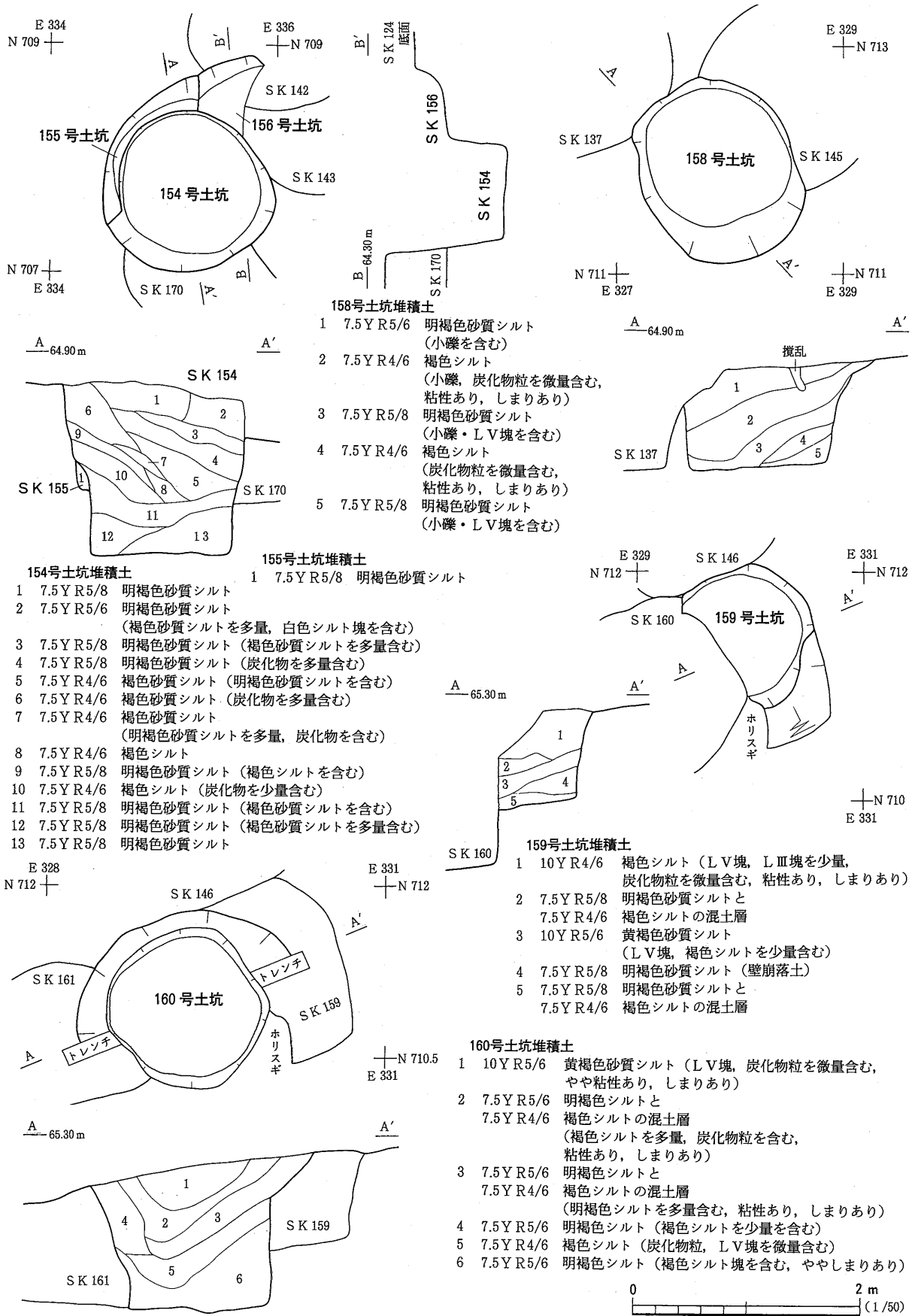


図83 I区 154～156・158～160号土坑

第3節 土 坑

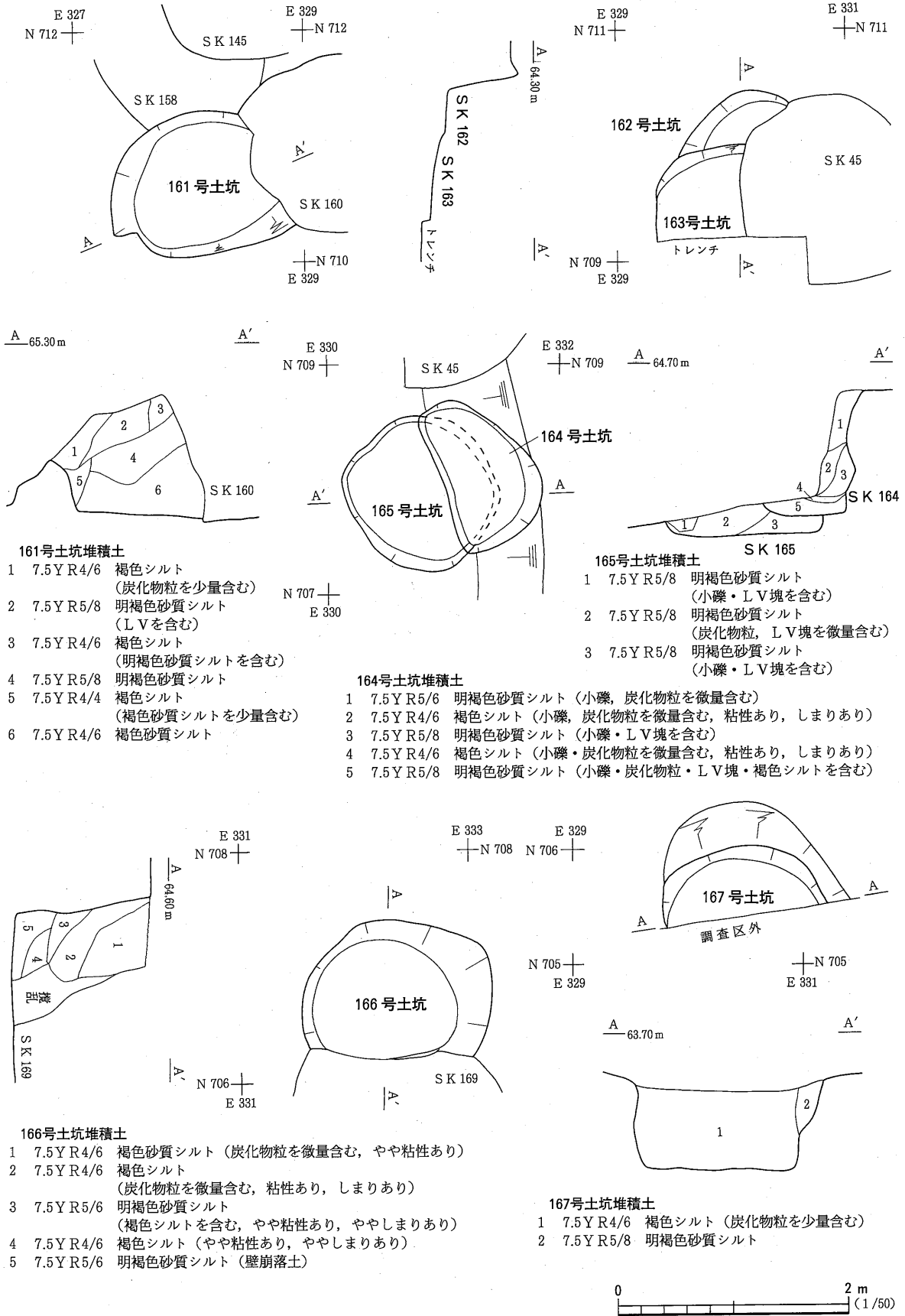


図84 I区161~167号土坑

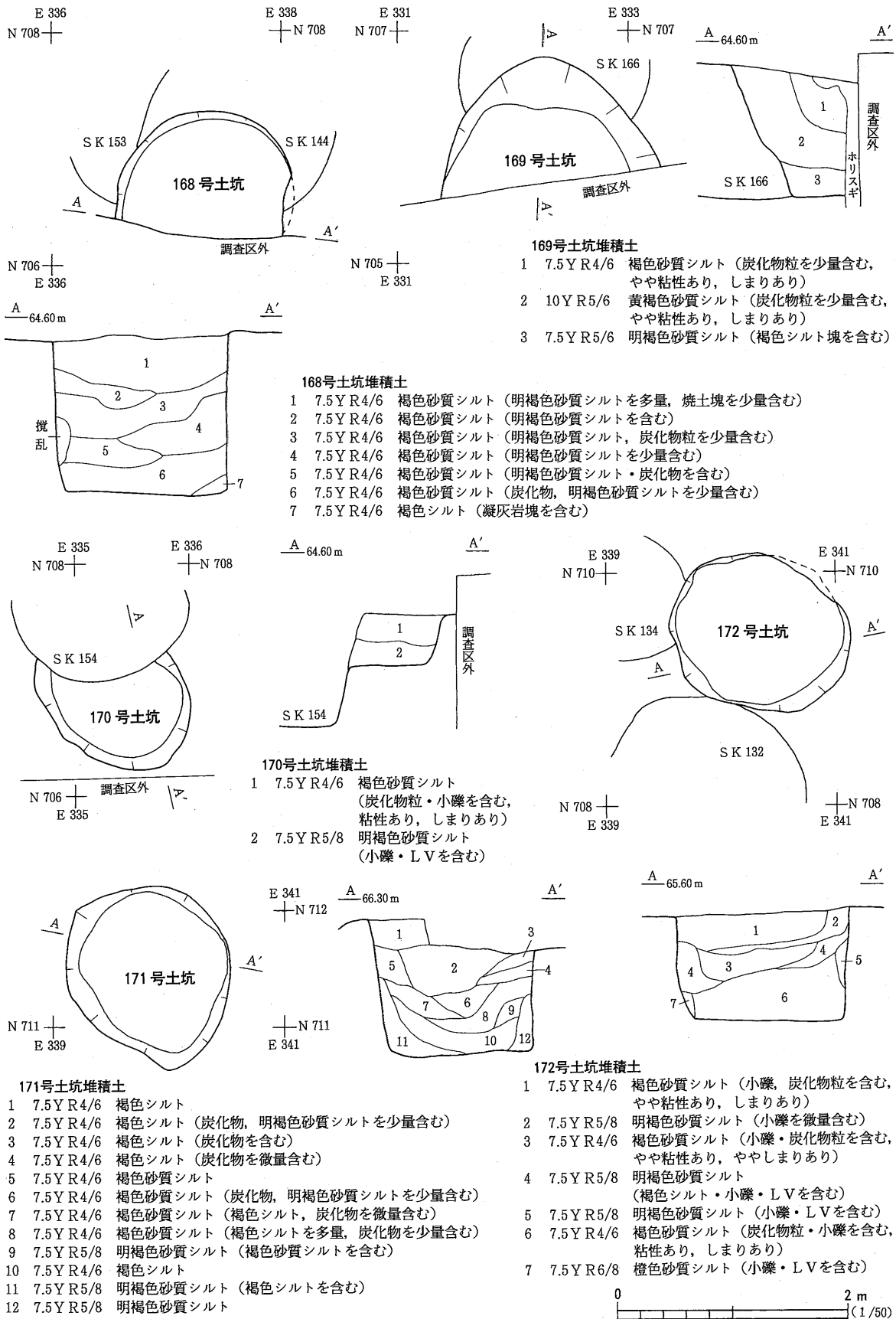


図 85 I区 168～172号土坑

第3節 土 坑

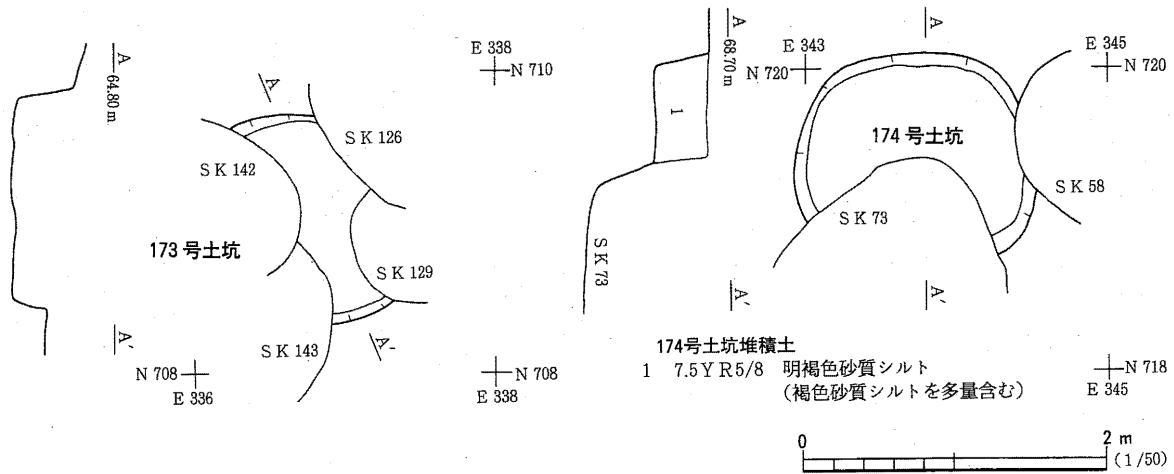


図 86 I 区 173・174 号土坑

3.5 cm, 器高 1.9 cm, 8 は口径 3.5 cm, 器高 2.2 cm, 9 は口径 4.2 cm, 器高 2.4 cm を測る。80 号土坑では, 1 から土師器 3 点が出土している。

93 号土坑では, 1 から土師器 1 点が出土している。

106 号土坑では, 検出面から土師器 1 点が出土している。

108 号土坑では, 1 から土師器 32 点が出土している。

117 号土坑では, 4 から土師器 1 点が出土している。

167 号土坑からは, 2 から図 88 - 14 の磨石のみが出土している。拳大の円礫を使用しており, この遺物の時期は縄文時代と考えている。最大長 9.5 cm, 最大幅 8.0 cm, 最大厚 6.0 cm を測り, 重さ 580 g である。

ま と め

土坑の分布は, L 3 ~ 5, M 3 ~ 5, N 3 ~ 5 グリッドの狭い範囲で集中している。このため, 重複する土坑が多い。また, 土坑が集中する南側は浸食による急崖となっており, その浸食により一部の土坑が壊されていることから, 土坑が構築された時期には, 南側に丘陵斜面が延びていたと考えられる。

土坑の規模としては直径 150 cm 前後のものが大半を占め, 形態については説明上分類を行って記述したが, 形態ごとに目立った特徴は抽出できなかった。わずかに大型で断面形がオーバーハングする土坑は斜面上方に多いように見られたが, それも遺構の遺存度に関係すると思われる。

重複関係や出土遺物から見ると, 35・36・78 号土坑は 6 世紀前半に再利用され, このうち, 78 号土坑は石製模造品のを製作した 13 号住居跡に伴う施設と考えられる。この他に, 79 号土坑は重複する 2 号溝跡から 6 世紀前半以降, 80 号土坑は 6 世紀前半以降と考えられる。

6 世紀前半以前の土坑として確実なものを 21 基認めたが, 正確に 6 世紀以前の何時かは不明である。これらの特徴として, 平面形が円形で, 断面形がフラスコ形あるいは円筒形を呈するものが多い。これらの土坑以外についても, 6 世紀前半以前の土坑と形態的に類似することから, その大

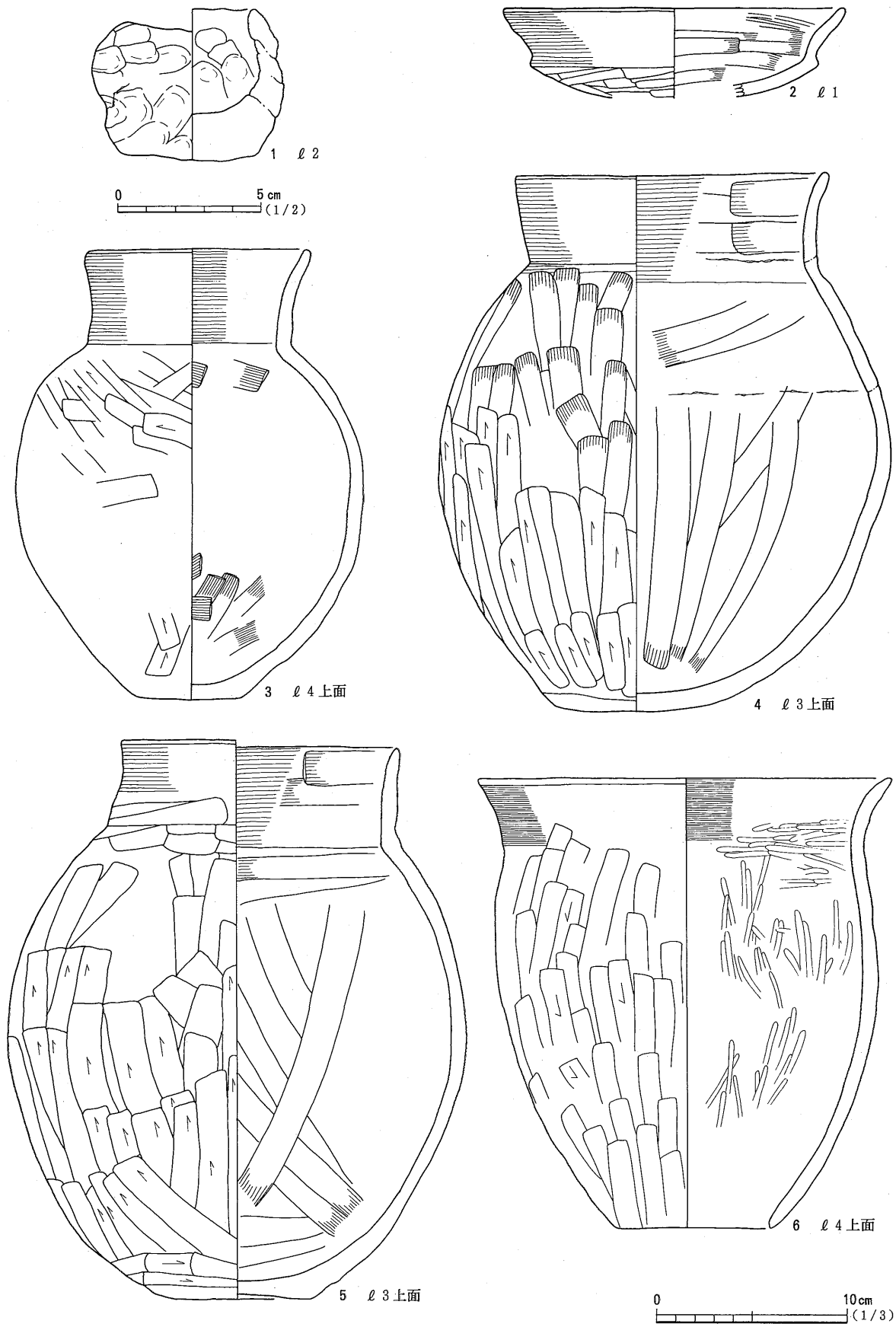


图 87 I区 36号土坑出土土師器

第3節 土 坑

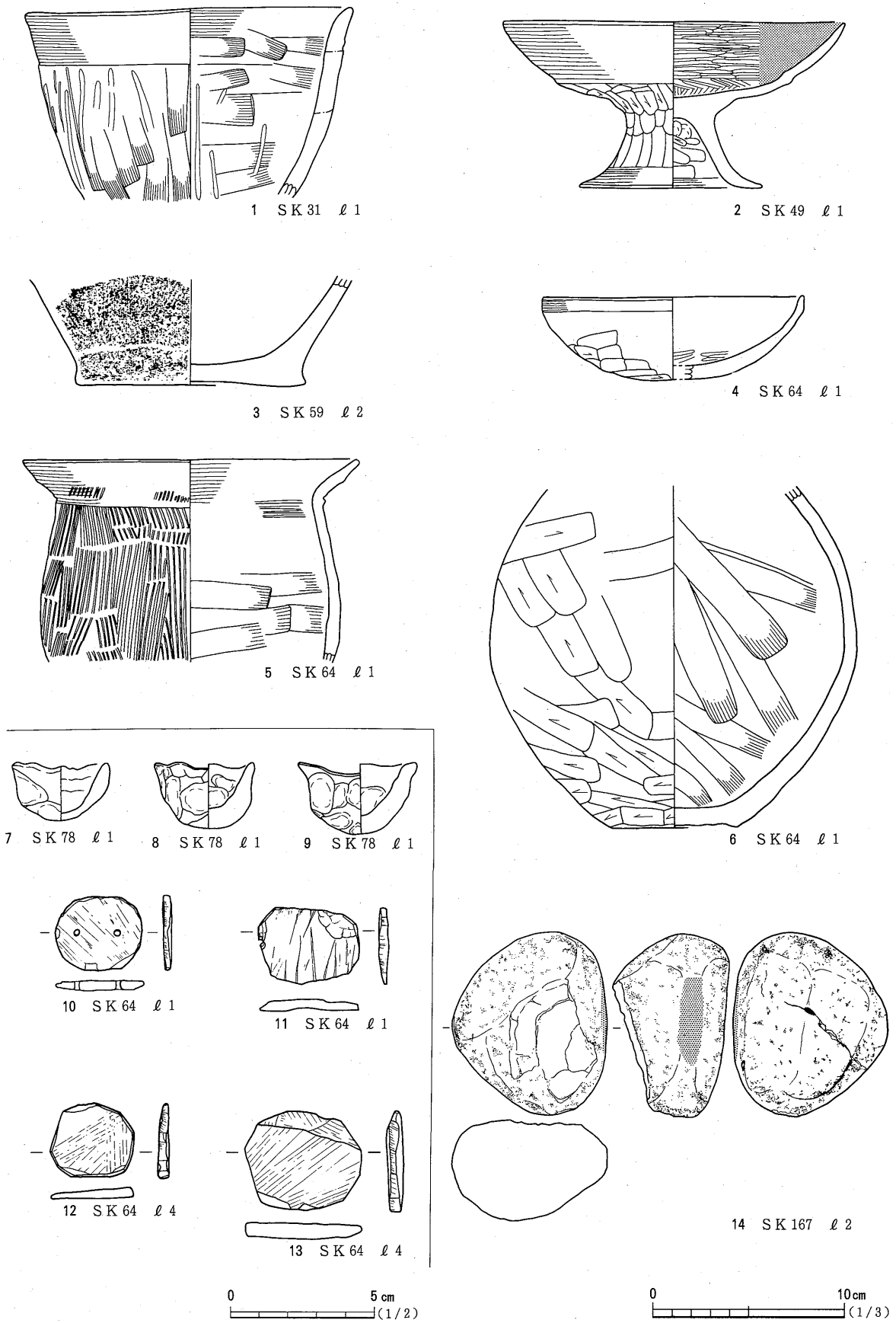


图 88 I 区円形土坑出土土師器・石製品・石器

表3 円形土坑一覧

土坑 遺物	挿図 番号	位 置	分類	堆積 土	規 模 (cm)			新旧関係・特記事項・遺物
					上 端	下 端	深さ	
29		L4	B1	d	147 × 125	170 × 153	119	土師器出土
30		L5	B2	a	147 × 121	126 × 108	81	
32		J5,K5	A3	a	103 × 89	87 × 78	35	
33		L4	A1	c	142 × 134	149 × 140	73	
35		L4	A1	e	225 × 220	250 × 244	189	古墳時代に再利用, 縄文土器・土師器・滑石剥片出土
36		L4	B1	e	277 × 227	250 × 245	196	古墳時代に再利用, 土師器・滑石剥片出土
37		L4	A1	a	142 × 136	140 × 137	54	
38		L3,M3	B1	d	171 × 149	140 × 116	84	
39		M3	B2	d	(155) × (44)	(135) × (34)	110	SK47・48→SK39
42		N3	A2	a	(105) × 66	(120) × 40	94	SK42→SI19
43		N3	A1	a	155 × (145)	152 × (139)	151	SK43→SI19
44		M3,N3	A2	a	165 × (147)	158 × (108)	204	SK44・161 新旧不明, 土師器出土
45		M4,N4	A2	a	163 × 150	156 × 140	131	SK162・163 →SK45→SI27, 土師器出土
46		L5	A1	a	178 × 166	218 × 216	257	SK46→SI17→SI10
47		M3	A1	d	140 × 108	108 × 107	168	SK47・48→SK39
48		M3・4	B2	a	(180) × 144	122 × 122	164	SK47・48→SK39
49		L4	B1	a	180 × (146)	143 × 138	71	土師器出土
53		L4	A1	d	165 × (97)	146 × (106)	70	SK53→SI13→SI09
54		L5・6,M5・6	A2	a	178 × 154	160 × 140	80	SK54→SI11, 土師器出土
55		L3	B1	d	184 × (152)	161 × 136	164	SK55・103・111 新旧不明
56		L6	B3	a	(120) × (72)	(110) × (40)	70	SK56→SI11
57		M5	B1	a	167 × 128	137 × 135	102	SK58→SK57→SI10
58		L5,M5	B3	a	145 × (115)	126 × 103	48	SK58→SK57→SI10
59		M6	A3		165 × 160	150 × 142	64	土師器出土
60		L5	A1	a	209 × 183	204 × 197	158	SK60→SI17→SI10
62		L4	A1	a	160 × (91)	155 × (96)	111	SK62→SI13→SI09
63		L4	A3	e	147 × 137	140 × 125	49	SK63→SI13, 土師器出土
64		M5	A2	e	205 × 197	176 × 154	207	土師器・石製模造品出土
65		L4・5	A1	a	182 × 160	164 × 158	113	SK65→SI10
66		L5,M5	A1	a	178 × 170	176 × 163	59	SK66→SI10
68		L4,M4	A1	a	183 × 170	171 × 150	142	SK68→SI09, 土師器・滑石剥片出土
69		L3・4	A1	e	159 × 140	148 × 140	101	土師器出土
72		L5・6	A3	a	150 × 140	140 × 132	30	SK72→SI11
73		M5	B3	a	181 × 163	152 × 149	47	
74		L4,M4	A1	d	150 × 147	131 × 123	60	SK174 →SK73→SI10
75		L4,M4	A2	d	(186) × 170	(145) × 134	76	SK75→SK81→SI09
77		M5	B3	a	200 × 166	187 × 138	67	SK77→SI10
78		L4	A2	e	172 × (152)	155 × 147	78	SK78→SI13→SI09, 古墳時代に再利用 手捏ね土器・滑石剥片出土
79		L3	A1	a	150 × 148	124 × 120	100	SK79→SD02
80		M2・3	B4	a	184 × 152	141 × 138	95	土師器出土
81		M4	B1	c	160 × (128)	158 × (130)	130	SK75・158・89→SK81→SI09
82		M4	A2	d	127 × 123	117 × 114	86	SK101 →SK82→SK88
86		M5	A2	d	130 × 113	102 × 99	129	
87		M5	A2	a	185 × 180	167 × 136	142	
88		M4	B1	a	154 × 96	148 × 94	54	SK82→SK88→SI09

第3節 土 坑

土坑 遺物	挿図 番号	位 置	分類	堆積 土	規 模 (cm)			新旧関係・特記事項・遺物
					上 端	下 端	深さ	
89		M4	B5	d	140 ×105	129 ×100	13	SK89→SK81→SI09
90		L4,M4	A1	b	140 ×126	123 ×121	120	SK105→SK90
91		M4・5	A1	a	158 ×150	133 ×132	93	SK91→SI10
92		M4	A2	a	135 ×132	110 ×104	114	SK97→SK92
93		M3・4	B1	a	125 ×120	(148) ×128	67	SK93→SI15 SK93・116 新旧不明 土師器出土
94		M3	B2	a	198 ×163	179 ×140	82	SK94→SI15
95		M3	A2	a	172 ×163	148 ×150	120	SK95→SI15
97		M4	B2	d	(120) ×(65)	(95) ×(40)	109	SK97→SK92
100		M4	A2	c	172 ×163	148 ×150	150	SK109→SK100
101		M4	A1	d	150 ×(120)	139 ×(105)	22	SK101→SK82
102		M4・5	B1	a	133 ×109	135 ×132	157	
103		L3,M3	A1	c	224 ×213	205 ×167	168	SK55・103・116 新旧不明
104		L5	A2	c	157 ×154	146 ×141	98	SK104→SI11
105		M4	A2	d	140 ×126	127 ×115	74	SK105→SK90 SK105・109 新旧不明
106		M3	B2	a	(160) ×150	(154) ×132	101	SK106→SI15 土師器出土
108		M5	A2	e	207 ×174	158 ×156	171	土師器出土
109		M4	A4	a	122 ×(95)	112 ×(91)	80	SK110→SK109 SK100・105・109 新旧不明
110		M4	A2	c	138 ×126	124 ×121	94	SK110→SK109→SI09
111		M3	A1	a	170 ×157	148 ×144	165	SK55・103・111 新旧不明
113		M5	A1	a	179 ×165	135 ×123	194	
114		M5	A1	a	170 ×149	155 ×151	138	
115		M4	A3	a	161 ×153	151 ×133	47	SK116→SK115
116		M4	B2	a	195 ×160	180 ×137	94	SK117→SK116→SK115→SI26 SK93・116 新旧不明
117		M4	B2	a	230 ×188	210 ×139	115	SK117→SK116・118→SI26土師器出土
118		M4	A2	d	203 ×171	162 ×136	96	SK117→SK118→SI26
120		M4	A2	a	166 ×152	130 ×122	152	SK120→SI23 SI23床下検出
122		M4	A2	a	182 ×164	128 ×124	132	SK123・124・141→SK122→SI18
123		M4	A2	a	(158) ×(60)	(130) ×(56)	108	SK123→SK122→SI18 SI18壁検出
124		M4	B2	a	135 ×(108)	118 ×(100)	45	SK136→SK124→SK122→SI18
125		M4	B3	a	156 ×128	142 ×106	158	SK131→SK125→SK139→SK140→SI26
126		M4,N4	B3	a	145 ×116	121 ×103	54	SK173→SK129→SK126→SI18
127		N4	A2	a	138 ×120	119 ×113	78	SK127→SK129→SI18
128		M3	A3	a	112 × 96	103 × 90	35	SK128→SI15
129		N4	A3	a	104 × 94	86 × 80	47	SK127・173→SK129→SK126→SI18
131		M4	B3	a	(134) ×(126)	111 ×100	59	SK131→SK125→SK139→SK140
132		N4・5	A2	a	174 ×171	141 ×118	146	SK172→SK132→SI18
133		M3・4	A2	a	210 ×184	167 ×152	107	SK133→SI26→SI15→SX03
134		M4,N4	B2	a	120 ×(78)	108 ×(77)	77	SK172→SK134→SI18
135		M3,N3	A1	a	135 ×128	123 ×120	101	SK135→SI19
136		M4	B3	a	130 × 85	117 × 77	48	SK136→SK124→SI18
137		M3	A2	a	178 ×170	140 ×133	132	SK137→SI15
138		M5	A2	a	156 ×144	127 ×118	100	
139		M4	A2	a	135 ×(80)	111 ×(74)	71	SK131→SK125→SK139→SK140→SI26 SK117・139 新旧不明
140		M4	A2	a	147 ×144	133 ×130	105	SK131→SK125→SK139→SK140→SI26
141		M4,N4	B2	a	179 ×146	142 ×136	114	SK142→SK141→SK122→SI18
142		N4	A2	a	150 ×124	135 ×110	75	SK173→SK143→SK142→SK141→SI18

土坑 遺物	挿図 番号	位置	分類	堆積 土	規 模 (cm)			新旧関係・特記事項・遺物
					上 端	下 端	深さ	
143		N4	A2	a	140 × 122	129 × 109	89	SK153・156・173 → SK143 → SK142 → SK141 → SI18
144		N4	A1	a	174 × 148	139 × 134	138	SK168 → SK153 → SK144
145		M3	A2	a	160 × 157	144 × 130	112	SK146 → SK145 → SK158
146		M3・4	A2	a	146 × 138	126 × 122	129	SK146 → SK145 → SI26 → SX03
147		M4	A2	a	168 × 144	142 × 130	100	SK148・149 → SK147
148		M4, N4	A2	a	158 × 143	138 × 130	120	SK148・149 → SK147 → SI27
149		M4	A2	c	128 × (80)	112 × (73)	38	SK148・149 → SK147
150		M4	-	-	100 × (36)	90 × (32)	147	SK89・150 → SK81
151		N4	A2	a	152 × 134	132 × 112	87	SK152 → SK151 → SI27
152		N4	A2	a	190 × 170	140 × 152	129	SK152 → SK151 → SI27
153		N4	B2	a	153 × (71)	137 × (62)	60	SK168 → SK153 → SK143・144
154		N4	A2	a	152 × 148	127 × 119	154	SK155・170 → SK154 → SI18
155		N4	-	-	(152) × (18)	(118) × (10)	90	SK155 → SK154 → SI18 SK155・156 新旧不明
156		N4	-	-	(70) × (56)	(70) × (51)	30	SK156 → SK143 → SK142 → SI18 SK155・156 新旧不明
158		M3	A2	a	162 × 140	126 × 120	95	SK158 → SK145 → SX03
159		M3・4	B3	a	(127) × (84)	(108) × (73)	84	SK159・161 → SK160
160		M3	A2	a	196 × 158	126 × 120	121	SK159・161 → SK160
161		M3	B2	a	(131) × 130	(112) × 102	102	SK159・161 → SK160 → SI19
162		M3・4, N3・4	-	-	(65) × (43)	(48) × (30)	67	SK162 → SK45 SK162・163 新旧不明
163		N3・4	-	-	(80) × (75)	(73) × (72)	76	SK163 → SK45 SK162・163 新旧不明
164		N4	B2	a	133 × 83	120 × 65	115	SK165 → SK164 → SI27
165		N4	A3	a	128 × 126	116 × 110	18	SK165 → SK164 → SI27
166		N4	B2	a	163 × 120	126 × 104	117	SK166 → SK169 → SI27
167		N3・4	B3	d	146 × (100)	126 × (50)	84	SK167・169 新旧不明, 磨石出土
168		N4	A2	a	145 × (107)	144 × (102)	142	SK168 → SK153 → SK144
169		N4	B2	a	192 × (72)	158 × (68)	108	SK166 → SK169 SK167・169 新旧不明
170		N4	B3	a	(144) × (110)	(118) × (91)	43	SK170 → SK155
171		M4・5	A2	a	159 × 140	140 × 128	124	
172		M4・5, N4・5	B1	a	158 × 130	147 × 128	125	SK172 → SK132・134
173		N4	B3	-	145 × (59)	132 × (59)	45	SK173 → SK129 → SK126 → SI18, SK173 → SK143 → SK142
174		L5, M5	A3	-	161 × (68)	148 × (60)	39	SK58 → SK174 → SK73 → SI10

半は一定の時期幅の中に収まるものと考えられる。また、断面形が円筒形となる土坑の周壁はその多くがLIVであり、断面形がフラスコ形となる土坑の周壁はその多くがLVである。LIVはLVに比べ締まりがないため、断面形がフラスコ形だったものが、壁の崩落により円筒形になったものがあると思われる。このことから、土坑の断面形がフラスコ形を呈するものが多かったと思われる。このように、断面形がフラスコ形を呈するものの多くは、縄文時代中期の貯蔵穴と考えることが多いため、多くの円形土坑については、同期の貯蔵穴と考えておきたい。この他に、断面形が円筒形を呈するものの中には古墳時代に伴う土坑が数基あるかと思われ、縄文時代の土坑の一部を掘り込んで使用したものと考えている。

(国 井)

第4節 その他の遺構

本節はI区で検出された竪穴住居跡と土坑以外の遺構をまとめて設定したもので、時代に関係なく、土器埋設遺構・溝跡・性格不明遺構・ピットを一括した。遺構番号は第1次調査で確認されている遺構については継続番号である。

1号土器埋設遺構 SM 01

遺 構 (図89, 写真73)

I区西部のO49'グリッドに位置し、南東方向に22号住居跡が隣接する。図示した深鉢の口縁部片が、半径1mほどの範囲から集中的に出土したために精査を行った。しかし掘り形の平面プランが把握できなかったため、断ち割り調査を行った。その結果、土器より一回り大きい掘り形を確認した。

掘り形は長軸40cmの楕円形と推定され、検出面からの深さは40cmを測る。土器は掘り形の底面に接した状態で斜位に埋設されていた。土器の内と外との堆積土の違いは判然としなかった。また、土器内から遺物は出土していない。

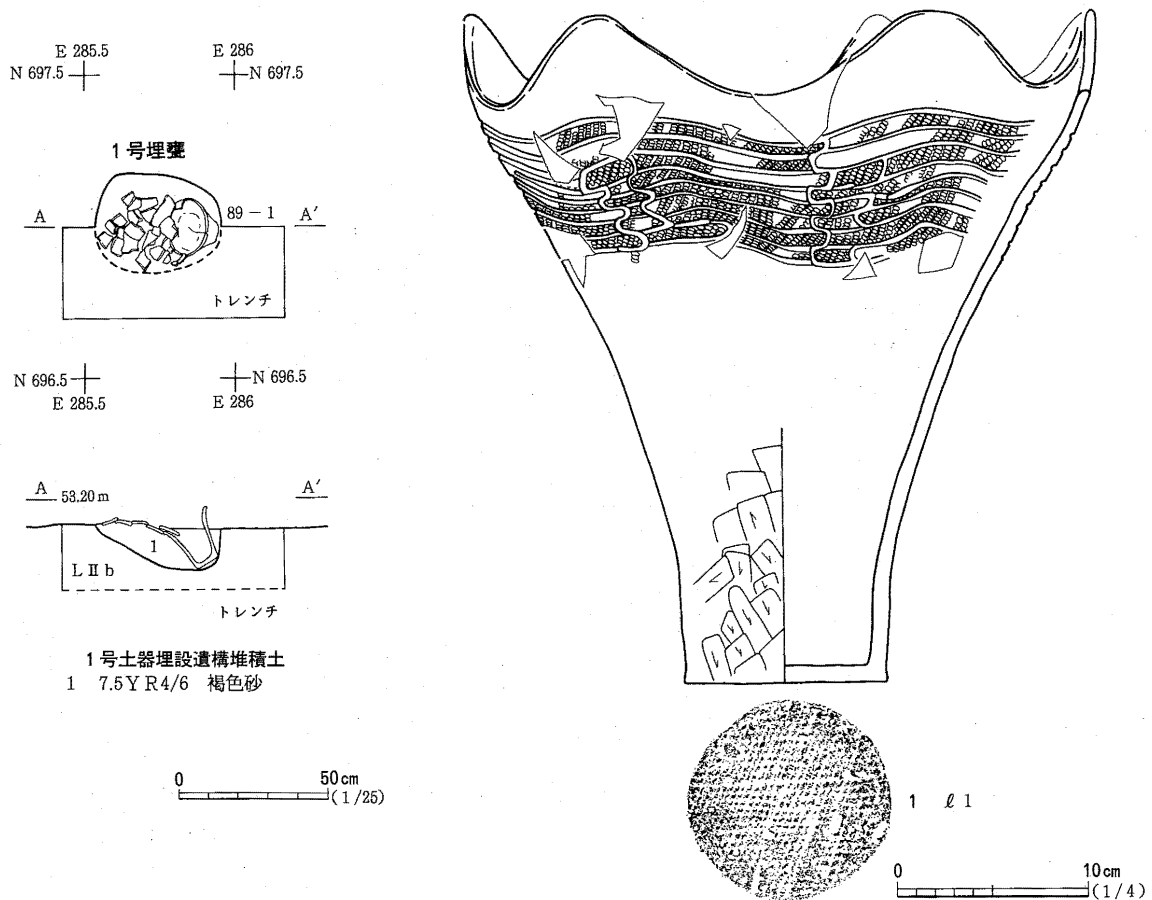


図89 I区1号土器埋設遺構, 出土縄文土器

遺物 (図89, 写真73)

土器は口縁部が大きく開く器形を呈し、6単位の大波状口縁を有する。口径33.3cm、底径10.6cm、器高35.4cmを測る。胴部上半には、幅の広い縄文帯の上に9本の平行沈線が波状に走り、その沈線間を蛇行沈線が連結している。胴部下半は無文で、底部に網代痕がみえる。

まとめ

遺構の所属時期は加曾利B式期とみられる。21・22号住居跡との関連が問題となろう。(今野)

2号溝跡 SD 02

遺構 (図90, 写真73)

I区東部のL3, M3グリッドで検出された溝跡である。本遺構は、南西側に向かう斜面に構築され、等高線に平行する。遺構検出面はLIVである。79号土坑、15号住居跡と重複し、本遺構の方が古い。遺構内堆積土は、3層に細分され、自然埋没状態を示している。L3には、多量の焼土・木炭が含まれている。規模は、遺存長264cm、幅70cmを測り、長軸方向は、真北から23°西に傾いている。検出面からの深さは、最大63cmを測る。底面は、南側が下がり傾斜となるが、おおむね平坦である。遺物は出土していない。

まとめ

本遺構は、幅の狭い溝跡であるが、重複する遺構によりその全体を知ることができなかった。溝が東側にのびていたとすれば、26号土坑につながっていた可能性がある。遺構の時期は、出土遺物がないため不明であるが、溝跡底面上に焼土・木炭粒が認められることから、周辺にある焼失家屋に関連する遺構と考えている。よって、本遺構の時期は、焼失家屋の年代である6世紀前半を中心に考えておきたい。

遺構の性格は不明であるが、溝の斜面下には同時期の遺構が確認されていないため、流水をさける排水溝とは考えにくい。(国井)

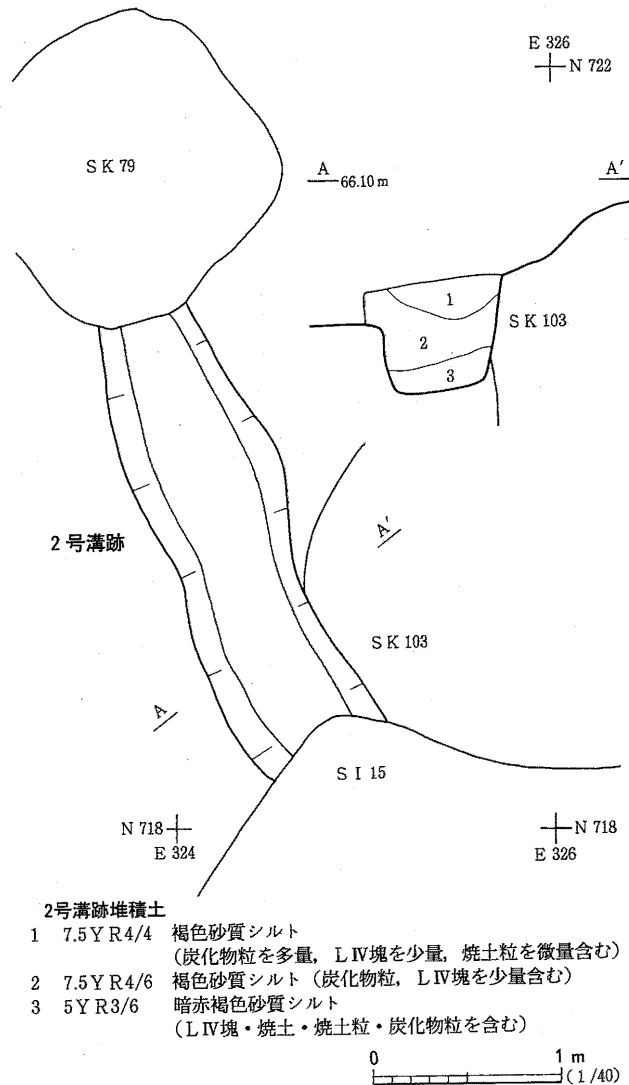


図90 I区2号溝跡

3号溝跡 SD 03

遺 構 (図91, 写真73)

本溝跡はI区西部南端のQ・R50'グリッドに位置し、46mの等高線に沿うように弧状に検出されている。LⅡb上面で99号土坑と重複するプランを検出し、本溝跡のほうが古いことを確認している。溝跡内堆積土は、2層に分けられ、 $\ell 1$ は99号土坑の堆積土に類似し、炭化物粒を含んでいる。 $\ell 2$ はLⅡbに似た土で、斜面上位からの流入土と考えられる。本溝跡の長さは約7m、最大幅は176cm、検出面から最深部までの深さは30cmを測る。底面はおおむね平坦で、最大幅は102cmを測る。周壁は緩やかに立ち上がる。

遺 物 (図91)

遺物は縄文早期の土器1片、縄文中・後期の土器96片、弥生土器9片、土師器43片が出土している。そのうち7片を図示した。図91-1は平縁の深鉢形土器片で、沈線区画内にRLが縦位に回転施文されている。3は土器の突起部で、その正面と頂部に盲孔が設けられている4は大波状口縁の波頂部片である。偏平な突起が付き、弧状の隆帯が垂下する。2は平縁の深鉢形土器片で、幅の広い縄文帯に横沈線が加飾されている。5・6は底部で、網代痕が観察される。5は底径9.0cm、6は底径11.1cmを測る。7は須恵器の甕片で、外面にタタキ目がみられる。遺物の年代は、図91-1が縄文時代中期末葉、2～6が後期中葉、7が9世紀代と考えられる。

ま と め

99号土坑が木炭焼成土坑と考えた場合、土坑が機能していた時点で本遺構は埋まり切っていなかったと判断される。よって本遺構の年代は、奈良・平安時代をさほど溯らないないと考えられる。縄文土器が多く出土しているのは、本遺構が該期の遺物を包含するLⅡbに掘り込まれているためと思われる。本遺構の性格については明らかにできなかった。

(渡 辺)

1号性格不明遺構 SX 01

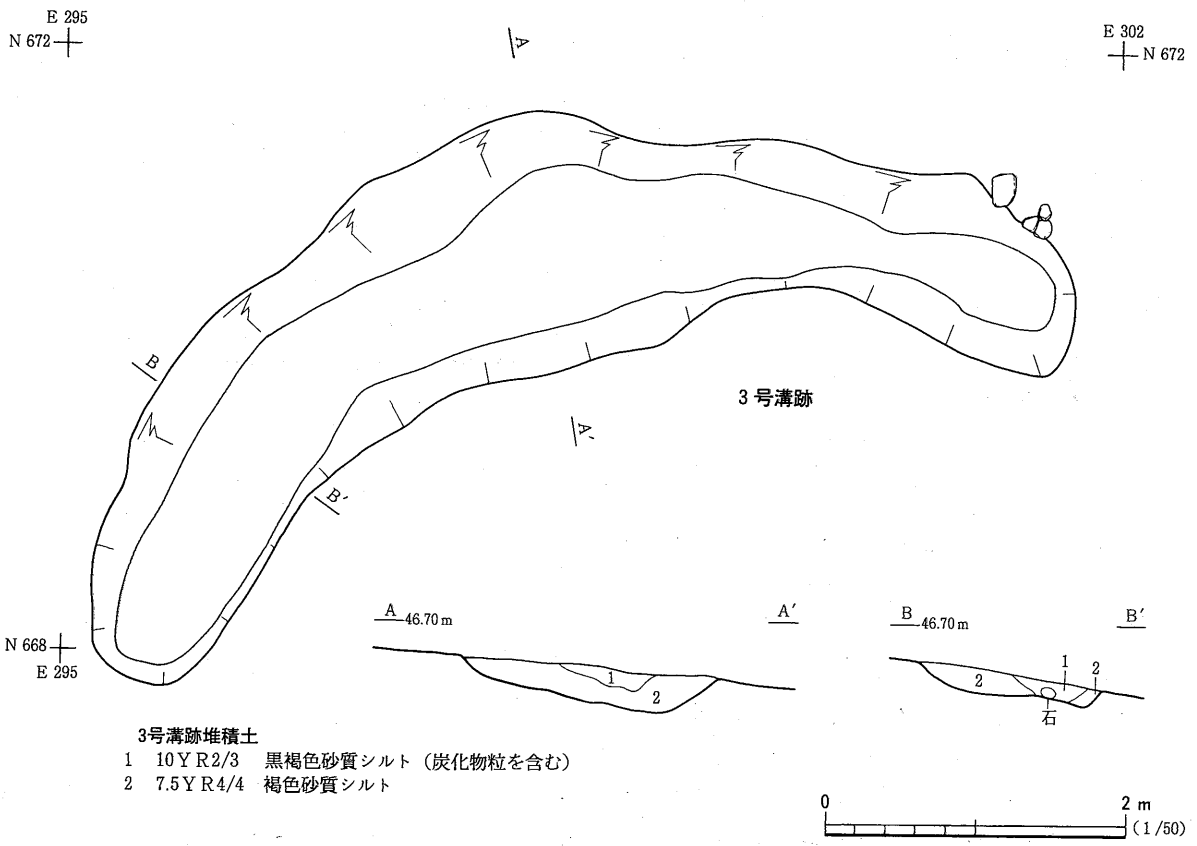
遺 構 (図92, 写真74)

本遺構は、調査区の上頂部に位置し、J5グリッドから検出された遺構である。地形的には、山頂南側の平場で北側半分が調査区外となっているため遺構の全体は不明である。

遺構検出面はLⅡであり、当区ではLⅠ(表土)の下層LⅡ(褐色砂質シルト)の下はすぐにLⅤとなる。周囲には南側に32号土坑、東斜面下に2号須恵窯跡の各遺構が隣接する。

遺構内堆積土は3層に区分される。各層位は $\ell 1$ は自然堆積であり、 $\ell 2$ 及び $\ell 3$ はP1の掘り込まれた位置からこの遺構を使用するために埋め戻した人為的堆積であることがわかる。遺構の調査区外に近い北東部にあるP1には赤黒い焼土や木炭片が多く含まれていた。

ピット上の $\ell 1$ から土師器片8点が重なるようにまとまって出土している。また、 $\ell 1$ 層は西側に最大26.0cmと厚く堆積しているが、使用したと考えられる床面も西側が低く緩やかに傾斜して



3号溝跡堆積土

- 1 10Y R2/3 黒褐色砂質シルト (炭化物粒を含む)
- 2 7.5Y R4/4 褐色砂質シルト

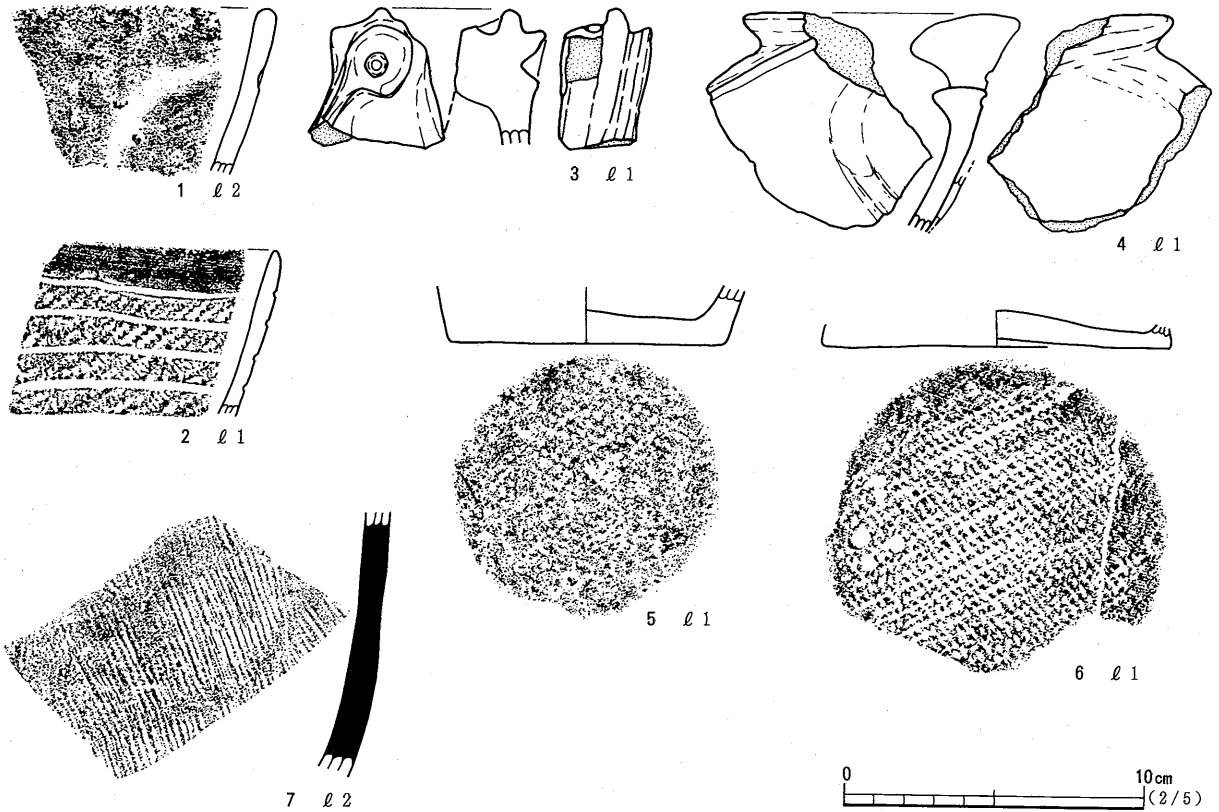


図91 I区3号溝跡, 出土縄文土器・須恵器

第4節 その他の遺構

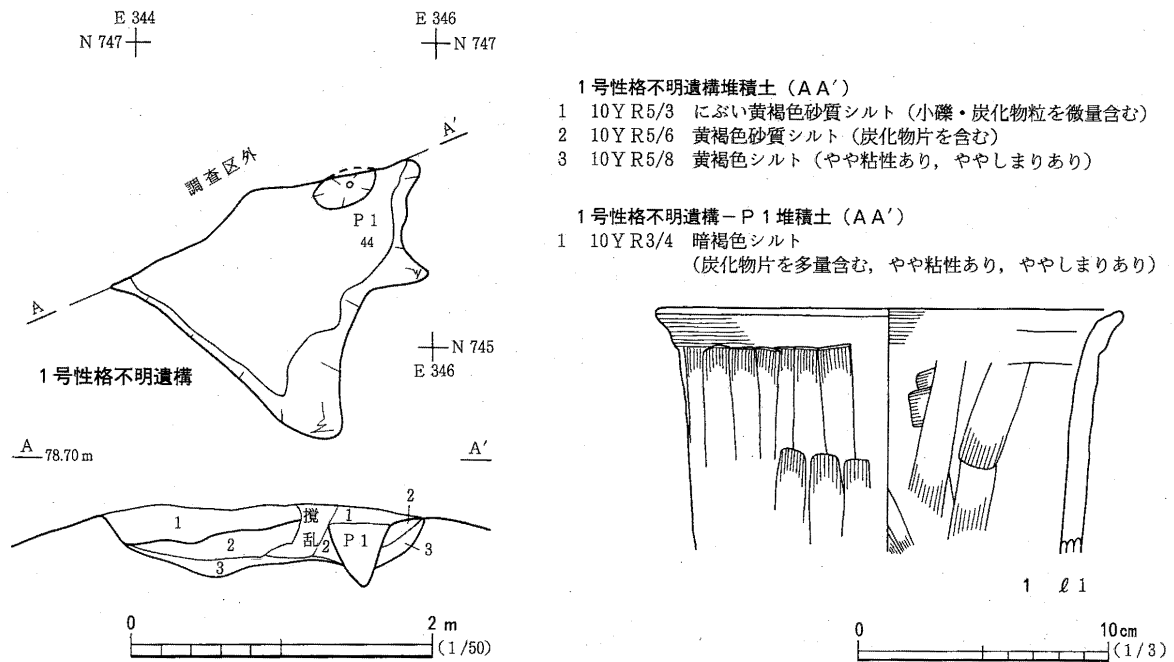


図92 I区1号性格不明遺構, 出土土師器

いる。遺構の平面形は調査区内で確認された範囲は、ほぼ三角形で2辺に挟まれた角度は直角に近い。また各辺の長さは、上端で、東辺で190 cm、西辺で174 cmまで確認される。

壁は西壁が60°、東壁が10°で緩やかに立ち上がるなど東西に大きな格差が見られる。各壁高は西辺が3.5～20.0 cm、東辺が2.5～15.0 cmと比較的低いのが特徴である。本遺構に付随する施設としては、ピットが1つ確認されただけであった。使用面から掘り込まれたピット1については上端長径44.0 cm、下端長径20.0 cm、深さ最大44.0 cmの規模を持つ。ピット内の堆積土は単層で、炭化物片を多量に含んでいた。

遺物 (図92)

本遺構からは、土師器甕片を中心に計8点の土師器片がピット1の上部ℓ1より出土した。いずれも遺存率が低く、図化できるものが1点だけであった。図92-1は、土師器甕であると考えられるが、遺存率が30%と低い。推定される器形は、口縁部に最大径を有する長胴形の土師器甕で底部から胴部にかけて直線的に立ち上がり、更に口縁部は2段階で緩やかに外反する。口径18.8 cm、器高遺存値9.6 cmを測る。器面調整は口縁部の内外面がヨコナデで、内面に積み上げ痕が2か所で認められる。胴部外面は、上から下にヘラナデ調整が入り、胴部内面は下から上にヘラナデ痕が認められた。

まとめ

本遺構はタタラ山の山頂部南側の平場に位置し、調査区外に遺構が半分かかるため全体を把握することはできなかった。山頂部という地形的特質から堆積土がほとんどなく、岩盤のすぐ上に構築された遺構である。遺構に伴う遺物は、ピット上の堆積層ℓ1からまとまって土師器片が出土した。

出土した土師器片からこの区域で見つかった10号住居跡, 14号住居跡, 16号住居跡の竪穴住居跡とほぼ同じ時期の遺構であり, 時期的には7世紀前葉であると比定される。(高村)

2号性格不明遺構 SX 02

遺 構 (図93, 写真74)

○48・49'グリッドにまたがって検出された掘り込みの浅い遺構である。傾斜角17°で南に下る斜面に立地し, 本遺構の北西方向に121号土坑が隣接する。LⅢa上面で, 淡い褐色土の方形プランを確認した。堆積土は1層のみである。ℓ1はLⅡcに類似し, 炭化物粒と焼土をわずかに含んでいるが, 自然堆積土とみられる。

検出した段階で南壁がすでに遺存しなかったため, 本来の平面形を捉えることはできなかった。残存部分を見る限り, やや歪んだ方形を呈していたものと推察され, 東西3.1m, 南北の残存長2.6mの平面規模を持つ。北壁を主軸方位とすると, 主軸方位はN76°Wを示す。周壁の残存高は残りのいい北壁でも32cm, 東西壁では10cm前後である。周壁は70°ほどの角度をもって急峻に立ち上がる。底面には細かい凹凸があるがおおむね平坦で, 斜面の下方に向かって10°傾斜している。底面に踏み締まりはみられなかった。

本遺構に伴う可能性のあるピットを3基確認している。P1は直径24cm, P3は直径30cmの円形を呈する。両者は対応する位置関係にあるため, 規模は小さいものの柱穴の可能性はある。P2

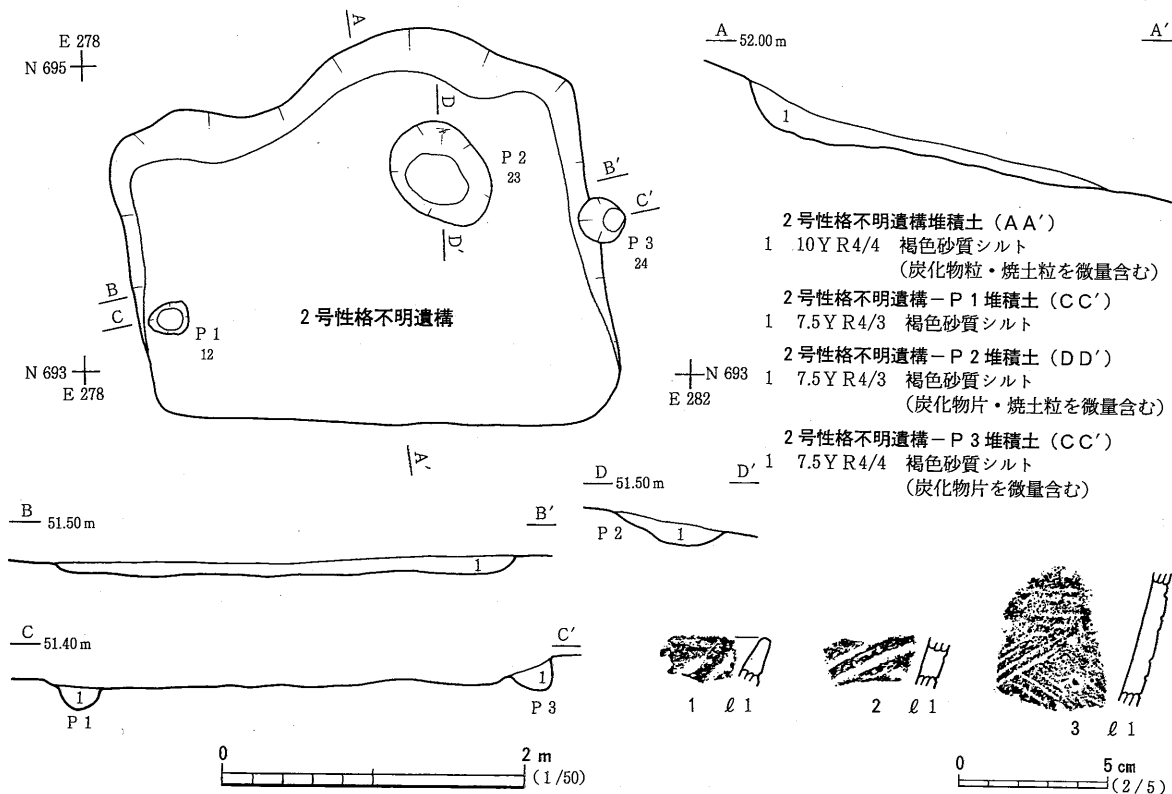


図93 I区2号性格不明遺構, 出土縄文土器

第4節 その他の遺構

は遺構の北東隅寄りに位置し、長軸74cm、短軸64cmの楕円形を呈する。炉跡ではないかと考えた
が、炭化物片と焼土がわずかに確認できたに止まった。

遺物 (図93)

堆積土中から縄文時代早期の土器4片が出土し、うち3片を図示した。図93-1は口唇部が角
頭状の口縁部片で、太い平行沈線が斜行する。図93-2・3は胴部片である。2に斜行沈線が、
3には平行沈線によって幾何的な文様が描かれている。遺物の年代は細片のため判然としないが、
縄文時代早期中葉と考えている。

まとめ

本遺構の性格は不明であるが、比較的整った平面形を呈すること、周壁寄りの対応する位置にピッ

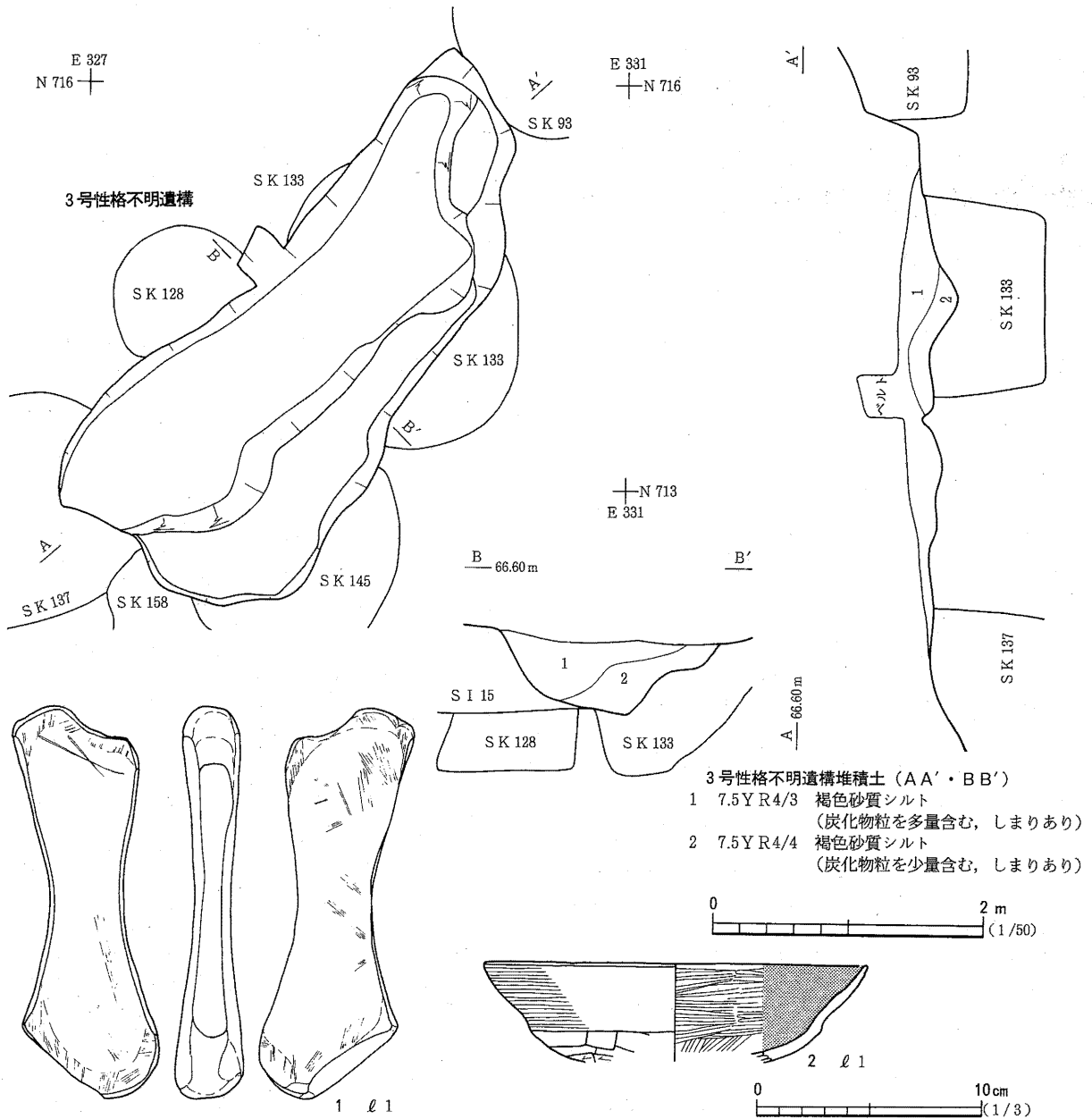


図94 I区3号性格不明遺構, 出土石製品・土師器

トを有することから、竪穴住居跡の可能性もある。遺構の所属時期も明らかではないが、堆積土や出土遺物からみて縄文時代早期中葉の可能性が高い。(今野)

3号性格不明遺構 SX03

遺構 (図94, 写真74)

I区東部のM3グリッドで検出された性格不明遺構である。遺構検出面はLIVである。15号住居跡及び93・116・128・133・137・145号土坑と重複しており、いずれも本遺構の方が新しい。遺構内堆積土は2層に細分され、自然埋没状態を示している。l1には、多量の木炭粒が含まれている。平面形は不整形を呈し、南東側には段差が認められる。底面は、細かい凹凸が認められ、中央部が最も低くなる。周壁は緩く立ち上がり、壁高は最大70cmである。

遺物 (図94)

遺物は、土師器と石製品の2点を図示した。この他に土師器67点が出土している。図94-2は、土師器杯の破片である。底面から体部上端で弱い段を持ち、口縁部が内湾ぎみに立ち上がる器形である。調整は、口縁部外面にヨコナデ、体部から底部外面にかけてヘラケズリを行なっている。内面には、ヘラミガキの後黒色処理を施している。出土状況からすると本遺構には伴わないものと考えられる。図94-1は砥石である。研磨による使用面が4面あり、鉄製品の研磨に使用されたものと考えられる。

まとめ

遺構の時期を決定できる遺物は出土していないため、時期については不明である。重複する15号住居跡より新しいことから、7世紀後葉以降の所産と考えられる。(国井)

4号性格不明遺構 SX04

遺構 (図95, 写真74)

O48'グリッドで検出された焼け面をもつ掘り込みの浅い遺構である。傾斜角12°の斜面に立地

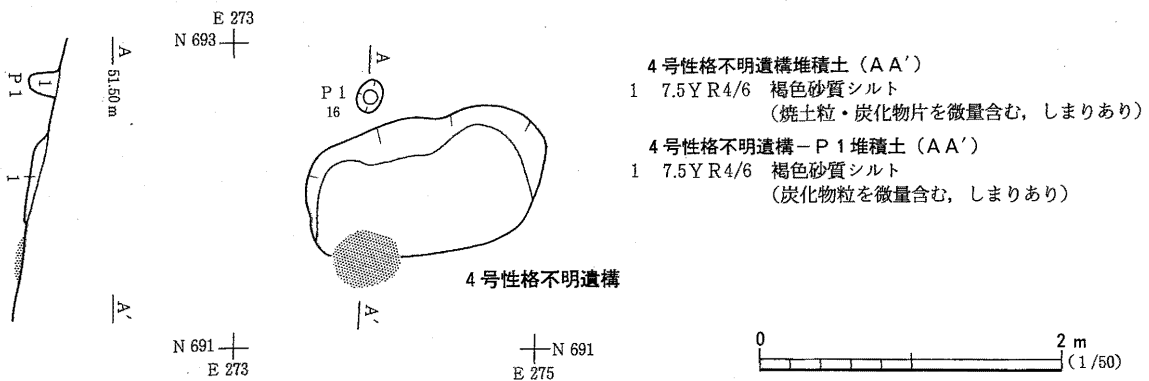


図95 I区4号性格不明遺構

第4節 その他の遺構

し、東方0.5mに5号ピットが隣接する。また3.8m東方には2号性格不明遺構がある。検出面はLⅢa上面で、重複する遺構はない。堆積土は1層のみでLⅡcに近似し、炭化物片と焼土をわずかに含んでいるが、自然堆積土とみられる。

検出段階で南壁がすでに削平されていたため、本来の平面形をとらえることはできなかった。残存部分を見る限り、隅丸の方形を呈し、東西1.7m、南北残存長0.9mの平面規模を持つ。北壁を主軸方位とすると主軸方位はN74°Wを指し、2号性格不明遺構と主軸方向がそろうことになる。周壁は緩やかに立ち上がり、最も残りの良い斜面上位の北側で残存高13cmを測る。底面に顕著な凹凸はなく、全体が周囲の地形に沿うように6°傾斜している。なお、底面に踏み締まりなどはみられなかった。

底面では被熱によって赤く変色した箇所を確認した。焼け面の範囲は直径45cmの円形を呈し、断面を観察したところ5cm程の深さまで熱が浸透していた。この焼け面は、炉跡の可能性もあると考えられる。また本遺構に伴うか否か不明だが、北壁から北方25cmの位置にピットが1基確認された。P1は円形を呈し、直径18cm、深さ16cmを測る。小規模な上、対応する位置にピットを確認できなかったため、柱穴かどうかは疑問が残るが、その可能性もある。

ま と め

本遺構の性格は不明であるが、焼け面が認められることから住居跡の可能性もある。掘り込みの浅い住居跡の、コーナー部分のみが遺存したのではないかと考えている。遺構の年代については遺物が出土していないため明らかではないが、検出面及び堆積土の状況からみて縄文時代早期中葉頃であろう。 (今野)

5号ピット P5

遺 構 (図96)

本遺構はI区西部O48'グリッドに位置する。西方0.5mに隣接する4号性格不明遺構のプランを確認する際、LⅢa上面で同時に検出されている。遺構内堆積土は2層に分かれたがいずれもLⅡcを基調とし、自然堆積土とみられる。平面プランは楕円形を呈し、長軸60cm、短軸48cmの平面規模を有する。周壁の立ち上がりはほぼ垂直で、検出面から底面最深部までの深さは18cmを測る。底面は平坦だが、斜面に沿って緩やかに傾斜している。

ま と め

遺物は出土していないが、検出面からみて本遺構の年代は縄文時代早期である可能性が高い。その性格については明らかにできなかった。 (渡辺)

6号ピット P6

遺 構 (図96)

本遺構は、I区西部N1'グリッドのLⅡbで検出されている。近接する遺構はなく、他の遺構と

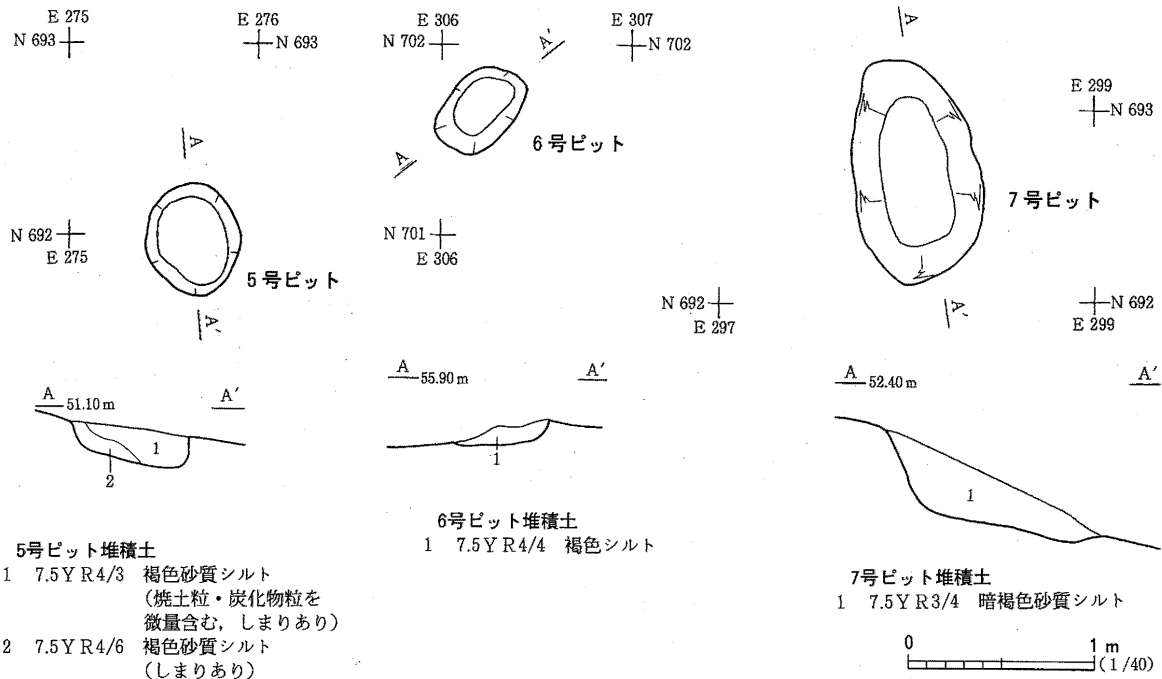


図96 I区5～7号ピット

の重複関係もない。遺構内堆積土は単層で、自然堆積の状況を呈する。遺構の平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸50cm、短軸34cm、検出面底面最深部までの深さは11cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾しながら立ち上がっている。

遺物

縄文土器の細片が数点出土しているが、図示できるものがなく割愛した。

まとめ

本遺構からは縄文土器の細片数片が出土したが、流れ込みとみられ、所属時期および性格については不明である。

(渡辺)

7号ピット P7

遺構 (図96)

本遺構は、I区西部O50'グリッドの、L II bで検出されている。他の遺構との重複はないが、西方70cmに21号住居跡が隣接する。遺構内堆積土は単層であるが、状況から自然堆積と考えられる。遺構の平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸115cm、短軸68cm、検出面から底面最深部までの深さは66cmを測る。底面は平坦だが、斜面に沿って緩やかに傾斜し、壁は外傾しながら立ち上がっている。

まとめ

本遺構から遺物の出土はなく、周囲の遺構との関連も推定できないことから、所属時期および性格については不明である。

(渡辺)

第5節 遺構外出土遺物

I区の遺構外からは、縄文時代早期の土器9,578片、中・後期の土器4,912片、晩期～弥生土器42片、土師器3,753片、須恵器48片、金属器類6点、石器類124点などが出土している。

遺構外出土遺物の主体を占める縄文時代早期と中・後期の土器の分布状態を、図97に示した。遺物は該期の遺構が検出されたI区西部から出土している。I区東部では、遺構内から縄文土器が数片出土しているが、遺構外からは皆無である。縄文時代早期の土器はそのほとんどがLⅡcから出土しているが、第2章第1節でふれたようにLⅡcは斜面下位ほど層厚が薄くなり、調査区の南端には堆積していない。図97にみられる早期の土器出土範囲とLⅡcの広がりとはよく一致している。また調査区の北西隅から遺物が集中的に出土しているが、その事由については二つの可能性が考えられる。ひとつは地形に起因する可能性である。O48'グリッドからP48'グリッドにかけてはごく小規模な沢になっている。このため、斜面上位から流出してきた土砂と遺物が沢部に堆積した可能性がある。もう一つは、遺物がこのグリッド付近で使用され、その近在に遺棄または廃棄された可能性である。2・4号性格不明遺構や112・121号土坑など、縄文時代早期に営まれた可能性の高い遺構はO47'・48'グリッドに集中している。

縄文時代中・後期の土器はLⅡaとLⅡbの上部から主に出土している。P・Q50'グリッドから1,000点前後の土器片がまとまって出土している。この地点は該期の遺構である21・22・25・28号住居跡がある位置とは一致しない。ただ、該期の遺構の斜面下方にあたるので、該期の遺構で使用された土器が、斜面下方に流出または廃棄されたものであろう。以下では図示した遺物について詳述していくが、遺物の年代観や特徴をもとに次のような分類を設けた。

I群 縄文時代早期の土器である。以下の2類に分類した。

- 1類 早期中葉の土器。
- 2類 早期後葉の土器。

Ⅱ群 縄文時代中期～晩期の土器である。さらに7類に分類した。

- 1類 中期前葉の土器。
- 2類 中期末葉の土器。
- 3類 後期前葉の土器。
- 4類 後期中葉の土器。
- 5類 中・後期に属する縄文のみ施文されたもの。
- 6類 中・後期に属する底部資料。
- 7類 晩期の土器。

Ⅲ群 弥生土器である。

Ⅳ群 土師器である。

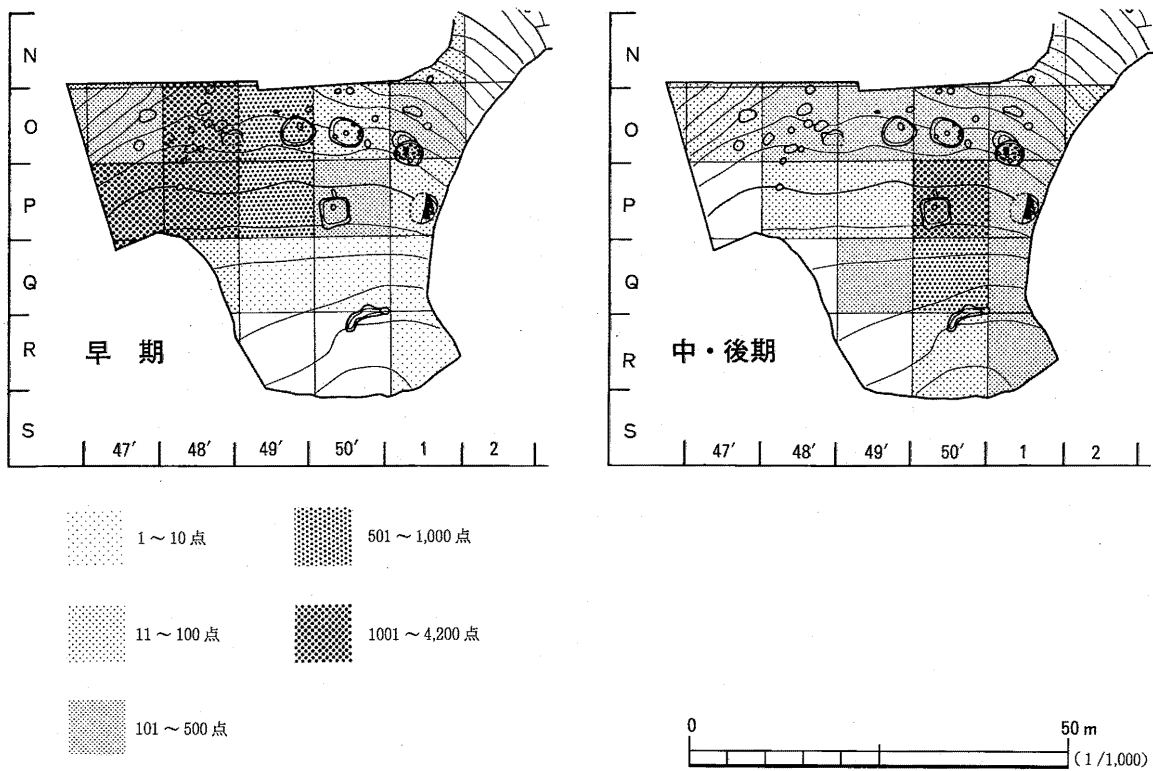


図97 I区西部遺構外出土縄文土器分布図

土器

I群土器

1類 (図98-1~図121-30・図122・123, 写真110~119)

本類は細沈線文・太沈線文・貝殻腹縁文・竹管文などで器面を装飾する一群で、I群土器の主体を占めるものである。本類の器形は全て尖底の深鉢形土器で構成され、平底のものはない。全体の個体数をおおむね推定できる資料として、尖底部片が61個体分出土している。また口縁部片は採拓が可能な限り図示した。口縁部が緩く括れるものが多いが、直線的に外傾するものや、口縁部が外反ぎみのものもある。口唇部の形態は、円頭状、角頭状、外削ぎ状が多く、内削ぎ状のものはみられない。器厚は6~10mmのものが大半で、胎土には砂粒が混入されている。調整をみると、口縁部付近が横方向の、胴部・底部が縦や斜め方向のミガキやナデが施されているものが大多数である。器面が荒れて脆くなっているものが多いが、これは埋没過程における摩滅や、湿気などに起因すると思われる。

図示できた土器の点数は出土総点数の1割ほどである。器形や全体の文様構成が把握できるものが少ないため、施文手法や文様を中心とした分類を行い、その把握に努めた。

A種 (図98-1~4, 図102-1~図108-15) 主に細沈線で文様が描き出されるものをA種とした。図98-1~4は図上復元したものである。各破片は必ずしも接合しないが、文様や色調、胎

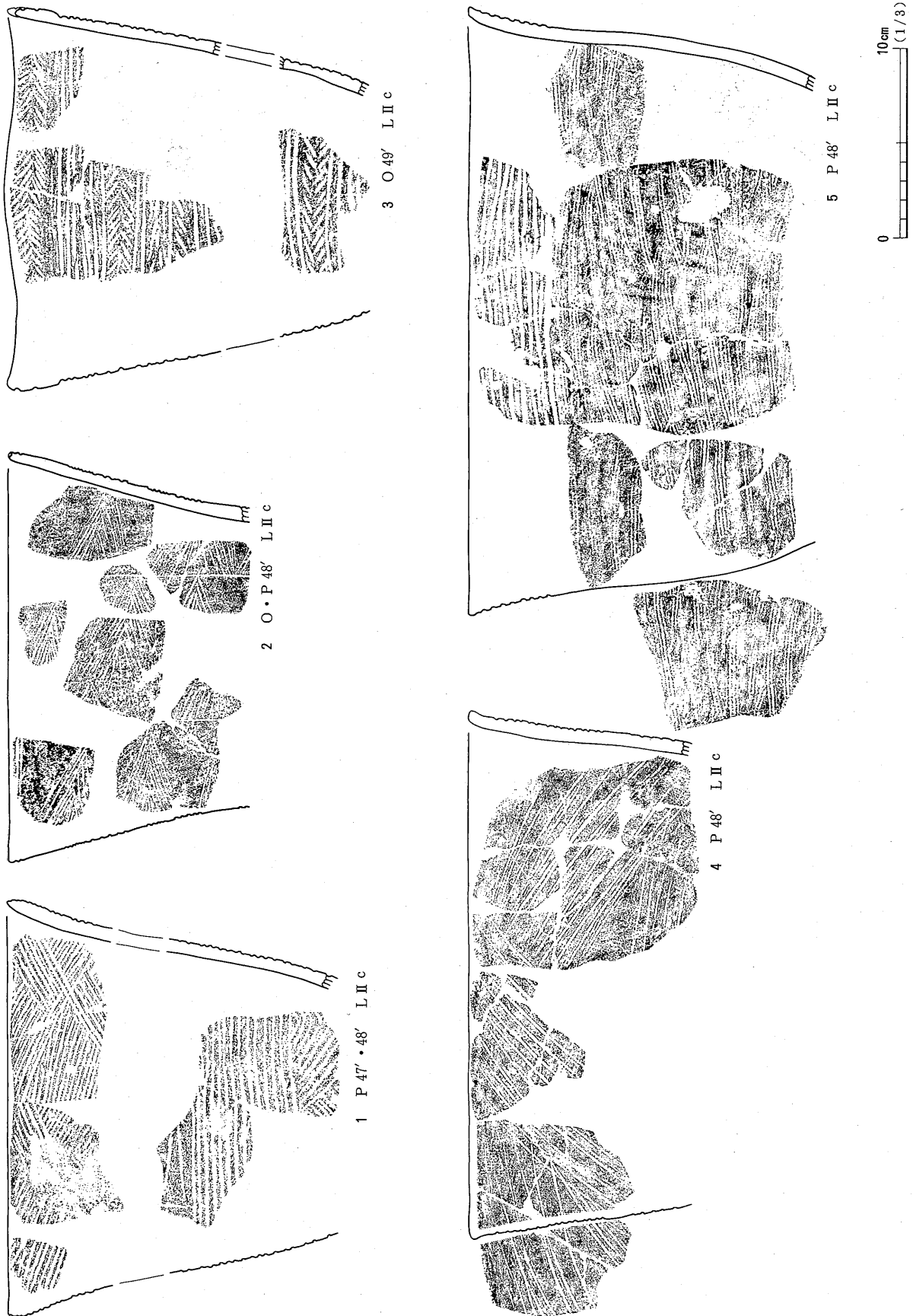


图 98 I 区遺構外出土繩文土器(1)

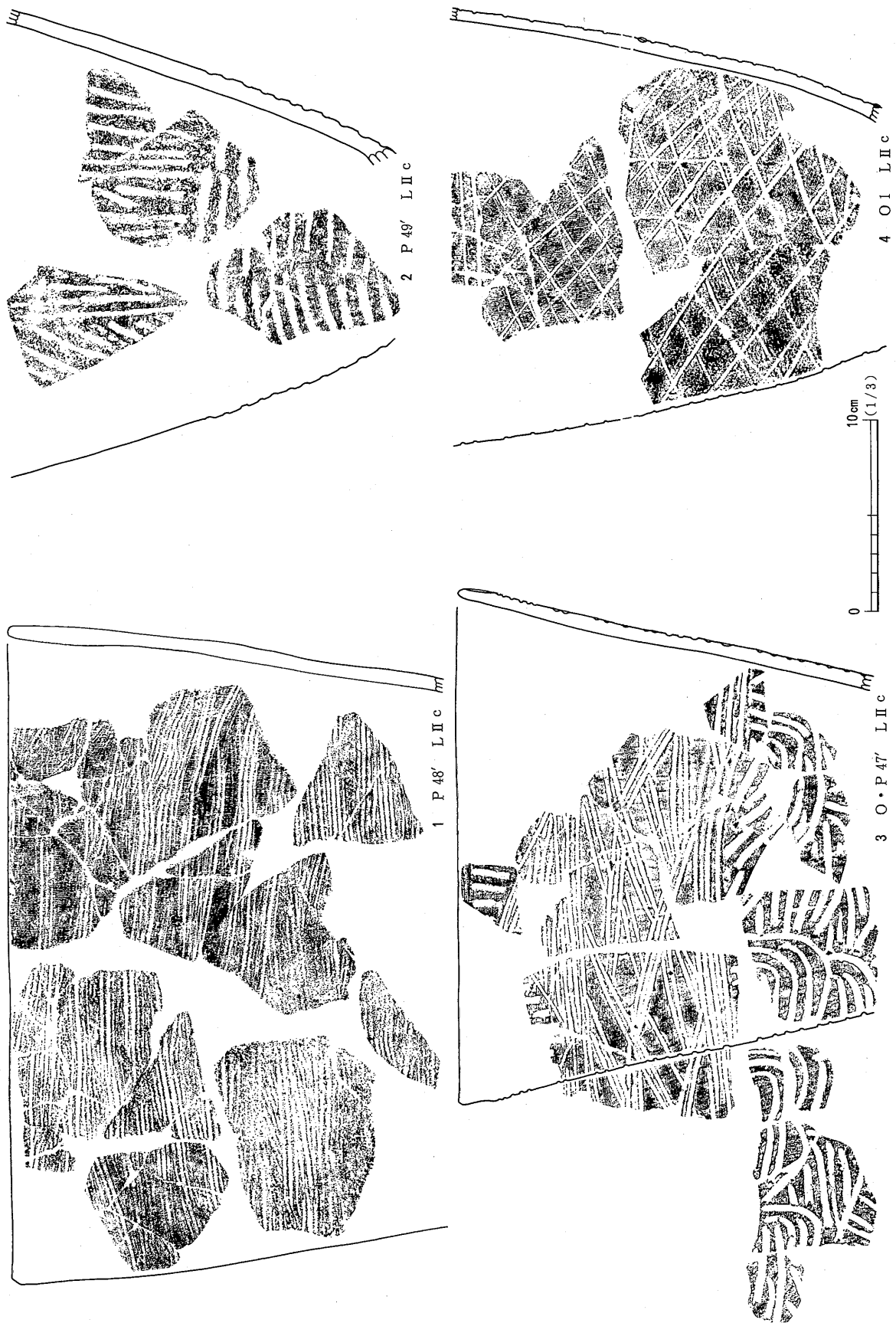


図 99 I区遺構外出土縄文土器(2)

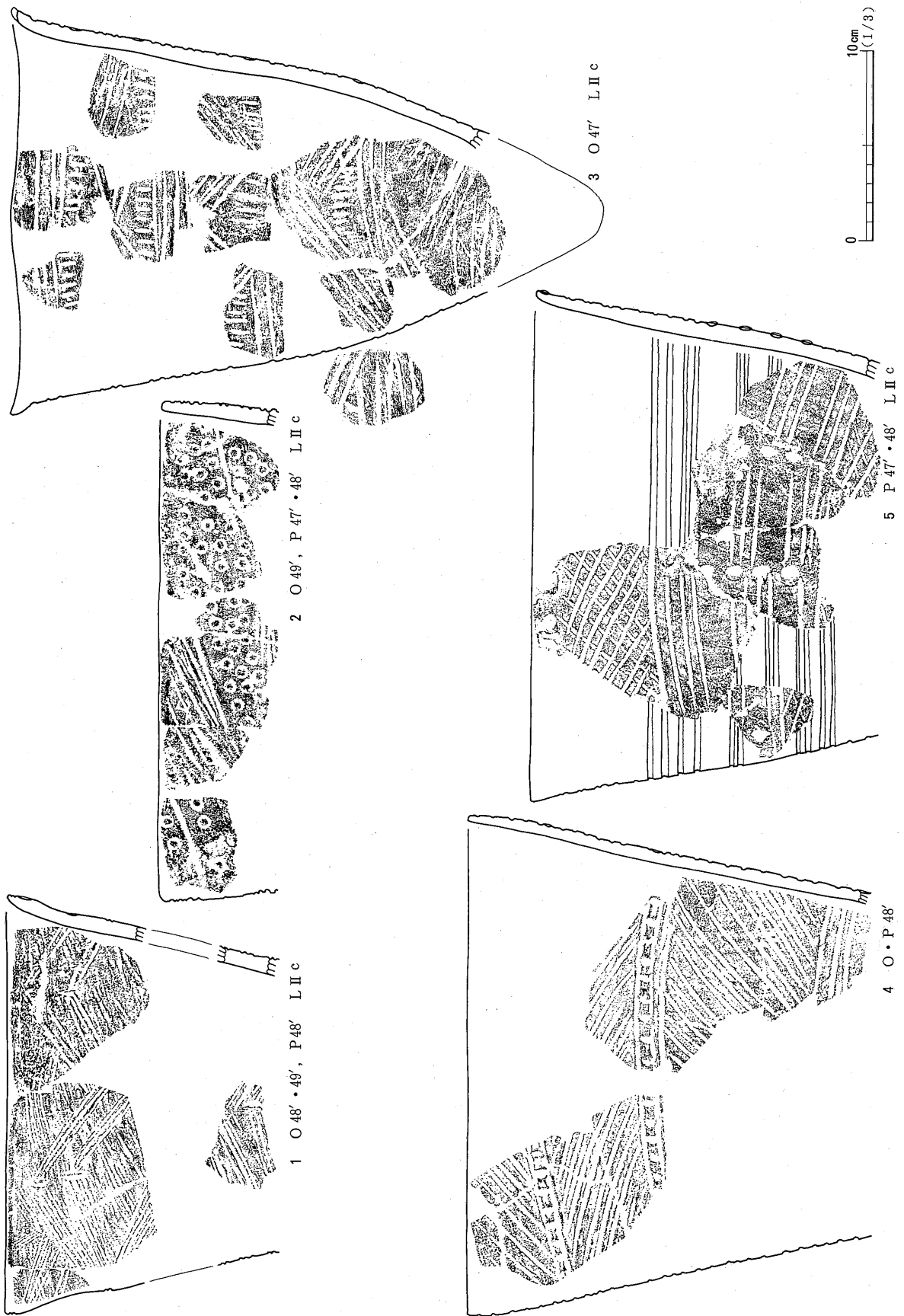


图 100 I 区遺構外出土繩文土器(3)

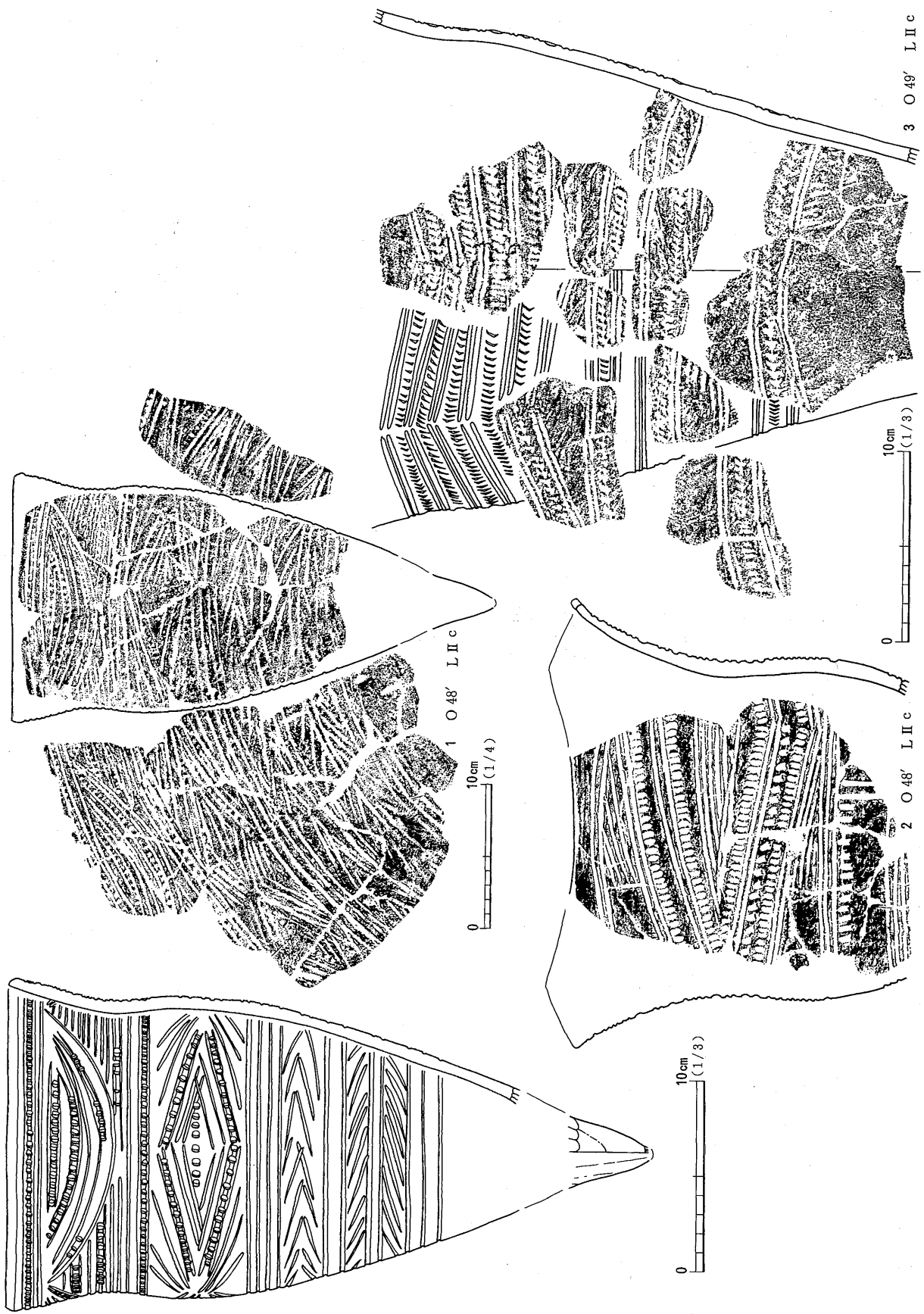


図 101 I区遺構外出土縄文土器(4)

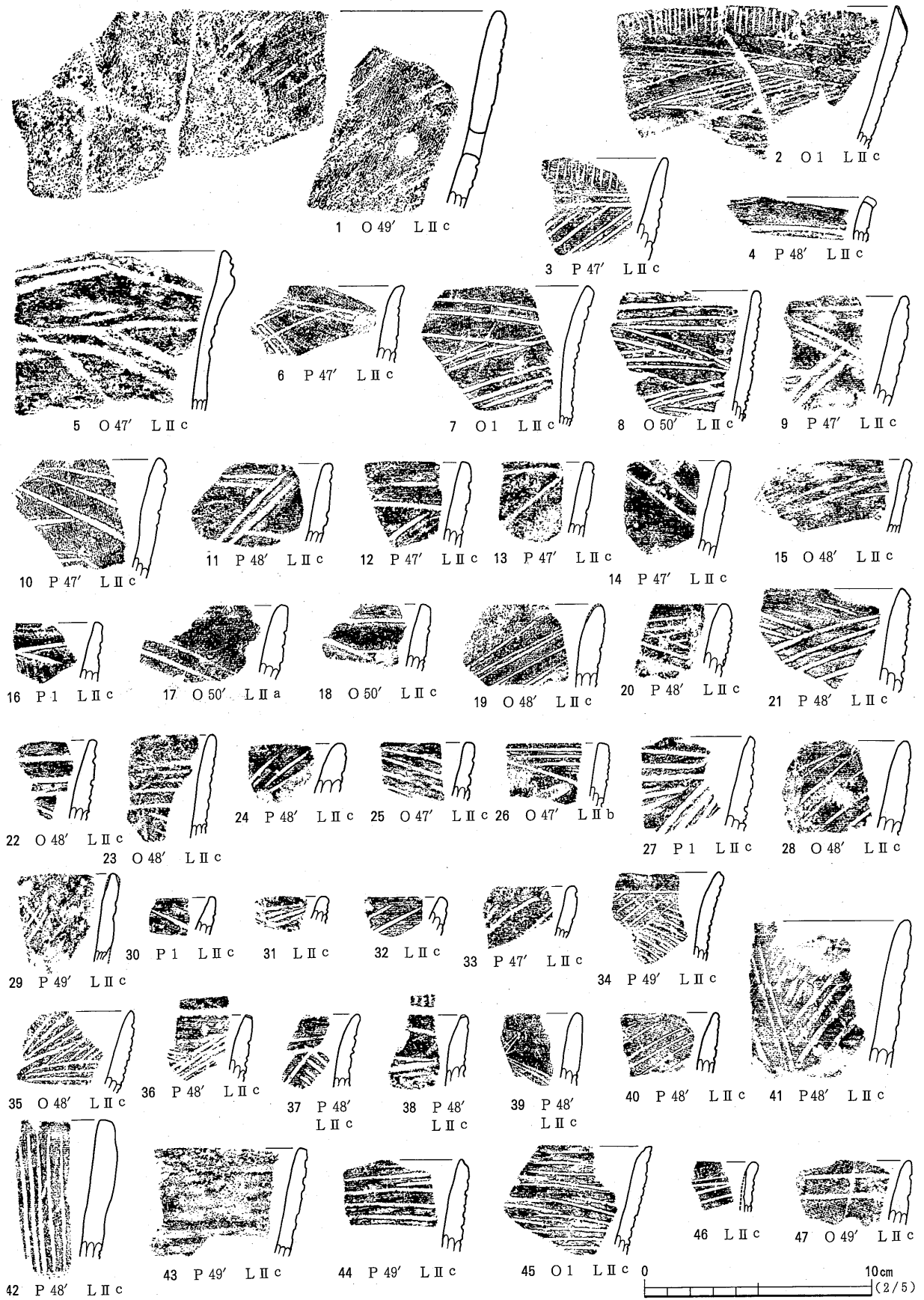


图 102 I区遺構外出土繩文土器(5)

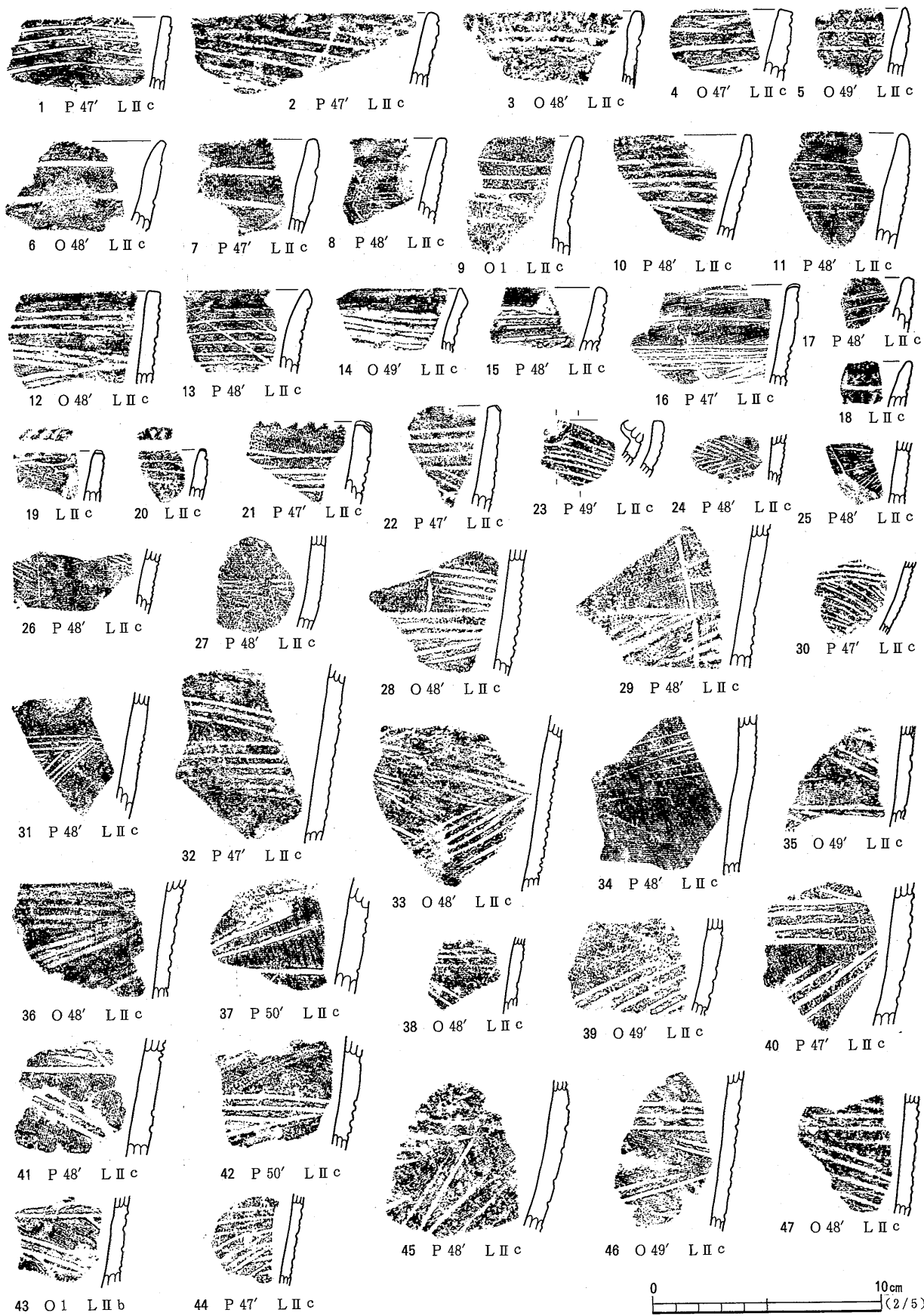


図 103 I区遺構外出土縄文土器(6)

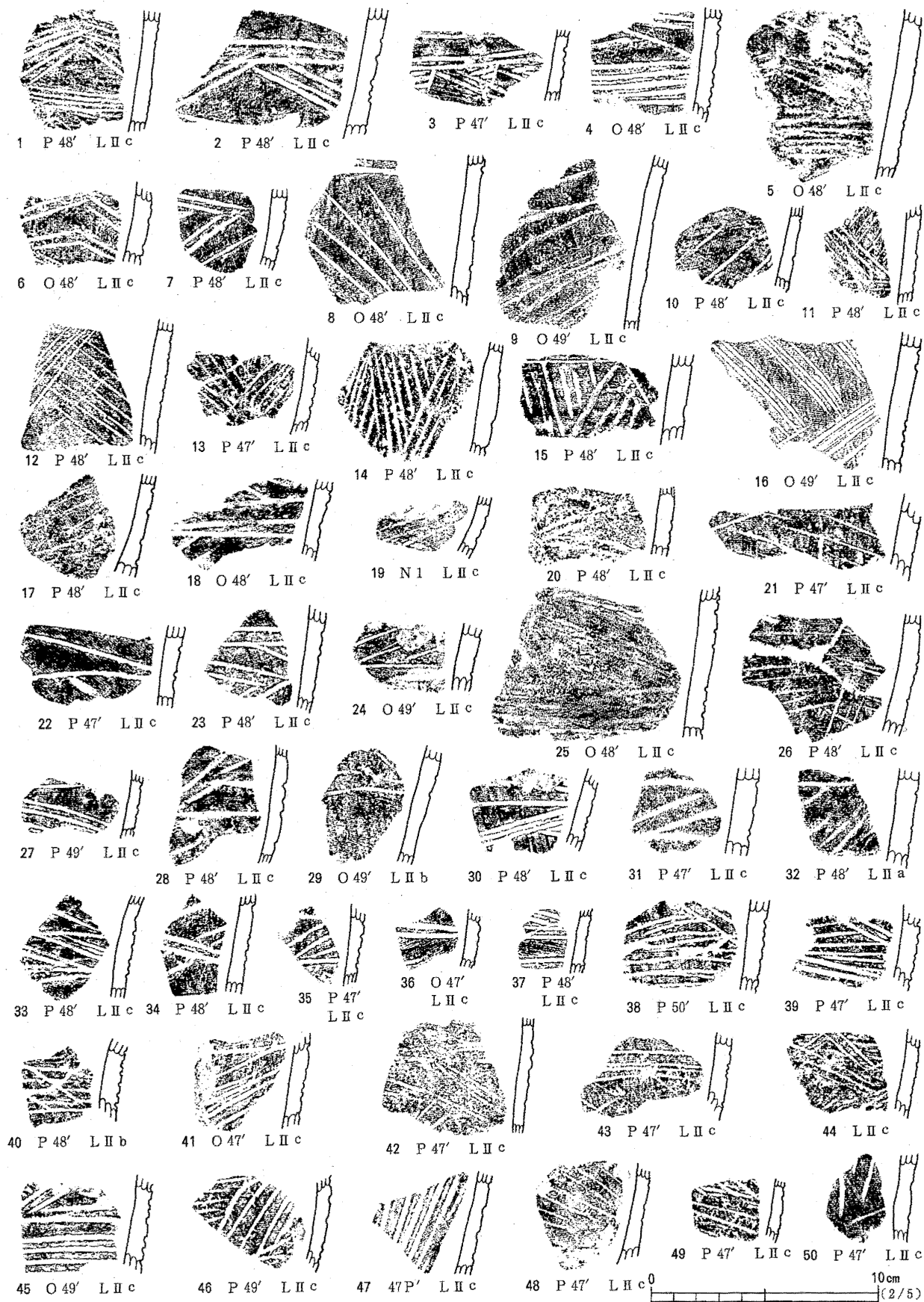


图 104 I区遺構外出土繩文土器(7)

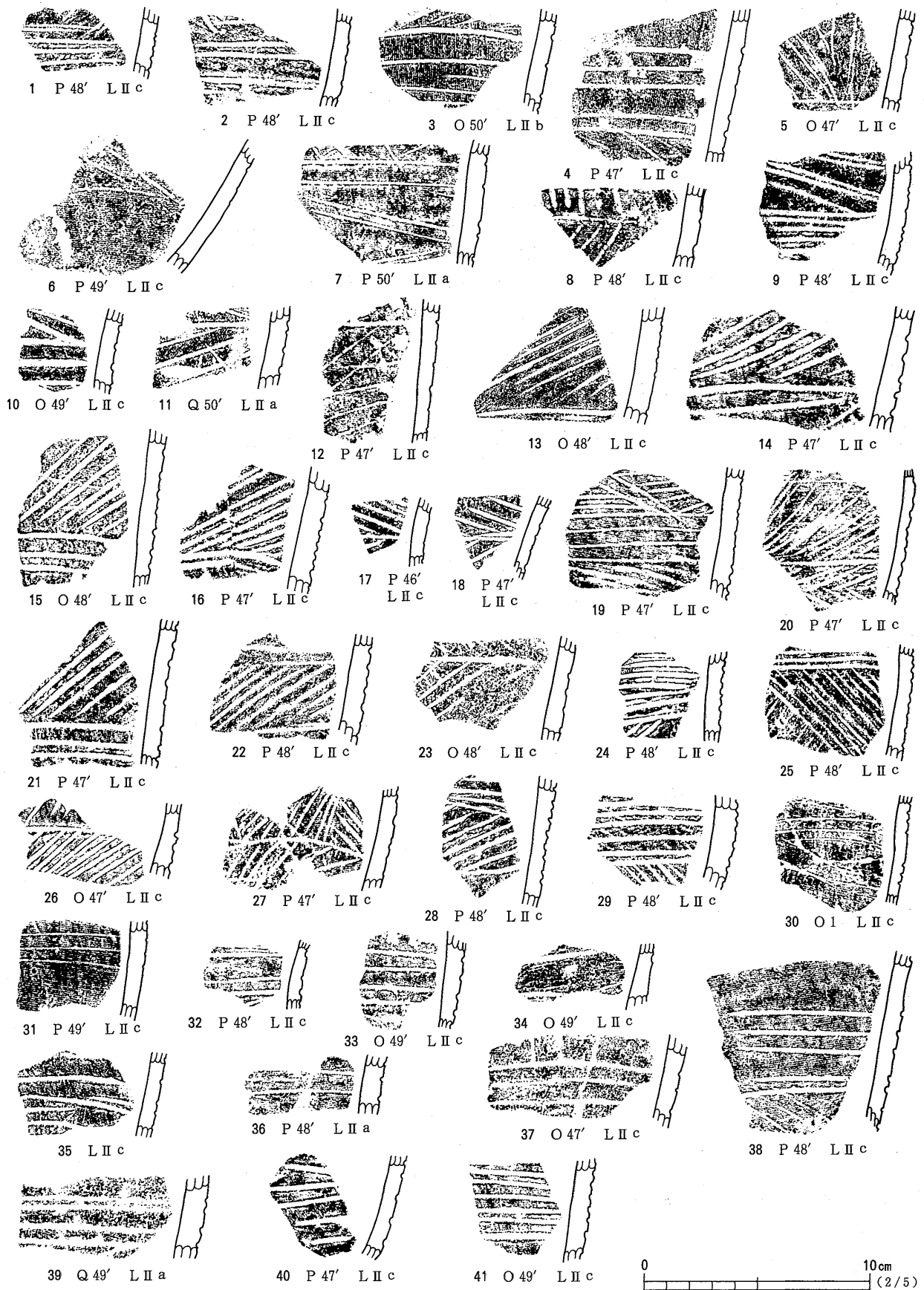


図 105 I区遺構外出土縄文土器(8)

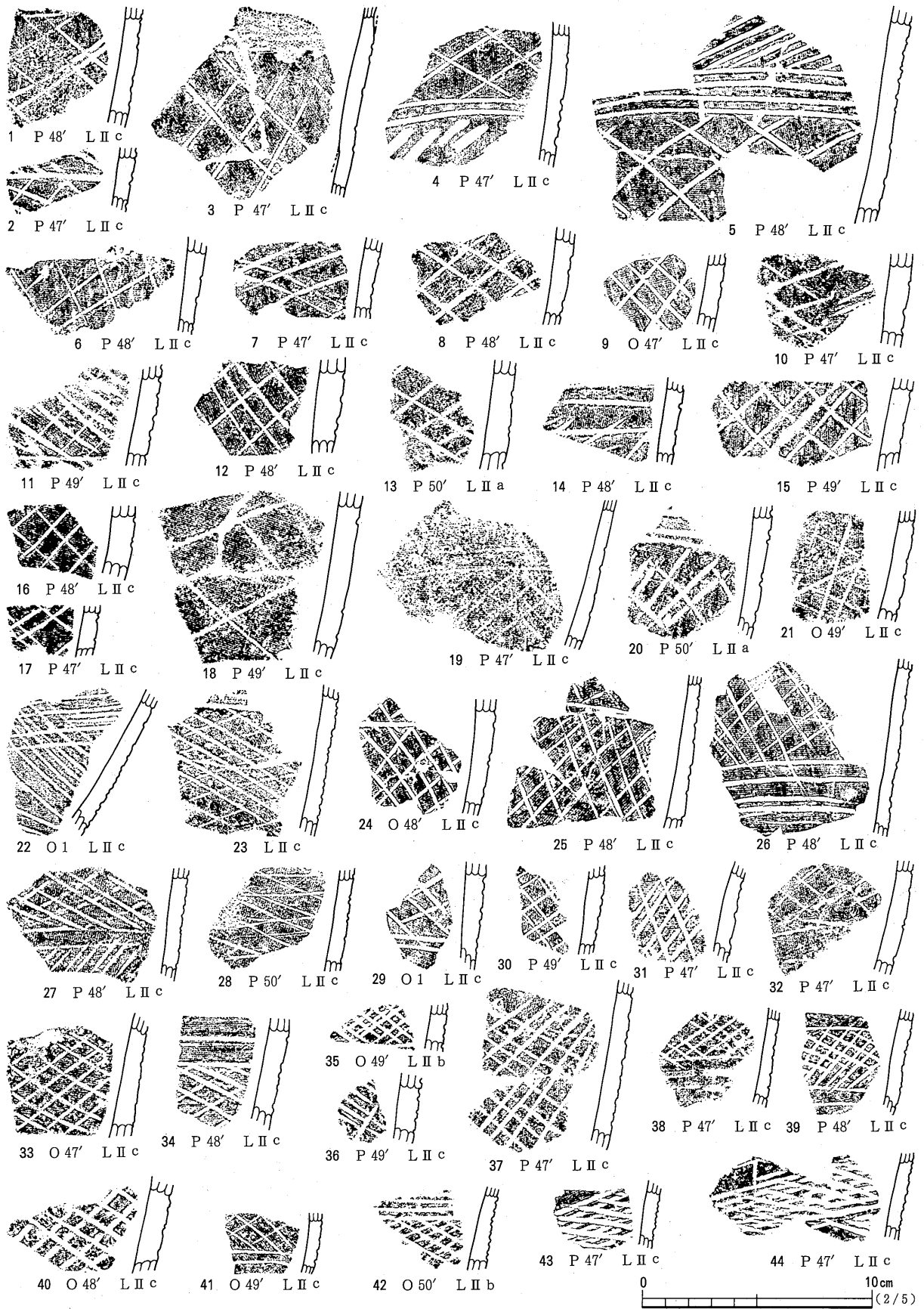


图 107 I区遺構外出土繩文土器 (10)

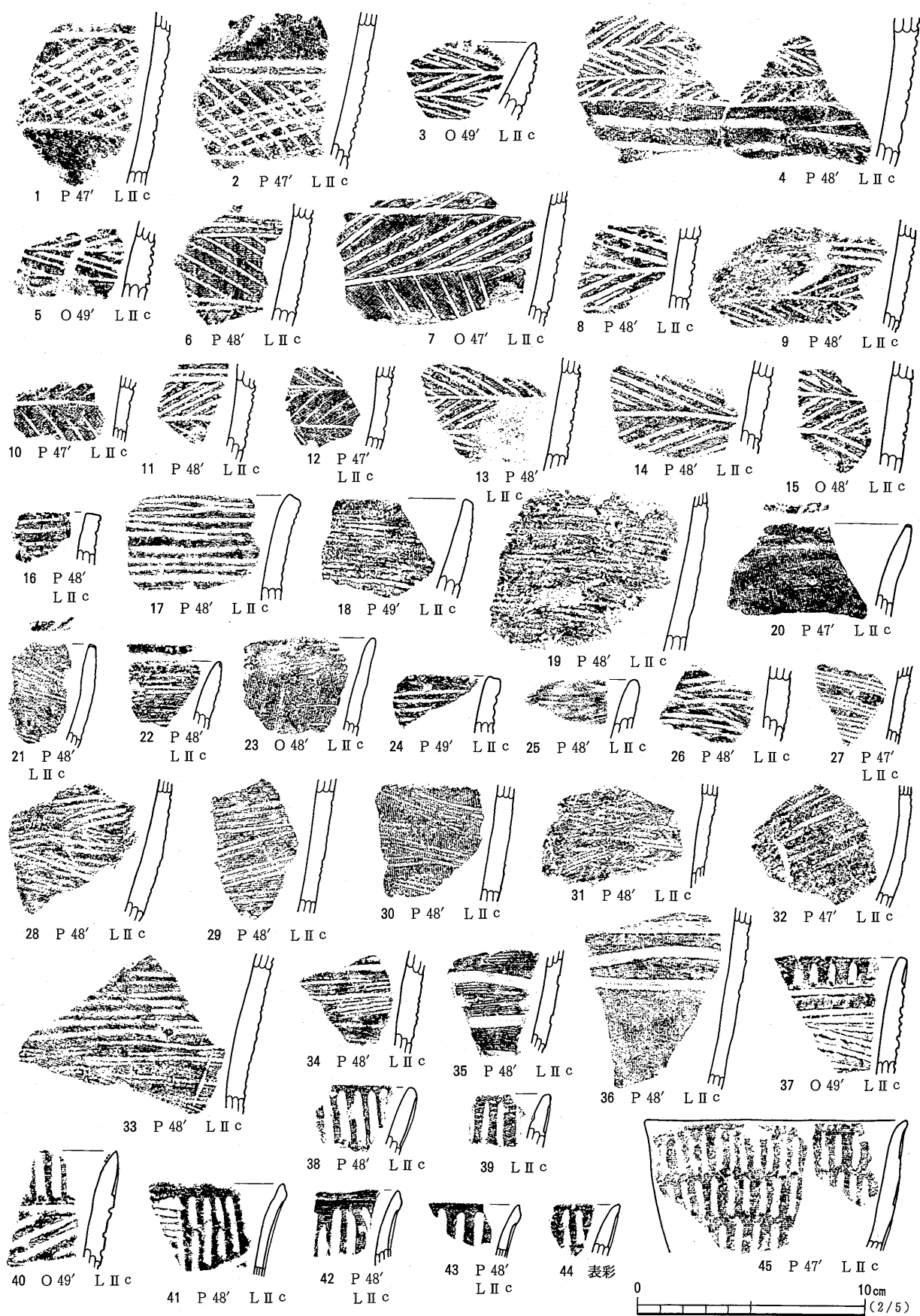


図 108 I区遺構外出土縄文土器 (11)

縦位の鋸歯状文が、横位多段に区分されたものとみることもできよう。

B種 (図98-5, 図99-1, 図108-16~36) 浅い沈線または条痕文が施されているもので、条痕文は全て横位か斜位に施文されている。図98-5は、口縁部文様帯の下端がわずかに括れ、口唇部は角頭状を呈する。口縁部に数条の太い沈線が横走し、胴部には3条1単位で条痕文が施されている。口唇部に横位の、内面に縦位から斜位のナデが観察される。図99-1は胴部が直線的に外傾する器形を呈する。外面全体に条痕文が施されているが、図中左下の胴部片には条痕文以前に施文された原体Rの撚糸文が、狭い幅で残存している。条痕が不規則に波打ち、条痕の溝底に数条の線条痕がみえるため、比較的軟質な施文具を使用したと推察される。内面の調整は口縁部付近が横方向の、胴部が斜め方向のナデである。

図108の16と17, 18と19, 33と34, 35と36はそれぞれ同一個体である可能性が高い。33に縦位沈線がみえるが区画線にはなっていない。35・36は条痕地に先端が平らな施文具で幅広い横沈線が施文されている。

C種 (図99-2・3, 図108-37~図112-13, 図117-17, 図118-14・31) 太い沈線で文様が施文されるものである。半截竹管状工具の凸面を器面に対して鋭角に押し当て、器面を削るように施文しているものが大多数を占める。沈線の底に砂粒の移動が顕著に確認され、沈線の末端に削り滓を残している場合も多い。以下ではこのような施文手法による沈線をケズリ沈線と呼称するが、この沈線は胴部下半に施文される場合が多い。図110-35・38, 図112-2・10だけが通常のナデによる沈線である。

図99-2は胴部片で、胴部上半に縦位区画線と斜線文が、下半に横位平行沈線文が表出されている。図99-3は胴部から口縁部にかけて直線的に外傾する。口縁部には縦位ケズリ沈線が施文され、三角形の区画内に横位細沈線が充填されている。胴部上半の文様は2本一組の平行沈線による斜線文である。胴部下位には鱗状の曲線文がケズリ沈線によって描き出されている。内面の調整をみると、口縁部に横方向の、胴部に縦方向のミガキが施されている。

図108-37~図112-13, 図117-17は破片資料である。図109の16と18, 23と24はそれぞれ同一個体である可能性が高い。口縁部片をみると、図99-3のように縦位に短かくケズリ沈線が施文されるものが目立つ。図108-41~43は口唇部が外削ぎ状を呈し、横方向のミガキが入る。図109-4は条痕地にケズリ沈線が表出されている。図108-45は口径11.6cmと推定され、縦位の短沈線が数段施文されている。文様には鋸歯状文(図109-5・10・11・18)や斜行沈線が多く、横位沈線と縦位沈線が組み合わせるものもあり、細沈線で描かれる文様と類似している。ただし本種の特徴的な文様として、横位や縦位の短沈線文(図111-17~42)や図99-3にみられるような曲線文(図112-2~13)がある。図111-31・32などは極端に短く施文され、刺突文と考えたほうが良いかもしれない。図117-17, 図118-14・31は縦位のケズリ沈線が短く連続的に加えられているもので、M種の「D」字状連続刺突文と同様の文様効果をみせている。

D種 (図112-14~図115-11・15~21) 貝殻文が施文されているものを一括する。刺突文が併

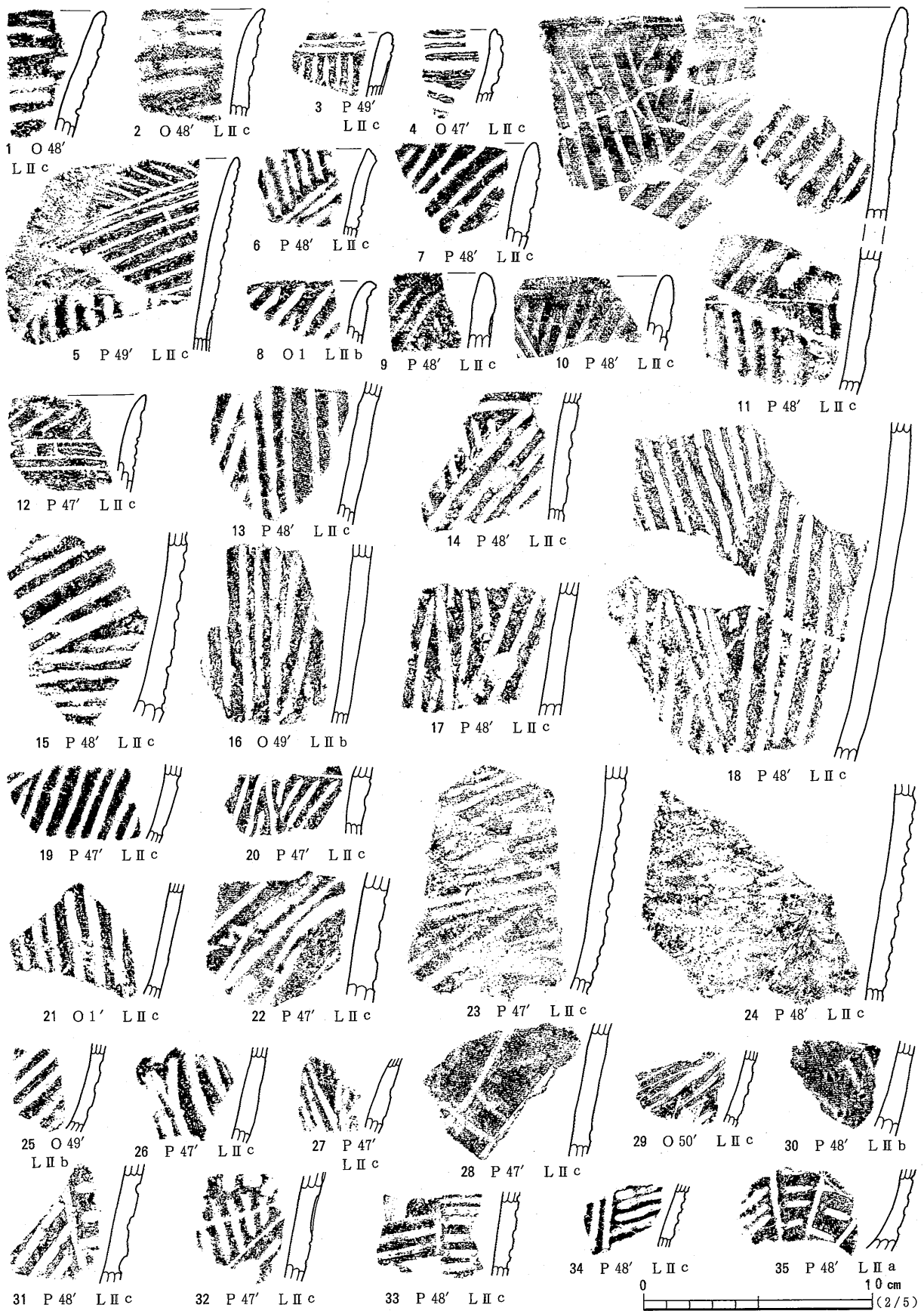


図 109 I区遺構外出土縄文土器 (12)

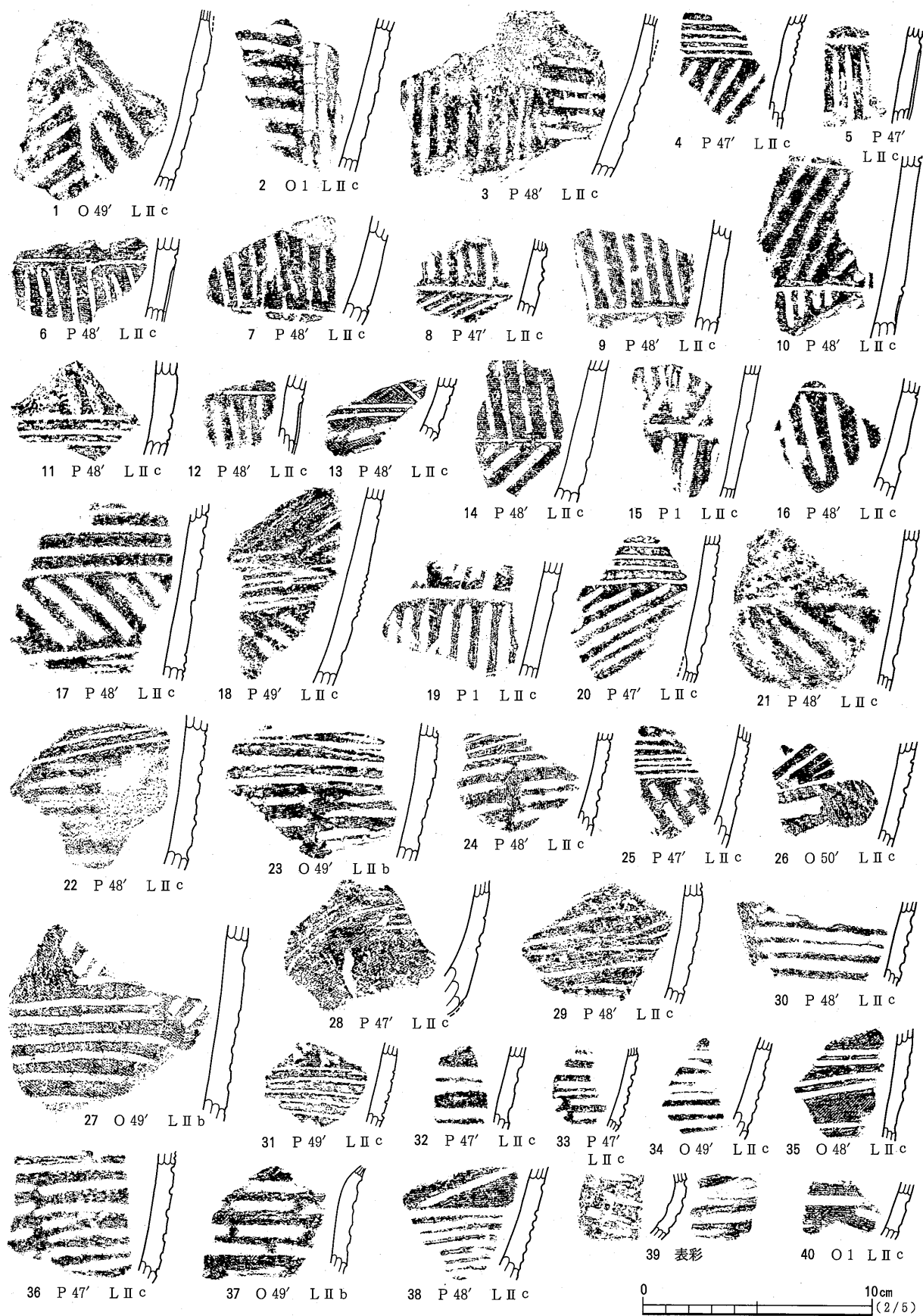


图 110 I区遺構外出土繩文土器 (13)



図 111 I区遺構外出土縄文土器 (14)

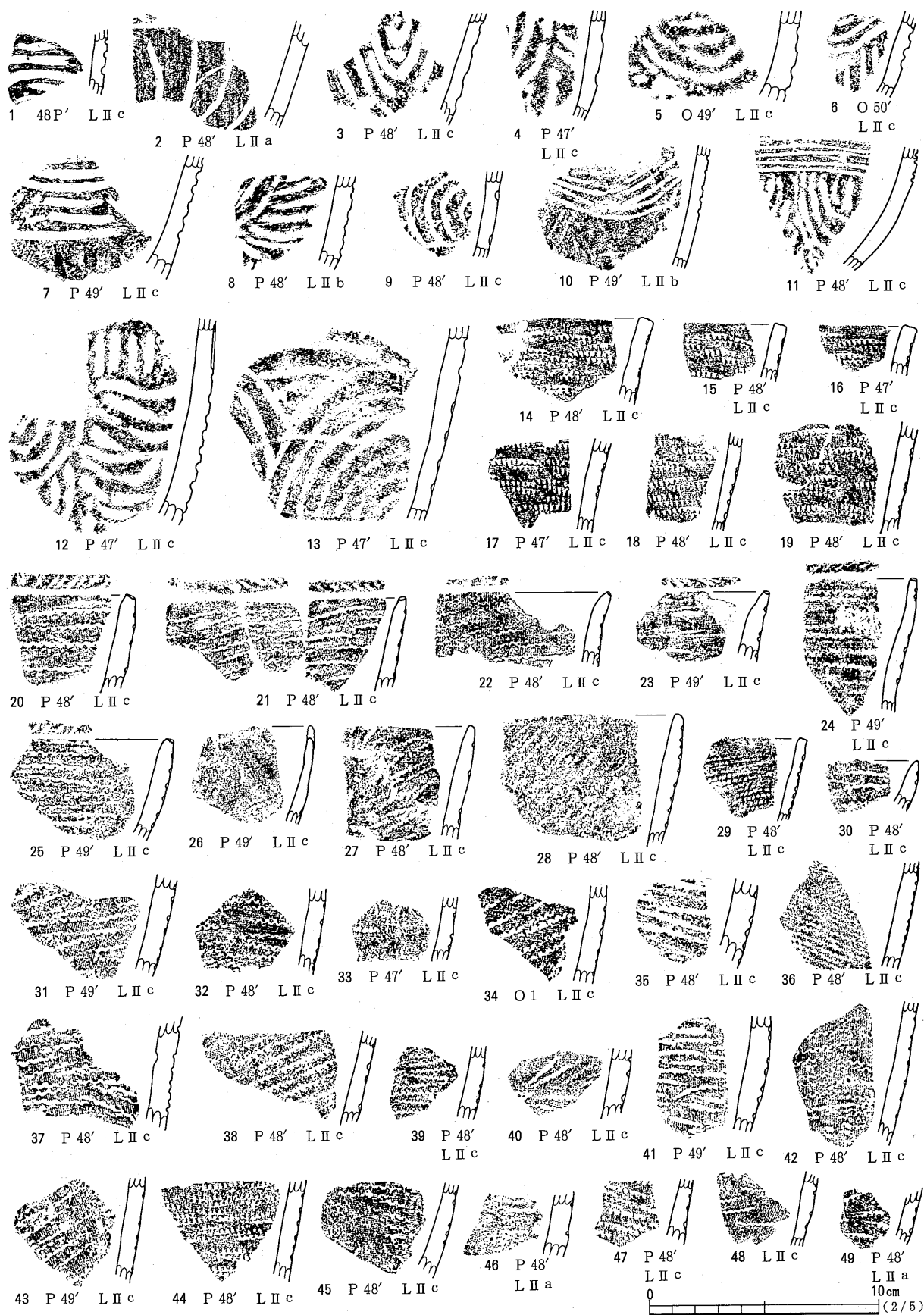


圖 112 I区遺構外出土繩文土器 (15)

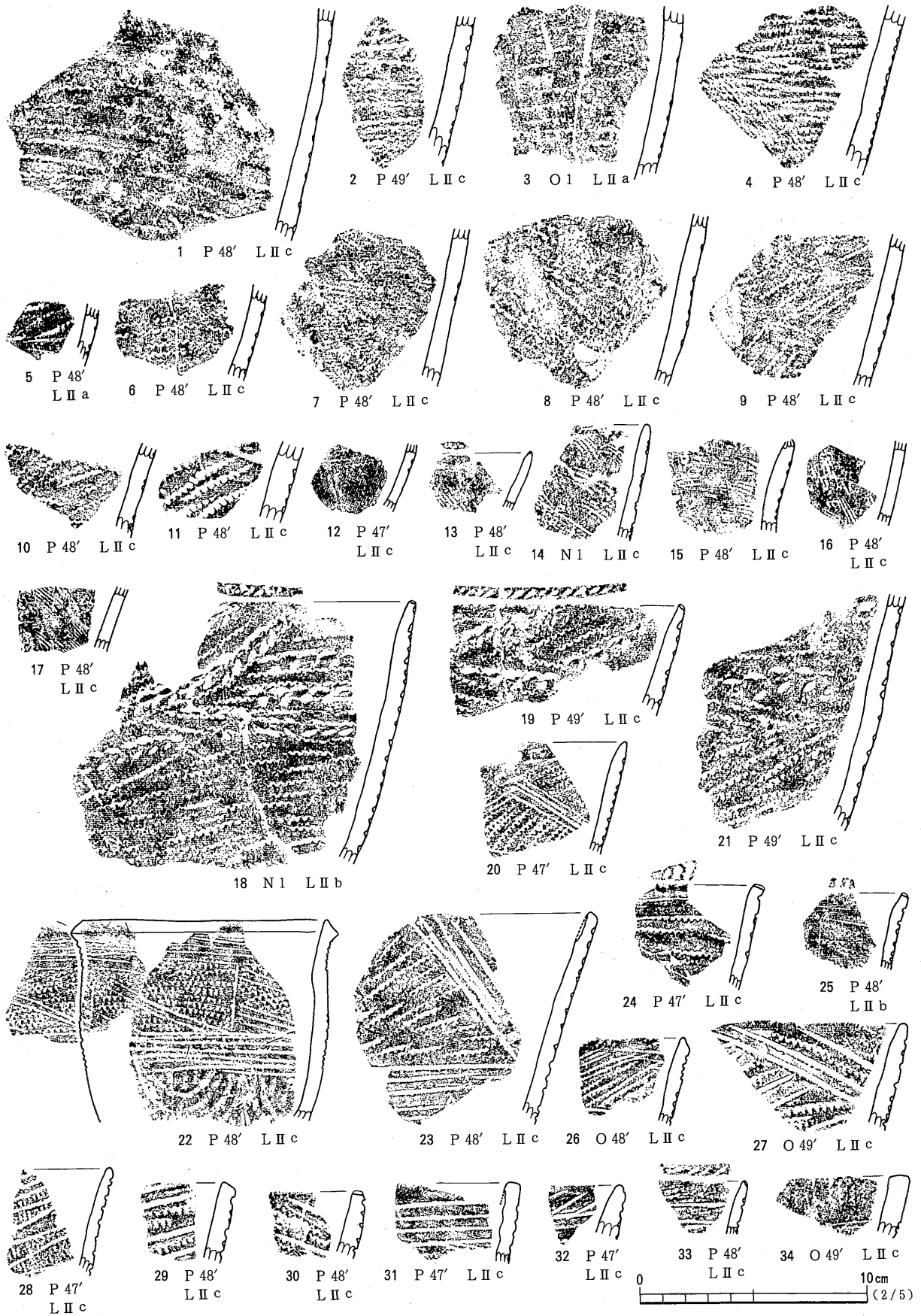


图 113 I区遺構外出土縄文土器 (16)

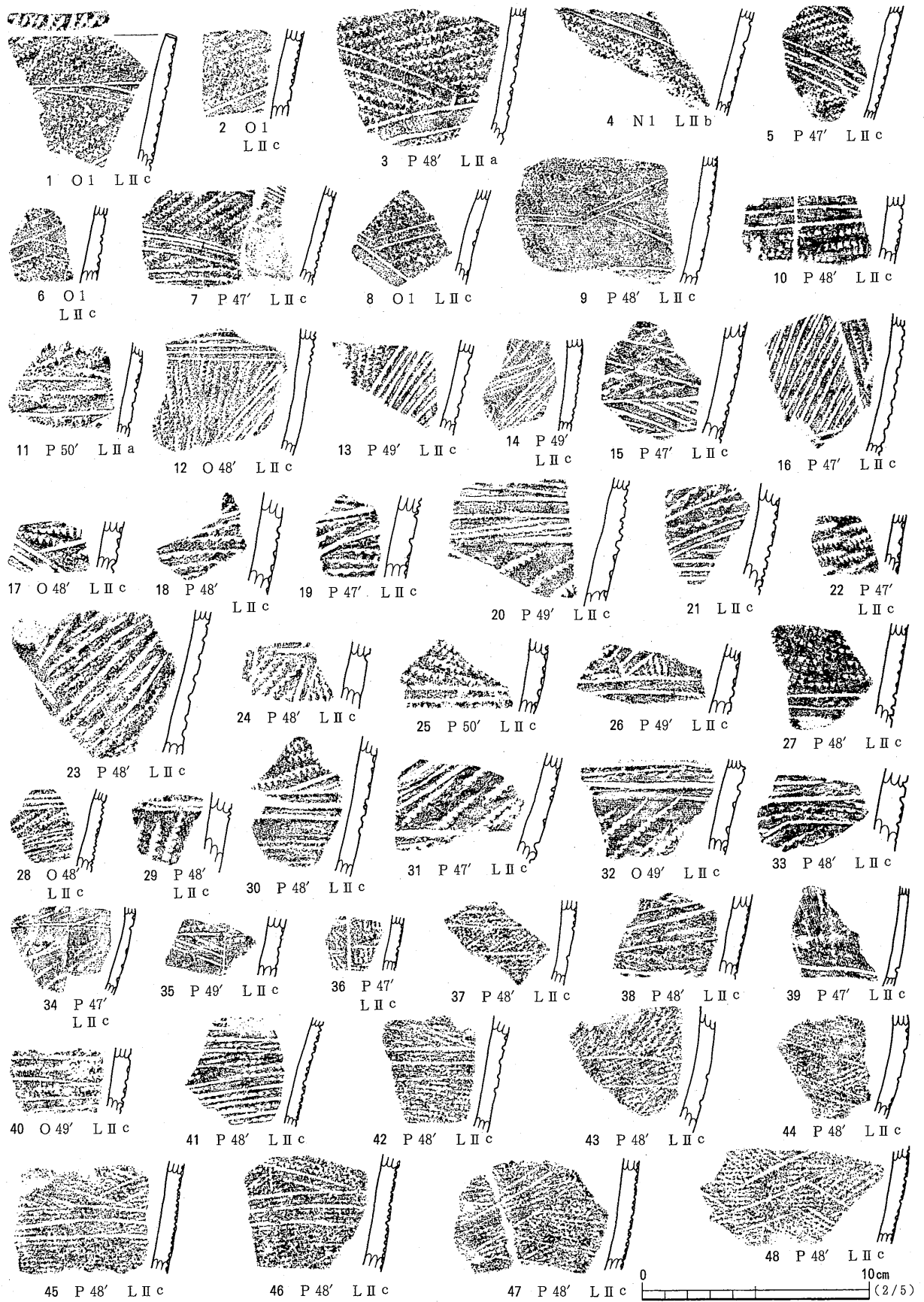


图 114 I区遺構外出土繩文土器 (17)

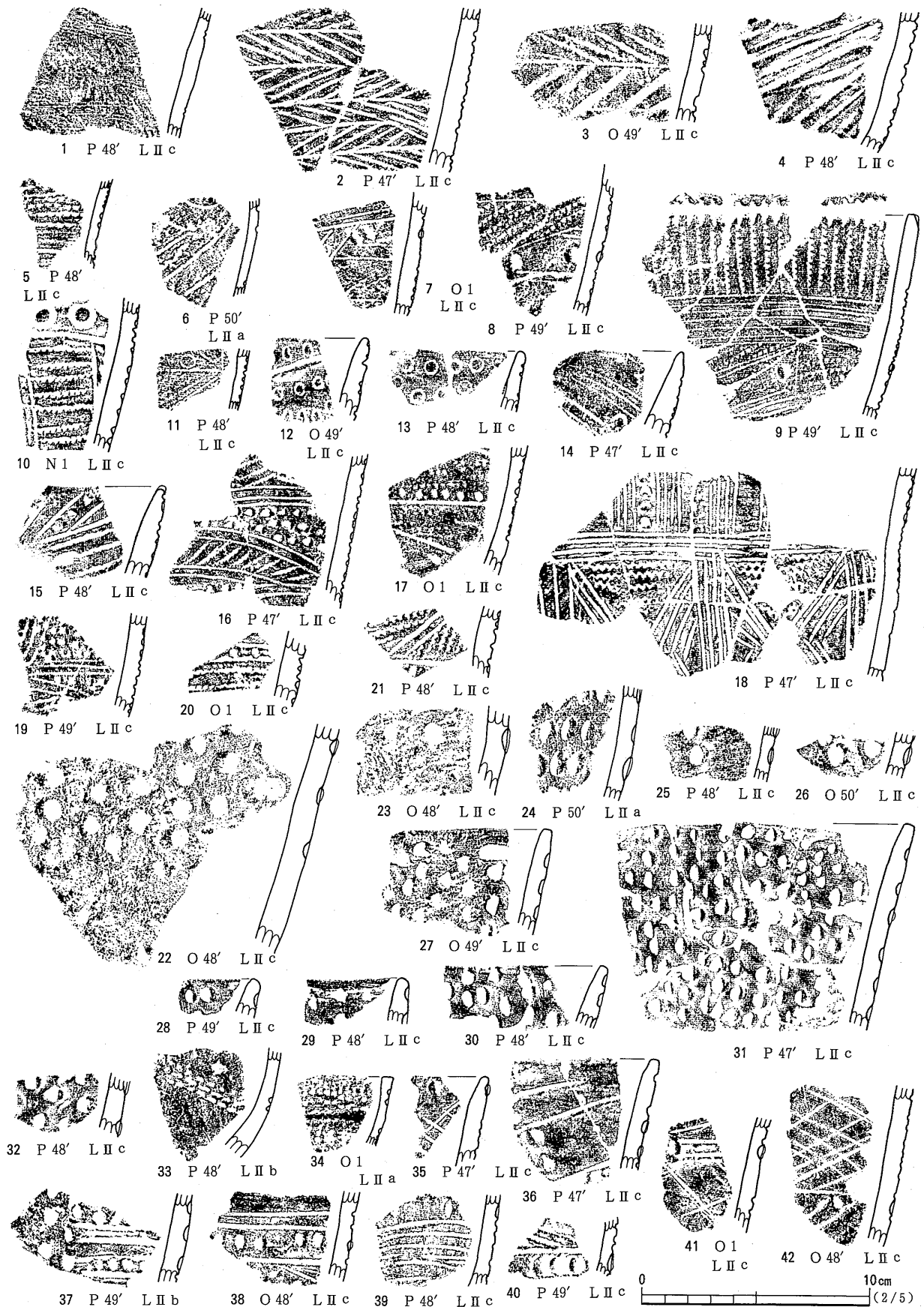


図 115 I区遺構外出土縄文土器 (18)

用されているものは本種に含めた。図112-14～図113-12は貝殻腹縁文のみが施文されているものである。文様は横位か斜位に施されているが、図113-4・9のように両者が併用されているものもある。図113-12～17には小型の巻き貝の回転圧痕文がみられる。図113の18・19・21は同一個体の可能性が高い。貝殻腹縁文と「ハ」字状の連続爪形刺突文とが平行して沈線的に並び、鋸歯状の区画を形成している。

図113-20・22～図115-5は、沈線文と貝殻腹縁文が併用されるものである。貝殻腹縁文は図113-22のように、沈線区画内の充填文として用いられることが多い。沈線区画は、鋸歯状あるいは三角形状を基調とし、A種との共通性が高い。図113-22は残存高8.6cmを測り、口径10.6cmに復元図示した。口頸部が括れる器形を呈し、口唇部は顕著な外削ぎ状である。胴部上半の施文順位は、横沈線→縦沈線→斜行沈線→貝殻充填の順である。胴部下半にはC種にみられるケズリ沈線による曲線文が描かれている。図114-1～11にはA種で指摘した幅の狭い無文帯がある。同図44～48には類似した平行沈線文がみられるが、沈線間にも貝殻腹縁文が施文されている点異なる。図115-6は器厚が5mmと薄く、曲線文のなかに貝殻腹縁文に似せた鋸歯状の沈線が施文されている。図115-7～9は、沈線区画の中に貝殻腹縁文と爪形文が施文されている。9は口唇部外角に刻みを持ち、口縁部に貝殻文が縦位に施文されている。図115-10・11は貝殻腹縁文と円形竹管状工具による刺突文がみられるものである。図115-15～21は貝殻腹縁文と「D」字状連続刺突文が表れるものである。16の貝殻文は横位の鋸歯状に施文されている。「D」字状連続刺突文が縦列する18はM種の図118-23・24とよく似ている。

E種 (図115-22～34) 刺突文のみが施文されているものである。22・23は同一個体である。22～32に爪形文がみられ、33・34には尖頭状の施文具による連続刺突が施されている。34は薄手で横位の低い隆線をもち、やや異質な感がある。

F種 (図99-4, 図100-1・5, 図115-35～図116-9・13～26, 図117-13～15) 爪形文と細沈線文が施されるものである。図116の24と25は同一個体である。爪形文は右方向から加えられ、器肉を盛り上げているものが多い。図99-4は大型の胴部片である。A種にみられた粗い格子文が全面に描かれ、胴部中位の沈線が集まる箇所に爪形文が施文されている。図100-1は口頸部が若干括れる器形を呈する。口唇部には平坦に整形しようとしたナデ痕が残る。外面全体に斜位の条痕が施され、3本一単位の山形の沈線文が重疊的に描かれている。爪形文は山形沈線文の頂部に施文されている。胎土に5mm大の小石を含み、内面の調整は横方向のナデおよびミガキである。図100-5は直線的に外傾する器形を呈し、口唇部は円頭状である。口縁部と胴部下半に格子文が、胴部上半に横沈線が施文されている。口唇部直下に横列の、胴部上半の横沈線に縦列の爪形文が加えられている。

図116-1は推定口径13.2cm, 器高18.8cmを測る半完形の土器である。底部の器厚は胴部に対して5倍ほど厚く、胴部が緩やかに外傾する。口唇部の形状は円頭状である。この土器の文様は、先端の鋭利な施文具による一本描きの沈線によって施されているが、全体に乱雑な印象を受ける。

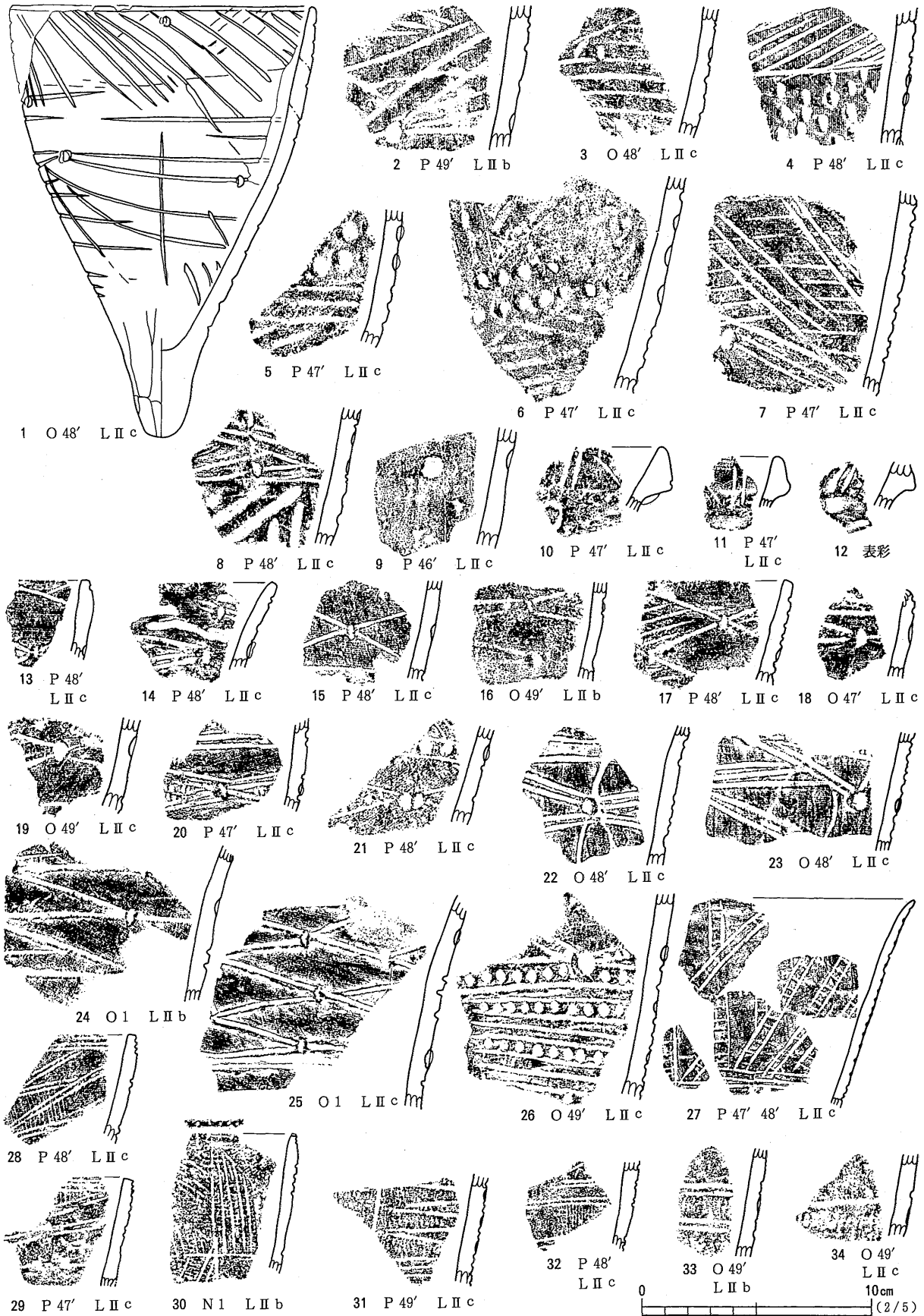


図 116 I区遺構外出土縄文土器 (19)

例えば口縁部に右下がりの沈線が描かれているが、左下がりの沈線を擦り消した痕跡がある。また胴部に縦位の沈線が1本のみ見られるが、図113-22のような文様帯区画線となっていないばかりか、斜行沈線との施文順位も不規則である。他の土器では爪形文は沈線が集まる箇所に施文されている例が多いが、その点も当てはまらない。胴部下端の沈線は比較的太いが、ケズリ沈線ではなく口縁部と同様の施文具によるものである。調整をみると底部外面への縦方向のミガキが顕著で、内面にも同方向のミガキが加えられている。胴部下半の内面に縦方向の擦痕があるが、これは調整の際、工具の角が当たってできたものと思われる。文様は乱雑だが調整は丹念で焼成も良く、十分に精製された土器であると言える。

破片資料をみると、爪形文は横に並ぶもの(図115-38・40)と縦に並ぶもの(図116-8)が多く、充填的に用いられるもの(図116-4)は稀のようである。本種に特徴的な例として、菱状沈線の交点など沈線が集まる箇所に施文されている図116-13~26がある。同図22・23は同一個体とみられ、爪形文から弧状の沈線が垂下する。26は菱状沈線文の下にM種にみられる「D」字状連続刺突と横線文が交互多段に施文されている。同図3は「ハ」字状に爪形文がつくもの、21も2本の指先でつまむように施文されたものである。図117-13~15は施文具を器面に対して垂直に当て、器肉を盛り上げずに施文している例である。

G種(図100-2, 図115-12~14, 図117-7) 円形竹管状工具による刺突文がみられるものである。貝殻腹縁文が併用されるものはD種に含めた。図100-2の口唇部形態は角頭状である。斜位と横位の沈線に区画された中に刺突を充填している。図115-12・14にも斜行沈線文が併用されている。12の刺突文はゆがんでいるため、施文具が軟質であったと推察される。

H種(図116-10~12) 肥厚した外削ぎ状の口唇部直下に、ボタン状の貼付け文がつくものである。図示した3片は同一個体の可能性が高い。

I種(図100-3・図116-27~34) 短沈線を刺突文のように平行沈線間や沈線区画内に施文するものである。27は薄く、口縁部が緩やかに外反する。縦位や斜位の平行沈線間に短沈線を加えて、梯子状の文様を表出している。28・32は同一個体で、縦位の鋸歯状区画内に短沈線が充填されている。図100-3は緩やかな波状口縁を呈するとみられ、山形の沈線区画内に刺突を充填する文様が、多段に施文されている。内面の調整は口縁部が横方向の、胴部が縦方向のナデである。

J種(図117-20~39) 弧状沈線文がみられるものを一括した。25・36・38をみる限り、弧状沈線文は鋸歯状あるいは三角形状の沈線区画の中に充填文として描かれていると推察される。「D」字状連続刺突文が併用されるものが多いが、30・31のように貝殻腹縁文がみられるものもある。

K種(図117-1・6・8~11) 鉛筆の先端のような尖頭状の施文具による刺突文と細沈線が施文されている。1は沈線の交差する箇所に施文され、6は格子文の沈線区画内に充填されているものである。8~11は横線に平行して連続的に加えられている。

L種(図101-1, 図117-2~5) 角頭状の施文具による刺突文と細沈線が表出されているものである。図101-1は実測図と拓影の両方を縮尺を変えて図示した。横に潰れた状態で出土してい

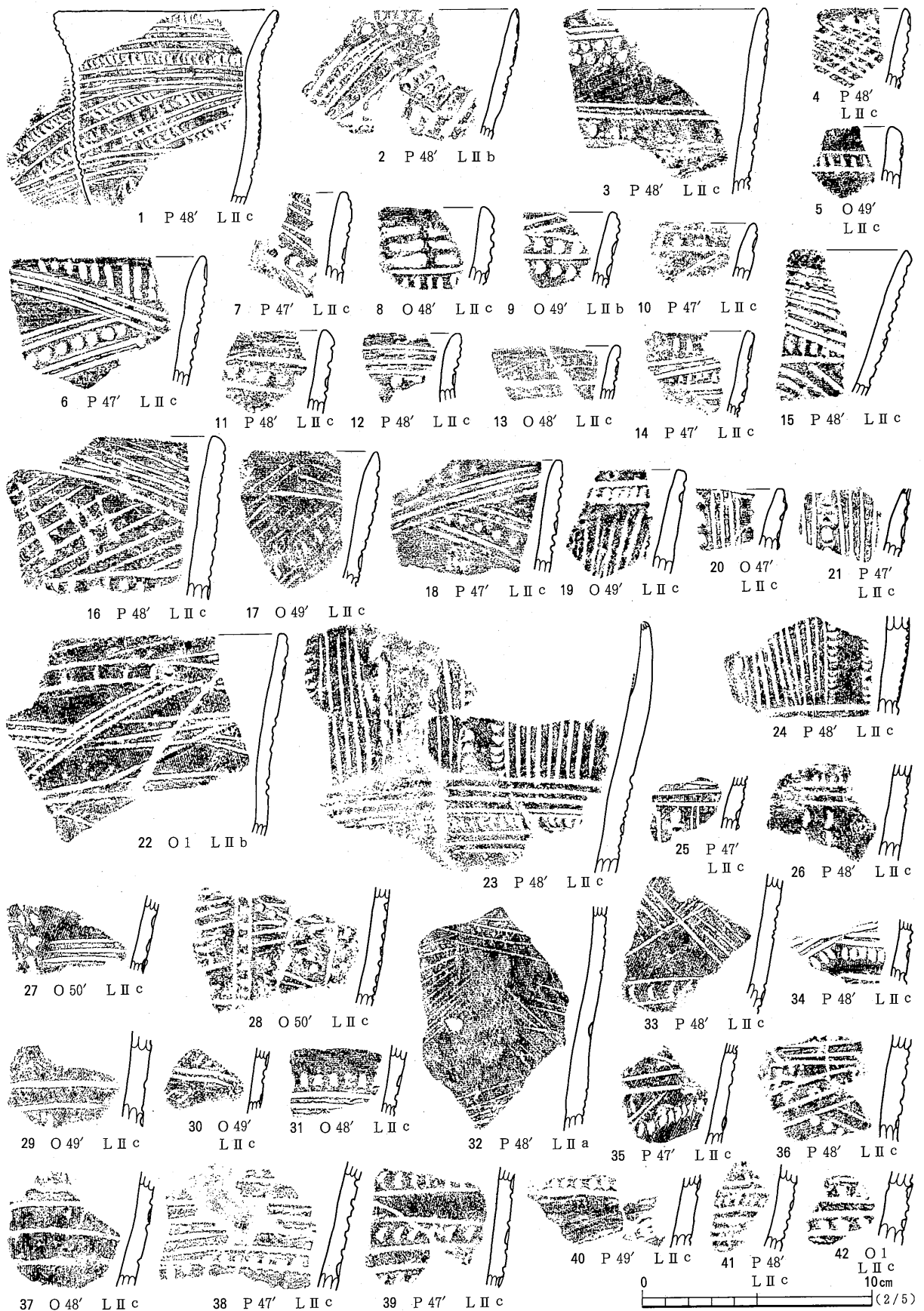


圖 118 I 区遺構外出土繩文土器 (21)

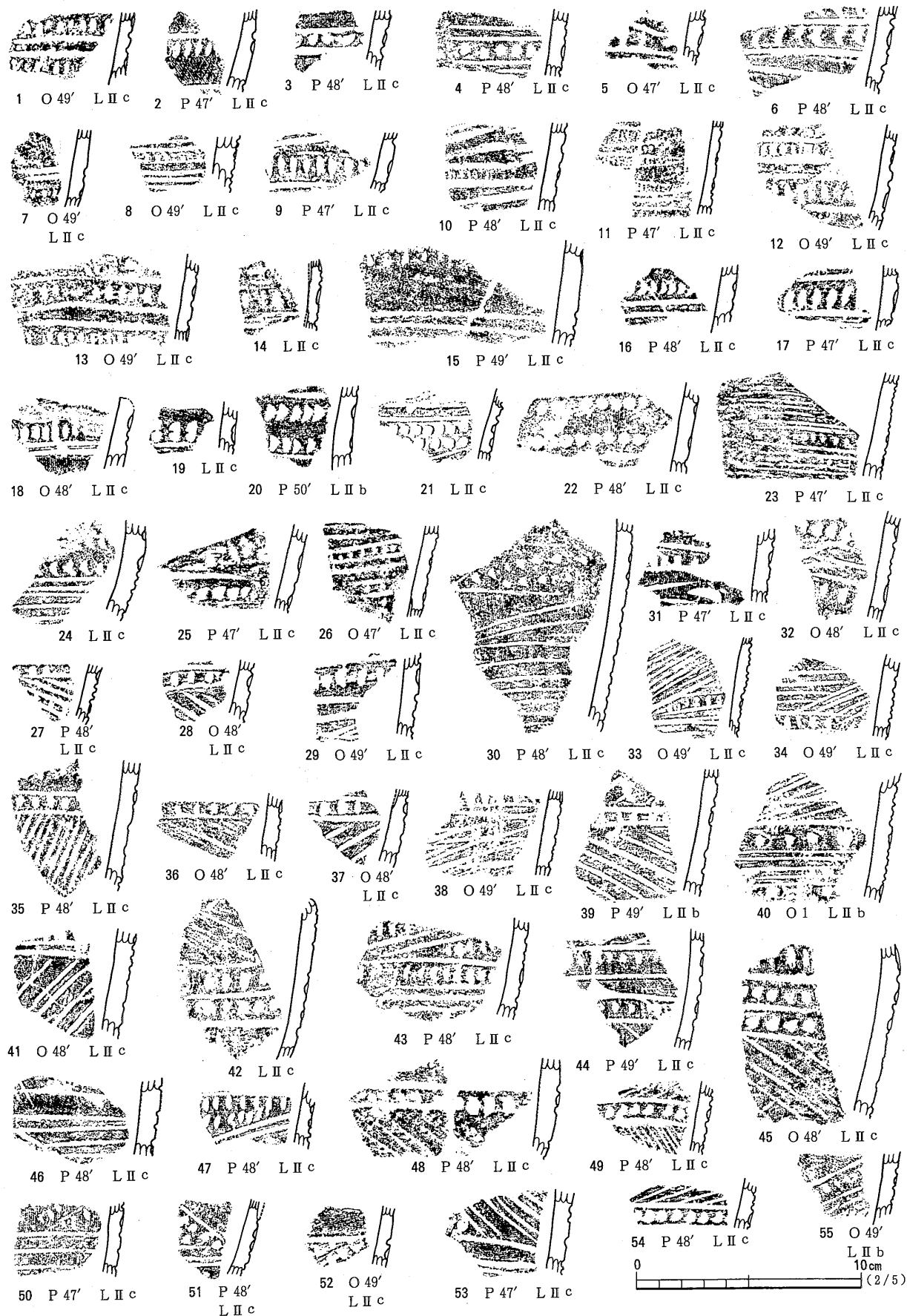


图 119 I区遺構外出土縄文土器 (2)

る半完形品であるが、ここから尖底部は出土していない。図示した尖底部は、近在から出土した数点の中から胎土や色調をもとに選択したものであることを明記しておく。口径 16.9 cm、胴部最大径 15.6 cm、残存高 27.2 cm、尖底部を入れた推定高は 34.2 cm を測る。口頸部が括れ、口唇部の形状は外削ぎ気味である。底部の器厚は胴部に比してかなり厚いものと推定される。横沈線によって明確に文様帯が区画され、口縁部に連弧文が、胴部上半に菱状の沈線文が 3 単位で巡る。また沈線間の要所に、角頭状工具による連続刺突が、おもに右方向から付加されている。胴部下半は矢羽根状の短沈線が多段に施文されている。底部は無文で、縦方向のケズリが施されている。

M種 (図100-4, 図101-2, 図118-1~図120-16) 主に「D」字状連続刺突文が施文されるもので、沈線と刺突で文様を表出されるものの中では最も多数を占める。半截竹管状工具の凸面や円筒状のもの先端を、器面に対して斜めに押し当てて連続的に施文しているものを「D」字状連続刺突文と呼称する。また図118-1・38, 図119-6・24・47にみられるのは、半截竹管状工具の凹面を使って施した「C」字状連続刺突文と呼ぶべきものである。「D」字状刺突文の器面に対する施文具の当て方は、ケズリ沈線の施文方法に共通するところがある。「D」字状刺突文は、ケズリ沈線を横位にごく短く施文したものと見ることもできるかも知れない。刺突は器面に向かって右方向から加えられたものが大多数を占めるが、図101-2, 図118-4・6・8・39, 図119-21・30・32・36・43, 図120-11などは左方向から刺突が加えられている。

図100-4は直線的に外傾する器形を呈し、口唇部は円頭状を呈する。横位の平行沈線で多段に区画された内部を密かな斜行沈線が埋めているが、斜行沈線は区画ごとに方向を左下がり、右下がりへと代えている。横位平行沈線間には刺突文が施文されている。刺突文を除けば、A種の図108-3~15に類似していると言えよう。図101-2は口頸部の括れが著しく、波状口縁を呈するものと推察される。口唇部は明瞭な角頭状を呈する。口縁部から胴部上半にかけて広い文様帯を持ち、斜行沈線に沿うように「D」字状連続刺突文が施文されている。一番下の刺突列の上位と胴部文様帯区画線の直下には、縦位のケズリ短沈線も施されている。また口縁部と胴部に、短い縦位区画線がみられる。

図119-1・12・13は同一個体とみられる。「D」字状連続刺突文は、沈線間や沈線に並行するように施され、貝殻腹縁文のように沈線区画内の充填文として用いられることは稀である。併用される沈線文には鋸歯状文や斜行沈線、横沈線が多く、格子文(図118-4, 図120-4・5)もある。図118-23~28のように縦沈線がみられるものや、刺突が縦列するものも少数ある。また、図118-6・8・14・31, 図120-6~8・10・11にはケズリ沈線が併用されている。図120-11はその他に、蕨手状の細沈線も施されている。図118-1は口頸部の括れが顕著な器形を呈する小型の土器である。施文順位は、口縁部の横沈線→胴部の斜行沈線→胴部下端の横沈線→刺突文の順である。図118-2は口唇部直下に「D」字刺突文が施文されているが、斜行沈線間には半截した萱のような薄い施文具の先端による連続刺突文が施されている。図120-1・2は爪形文が併用されているものである。

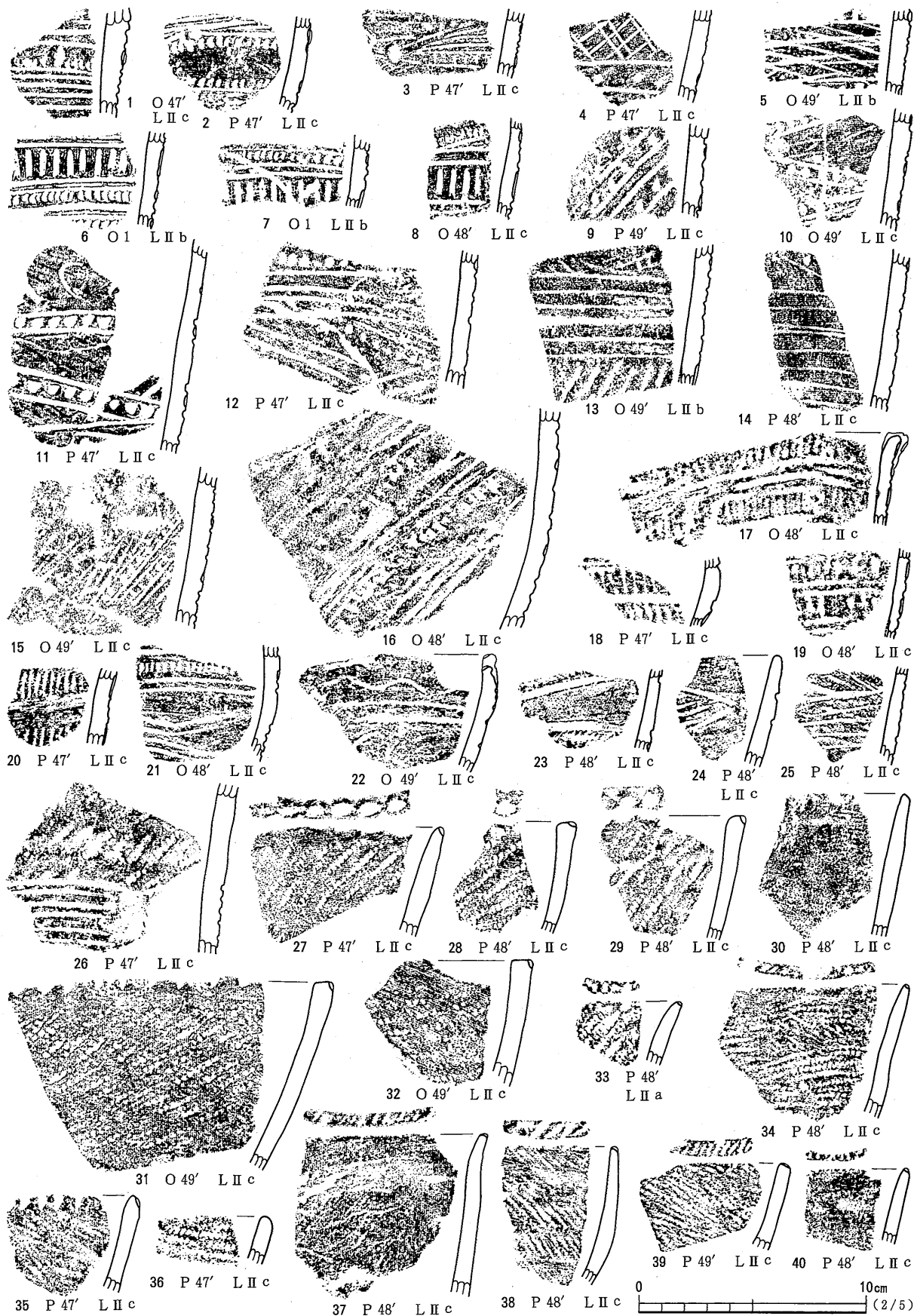


図120 I区遺構外出土縄文土器(23)

N種(図101-3, 図117-16・18・19, 図120-17~21) 平ノミ状の施文具による押し引き文か刺突文が施されているものである。図101-3は口縁部直下から胴部下端にかけての破片を復元図示したものである。2本一組の沈線と押し引き文が交互に施文されている。胴部上半に斜行沈線が、下半には横位沈線が施文されている。両者の間に三角形か菱形の無文部を持つが、無文部には斜位の条痕文が施されている。押し引き文は平ノミ状の施文具によるが、縦長の刺突にみえる箇所と、施文具の角が強く押され矢羽根状を呈している箇所とがある。しかし一連の押し引きの中で両者は任意に変化し、特に意識して使い分けられているとは考えにくい。

図117-16・図120-17・19は同一個体とみられる。器厚は4~5mmと比較的薄い、口縁の波頂部は肥厚している。キャタピラ状の押し引き文と横沈線が交互に施文されている。図117-18・19は弧状のケズリ沈線に沿うように刺突が施されている。

O種(図120-22・23) ペン先状の施文具による「く」字状押し引き文が施されているものである。22は口縁部が肥厚し波状を呈している。また口唇部の内角に刻みを有する。押し引き文が沈線的に用いられ、横線や波状文、円形文などが描出されている。23は条痕地に浅く太い横沈線と押し引き文が施されている。

P種(図120-24~図121-11) 本類に属するとみられる縄文が施された土器である。口唇部の形状は角頭状か円頭状を呈する。口唇部に刻みを持つものが多いが、図120-27~29は指頭圧痕に似た、31・32は爪形文に似た刻みを有する。図120-24~26は沈線文と併用される。最も特徴的な施文原体は、図120-26~28・31・32・図121-3~5のように条と条の間隔が開き気味の上、撚糸文のように節が潰れていないものである。これらは、二段の縄を母体とする自縄自巻の原体の中でも、条間を緩めたもので施文されたと判断した。図120-34は、条間を詰めた自縄自巻の原体で施文されたとみられる。その他に、LLRで施文したとみられる図121-7などがある。図120-31・32や図121-7のように節が独立して見えるものが多いが、比較的乾燥が進んでから浅く施文したのであろう。

Q種(図121-12~30) 本類に属する可能性が高い無文土器をまとめた。口唇部は円頭状と角頭状のものも多く、12~19には刻みが入る。口縁部は、内外面に横方向のナデまたはミガキがみられるものが多い。24は口唇部直下に横方向の、下半分に縦方向のミガキが観察されるが、器面がまだ柔らかい段階で調整を加えたらしく、器面が凸凹している。胴部片には縦か斜め方向のナデまたはミガキが加えられているものが多い。以上のように調整の特徴は、本類他種と変わらない。

R種(図122-1~図123-20) 底部片を一括した。尖底部は61点出土しているが、そのうち49点を図示した。平底片や丸底状のもの、乳房状のものは出土していない。尖底部が胴部の2~8倍の厚さを持つ点が特徴的である。図122-8・19・27・図123-10・13などの底部は特に厚い。先端部の形状は尖っているものが多いが、図122-19のように比較的平らなものもある。文様が見られるものと無文のものが半々ある。前者も先端部は無文となるものが大半で、図122-15・21のように先端付近まで施文されるものは稀である。図122-1・3の文様はD種にみられる。

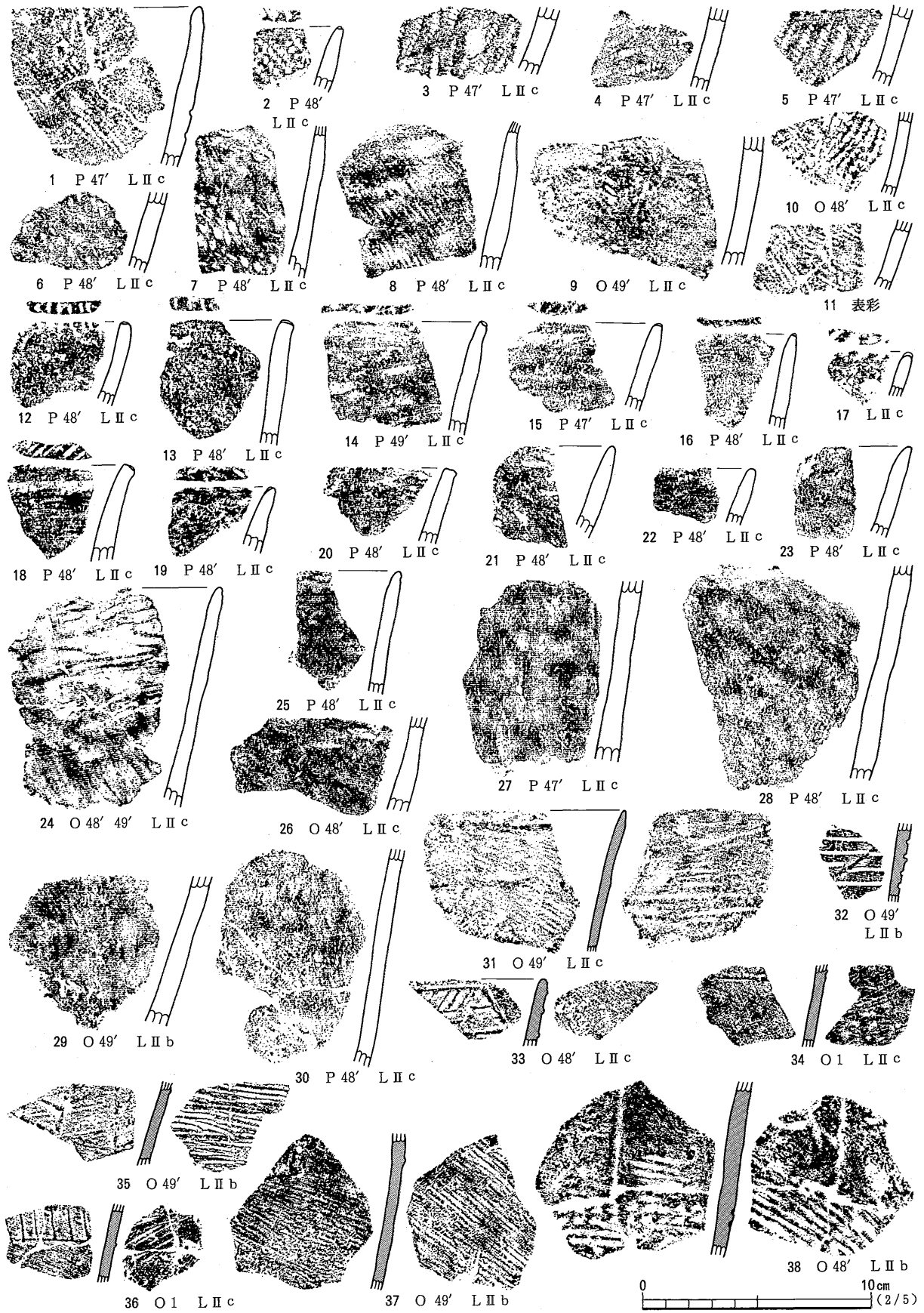


図 121 I区遺構外出土縄文土器 (24)

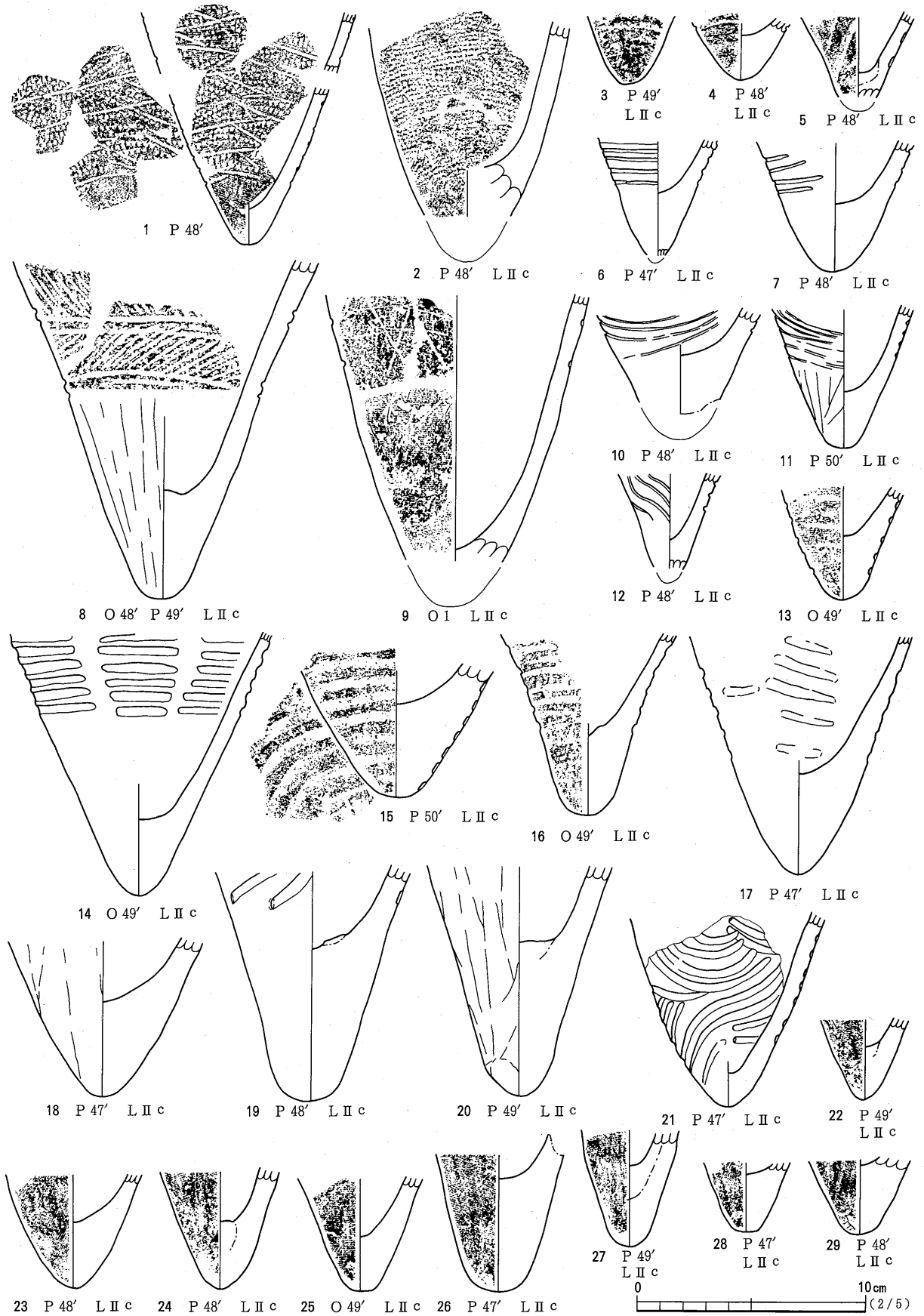


图 122 I区遺構外出土繩文土器 (25)

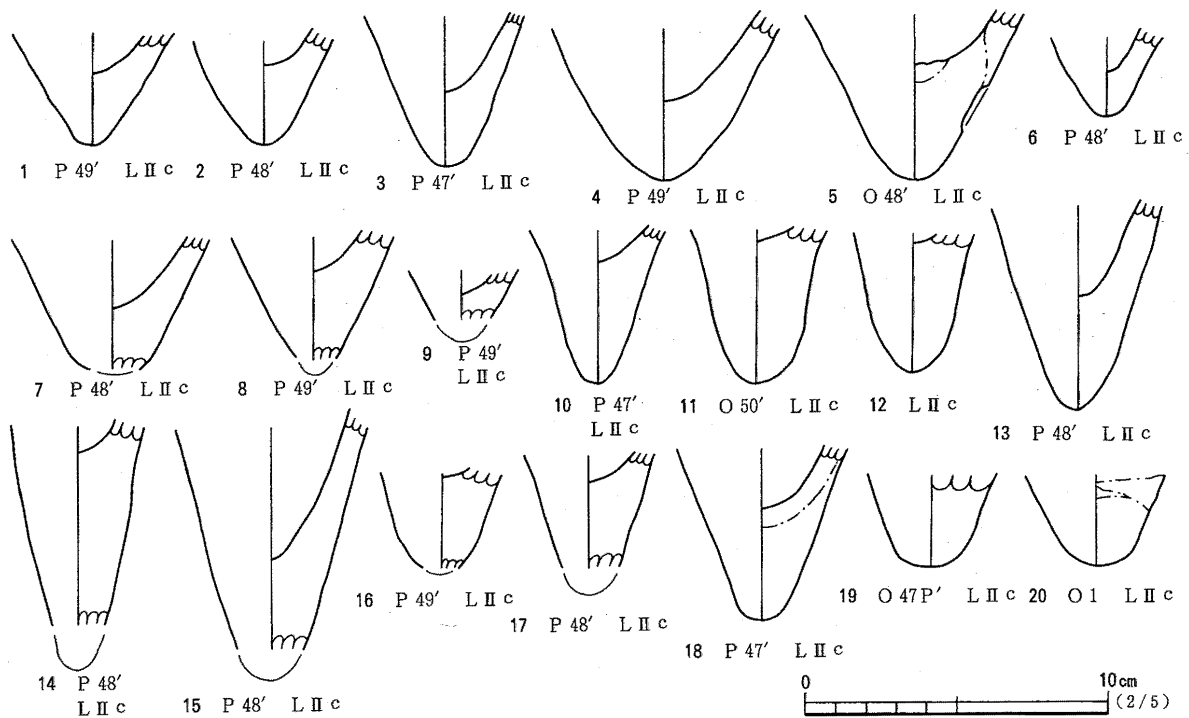


図 123 I区遺構外出土縄文土器 (26)

1は平行四辺形の沈線区画の中に貝殻腹縁文を充填している。同図3は貝殻腹縁文が横位に施文されている。2に施文されているのは、P種にみられた二段の自縄自巻原体による縄文である。4・6～13はA種にみられる文様である。特に8は図108-4～15に近似する。5・14～17・19・21はC種にみられる文様で、21は図99-3，図112-2～13と同様である。調整は内外面とも縦方向のミガキである。図122-20・24・27，図123-5などは底部内側に粘土を詰めて底を厚くした痕跡が残る。

2類 (図121-31～38)

出土量は極めて少なく8片を図示した。31～37の器厚は3～5mmと薄く、胎土に繊維混和痕が観察される。いずれも細片のため器形は不明であるが、胴部から口縁部にかけて直線的に外傾するものと推定される。口縁部片は31・33の2片のみで、口唇部の形態は31が尖頭状、33が円頭状を呈している。条痕文が内外面に施されるもの(31・37)と、内面だけに施されるもの(33～36)があり、横位または斜位に施文されている。31・34は細隆起線によって横線文が、33～37には区画文が施文されている。32は斜行する細隆起線を施文した後、横沈線を描いている。同図38は内外面に貝殻条痕が施されている土器である。器厚は6mmを測り、胎土中に多くの繊維混和痕が認められる。半截竹管状工具による2個一組の横位刺突列が、左方向から施文されている。

II 群土器

1類 (図125-1)

出土量は少なく1点のみ図示した。口縁部に波状の隆帯が貼りつく。細片のため明確なことは不明だが、大木7a式に比定されることが考えられる。

第5節 遺構外出土遺物

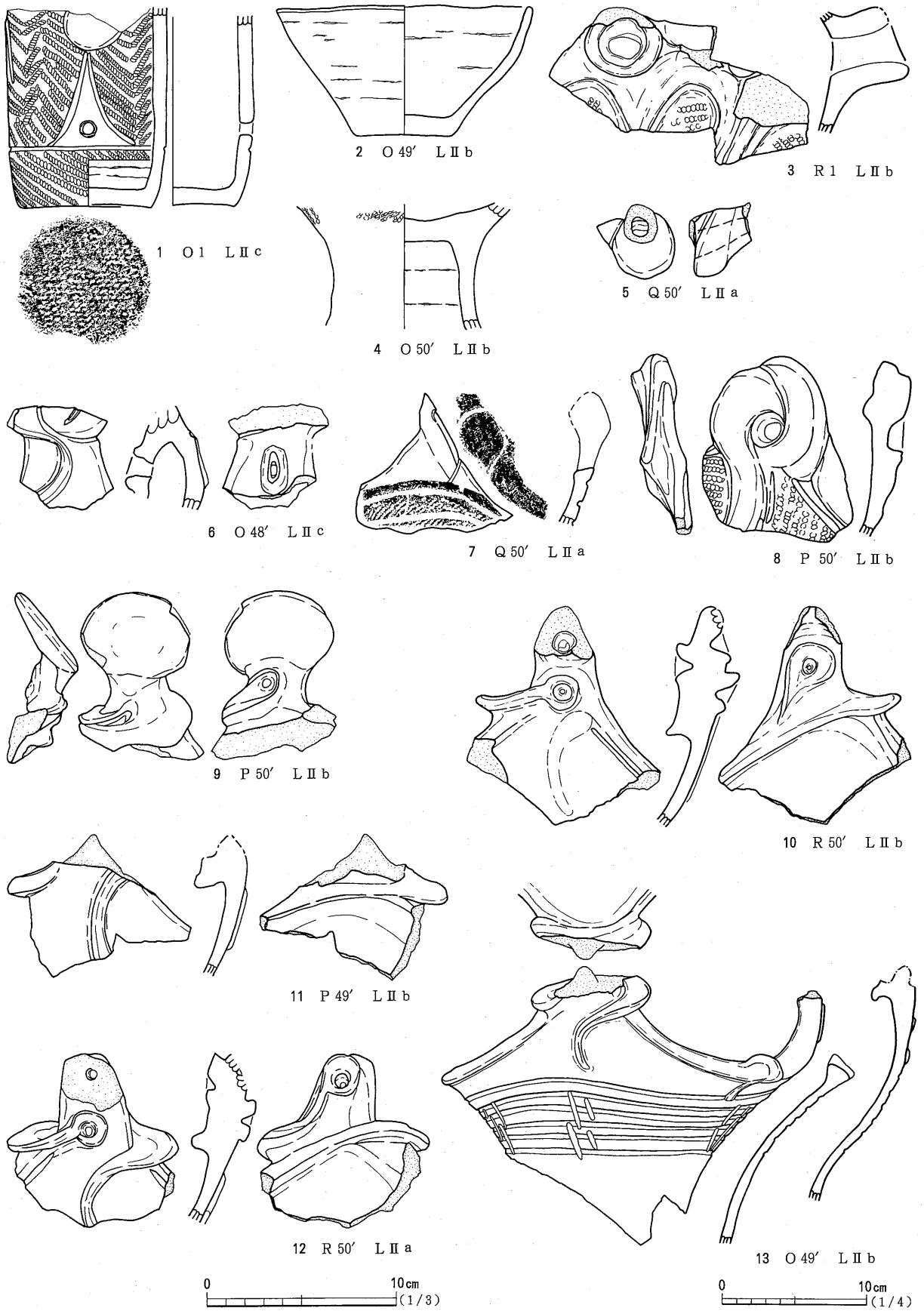


图 124 I区遺構外出土繩文土器 (27)

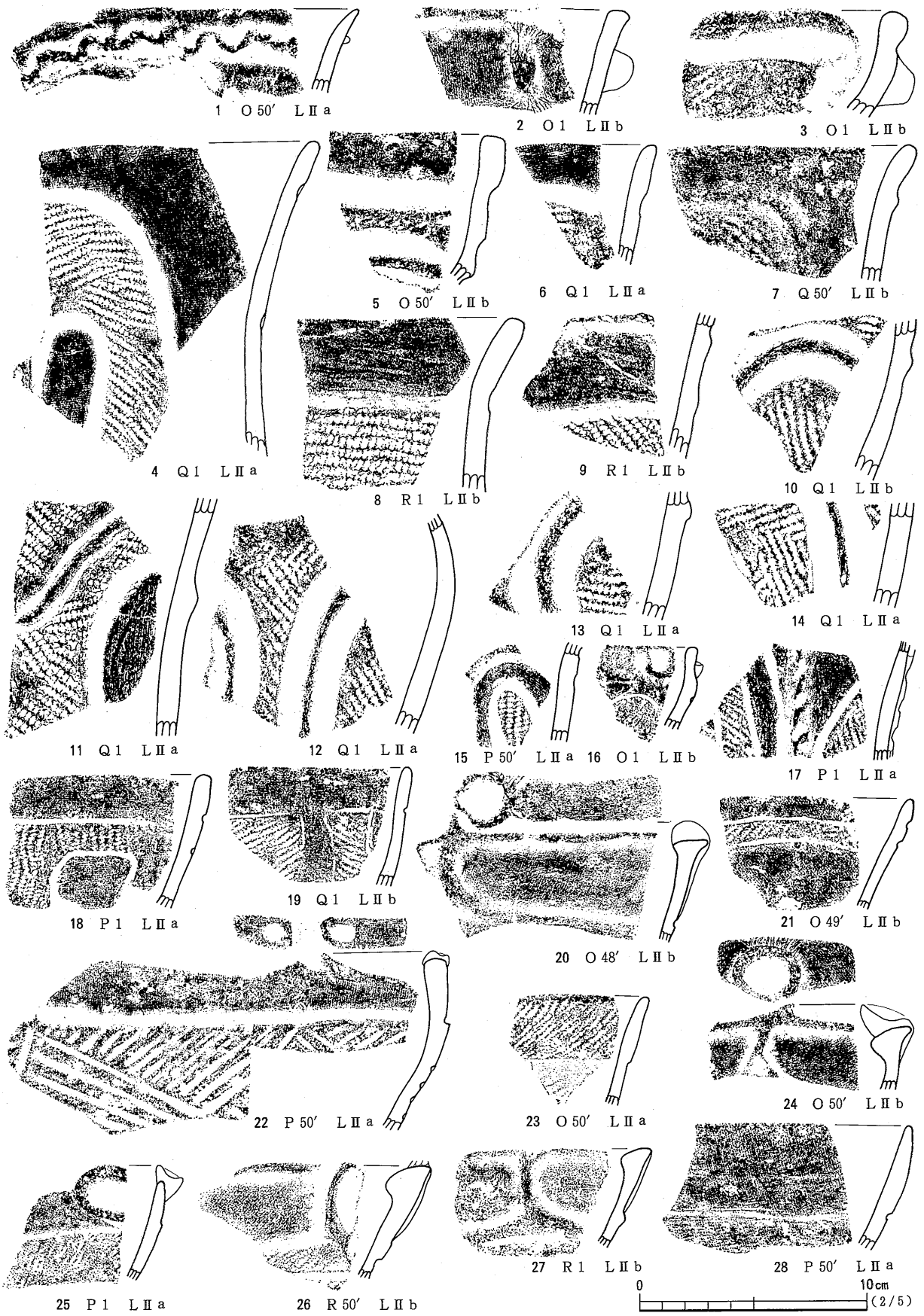


图 125 I区遺構外出土縄文土器 (28)

2類(図124-3, 図125-2~16・19, 写真120)

4類土器に次いで出土量が多い。図124-3は注口付鉢形土器の破片で、注口部が水平に近い角度で取り付く。隆凹線による楕円形の区画文内に縄文が充填されている。図125-2~15は深鉢形土器の破片である。胴部上半から口縁部にかけて緩やかに外反する器形を呈するものが多いと推察されるが、12のように内湾する胴部片もみられる。器厚は6~12mmと比較的厚手である。口縁部片には、ツマミ状の突起が付くもの(2・3), 口唇部直下に横線によって区画された無文帯を持つもの(5・8), 口縁部が区画されないもの(4・6・7)などがある。4~7・9~16・19は隆線(7・11)や凹線(4・6・15), 隆凹線(9・10・12~14), 細沈線(16・19)で描いた区画文内に縄文を充填している。原体はLRかRLである。

3類(図124-8, 図125-17・18・21, 写真120)

出土点数は少なく4片を図示した。いずれも深鉢形土器の破片とみられる。図124-8は隆帯が貼り付く口縁部片で、隆帯は「S」字状になるものと思われる。図125-17・18は2類に近似した区画文が描かれているが、細沈線で区画文が表出される点が異なる。器厚は5~7mmと2類に比べ薄い。

4類(図124-1・2・4~7・9~13, 図125-20・22~図129-21, 写真120)

2群土器の主体を成すもので、器種には深鉢・鉢・浅鉢・壺・注口土器, 筒形土器, 台付土器などがあり、多彩である。図124-1は筒形の単孔土器で底径6.7cmを測る。沈線区画内にRLを異方向に施文し、羽状縄文を表出している。図124-4は台付土器である。上端にLRが施文されているが、原体の末端とみられ乱雑である。

図124-6・7・9~13と図125-20・22~図129-5は、深鉢か鉢形土器とみられる。平縁と波状口縁があり、波状口縁のものは胴部から口縁部にかけて大きく開く器形を呈するものが多いと推察される。図124-6・7・9~12と図127-22は、波状口縁の頂部に付くとみられる突起部である。図124-6は中空で外面に隆帯をもち、内面には孔の周囲が隆起する貫通孔が穿たれている。同図7と図127-22は偏平な形状を呈し、横沈線で区画された縄文帯を口縁部に有する。図124-9は円盤状の突起である。内面に盲孔を有し、隆帯が螺旋状に巡る。図124-10~12の突起は、よく類似した形状を呈するものと推察される。恐らく同図13のような土器に付くのであろう。内外面に複数の盲孔を持ち、螺旋状に巡る隆帯の末端が「ノ」字状に垂れ下がるものである。13は口縁部が大きく開く器形を呈し、4単位の突起を有していたものと推定される。波頂部と波頂部の中間にも、「ノ」字状の隆帯が付く。胴部に6本の横沈線が描かれているが、この横沈線は口縁の波形に同調するように波状を呈している。またこの横沈線は、2本一組の縦位短沈線で区切られている。図124-13と同図2及び図131-1は、22号住居跡の北西約2mの地点からまとまって出土している。図124-13と図131-1は同一個体の可能性がある。

図125-22はゆるやかな波状を呈する口縁部片である。2つの盲孔をもつ小突起が付き、斜位の集合沈線によって鋸歯状文が描き出されている。同図20・23~図126-3は平縁を呈する口縁

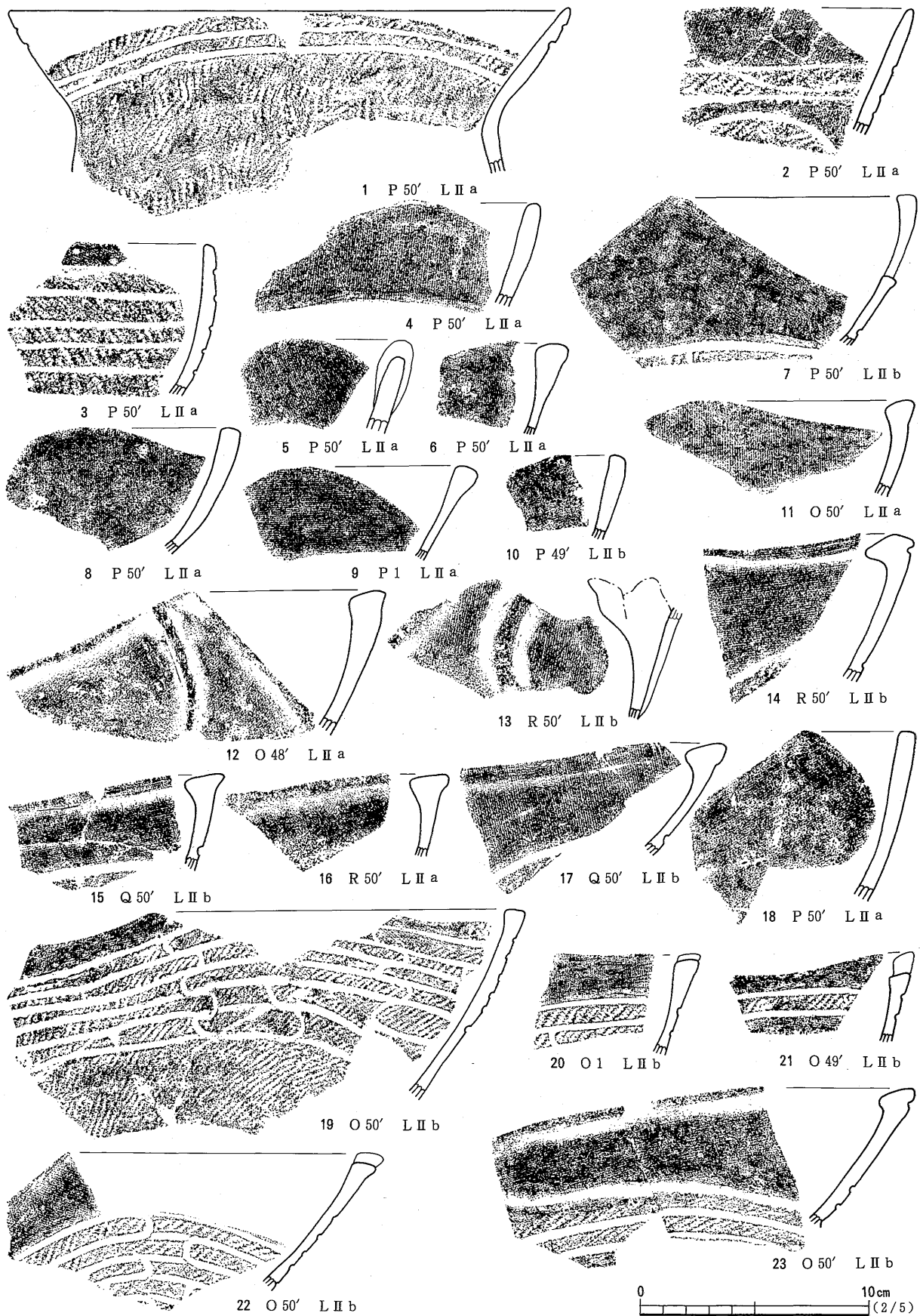


図 126 I区遺構外出土縄文土器 (29)

第5節 遺構外出土遺物

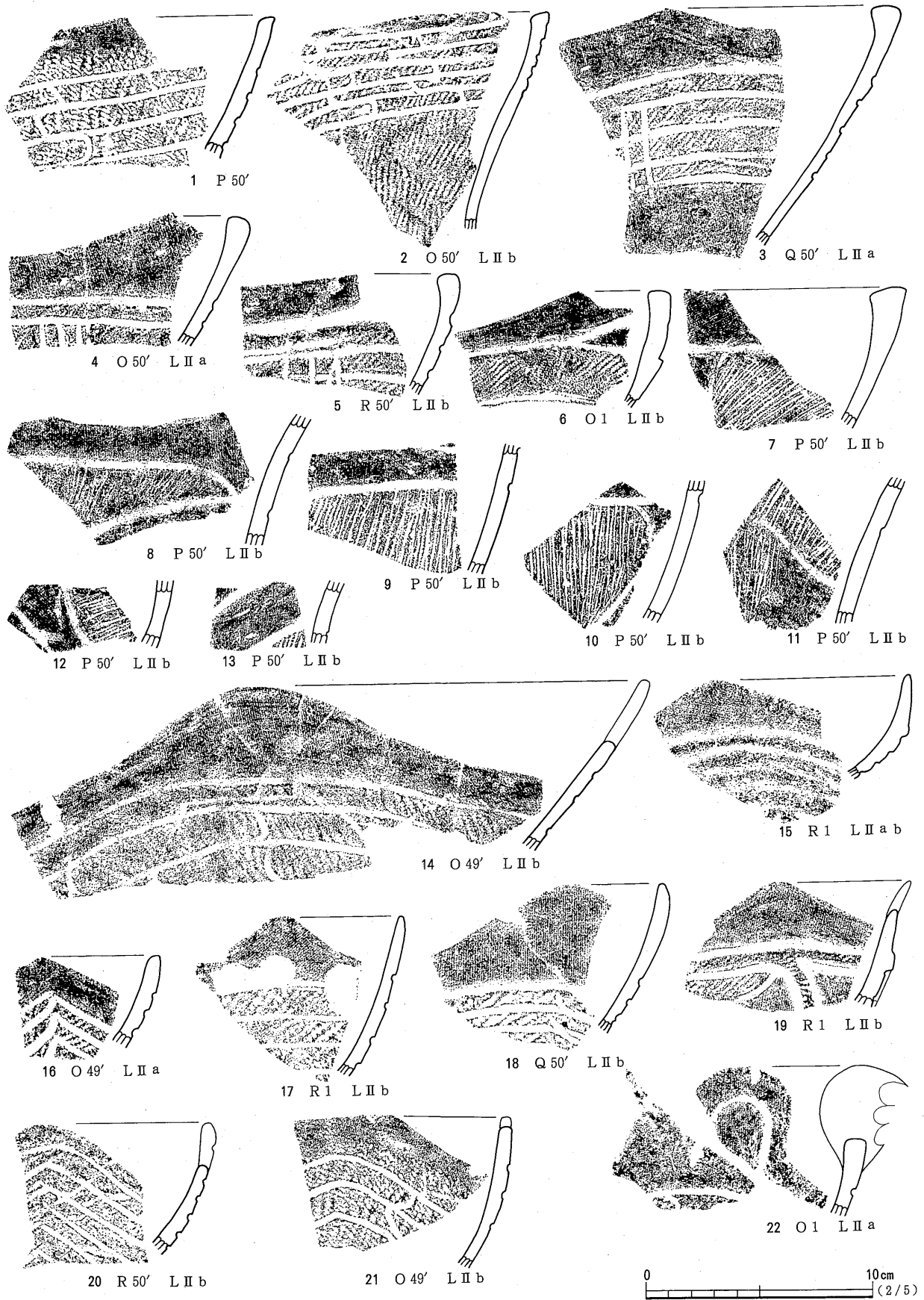


图 127 I区遺構外出土繩文土器 (30)

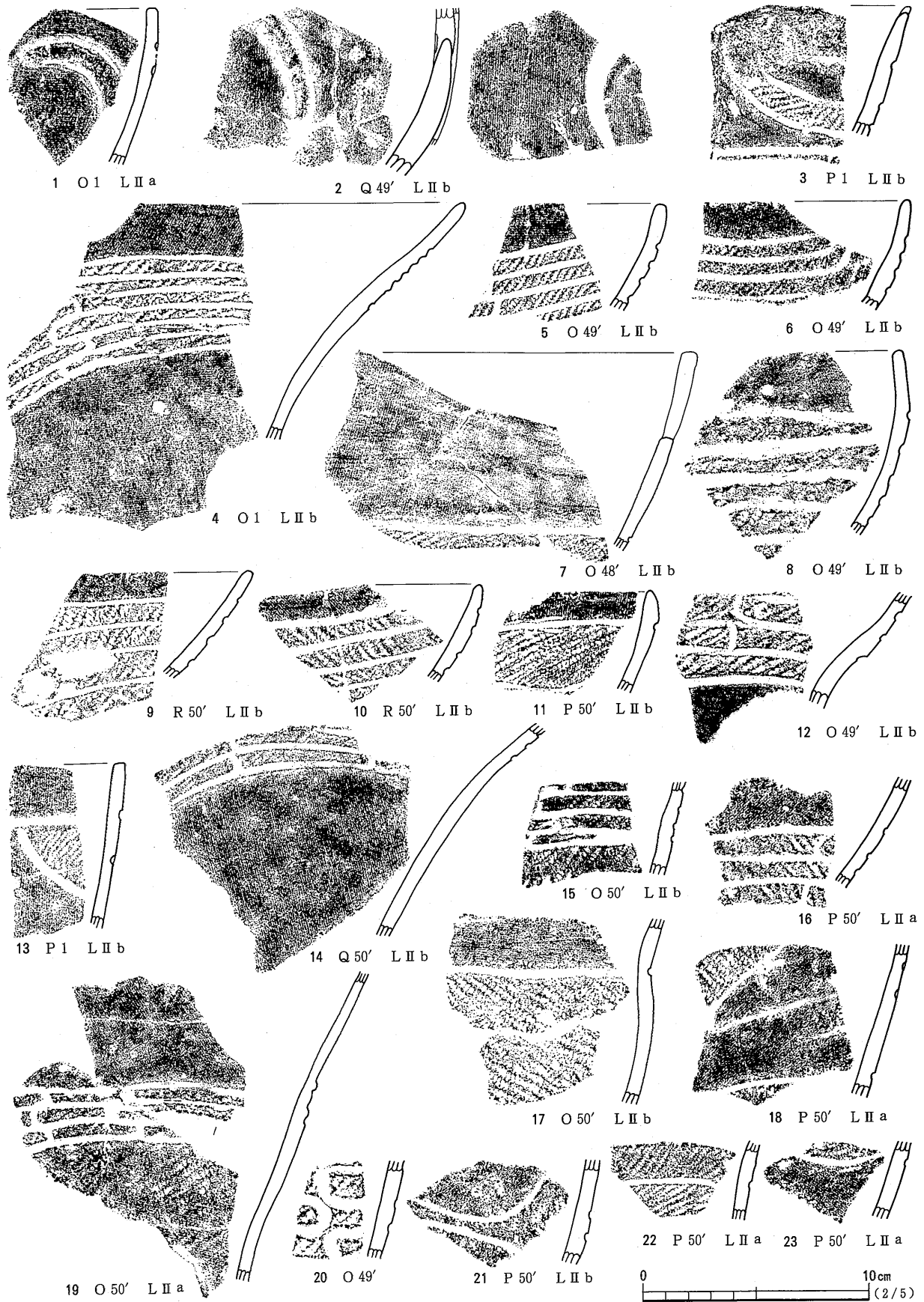


図128 I区遺構外出土遺物(3)

部片で、そのうち図125-20・24～27は、盲孔を有する小突起や口唇部から垂れ下がる隆帯を有する。また同図20・24・26・27の口唇部は著しく肥厚している。図126-1は口縁部の下方が大きく括れる器形を呈する。LRを全面に施した後、口縁部に平行沈線を施文している。図125-23は壺形土器の可能性はある。

図126-4～13は口唇部が肥厚する波状口縁の波頂部である。4～6と8～11は緩やかな弧状をなし、7は三角形状を呈する。12・13は口唇部の肥厚が著しく「ノ」字状の隆帯が垂下するが、頂部に突起が付いていたものと推察される。その他の波頂部は無文で、内外面ともよく磨かれている。同図14～図127-7も口唇部が肥厚する波状口縁部片である。図126-14～17・23は特に著しく肥厚している。図126-20～22は同一個体とみられる。口縁部に無文帯を持ち、その直下に平行沈線が横走する幅広い縄文帯をもつものが多い。その平行沈線を蛇行沈線で連結するもの(図126-19～22, 図127-1・2)と、縦沈線が付加されるもの(図127-3～5)とがある。縄文は全て横位回転のLRである。図127-7～13は同一個体とみられ、曲線文内に条線文が充填される土器である。

図127-14～21, 図128-1～3は口唇部が肥厚しない波状口縁の波頂部である。図127-14・16～18・20・21は縄文地に平行沈線が横走するもので、そのうち14・16・18は下位の沈線の末端を上位の沈線まで伸ばして、上下の沈線を繋いでいる。21には蛇行沈線がみられる。同図19は「T」字状の隆帯が付き、隆帯上と沈線区画内にLRが施文されている。図128-1には「ノ」字状の隆帯が剥離した痕跡がみられる。同図2にも隆帯が付くが、内面には凹線が施文されている。同図4～11・13も口唇部が肥厚しない波状口縁部片である。口唇部が肥厚するものと同様、口縁部に無文帯を持ち、その下に平行沈線が横走する縄文帯をもつものが多い。11・13は曲線文か弧線文内に縄文が施文されている。

図128-12・14～図129-5は胴部片である。図128-12・14のように緩やかに外反するものや図129-1～5のように直線的に外傾するもののほか、図128-17のように内湾ぎみの胴部を有するものなどがある。文様には口縁部片と同様、横位の沈線を区画する蛇行沈線が施文されているもの(図128-12～16・19・20)が多く、曲線文(図128-18・21・23)や条線文(図129-2～4)が施されたものもある。

図124-2, 図129-6～11・13・14は鉢または浅鉢の破片とみられる。図124-2は完形の無文土器で、同図13の近在から出土している。口縁部が直立ぎみになる器形を呈し、その特徴から本類に含めた。内外面には積み上げ痕と横ナデが観察される。図129の6と7, 8と10, 13と14はそれぞれ同一個体である。同図9も6・7と同一個体の可能性がある。器形には、胴部から口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がるもの(6・9)と直線的に外傾するもの(8・13), 口頸部が「く」の字に内折するもの(11)などがある。6・9には入組状の区画文が、8・13には連弧文が表出されている。11は屈曲部に凹線と盲孔を持つ。

図129-15は壺形土器の体部片とみられる。球状の器形を呈するものと推定され、縄文地の曲

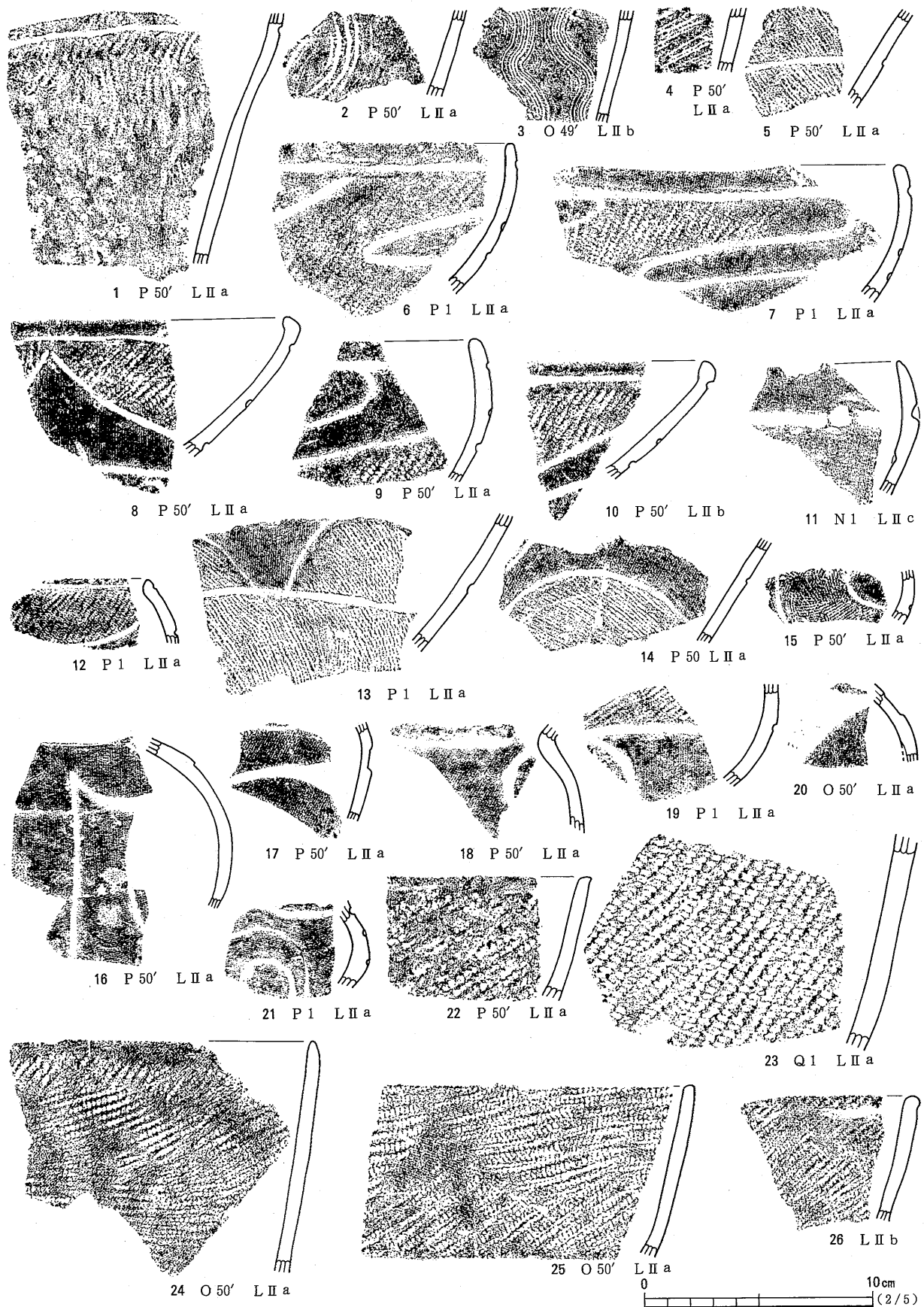


図 129 I区遺構外出土縄文土器 (32)

第5節 遺構外出土遺物

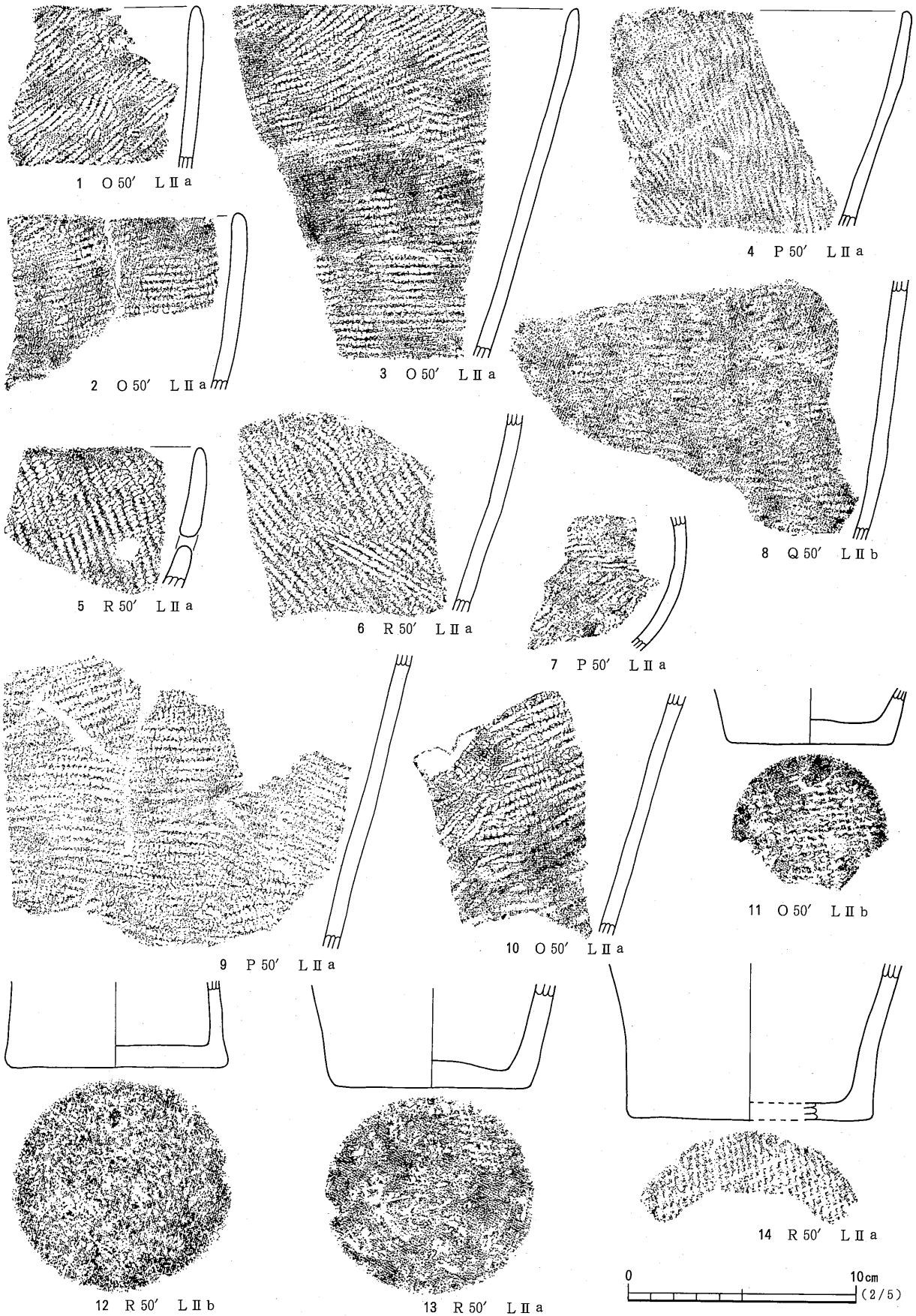


图 130 I 区遺構外出土繩文土器 (33)

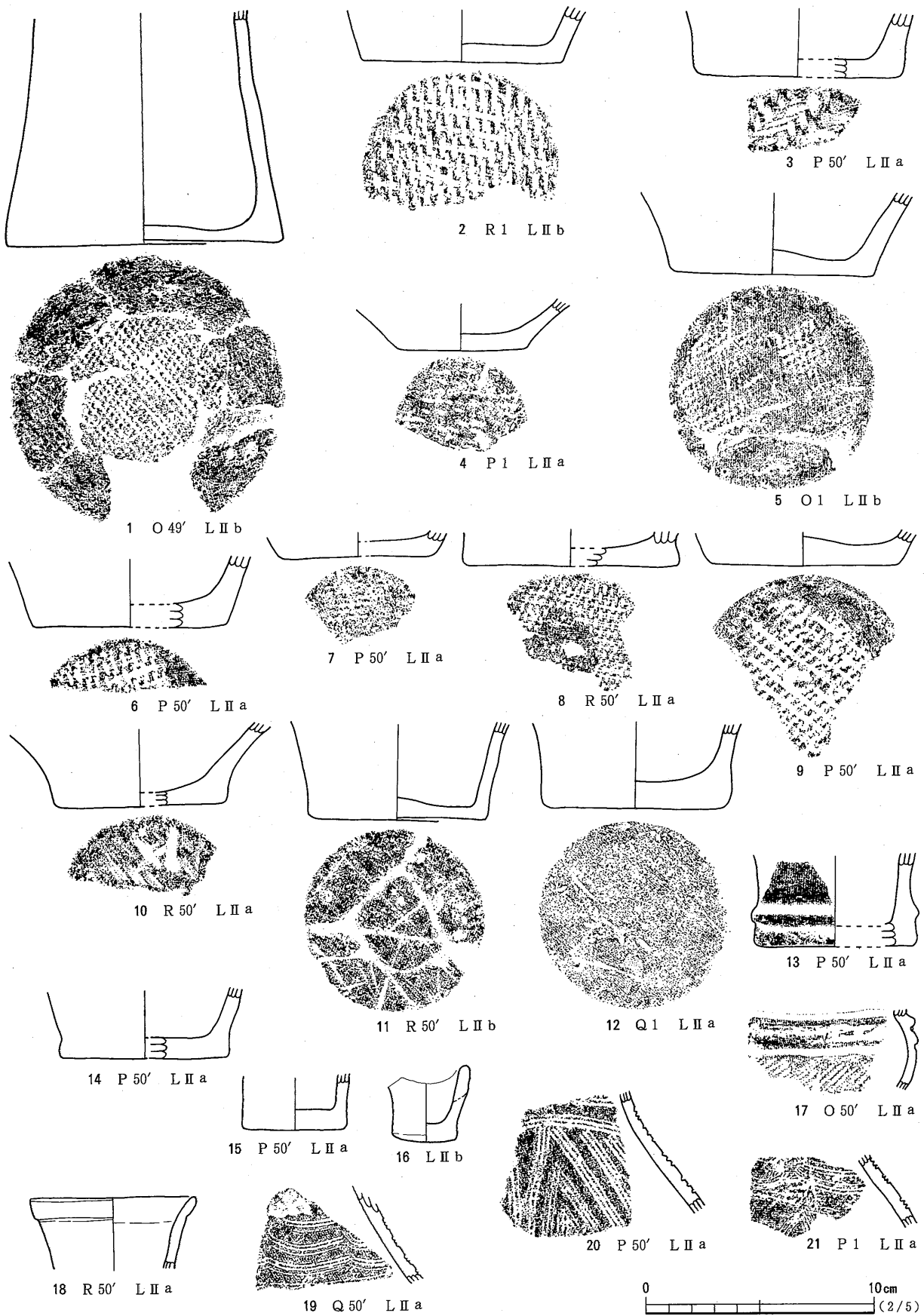


図 131 I区遺構外出土縄文土器・弥生土器

第5節 遺構外出土遺物

線文が描かれている。図124-5・図129-12・16～21は注口土器の破片と推察される。図124-5は注口部で付け根の下部が肥厚する形状を呈する。図129-12・16～21を見る限り、胴部は球状を呈するものと推定される。縄文が施されないものも多く、特徴的な文様として浮き彫り状の曲線文が施されている図129-16・17・19・20がある。

5類 (図129-22～図130-10)

縄文のみが施文されたものを本類とした。直線的に外傾する器形を呈する深鉢形土器が大半だが、図130-7は胴部が内湾気味の鉢形土器とみられる。図129-22・23は縄文の節が大きく、特に22は縦位回転施文されているため中期の所産と考えられる。図129-24～図130-9は後期の所産とみられ、節の細かい縄文が横位か斜位に回転施文されている。原体はLRかRLが多いが、図129-25はLRを軸に2本のL撚りの縄を付加したものとみられる。

6類 (図130-11～図131-16)

本群に属するとみられる底部資料である。深鉢形土器の底部片が多いとみられるが、胴部が外反気味に立ち上がる図131-4・10は、鉢か浅鉢形土器の可能性もある。同図13は筒形土器の底部であろう。器形をみると、胴部が外傾するものの他に内傾するもの(図131-1)や、直立する土器(同図13・15)もある。胴部はいずれも無文だが、図131-13には隆帯が巡る。底面に網代痕が認められるものは、4類と同時期の所産である可能性が高い。図131-11の底面には木葉痕が観察される。同図15・16は小型土器だが、15は胴部が直立する器形を呈するため、16は2類に胎土と色調が類似するため本類に含めた。

7類 (図131-17)

出土した1点のみを図示した。内湾する器形の鉢形土器の破片とみられる。口縁部に横位の平行沈線と列点文が施され、大洞C₁式と考えられる。

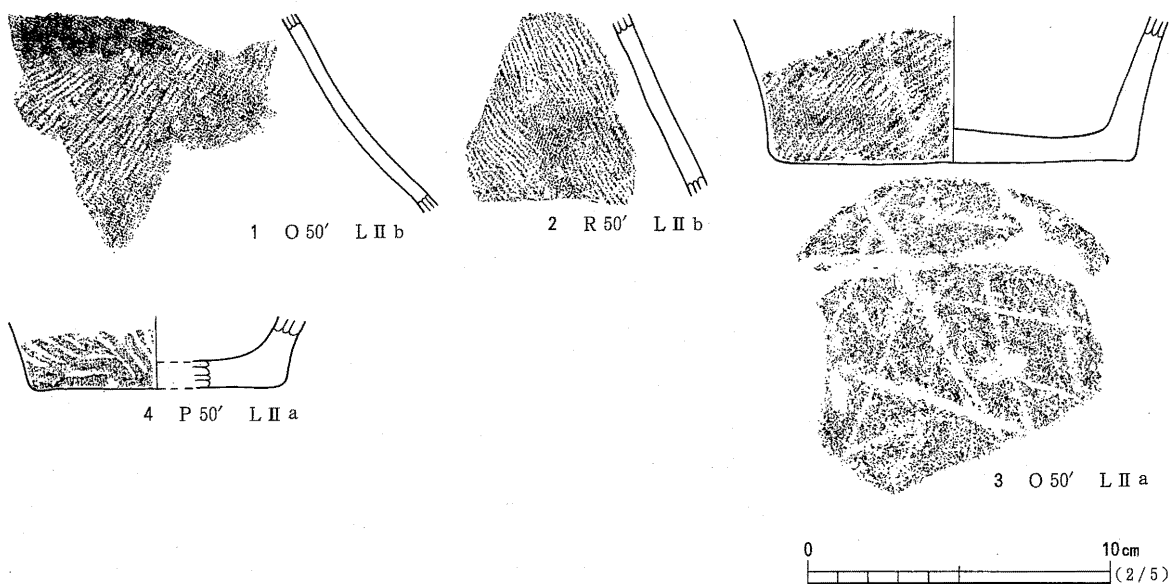


図132 I区遺構外出土弥生土器

Ⅲ群土器(図131-18~図132-4)

Ⅱ区の遺構外出土遺物では最も出土量が多い本群土器であるが、Ⅰ区からの出土量は少ない。図131-18は壺型土器の口縁部片で、口唇部がわずかに厚くなる。同図19~図132-2は壺型土器の頸部から胴部上半にかけての破片とみられる。図131-19・21に重連弧文が、20には重山形文が3本歯の櫛歯状工具によって描かれている。本群土器に施文される縄は極めて細いが、図132-1の施文原体はLR、同図2はの撚糸文と思われる。3・4は壺か甕型土器の底部片で、胴部には附加条縄文が施文されている。また3の底面には木葉痕が認められる。(今野)

Ⅳ群土器(図133・134, 写真104~106)

本群は、古墳時代の土師器・須恵器でLⅠあるいはLⅡから出土している。土器の出土分布を見ると、特にⅠ区東部の古墳時代の住居跡が集中するM3~6, N3~6グリッドから多く出土している。土師器片158点、須恵器片3点が出土し、その中で図示できたのは、図133・134の土師器18点である。図示したうちの図133-3・14, 図134-3の3点は、写真図版75-1に示した状態でM5グリッドのLⅡからまとまって出土した。

図133-1~6は、土師器杯である。図133-1は、丸底で体部上端に段を持ち、口縁部が外反する器形である。調整は、口縁部外面にヨコナデを行い、体部外面にヘラケズリ後、まばらにヘラミガキを加えている。口縁部内面にはヨコナデ、体部内面にヘラナデ後、まばらにヘラミガキを加えている。内・外面には赤彩、体部外面には黒斑が認められ、全体的に丁寧な作りである。推定口径15.9cm, 残存高7.4cmを測る。図133-2は、丸底で体部上端で弱い段を持ち、口縁部が外反する器形である。調整は、口縁部外面にヨコナデを行い、体部外面にヘラケズリを行なっている。口縁部内面にはヨコナデ、体部外面には、ヘラナデ後ヘラミガキを加えている。底部外面には黒斑が認められる。胎土には土器焼成時に赤化した粒が含まれている。推定口径12.7cm, 残存高4.8cmを測る。図133-3は丸底で、丸みを持つ体部に最大径を有し、口縁部が直立する器形である。調整は、口縁部内外面にヨコナデを行い、体部外面にヘラケズリ、体部内面にヘラナデを行なっている。胎土には土器焼成時に赤化した粒が含まれている。推定口径11.6cm, 器高7.8cmを測る。図133-4は丸底で体部上端に段を持ち、口縁部が内湾する器形である。調整は、口縁部外面にヨコナデ、体部外面にヘラケズリを行なっている。内面には、底部付近に放射状、体部から口縁部にかけて横方向のヘラミガキが施されている。胎土には土器焼成時に赤化した粒が含まれている。推定口径16.5cm, 残存高6.0cmを測る。

図133-5は、須恵器を模倣した薄手の杯である。丸底で口縁部が短く立ち上がる器形である。調整は、口縁部内外面にヨコナデ、体部外面にヘラケズリを行なっている。内面には、黒色処理を行なっている。口径14.6cm, 器高3.7cmを測る。図133-6は偏平な底部と、やや内湾気味の口縁部を有す器形である。底部外面には、スダレ状の線刻が施されている。調整は、口縁部外面にヨコナデ、体部外面にヘラケズリを行なっている。内面には、底部付近に放射状、体部から口縁部に横方向のヘラミガキが施され、黒色処理を行なっている。胎土は緻密であり、白色の線状のものが含

第5節 遺構外出土遺物

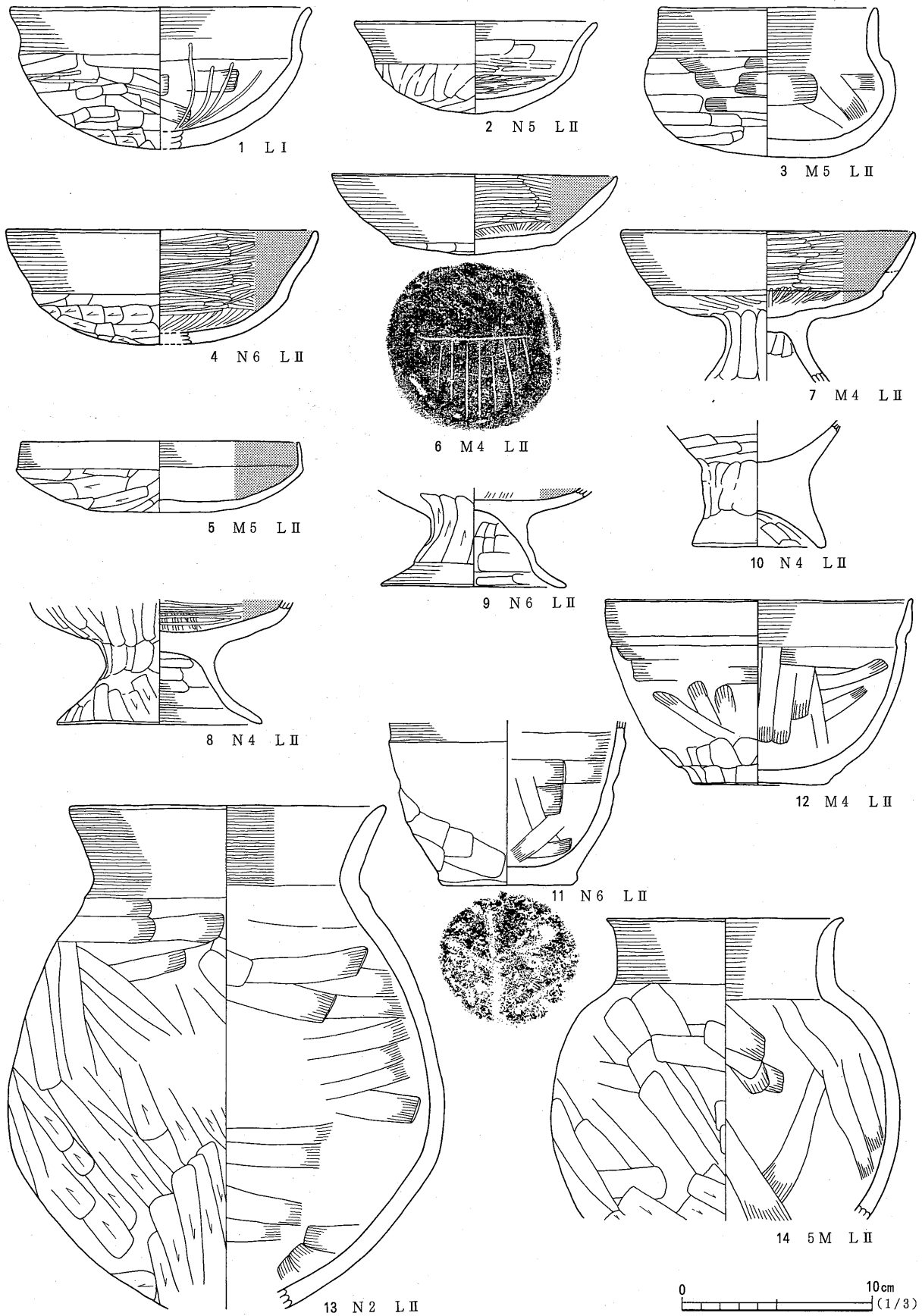


图 133 I区遺構外出土土師器(1)

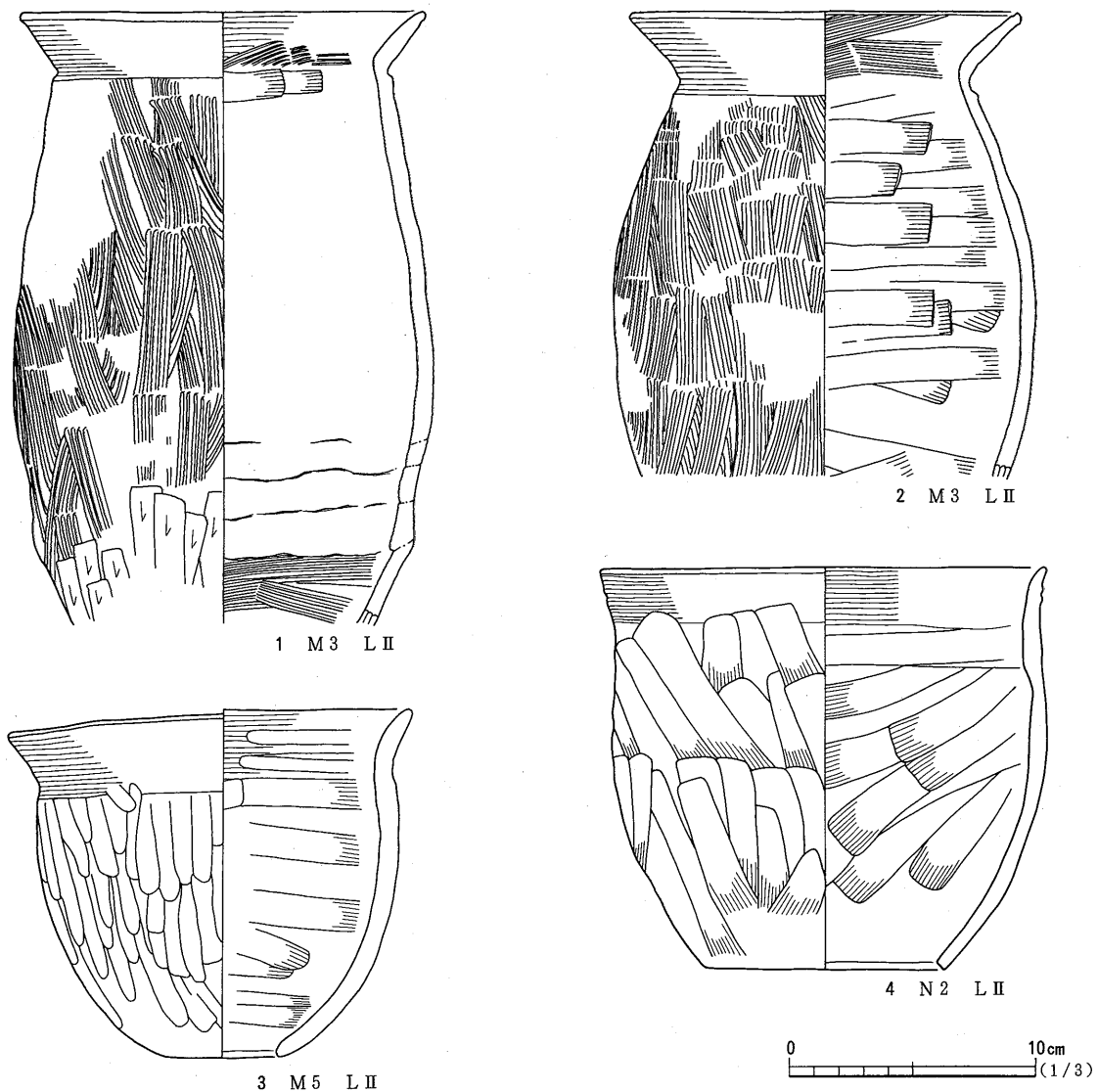


図134 I区遺構外出土土師器(2)

まれている。推定口径 15.1cm, 器高 4.2cmを測る。

図133-7~10は、土師器高杯である。図133-7は、杯部と脚部の一部が遺存する。杯部は、丸底で体部上端に段を持ち、口縁部が外反する器形である。調整は、口縁部外面にヨコナデ、体部外面にヘラケズリを行なっている。内面には、底部付近に放射状、体部から口縁部にかけて横方向のヘラミガキが施され、黒色処理を行なっている。脚部の調整は、外面の杯部と脚部の接合部に縦方向のヘラケズリを行なっている。脚部内面には、ナデツケが認められる。口径 15.5cm, 残存高 7.9cmを測る。図133-8・9は、杯部の一部と脚部が遺存する。杯部の調整は、体部外面はヘラケズリ、体部内面はヘラミガキの後に黒色処理を施している。脚部は、いずれも裾部が大きく開いている。調整は外面にヘラケズリ、内面にヘラナデを行なっている。9は摩滅が著しいが、裾部外面にヨコナデが観察される。胎土には土器焼成時に赤化した粒が含まれている。8は残存高 6.5cm, 底径 10.8cmを測り、9は残存高 5.1cm, 底径 9.8cmを測る。図133-10は、杯部の一部と脚部が遺

存する。図133-8・9に比べ杯部の立ち上がりが急で、脚部は裾部の広がり小さい。杯部の調整は、体部外面に横方向のヘラケズリを行ない、脚部は外面に縦方向のヘラケズリ、内面にヘラナデを行なっている。胎土には、砂粒が多く含まれている。残存高6.7cm、底径7.0cmを測る。

図133-11～14、図134-1・2は、土師器甕である。図133-11・12は、小型の甕で底部から胴部が外傾ぎみに立ち上がり、胴部上端で段を有し、口縁部にいたる器形である。調整は、11が口縁部外面にヨコナデ、胴部外面にヘラケズリを行っている。内面にはヘラナデを施している。12は、口縁部にヨコナデ、胴部外面にヘラナデ後、下端にのみヘラケズリを行い、内面にヘラナデを施している。12の胴部には、火を受けた跡が認められる。11の胎土には、凝灰岩粒が含まれる。11は残存高8.6cm、底径7.3cmを測り、12は口径16.2cm、器高9.7cm、底径7.2cmを測る。

図133-13は、底部を欠損し約7割が遺存する。球状の胴部に最大径を有し、頸部ですばまり口縁部が外傾する器形である。調整は、口縁部内・外面にヨコナデ、胴部外面にヘラナデの後ヘラケズリを行い、胴部内面には、ヘラナデを行なっている。胴部外面の下半には、部分的に黒斑が認められる。口径16.6cm、残存高6.4cmを測る。図133-14は胴部が球状で最大径となり、頸部が狭く口縁部が直に立ち上がり、口端付近で外反する器形である。調整は、口縁部内・外面にヨコナデ、胴部外面にヘラケズリを行い、胴部内面にはヘラナデを行なっている。胴部外面の一部には黒斑と火を受けた跡が認められる。口径12.5cm、残存高15.8cmを測る。

図134-1・2は、いずれも底部付近が欠損している。胴部は長胴の胴部に最大径を持ち、頸部に強い段を有し口縁部が外傾する器形である。調整は、胴部外面にハケメを施し、口縁部外面にヨコナデを行なっている。口縁部内面には、ヨコナデ後ハケメを施し、胴部内面にヘラナデを行なっている。1の胴部下半の外面には、ハケメの後ヘラケズリを行なっている。また、胴部下半の内面には、ハケメに近い工具によるヘラナデが施されている。1は推定口径16.4cm、残存高25.0cmを測り、2は推定口径16.1cm、残存高18.8cmを測る。

図134-3・4は、小型の無底の甑である。3は完形で、4は約8割が遺存する。底部から胴部が丸みを持って立ち上がり、3は頸部で弱い段を有し、口縁部が外傾する器形で、4は頸部で、口縁部がやや外反する器形である。3の調整は、胴部外面に縦方向のヘラケズリ後、口縁部外面にヨコナデを施している。口縁部内面には、ヨコナデ後ヘラナデを施し、胴部内面にヘラナデを施している。4の調整は、口縁部外面にヨコナデ後、胴部外面に縦方向のヘラナデを施している。口縁部内面には、ヨコナデ、胴部内面にヘラナデを施している。3の胴部外面には黒斑が認められ、胎土には土器焼成時に赤化した粒が含まれている。3は口径16.5cm、器高14.1cm、底径5.5cmを測り、4は口径18.2cm、器高16.3cm、底径9.7cmを測る。

以上IV群土器として古墳時代の土器を記述したが、時期としては6世紀前半から7世紀後半のなかに収まるものと考えられ、I区東部で検出された住居跡出土遺物の時期から大きくかけ離れたものはみられない。したがって、ここに示したすべての遺物は、I区東部の集落に関連する遺物とすることができる。

(国井)

石器・石製品・金属器 (図135～138, 写真121)

I区で出土した石器類は、大きく縄文時代に属するとみられる石器類と、古墳時代の石製品類に分類される。その他に、多量の滑石が調査区東半の丘陵上から出土している。

図135-1は、削器ではないかと考えている。黒曜石の縦長剥片を使用し、背面の両側縁と腹面の左側縁に調整が加えられている。図135-2～6, 9は石鏃である。3は有茎, 2・4は凹形, 5・6は平坦な基部を持つ。9は背面に自然面が残りが比較的厚いが、これは厚みを取り除けずに製作を中止したのであろう。図135-7・8は石錐である。石質は7が鉄石英, 8が黒色玉髄である。刃部は両側面から加工され、断面形が菱形に整形されている。錐部の先端は特に鋭利に整形されているが、使用痕は確認できなかった。

図136-1は横長剥片を利用した局部磨製石斧である。背面に敲打痕を加え、特に基部が薄くなるよう整形している。図136-2～8は磨石である。楕円形の偏平な石を使用し、平坦面に擦り痕が、側面に敲打痕が観察されるものが多い。図中では、擦り痕と敲き痕の相違をトーンの違いで表した。図137-1は石核である。あまり規則性を持たず、多方面から剥片を得ようとしている。図137-2は搔器の未成品と考えられる。素材の縁辺に調整加工を加えている。背面の右側縁に特に多くの調整が加えられているが、厚みを取り去ろうとした結果であろう。図137-3も搔器と考えている。横長の剥片を使用し、背面側の側面全体に調整を加えている。

図137-4～6は滑石製の模造品である。4は剣形とみられ、研磨痕はない。5・6は有孔円盤であろう。5は片面に研磨痕がみられ、もう一方は剥落している。6は両面に研磨痕が顕著に残る。

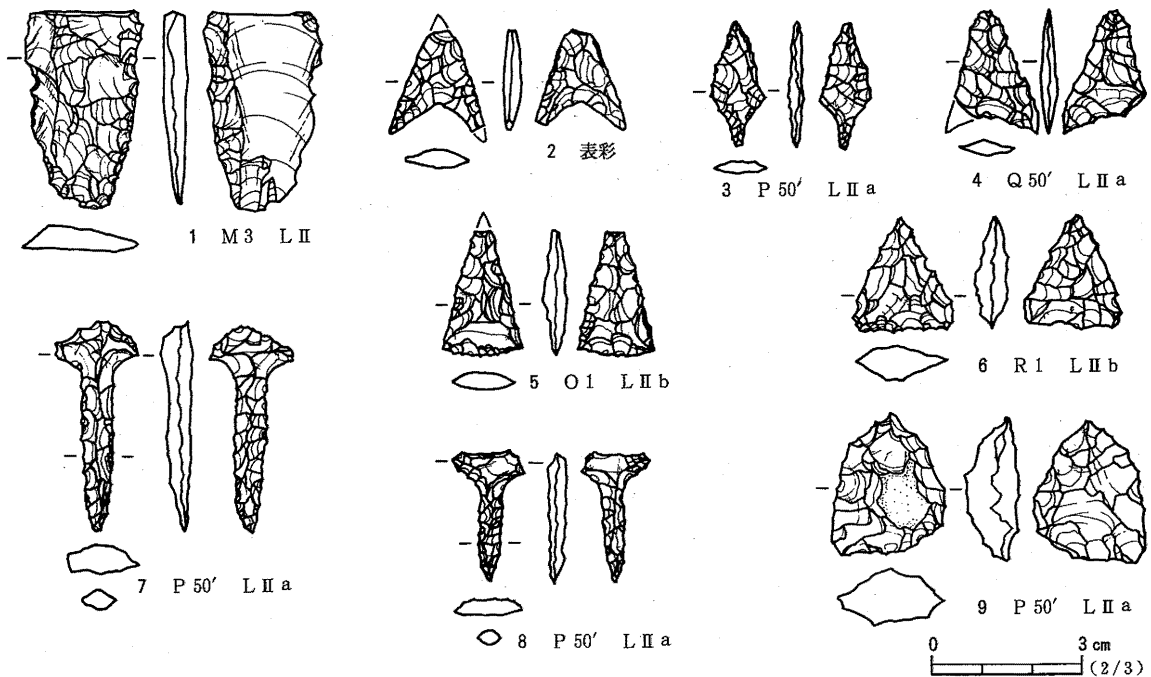


図135 I区遺構外出土石器(1)

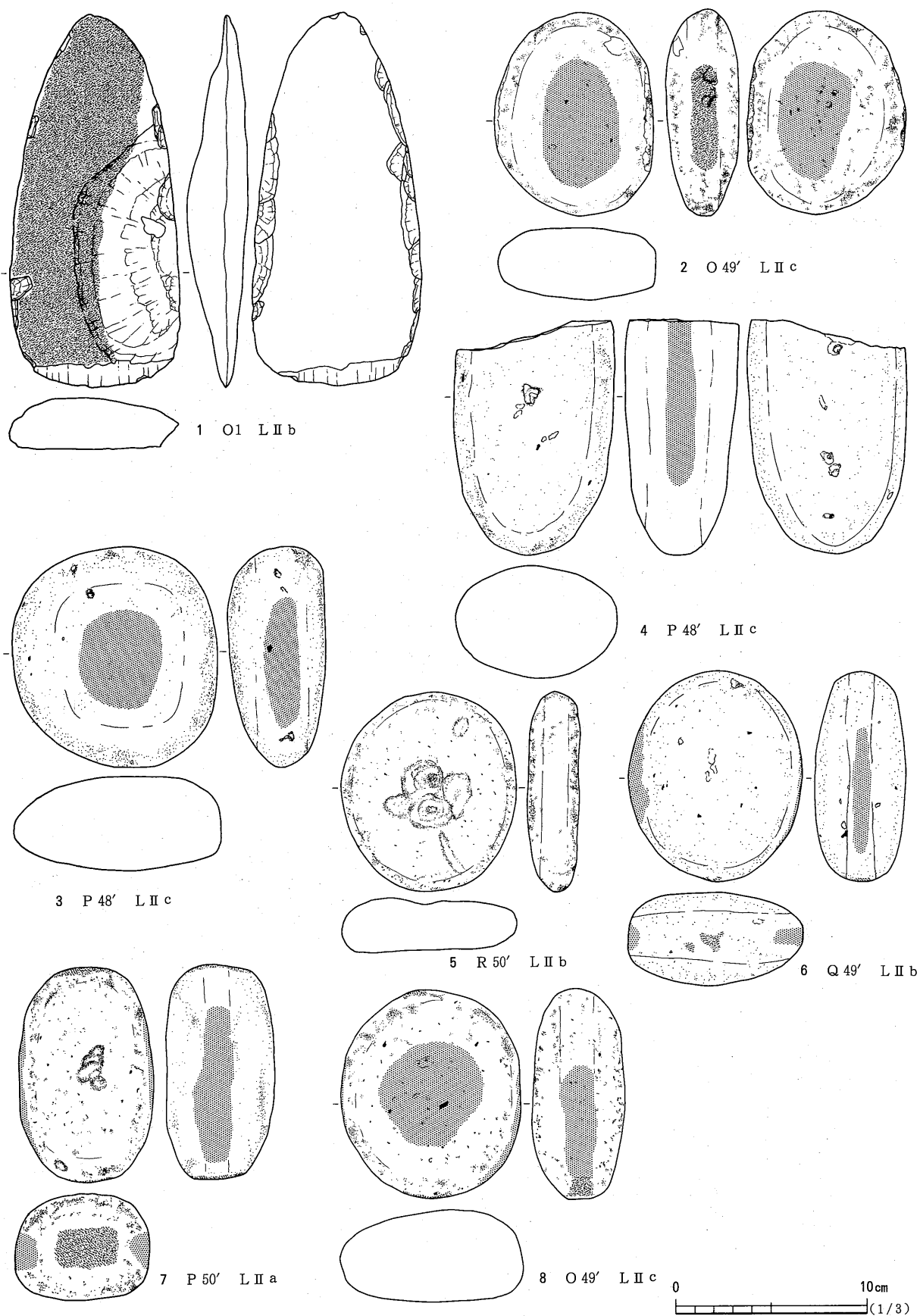


图 136 I区遺構外出土石器(2)

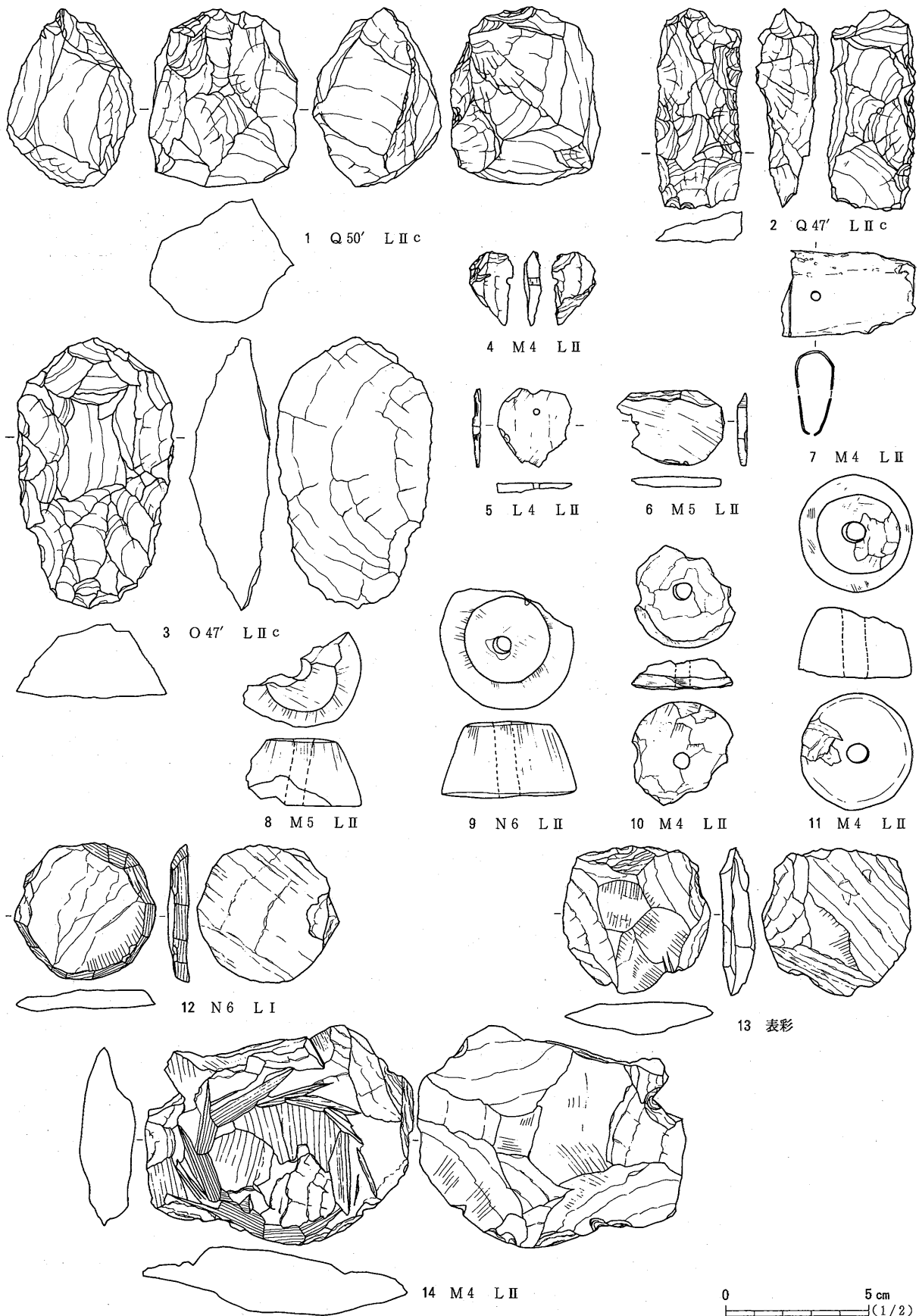


図 137 I区遺構外出土石器・金属製品・石製品

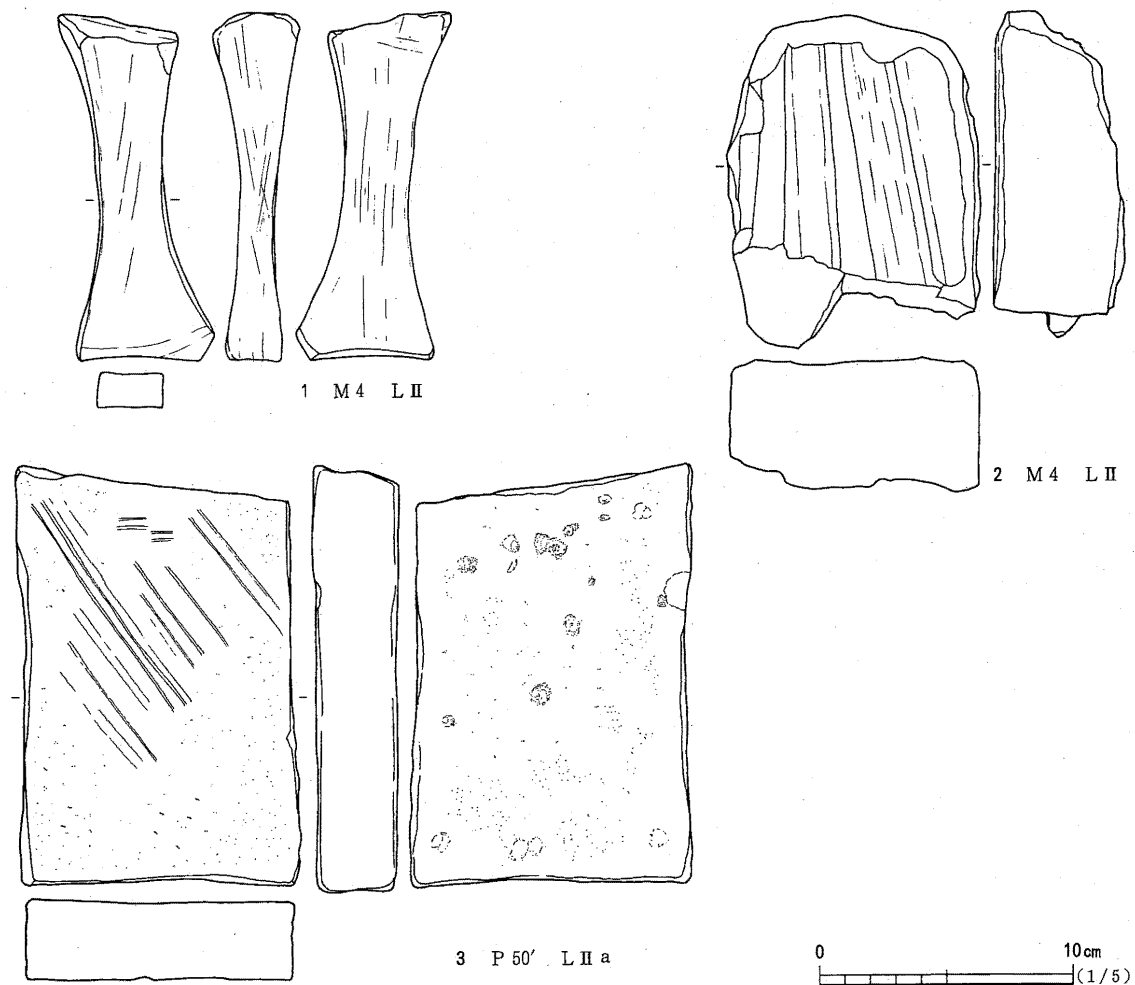


図 138 I区遺構外出土石製品

7は刀等の裝飾金具とみられる。薄い青銅製の材を折り込んで形作っている。側面の対応する位置に、止め具を差し込んだとみられる孔がある。図137-8～11は滑石製の紡錘車である。いずれも中央に孔が穿たれている。8・9の側面は、軸方向に研磨痕が観察される。また上面と下面は一定方向に研磨されている。10は上部が欠損し、側面にのみ横方向の粗い擦痕がみえる。11は入念な面取りが施され、8・9に比し側面が丸味を帯びている。外面には、縦横に細かい擦痕が走っている。図137-12～14は、石製模造品の製作工程がおえる資料と考えている。12は円形にするため、側面が面取りされている。表裏を研磨した痕跡はない。13は面取りもされておらず、12に比して厚い。14は粗く剥がされた剥片に、円形の切り込みが観察される。母材から12のような円盤を切り出そうとしたものと推察される。14は紡錘車の素材である可能性もあるが、製品に比べやや薄い。

図138-1～3は砥石である。1はほぼ全ての面が使用されている。2は、研ぎ痕が1.5～2cm程の幅をもち、その断面が丸味を帯びている。これは、ある程度定形のを研磨した結果であろう。研ぎ痕の幅からみて、あるいは紡錘車を研磨したものかもしれない。3の表面にも、5～8mm幅の溝状の砥ぎ痕が観察される。これも、ある一定の用途をもった砥石と考えている。(今野)

第4章 II区の遺構と遺物

平成7年度におけるII区の調査区域は、東西に長いタタラ山遺跡調査範囲の東端部分にあたり、地形的には丘陵の中位斜面から沢底にかけての範囲である。遺構の分布はI区に比べると稀薄で、丘陵中位斜面に竪穴住居跡2軒と土坑11基が確認されただけであるが、沢部からは多量の縄文土器と弥生土器(遺構外出土遺物)が出土している。遺構番号についてはI区と同様に、II区でも各遺構ごとに1番から始まる番号を付与しているが、今回の調査では平成6年度第1次調査からの継続番号を使用している。

第1節 基本土層 (図139, 写真78)

平成6年度第1次調査報告(常磐自動車道遺跡調査報告4)の第3章第1節では、本調査区が袖玉山層に覆われているため、堆積土が砂質であること、尾根部と沢部では堆積状況が異なること等を記載した。第2次調査区においても、それらの特徴に変わりはないが、今回の調査区は主に沢部にあたるため、その最深部付近である調査区南端の基本土層を図示した。各層の特徴と、遺構・遺物との大まかな関係は以下の通りである。

L I : 木の根を多く含み、しまりのない表土である。調査区全域に広く堆積している。層厚は10～40cmである。

L II a : 調査区内でもこの沢部でのみ見られた堆積土である。上下の層に比べ色調が明るく、尾根部の堆積土であるL IVに類似している。また全体に均質であること等から、土砂崩れなどによって比較的短時間に堆積したものと推察される。層厚は40～70cmを測り、遺物は出土していない。

L II : しまりがなく、炭化物片を少量含んでいる。調査区全域に堆積し、本層からは土師器・弥生土器・縄文土器等が多数出土した。また、主だった遺構の堆積土は本層に類似している。層厚は20～50cmで、沢部の下方ほど厚く堆積している。

L II' : ややしまりがあり、層厚は30～60cmである。調査区全域に広く堆積する。第1次調査区(調査区)内の遺構の大半が、L III及びL IVに掘り込まれていたのに対し、第2次調査で確認された遺構の中には、本層に掘り込まれたものが数基認められる。これは本層が、尾根部の堆積に対し厚く堆積しているためと考えられる。また本層は、縄文時代早期の遺物を多く包含している。

L III : しまりのある褐色砂質シルトで、調査区全域に堆積する。層厚は30～60cmで、本層以下からは遺物が出土しない。(今野)

第2節 竪穴住居跡

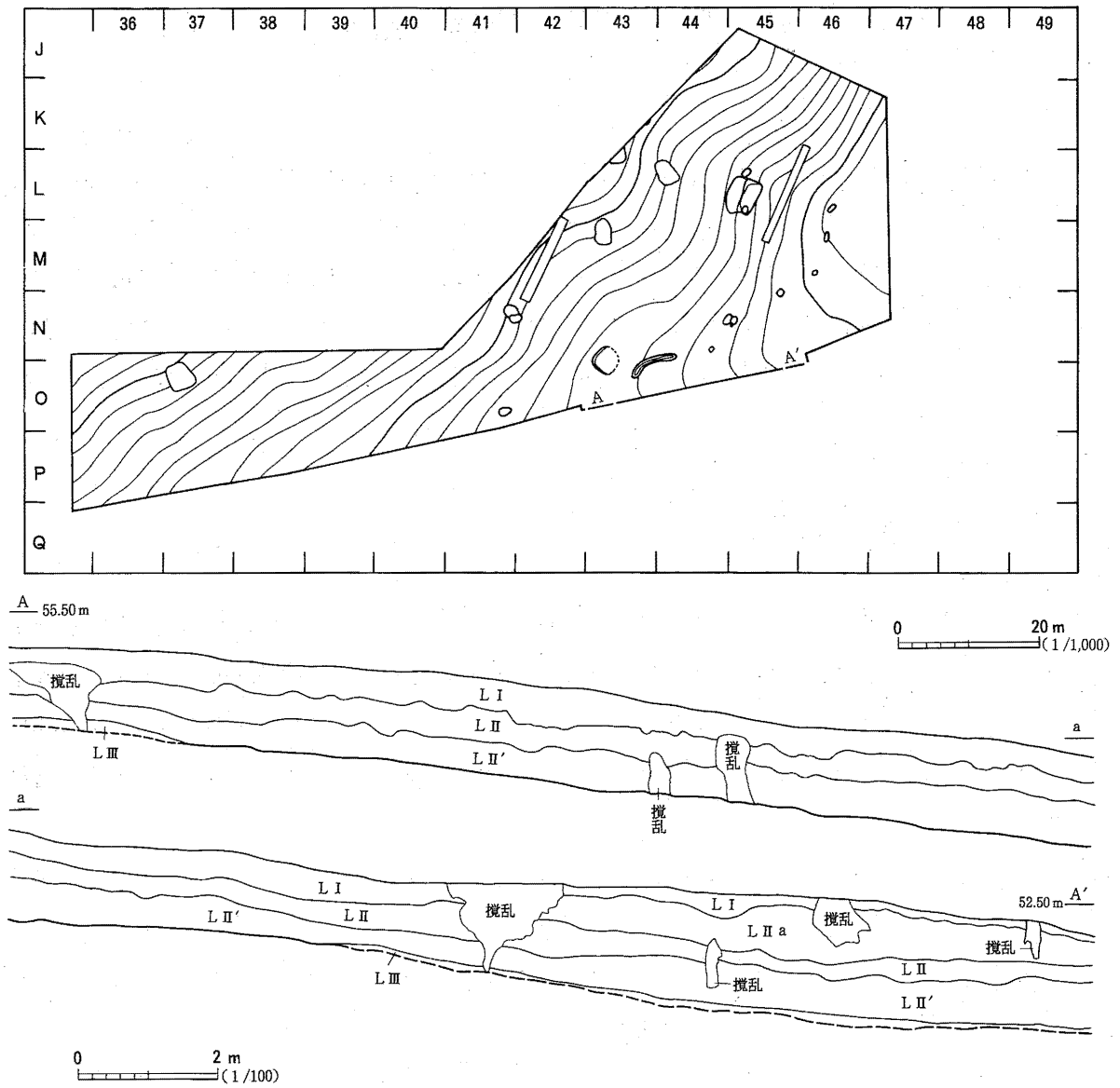


図 139 II区基本土層図

第2節 竪穴住居跡

竪穴住居跡は2軒検出されている。第1次調査では同丘陵の頂部から縄文時代の竪穴状遺構が確認されているが、今回確認されたのは平安時代の住居跡である。遺構番号は第1次調査との関連で3号と6号となっている。

3号住居跡 S I 03

遺 構 (図141, 写真79・80)

L, M45 グリッドに位置している。調査区中央を北東に延びる丘陵斜面に立地し、本住居跡が存

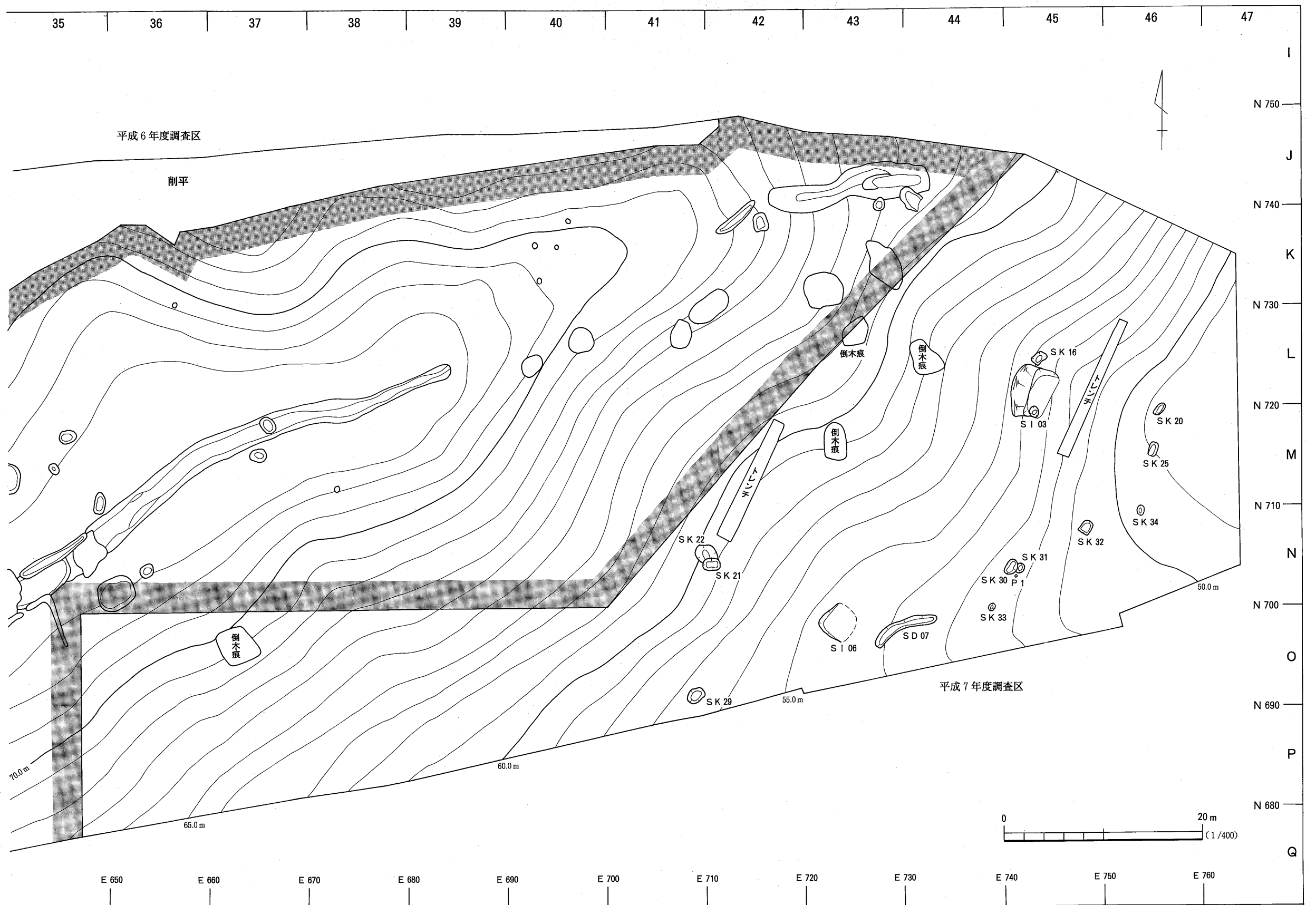


図 140 II区遺構配置図

在する付近は等高線に沿った形で緩斜面になっている。本住居跡と重複する遺構はない。検出面は現表土から20～30cm下のLⅡ'である。検出時の平面規模は約4.2×5mの方形の黒褐色土のプランが明確に観察された。地形的に本住居跡がある斜面の上方は、急斜面であり降雨時など流路となっているせいか複数の溝が深く遺構に刻まれていた。

住居跡はLⅡ'・LⅣを掘り下げて作られており、住居跡内の堆積土は土層断面より3層に分けられる。ℓ1・2は黒褐色土を主として構成されており、ℓ1からは焼石が数点、またℓ2からは土師器片が多量に出土している。ℓ3は住居跡上方の落ち込みと一連の堆積層である。各層ともに堆積状況・土質から自然堆積と考えられる。

検出面から床面までの深さは最大約60cmである。床面は平坦で東側1.4～2mのところまで消失している。LⅡ'・LⅣをそのまま床として使用しているが、貼床は確認できなかった。周壁はほぼ垂直に立ち上がる。緩斜面に作られているために、西壁側が深く、南・北壁側は斜面に沿うように傾斜し、途中から消失している。カマド及び柱穴は床面・住居跡周辺を入念に調査したが検出できなかった。ピットは南西隅から1基検出され、内部から半完形の土師器甕・杯各1個体、須恵器片が出土している。

遺物 (図141・142, 写真122)

本住居跡からは、縄文土器1片、弥生土器268片、土師器235片、須恵器8片などが出土している。この中で完形に近いものを中心に図示したのが図141である。出土層位はℓ2が圧倒的に多く、種別的には弥生・土師器がほとんどである。図141-1～3は土師器の杯である。1は内外両面に黒色処理が施されている。口径11.2cm、底径3.8cm、器高3.6cmを測る。2は口縁の大部分を欠損している。口径は推定で12.6cm、底径5.3cm、器高4.4cmを測る。3は口縁の約半分を欠いている。内面のみに黒色処理が施され、推定口径12.7cm、底径3.8cm、器高4.3cmを測る。1～3とも口径に比して底部が小さく、口縁部がわずかに外反する器形を呈する。また、底面に糸切り痕がみられる。内面の調整をみると、体部に放射状の、口縁部に横方向のヘラミガキが施されている点でも共通している。特徴的なのは、1・2の体部外面下端に幅の狭いあて具痕がみられる点である。4は土師器甕の把手部と思われる。短く上を向く形状を呈し、中実である。5は底部を欠いたロクロ土師器の甕である。口径18.6cm、残存高18.2cmを測る。胴部最大径を胴部の上位に持ち、口縁部が「く」字状に屈曲する器形を呈しており、胴部下端には成形時の指によるオサエが認められる。図142-1は外面にタタキを加えた須恵器の甕片である。破片だが、口径19.4cm、胴部径46.4cmに復元図示した。

縄文・弥生土器は、検出層位・地形を考えると流入した可能性が高い。図141-3の床面から出土した杯や図141-5のピットから出土した甕は本住居跡の年代を比定する上で、重要なものである。

まとめ

本住居跡は地形的に制約された斜面部分に作られたせいか、約5分の3を消失している住居跡である。周辺に直接関連すると思われる他の遺構が存在せず、性格を推し量ることは難しいが、検出

第2節 竪穴住居跡

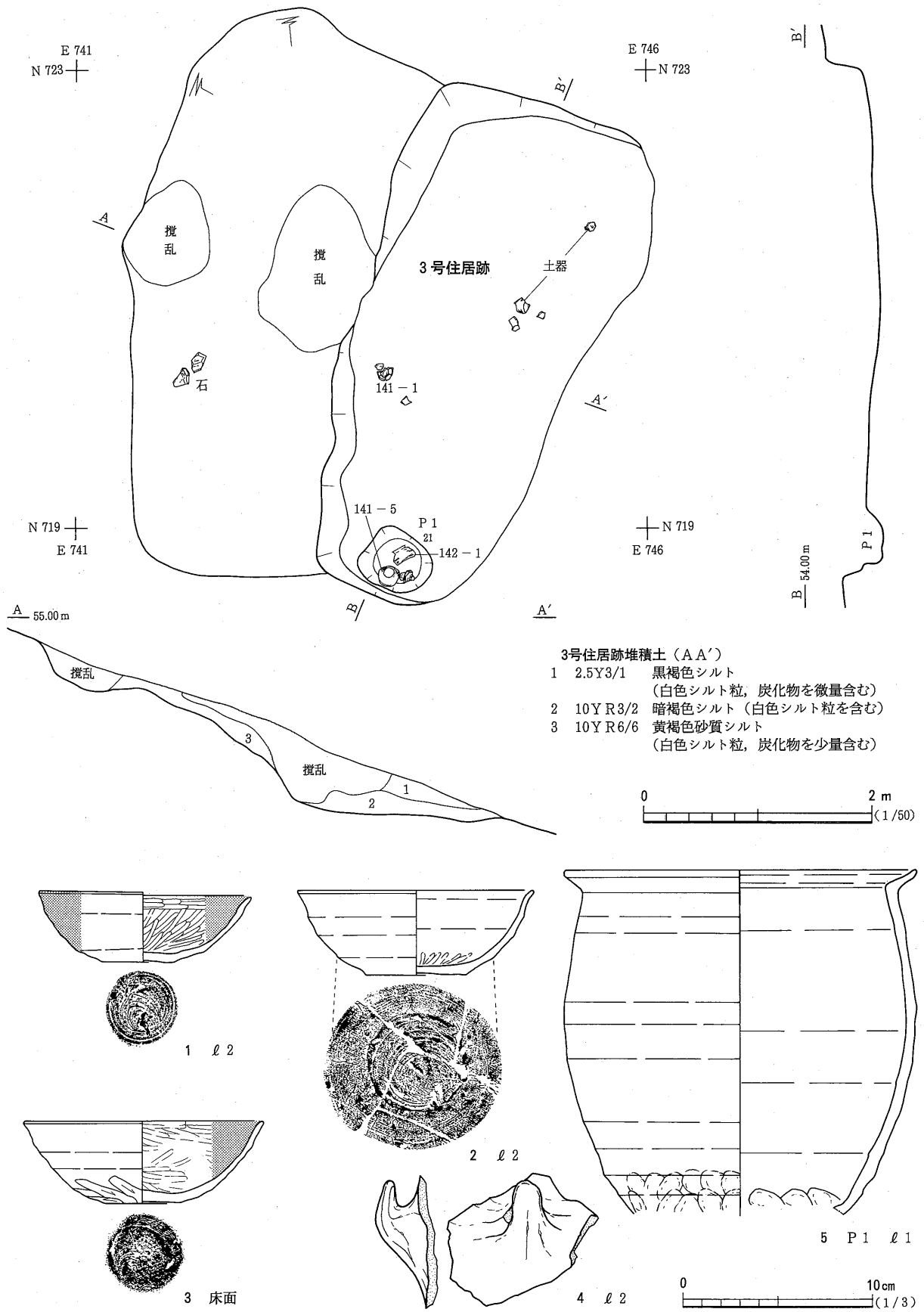


図 141 II区3号住居跡, 出土土師器

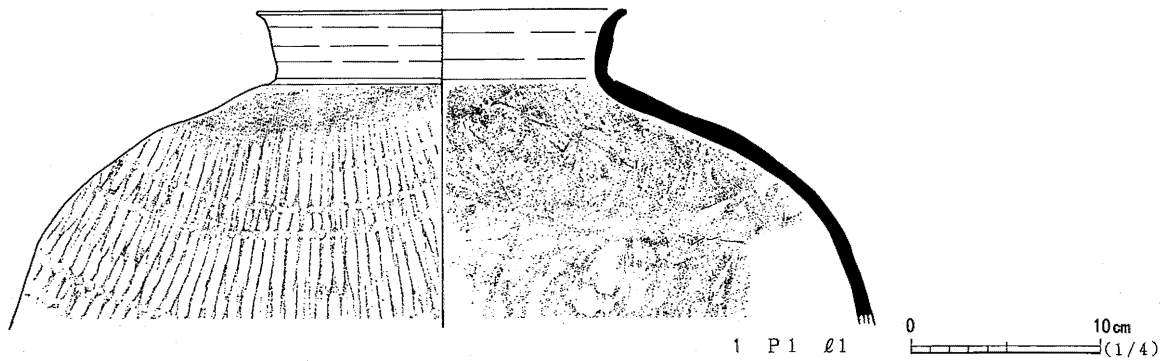


図 142 II区 3号住居跡出土須恵器

時の平面形は調査を進めるうちに変化し、東側に向かって段を持ち、床面は途中から消失していることがわかった。上段の部分の堆積土は、遺構の堆積土に間違いなく、掘り窪めた跡も確認できる。また焼石がこの場所と、床面から出土していることを複合して考えると、住居跡の一連の施設と想定することができる。

一方、この住居跡には柱穴・カマドが検出されていない。柱穴は消失部分にかつて存在した可能性もあるが、カマドは住居の立地条件を加味すると、斜面下方の消失部分にあるのは不自然である。この点と前述の上段部分を複合させると、カマドは石材で、この住居跡の床面と上段の境付近に設けられ、煙道などが上段部に存在したと考えてみたい。出土した遺物の特徴から、本住居跡の機能した時期は10世紀前半と思われる。(木田)

6号住居跡 S I 06

遺 構 (図143, 写真81・82)

本住居跡はO43グリッドのL II'上面で検出した。西から東に下る緩やかな沢部に立地し、本住居跡の東方約5mの地点に7号溝跡が近接する。また、同じ等高線上の30m北東には、3号住居跡がある。掘り込みはL II'の下位に達し、堆積土は斜面の下方に向かってごくなだらかに堆積していることが確認された。大略3層に分層したが、堆積土はいずれもブロック状の土などが見られなかったことから自然流入土と判断した。各層とも炭化物粒を含むが、この炭化物粒は29号土坑などの周囲の木炭焼成土坑から流入した可能性が高い。04は、本住居跡の南東方向に隣接してとらえた、黄褐色砂の淡い広がりである。その広がり直径2.2m、深さは最大10cmほどで明確なプランを持たない。立ち上がりはごく緩やかで判然とせず、周壁も確認できなかった。以上のような状態から、この黄褐色土は6号住居跡を構築した際の排土の可能性もあるとみて、図中にその範囲を示した。

本住居跡の南東壁・北東壁は検出段階ですでに消失していたが、全体の平面形は方形と思われる。遺存する北西壁の方位はN38°Eを指す。北西壁の長さは3.0m、南西壁の残存長は2.5mを測る。周壁は緩やかに立ち上がり、最も残りの良い北西壁の高さは30cmを測る。床面はおおむね平坦で、

第2節 竪穴住居跡

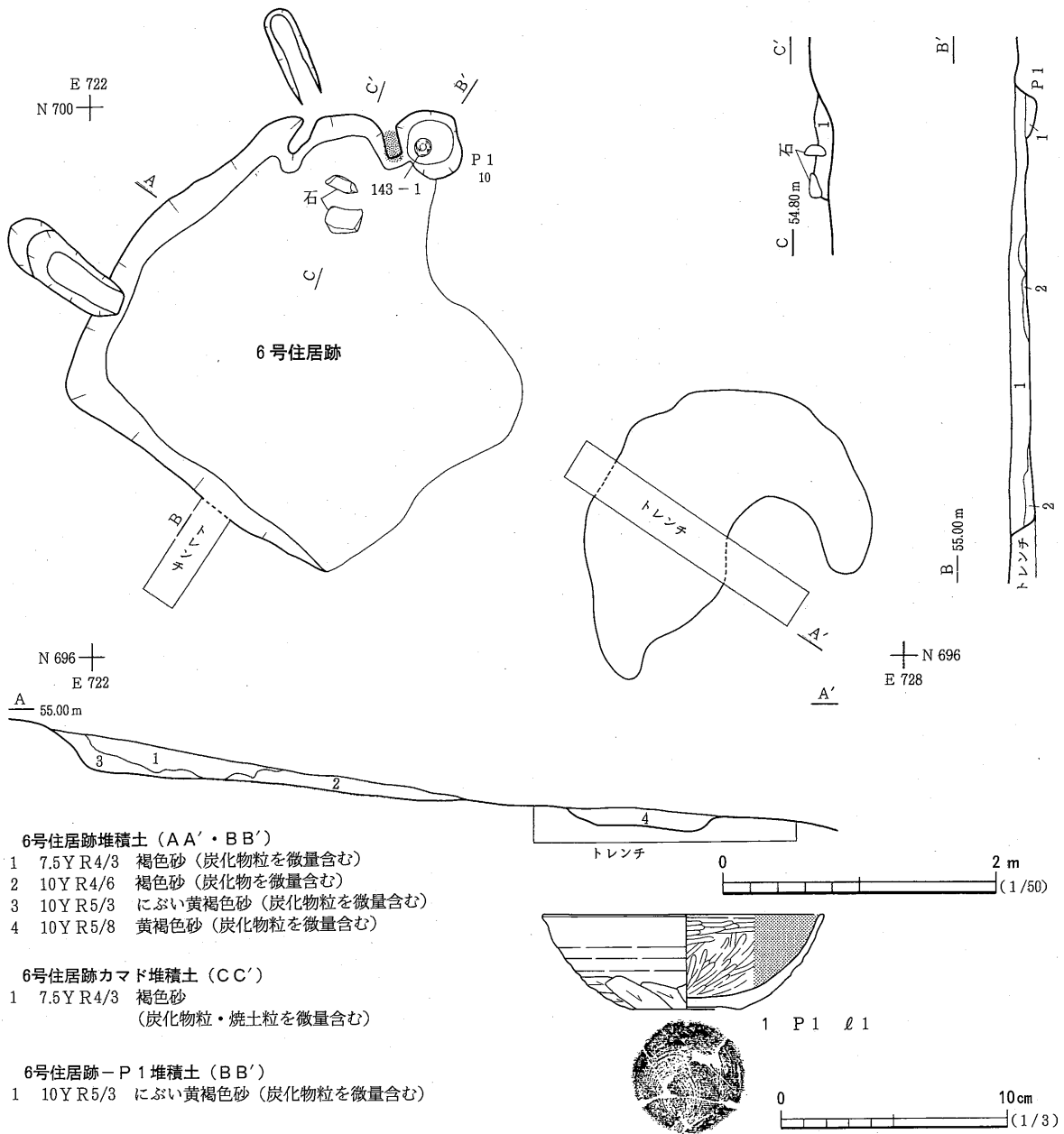


図143 II区6号住居跡，出土土師器

東にごく緩やかに傾斜している。貼床が敷設された形跡は認められず，顕著な踏み締まりも見られなかったが，周囲と若干色調が異なったためその範囲を図示した。なお，付属施設としてカマド2基とピット1基を検出した。

カマドは，北隅と北西壁の南寄りに設置されている。北隅のカマドはLⅡ'を掘り残して袖部の基礎とし，裾部が短く「ハ」字状に開く形状を呈している。右袖基部の上には粘性の高いブロック状の土があり，これは袖部の構築土である可能性が高い。燃焼部の奥行きは38cm，幅70cmである。煙道部の長さは84cm，幅25cm，深さ8cmで，その上部は削平されたものとみられる。燃焼部底面や袖部に被熱して赤く変色した部分は見られなかったが，燃焼部内の堆積土にはわずかながら焼土

が含まれていた。また、カマド周辺の床面にも焼土が散在していた。カマドの前には二つの大きな礫がみられたが、これがカマドの構築材であったかは、堆積土中からの出土であるため判然としない。

北西壁のカマドは、煙道部のみが遺存している。煙道は長さ100cm・幅35cm・深さ20cmで被熱した箇所は見られなかった。燃焼部や袖部の痕跡がまったくないため、北隅のカマドが構築される以前に使用されていたものと推察される。

壁溝及び柱穴と判断できるものは、検出作業を行ったが確認できなかったが、カマドの右袖に隣接するピット1基が確認された。P1は直径54cm、深さ10cmの円形を呈し、その中から図143-1の杯が伏せられた状態で出土している。P1は小穴のため貯蔵穴である可能性は低いが、器物を仮置く場であった可能性もある。

遺物 (図143, 写真122)

本遺構からは縄文土器8片、弥生土器10片、土師器106片、石器類6点などが出土しているが、細片のため図示できたのは図143-1のみである。1はロクロ土師器の杯で、口径12.4cm、底径4.8cm、器高4.2cmを測る。口径に比べ底径が小さく、口縁部が緩く外反する器形を呈する。底部に回転糸切り痕が残る。調整は体部外面の下端に手持ちヘラケズリが施されている。内面は黒色処理が施された後、ヘラミガキ調整を行っている。ミガキの方向は体部が放射状、口縁部が横方向である。

まとめ

図143-1は遺構に伴う可能性が高い遺物である。この遺物の年代観によれば本遺構の機能した時期は、10世紀前半と考えられる。同じ沢部に立地し、同時期の遺物を出土している3号住居跡や、周辺の木炭焼成土坑との関連が推察される。 (今野)

第3節 土 坑

16号土坑 SK16

遺 構 (図144)

L45グリッドに位置する。調査区中央を北東に延びる丘陵斜面に立地し、本土坑付近はやや緩斜面になっている。検出時の平面形は隅丸方形を呈し、周囲の土色と比較して明らかに異なる黒褐色のプランが観察された。

土坑はLII'を掘り下げて作られており、堆積土は土層断面より2層に分けられる。ℓ1は黒褐色土を主として構成されており、上層には炭化物の混入が観察できる。ℓ2はLII'の土質に類似しており、土の締まり具合によって分層した。各層ともに堆積状況・土質から自然堆積と考えられる。検出面から最深底部までの深さは43cmを測る。底面は鍋底状を呈し、壁面は滑らかであり、緩やかに開口部に向かって立ち上がる。長軸方向はN45°Eである。

まとめ

本土坑は地形的に制約された斜面部分に作られたせい、上部が流失している土坑跡である。出

第3節 土 坑

土遺物はなく、性格を推し量ることは難しいが、周辺に3号住居跡のみ存在することから、本土坑は3号住居跡と同じ時期になんらかの施設として使用されたと想定することができる。(木 田)

20号土坑 SK 20

遺 構 (図144)

M46グリッドのLⅡ'上面で検出された土坑である。沢の最深部に立地し、木炭焼成土坑と判断された25号土坑から、北方約3mの位置にある。遺構内の堆積土は2層からなる。ℓ1は炭化物の細粒が多量に混じった土で、焼土ブロックも確認された。ℓ2には炭化物の細粒とともにLⅡ'が多く入っている。

本遺構は長軸が斜面の傾斜に対して直交する隅丸長方形を呈する。長軸126cm、短軸68cmの平面規模を有する。遺構検出面から底面最深部までの深さは40cmである。周壁は緩やかに立ち上がっているが、砂層に掘り込まれた遺構であるため、本来は調査時より急峻であったと推察される。底面には2つのくぼみがあり、縦断面形はそれぞれのくぼみにむかって漏斗のようにすぼまる「W」の形を呈している。

ま と め

堆積土中から炭化物が多量に出土しているが、その底面形態からみて木炭焼成土坑の可能性は低く、本遺構の性格は明らかにできなかった。本遺構からの出土遺物はなく、遺構の年代も不明であるが、近隣で木炭が焼成されていた時代には開口していたとみられることから、奈良・平安時代頃と考えられる。(今 野)

21号土坑 SK 21

遺 構 (図144)

N42グリッドの南東向きの斜面で検出された土坑で、検出面はLⅣ上面である。22号土坑と重複し、本遺構の方が新しい。遺構内の堆積土は大略1層である。木炭とみられる炭化物の細粒を多量に含んでいるが、原材の形状をとどめているものは出土しなかった。

遺構の平面形は隅丸長方形を呈し、長軸138cm、短軸112cmの平面規模を有する。遺構検出面から底面最深部までの深さは61cmである。底面は中央に向かって緩やかにくぼんでいる。周壁は斜面下側で著しく遺存状態が悪く、残存高は2～40cmである。残りの良い北壁を見る限り急角度で立ち上がっている。壁面に被熱した箇所は確認できなかった。

ま と め

土坑内で火を使用した痕跡が見られなかったが、規模や堆積土中に炭化物を含む点が、木炭焼成土坑とした29号土坑などに類似している。このことを重視すれば同様の性格をもった遺構の可能性が高い。本遺構からの出土遺物はなく遺構の年代も不明であるが、推定される性格からすると奈良・平安時代頃と考えたい。(今 野)

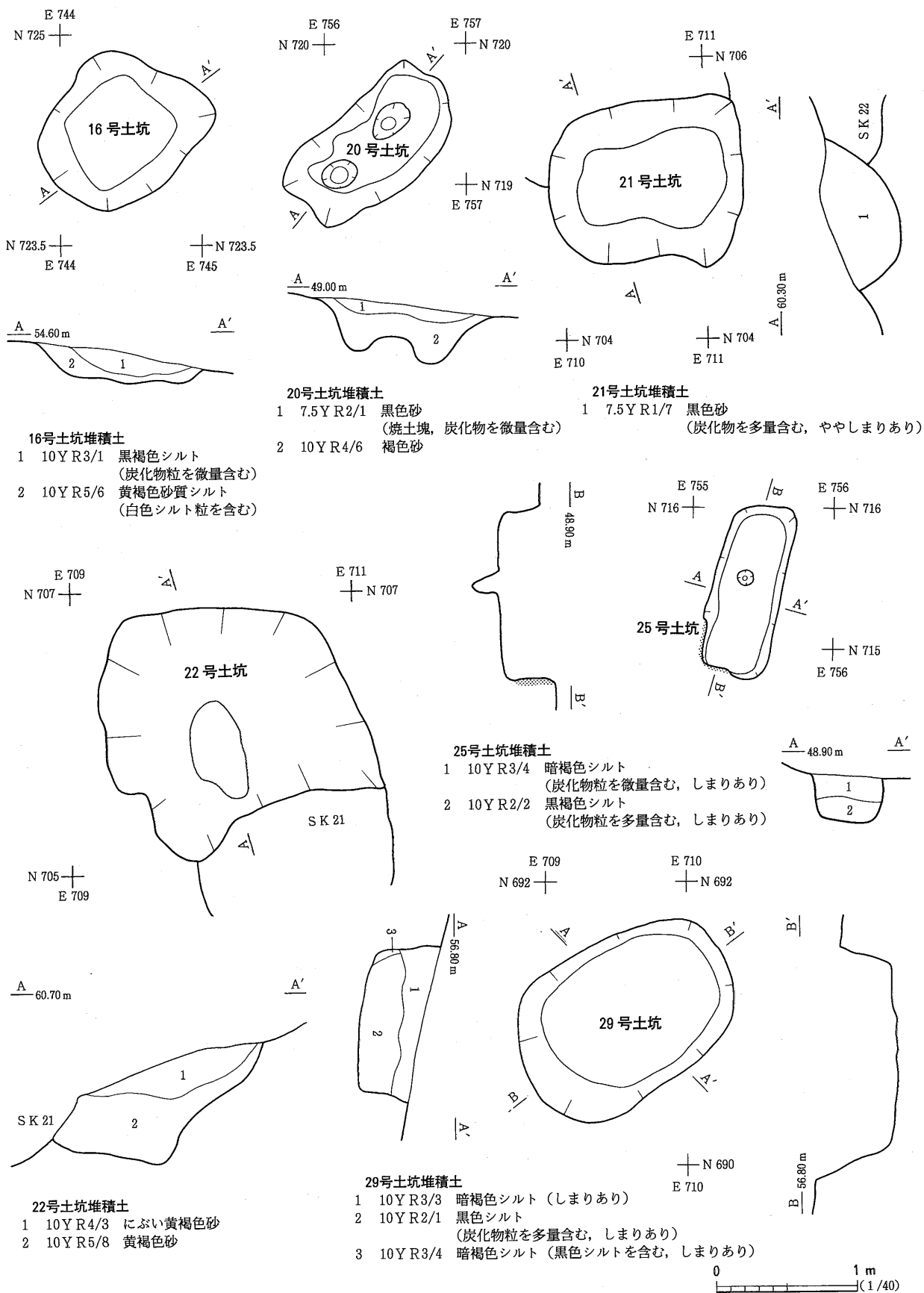


図 144 II区 16・20～22・25・29号土坑

22号土坑 SK 22

遺 構 (図144)

N42 グリッドで21号土坑と重複して検出された土坑である。土層の観察から、本遺構の方が古いことが確認された。遺構内の堆積土は2層に分かれる。ℓ1・2ともLⅢに近似した色調で、炭化物片などは確認できなかった。斜面上方から流れ込んだように緩やかに堆積しているため、自然堆積土と判断した。

遺構の平面形は不整形を呈している。西寄りの周壁が21号土坑によって破壊されているため本来の規模は分からないが、遺存部で長軸180cm、短軸162cmを測る。遺構検出面から底面最深部までの深さは89cmである。底面は長軸72cm、短軸38cmの小さな楕円形を呈し、周壁は緩やかに立ち上がっている。

ま と め

遺構に伴う遺物はなく、その性格・年代とも不明である。 (今 野)

25号土坑 SK 25

遺 構 (図144, 写真83)

M46 グリッドで検出された土坑である。検出面はLⅡ'上面である。本遺構の北東方向2.4cmに20号土坑が、南西方向8.8mに32号土坑が近接し、軸線を揃えている。遺構内の堆積土は2層からなる。ℓ1は炭化物粒を微量に含むが地山に近い。ℓ2は炭化物の細粒がびっしりと詰まった堆積土で水平に堆積していることから人為堆積土の可能性が高い。後述するように周壁が崩落していることから、遺構廃棄後ある程度時間をおいてから埋め戻されたのであろう。

遺構は整った隅丸長方形を呈し、長軸118cm、短軸34cmの平面規模を有する。遺構検出面から底面最深部までの深さは34cmである。周壁の残存高は17～32cmと浅い。周壁の南西隅が赤く変色し、内部で火を使用した様子がうかがわれる。周壁はほぼ垂直に立つが、特に被熱した箇所ではオーバーハング気味である。本来は周壁全体が焼け、オーバーハング気味であったものが、一部を残して崩落したのであろう。底面は平坦に整形され、中央に小ピットがある。ピットは直径12cmの円形で深さは18cmである。このピットの性格については明らかにできなかった。

ま と め

堆積土や形態、壁面が被熱していることからみて木炭焼成土坑の可能性が高い。遺構に伴う遺物はなく、遺構の年代は不明であるが、奈良から平安時代頃の所産と考えたい。 (山 崎)

29号土坑 SK 29

遺 構 (図144, 写真83)

本遺構はO41 グリッドに位置し、東方13.6mに6号住居跡が近接する。検出面はLⅡ'上面であ

る。堆積土は3層に分層された。遺構の下半に堆積しているℓ1は色調からみて自然堆積土と判断された。ℓ2は炭化物粒を多量に含み、水平に堆積していることから人為堆積土の可能性が高い。ℓ3は周壁からの崩落土とみられる。このような堆積状況は25号土坑とよく似ている。

遺構の平面形は隅丸の長方形を呈し、長軸162cm、短軸108cmの平面規模を有する。底面は平坦に整形され、周壁はほぼ垂直に立つ。周壁の残存高は22～57cmで、斜面下方にあたる東壁の残りが悪い。周壁に赤く変色した箇所は確認できなかった。

ま と め

堆積土や形態からみて、木炭焼成土坑の可能性が高い。周壁に被熱した箇所がなかったため根拠には乏しいが、遺構が掘り込まれたLⅡ'が砂質であるため、壁の表面が崩落したのであろう。遺構に伴う遺物はなく、遺構の年代は不明であるが、形態や状態から奈良～平安時代頃の所産と考えたい。

(山 崎)

30号土坑 SK30

遺 構 (図145, 写真84)

本遺構はN45グリッドに位置する。遺構周辺のLⅡは、炭化物粒によって黒く変色していた。この黒色土を精査しながら下げた結果、LⅡ'上面で本遺構を検出した。31号土坑と重複し、本遺構の方が新しいとみられる。堆積土は4層に分層され、いずれも自然堆積土と判断された。ℓ1は斜面上方からの流入土、ℓ3は壁からの崩落土であろう。ℓ2・4からは、原材の形はわからないものの木炭が出土している。

遺構の平面形は隅丸の長方形を呈し、長軸192cm、短軸136cmの平面規模を有する。周壁は緩やかに立ち上がり、残存高は7～18cmと極めて低い。底面に凹凸はないが、斜面と同方向に傾斜している。

ま と め

堆積土は木炭焼成土坑のものと近似しているが、本調査区と同種の遺構と比べると規模が大きい。そのため、その可能性は低い。掘り込みも浅いため、何らかの目的で斜面を平坦に整地したものと考えられている。遺物が出土していないため遺構の年代は不明であるが、堆積土と重複関係から判断して奈良・平安時代頃の所産と考えたい。

(今 野)

31号土坑 SK31

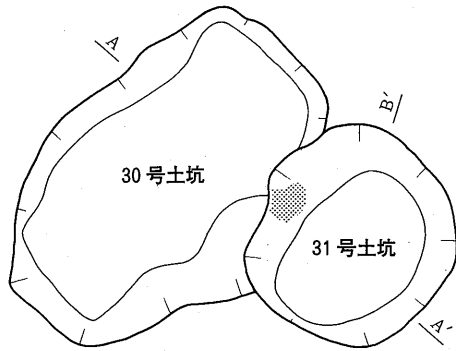
遺 構 (図145, 写真84)

N45グリッドのLⅡ'上面で検出された土坑である。30号土坑と重複し、本遺構の方が古い。遺構内の堆積土は2層からなる。ℓ1は炭化物の細粒が密に詰まった堆積土だが、自然堆積土か否かは判断できなかった。ℓ2は周壁際になだらかに堆積しているため、壁からの崩落土であろう。

遺構は隅丸長方形を呈し、長軸112cm、短軸106cmの平面規模を有する。底面はおおむね平坦だ

第3節 土 坑

E 740
N 705



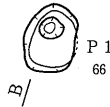
30号土坑堆積土

- 1 10Y R4/3 にぶい黄褐色砂
- 2 10Y R2/1 黒色砂 (炭化物粒を多量含む)
- 3 10Y R5/4 にぶい黄褐色砂 (壁崩落土, 黒色砂質シルトを少量含む)
- 4 10Y R4/4 褐色砂 (黒色砂質シルトを多量含む)

31号土坑堆積土

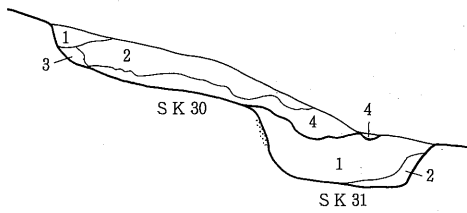
- 1 10Y R2/1 黒色砂 (炭化物粒・焼土粒を微量含む)
- 2 10Y R4/4 褐色砂 (黒色砂質シルトを少量含む)

N 703
E 740

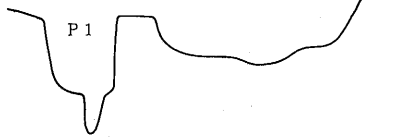


N 703
E 743

A 53.00 m



B 52.30 m

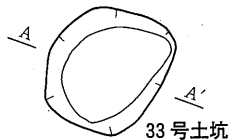


E 738
N 700

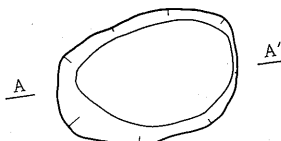
E 739
N 700

E 753
N 710

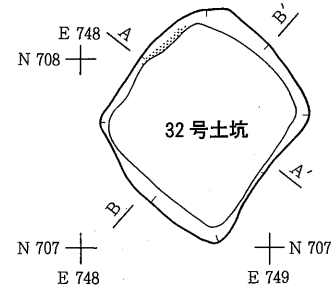
E 754
N 710



N 699
E 738

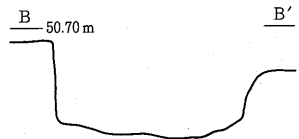


34号土坑



32号土坑堆積土

- 1 10Y R4/4 褐色砂 (炭化物粒を微量含む)
- 2 10Y R2/1 黒色砂 (炭化物粒を多量含む)



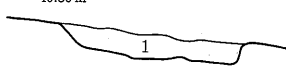
33号土坑堆積土

- 1 7.5Y2/1 黒色砂 (暗黄褐色砂質シルト塊を少量含む, 炭化物細片を微量含む)
- 2 10Y R4/3 にぶい黄褐色砂 (炭化物細片を微量含む)

A 52.60 m



A 49.80 m



34号土坑堆積土

- 1 10Y R2/3 黒褐色砂質シルト

N 708
E 754

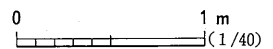


図 145 II区 30 ~ 34号土坑

が、中央が若干くぼむ形状を呈している。遺構検出面から底面最深部までの深さは49cmである。周壁の残存高は22～32cmで、急峻に立ち上がる。北西壁に被熱して赤く変色した箇所が遺存していた。なお、本遺構の南隅から20cm程離れた場所に、ピットを1基確認した。ピットは長軸32cmの円形で、深さは66cmである。ピット内にさらに直径10cmの小穴を持ち、全体に黒色砂が堆積していた。このピットが本遺構に伴うものか不明であるが、堆積土が近似していることから同時期に開口していたものと判断される。

遺物

ℓ2から弥生土器1片が出土しているが、細片のため図示できなかった。

まとめ

堆積土や形態、周壁に焼け面があることからみて木炭焼成土坑の可能性が高い。遺構に伴う遺物はなく、遺構の年代は不明であるが、奈良から平安時代頃の所産と考えたい。(今野)

32号土坑 SK32

遺構 (図145, 写真84)

N45グリッドのLⅡ'上面で検出された土坑である。本遺構の北東方向8.8mに32号土坑が、南西方向6.4mには30・31号土坑が近接し、ほぼ軸線を揃えている。遺構内の堆積土は2層からなる。ℓ1はLⅡに近似した土である。ℓ2は炭化物の細粒を多量に含み、原形を止めないものの木炭も含んでいる。堆積土はレンズ状に堆積していることから自然堆積土の可能性が高い。

遺構は整った方形を呈し、長軸102cm、短軸86cmの平面規模を有する。周壁の残存高は28～40cmでほぼ垂直に立ち、東壁の一部に焼け面が遺存していた。底面には細かい凹凸があり、中央付近が窪んでいる。遺構検出面から底面最深部までの深さは52cmである。

まとめ

堆積土や形態、壁面が被熱していることからみて木炭焼成土坑の可能性が高い。遺物が出土していないため遺構の年代は不明であるが、奈良から平安時代頃の所産と考えている。(今野)

33号土坑 SK33

遺構 (図145)

本土坑は、O44グリッドのLⅡ'で検出されている。他の遺構との重複はない。遺構内堆積土は2つに分層される。ℓ1は黄褐色砂のブロックと木炭とみられる炭化物片を含み、人為堆積土の可能性が高い。ℓ2も同様の炭化物片を含んでいる。遺構の平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸72cm、短軸60cmを測る。検出面から底面最深部までの深さは18cmを測る。底面は碗状になっており、壁は比較的緩やかに立ち上がっている。

遺物

ℓ1から弥生土器片1片が出土しているが、細片のため図示しなかった。

第4節 溝 跡

ま と め

ℓ 1・2 ともに堆積土内に炭化物片を含み、木炭焼成土坑の可能性も考えられる。所属時期は遺構に伴う遺物がないことから明確にできないが、奈良・平安時代頃と考えたい。出土遺物は埋没過程で流入したものと判断される。(渡 辺)

34号土坑 SK 34

遺 構 (図145)

本土坑は、N46グリッドのLⅡ'で検出されている。他の遺構との重複はない。遺構内堆積土は単層でLⅡを基調とし、炭化物粒を含んでいるが、人為堆積土か否かは判然としなかった。

遺構の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸96cm、短軸66cmを測る。検出面から底面最深部までの深さは24cmを測る。底面は平坦で、壁は西側が急に東側が緩やかに立ち上がっている。

遺 物

弥生土器3片が出土しているが、細片のため割愛した。

ま と め

本遺構の堆積土中には炭化物粒が混入しているため、近隣で木炭が焼成された時期には、本遺構は開口していたと推定される。よって本遺構の年代は奈良・平安時代頃と考えられる。その性格については明らかにできなかった。(渡 辺)

第4節 溝 跡

7号溝跡 SD 07

遺 構 (図146)

O43・44グリッドのLⅢ上面で検出した溝跡である。沢部の底辺近くに立地し、斜面に沿うように東西に伸びる。重複する遺構はないが、西方2.4mに6号住居跡が近接する。堆積土は2層に分かれたが、いずれもLⅡに近似する。レンズ状の堆積を成すため自然堆積土と考えられる。ℓ 1は木炭の細片を含んでいた。

全長6.9m、幅70～125cmの平面規模を持つ。西端から北東に約2m走り、「く」の字に折れて東に5mほど走る。検出面からの深さは最大で30cmで、壁は緩やかに立ち上がる。底面の西端と東端の比高差は147cmである。

遺 物

ℓ 2から弥生土器の細片が1点出土しているが、割愛した。

ま と め

遺構の性格と年代は明らかにできなかった。ただ木炭片が出土していることから、近隣の木炭焼成土坑が営まれた時期には、埋まりきっていなかったと推察される。沢部は堆積の速度が比較的に早

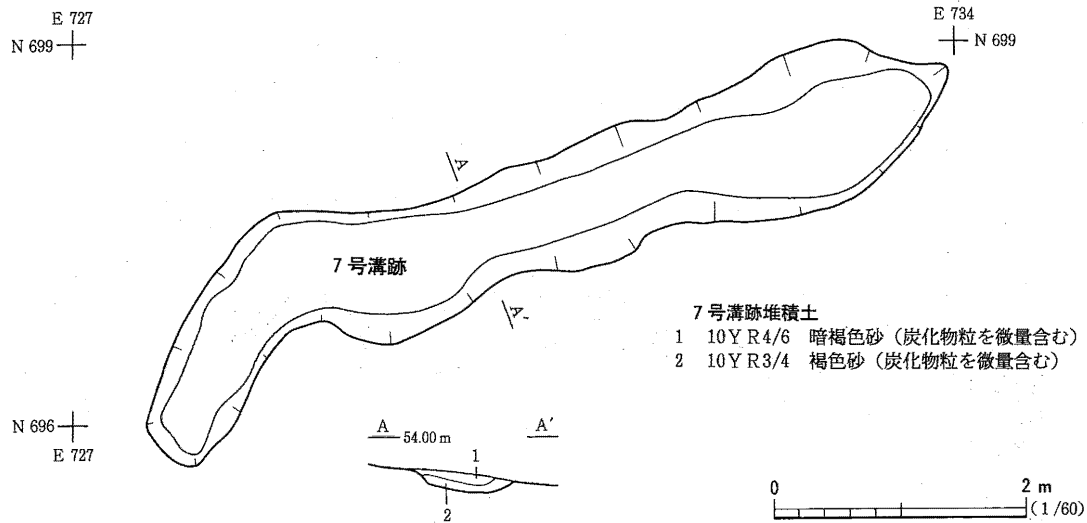


図 146 II区 7号溝跡

いため、遺構の所属時期はおおむね奈良・平安時代とみている。

(今野)

第5節 遺構外出土遺物

今回の調査では遺構外から縄文土器 1,437 片、弥生土器 5,441 片、土師器 158 片、須恵器 3 片、陶器 3 片、石器類 52 点、羽口 1 片、鉄滓約 1.0kg などが出土している。弥生土器・土師器が L II から、縄文土器が L II と L II' から主に出土している状況は、1 次調査と変わるところがない。

縄文土器・弥生土器・土師器の出土分布を図 147 に示した。縄文土器は、O36～38 グリッドや N45・46 グリッドといった沢の深部から集中的に出土している。沢部には該期の遺構がないため、土器などを投棄した場であったと推察される。また、この沢部は調査中において湧水が絶えることがなかったことから水場として活用され、その際土器が破損・遺棄されるようなこともあったのではないかと推察される。

弥生土器は調査区のほぼ全域から出土し、沢の深部からは特に集中的に出土している。今回の調査でも、弥生時代の遺構は検出されなかった。また調査区のほとんどが急勾配で、該期の遺構があった可能性は低い。このため遺物は尾根部付近から土砂とともに流出、堆積したものであろう。

土師器は、L～N45 グリッドからまとまって出土している。L45 グリッドには 3 号住居跡が、N・O43 グリッドには 6 号住居跡があり、その周辺には木炭焼成土坑も点在している。これらの遺構の位置と土師器の出土地点はおおむね重なっている。このため遺構外出土土師器は、住居跡を主とした遺構で使用されたものが遺棄または廃棄された可能性が高い。

以下では、時代・種別ごとに図示した遺物について詳述していくが、出土遺物の主体を占める縄文土器と弥生土器については 1 次報告に準じて次のような細分基準を設けた。II 群 1・6 類は 2 次調査では出土していない。

第5節 遺構外出土遺物

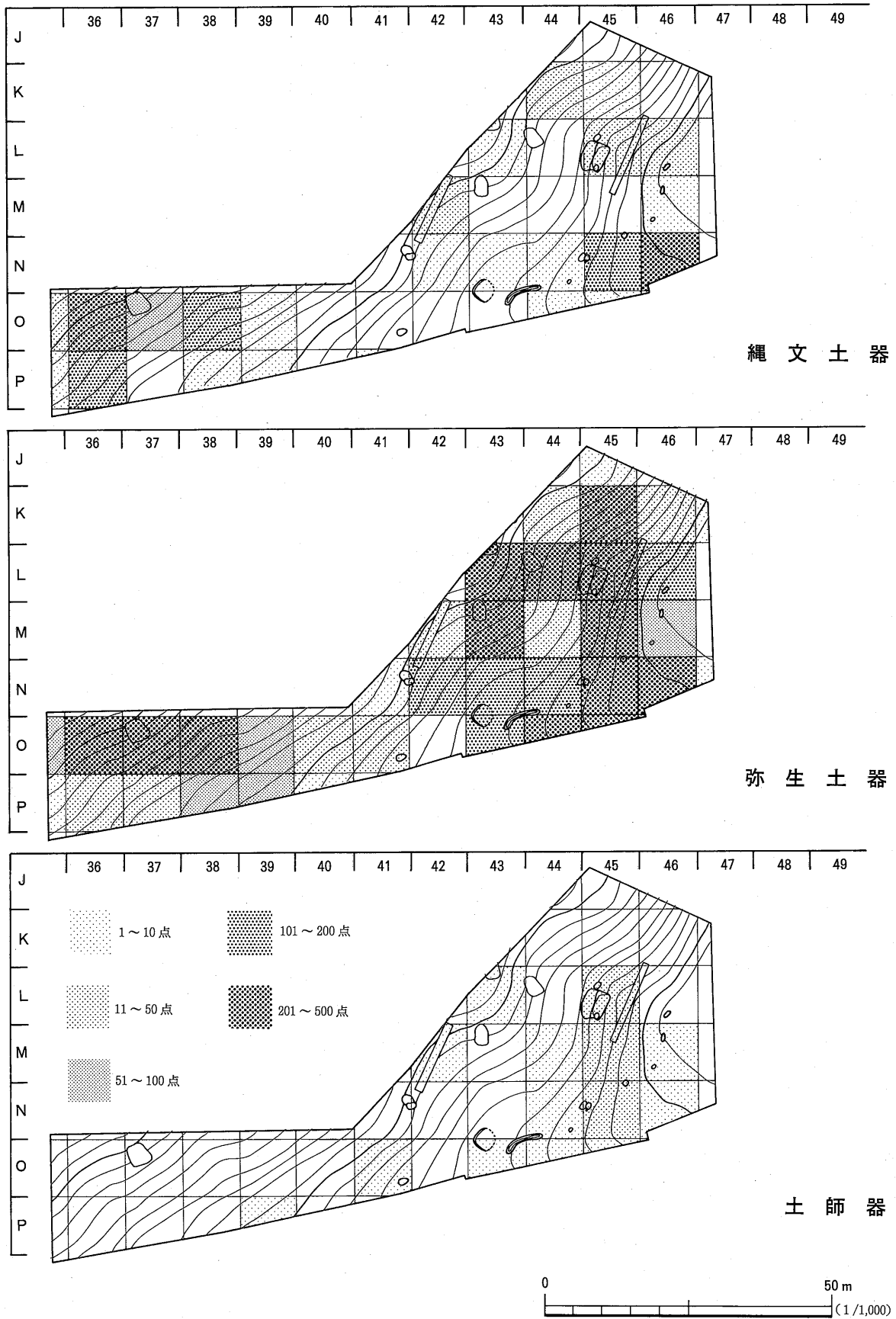


図 147 II区遺構外出土遺物分布図

I群 縄文時代の土器である。さらに3類に分類した。

- 1類 縄文時代早期の土器。
- 2類 縄文時代前期前葉の土器。
- 3類 縄文時代中期末葉から後期前葉の土器。

II群 弥生時代の土器である。さらに7類に分類した。

- 2類 半截竹管状工具を用いて、2本の沈線で文様が形成されるもの。
- 3類 3本以上の平行沈線で文様が形成されるもの。
- 4類 比較的軟質な工具(束線具)で沈線が施されたもの。
- 5類 縄文のみのもの。
- 7類 底部破片資料。

III群 土師器である。

土 器

I 群 土 器

1類 (図148～図149-14, 写真123)

図示した遺構外出土の縄文土器76片のうち、48片が本類に属している。図148-1～3の土器は胎土に繊維混和痕がみられず、沈線間に「D」字状連続刺突文が右方向から加えられている。細片ではあるが、その特徴から田戸下層式に比定される。図149-14は尖底部で、器壁が薄く繊維混和痕は確認できない。縦方向にナデが施され、田戸下層式期のミニチュア土器ではないかと考えている。以上の4片以外の本類は、茅山下層式～上層式期、または素山IIa式～IIb式期と考えられる破片資料である。大多数の破片の内外面に貝殻条痕がみられ、胎土には多くの繊維が含まれている。条痕は横方向に施されるものが多いが、斜位や縦位に施すものも少数見られる。図148-13・22, 図149-1・8は内面の凹凸が著しく、条痕は確認できない。また、器面が荒れて条痕文が不鮮明なものは、内面の拓本を割愛した。

器形については破片資料であるため、部位ごとの特徴を挙げるに止めたい。図148-4～9が平縁、同図10・11は山形を呈する口縁部片で、同図12～31は口縁部から頸部にかけての破片である。口縁部は直線的に外傾するか、4・5のように緩やかに外反する。口唇部の形状は同図6・8～10のように平坦なものと、4のように丸みを持つもの、5・7・11のように外側につまみ出されたような形状を呈するものなどがある。

本類は口縁部に文様帯を持ち、文様の多くが半截竹管による平行沈線文である。また口唇部に刻みを持つものが多く、図148-5の土器は口唇部の内面にも刻みを持つ。また同図10の口唇部に施されているのは、半截竹管による刺突である。10は山形の頂部から隆帯が垂下し、隆帯にも同じ工具による刺突が下方から加飾されている。さらには口唇部の内角に沿って、棒状の工具による連続刺突が施されている。13は隆帯を持たないが、10に類似した刺突が縦位に並ぶ。4・16・25

第5節 遺構外出土遺物

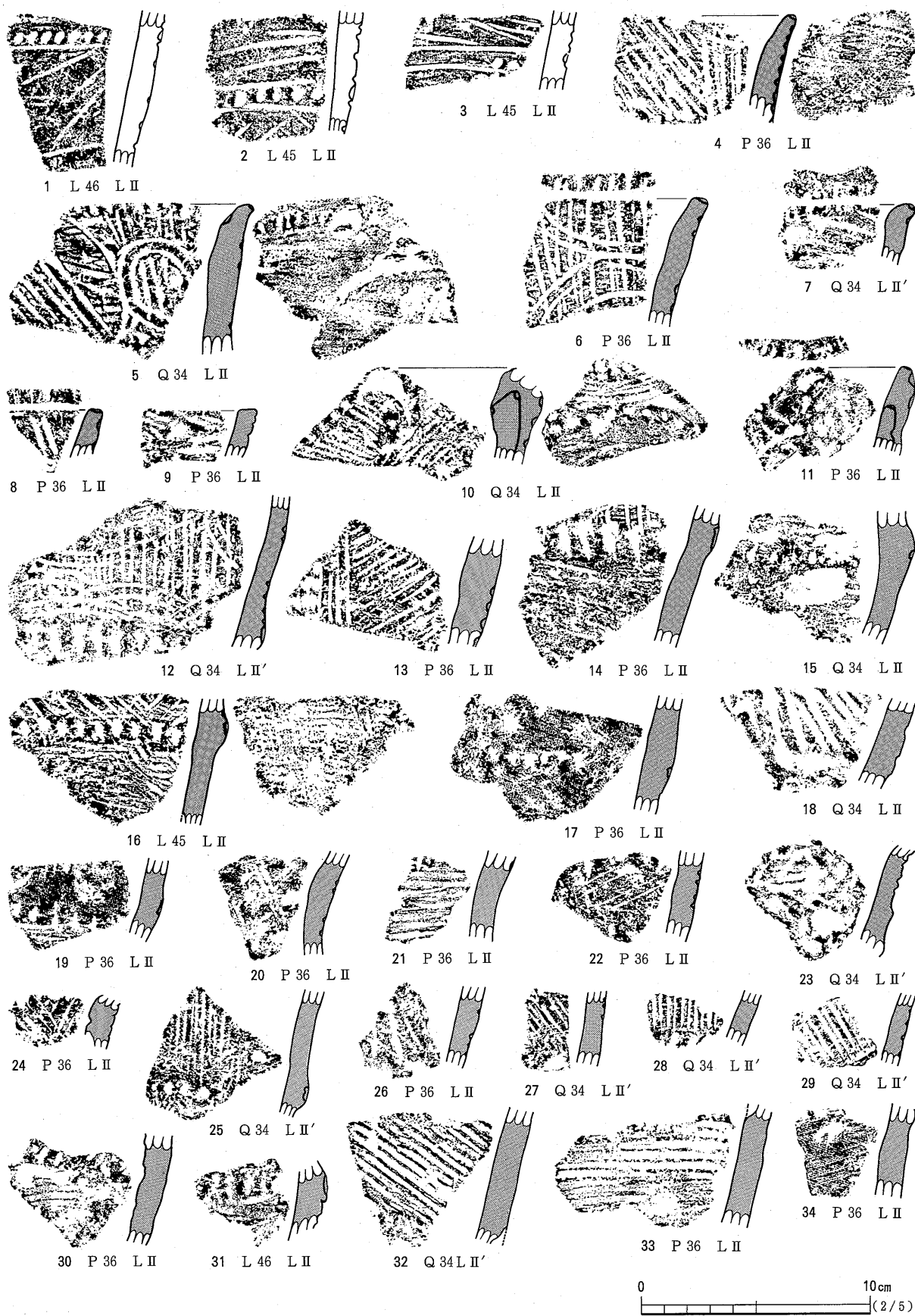


图 148 II区遺構外出土繩文土器(1)

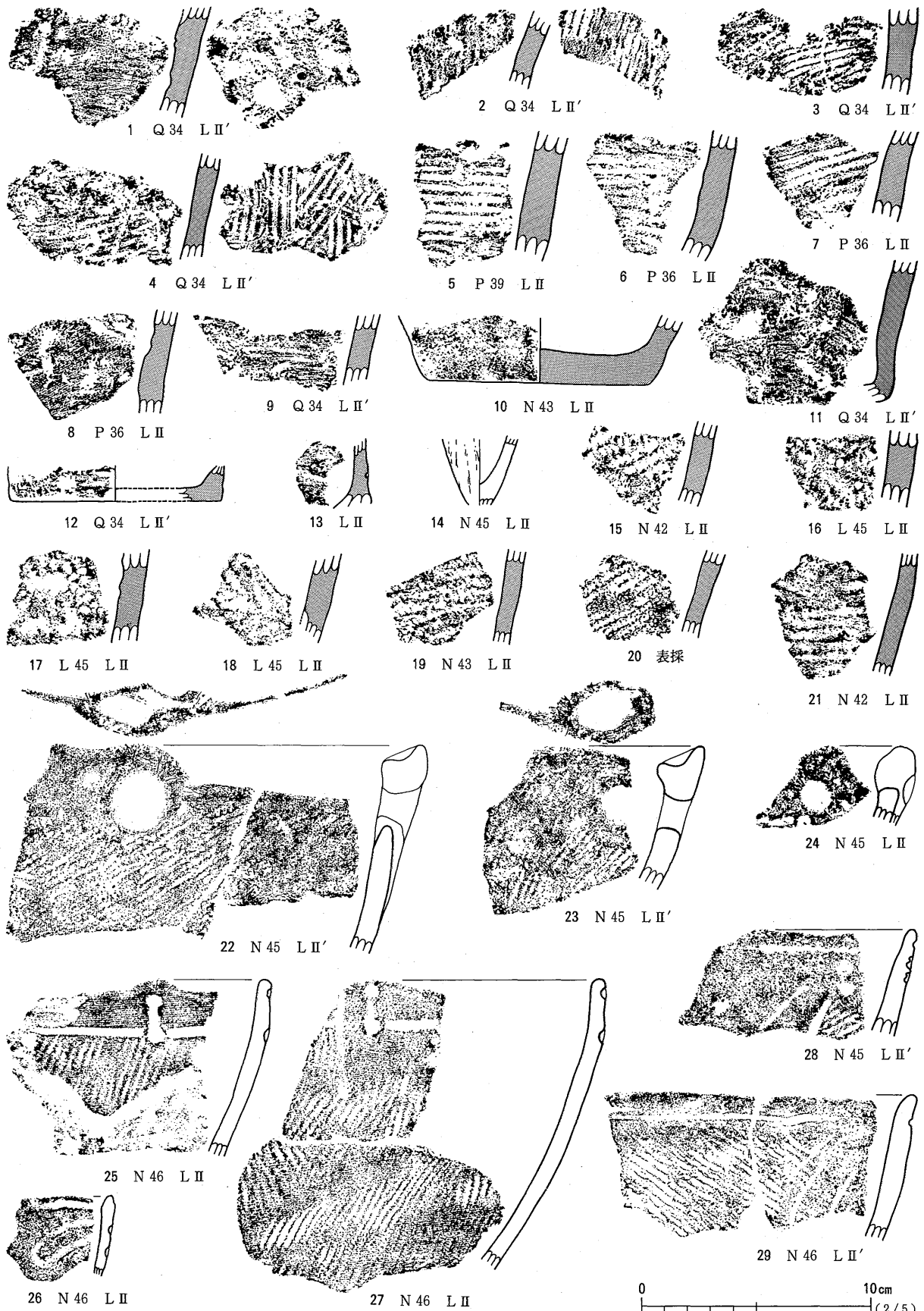


図 149 II区遺構外出土縄文土器(2)

第5節 遺構外出土遺物

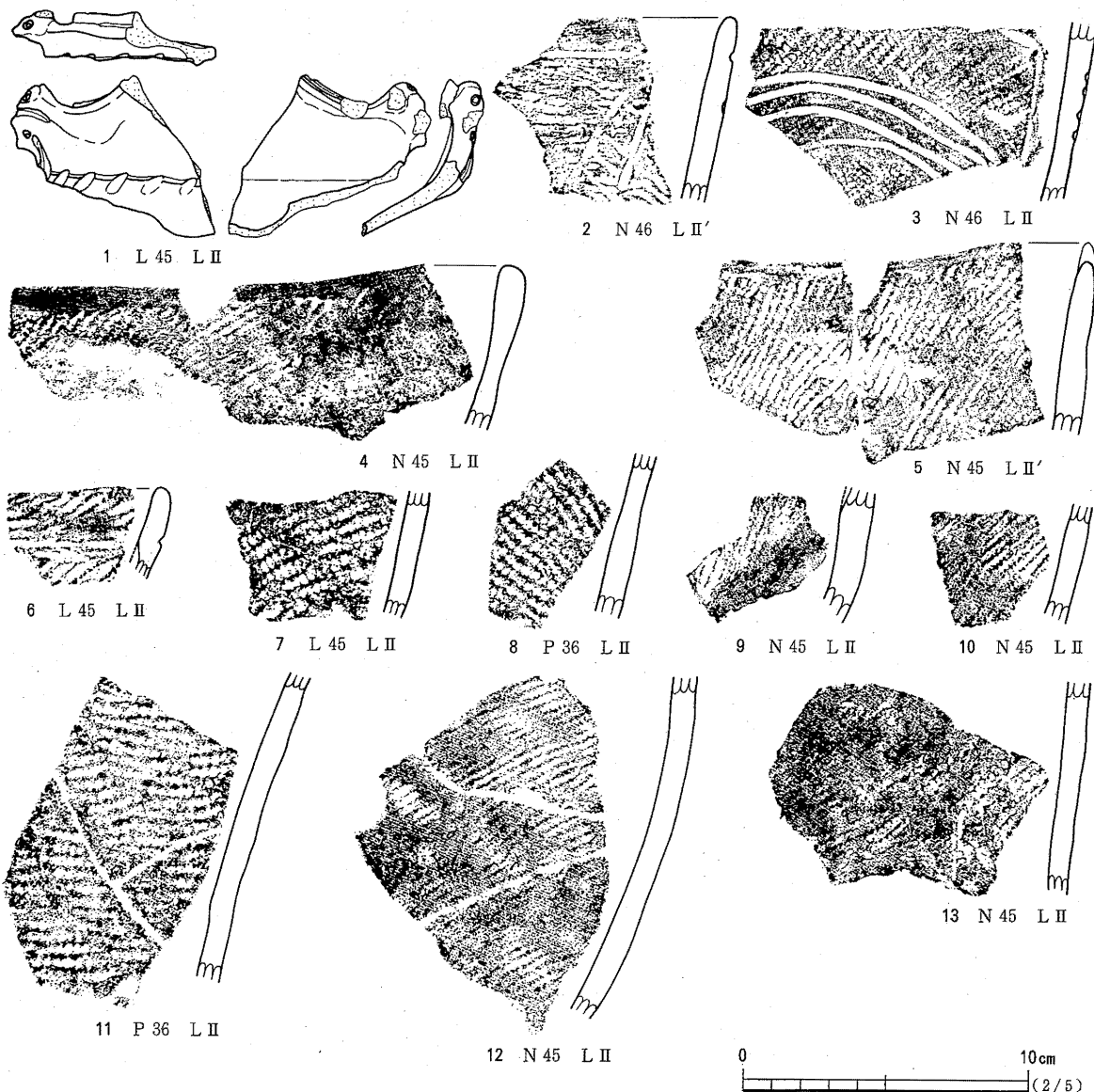


図 150 II区遺構外出土縄文土器 (3)

には、密な平行沈線による鋸歯状文が描かれている。また5には、半截竹管によって円形文と斜行する集合沈線文が描かれ、6・12は上下に対抗する連弧文が表出されている。22には、浅く粗い平行沈線が施文されている。

頸部は屈曲し、連続刺突文が横位に施されているが、図148-14・16・25のように盛り上がって屈曲するものと、同図17・19のように屈曲が弱く、刺突文のみが施されているものがある。図148-32～図149-9は胴部片で、図示したものを見る限り直線的に外傾する。表裏に条痕文が施され沈線文はみられない。図149-10～13は平底の底部片で、10は底径9.5cmを測る。10・11のように厚手のものと、12・13のように薄手のものがあり、11は外反気味に胴部が立ち上がっている。

2類 (図149-15～21)

出土量は少なく、7片を図示した。深鉢形土器の胴部片とみられ、いずれも胎土に繊維が混和さ

れている。器壁が荒れていて施文原体が判然としないが、横位回転で施文されているとみられる。図149-15・18・19の原体は0段多条、20・21は単節LRであろう。いずれも細片であるが、1次報告で大木1式併行とした土器に特徴が類似している。

3類 (図149-22～図150-13, 写真124)

図149-22・23は深鉢形土器の口縁部片で、同一個体の可能性が高い。突起の正面に貫通孔を、その頂部に大きな盲孔を持ち、LRが回転施文されている。II区1号竪穴遺構から、類似した3単位突起の深鉢形土器が出土している。同図24は大きな盲孔を持つ突起部の破片である。25～29, 図150-2は口縁部が沈線で区画され、無文帯となる深鉢形土器である。25・27は小突起をもち、同一個体である可能性が高い。突起の直下にある2つの盲孔が短沈線でつなわれ、胴部にLRが横位や縦位に施文されている。26は薄手で、蕨手文のような沈線文がみられる。28は平縁だが、25・27のような縦並びの盲孔をもち、磨消縄文による区画文がみられる。図150-2も類似した文様をもつが、こちらの縄文は磨り消されていない。同図1は装飾的な突起をもつ口縁部片である。「く」字に屈曲し、屈曲部に刻みが施されるなどやや異質な印象を受けるが、盲孔を有する点が他の本類土器と共通する。同図3はLRを施文した後に多条沈線を施し、沈線間の地文を粗く磨り消している。6は口縁部直下に沈線が横走するが、口縁部にもL縄文が回転施文されている。

図150-4・5・7～13は縄文のみが施された深鉢形土器片である。4・5は細波状を呈するものと思われる口縁部片である。7～13は胴部片で、そのうち8・11は、節が比較的大きいLRが縦位に施されているため、縄文時代中期末葉の所産と考えられる。

II 群土器

出土量はII区の遺構外出土遺物の中で最も多い。ただしそのほとんどが細片のため全体の器形を復元し得るものは皆無である。また器種を判断することも困難であるが、資料の大半が壺型土器か甕型土器の破片とみられる。

2類 (図151-1)

出土量が少なく1点のみ図示した。甕型土器の口縁部片とみられる。縄文地に縦線文が施されている。口唇部には刻みが入る。

3類 (図151-2～8)

沈線の本数が3本以上のもので、櫛歯のような硬質の工具を用いて施文しているものを本類とした。図151-4は3本、同図3・5～8は4本引きの沈線で文様が施文されている。3・4の器種は不明だが、文様帯区画線と縦沈線文がみられる。5～8は壺型土器の頸部片とみられ、横位の鋸歯状文が表出されている。

4類 (図151-1・9～図156-4)

壺型及び甕型土器の、主に口縁部から胴部上半にかけての破片資料である。図151-9～図152-5は壺型土器の口縁部片である。図152-6～42は甕型土器の口縁部片とみられるが、同図15, 29～31, 37, 38は細片のため判然としない。器種による文様の差異は明らかにできなかったが、

壺型土器には内面にも文様を施文するもの(図151-11・12, 図152-5)がある。文様をみると縦線文や横線文, 格子文が施文される土器が多いが, その他にも図152-16のような肋骨文や同図39~41の波状文などが施されるものがある。図151-10・12~14のように口唇部に刻みが施されるものが相当数あるが, 刻みは口唇部に対して直角に施文されている。また, 図152-7の口唇部には回転縄文が施されている。調整をみると, 内外面とも丁寧な横ナデが施されているものが多く, 図151-10には特に入念なミガキが施されている。

図152-43~図156-4は頸部から胴部上半にかけての破片資料である。そのうち図152-43~図154-23は地文が施されず, 沈線文のみが施文されている土器である。図153-30・34・42~56は壺型土器の可能性が高い。いずれも細片のため詳細はわからないが, 図154-1のような頸部が直線的に内傾する器形とみられる。口縁部片にみられた文様の他, 重山形文(図154-18)や鱗状文(同図19)がある。また図153-51の縦位沈線文間には, 沈線と同じ施文具による刺突文が施されている。図151-1, 図154-24~図155-20は文様帯区画線をもち, 沈線文のみが施文される部位と縄文が施される部位が分割されるものである。少数ながら, 図154-47や図155-15のように文様帯区画線がないものもみられる。図154-43は壺型土器の, 同図46は甕型土器の口縁部から頸部にかけての破片とみられる。その他はおおむね頸部から胴部上半にかけての破片であろう。文様帯区画線が施文された箇所では屈曲し頸部と胴部が明瞭に分かれるもの(図154-45・図155-3・18・19)と, 屈曲しないもの(図154-32・33)とがあり, 後者が多いようである。図151-1の壺型土器は, ある程度接合できたため復元図示した。胴部上位に肋骨文が, 文様帯区画線以下には縄文が施文されている。施文順位は縄文→文様帯区画線→縦沈線→横沈線の順である。施文原体は附加条(LR+R・R)とみられる。外面に横位から斜位のナデが加えられているが, 内面は器面が荒れていて確認できない。図中の底部片も近在から出土しているが, 施文原体や色調からみて同一個体である可能性が高い。底面には布目痕が認められる。

図155-21~図156-4は縄文地に沈線文が描出されるものである。その多くは壺型か甕型土器の頸部から胴部上半にかけての破片と思われる。図155-25・26・29・30・41~48は甕型土器である可能性が高い, 図155-22は壺型土器とみられ, 内外面に縄文が施文されている。図155-21~33のように文様帯区画線をもつものが相当数見受けられ, 頸部に地文を持たない土器と同様, 区画線で屈曲するもの(27~29)と屈曲しないもの(31・32)とがある。文様は縦線文が多くみられるが, 図156-1に山形文が, 同図2~4には連弧文が施文されている。

5類 (図156-5~図158-40, 写真125)

沈線文が施されず, 縄文のみのものを本類とした。図156-5~27は口縁部片である。そのうち5~8は壺型土器, その他は甕型土器と推定される。同図9・10・13は口縁部が短く直立または外傾する。15は横方向のミガキが顕著で蓋の可能性がある。口唇部に刻みが施されるものが多いが, 17には縄文が施文されている。図156-28~38・42は頸部片である。同図28と31は壺型土器とみられるが, その他は判然としない。28・33・34・37などは頸部に原体の末端を揃え,

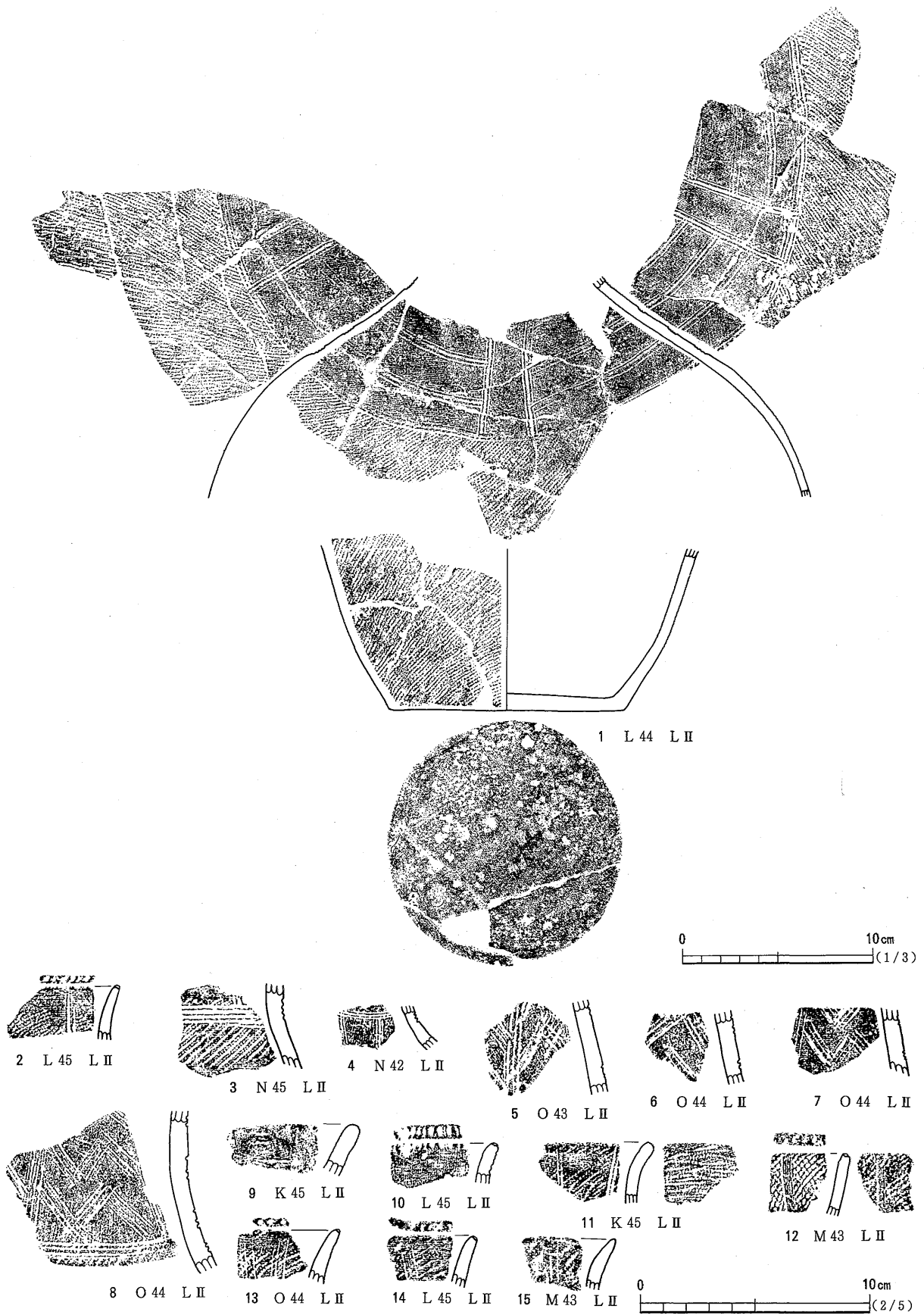


図 151 II区遺構外出土弥生土器(1)

第5節 遺構外出土遺物

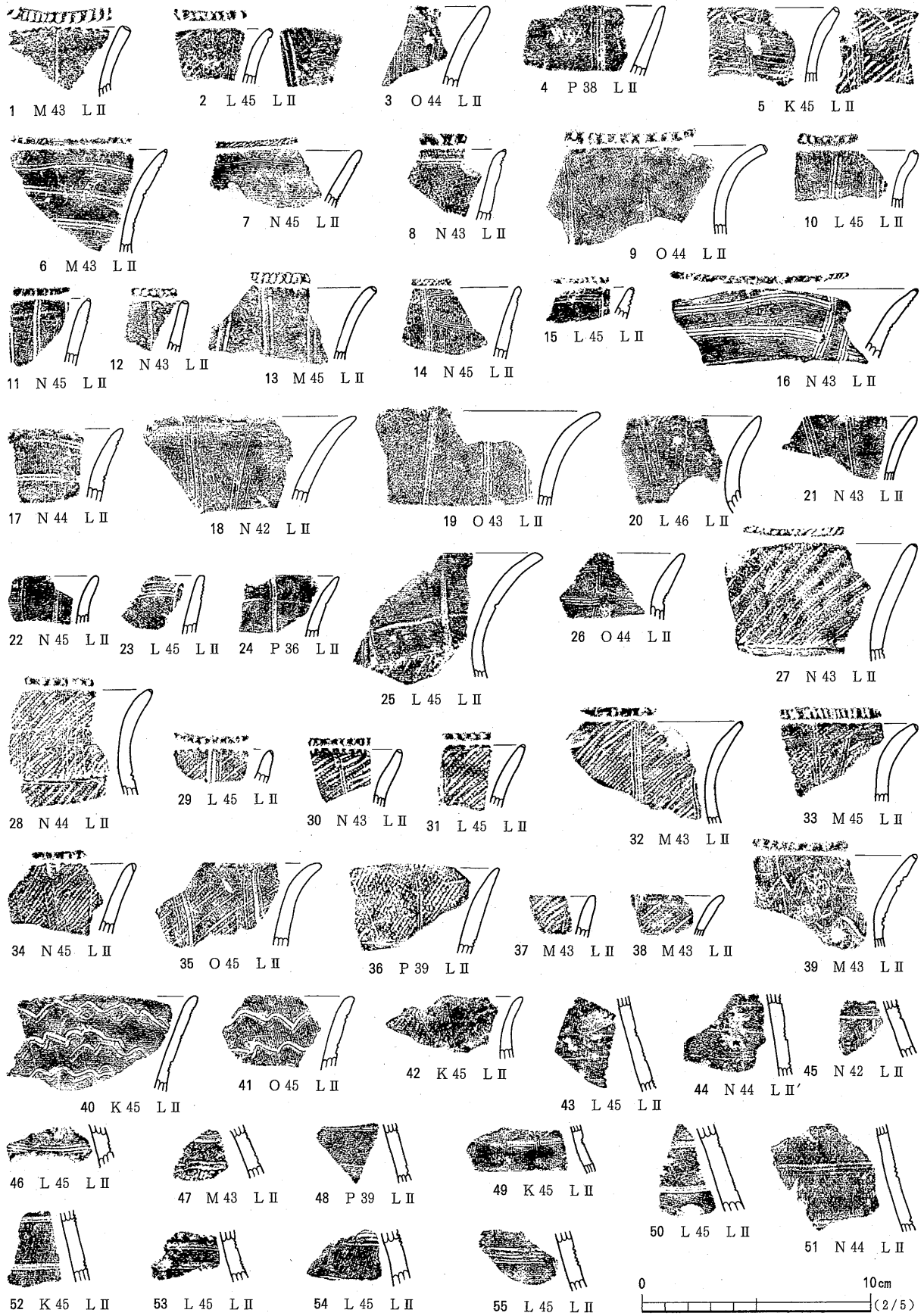


图 152 II区遺構外出土弥生土器(2)

第5節 遺構外出土遺物

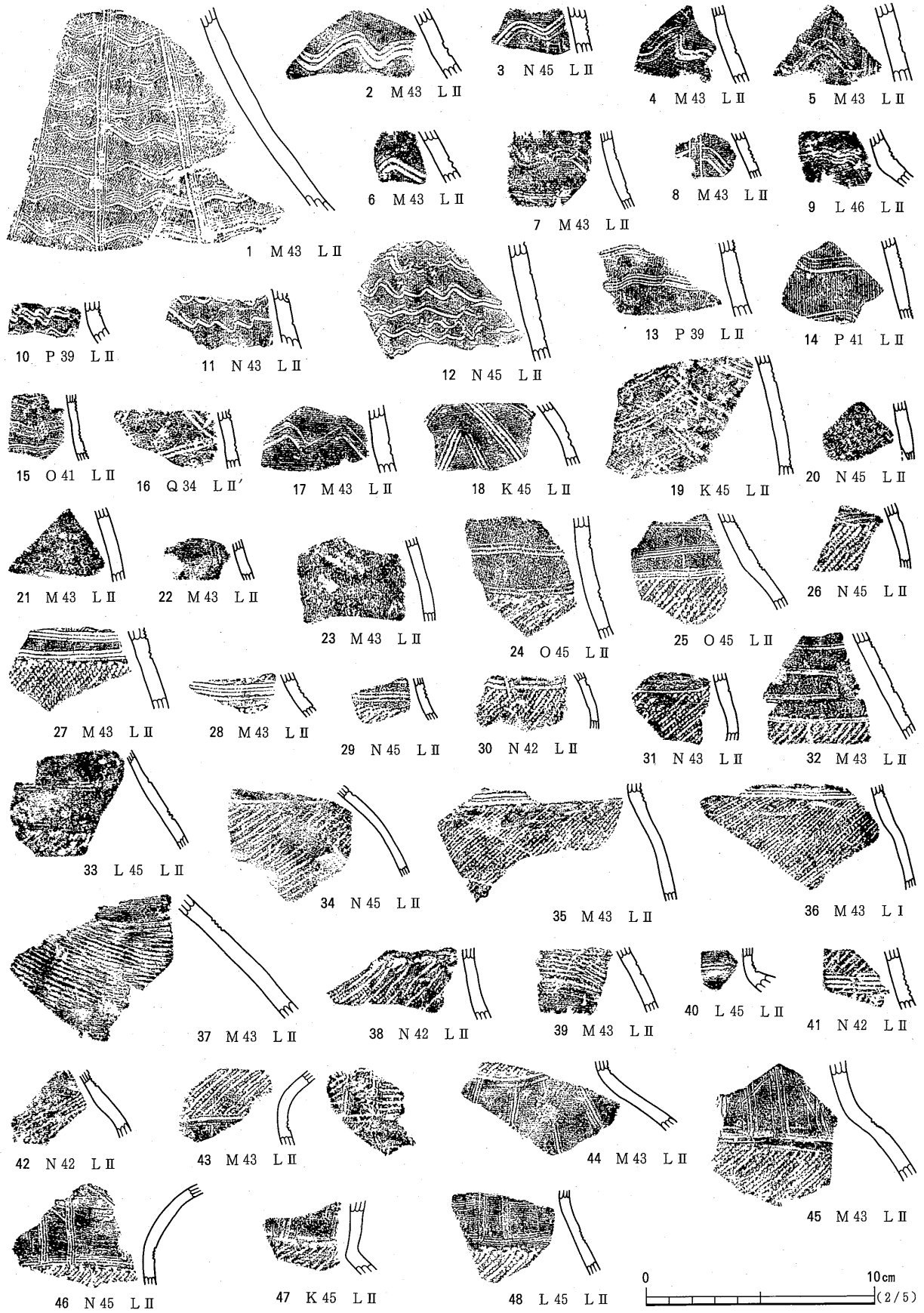


图 154 II区遺構外出土弥生土器(4)

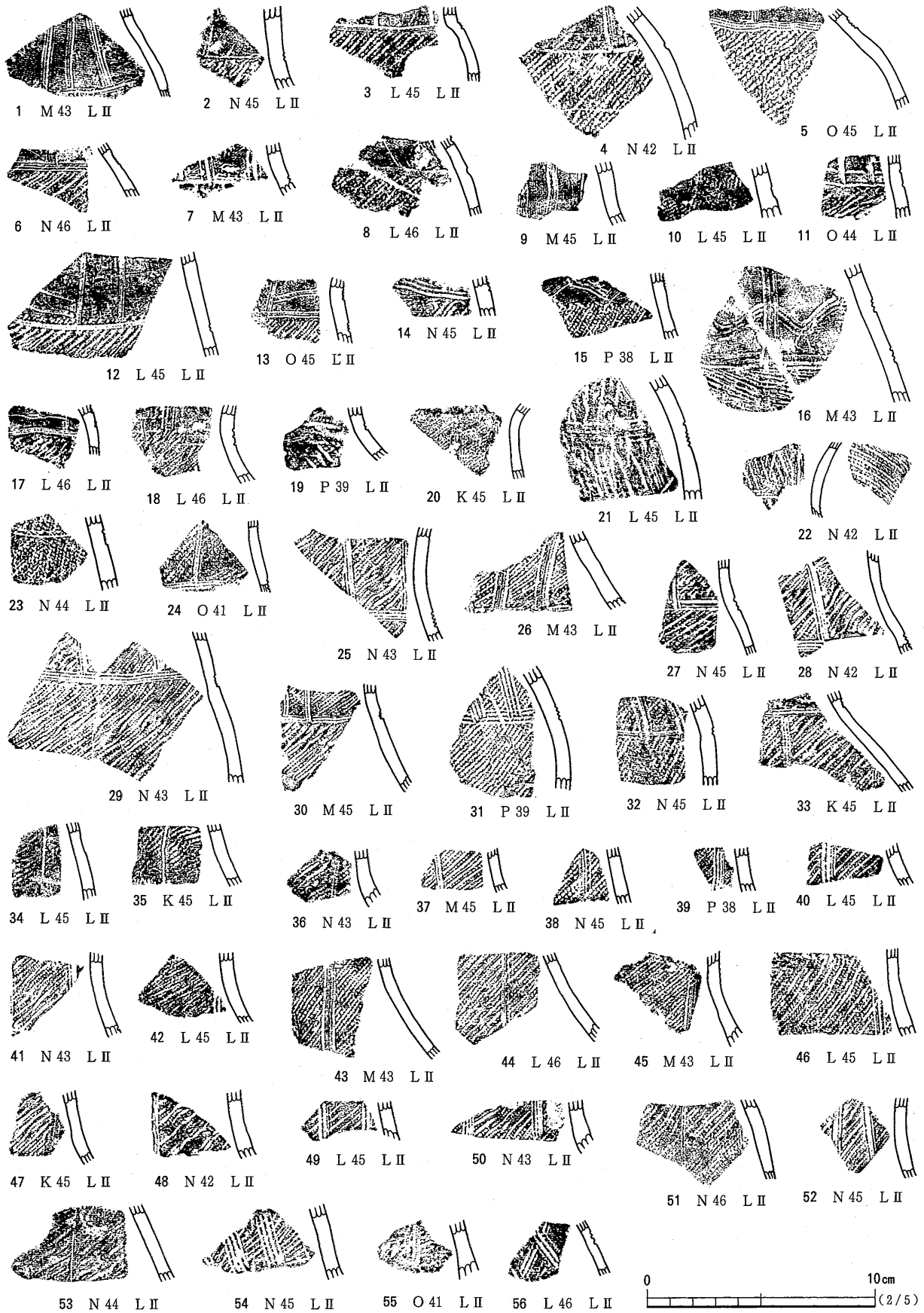


图 155 II区遺構外出土弥生土器(5)

第5節 遺構外出土遺物

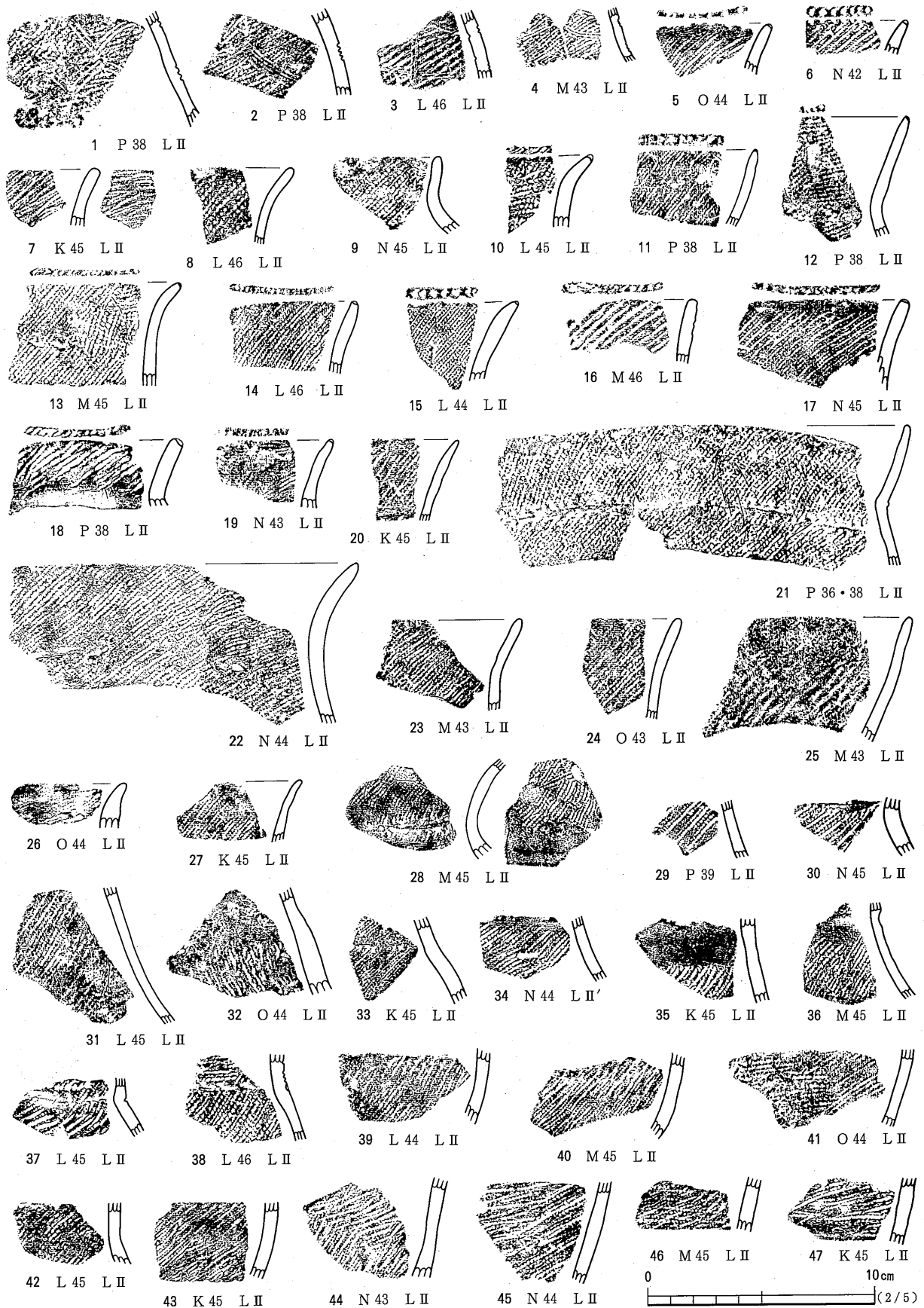


图 156 II区遺構外出土弥生土器(6)

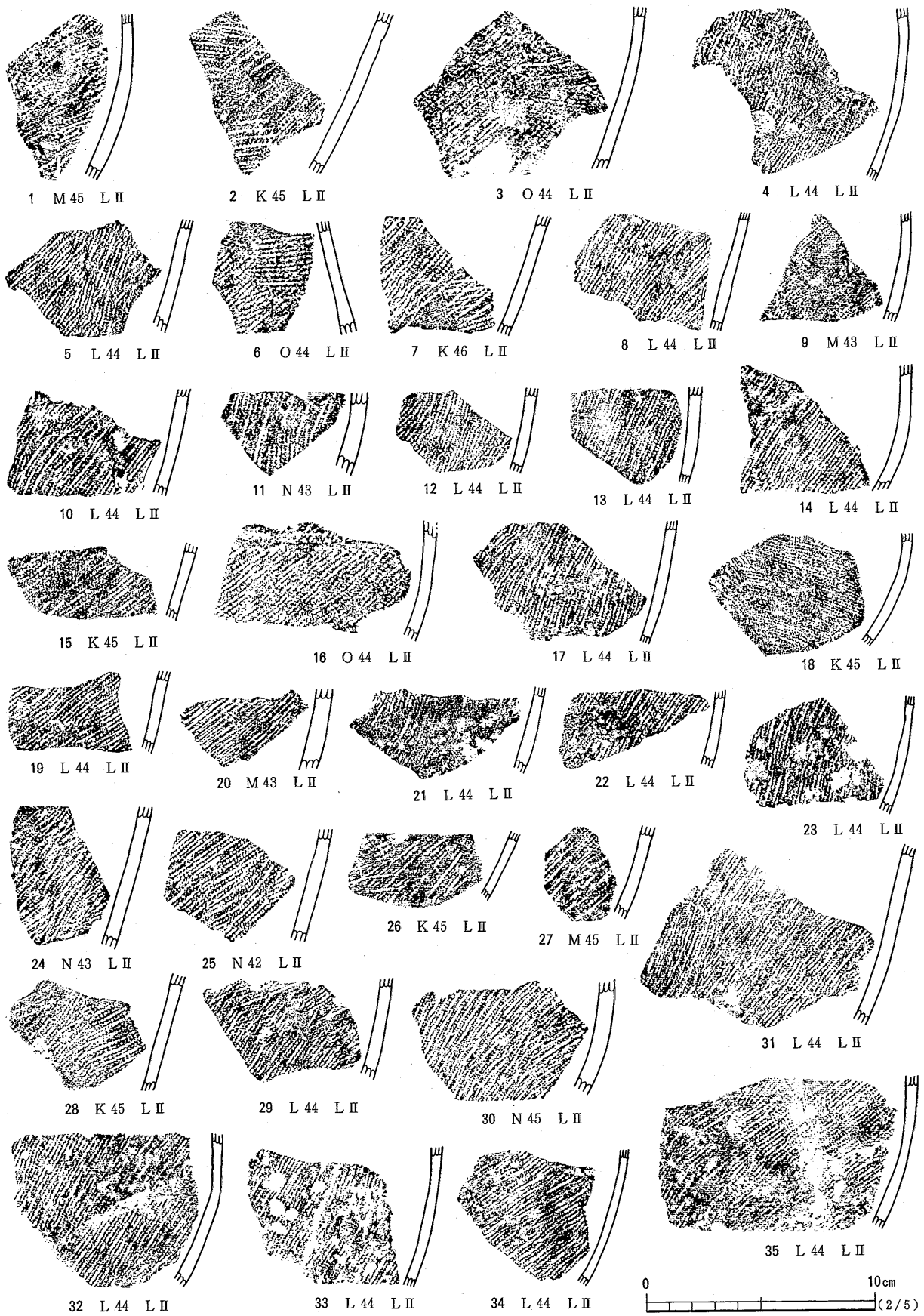


図157 II区遺構外出土弥生土器(7)

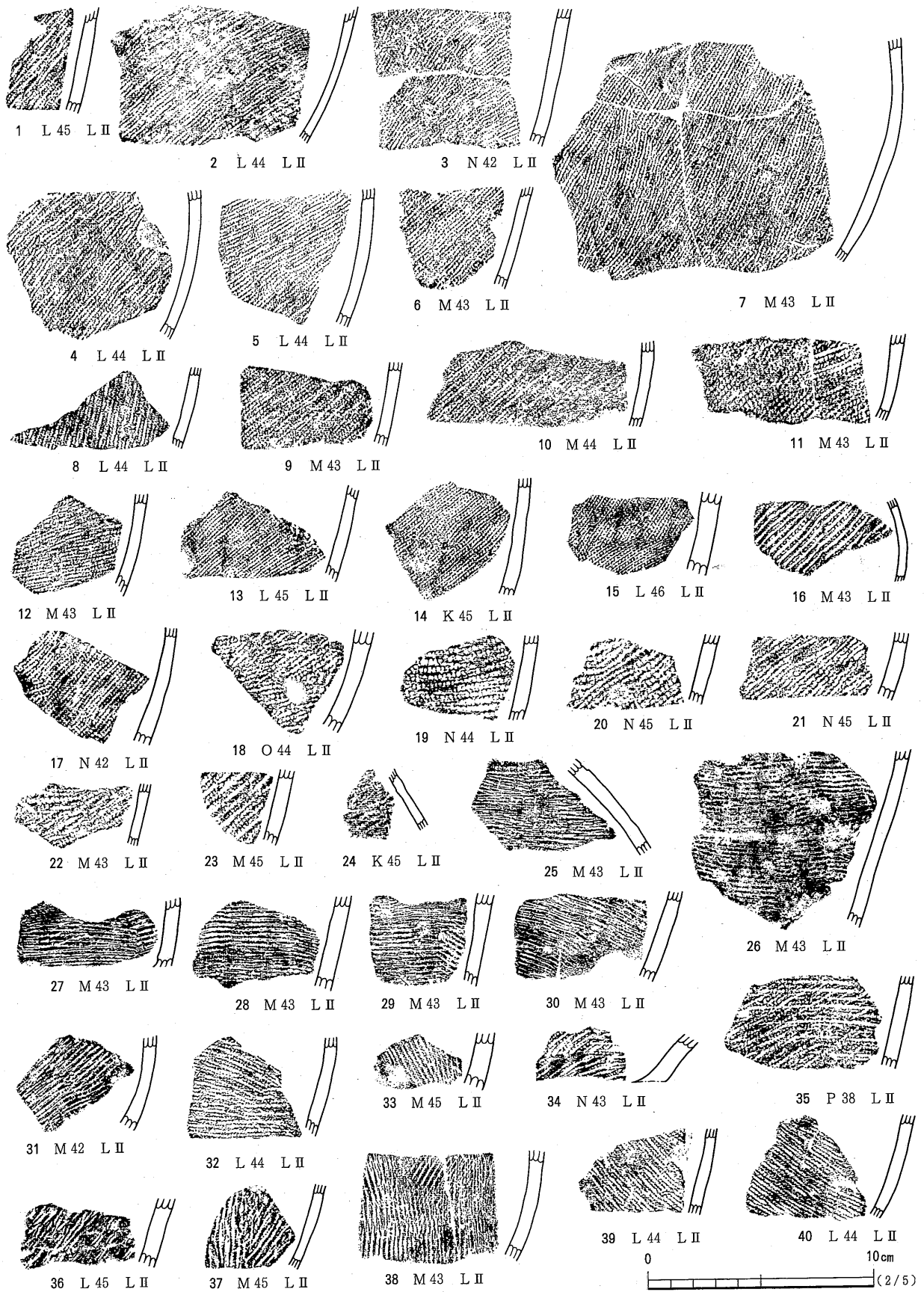


图 158 II区遺構外出土弥生土器(8)

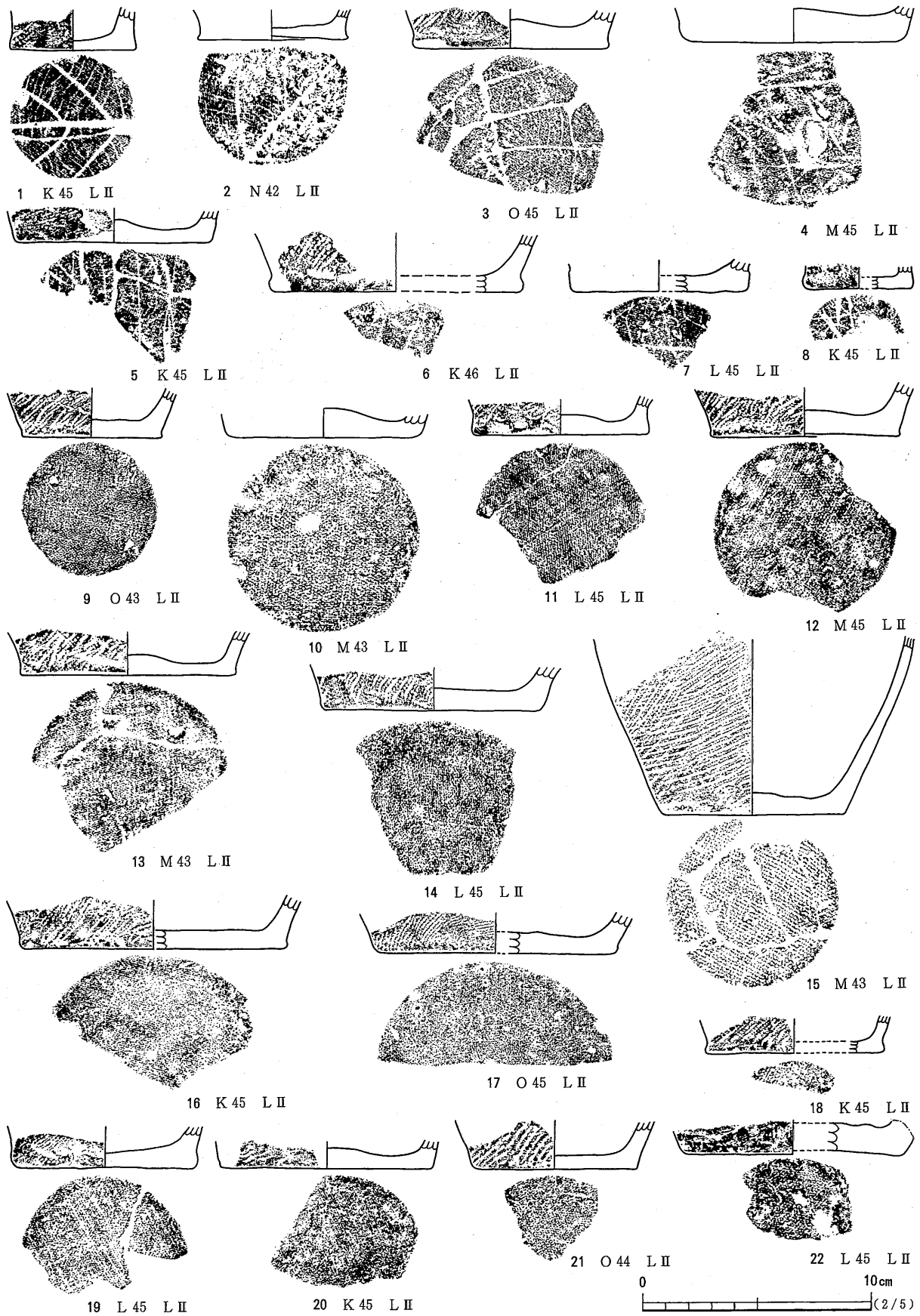


图 159 II区遺構外出土弥生土器(9)

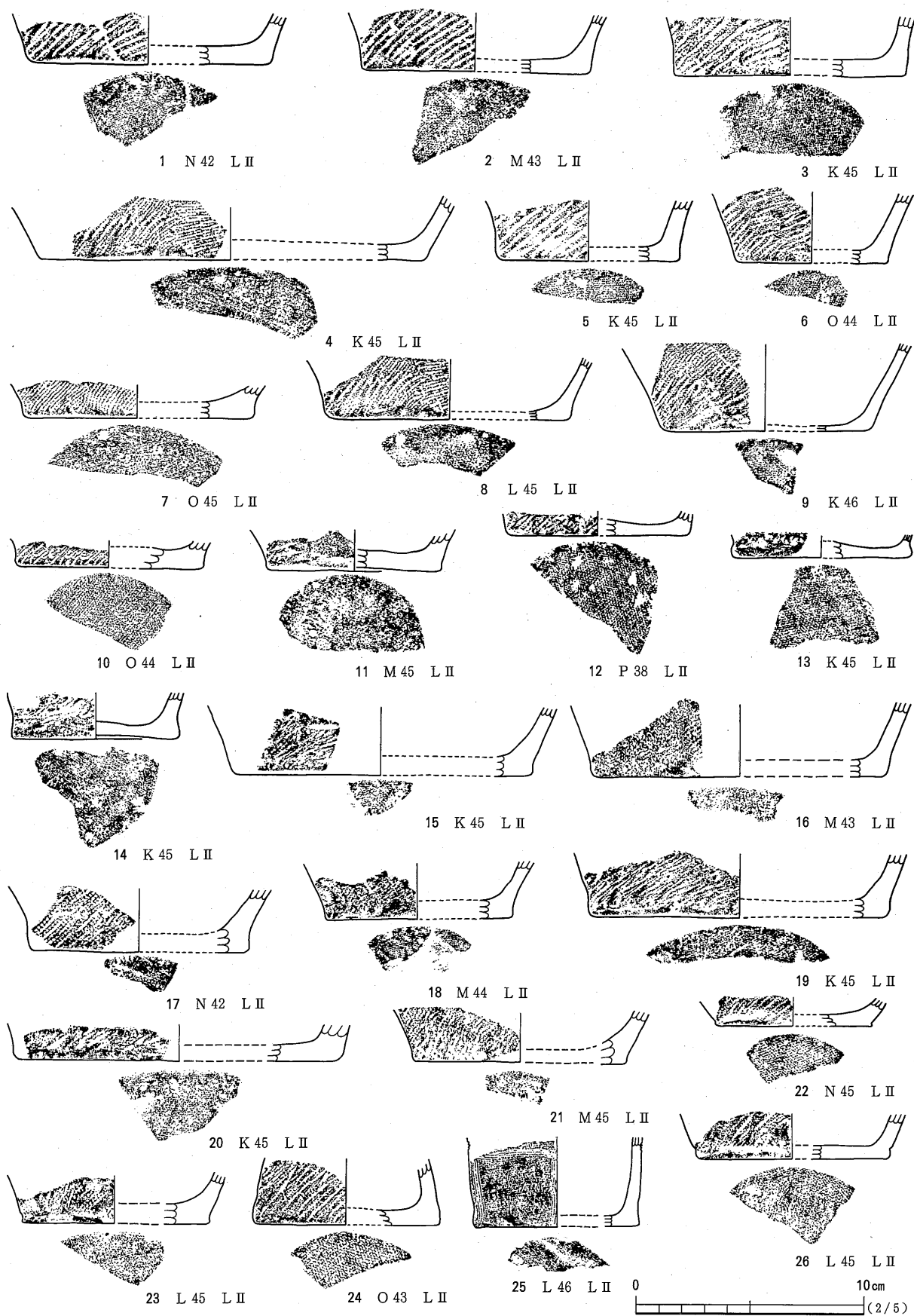


图 160 II区遺構外出土弥生土器(10)

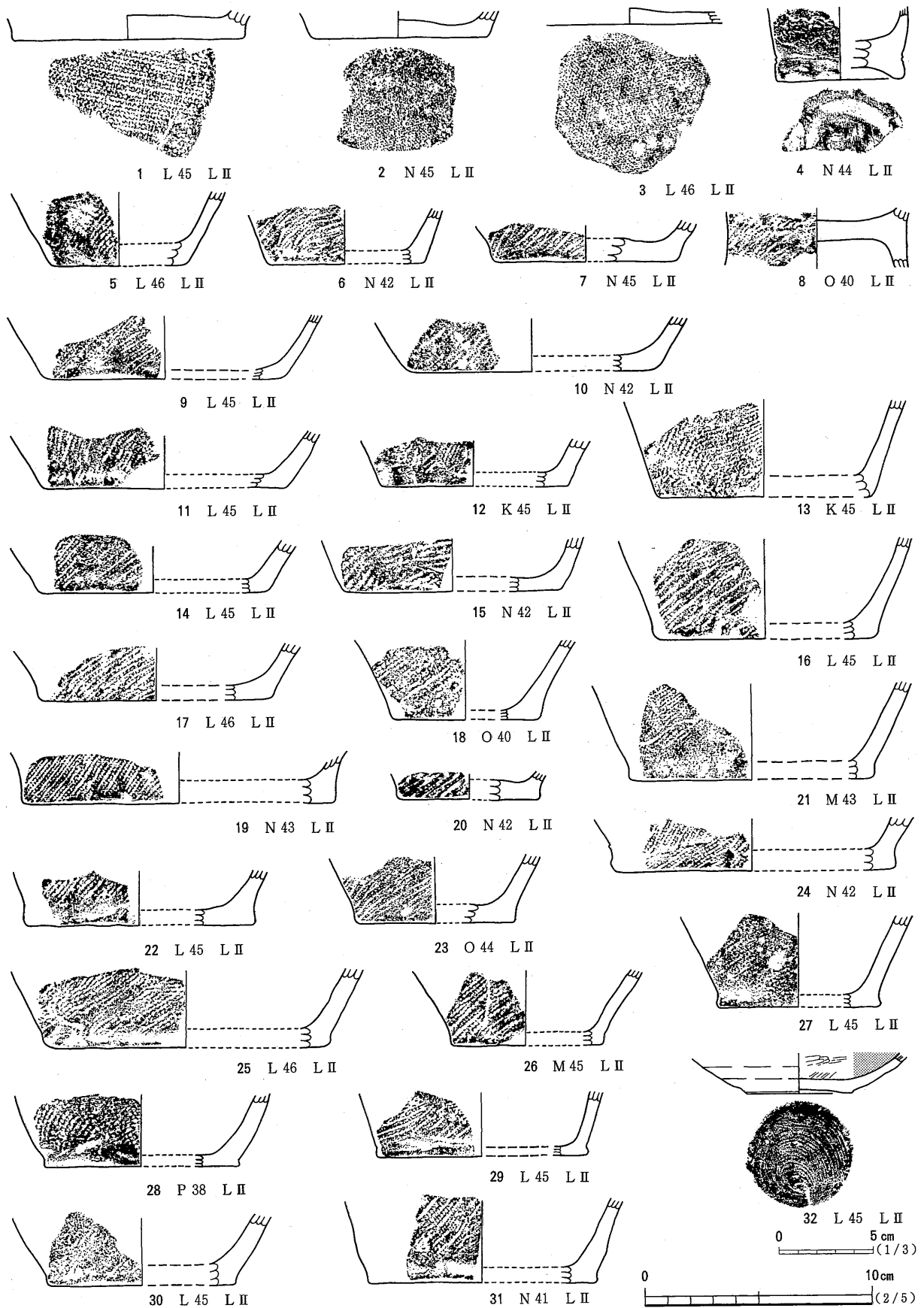


图 161 II区遺構外出土弥生土器・土師器

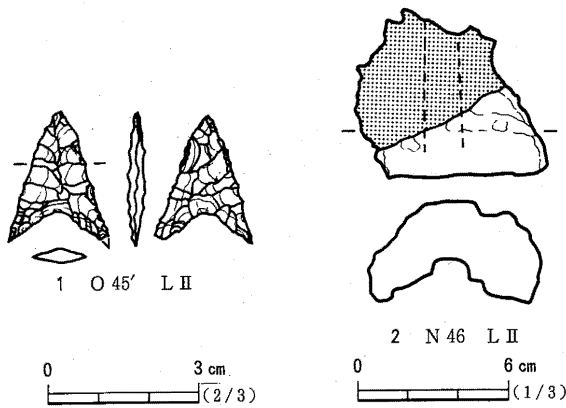


図 162 II区遺構外出土石器・羽口

7類 (図159-1～図161-31, 写真126)

底部片を一括した。胴部が外傾するものが多く、その多くは壺型か甕型土器であろう。図159-1や図160-25のように直立するものや図160-24のように内傾するものは鉢型土器の可能性が高い。図161-4は上げ底状を呈しているが、蓋の可能性もある。ただし蓋の内面に顕著にみられるミガキは確認できなかった。また同図8は高杯の可能性もある。胴部の文様は縄文のみのものがほとんどだが、鉢型土器とした図160-25には束線具による格子文が表出されている。図159-1～8の底面には木葉痕がみられる。また図159-9～図161-3は、底面に平織の布目痕が残るものである。

Ⅲ群土器 (図161-32)

本群土器はほとんどが細片のため1片のみ図示した。図161-32はロクロ整形の杯の底部片である。内面には黒色処理とヘラミガキが施されている。底面には糸切り痕が観察される。(今野)

石器・その他 (図162)

Ⅱ区では、石器類が52点出土しているが、剥片類が大部分を占め、図示したのは1点だけである。図162-1は凹形の基部をもつ石鏃で、石質は珪質頁岩である。丁寧な調整が加えられ、薄く平滑に加工されている。

図162-2は羽口の破片で、溶着滓の範囲をアミ点で示した。この羽口片が出土した沢部からは少量の鉄滓も出土している。沢部の南側丘陵に、製鉄炉の存在が推察される。(今野)

頸部を意識した縄文施文がなされている。また38の頸部には、条が横走するように斜位に縄文が施されている。図156-39～図158-40は胴部片で、本類の主体を占める。器種は判断しかねるが、内湾する器形を呈するものが多いとみられる。また他類と異なり、胴部下半の破片が相当数含まれると推察される。

本類に限らず、本群土器に使用されている縄文原体は非常に細く、最終的にL撚りになるものが大多数を占める。また附加条が多いという共通点もある。

第5章 考 察

第1節 I区縄文時代の遺構と遺物

ここでは遺構内・遺構外出土を問わず、主体的に出土した土器を中心にその特徴を確認する。また類例との比較検討を行い、その年代観を明らかにしたい。さらにその年代観をもとに、各時期の遺構群の性格について言及したい。

縄文時代早期中葉の土器

この年代が与えられる土器には、遺構内では20号住居跡出土の図41-11～14と、67・175号土坑出土の図58-3～6・11・12がある。遺構外出土土器ではI群1類土器が該当する。以上の土器の大半が、田戸下層式期に属すると考えられるが、その特徴をもう一度再確認したい。まず器形だが、平縁のものが多く、緩やかな波状口縁を呈するものが少数みられる。口頸部が緩く括れるものと直線的に外傾するもの、外反気味のものなどがあることはすでに述べたが、口頸部が括れるものが多い点は、田戸下層式期の範疇でとらえられる土器が多いことの表れと言えよう。細部をみると、本類土器には三戸式の特徴である内削ぎ状の口唇部片がみられない。また尖底部にはI群1類のA種・D種・C種・P種にみられた文様が施文されているが、いずれも底部が肉厚である。三戸式にみられる底部が肥厚しないものや田戸上層式に特徴的な丸底状のもの、常世1式にみられる乳房状のものは出土していない。

次に文様についてだが、2章5節で18種に分類したように本類土器の文様にはかなりのバリエーションがみられる。ただし分類は、貝殻文を含めた広義の刺突文を中心としたものである。仮に刺突文を付加的な要素とみなせば、各種の沈線文にはかなり高い斉一性がみられる。例えばA種にみられた斜行沈線や横位・縦位の沈線文、鋸歯状文は刺突文を有する各種にも多用されている。また縦位の文様帯区画線や三角形を基調とした区画文、山形文もD種やF種、I種などにみることができる。同一の文様要素が重畳する横位多段の文様構成は、L～N種を中心にA種の矢羽状沈線文やI種にも看取される。また、早期中葉の土器はしばしば貝殻・沈線文系土器と総称されるように、大平・三戸式期から田戸下層式期へ継承される文様要素が多々ある。例えばA種にみられる格子文は、破片資料では三戸式との区別が難しい。ただし本類の特徴として带状格子目文が低調なことは指摘できる。また前原A遺跡出土の包666や包669のような口唇部に格子文が描かれるものは出土していない。以上のような器形と文様の大略から、該期の土器がある程度のまとまりを持っていること、その年代としては田戸下層式期の大枠のなかでとらえられることが確認できたであろう。

それでは次に、本遺跡の土器が田戸下層式期のどの段階に属するか、あるいはどの程度の年代幅を有しているのかを各土器の文様を挙げながら検討したい。ただし以下の検討は他遺跡出土土器と

の比較、及び従来の編年研究成果に基づくもので、層位的裏付けのあるものではない。層位的にはI群2類土器も含めて、その大部分がLIIcから出土していることを確認しておく。まず、A種の図102-2と図104-3やD種の図114-1~11であるが、これらは幅の狭い無文帯を有する土器である。この文様は、帯状格子目文から変化した田戸下層式の中でも古相を示す要素ととらえられる(恩田:1994)。前原A遺跡の95坑6や包40を始めとする多くの資料にみることができるが、本類では前原A遺跡と比べるとその全体に占める割合は低い。前原A遺跡のI群2類土器は、田戸下層式でも古い段階に比定される土器群であるが、本遺跡の土器は前原A遺跡と一部併行関係にありながらも、より広い時間幅が想定される。

逆に新相を示す文様要素を求めると、C種の図99-3や図112-2~13にみられる曲線文があげられる。C種のケズリ沈線は三戸式期からの施文手法であるが、曲線化は田戸上層式への時間的傾斜を示すと言えよう。ただ、図113-22のように、ケズリ沈線による曲線文と、前原A遺跡に代表される貝殻充填文とが一つの土器に描かれているものもみられる。本遺跡の土器には「D」字状連続刺突文が多用されているが、この文様は田戸下層式の前段階では低調な文様要素である。またD種の図113-18・19・21のように貝殻腹縁文が沈線区画の代用として用いられるものは、新相を示すとする見方も提示されている(金子:1992)。J種の弧状沈線文も後出的属性ととらえられ、宮城県の大谷池地ノ上遺跡や千葉県泉北側第2遺跡出土の土器に類例がある。

N種のうち平ノミ状の施文具による押し引き文と横位沈線が交互多段に施文される土器は、(恩田:1994)の第6段階B2系列に該当するものである。交互多段構成をとる土器は、東北中南部に分布の中心があることが指摘されている。道徳森遺跡第1類や竹之内遺跡の第56図7~9、永光院浅ノ内遺跡の第12図2をはじめとする多くの類例が知られている。なかでも胴部中位に無文帯をもつ図101-3は、小野町糺内遺跡の第36図10によく類似している。O種の「く」字状押し引き文はV字状押し引紋とも呼称される施文手法で、田戸上層式への過渡的な段階と位置付けられる明神裏Ⅲ式に見ることができる。以上のように、本遺跡の土器には田戸下層式の新相を示す文様要素が多々みられる。

まとめると本遺跡出土土器の時間幅は、田戸下層式期の前段階から田戸上層式直前段階までと考えられ、その主体は田戸下層式期の比較的新しい段階にあるとみられる。またN種のような横位多段構成を示す土器が多いことから、優れて東北中南部的な土器群ということができよう。次に、A・C~O種と文様の変遷が相互に辿れないB種やP種、Q種の編年的位置付けを検討したい。双方の文様は類似していないが、口唇部の形態や刻み、調整方法といった細部に類似性を見出すことは可能である。またタタラ遺跡では中葉以外の早期に属する土器がほとんど出土していないため、B・P・Q種についても田戸下層式期に属する可能性が高い。なお類例を挙げると、B種は前原A遺跡のI-3類や永光院浅ノ内遺跡の第15図85・86、馬場平B遺跡の88図などにみることができる。P種のなかで最も特徴的な原体に、条間を緩めた二段の自縄自巻原体があるが、馬場平B遺跡の87図24や前原A遺跡の包916・934・935・938に同じ施文原体を見ることができる。実見してい

ないが、永光院浅ノ内遺跡の第16図181～194は同様の原体とみられる。この自縄自巻原体は、田戸下層式期に属する回転縄文が施された土器の、一つの指標となり得ると考えている。

最後に田戸下層式とするにはやや問題を感じる土器について個別に検討を加える。A種のなかでは図103-23がやや異質な感がある。口唇部の一端が内側に屈曲しているこの口縁部片は、あるいは前原A遺跡の包31や包39のように波状口縁の頂部が抉られるものかもしれない。図106-30は大きな盲孔を有する点が異質であるが、沈線の特徴や胎土が類似していることから本類に含めた。類例となり得るか疑問だが、茨城県伏見遺跡出土の第153図5の口唇部には盲孔が設けられている。曲線文が表出されているD種の図115-6は、常世I式に比定される可能性が高い。E種の同図34も薄手のため常世I式と考えられる。ボタン状貼付け文を有するH種は田戸上層式の可能性がある。

縄文時代中期末葉の土器

3章5節に示したII群2類土器が相当し、遺構内出土土器では、25・28号住居跡出土土器が含まれる。深鉢形土器が大部分を占めるとみられるが、注口付鉢形土器も出土している。充填縄文技法を多用し、隆線や凹線、隆凹線による縦長の区画文を特徴とする土器群である。その特徴から大木10式の前段階に納まる可能性が高い。敷石住居跡より出土した土器から類例を挙げるなら、飯館村宮内A遺跡の1号住居跡出土土器に近い年代と考えられる。土器の年代にまとまりがあることから、II群2類土器の大半は25・28号住居跡に関連して使用され、遺棄または廃棄されたものであろう。また遺構内・外を問わず、大木8b式期の土器は出土せず、後出する土器もII群3類に示したように低調である。これは該期の遺構群が短期に営まれたことを反映していると考えられる。

縄文時代後期中葉の土器

3章5節のII群4類と5・6類の多くが相当する。遺構内出土土器では、21号住居跡出土の図43-1～6と22号住居跡出土の図44-1～3、96号土坑および1号土器埋設遺構出土土器が本類に含まれる。破片資料が大半ながら、深鉢・鉢・浅鉢・壺・注口土器・台付土器・筒形土器など多彩な器種組成をみせている。深鉢形土器は、大きな波状口縁を呈する土器が特徴的に出土している。またその波頂部には多様な突起を有する。胴部には平行沈線文が横走る幅広い縄文帯を有するものが多く、この平行沈線は蛇行沈線や短沈線で連結されている。1号土器埋設遺構から出土した図89-1や図124-13が本遺跡出土深鉢形土器の典型と言えよう。いわき市久世原館・番匠地遺跡の第5群土器に多くの類例をみることができる。他器種の文様の特徴は細片が多いため不明な点が多いが、磨消縄文を用いた曲線文や連弧文が多用されているとみられる。無文の鉢形土器、図124-2はII群4類に含めるべきか疑問であったが、出土状態から本類とした。またこの土器は、器形の特徴が磐梯町角間遺跡の第124図1や霊山町武ノ内遺跡出土のものに器形が類似するので、後期中葉とみて大過なからう。

第1節 I区縄文時代の遺構と遺物

ここで取り上げた土器の大半は、その文様や器形の特徴から加曾利B 2式期の所産と考えられる。遺跡が関東に最も近いいわき市に立地しながらも、本類は東北的な色彩が強い土器群で構成されている。加曾利B 1式段階に比べ、加曾利B 2式段階になると東北地方の影響が強くなることが近年論じられている。また加曾利B 2式は、東北中部に分布する大湯式の器種組成と文様構成が基盤となっていることが指摘されている(本間:1996)。その様な大きな地域間交流の中に、本遺跡の土器もおかれるべきものであろう。

I区縄文時代の遺構

I期

時期の設定は、I区出土土器の分類記号をそのまま時期に置き換えることとし、早期中葉の田戸下層式期をI期とした。I期の遺構及び遺物はI区西部に集中している。該期におけるI区西部の歴史的景観については、二つの可能性を考えた。ひとつは土器などの廃棄場、または水場であった可能性である。もうひとつは本調査区が居住域であった可能性である。結論としては、後者の可能性の方が高いと考えている。まず前者の可能性についてであるが、概期の土器が最も集中的に出土したP48'グリッドにはごく小規模な沢になっている。土器が出土したLIIcはこの沢部でもっとも厚く堆積していた。またこの沢部は、調査中においても湧水が絶えることが無く、あるいは当時水場として利用され、土器が廃棄されたとも考えられる。

次に後者の可能性についてであるが、本調査区には縄文時代早期の遺構が確実とは言えないまでも複数存在する。第2章で該期に属する可能性を指摘した遺構には、2・4号性格不明遺構の他、67・98・112・121土坑がある。このうち67号土坑以外は、遺物が集中的に出土した地点に立地している。また2・4号性格不明遺構については、住居跡の可能性があるとを前述した。特に2号性格不明遺構の規模及び形状は、他遺跡の早期中葉の住居跡と比較してさほど遜色のないものと考えている。遺構外出土土器は、これらの遺構に関連して使用され、遺棄または廃棄されたものである可能性が高い。

ただし遺構数に比して土器数が多過ぎるのではないかという疑問が残る。本調査区から出土した土器はすでに述べたように尖底部だけでも60個を越える。その全てが1・2軒の住居で所有していたとは考えにくい。遺構数に比べ土器が多い理由として考えられるのは、調査区外に遺構があるか遺構を検出できなかったかであろうが、調査区外に該期の遺構がある可能性は低いと考えている。もし遺構があるとすれば調査区北方の尾根頂部であるが、地形の現況を見る限り、遺構を構築するための広い平坦面が確保できたとは思えない。調査区内では土器が出土したI区西部が最も平坦で、周辺は急斜面といってよい。また前述したように、I区西部から該期の遺物は出土していない。

以上のような状況をみると、検出できなかったかあるいは遺存しなかった遺構がI区西部内にあるのではないだろうか。遺構が失われたとした場合、その原因は該期の住居形態が平地式であったか、または掘り込んでごく浅かったためではないかと考えている。また本遺跡の土が砂質土を基

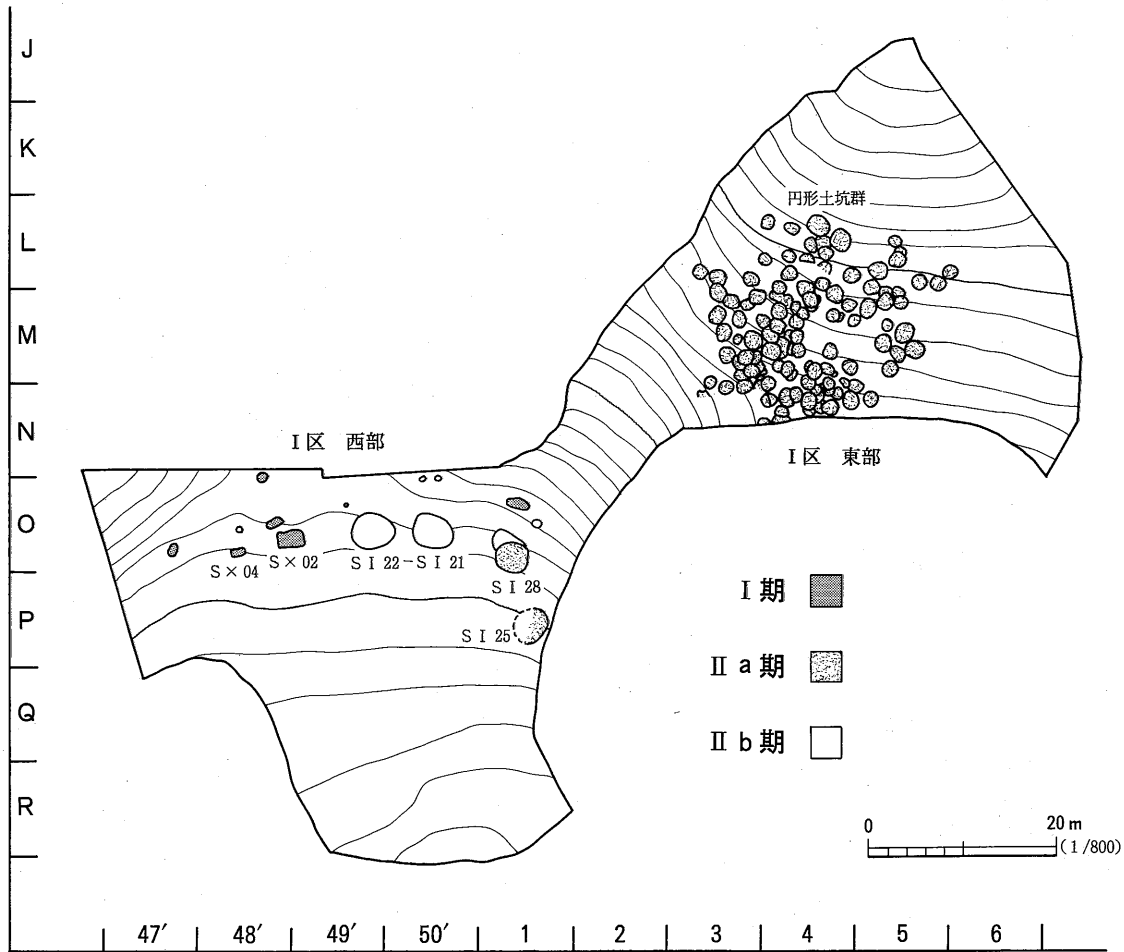


図 163 I 区縄文時代遺構変遷図

調としていることも大きな要因である。I 区西部の堆積状況を改めてみると、L II c だけでも最大 130 cm, L I から L II c までなら最大約 250 cm と、かなり大規模な堆積作用がみられる。当然、負の堆積作用も大きかったと推察されるが、そのような土の動きの中で流失した遺構も相当数あったのではないだろうか。何軒の住居跡があったか明らかにしようもないが、土器の個体数からみて I a 期の I 区西部は、相当規模の居住域であったと考えている。

II a 期

I 区西部に 25・28 号住居跡が営まれた縄文時代中期末葉を II a 期とした。また第 2 章 3 節で記載した I 区東部の円形土坑のうち、79・80 号土坑を除いた 121 基を II a 期に含めた。ここでまず確認しておかなければならないのは、25 号住居跡や円形土坑が丘陵の縁辺部から検出されているため、丘陵南端がかなり崩落している可能性が高いことである。よって該期に限らず、遺構群の全貌を明らかにしえなかったと言える。次に 2 軒の住居跡についてだが、いずれも敷石住居である。25 号住居跡の年代は真野ダム関連遺跡の宮内 A 遺跡・1 号住居跡と同時期としたが、周壁際まで敷石がなされない点についても、同住居跡との類似性を指摘できる。また 28 号住居跡には複式炉があった可能性が高いが、年代的にみて恐らく 25 号住居跡にも複式炉があったのではないだろうか。2 軒の住居跡が同時に存在したかどうかは不明だが、出土遺物を見る限りさほど大きな時間差

はないと考えられる。住居跡を見る限り、II a期のI区西部は小規模な居住域と見ることができよう。次に円形土坑についてだが、121基の土坑のうち古墳時代に再利用されているものが数基あるものの、遺構に伴う遺物がいっさい出土していないため、その所属時期は不明である。ただ、以下に示したような共通性の高いこの土坑群が同時代的な遺構だとするならば、住居跡との重複関係からその構築年代は、少なくとも6世紀前葉より古いことが指摘できる。その特徴を再確認すると、以下のようである。

- 1 I区東部(丘陵部)に集中し、夥しく重複していること。
- 2 各土坑の平面規模が大きく(直径150cm前後)、深さもあること。
- 3 平面形が円形を基調とすること。
- 4 断面形が円筒状またはフラスコ状を呈すること。
- 5 自然堆積土が大半であること。
- 6 遺物がほとんど出土しないこと。

以上の特徴をもつ土坑群の類例を検討したが、古墳時代の遺跡には見出し得なかった。それに対し、縄文時代では以下のような類例を見出し得たので比較を試みた。まず、郡山市堂後遺跡で検出された175基のA類土坑は、上記1～6の全ての特徴に類似している。前期の貯蔵穴と判断されているが、近年中期末葉との見方もされている。同市の妙音寺遺跡からは中期後葉の貯蔵穴が93基検出されているが、多くの遺物が出土する点以外はおおむね本遺跡の土坑群と合致していると言えよう。相馬市境A遺跡で検出されたC類土坑は、中期後半から後期前葉の陥し穴と判断されている。1～6の条件を満たすが、土坑の底面に小ピットを有するものが多い点が異なる。

結論としてタタラ山遺跡の円形土坑群は、中期末葉の貯蔵穴の可能性が高いと考えている。郡山市北向遺跡の調査では、中期末葉の住居1軒に対する貯蔵穴の割合が非常に高いことと、土坑構築域をある程度定めている傾向があることが指摘されている(本間:1990)。また、真野ダム関連遺跡の成果を踏まえ、鈴鹿良一氏は中期末葉には住居群と土坑群が離れた場所に在った可能性を指摘している(鈴鹿:1990)。井 憲治氏も真野ダム関連遺跡の成果をもとに、中期末葉の集落の在り方を考察している(井:1996)。そのなかで中期末葉の集落構成は「川や谷を挟んで居住域や貯蔵域・墓域が分離して存在する傾向」があることを指摘し、「貯蔵穴が村単位で管理された可能性が高い」としている。また遺跡間の位置関係や複式炉の軸方向から、敷石住居跡の性格について「特別の住居跡ではなく、むしろ特別な人物が営んだ住居跡と推察」し、その人物像については「保存食等の管理者・及び指導者や行政区長的な人物と考えられる。」としている。

タタラ山遺跡では敷石住居跡以外の住居跡が確認できず、調査区外に該期の居住域があるか否か知ることもできない。しかし、本遺跡に表れている遺構群で該期の集落が完結すると考えるよりも、井氏が考えるところの集落構成の一端を垣間見ているとする方が、住居と土坑の割合からみて妥当であろう。このような観点に立ち、もし近在に居住域があると考えれば、貯蔵穴の数からみて決して小規模なものではないと考えられる。また出土土器が大木10式期に納まることから、その規

模にも関わらず集落は短期的なものであったと考えている。なお、土坑内のみならずI区東部から該期の土器が出土していない点が疑問として残る。これについては、貯蔵に土器を使用しなかったか、あるいは土坑の計画的な使用停止及び清掃行為を行ったのではないかと考えている。

II b 期

II b 期に属する可能性が高い遺構には21・22号住居跡、34・40・96・157・175号土坑、1号土器埋設遺構があり、いずれもI区西部に立地している。2軒の住居跡からは石囲い炉が検出できず、特に22号住居跡は恒常的に使用されなかった可能性を指摘した。96号土坑や157号土坑、1号土器埋設遺構は墓跡の可能性もあり、小規模ながら集落の様相を呈していたと考えられる。前述したように出土土器が加曽利B2式期に限られること、住居跡が恒常的に使用されなかったことからごく短期的に営まれた小集落であった可能性が高い。

ま と め

I区の縄文時代の遺構・遺物はI区西部に集中している。I区東部からは、時期不明の陥し穴と円形土坑群が検出されているが、縄文時代に属する遺物は皆無に近い。I期には、出土土器数や遺構の検出状態、基本土層の観察結果から、相当規模の居住域が営まれたことと流失した遺構が存在した可能性が高いことを推察した。II a期の円形土坑群に関しては、類例との比較から集落で一括管理された大規模な貯蔵域と推定した。2軒の敷石住居跡については、貯蔵穴の一括管理者の住居である可能性を指摘した。II b期には、小規模かつ短期的な集落が営まれたと推察した。以上のように縄文時代のI区では、断続的に大きく3度の土地利用が行われたと考えられる。第3章5節に示したように、各期の端境期に属する土器も少数ながら出土しているが、それらの年代とみられる遺構は確認できなかった。

第2節 II区縄文・弥生時代の遺構と遺物

II区からはI区とは全くと言ってよいほど異なった年代の土器が出土している。またII区の土器分類は1次調査に準拠したため、I区と統一することができなかった。例えばI区のII群土器は縄文中期～晩期に属する土器であるが、II区のII群土器は弥生土器である。ここではII区の遺構外から主体的に出土したI群1類及びII群土器について、1次報告とまとめてその特徴を再確認するとともに、年代観を明らかにしたい。

縄文時代早期の土器

遺構外出土遺物のI群1類土器が該当する。茅山下層式～上層式期、または素山II a式～II b式期の土器が大多数を占めるが、田戸下層式や常世1式などが少数混じる。少数のものはここでは割愛することとし、茅山式期の土器について検討を加えたい。胎土に多量の繊維を含み、内外面に貝殻条痕文が施された土器である。器形の特徴であるが、口縁部には平縁と波状縁があり、直線的に

第2節 II区縄文・弥生時代の遺構と遺物

外傾するか、緩やかに外反する。口縁部に文様帯を持ち、半截竹管による斜行沈線文や鋸歯状文、重連弧文、円形文などが表出されている。口唇部は平坦なものや丸みを持つもの、鋭角的なものなどがあり、その端部に刻みを有するものが主体を占める。頸部がごく弱く屈曲するものが多く、横方向の連続刺突文が施されている。なかには屈曲部が隆線化しているものや、刺突文のみが施されているものも散見される。胴部は直線的に外傾し、底部は平底である。以上のような特徴は、破片資料による断片的かつ最大公約数的なものであるが、かなり高い斉一性を有していると言えよう。最も特徴的なのは、器体が直線化しつつある点である。逆に本類に欠落している文様要素として、鶴ガ島台式に特徴的な区画文、刺突の充填文がある。また絡条体圧痕文や絡条体条痕文もみられない。以上をまとめると、本類土器は茅山下層式期の新相から茅山上層式期にかけての資料と考えられる。

弥生土器

遺構外出土遺物のII群土器が該当する。器種は壺型土器と甕型土器が大勢を占めるが、鉢型土器・蓋・高杯の可能性のある土器も散見される。壺型土器は1次報告の図81-3のように長頸のものが主体的と推察される。甕型土器は口縁部が短く外反するものが多い。壺・甕ともに口縁部から胴部上半に文様帯をもち、縄文地に沈線文が表出されるものと、沈線文と縄文が文様帯区画線によって明瞭に分離されるものがある。胴部には縄文が施されるが、施文原体に附加条が多用される点の特徴的である。主文様は束線具による沈線文が主体を占める。肋骨文・格子文・縦線文・横線文が多く、その他に重山形文・鋸歯状文・鱗状文・円形文などがある。その大半が檜葉町天神原遺跡に類例を見出だせるものである。例えば1次報告の図86-62にみられる円形文をつなぐ短沈線は、天神原遺跡の第24号土器棺・下方土器にみることができる。本類は施文手法から1~7類に細分したが、天王山式期とみられる6類を除いた大半が、天神原式期に比定される可能性が高い。

II区縄文・弥生時代の遺構

1次調査では、尾根部を中心とした早期後葉の小規模な居住域を考えた。その根拠として貯蔵穴とみられる2号土坑と、竪穴住居跡の可能性が高い5号竪穴遺構の存在を挙げた。1・2号竪穴遺構と1号掘立柱建物跡については該期に属する遺構である可能性を考慮したが、その性格については明らかにできなかった。2次調査区は縄文早期の遺構が検出された尾根部の南方の沢部であるが、該期の遺構は確認されなかった。4章5節で述べたように、土器は沢の深部からまとまって出土している。この沢部は湧水が豊富であるため水場として利用され、それに伴って土器が廃棄された可能性がある。

早期以降、1・2次調査を通して縄文時代に属する可能性のある遺構は確認されていない。ただ、まとまった量の後期前葉の土器が出土している。そのなかで注視されるのは、1号竪穴遺構の堆積土中から出土した深鉢形土器(1次報告図56-1)と、N45グリッドから出土した土器(2次報告図

149-22・23)がよく類似している点である。同時代的に、尾根部から沢部にかけて広い範囲で何らかの生活行為が行われていたことを示していると言えよう。また調査区外の近在に、後期前葉の生活域の中心があるものと推察される。

後期中葉にはI区に小規模な集落が営まれるが、その当時の足跡をII区に確認することはできなかった。長い端境期の後、再びII区が生活域となるのは弥生時代中期後半である。1次調査同様、2次調査においても多量の天神原式土器が出土したが、該期の遺構は確認されていない。1次報告で、尾根部に遺構があった可能性を指摘し、II区が小規模かつ短期的な生活域であったと推察したが、その見解を進展させることはできなかった。今回出土した土器も、尾根部付近で使用されたものが遺棄または廃棄され、土砂とともに沢部に堆積した可能性が高いと考えられる。(今野)

表4 タタラ山遺跡出土石製品石質一覧

遺物番号	出土位置	器種	石質	遺物番号	出土位置	器種	石質
図135-1	M3	削器	黒曜石	図47-9	S125	磨石	石英斑岩
図42-1	SI120	石鏃	流紋岩	図52-9	S127	磨石	マクロナイト
図42-2	SI120	石鏃	メノウ	図88-14	SK169	磨石	花崗岩
図42-3	SI120	石鏃	珪質頁岩	図136-2	O49'	磨石	デサイト
図42-4	SI120	石鏃	流紋岩	図136-4	P48'	磨石	安山岩
図42-5	SI120	石鏃	流紋岩	図136-8	O49'	磨石	デサイト
図42-6	SI120	石鏃	流紋岩	図136-5	R50'	磨石	凝灰岩
図42-7	SI120	石鏃	流紋岩	図138-3	P50'	砥石	中粒砂岩
図42-8	SI120	石鏃	珪質頁岩	図47-7	SI25	磨石, 敲石	花崗岩質砂岩
図42-9	SI120	石鏃	流紋岩	図9-5	SI09	石製模造品	滑石片岩
図42-10	SI120	石鏃	流紋岩	図13-8	SI10	石製模造品	滑石片岩
図135-2	表採	石鏃	珪質凝灰岩	図13-7	SI10	紡錘車	結晶片岩
図135-3	P50'	石鏃	フリント	図37-4	SI19	紡錘車	泥岩
図135-4	Q50'	石鏃	珪質頁岩	図137-8	M5	紡錘車	滑石片岩
図135-5	O1'	石鏃	黒色玉髄	図137-9	N6	紡錘車	結晶片岩
図135-6	R1	石鏃	鉄石英	図137-11	M4	紡錘車	滑石片岩
図135-9	045	石鏃	鉄石英	図10-1	SI09	砥石	凝灰岩
図162-1	II区	石鏃	珪質頁岩	図10-2	SI09	砥石	砂岩
図42-11	SI120	石錘	黒色玉髄	図10-3	SI09	砥石	中粒砂岩
図42-12	SI120	石錘	玉髄	図45-3	SI23	砥石	シルト岩
図135-7	P50'	石錘	鉄石英	図49-4	SI26	砥石	粗粒砂岩
図135-8	P50'	石錘	黒色玉髄	図138-1	M4	砥石	凝灰岩
図136-1	O1	石斧	ひん岩	図138-2	M4	砥石	粗粒砂岩
図137-2	Q47'	搔器	流紋岩	図14-4	SI10	支脚	凝灰岩
図47-8	S125	磨石	花崗岩質砂岩				

第3節 古墳時代の遺構と遺物

土 器

土器の分類については、本章で統一しているため、古墳時代の土器はIV群となる。これをIV a・IV b…と枝番号を付けて6時期に細分した。本資料の中心となるI区東部では、遺構の重複が多く、遺構内の覆土から出土した遺物の中には、本来の遺構の時期とは異なるものがある。このため、それらについては遺構番号の繁雑さを避けるために便宜的に(新)・(中)・(古)を付けた。

IV a群土器は、13・17・23・26・27号住居跡と36号土坑から出土している。本群にあたる住居跡は、すべて焼失家屋であるため、住居跡の廃絶時期については同時期の可能性が考えられる。本群の器種は、杯・甕・甌である。杯は、バリエーションが多く、丸底で体部に稜や段が認められる。内外面に赤色塗彩を施したもの(図164-16)が見られるが、内面に黒色処理を施したものは出土していない。調整では、口縁部外面にヘラミガキを残すもの(図164-1・7・10・15・16)がある。この他に、体部が半球状をなし、口縁部が短く直に立ち上がるもの(図164-4・5)と、須恵器模倣杯身(図164-3)が出土している。甕は、胴部が球形を残し、口縁部が直に立ち上がるもの(図164-9・19・20・21)と大きく外反するもの(図164-27)がある。近隣の遺跡では、朝日長者遺跡35・41号住居跡の資料が挙げられるが、甕の調整でハケメが認められることから、これらの住居跡は本群より後出的なものと考えている。本群から出土した須恵器は、17号住居跡出土の高杯(図164-11)が陶邑窯跡群のMT15に比定され、10号住居跡出土の杯蓋(図164-6)、26号住居跡出土の杯身、13号住居跡出土の甌(図164-8)がTK10に比定されると思われる。このことから、本群の所属時期は、須恵器の年代から6世紀前半と考える。

IV b群土器は、1・11号住居跡から出土している。本群の器種は、杯・甕・甌である。杯は前段階に比べて器高が低くなり、口縁部の外反が前段階より弱くなる。この他に、須恵器模倣杯身(図164-24)が出土している。調整は、外面にヘラミガキが認められず、すべてに黒色処理が施される。甕は、卵形の胴部を呈するものがあるが長胴化の進行がうかがえられ、調整は胴部外面にハケメが多用されている。また、胴部外面の調整で全体にヘラナデが施される資料(図164-26)が認められる。近隣の遺跡では、久世原館3号住居跡が挙げられ、高杯が多く出土するが、本群の器種では前段階と同様に高杯が欠落する。本群の所属時期は、杯の口縁部が次段階よりも外反すること、甕胴部にやや膨らみが残り、口縁部が外傾することから6世紀後半と考える。

IV c群土器は、10(古)・14(古)・16号住居跡から出土している。本群の器種は、杯・甕・甌・鉢である。杯は体部の段や稜が底部付近に認められる。甕は、大型の甕の口縁部が前段階に比べ大きく開き、小型甕の出土が多くなるようである。小型甕には、底部が厚くなるもの(図165-11)と台付きのもの(図165-5)が認められる。近隣の遺跡では、朝日長者遺跡46号住居跡の資料が挙げられ、本群出土の小型甕や鉢が近似する。また、甌では、多孔のものが認められているが、本

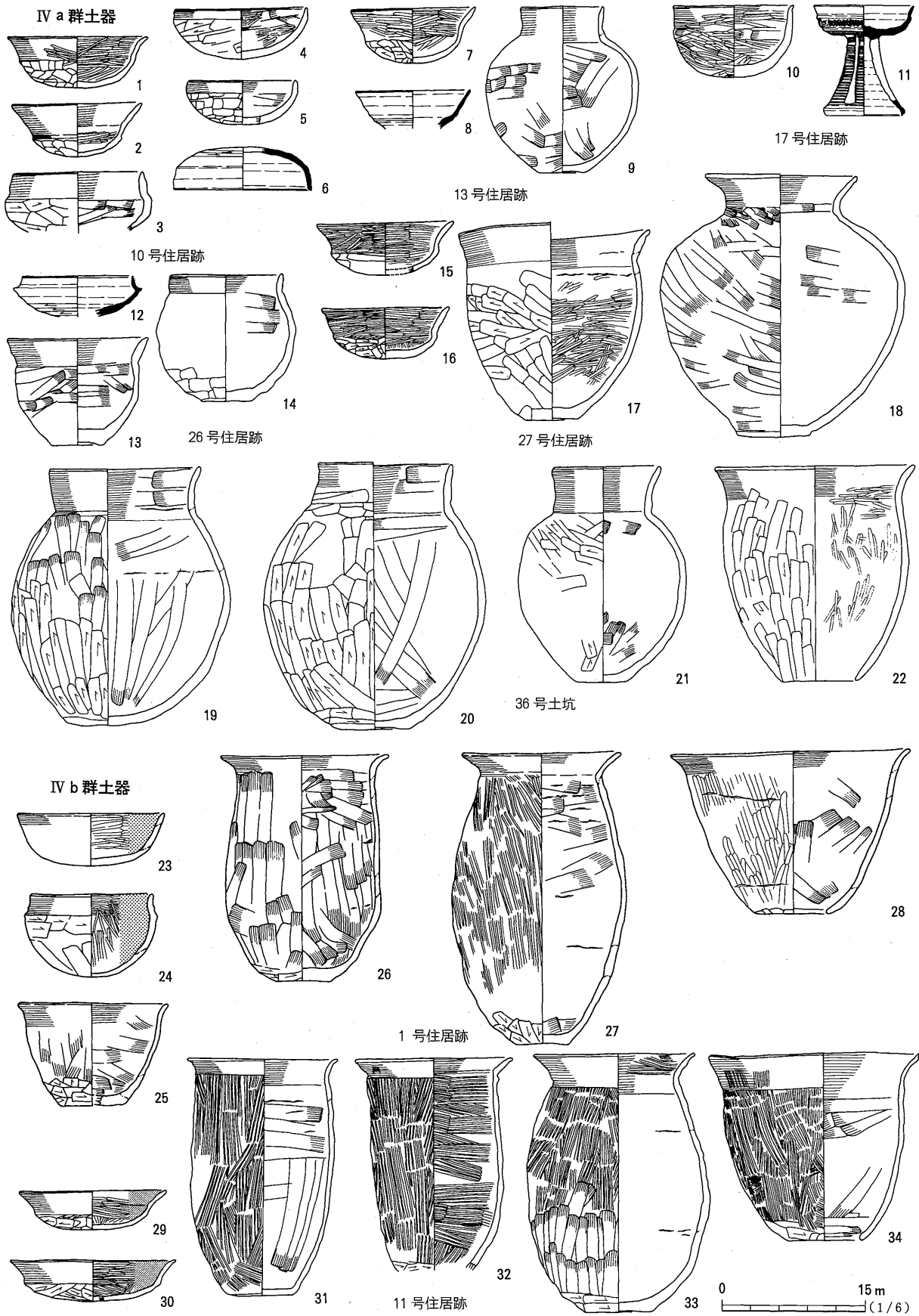


图 164 古墳時代 (IV a・IV b 群) の土器 (1)

第3節 古墳時代の遺構と遺物

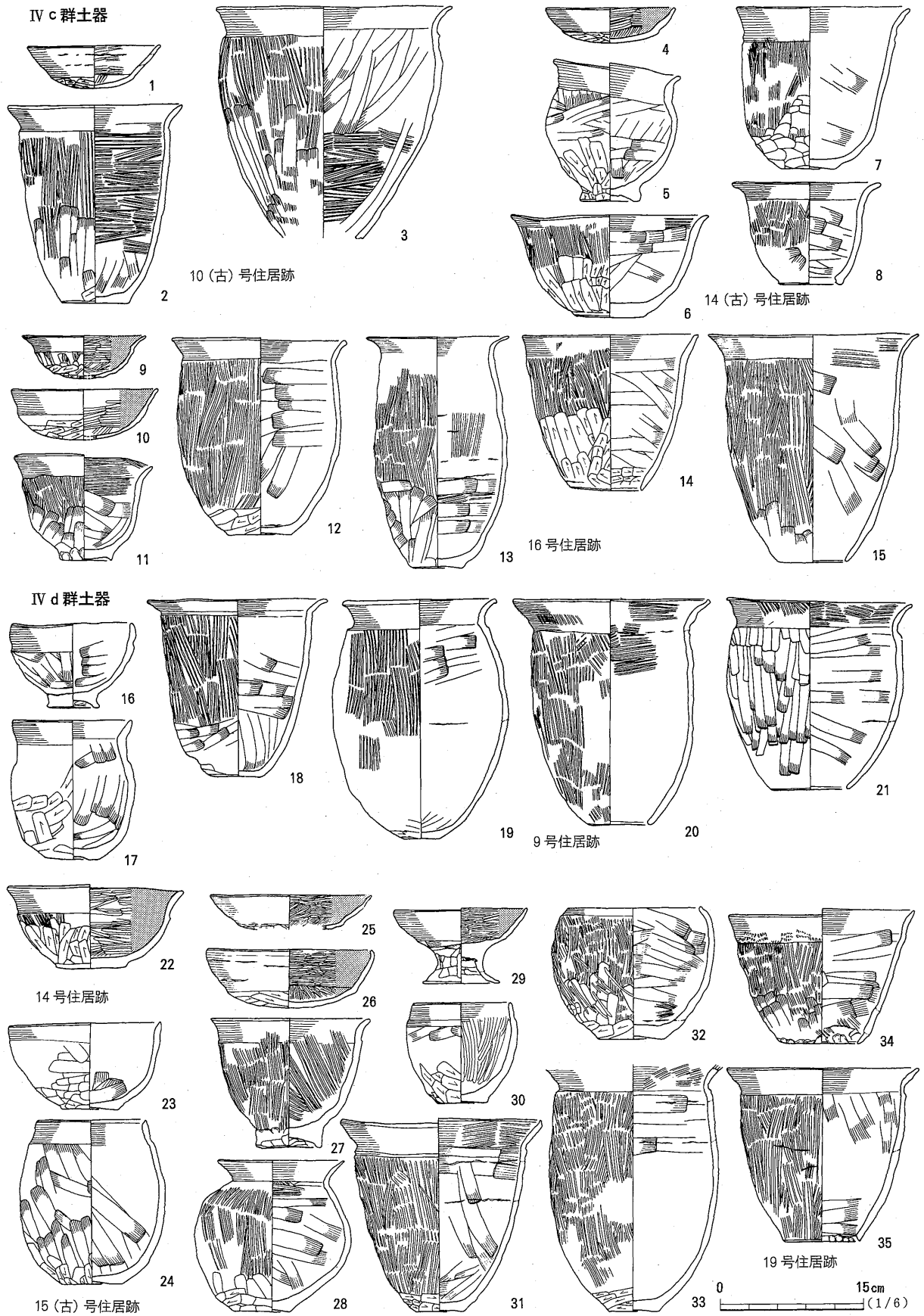


図 165 古墳時代 (IV c・IV d 群) の土器 (2)

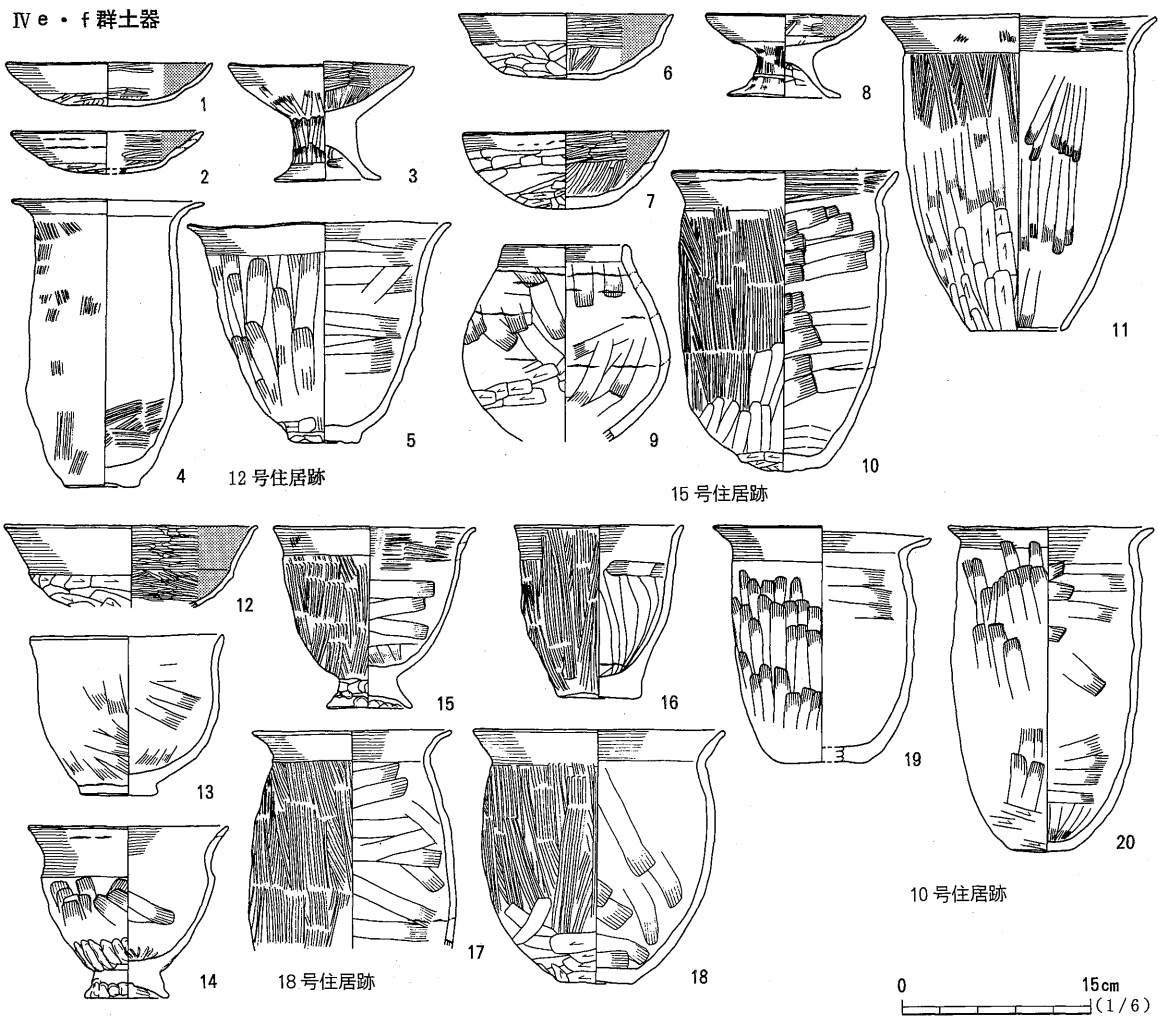


図 166 古墳時代 (IV e・IV f 群) の土器 (3)

群ではすべて無底のものである。本群の資料を比較すると杯では、16号住居跡の図 165 - 9 が 10 (古)・14 (古) 号住居跡の図 165 - 1・4 より古い要素が認められる。本群の所属時期は、杯の底部付近に段や稜が認められ、甕の口縁部が大きく開くことから7世紀前半と考える。

IV d 群土器は、9・14 (中)・15 (古)・19 号住居跡から出土している。本群の器種は、杯・高杯・甕・甌・鉢である。杯の資料は少なく、19号住居跡の図 165 - 25 は、体部の段が底部付近に認められ、底部が平底風になる。高杯は、杯部の底部付近に稜が認められ、脚部は裾が大きく開く。甕は頸部の段が最も明確に見られる時期である。大型の甕は底部が小さくなり、小型甕は、前段階と同様に多く認められ、底部に台が付くもの (図 165 - 16・27) がある。19号住居跡出土の遺物を見ると、甌・大小の甕が出土し、大型の甕より小型の甕が多く出土している。近隣の遺跡では、夕日長者遺跡 5号住居跡、根岸遺跡 4号住居跡の資料が挙げられ、特に夕日長者遺跡 5号住居跡の杯は底部付近に明確な段が認められること、高杯では杯部の口縁部が若干内湾ぎみに立上がり、脚部では裾が大きく開く点の本群の土器に近似する。本群の所属時期は、杯の体部の段が底部付近に認められ、高杯の杯部が本来の段から稜に変化することから7世紀中葉と考える。

第3節 古墳時代の遺構と遺物

IV e 群土器は、12・15(新)・18号住居跡から出土している。本群の器種は、杯・高杯・甕・甑である。杯は前段階に比べて段が弱くなり、口縁部の立ち上がりが強くなり内湾する。このため、プロポーションが半円形に近くなる。この他に、大型杯(図166-12)が認められ、製作技法や器面調整は小型杯と同じである。高杯は杯部の体部に僅かな稜が認められるもの(図166-8)と、杯部が杯と同様に半円形になるもの(図166-3)があり、後者の脚部は、裾が狭まり脚柱が前段階より若干高くなるようである。甕は胴部にやや膨らみを持って頸部にえぐるようなナデが認められ、口縁部が外傾ぎみに立ち上がる。前段階と同様に胴部が下膨らみになるもの(図166-4)がある。この他に、胴部外面の器面調整がハケメではなく、ヘラナデを施すもの(図166-5・9)が認められ、これは次段階の兆しがうかがえられる。12・18号住居跡の資料を見ると、底部の欠損により明確な甑が出土していないが、18号住居跡の資料の小型甕がカマドの中から出土したことから、小型甕と甑の関係が注目される。また、台付きの小型甕はいわき市内では類例がなく、県内でも余り見られないものと思われる。本群の高杯を比較すると、12号住居跡と15号住居跡では、杯部の口縁部の立ち上がりから、15号住居跡の資料の方が古い特徴が認められる。近隣の遺跡では、朝日長者遺跡40・63号住居跡、上ノ原遺跡1号住居跡の資料が挙げられる。18号住居跡の胴部が短く膨らみのある甕は、上ノ原遺跡1号住居跡の資料の中に類例があるが、ここでは甑が伴っておらず、本群のような小型甕は出土していない。朝日長者遺跡40号住居跡出土の資料は、本群の15号住居跡の資料に最も近いものと考えている。本土器群の所属時期は、内湾する杯体部に弱い段が認められ、甕の調整では、胴部外面全体にヘラナデのみが施され、次段階の特徴が認められることから7世紀後半～8世紀初頭と考える。

IV f 群土器は、10(新)号住居跡から出土している。本群の器種は、甕のみである。甕の特徴は、胴部が長胴で頸部にしまりがなく口縁部が大きく開くもので、胴部外面の器面調整ではヘラナデのみを施している。近隣する遺跡では比較する良好な資料がない。本土器群の所属時期は、甕の2点と資料に乏しいが、IV e 群より時期の下がるものとする。

遺 構

今回の調査と平成6年度に調査した遺構を取り上げることにする。この時期の遺構は、今回調査した調査区東部の南斜面で住居跡14軒、土坑4基、性格不明遺構2基、溝跡1条が確認されている。遺構については、住居跡を中心にその特徴を捉え、IV a 期～IV f 期の各期ごとに分けて説明することにする。また、IV c 期～IV f 期の住居跡の中では、同一の住居跡内で時間差を示すカマドの造り替えや床面の違いが認められるものについては、便宜的に(新)・(中)・(古)と付けて説明する。なお、10(古)号住居跡については、明確なプランは確認していないが、当期の遺物がまとまって出土していることから一時期を設けたものである。

IV a 期としたものは、13・17・23・26・27号住居跡、35・36・78・80号土坑、2号溝跡、1号祭祀遺構からなる。斜面の狭い範囲で斜面上位側から下位側にかけて、ほぼ直線的に並ぶように分



図 167 古墳時代 (IV期) 遺構変遷図 (4)

布する。住居跡の南壁と北壁の中心を結ぶ軸は、いずれも等高線に直交する。住居跡の平面形は、遺存状態から方形あるいは長方形と推測される。規模では、13号住居跡の一边が約6mで最も大きく、17・26・27号住居跡は一边が4.7m前後で、23号住居跡は一边が約2.8mと最も小さい。住居跡の構造を見ると、カマドは23・26・27号住居跡で確認され、煙道は27号住居跡のみ遺存している。23号住居跡では焚口の天井に粘土を使用し、26号住居跡では袖材と焚口の天井に石を使用して、袖材の上に細長い平石を渡し天井としたものである。27号住居跡のカマドは、26号住居跡と同様の造りであるが、袖と焚口の天井が石でなく粘土で造られたものである。また、23・26号住居跡のカマド燃焼部では、石の支脚が認められた。カマドの作り替えは認められない。カマドの取り付く位置は、23号住居跡が東壁中央、26号住居跡が西壁北より、27号住居跡が北壁中央である。土坑では、36号土坑から土師器甕・甔が出土し、壁と土師器下側の面の一部が被熱により赤化している。また、土師器出土面には木炭粒が多量出土している。35号土坑では大型の滑石、78号土坑では細かい滑石剥片と3点の手捏ね土器が出土している。35・78土坑の $\ell 1$ は、ほぼ水平に堆積し、また、35・36号土坑の断面形はフラスコ形になる。出土遺物では、製作段階がおえる石製模造品と紡錘車などの滑石製の資料があり、13・27号住居跡の床面あるいは床面付近からは、滑石の未成品が出土し、27号住居跡では、軸棒が付いた紡錘車も出土している。この他に遺物で

は、23号住居跡から砥石が1点出土している。

IV b期としたものは、1・11号住居跡の2軒の住居跡からなる。住居跡の平面形はいずれも方形で、規模は一辺が5.0m～5.6mある。11号住居跡の西側壁中央には、入り口と思われる張り出し部があり、さらに、壁溝とそれにつながる床下土坑がみられる。カマドの取り付く位置は、1号住居跡が北壁側、11号住居跡が東壁側である。1号住居跡のカマドは袖先端に粘土を混ぜたもの、11号住居跡はIV a期の27号住居跡と同じ造りで袖材と焚口の天井に粘土を用いたものである。

IV c期は、10(古)・14(古)・16号住居跡、1号性格不明遺構の3軒の住居跡からなる。住居跡の規模は、14(古)号住居跡の一辺が約7.0m、16号住居跡の一辺が約4.5mである。10(古)号住居跡については、初めにふれたように住居跡の規模や平面形は不明であるが他の2軒の平面形はいずれも長方形を呈する。住居跡の構造を見ると、14(古)号住居跡では、主軸線上に2本の支柱穴が認められる。カマドは、14(古)・16号住居跡で認められ、いずれも北壁中央に取り付く。カマドの袖材と焚口の天井には、粘土を用いており、地下式の煙道を持つ。

IV d期は、9・14(中)・15(古)・19号住居跡からなる。住居跡の規模は、9号住居跡の一辺が約4.8m、14(中)号住居跡が3.4m×5.5m、15(古)号住居跡が3.4m×4.3m、19号住居跡の北壁が約3.8mである。平面形は、14(中)号住居跡が長方形で、それ以外は方形である。柱穴は9号住居跡で4本認めれ、対角線上に配列する。カマドは、14(中)号住居跡では煙道のみ、15(古)号住居跡ではカマド本体が認められたが、煙道は確認できなかった。カマドの取り付く位置は、14(中)・19号住居跡が北壁、9・15(古)号住居跡が西壁である。9号住居跡の袖先端には、砂を含む粘土が使用されている。15(古)号住居跡の袖先端付近では、両側に棒状の粘土、19号住居跡の袖先端には、片側に棒状の粘土が埋め込まれている。

IV e期は、12・15(新)・18号の3軒の住居跡からなる。住居跡の規模は、12号住居跡が3.4m×4.2m、15(新)号住居跡が3.7m×5.0m、18号住居跡の東西軸が4.0mである。平面形は、12号住居跡が台形、15(新)号住居跡が方形、18号住居跡が方形あるいは長方形である。住居跡の構造を見ると、12号住居跡のカマド南側では、小型で浅いピットを確認している。カマドは、15(新)号住居跡では遺存状態が悪く、18号住居跡で煙道が認められた。カマドの取り付く位置は、12号住居跡が東側で、それ以外は北側である。いずれの焚口も、両袖先端部をかけ渡すように粘土が認められ、15(新)・18号住居跡では、袖先あるいは袖先端の両側に棒状の粘土が認められる。

IV f期は、10(新)号住居跡、3号性格不明遺構からなる。10(新)号住居跡は、4.1m×4.6mの規模で方形を呈する。住居跡内施設では、カマドの東側で小型の貯蔵穴が認められる。また、柱穴は3本しか調査できなかったが、配列から4本あったものと思われる。カマドは、造り替えを含め2基確認しており、いずれも北壁に取り付き、煙道が僅かに遺存している。旧カマドは、カマド本体がなく燃焼部の酸化部分が認められるだけであった。

以上のことからIV a期では、大型の13号住居跡が、17号住居跡と並び斜面の上位に位置し、23号住居跡が、1軒のみ小型であることから何らかの特別な性格を持った住居跡と思われる。カマド

の造りと取り付く位置には、統一性が認められない。IV a期の時期、他の遺跡でよく認められる張出しピットや馬蹄形の高まりは確認されなかった。注目されるものとしては滑石製品の出土があり、遺構からは明確に石製模造品製作跡と言えるものは確認できなかったが、35号土坑出土の滑石や遺構内・遺構外から出土の滑石剥片・石製模造品から、IV a期には石製模造品の製作が行われていたと考えられる。特に、35号土坑などは石製模造品などの材料となる滑石置き場と考えられる。なお、遺跡の周辺には玉山古墳や御城古墳群があり、特に、御城古墳群は円墳が主体であることから、IV a期と関連が深いものと考えられる。なお、IV a期とIV b期との間には、空白の期間があり、IV a期のすべての住居跡が焼失によって終焉を迎えたと考えている。

IV b期～IV e期の各期の住居跡軒数は、2～4軒と安定している。規模では、一辺が5 m前後の住居跡が最も多く、14号住居跡のみ一辺が約7 mとやや大きい。前述した改築により拡張したものと考えている。IV a期と異り、住居跡の大きさにまとまりがある。住居跡の構造を見ると、11号住居跡の張出部分は、住居跡内の堆積土と同じ土が入っており、出入り口であった可能性が考えられる。また、床下土坑は床面やカマドの除湿のための施設と考えられる。11・12号住居跡では、カマド脇に貯蔵穴が認められ、カマドに伴う施設と思われる。柱穴は、9・14号住居跡で認められたが他の住居跡では認められなかった。9号住居跡では4本支柱穴をもつが、全体的に掘り込みが浅く、14号住居跡では、2本支柱穴をもち、掘り込みが深くなっている。カマドは、すべての住居跡で認められる。このうち、14・15・19号住居跡ではカマドの造り替えがあり、特に、14号住居跡では2回の造り替えを含め3基のカマドが認められ、住居跡の改築があったものと考えられる。カマドの取り付く位置は、その半数が北側に取り付き、IV b期～IV e期では、カマドの位置にまとまりがない。カマドの造りは、IV a期の27号住居跡から系統をひくと考えられる袖材と焚口の天井に粘土を用いたものが11・15(新)・16・18号住居跡、袖先端に粘土を混ぜたものが1・9号住居跡である。袖材に石が使われたカマドは確認されていない。15(新)号住居跡のカマドでは、燃焼部中央に円柱状の支脚が埋め込まれていた。この支脚は、生粘土の状態に残っており、このことから、支脚に乾燥した状態の粘土を使用し、埋め込まれた部分の粘土が火を受けず生粘土のまま遺存していたものと思われる。

IV f期では、IV b期～IV e期まで2～4軒で続いた集落がIV f期で住居跡1軒となり終焉を迎える。奈良時代のV期に入ると集落が東側に移り、今までとは異なる生業として須恵器生産が始まる。

注目されるのは、カマド内から出土した甕である。1・9・11・16・18・27号住居跡のカマド内からは、2個体の甕が出土しており、いずれもカマドに備え付けられていたものである。これらをカマド正面から見ると、左側に口の狭い長胴甕、右側に広口の甕が配置され、IV a期～IV e期の各住居跡で認められる。これらの甕の用途としては、煮炊きや煮沸などが中心であったと考えている。

なお、IV a期～IV f期の遺構立地を見ると、いずれも調査区東部の南側急斜面で検出しているが、近隣の白岩堀ノ内遺跡試掘調査や番匠地遺跡では、丘陵部に住居跡、谷部に水田が認められている。IV a期は滑石製品から特殊性が感じられるものの、IV b期～IV f期の集落では、特徴的な生業が認

められないことから白岩堀ノ内遺跡の例などに照らして特殊的ではないものと思われる。ただ、この周辺では比較資料が乏しいため、今後の調査資料の増加が待たれるところである。(国井)

石製模造品

いわき地区で石製模造品が出土している遺跡は(表5)の通りである。その大部分は表採資料や遺構外及び遺構内堆積土の上層からの出土のため、明確な時期の特定はできない。時期が特定できる遺跡として、中塩祭祠遺跡があげられる。土師器と須恵器が埋納された遺構とともに、石製模造品が多量出土しており、一緒に出土した土師器・須恵器は鬼高Ⅰにあたる。鏡・刀子などタタラ山遺跡では、出土していない模造品もみられる点などから、中塩祭祠遺跡の方が古い段階であると考えている。また、朝日長者・夕日長者遺跡でも住居跡や土坑から石製模造品が出土している。特に朝日長者遺跡では、49号・102号土坑より手捏ね土器などとともに出土しており、集落内での祭祠の在り方をうかがうことができる。タタラ山遺跡では、35号・64号土坑から土師器甕などと一緒に石製模造品の完成品や未成品及び剥片が多量出土しているが、祭祠を目的としたものではなく、土坑の窪みを利用した滑石片の置き場所ではないかと考えている。

タタラ山遺跡では、完成品の他に多量の滑石片が出土しており、その総量は、10,704.6gである。住居跡からは3,487.1g、土坑及び性格不明遺構からは4,839.5g、遺構外からは2,378.0gであり、遺構外は主に調査区東部斜面の南側のⅡから出土であることから、流れこんだ可能性が高いと考えている。出土量の詳細は(表6)の通りである。滑石片が多量出土していることから、石製模造品工房跡としてとらえることができるが、工房跡として、従来認識されているのは、工作用ピットを持ち、工作道具が出土し、完成品や製作過程を示す未成品が出土していることやそれにとまなう石屑や原石が出土していることである。タタラ山遺跡では、工作用ピットが検出されていないものの、完成品や未成品及び工具痕を残す滑石破片が出土している点や原石が出土している点から、石製模造品工房跡としてとらえることができる。

13号住居跡は、床面より荒割段階の滑石や剥片及び砥石が、27号住居跡からは床面直上及び床面より滑石片が出土している。同じ時期の住居跡として、17・23・26号住居跡があげられ、26号住居跡以外からは滑石片や石製模造品が出土している。17号住居跡では、住居跡内堆積土や重複している8世紀前葉の10号住居跡の堆積土より、単孔方形盤や破片が出土している点や23号住居跡では、滑石片の多くがⅠからの出土であるが、床面直上より砥石が出土している点から工房跡としての可能性も有り得る。

タタラ山遺跡で出土した石製模造品は、種類としては、双孔円盤、単孔方形盤、剣形品があげられる。未成品を含めて双孔円盤が多い。完成品は、双孔円盤3点、単孔方形盤1点、剣形品3点と滑石の破片の総量10,704.6gと比較すると非常に少ない点と臼玉が出土していないのが特徴である。

石製模造品の製作方法及び調整方法の違いによる時期についてであるが、有孔円盤は、古い段階のものは円形で丁寧に表面を研磨し、穿孔間幅が短く、中央部に穿孔されている。時期が新しくな

表5 いわき市石製模造品出土遺跡一覧

	有孔円盤	有孔方盤	剣	刀子	鏡	勾玉	白玉	紡錘車	斧	時 期
1 表玉山	○		○	○						不明
2 金光寺裏	○			○						不明
3 中塩	○	○	○		○	○	○	○		鬼高1式
4 原後		○					○			不明
5 下山口	○					○	○			不明
6 内宿	○									古墳中期
7 広畑	○					○				不明
8 大畑E	○					○	○			栗圀式
9 夕日長者	○	○			○	○	○	○		和泉式～栗圀式
10 朝日長者	○		○	○		○	○		○	和泉式～栗圀式
11 勿来後田	○					○	○			不明
12 平窪御殿								○		不明
13 日陰	○									不明
14 瀬戸	○						○			不明
15 須釜										不明
16 高月B	○							○		不明
17 久世原	○									不明
18 大夫	○									不明
19 日吉下	○									不明

るにつれて、楕円形および方形に近い形状になり、穿孔間幅が広くなり、穿孔位置も両端に近くなる。また、形割の際の剥離面や自然面をそのまま利用するものへと簡略化してくる。研磨については、古い段階では、表裏によって研磨に差があり、表面は丁寧に研磨し、裏面は研磨が比較的雑であるが、新しくなるにつれて、研磨が雑になり、表裏とも明瞭に研磨痕を残すことになる。また、側面は、縦方向ではなく、横方向の研磨が多くなる。剣形品は、古い段階のものは、三角形を呈し、両面に鑄を持ち、研磨が丁寧である。新しくなるにつれて鑄がなくなり、扁平になる。

このような点からするとタタラ山出土の有孔円盤は、楕円形及び方形に近い形状になり、研磨痕が明瞭に残り、穿孔間も距離間がある点や剥離痕が明瞭に残り、その剥離痕に調整を加えていない点や剣形品は、不整形に近い形状で、鑄を持たず、研磨をせずに穿孔している点から、本遺跡の石製模造品は衰退期の所産と考えている。5世紀中葉～6世紀初頭の正直A遺跡では、剣形製品にも研磨が施されているが、タタラ山遺跡では、剣形製品は、不整形に近く、研磨もされていない点から正直Aの石製模造品より新しいと考えており、共伴した遺物も6世紀前半であることから、タタラ山遺跡の石製模造品は、その年代の所産と考えている。

第3節 古墳時代の遺構と遺物

表6 タタラ山遺跡滑石片出土量一覧

(単位 g)

遺構名	層位	重量	総重量	備考	遺構名	層位	重量	総重量	備考	
S I 09	ℓ 1	23.4	500.1	7 C中葉	S I 16	ℓ 2	4.5	4.5	7 C前葉	
	ℓ 2	30.6			S I 17	ℓ 2	67.1	142.0	6 C前半	
	ℓ 3	446.1				ℓ 3	74.9			
S I 10	ℓ 1	11.2	297.5	7 C前葉 8 C前葉	S I 18	ℓ 1	61.9	65.4	7 C後葉~8 C初	
	ℓ 2	20.7				床面	3.5			
	ℓ 3	12.7			102.7	S I 19	ℓ 1	18.8	7 C中葉	
	ℓ 4	243.3					床面	83.9		
	ℓ 5	7.7				552.0	S I 23	ℓ 1	449.0	6 C前半
	床面	1.9						ℓ 2	85.5	
S I 12	ℓ 4	1.6	1.6	7 C後葉~8 C初		床面	17.5			
S I 13	ℓ 1	342.6	1292.3	6 C前半	S I 27	ℓ 1	9.3	266.6	6 C前半	
	ℓ 2	618.2				ℓ 2	7.7			
	ℓ 5	31.6				ℓ 3	11.4			
	床面	299.9				ℓ 4	112.6			
S I 15	ℓ 2	33.4	262.4	7 C中葉 7 C後葉~8 C初		ℓ 5	12.5			
	ℓ 2	199.1				床直	19.3			
	床面	8.9				床面	93.8			
	貼床	21.0								
S K 35	ℓ 1	4148.0	4148.0		S K 61	ℓ 2	3.4	3.4		
S K 36	ℓ 1	399.7	476.4		S K 64	ℓ 1	25.6	27.6		
	ℓ 3	26.5				ℓ 4	2.0			
	ℓ 4	23.9				S K 68	検出面	2.3	2.3	
	ℓ 6	26.3				S K 78	ℓ 1	152.3	152.3	
S K 41	ℓ 2	6.4	6.4		S X 03	ℓ 1	23.1	23.1		

グリッド	層位	重量	グリッド	層位	重量	グリッド	層位	重量
	表採	135.1	M 3	L II	424.1	N 4	L II	247.6
L 4	L II	2.9	M 4	L II	739.4	N 5	L II	29.7
L 5	L I	8.1	M 5	L II	495.8	O 48	L II	160.0
L 6	L II	46.3	N 3	L I	82.2	O 50	L II	6.8

次に石製模造品の製作工程を考慮すると、タタラ山遺跡では、原石を搬入し、荒割・形割・研磨し、製品にしたと考えている。出土した原石や剥片及び未成品より、ある程度の製作工程がうかがうことができる。滑石の性質上剥離の際にできるリング等の観察ができず、分割の工程が不明瞭な部分もあるが、ノミ状の工具痕跡がみられるものや擦り切りの溝が確認できる破片も出土している。石製模造品は、荒割→形割→研磨→穿孔の順序で製作が進められたと考えている。

① 原石 35号土坑のℓ1より、縦25cm×横21cm、厚さ4cm、重さ3,300gの滑石が出土しており、石製模造品は、コア状の石材ではなく、板状の石材から作り出していることがうかがわれる。

② 荒割 板状の原石を薄く剥いでいき、荒割したものが13号住居跡の床面より出土している。大きさは縦12cm×横9cm、厚さ1.5cm、重さ250gである。この大きさの滑石片が35号土坑のℓ1より多量出土しており、この中には擦り切り溝や工具痕跡を明瞭に残しているものもある。

③ 形割 (図168-1)は、表面に窪んだ面がみられ、幅広の先端が丸いノミ状工具で削り取った痕跡がある。(図168-2)は、側面を斜位に削り取った痕跡が一部みられる。削り取った部分を観察すると、段がついているので、擦り切り溝をつくって割ったと考えている。(図168-3)は、側面を斜位に削り取り、この段階で円形を意識して削りだしている。

④ 研磨 (図168-4)は、研磨痕が表裏及び側面に強く残っており、側面は横方向の研磨である。大きい未成品は、(図168-3)とほぼ同じ大きさである。

⑤ 穿孔 (図168-5)は、片側穿孔であるが、穿孔のさいの剥離痕がみられ、剥離後の調整がみられない。穿孔途中のものを観察すると、底面は丸いため、穿孔道具の先端は丸い形態であることがうかがわれる。

このようにタタラ山遺跡では、石製模造品を製作していることをうかがえる遺物が出土しているが、集落内の一部で製作していたのか、集落全体が工房集団として機能していたか明確にはできない部分もあるが、滑石の出土状況から26号住居跡以外の6世紀前半の住居跡は、何らかの形で石製模造品の製作にかかわっていたと考えている。また、明確に6世紀前半に比定できる石製模造品の出土例が県内ではないが、今回の調査ではこの時期まで石製模造品は製作され、そして祭祠がおこなわれていたと考えられる。

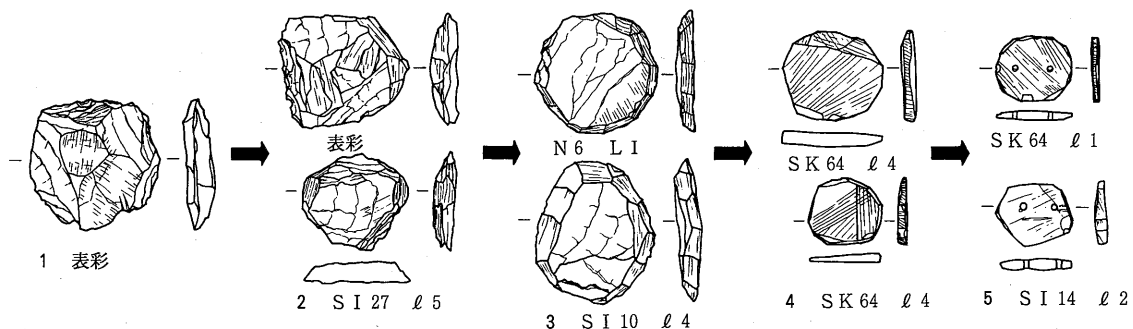


図168 石製模造品製作工程図

紡 錘 車

タタラ山遺跡では、紡錘車が未成品及び欠損品も含めて9点出土しており、また、紡錘車の未成品とみられる滑石片も出土しているため、部分的ながらも製作工程がうかがえる。

紡錘車は、荒割→形割→穿孔→研磨の順で製作されたと考えている。

① 荒割 (図169-1) は、滑石上面を平らなノミ状工具で削りだしている痕跡がある。

② 形割 (図169-2) は、荒割の滑石から円形に形をつくりだしている段階である。擦り切りの明瞭な痕跡を残しており、破片から推定すると擦り切り溝を円形にめぐらして、形を整えている。(図169-3) は、欠損品であるが、形割段階の滑石の中央部を狭い幅のノミ状工具で削り取った痕跡があり、側面は面取りをして削り出している。

③ 研磨 穿孔していない研磨の済んだ未成品が出土していないため、研磨が先か穿孔が先か明確にできない部分もあるが、欠損品から想定すると研磨後穿孔する段階で破損したのと考えている。研磨は、丁寧に施されており、また研磨後の装飾の形跡はない。

④ 穿孔 19号住居跡出土(図137-4) は、孔内がきれいに面取りされているため、片側穿孔と考えている。N6グリッドのLII出土(図137-9)及びM4グリッドのLII出土(図137-10) は、孔内に段がついているため、両側穿孔であると考えている。孔径より推定できる工具幅は6~8mmである。穿孔の段階で破損したものや穿孔部が中心よりはずれ、斜めになっているものもあり、失敗品として廃棄されたものであると考えている。

タタラ山遺跡の紡錘車は、鋸歯状の刻目もない点や27号住居跡の床面から軸がついた紡錘車も出土している点から祭祠を目的としたものではなく、実用品として使用していたのと考えている。

紡錘車の製作の時期であるが、石製品模造品と同じ石材を使用している未成品が出土している点から6世紀前半の年代と考えている。

(大竹)

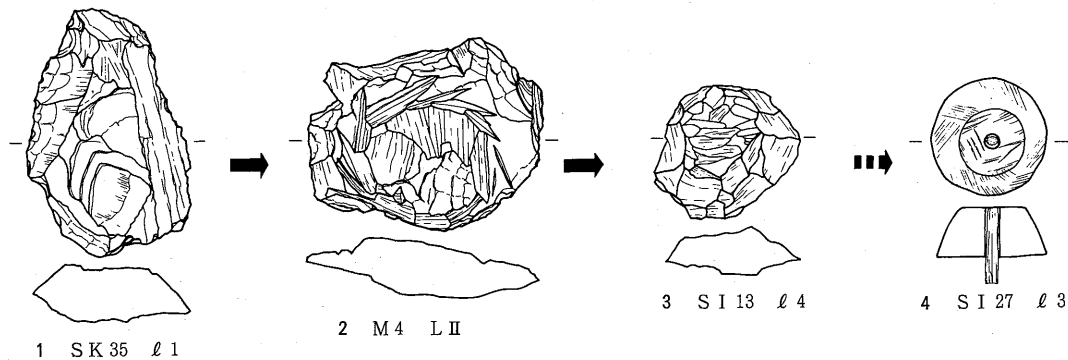


図169 石製紡錘車製作工程図

第4節 奈良・平安時代の遺構と遺物

ここでは、平成6年度(第1次調査)に調査されたI区東部の資料を中心に取り上げることにしたい。I区東部東斜面では、主な遺構として住居跡8軒・掘立柱建物跡1棟・須恵器窯3基・木炭窯3基が確認されているが、その内の木炭窯2基は須恵器窯を後に再利用したものである。遺物は8世紀代のものがその大半をしめると考えられ、6世紀～8世紀初めまで変遷するI区東部南斜面(第2次調査住居跡密集区)の最終段階(IVf群土器)にI区東部東斜面で最も古い3号住居跡が属すと考えられる。以下で遺物を概観して検討を加えるが、I区東部南斜面と切り離して節を設定したのは、I区東部東斜面にそれまでとは異なる新たな展開が見られるからであり、その開始をVa期とすることにしたい。なお、検討の結果、第1次調査報告の年代観と異なる部分が生じたが、最終的に当報告に調整した。

奈良・平安時代の遺物

Va期とする2号住居跡は3号住居跡を切って存在し、出土遺物には土師器杯・甕、須恵器杯・高台付杯・蓋・甕があり、土師器はロクロを使用しないものである。須恵器杯は器高が低く、底部全面に手持ちヘラケズリを施すもので、高台付杯には杯部が箱型を呈す特徴的なものがある。胎土分析によれば、図示した半分は他地域から持ち込まれたものとされている。2号住居跡の土器セットは奈良時代の須恵器を含むという点で、以前とは異なる新しい動きが看取される。

Vb期は東斜面で須恵器生産が行われる時期で、2・3号須恵器窯、4・6～8号住居跡、3号木炭窯の遺物段階である。土師器杯は、ロクロを使用し体部下端から底部に全面に回転ヘラケズリを施すことを基本とするが、回転ヘラケズリが底部中央まで及ばず、糸切り痕が観察できるものがある。内面のヘラミガキは横方向の緻密なものを基本とする。須恵器杯は内面のヘラミガキを除けば土師器杯と同様の製作技法であり、8号住居跡の資料を例にとれば図170-38が36と、図170-40が35と極めて近いことを知ることができる。さらに注目されるのは3号須恵窯の図171-42・43の資料であり、42はロクロを使用しない土師器の技法、43は内面にヘラミガキを施しながら、還元状態となっている。第1次調査の報告では42・43を焼き台に転用した土師器としており、確かに43はわずかな内黒部分が残っておりその可能性が強い。しかし42については8号住居跡で見たように土師器と須恵器が同一の形態を採っていることからすると、須恵器窯で焼成された土師器とも思えるものである。ただ、当段階で注意されるのは2号須恵窯の図171-47で、底部に糸切り痕を残し体部下端に軽くヘラケズリを施しており、その特徴は通常であれば時期が下降する要素である。しかし口径が15cm以上の大振りで底径と口径の比が0.5cm以上あり、器形も他の杯とさほど変わらないことに重きをおけば、本来再調査が施されるべきものが、何らかの理由で省略されたものと考えられる。また、同形態の鉢や大型甕の置き台とも思われるような特種製品(図171-52・

第4節 奈良・平安時代の遺構と遺物

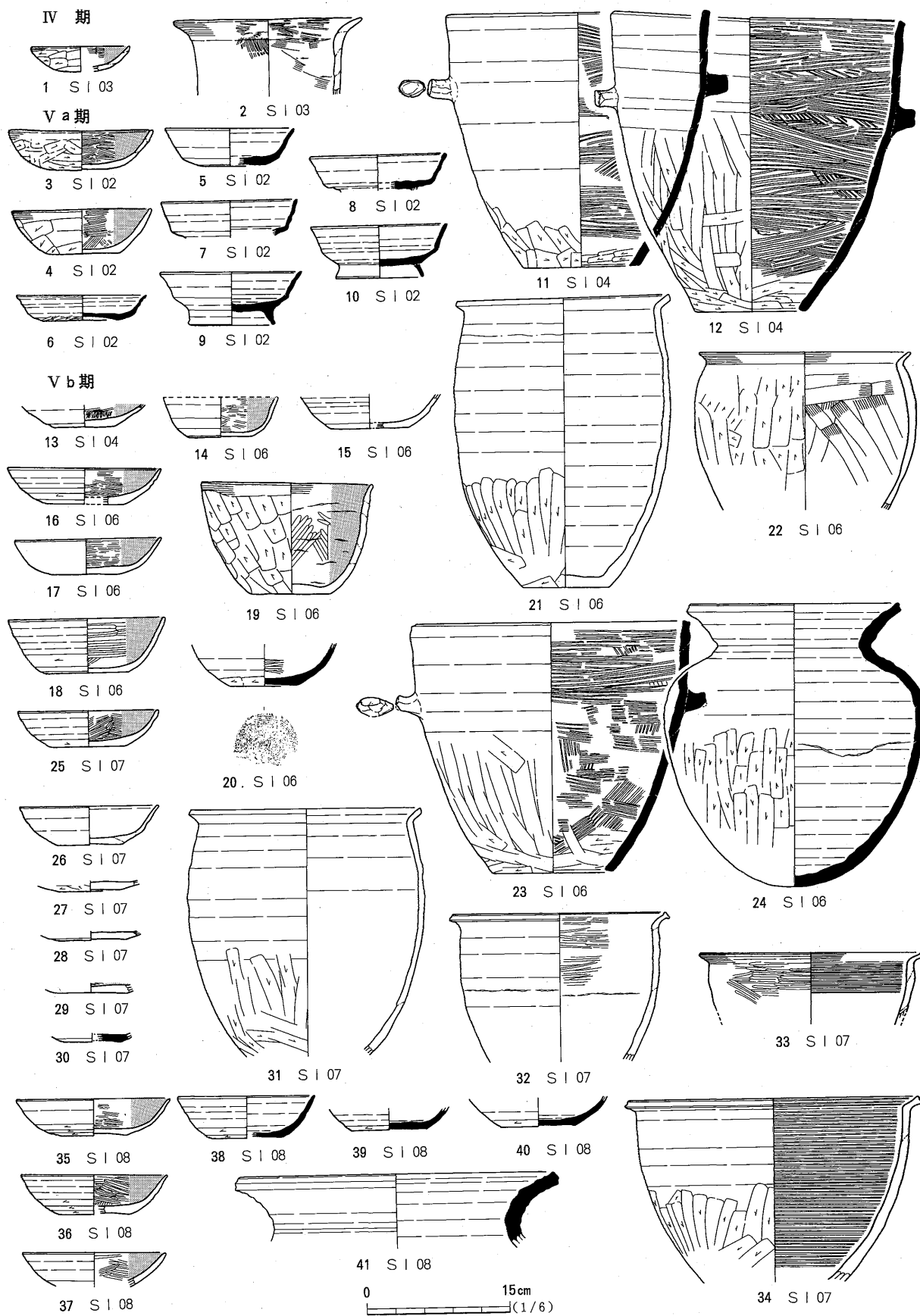


図170 奈良・平安時代(V期)の土器群(1)

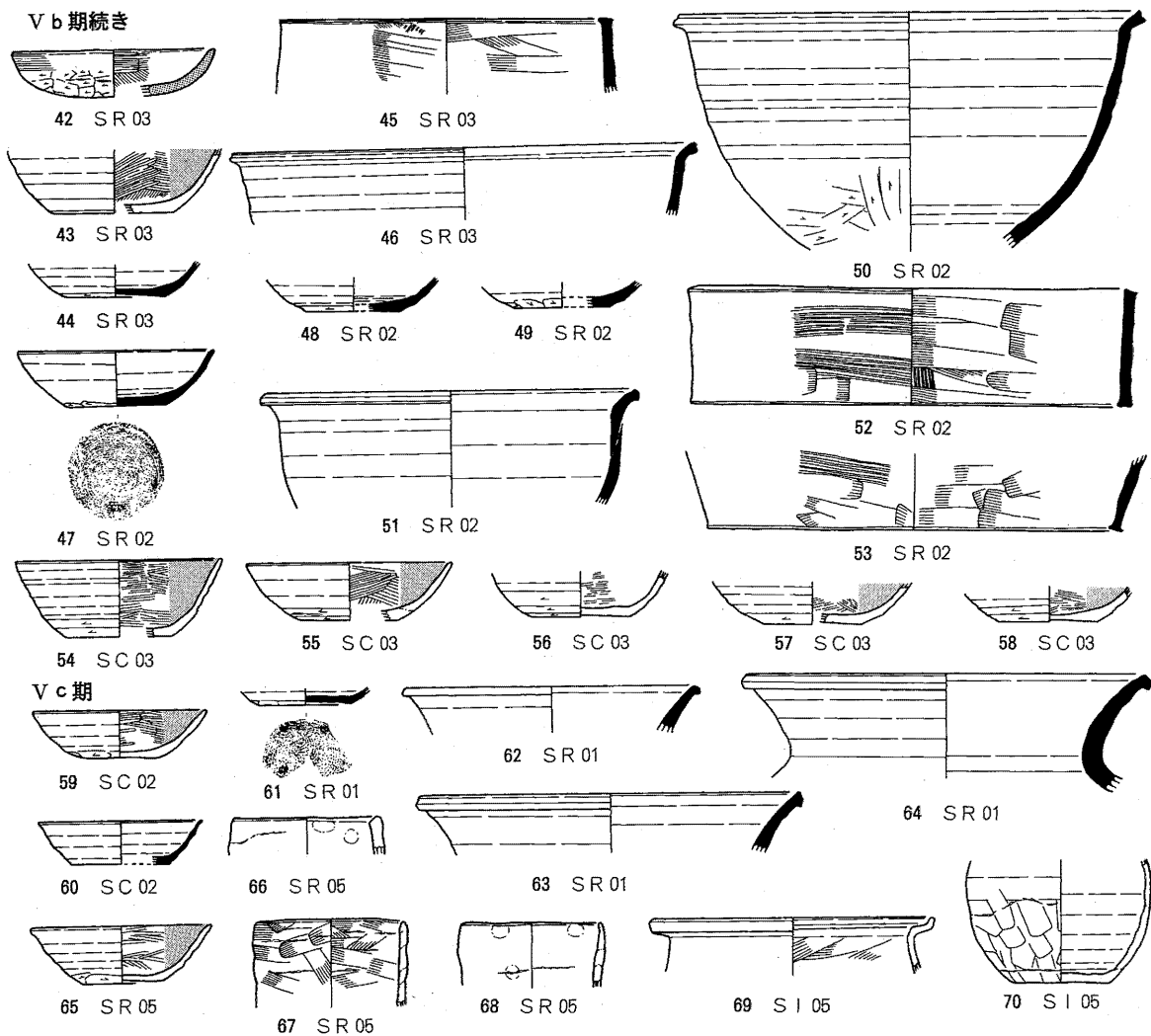


図 171 奈良・平安時代 (V期) の土器群 (2)

53) が 3 号須恵窯から出土していることを考えると、2 号須恵窯のみ当段階から下降させることは困難と思われ、47 の類似品が 6 号住居跡に見られる (図 170 - 20) 点も考慮しておきたい。

なお、3 号木炭窯については調査時には土師器焼成遺構も考慮したが決め手に欠け、最終的に木炭窯として報告している。しかし、上記の状況と住居跡から出土する甕類が硬質であることも考慮すれば、土師器焼成遺構としての可能性も捨てきれず、両者の性格を持ち得ると考えておくことにしたい。

V c 期とする資料は 1 号須恵器窯と、1 号須恵器窯を再利用した 2 号木炭窯及び 5 号住居跡の遺物である。遺物の中には新旧が看取できるものもあるが、資料が少量のため大きく一時期ととらえることにしたい。須恵器の中で図 171 - 60 は復元口径約 13cm を測り、V b 期の遺物と比較すると一廻り小さくなっており、底部全面に手持ちヘラケズリが施されている。それに対し図 171 - 61 は手持ちヘラケズリが全面にいきわたらず、底部の半分に回転糸切り痕を残すもので、焼き歪んで図示できなかった破片の中には 61 の類似品は見られず糸切り無調整で底径の比較的小さいものを含

んでいる。したがって1号須恵器窯の資料は、糸切り無調整へ移行していく時期であると言え、60は1号須恵器窯の操業期間の長さを示す資料かあるいは混入とも考えられる。土師器杯図171-59は底部に手持ちヘラケズリを施すが、回転糸切り痕を残すもので、時期的に須恵器と矛盾するとは思われないが、59が木炭窯に帰属するものとすれば時期差が考慮される。ただし調査の所見では長い時期をおかずに木炭窯に転用したとされており、土器の特徴もそのことを示しているように思われる。

5号住居跡の資料は土師器のみで、製塩土器と考えられる筒型土器を含むものである。土師器杯は底部全面に手持ちヘラケズリを施すものであるが、椀型風となっており、甕口縁端部が立ち上がっているのも時期の下る要素と考えられる。

以上の3期を設定することにし、次に各期の年代について検討することにした。V a期の須恵器には堆積土中の出土ではあるが、器高の低い杯図170-6、器高の高い杯図170-5、杯部が箱型の高台付杯図170-8、杯部に稜のある高台付杯図170-10の4種が認められる。多賀城関連で年代推定ができる宮城県日の出山窯跡群や硯沢窯跡群からすると杯図170-6タイプが先行し、後に杯図170-5タイプが加わることを知ることができ、その時期は8世紀中葉と考えられる。高台付杯図170-8は、いわき市金山窯跡に類例が見られるが、金山窯跡資料は表採資料であり新旧の遺物が混在しているように思われる。その中で高台付杯図170-8は、器形からして口径が大きく器高の低い杯に共伴すると考えられ、8世紀初頭頃に中心を持つ宮城県長根窯跡や大蓮寺窯跡の高台付杯を考慮すれば杯部の稜がはっきりとしたものから伊達町伊達窯跡に見られるようなやや丸みをおびたものに変化していくことが予想される。おそらくその移行期も8世紀中葉であろう。そして当期の土師器杯はロクロを使用しない平底風の丸底である。

V b期の須恵器杯は底部片が多いが、復元できるものや底径からすると口径14cm以上の大振りなものでしめられ、杯図170-38の底径と口径の比は約0.5である。底部の再調整は回転ヘラケズリが主流であるが上記杯図171-47のように糸切り痕を残すものも見られる。杯47以外の特徴は宮城・福島県において8世紀前半から見られるが、当資料は8世紀前半のものに比べ器高が高めであることが年代の下降要素として指摘できる。ただし、杯底部の再調整を考慮すれば8世紀後葉までは下げにくい感があり、やはり8世紀中葉が時期の目安になると思われる。なお、須恵器甕9・10・21は口縁部が平縁で南比企窯跡群では8世紀前半でその生産を終えているが、当資料が長胴で単孔であることが年代の下降要素と考えておくことにしたい。また、杯47については上記のように口径の大きさと口径底径比からすれば当期として問題ないであろう。

土師器杯は内面調整を除けば須恵器杯と同様であり、図170-20と図171-47、図170-34と図171-50の類似も住居跡と窯跡の同時性を補強している。ロクロを使用した土師器については近年その出現年代のさかのぼる資料が増加しており、本例も古いロクロ土師器の一例となる。

V c期は資料数が限られ、明確にしえない部分も多いが、1号須恵器窯については、杯底部破片資料に回転糸切り無調整で、底径5.6cmまで縮小した資料が含まれ、甕の口縁端部がやや下方に引

き出されているのもV b期と異なる特徴である。杯において口径の復元できるものがなく底径との比較などもできないが、全体に時期の下る印象である。ただ、再調整が杯体部下端に見られるものや、長頸瓶底部破片に高台部断面が箱型に近い資料があることからすると、9世紀後葉までは下らないと思われる。おそらく1号須恵器窯は9世紀中葉までの操業と考えられ、2号木炭窯の操業もその時間幅の中に収まるものと考えられる。5号住居跡土師器杯図171-65は上述のように2号木炭窯出土土師器杯図171-59に比べ器高が高く、体部がやや内湾して碗型に近い器形となっていることから、9世紀中葉でも後半に属するものであろう。

なお須恵器杯図171-60は特徴からすると9世紀前葉までさかのぼり得ると思われ、本期に含めるには難がある。同様の特徴を有す資料が他に見られず、出土位置を重視すれば本期となるが、上述の可能性を考慮しても、明確な位置付けの困難な資料である。

奈良・平安時代の様相

遺物の項目でも述べたが、奈良時代以降の遺構はI区東部東斜面に集中しており、図172に見る配置となっている。そしてV a期はIV期最後の3号住居跡を切り込む2号住居跡と、1棟の掘立柱建物跡(SB01)から成り、掘立柱建物の出現と2号住居跡の土器セットは新しい時期の到来を十分に感じさせるものである。特に2号住居跡の須恵器は律令が施行されて間もない時期に開窯したと考えられるいわき市金山窯跡群の製品に類似しており、IV期の住居跡群とは異なる社会背景が予想できる。おそらくV a期には当地区の土地利用に対してそれまでの集落地とは異なる性格付けがなされたと考えられ、班田の整備と口分田の耕作に向けて、それまでの集落はより広い沖積地側に移動したとするのも、仁井田川下流域に条理遺跡を見る当地であれば許されるのではないだろうか。これらのことを踏まえれば、V a期の遺構については、新たな土地利用を開始するための先駆的施設としての性格が予想され、出土する須恵器にタタラ山産以外のものを含むとする胎土分析結果もそのことを示しているように思われる。

V b期は須恵器生産が開始される時期で工房となる竪穴住居跡と2基の須恵器窯がある。工房ではロクロピットと粘土が検出されており、胎土分析によれば工房内の粘土と窯で焼かれた製品の粘土は一致している。ただ工房内の粘土と調査区内で採取できる粘土は異なる結果となっており問題を残すが、当地区は狭い範囲で得意な袖玉山層が発達し、数百m離れた二ッ箭断層を境に地質を複雑に変えている。したがって素材粘土の採取地が近隣にまったく無いとはいいきれず、なお検討の余地があるといえるだろう。

なお、分析結果ではV a期の2号住居跡の須恵器には、搬入品の他にタタラ山産の製品が含まれており、そのことを重視するとV a期の遺構はV b期まで存続していた可能性が考えられる。つまりここでは搬入須恵器をもってV a・b期を設定したが両時期は一連の流れの中にあると推察され、V a期の遺構を先駆的施設としたのはそのことによるのである。

上記の解釈が許されるならば、V a～b期の遺構には一連の意図が読み取られ、V a期で須恵器

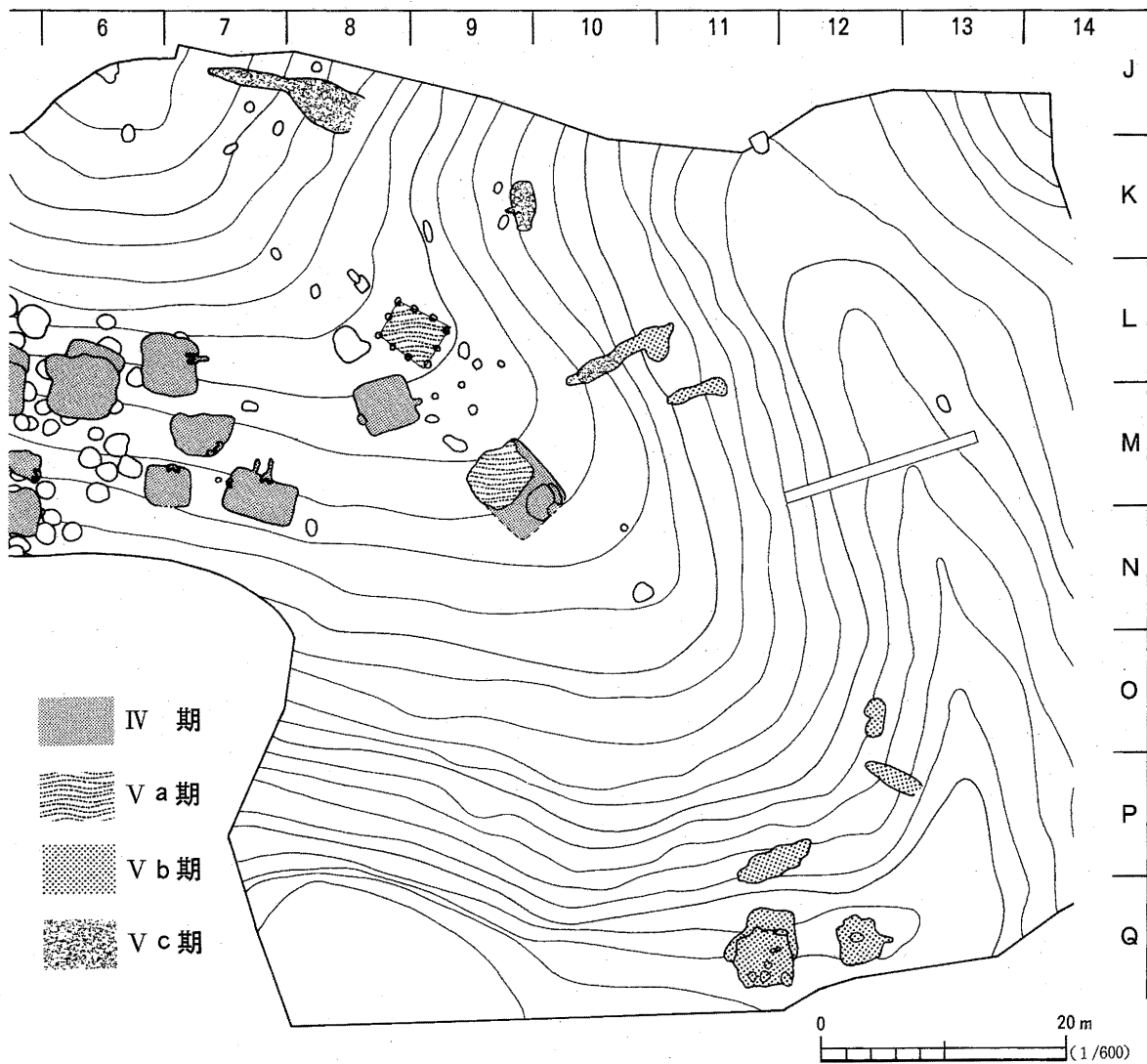


図172 奈良・平安時代(V期)遺構変遷図

生産の準備に入り、引き続きVb期で操業を開始することができる。さらにその遺構配置は沢近くに工房、丘陵斜面に窯、丘陵上位にVa期から続く掘立柱建物を含む関連住居という極めて計画性の高い配置が結果的に完成している。おそらく時期からして律令制下における必要什器の生産を意図していたものと考えられる。

次に遺構からは離れるがVb期の土師器資料に触れておきたい。当期の土師器は住居内でタカラ山産の須恵器と共伴していることから8世紀中葉となるが、ロクロを使用した土師器杯が大半をしめていることが注目される。最近でこそロクロ土師器の出現年代について当期までさかのぼらせる意見が述べられているが、懐疑的にならざるをえない場合も少なくない。しかし、ロクロ土師器の出現が須恵器生産と関連している以上、同一器形であれば土師器であっても須恵器と同様の年代があたえられる可能性を有している。現に宮城県日の出山窯跡群では8世紀第1四半期のロクロ土師器杯が確認されており、当遺跡の例もその延長線場にあるものと考えられる。そして当遺跡の土

師器焼成遺構として第1次調査で3号木炭窯とした遺構を想定しておきたい。ただし、このようなロクロ土師器は、律令制施行初期の生産地及びその近接地と生産管掌地において出土する可能性が最も高く、一般に斉一化されたロクロ土師器が流布するのはやや遅れることが予想される。なお、上記の生産地近接地の例として、いわき市五反田A遺跡5号住居跡と本宮町山王川原遺跡7号住居跡をあげておきたい。両遺跡とも住居内においてロクロ土師器と非ロクロ土師器が共伴しており、五反田A遺跡の近隣には梅ノ作窯が存在し、山王川原遺跡は安達郡衙比定地の郡山台遺跡に近く、川岸に位置する遺跡であるが郡山台遺跡との間には、手ごろな低丘陵を控えている。

Vc期は1号須恵器窯の操業と須恵器窯を利用した木炭の生産が行われる時期である。1号須恵器窯では杯形焼台を伴う長頸瓶なども焼成されており、Vb期の生産品に含まれない器種がみられる。長頸瓶を生産している会津若松市大戸窯跡群、原町市入道迫窯跡などを考慮すると、Vb期とは異なる生産体制であったと思われる。規模的には入道迫窯跡に近いことが予想され、入道迫窯跡において須恵器窯を利用して木炭窯を築いているのも当遺跡と類似している。継続性があり規模的に大きくなる大戸窯跡群とは対照的に、比較的緩慢な規制の中での手工業生産が予想される。

なお、5号住居跡とI区西部の20号住居跡も本期に含めたが、窯跡より新しい要素を有しておりかならずしも同時に存在したとはいきれない部分がある。ただ、いずれにしても山林利用を目的とした遺構と考えられ、そのひとつには地名などから鉄関連の生業が予想される。

最後にVc期に関わる文献資料として『続日本後記』承和7年(840)「大橋24処・溝池堰26処・官舎正倉190宇を修する磐城郡大領と、私池をつくり公田80町をうるおし、私稲を輸し公民を賑給する宮城郡権大領に、外従五位下を仮授ける」の記事をあげておきたい。この記事からすれば、磐城郡郡司である土豪が相当の財力と動員力を私的に有していることが推察され、公地公民制を基本とする律令体制からはかけ離れた動向といえるであろう。上記の比較的緩慢な規制の中での手工業生産と述べた背景のひとつとして引用した。

(安 田)

第5節 ま と め

タタラ山遺跡は平成6・7年の2か年に渡って27,300㎡の調査が実施され、縄文時代から近世までの遺構と遺物が確認されている。遺構の内訳は住居跡29軒、掘立柱建物跡1棟、須恵器窯跡3基、木炭窯4基、土坑205基、竪穴状遺構4基、溝跡9条、祭祀跡1か所、焼土遺構2基、埋甕1基、性格不明3基、ピット19基であり、この他に調査区内の沢部を中心に多量の縄文・弥生土器と少量の石器が出土する箇所がある。以下、時期ごとに記述することにした。

当遺跡で最も時期のさかのぼる縄文時代早期の資料はI区西部とII区で確認されており、I区西部が田戸下層式、II区が茅山下層～上層式(大半を平成6年度調査)に比定される時期を中心としたものである。I区西部では丘陵斜面の緩やかな沢目より小破片を含んで約9,500点に及ぶ土器片が出土し、器形の復元できる個体も複数あり、県内でも有数の資料といえることができる。資料の大半

第5節 まとめ

は調査区の沢目を中心とした自然堆積層より出土するものであることから、北側丘陵頂部あるいは沢目周囲が遺物の出所と思われる。土器の文様としては貝殻・沈線文系土器から条痕文系土器までみられ、早期後半の土器変遷を考える上でも貴重である。また、同期の遺跡として著名ないわき市竹之内遺跡とは土器の文様及び遺跡の立地において共通する部分がある。

Ⅱ区では丘陵頂部から生ずる複数の沢から条痕文系繊維土器が多く出土している。丘陵頂部には竪穴状遺構と貯蔵穴状の土坑が確認されており（常磐自動車道遺跡調査報告4に載録）、それぞれが有機的に関連していると考えられるが、遺構の遺存状況が良好とはいえず踏み込めない部分がある。ただし総合的には居住痕跡として認定できることから、小規模の居住域が丘陵頂部に形成されていたものと考えられる。なお、Ⅱ区では縄文時代前期前葉の土器もみられるが、少量であるために詳細は不明である。

縄文時代中期末から後期にかけての資料はⅠ・Ⅱ区で確認されているが、住居跡が確認されているのはⅠ区西部のみで、住居跡は丘陵急傾斜部から緩傾斜部への変換部に4軒検出されており、内2軒は敷石住居である。他にⅠ区東部からは126基の大型円形土坑が確認されており、埋没状況からその大半が当期に属するものと考えられる。敷石住居と土坑群は関連して存在した可能性が高いが、住居軒数の少なさと炉跡が貧弱あるいは不明確である点が土坑数に対して不釣り合いであり、一般的な集落とは異なる性格づけが必要と思われる。Ⅱ区資料は調査区東端の沢部から多く出土したもので、その出所は調査区外に想定される。

縄文時代晩期の資料は極めて少量で、Ⅰ区から散発的に出土しているが、その出所は不明である。

弥生時代の資料はそのほとんどが中期後半の天神原式に比定できるもので、その出土はⅡ区東半の沢部が中心である。遺物量は壺と甕を中心に約5,500点と多いが、遺構としては検出時に石斧の出土をみた焼土遺構1基（常磐自動車道遺跡調査報告4に載録）だけで、該期の様相をうかがうには資料不足である。しかし近辺の発掘調査によれば、タタラ山遺跡と同一丘陵上の玉山遺跡からは天神原式期の墓跡が確認され、丘陵南側を流れる仁井田川下流域（戸田条里遺跡）では弥生時代中期前半の水田跡が確認されており、それらのことから天神原式期にはⅡ区の東側を流れる袖玉山川流域でも水稻耕作が行われていたことが予想される。そのことを踏まえればⅡ区東半は水田を臨む高地という位置づけと水源としての位置づけが可能で、丘陵上に遺物だけがぽつんと存在するわけではないことを知ることができる。

弥生時代以降の資料として認められるのは、古墳時代後期から始まるⅠ区東部の住居跡群とそれにとともなう遺物である。その始まりは6世紀前半の5軒の住居跡からであり、須恵器・土師器・石製品・鉄製品・銅製品などの遺物が出土している。居住域に狭小な丘陵斜面を選地し石製模造品を製作していることと、住居跡すべてが火災によって終焉を迎えていることが注目されるが、立地面での類例としてはいわき市番匠地遺跡があげられ、そこでは谷水田を臨む丘陵急斜面にやはり古墳時代からの住居跡が重複して確認されている。おそらく耕作地に則した居住域の設定が行われたと思われ、当遺跡の場合も西側の狭く開けた高倉川の流域に谷水田を想定すれば、同様の形態が想定

される。しかし、当遺跡における住居の火災による終焉と石製品模造品の製作を重視すれば、集落の特殊性が際立つように思われる。なお、タタラ山遺跡と同一丘陵上の東方1.5～2 kmには玉山古墳群と御城古墳群が存在し、遺跡間の距離及び時期からすると、特に御城古墳群との関連が予想される。また、『和名抄』所載の磐城郡玉造郷は当遺跡所在の玉山村と目され、丘陵南側を流れる仁井田川あるいは仁井田川支流に対する玉造川の古称も当地に展開した古墳文化の一端を示していると思われる。

次の段階は土師器甕においてハケメ調整が主体となる時期で、6世紀後葉から7世紀を通し、8世紀初頭頃まで住居跡が変遷している。住居跡の重複から前段階とはやや断絶をもって3軒の住居跡が出現し、以後およそ3軒単位で4回の変遷が復元される。出土遺物は土師器の他に見るべきものがなくなり、集落構造の変質が予想される。当期の資料は上記の番匠地遺跡と戸田条里遺跡にみられ、戸田条里遺跡では広大な沖積地内において、弥生時代から近世までの水田跡とともに当期の住居跡2軒が検出されている。2軒の住居跡は当時水田をひかえた微高地に位置していたと考えられ、番匠地遺跡例を加えるならば沖積地から谷部まで水田が広がっていたものと思われる。なお、この傾向はすでに弥生時代から見られるが、時代を経るごとに沖積地ではより広域に、谷部ではより狭小な地区に耕作地が伸びたものと予想される。おそらく当地区も水田経営主体の集落であったと思われる。

奈良時代に入るとI区東部において須恵器の生産が開始される(常磐自動車道遺跡調査報告4に記載)。住居跡には粘土溜まりやロクロピットがみられるものがあり、それまでの集落とは生業を異にしていることが看取される。高い位置に建てられた掘立柱建物跡も須恵器生産に関わる作業棟の可能性があり、遺構配置から計画的意図が感じられる。

以後、9世紀中葉に再び須恵器生産が行われ、引き続き鉄生産関連と思われる木炭生産も見られるが奈良時代の生産体制とは異なる背景が予想される。なお当地区及び周辺地区には、現在でもタタラ山・炭窯・鍛冶前などの地名が残っており、長きに渡って鉄生産が行われたことを思わせる地域となっている。

平安時代以降、中世には当地区周辺が館跡として利用された可能性も考えられているが、調査区内でその痕跡は確認されていない。また、最も新しい遺構は六道銭を埋納した近世の墓坑であるが、単独の検出であり、広く墓所として利用されることはなかったようである。(安 田)

引用・参考文献

- 1966 亀井 正道 『建鉢山』 吉川弘文館
- 1969 大場 磐雄 『神坂峠』 阿智村教育委員会
- 1972 伊藤 信雄 「石製模造品出土の遺跡」『神道考古学講座 第2巻』 雄山閣
- 1976 中橋 彰吾・後藤 勝彦 『白石市史 別巻 考古資料編』 白石市
- 1976 中村 五郎他 『磐梯町の縄紋土器』 磐梯町教育委員会
- 1979 小野 真一他 『常陸伏見』 伏見遺跡調査会
- 1979 山内 清男 『日本先史土器の縄紋』 先史考古学会
- 1980 菅原 文也 「福島県の祭祠遺跡」『伊達西部地区遺跡発掘調査報告』 福島県教育委員会
- 1981 大場 磐雄 「神道考古学の体系」『神道考古学講座 第1巻』 雄山閣
- 1981 寺村 光晴 「祭祠遺物製作遺跡－特に滑石製模造品製作の遺跡について－」『神道考古学講座 第5巻』 雄山閣
- 1981 伊藤 信雄 「石製模造品出土の遺跡」『神道考古学講座 第2巻』 雄山閣
- 1981 椙山 林継 「石製模造品」『神道考古学講座 第3巻』 雄山閣
- 1981 丹羽 茂 「清水遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ』 宮城県文化財調査報告書第77集 宮城県教育委員会 日本国有鉄道仙台新幹線工事事務局
- 1981 田辺 昭三 『須恵器大成』 角川書店
- 1981 鈴木 重美 『朝日長者・夕日長者遺跡』 いわき市埋蔵文化財調査報告第6冊 いわき市教育委員会
- 1982 平川 南 「付章 律令制下の多賀城」『多賀城跡』 宮城県多賀城跡調査研究所
- 1982 工藤 哲司 『栗遺跡』 仙台市文化財調査報告書第43集 仙台市教育委員会
- 1982 馬目 順一他 『竹之内遺跡』 いわき市埋蔵文化財調査報告第8冊 (財)いわき市教育文化事業団
- 1982 馬目 順一他 『榊葉天神原遺蹟の研究』Ⅰ・Ⅱ 榊葉町教育委員会
- 1982 檜村 友延 『内宿遺跡』 いわき市埋蔵文化財調査報告第7冊 いわき市教育委員会
- 1983 西川 博孝 『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅲ (財)千葉県文化財センター
- 1983 和深 俊夫 『日吉下遺跡』 いわき市教育委員会 建設省磐城国道工事事務所 (財)いわき市教育文化事業団
- 1984 西川 博孝 『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅳ (財)千葉県文化財センター
- 1986 馬目 順一他 「原始」『いわき市史 第一巻』 (財)いわき市教育文化事業団 いわき市
- 1987 宮城県文化財保護課 『硯沢・大沢窯跡』 宮城県文化財調査報告書第116集 宮城県教育委員会 宮城県道路公団
- 1987 柳沼 賢治 「永作遺跡」『郡山東部7』 郡山教育委員会 (財)郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団
- 1987 西川 博孝 「田戸下層式土器」『古代』第83号
- 1987 領塚 正浩 「田戸下層式土器細分への覚書」『土曜考古』第12号
- 1988 木本 元治他 「境付遺跡・境A遺跡・境B遺跡・善光寺遺跡」『国道113号バイパス遺跡調査報告』Ⅳ 福島県文化財調査報告書第192集 (財)福島県文化センター
- 1988 横須賀市人文博物館 『考古資料図録』Ⅲ
- 1988 『善長寺遺跡』 (財)茨城県教育財団
- 1989 仲田 茂司 陸奥国における奈良時代土師器の地域性について 歴史 第72輯
- 1989 山崎 義夫他 『山王川原遺跡』 本宮町文化財調査報告書第11集 本宮町教育委員会
- 1989 鈴鹿 良一 「福島県の早期後半から前期初頭の土器群について」『東北・北海道における縄文時代早期中葉から前期初頭にかけての土器編年について』 第4回縄文文化検討会シンポジウム
- 1989 高田 勝他 「北山田遺跡・風早遺跡・堂後遺跡」『郡山東部』9 (財)郡山市埋蔵文化財発掘調査事業

団

- 1989 本間 宏他 「中ノ沢A遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告』4 福島県文化財調査報告書第218集 (財)福島県文化センター
- 1989 本間 宏他 「登戸遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告』3 福島県文化財調査報告書第196集 (財)福島県文化センター
- 1990 鈴鹿 良一他 「羽白C遺跡(第2次)・宮内A遺跡(第1次)・宮内B遺跡(第2次)」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告』XIII 福島県文化財調査報告書第210集 (財)福島県文化センター
- 1990 鈴鹿 良一他 「宮内A遺跡(第2次)・上ノ台B遺跡・上ノ台C遺跡・上ノ台D遺跡・日向遺跡(第2次)・日向南遺跡(第4次)」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告』福島県文化財調査報告書第231集 (財)福島県文化センター
- 1990 本間 宏他 「牧場山遺跡(第2次)・北向遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告』7 福島県文化財調査報告書第232集 (財)福島県文化センター
- 1990 辻 秀人 「東北古墳時代の面期について(その2)」『考古学古代史論攷』伊東信雄先生追悼論文集刊行会
- 1990 佐藤 典邦 『大畑E遺跡』いわき市教育委員会 (財)いわき市教育文化事業団 小名浜港湾建設事務所
- 1990 篠原 祐一 「石製模造品観察の一視点」『古代』第89号 早稲田大学考古学会
- 1990 丸山 泰徳他 「永光院・ジダイ坊・京塚」『昭和61年度県営園場整備事業関連遺跡調査報告』長沼町文化財調査報告書第12集 長沼町教育委員会
- 1990 山岸 英夫他 「角間遺跡・高森平A遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告』8 福島県文化財調査報告書第240集 (財)福島県文化センター
- 1991 大平 好一他 「前原A遺跡・前原B遺跡・桜立D遺跡」『矢吹地区遺跡発掘調査報告』8 福島県文化財調査報告書第249集 (財)福島県文化センター
- 1991 大平 好一他 『前原A遺跡・前原B遺跡・桜立D遺跡』(財)福島県文化センター
- 1991 猪狩 忠雄他 『戸田条理遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第29冊 (財)いわき市教育文化事業団 いわき市教育委員会
- 1992 大戸古窯跡群検討会 「東日本における古代・中世窯業の諸問題」『大戸窯検討のための会津シンポジウム資料』会津若松市教育委員会
- 1992 山口 典子他 「石製模造品の製作」『研究紀要 13』(財)千葉県文化財センター
- 1992 金子 直行他 『山内清男考古資料4 田戸遺跡資料』奈良国立文化財研究所史料第34冊 奈良国立文化財研究所
- 1992 本間 宏他 「北平遺跡・鷺沢道南遺跡」『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告』XIV 福島県文化財調査報告書第273集 (財)福島県文化センター
- 1992 菅原 祥夫 「山崎遺跡」『矢吹地区遺跡発掘調査報告10』福島県文化財調査報告書270集 (財)福島県文化センター 福島県教育委員会
- 1993 高島 好一 『久世原館・番匠地遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第33冊 (財)いわき市教育文化事業団 いわき市教育委員会
- 1993 酒井 清治 「須恵器の編年 関東」『古墳時代の研究6 土師器と須恵器』雄山閣
- 1993 篠原 信彦 『大蓮寺窯跡』仙台市文化財調査報告書第168集 仙台市教育委員会
- 1993 古川 一明・太田 肇 『日の出山窯跡群』色麻町文化財調査報告書第1集 色麻町教育委員会
- 1993 佐藤 敏幸 『代官山遺跡』河南町文化財調査報告書第6集 宮城県河南町教育委員会
- 1993 東日本埋蔵文化財研究会 『古墳時代の祭祠—祭祠関係の遺構と遺物—』

- 1993 国井 秀紀他 「作田B遺跡・糺内遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告』22 福島県文化財調査報告書第293集 (財)福島県文化センター
- 1993 竹島 國基他 『桜井』 竹島コレクション考古図録第3集
- 1993 本間 宏他 「馬場平B遺跡・栗出館跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告』20 福島県文化財調査報告書第291集 (財)福島県文化センター
- 1994 麻生 優他 『城ノ台南貝塚発掘調査報告書-千葉県香取郡小見川町-』 千葉大学文学部考古学研究報告第1冊 千葉大学文学部考古学研究室
- 1994 恩田 勇 「沈線文土器の成立と展開 (2)」『神奈川考古』第30号
- 1994 村田 晃一 「土器から見た官衙の終末」『古代官衙の終末をめぐる諸問題資料』 東日本埋蔵文化財研究会
- 1994 真山 悟 「下伊場野窯跡群調査の概要」『第20回 古代城柵官衙遺跡検討会資料』 古代城柵官衙遺跡検討会
- 1994 石田 明夫 『会津大戸窯』遺物編 会津若松市文化財調査報告書第37号 福島県会津若松市教育委員会
- 1994 山内 幹夫 『正直A遺跡』 福島県文化財調査報告書288集 (財)福島県文化センター 福島県教育委員会
- 1995 広岡 敏 「五反田遺跡」『平成6年度福島県考古学会発表資料』 福島県考古学会
- 1995 石本 弘 「福島県における律令制成立以前の土器様相とその背景」『東国土器研究 第4号』 東国土器研究会
- 1995 服部 敬史 「東国における古墳時代須恵器生産の特質」『東国土器研究 第4号』 東国土器研究会
- 1995 (財)郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団 『妙音寺遺跡第2次調査-現地説明会資料-』
- 1996 井 憲治他 「真野川上流域における縄文中期末葉の集落構成」『目黒先生頌寿記念 論集しのぶ考古』 論集しのぶ考古刊行会
- 1996 本間 宏他 「福島県における縄文後期中葉の土器群」『第9回縄文セミナー 後期中葉の諸様相』 縄文セミナーの会

付 編

付編1 タタラ山遺跡出土須恵器の蛍光X線分析

奈良教育大学 三辻 利一

1) はじめに

関東や東北地方には5～6世紀の須恵器窯はほとんど見つからないにもかかわらず、古墳からは古い須恵器がしばしば出土する。そして、それらの須恵器の胎土分析もしばしば試みられてきたが、その多くは陶邑群産と推定されてきた。

本報告ではタタラ山遺跡から出土した、6世紀代と推定される須恵器の蛍光X線分析のデータから、その産地を推定した結果について報告する。

2) 分析結果

分析値は表1にまとめてある。古い須恵器の産地推定法は地元古い窯がある場合には、地元窯と陶邑群の間に2群間判別分析法を適用する。もし、地元古い窯がない場合には、新しい時期の窯の製品で代替させ、地元群か陶邑群かの2群間判別分析法を適用すれば、まず、両者の相互識別の可能性がわかる。そして、両者の相互識別が可能であれば、古墳出土須恵器に対して、 D^2 (陶邑) ≤ 10 の条件を満足するかどうかを調べる。 D とは母集団の重心からのマハラノビスの汎距離であり、通常、 K , Ca , Rb , Sr の4因子を使って計算される。この D^2 (陶邑) ≤ 10 という条件は母集団である陶邑群の試料に対して、5%の危険率をかけたホットテリングの T^2 検定をかけて合格するところをもって、陶邑群の領域としているところからきている。表1にも、この計算結果を示してある。No51, 53, 54の3点はこの条件を満足するので、陶邑産の須恵器と推定される。しかし、No52はこの条件を満足せず、ここでは産地不明とせざるを得ない。この結果は図1の $Rb-Sr$ 分布図と、図2の $K-Ca$ 分布図でも確かめられる。陶邑領域は約30基の陶邑内の、各時期の窯跡から出土した約150点の試料の分析値をほとんど包含するようにして描かれたものである。計算から予想されるように、No51, 53, 54の3点はいずれも、陶邑領域内に分布することがわかる。さらに、これら3点は両図でよくまとまって分布していることから、同一窯での製品である可能性をもつ。これに対して、資料FBC95052は、その D^2 (陶邑) 値からも予想されるように、両図でも陶邑領域を少しずれるところに分布する。目下のところ、産地不明としておかざるを得ない。

東北地方でも、今後とも、古い須恵器が果たして陶邑産と推定されるかどうかの観点から、データ集積する必要がある。

表1 タタラ山遺跡出土須恵器分析値

試料番号	出土位置	種別	器形	時期	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	D ² (陶邑)	挿図番号
FBC 95051	I区SI13 ℓ 2	須恵器	甕	6 C	0.474	0.095	1.47	0.562	0.349	0.128	1.4	図21-3
FBC 95052	I区SI13 床面	須恵器	高杯	6 C	0.642	0.102	2.52	0.763	0.288	0.285	18.0	図32-2
FBC 95053	I区SI26 ℓ 1	須恵器	杯	6 C	0.529	0.151	2.32	0.583	0.362	0.384	2.4	図49-3
FBC 95054	I区L 4 攪乱	須恵器	不明	6 C	0.522	0.149	2.36	0.583	0.392	0.387	1.0	

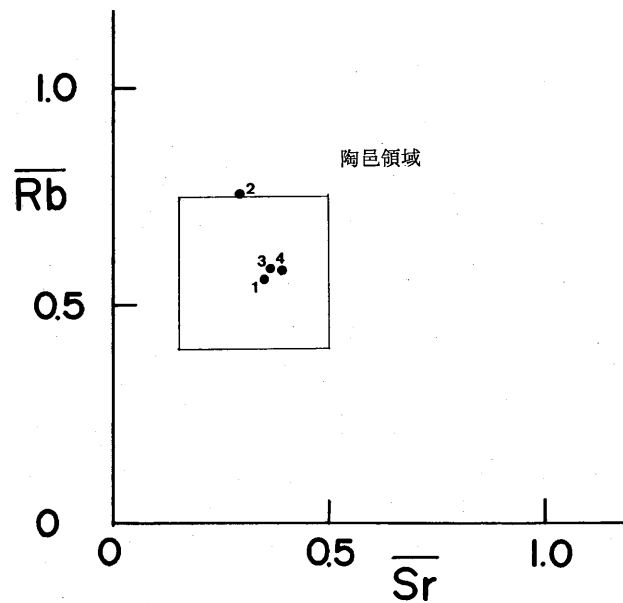


図1 タタラ山遺跡出土須恵器の Rb-Sr 分布図(1)

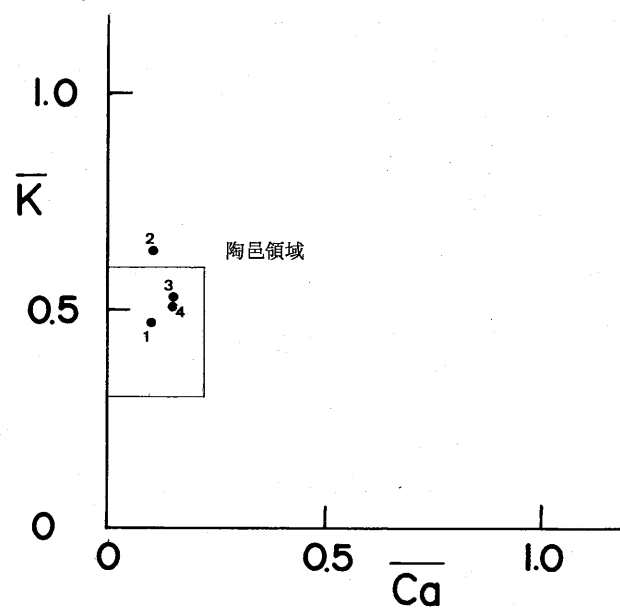


図2 タタラ山遺跡出土須恵器の K-Ca 分布図(2)

付編 2 タタラ山遺跡における自然科学分析調査報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

常磐自動車道建設による事前調査として、タタラ山遺跡（いわき市四倉町大字山田小湊字角田所在）の発掘調査が実施された。本報告では、自然科学分析調査結果について示す。

タタラ山遺跡は、高倉川左岸と袖玉山川右岸に挟まれた舌状丘陵地に立地する。これまでの発掘調査により、縄文時代から平安時代の集落跡が確認されている。

タタラ山遺跡では、前回の調査で平安時代の木炭窯や須恵器窯から検出された燃料材と考えられる炭化材の樹種同定が行われている（パリノ・サーヴェイ株式会社；1995）。その結果では、合計9種類（モミ属・クマシデ属・コナラ節・クリ・サクラ属・ナン亜科・ウツギ属・モチノキ属・カエデ属）が確認された。これらの種類の状況から、焼成のための燃料材と焼成された木炭とで樹種が異なっていた可能性や、焼成前の湿気除去のための燃料材にナン亜科が使用された可能性等が指摘されている。

本報告では、焼失住居跡から出土した住居構築材と考えられる炭化材の樹種を明らかにし、その用材選択を検討する。また、壺型土器や甕型土器を伴う壁が焼けた土坑が検出された。この土坑が祭祀的な遺構であるのか、あるいは山火事などにより壁が焼けているのか詳細は不明とされることから、土坑の性格を推定する資料を得るためにリン分析を行う。さらに住居跡などから検出された石材（原石）の種類を明らかにするために肉眼による岩石鑑定を実施する。

なお、資料が採取された遺構の時代時期は、いずれも古墳時代後期（6世紀前半）である。

1. 炭化材の樹種

(1) 試料

試料は、古墳時代後期（6世紀前半）の焼失家屋などから出土した炭化材15点（FBC950021～950035）である。各資料の詳細については、樹種同定結果と共に表1に記した。

(2) 方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

(3) 結果

樹種同定結果を表1に示す。資料番号FBC950026は、木材組織の観察が行えず不明とした。その他の資料は、針葉樹1種類（マツ属複雑管束亜属）と広葉樹7種類（クマシデ属・コナラ属コナラ節・コナラ節・クリ・シキミ・ナツツバキ属・ヒサカキ・キブシ）に同定された。各種類の解剖

学的な特徴などを以下に記す。

・マツ属複維管束亜属 (*Pinus* subgen. *Diploxylon* sp.) マツ科

早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道および水平樹脂道が認められる。放射柔細胞の分野壁孔は窓状、放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、1～15細胞高のものと水平樹脂道をもつ紡錘形のものがある。

表1 炭化材の樹種同定結果

資料番号	遺構名	出土位置	用途など	樹種
FBC 950021	S I 10	カマド 3	燃料材?	ナツツバキ属
FBC 950022	S I 13	床 面	住居構築材	クリ
FBC 950023	S I 13	床 面	住居構築材	クマシデ属
FBC 950024	S I 13	床 面	住居構築材	シキミ
FBC 950025	S I 18	床 面	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
FBC 950026	S I 23	床 面	住居構築材	不明
FBC 950027	S I 23	床 面	住居構築材	シキミ
FBC 950028	S I 23	床 面	住居構築材	シキミ
FBC 950029	S I 26	床 面	住居構築材	シキミ
FBC 950030	S I 26	床 面	住居構築材	ヒサカキ
FBC 950031	S I 27	床 面	住居構築材	キブシ
FBC 950032	S I 27	床 面	住居構築材	マツ属複維管束亜属
FBC 950033	S I 27	床 面	住居構築材	マツ属複維管束亜属
FBC 950034	S K 36	3	不明	キブシ
FBC 950035	S K 36	3	不明	シキミ

・クマシデ属 (*Carpinus* sp.) カバノキ科

散孔材で、管孔は放射方向に2～4(時に10以上)個が複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列状～交互状に配列する。放射組織は異性Ⅲ～Ⅱ型、1～3細胞幅、1～40細胞高のものと集合放射組織とがある。柔組織は短接線状およびターミナル状。

以上の特徴から、クマシデ属の中でもイワシデ (*Carpinus turzaninovi* Hance), イヌシデ (*C. tschonoskii* Maxim), アカシデ (*C. laxiflora* (Sieb. et Zucc.) Blume) のいずれかである。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus* sp.)

ブナ科

環孔材で孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。大道管は管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、小道管は管壁は中庸～薄く、横断面では多角形、ともに単独。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞

高のものと複合放射組織とがある。柔組織は周囲状および短接線状。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で孔圏部は1～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では円形～楕円形、小道管は単独および2～3個が斜（放射）方向に複合、横断面では角張った楕円形～多角形、ともに管壁は薄い。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。

・シキミ (*Illicium anisatum* L.) シキミ科シキミ属

散孔材で、管壁厚は中庸～薄く、横断面では多角形、単独または2～4個が複合する。道管は階段穿孔を有し、段は多数、壁孔は階段状～対列状に配列する。放射組織は異性Ⅱ～Ⅰ型、1～2細胞幅、1～20細胞高。

・ナツツバキ属 (*Stewartia* sp) ツバキ科

散孔材で、横断面では楕円形、単独または2～3個が複合する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性Ⅱ型、1～3細胞幅、1～30細胞高。

・ヒサカキ (*Eurya japonica* Thunberg) ツバキ科ヒサカキ属

散孔材で管壁は薄く、横断面では多角形、単独または2～3個が複合する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性Ⅲ～Ⅱ型、1～4細胞幅、1～40細胞高。

・キブシ (*Stachyurus praecox* Sieb. et Zucc) キブシ科キブシ属

散孔材で管壁は薄く、横断面では多角形、単独または2～3個が複合する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～網目状に配列する。放射組織は異性Ⅱ型、1～4細胞幅、1～60細胞高。

(4) 考 察

住居構築材と考えられる炭化材には、合計7種類の木材が確認された。複数の資料について同定を行った全ての住居跡で複数の種類が確認されており、様々な種類が構築材に利用されていたことがうかがえる。いわき市では、これまでに落合遺跡で古墳時代前期の構築材について樹種を明らかにした例がある（パリノ・サーヴェイ株式会社；1996）。その結果では、3軒の焼失家屋からタケ亜科を含めて16種類が確認されており、種類数が多い点で今回の結果と調和的である。また、大畑E遺跡の古墳時代の住居跡床面や覆土から出土した炭化材でも合計9種類が確認されている（パリノ・サーヴェイ株式会社；1990）。大畑E遺跡の炭化材については、用途に関する詳細が明らかではないが、床面から出土した炭化材については住居構築材の可能性が考えられる。これらの調査結果からも、本地域では古墳時代に様々な木材が住居構築材として利用されていたことが推定される。

住居構築材は、関東地方で行われた調査結果から、遺跡周辺の植生を反映することが指摘されている（高橋・植木；1994）。いわき市は、沿海地の暖温帯常緑広葉樹林から内陸の標高が高い地域に分布する冷温帯落葉広葉樹林まで様々な植生が見られる地域である。したがって、遺跡の立地環境は、同じ市内でも場所によって大きく異なっていたことが推定される。例えば、沿海地に位置す

る大畑E遺跡では、アカガシ亜属やカメガワシなど暖温帯常緑広葉樹林を構成する種類が見られる（パリノ・サーヴェイ株式会社；1990）。本遺跡でも常緑広葉樹のヒサカキが確認されており、沿海地に近い地域の植生を反映していることが推定される。本地域では、住居構築材の用材選択に関する資料は蓄積段階であり、今後さらに調査を行うことで市内各地域毎の用材選択の特徴などが明らかになる。

2. 土坑のリン分析

(1) 試料

試料は、古墳時代後期の（6世紀前半）の土坑（SK36）の土器内土壌や土坑覆土から採取された土壌資料3点（FBP95006～95008）と、対象資料として採取された土坑確認面の自然堆積層1点（FBP95009）である。SK36は、土器の出土状態および土坑の壁が焼けていることから、山火事などにより土坑の壁が焼けたことや祭祀遺構の可能性が指摘されているが、詳細は不明である。

(2) 方法

分析は、土壤標準分析・測定法委員会編（1986）、土壤養分測定法委員会編（1981）、京都大学農学部農芸化学教室編（1957）、農林水産省技術会議事務局監修（1967）、ペドロジスト懇談会（1984）などを参考にした。以下に、分析方法を示す。

試料を風乾後、軽く粉碎して2.0mmの篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、5時間）により測定する。風乾細土試料2.00gをケルダールフラスコに秤とり、はじめに硝酸（ HNO_3 ）5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（ HClO_4 ）10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で、100mlに定容して、ろ過する。今回は、リン酸含量をリン酸（ P_2O_5 ）濃度として測定する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（ $\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ ）を求める。

(3) 結果

分析結果を表2に示す。リン酸含量はいずれの試料も $1.0\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ 以下である。土坑内では土器内堆積土が最も高い値（ $0.34\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ ）を示すが、対照資料はそれよりも高い $0.41\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ を示す。

(4) 考察

リン酸のいわゆる天然存量の報告例（Bowen, 1983；Bolt・Bruggenwert, 1980；川崎ほか, 1991；天野ほか, 1991）によれば、上限は約 $3.0\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ 程度と推定されが、人為的な影響を受けた既耕地では $5.5\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ （黒ボク土の平均値）という報告例がある（川崎ほか；1991）。また、当社未公表資料では、人骨が検出された土坑で約 $30\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ という値を得ており、遺体などが埋納されていれば、天然賦存量を大きく越える値であることが確かめられている。

表2 リン分析結果

試料番号	遺構名	資料採取位置	リン酸含量 P ₂ O ₅ mg/g	土性・土色
FBP 95006	S K36	土器内土壌	0.34	10YR 5/4 にぶい黄褐・SL
FBP 95007	S K36	覆土ℓ4	0.17	10YR 5/8 黄褐・SL
FBP 95008	S K36	覆土ℓ10	0.26	10YR 4/4 褐・SL
FBP 95009	S K36	L IV	0.41	10YR 5/6 黄褐・SL

注 (1) 土性：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。

(2) 土色：土壤調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編，1984）の野外土性の判定法による。

SL・・・砂壤土（砂の感じが強く、ねばり気はわずかしかない）

今回の分析結果では、土器内土壌試料が最も高い値を示すが、対照資料はそれよりもさらに高い値を示す。また、いずれの試料も 1.0P₂O₅mg/g 以下であり、各資料に明確な差異を認めることはできないことから、SK36 内と SK36 から検出された土器内には、リン酸含量が富化する要因となる遺体などは存在しなかったことが推定される。

3. 岩石肉眼鑑定

(1) 試料

試料は、古墳時代後期（6世紀前半）の住居跡（SI23・SI27）と同時代時期の土坑（SK35）から検出された石材（原石）3点である。（表3）

(2) 方法

ルーペなどを用いて、岩石に含まれる鉱物を観察し、岩石の種類を明らかにする。

(3) 結果

原石は全て滑石片岩である。本遺跡周辺の滑石片岩の産地は水石山北側斜面と八茎周辺がある。水石山北側斜面には、ヴェーライト（かんらん石と単斜輝石で構成される斑れい岩の一種）と蛇紋岩が小規模に分布し、花崗岩との接触部に沿ってヴェーライトが滑石岩に変質している。なお、同地域の蛇紋岩中に鉄鉱石を産する。水石山の山体の大部分は角閃片岩－アクチノ閃石片岩で構成され、縞状斑れい岩を起源とする変成岩で、相互に移化する関係にある。

表3 岩石肉眼鑑定結果

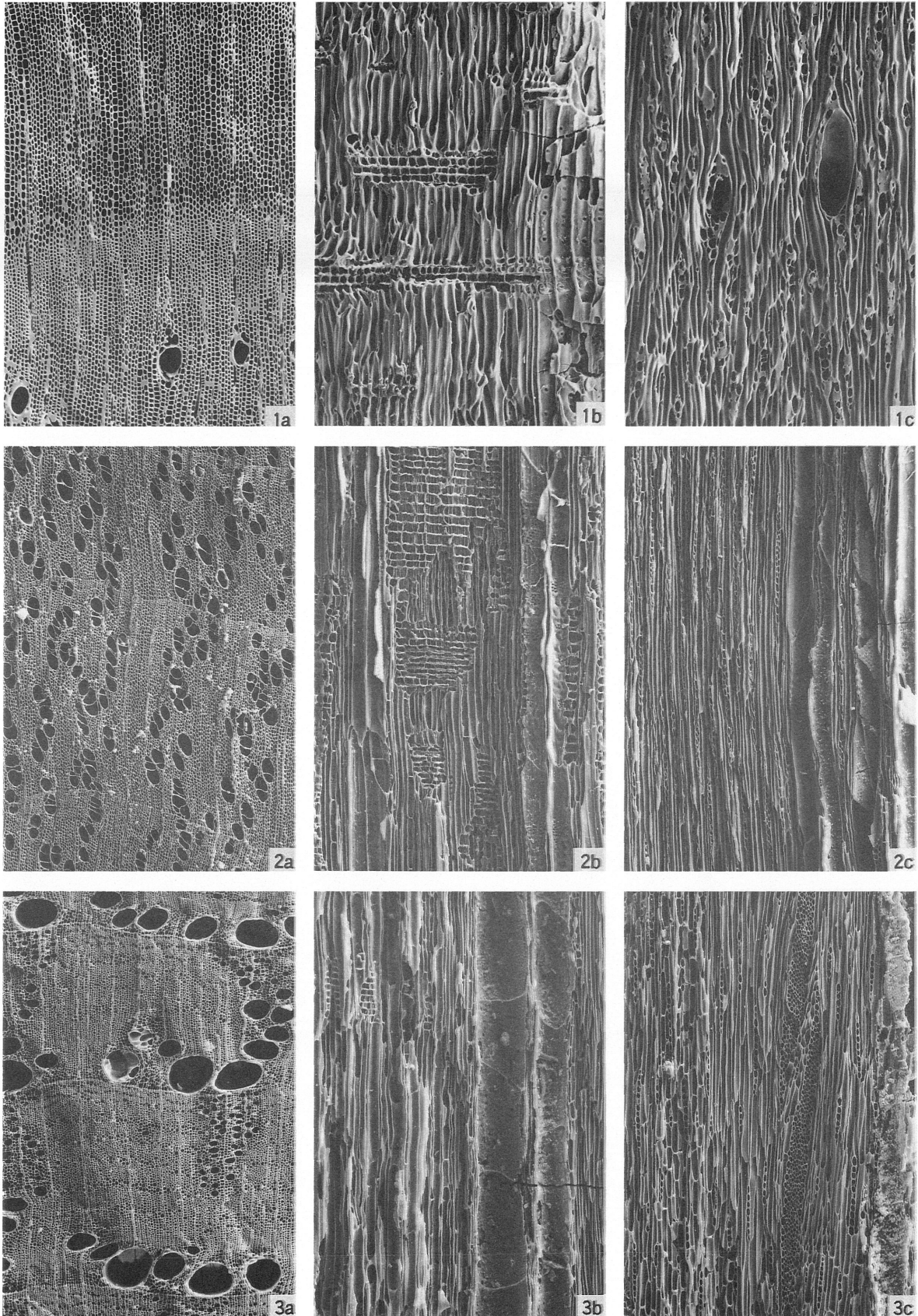
試料番号	遺構名	時代時期	出土位置	器種など	肉眼鑑定結果
FBC-S-9501	S I 23	古墳時代後期	ℓ 1	原石	滑石片岩
FBC-S-9502	S I 27	古墳時代後期	床面直上	原石	滑石片岩
FBC-S-9503	S K 35	古墳時代後期	ℓ 1	原石	滑石片岩

八茎鉾山周辺には、南北に細長い地域に八茎変成岩と呼ばれる黒色片岩・緑色片岩が分布し、鉾山南部では、斑れい岩類・蛇紋岩の貫入を伴っている。同地域での滑石の産出には確認されていない。しかし、地質状況から滑石岩を産する可能性は十分に考えられ、重点的な分布調査が今後の課題とされる。

< 引用文献 >

- 天野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信 (1991) 中部日本以北の土壌別蓄積リンの形態別計量 農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌別蓄積リンの再生循環利用技術の開発」p.28-36
- Bowen,H.J.M. (1983) 環境無機化学-元素の循環と生化学- 浅見輝男・茅野充男訳, 297p., 博友社
[H.J.M.Bowen (1979) *Environmental Chemistry of Elements*]
- Bolt,H.G.・Bruggenwert,M.G.M. (1980) 土壌の化学 岩田進午・三輪脊太郎・井上隆弘・陽捷行訳, 309p., 学会出版センター「H.G.BOLT and M.G.M.BRUGGENWERT (1976) *SOIL CHEMISTRY*」p.235-236
- 土壌標準分析・測定法委員会編 (1986) 土壌標準分析・測定法 354p., 博友社
- 土壌養分測定法委員会編 (1981) 土壌養分分析法 440p., 養賢堂
- 川崎 弘・吉田 滂・井上恒久 (1991) 九州地方の土壌型別蓄積リンの形態別計量 農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, 149p. : p.23-27
- 京都大学農学部農芸化学教室編 (1957) 農芸化学実験書 第1巻 411p., 産業図書
- 農林省農林水産技術会議事務局監修 (1967) 新版標準土色帳
- パリノ・サーヴェイ株式会社 (1990) 大畑E遺跡出土炭化材分析 いわき市埋蔵文化財調査報告第28冊「大畑E遺跡 -大畑貝塚周辺部の調査-」p.308-318, 福島県小名浜港湾建設事務所 福島県いわき市教育委員会 財団法人いわき市教育文化事業団
- パリノ・サーヴェイ株式会社 (1995) いわき市タタラ山遺跡・駒込遺跡・馬場A遺跡出土木炭材の樹種 福島県文化財調査報告書第316集「常磐自動車道遺跡調査報告4」, p.196-206
- パリノ・サーヴェイ株式会社 (1996) 落合遺跡から検出された炭化材の樹種と年代 財団法人いわき市教育文化事業団研究紀要, 7, p.61-68
- ペドロジスト懇談会 (1984) 野外土性の判定 ペドロジスト懇談会編「土壌調査ハンドブック」, 156p
- 高橋 敦・植木真吾 (1994) 樹種同定からみた住居構築材の用材選択 PALYNO,2,p.5-18

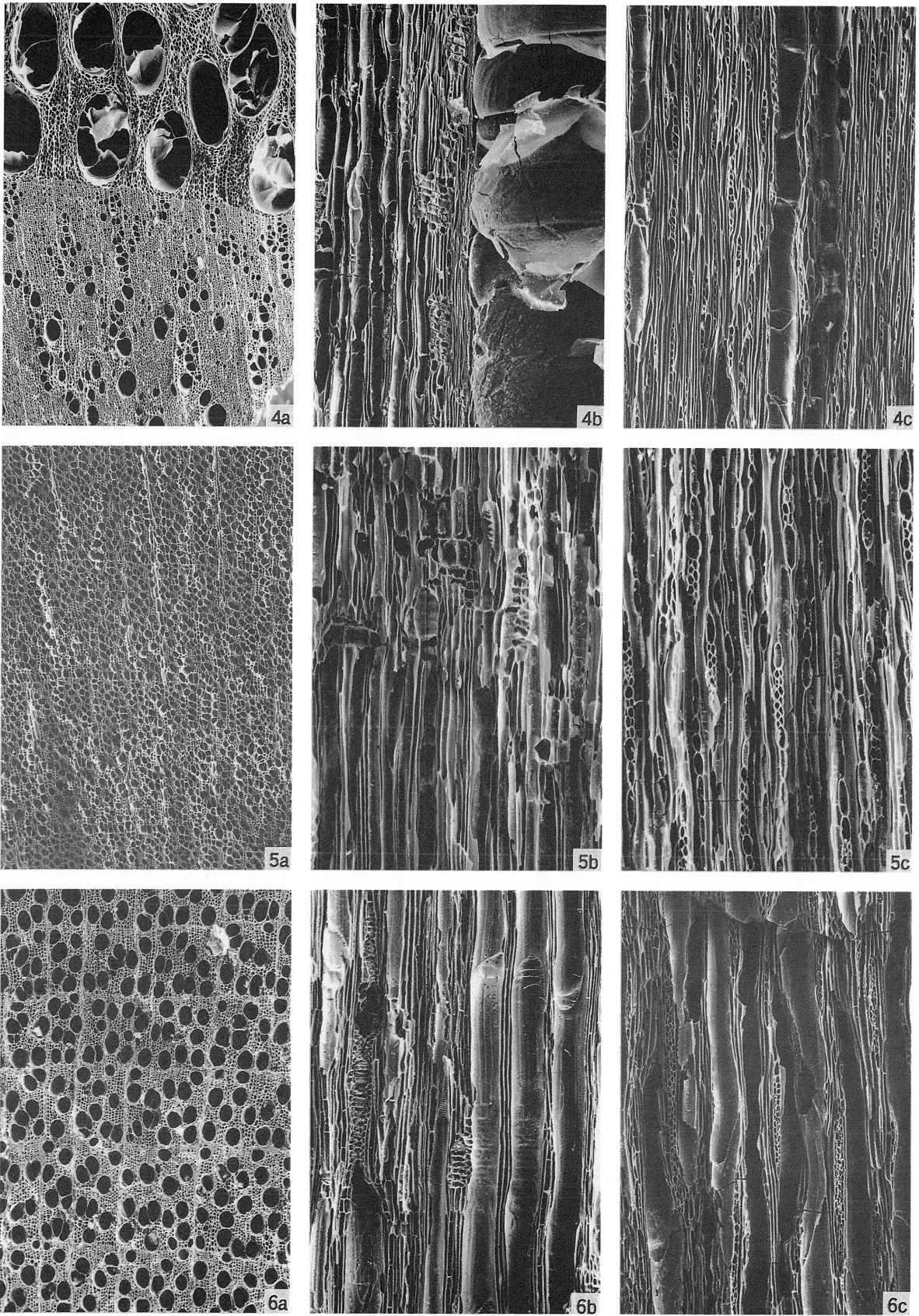
図版1 タタラ山遺跡・炭化材(1)



1. マツ属複維管束亜属 (FBC950032) 2. クマシデ属 (FBC950023)
 3. コナラ属コナラ亜属コナラ節 (FBC950025) a: 木口, b: 柾目, c: 板目

200 μm : a
 200 μm : b, c

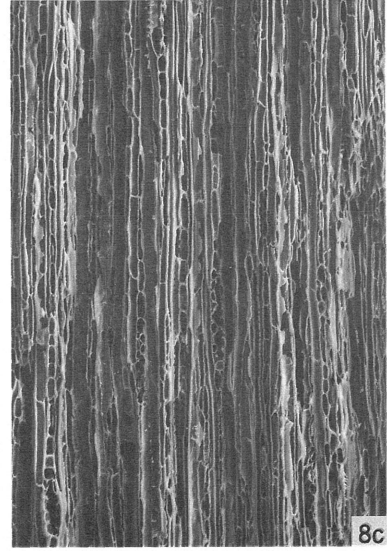
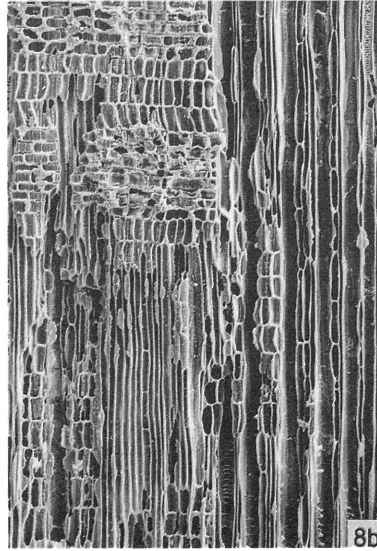
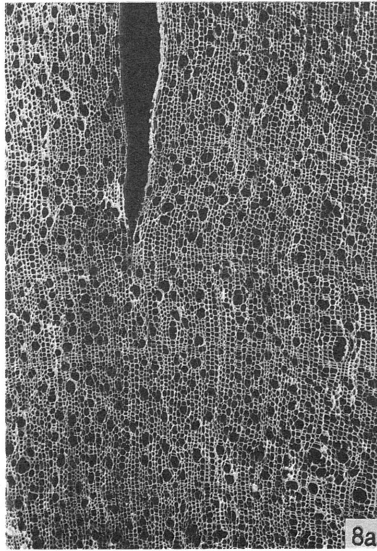
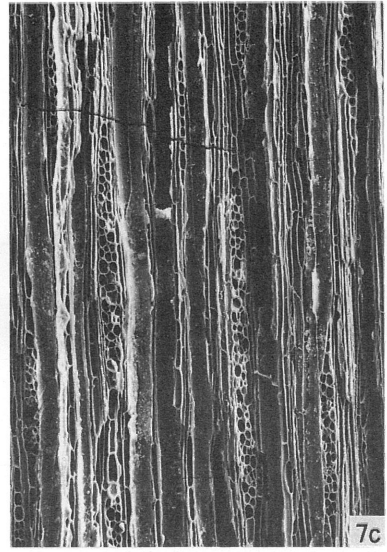
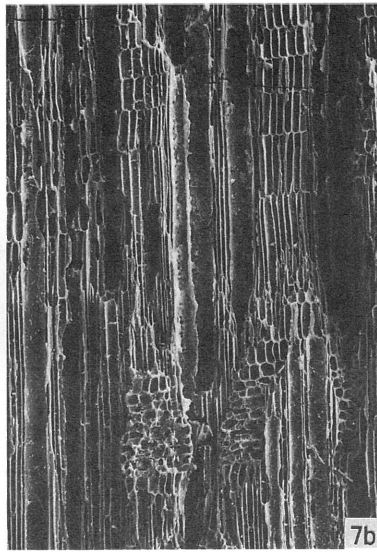
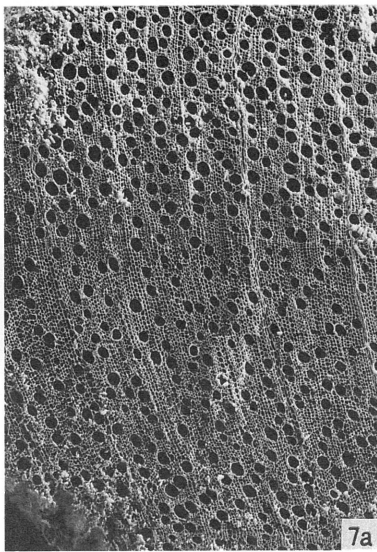
図版2 タタラ山遺跡・炭化材(2)



4. クリ (FBC950022) 5. シキミ (FBC950035)
 6. ナツツバキ属 (FBC950021) a : 木口, b : 柀目, c : 板目

200 μm : a
 200 μm : b, c

図版3 タタラ山遺跡・炭化材(3)



7. ヒサカキ (FBC950030)

8. キブシ (FBC950031) a : 木口, b : 柁目, c : 板目

200 μ m : a
200 μ m : b, c

写真図版



1 I区西部作業風景(北西から)



2 I区西部基本土層(南から)



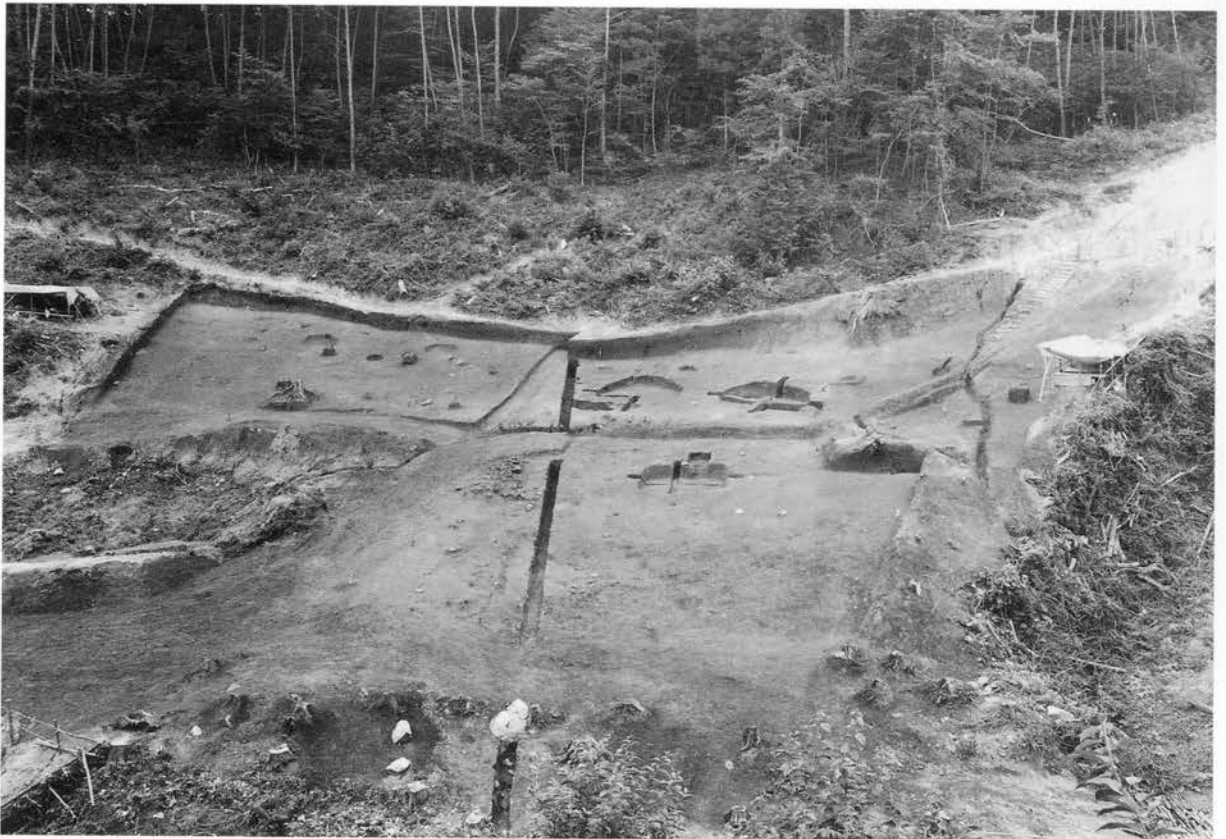
3 I 区 全 景 (東から)



4 I 区 東 部 全 景 (南から)



5 I区西部全景(東から)



6 I区西部全景(南から)



7 I区9号住居跡全景(南から)



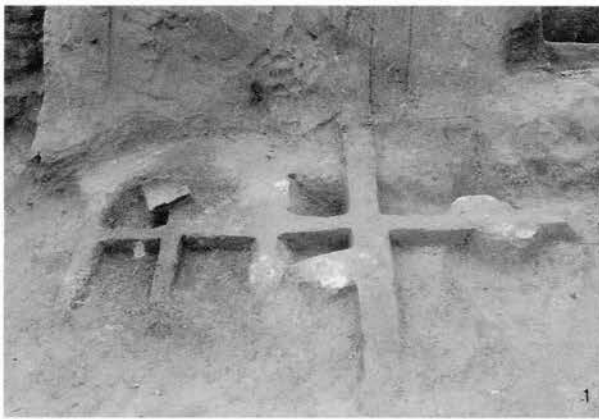
8 I区9号住居跡

1 断面(AA')
3 カマド検出状況

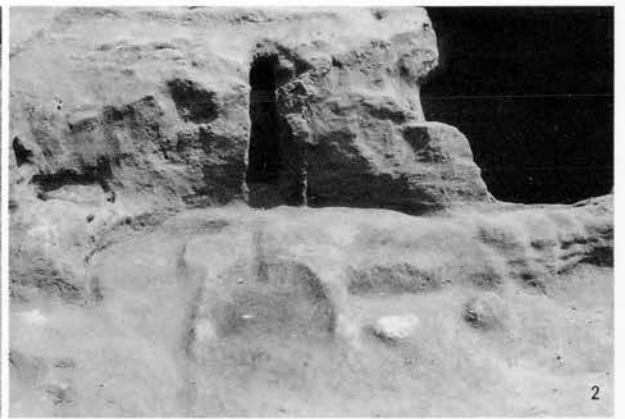
2 土師器出土状況
4 カマド全景(東から)



9 I区10号住居跡全景(南から)



1



2



3



4

10 I区10号住居跡

1 カマド断面
3 土師器出土状況

2 カマド全景(南から)
4 土師器出土状況



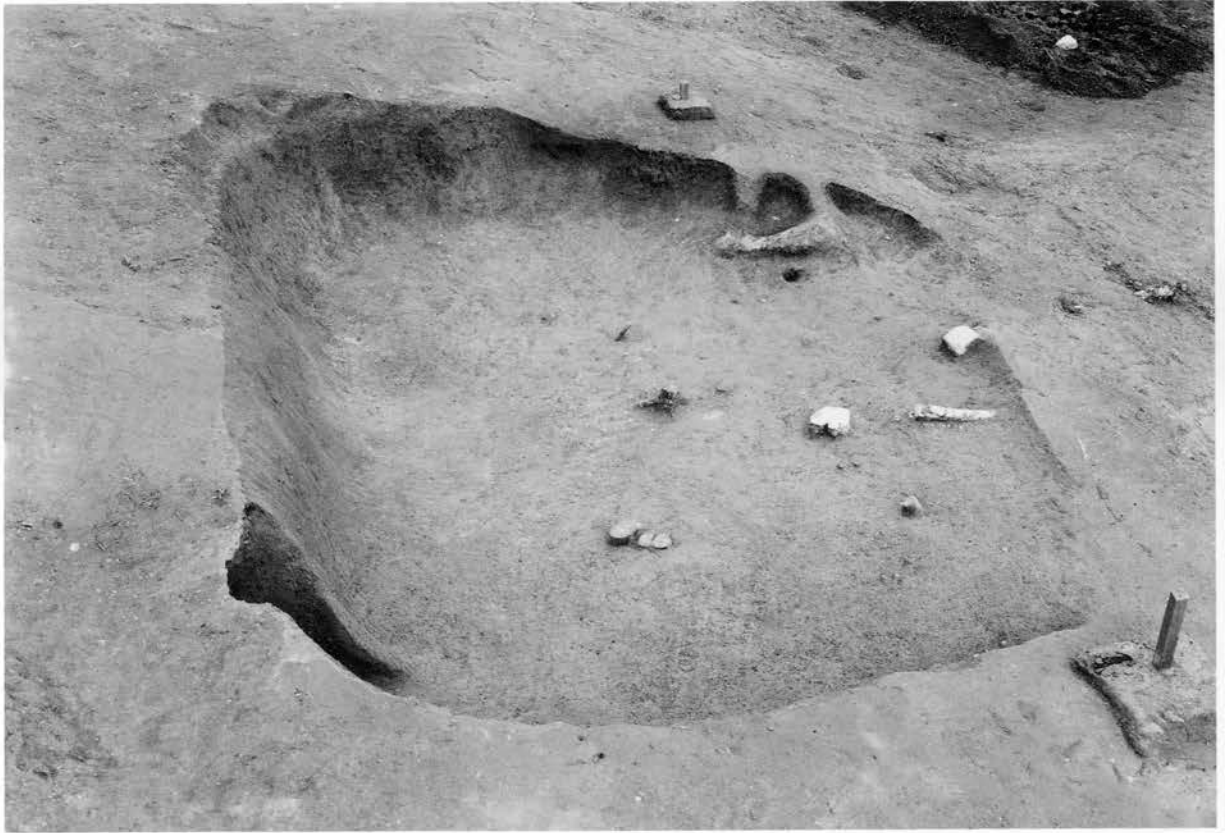
11 I区11号住居跡全景(南西から)



12 I区11号住居跡

1 断面(BB')
3 カマド断面

2 壁溝・P1検出状況
4 カマド全景(西から)



13 I区12号住居跡全景(西から)



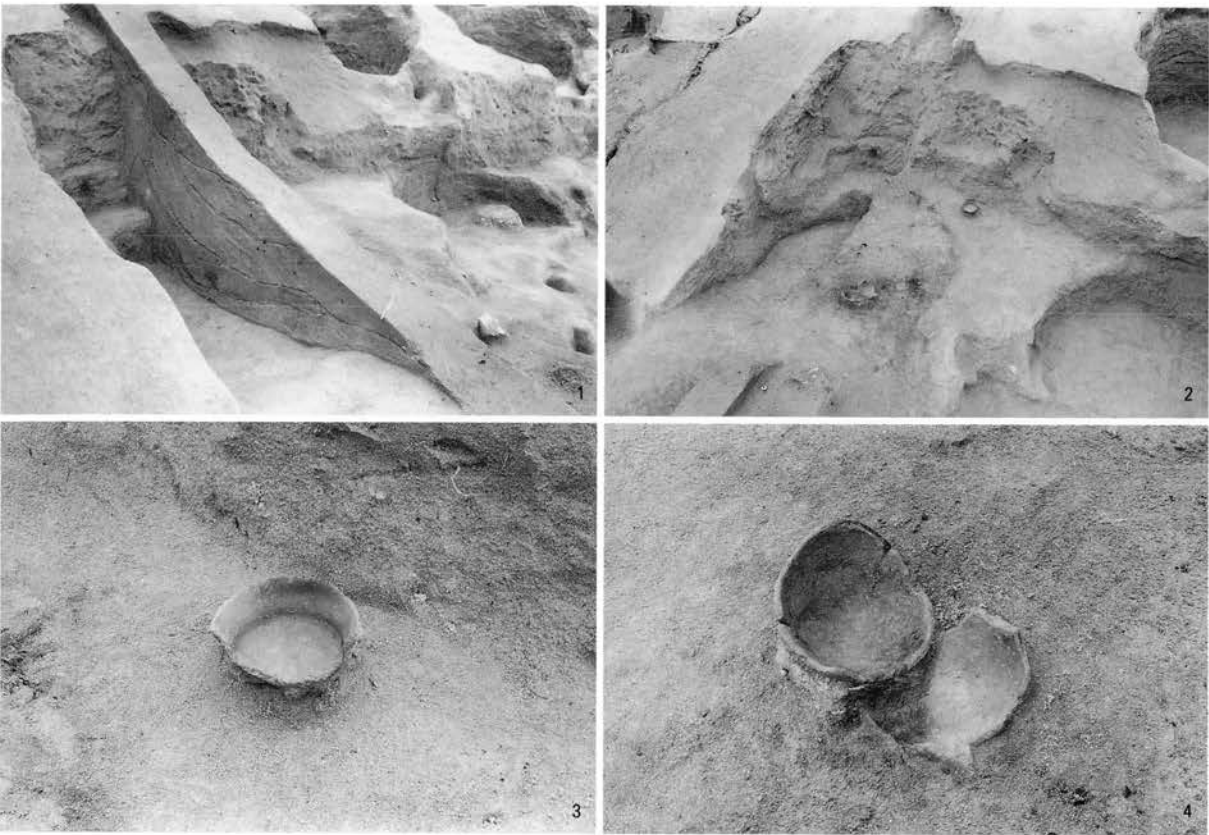
14 I区12号住居跡

1 断面(AA')
3 土師器出土状況

2 床面精査状況
4 カマド・P1全景(西から)



15 I区13号住居跡全景(南から)



16 I区13号住居跡

1 断面(AA')

3 土師器出土状況

2 土師器出土状況

4 土師器出土状況



17 I区14号住居跡検出状況(西から)



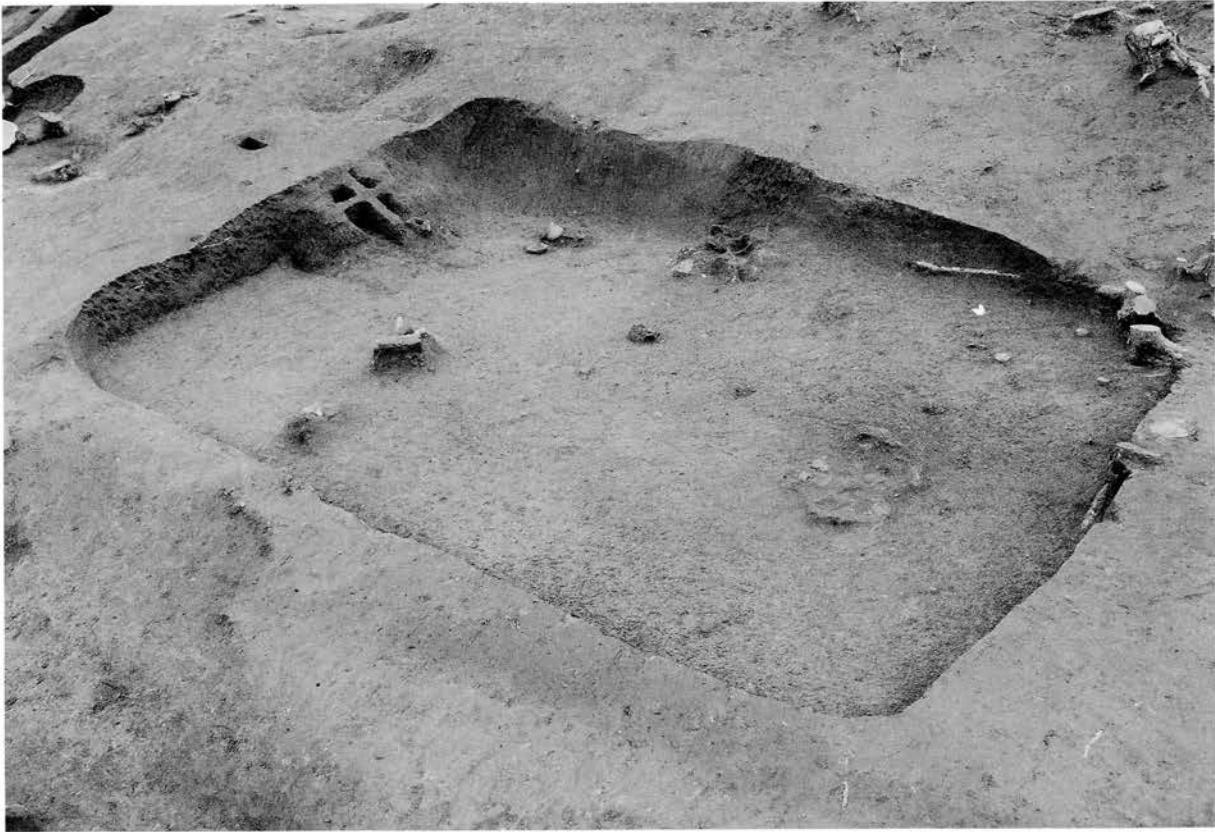
18 I区14号住居跡

1 断面(AA'・BB')

3 1・3カマド掘り込み状況

2 土師器出土状況

4 1号カマド断ち割り



19 I区14号住居跡全景(西から)



20 I区14号住居跡

1 3号カマド検出
3 2号カマド煙道

2 3号カマド全景(南から)
4 カマド全景(南から)



21 I区15号住居跡1号カマド全景(西から)



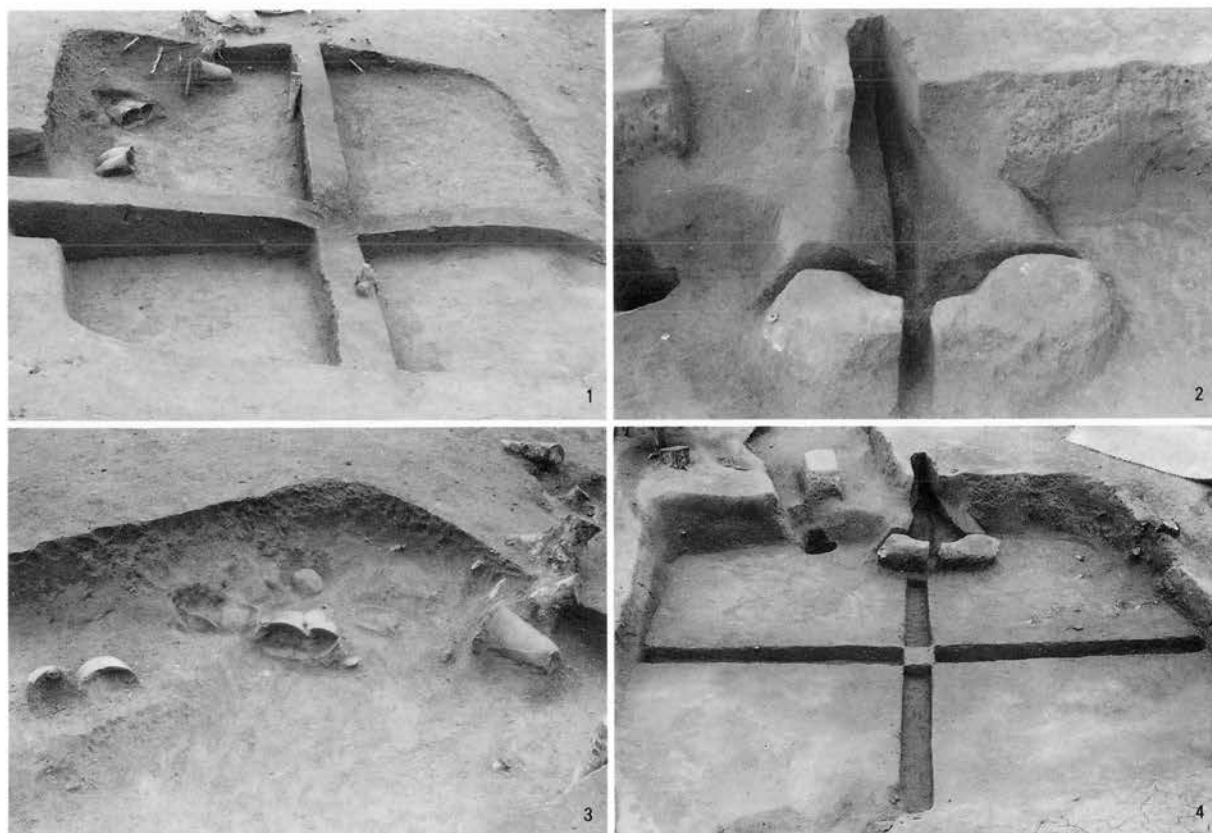
22 I区15号住居跡

1 断面(BB')
3 土師器出土状況

2 全景(南東から)
4 2号カマド断ち割り



23 I区16号住居跡全景(南から)



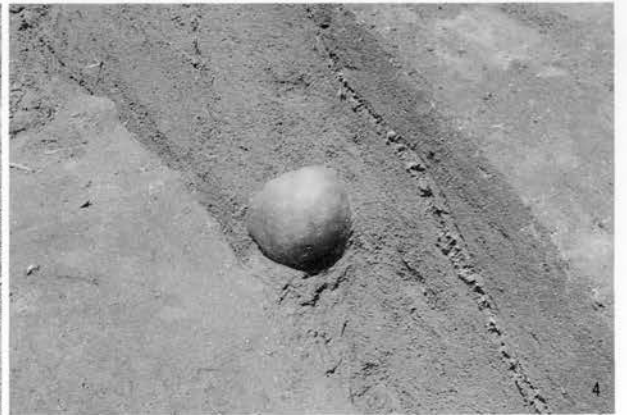
24 I区16号住居跡

1 断面(BB')
3 土師器出土状況

2 カマド断ち割り
4 断ち割り



25 I区17号住居跡全景(南から)



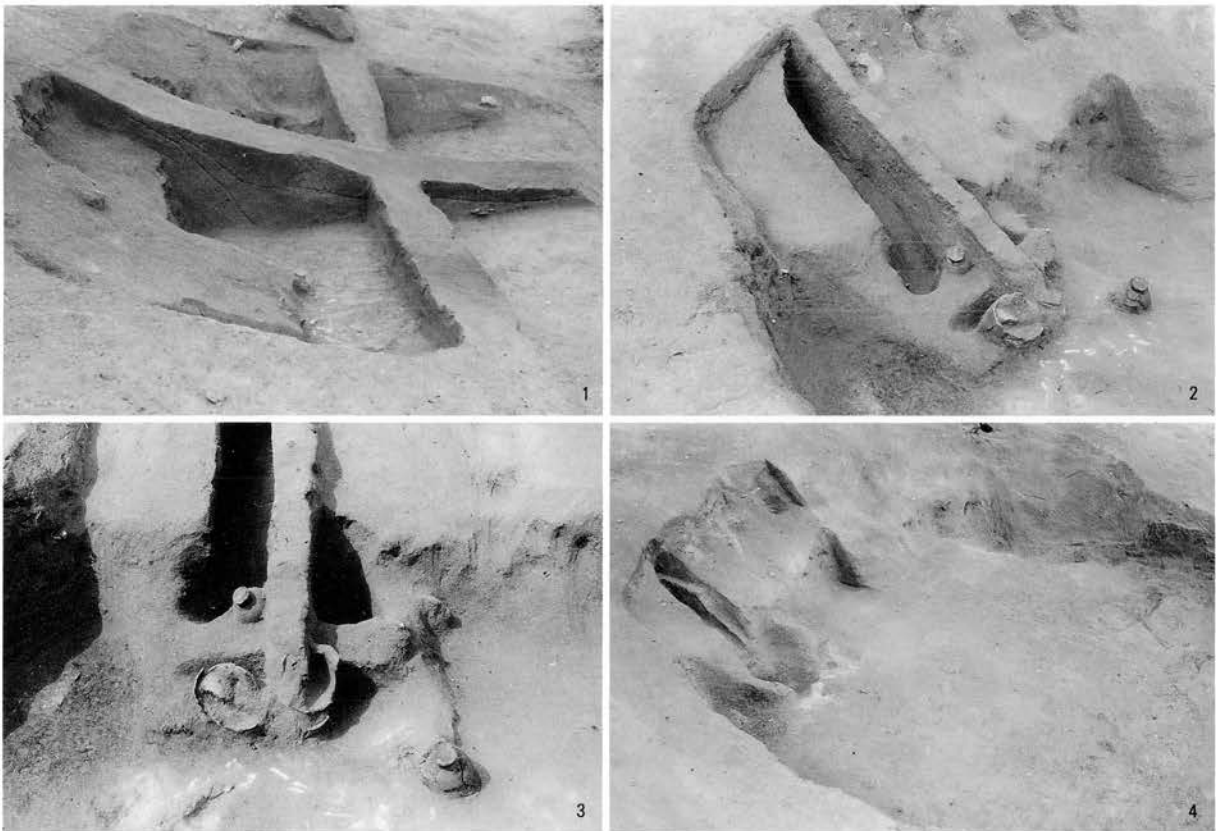
26 I区17号住居跡

1 断面(AA')
3 須恵器出土状況

2 須恵器出土状況
4 土師器出土状況



27 I区18号住居跡カマド遺物出土状況(南から)



28 I区18号住居跡

1 断面(BB')

3 カマド断面

2 カマド断面

4 全景(西から)



29 I区19号住居跡全景(南西から)



30 I区19号住居跡

1 断面(BB')
3 新カマド土師器出土状況

2 土師器出土状況
4 旧カマド全景(南から)



31 I区20号住居跡全景(南から)



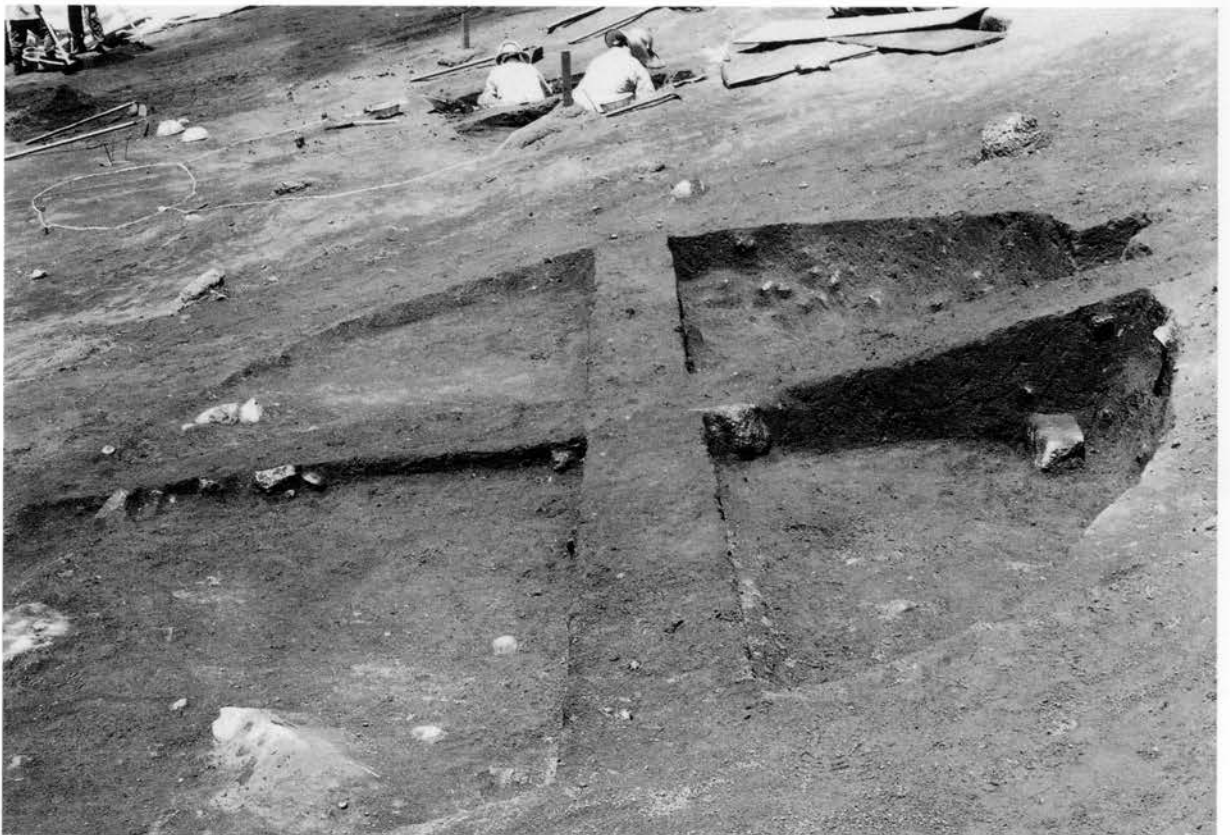
32 I区20号住居跡

1 断面(AA')
3 須恵器出土状況

2 カマド全景(南から)
4 土師器出土状況



33 I区21号住居跡全景(南から)



34 I区21号住居跡断面(BB')



35 I区22号住居跡全景(南から)



36 I区22号住居跡

1 断面(AA')

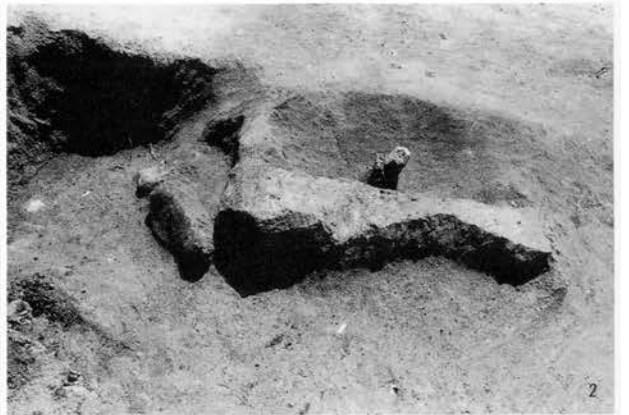
2 断面(BB')

3 縄文土器出土状況

4 縄文土器出土状況



37 I区23号住居跡全景(西から)



38 I区23号住居跡

1 断面(AA')
3 カマド断ち割り

2 カマド全景(西から)
4 カマド断ち割り



39 I区25号住居跡全景(南から)



40 I区25号住居跡

1 P1断面
3 掘り形断面

2 P2断面
4 掘り形全景(南から)



41 I区26号住居跡全景(南東から)



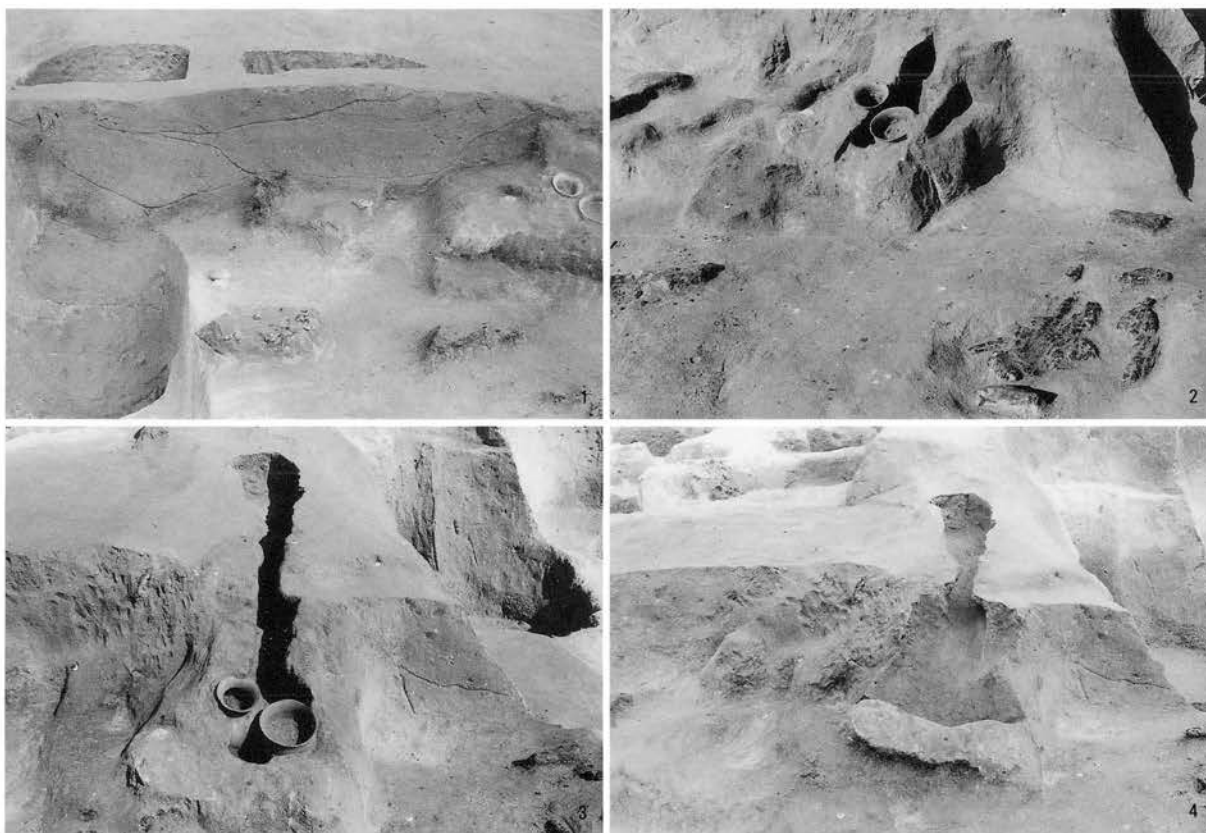
42 I区26号住居跡

1 須恵器出土状況
3 カマド全景(東から)

2 掘り形断面
4 カマド断ち割り



43 I区27号住居跡全景(南西から)



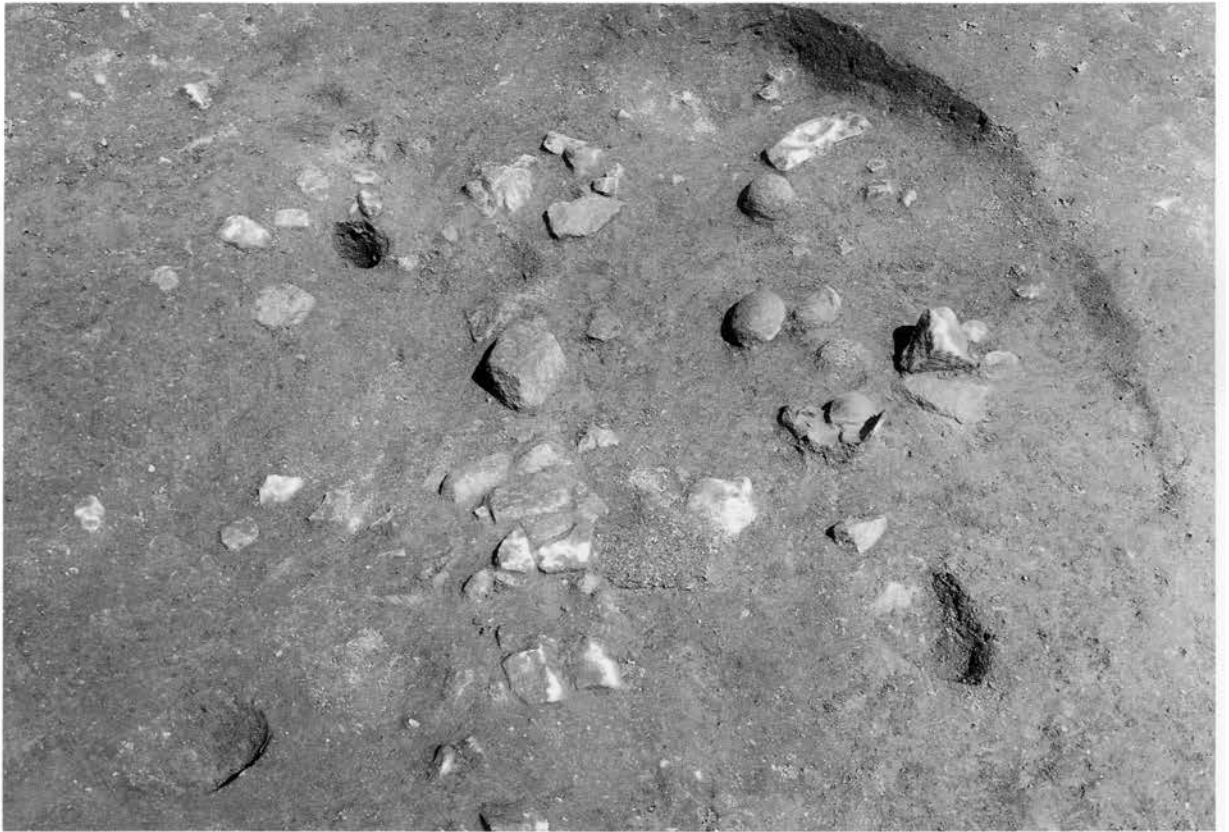
44 I区27号住居跡

1 断面(AA')

3 カマド土師器出土状況

2 炭化材出土状況

4 カマド全景(南から)



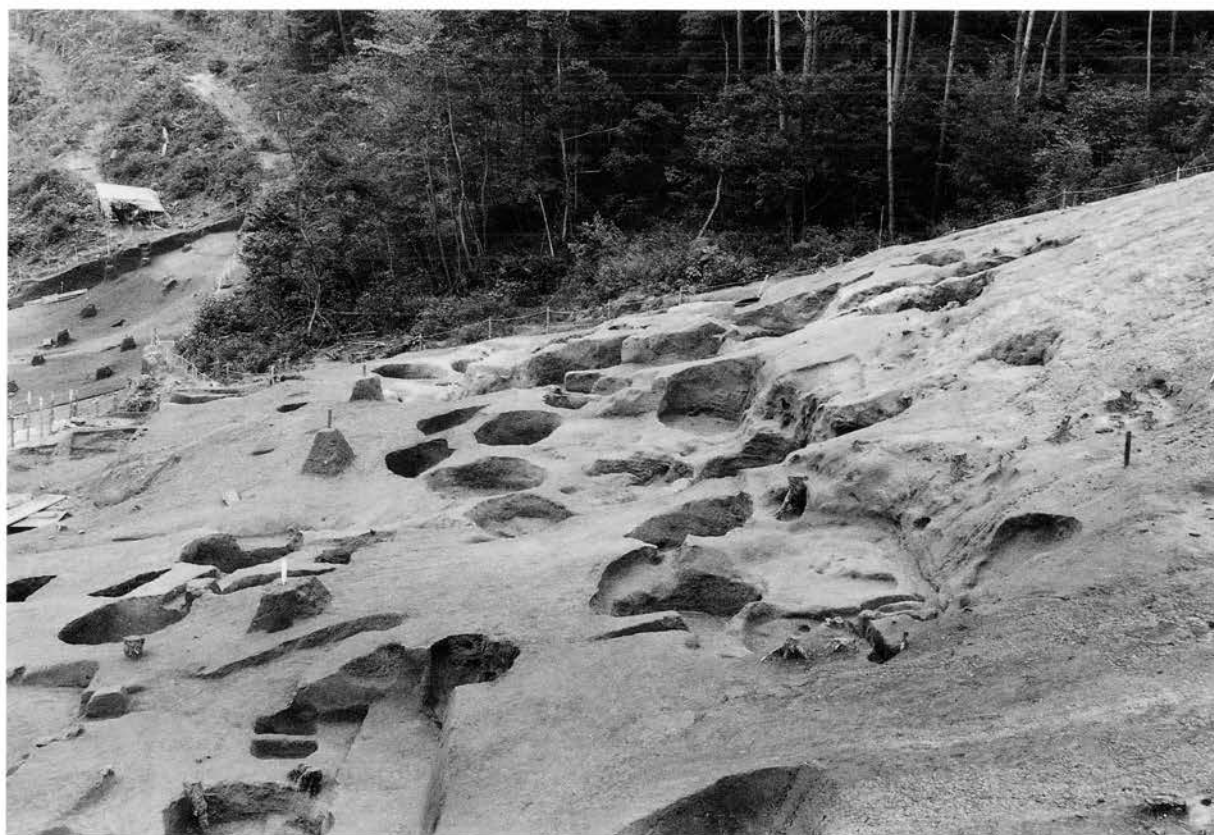
45 I区28号住居跡全景(南から)



46 I区28号住居跡

1 断面(BB')
3 P1断面

2 縄文土器出土状況
4 敷石近景



47 I区東部土坑群全景(東から)



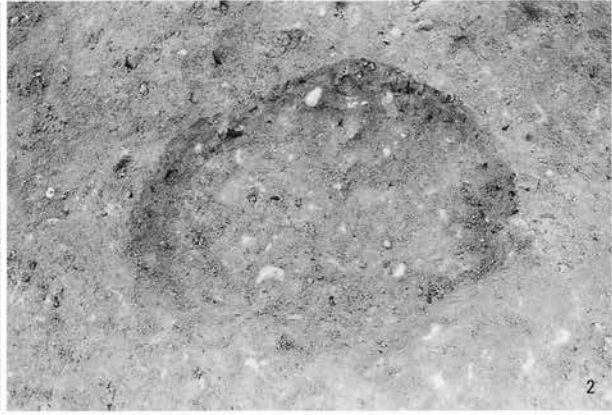
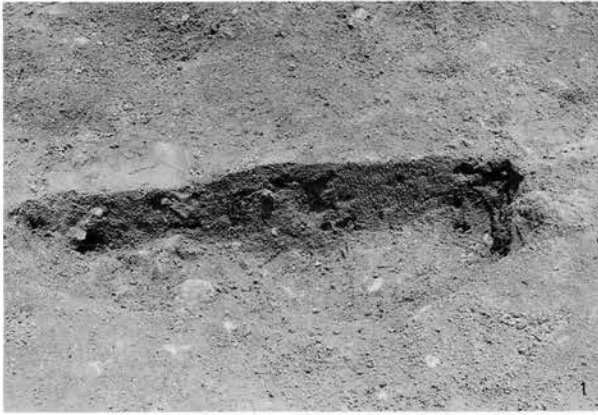
48 I区東部土坑群全景(南から)



49 I区東部土坑群全景(南から)



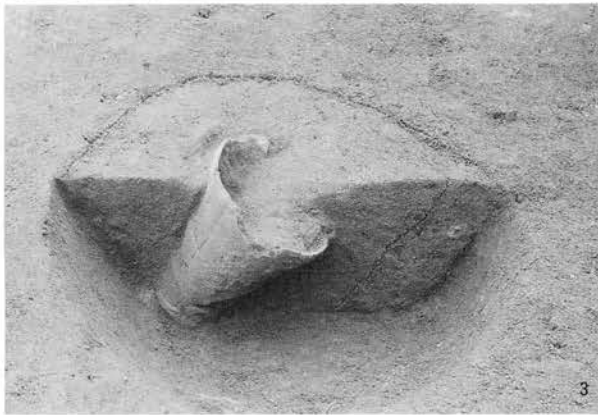
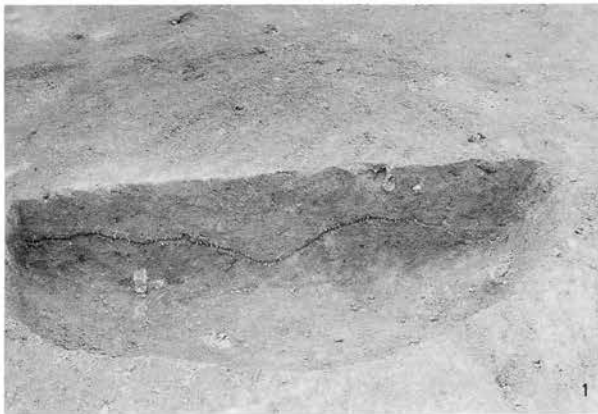
50 I区東部土坑群全景(南東から)



51 I区 34·40·67号土坑

1 34号土坑断面
3 40号土坑全景

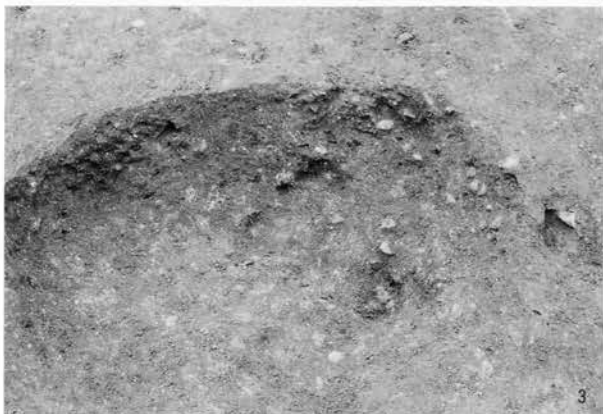
2 34号土坑全景
4 67号土坑全景



52 I区 70·96·98号土坑

1 70号土坑断面
3 96号土坑断面

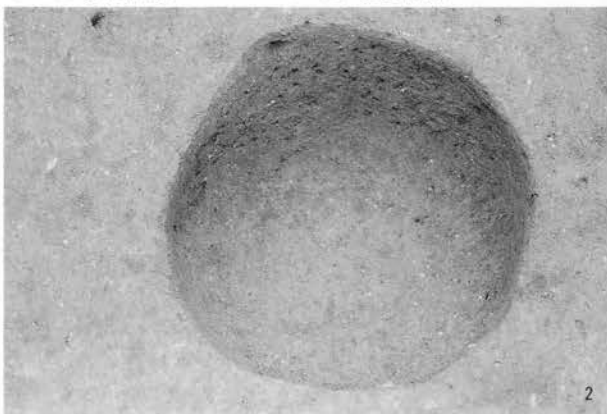
2 70号土坑全景
4 98号土坑全景



53 I区 107·112·121号土坑

1 107号土坑断面
3 112号土坑全景

2 112号土坑断面
4 121号土坑全景



54 I区 130·157·175号土坑

1 130号土坑断面
3 175号土坑断面

2 157号土坑全景
4 175号土坑全景



55 I区 29・33・35号土坑

1 29号土坑全景
3 35号土坑断面

2 33号土坑全景
4 35号土坑全景



56 I区 36号土坑

1 断面(AA')
3 土師器出土状況

2 全景(南から)
4 遺物出土状況



57 I区 35~38·43号土坑

1 35~37·49号土坑全景
3 38号土坑全景

2 37号土坑全景
4 43号土坑断面



58 I区 45·46·49号土坑

1 45号土坑断面
3 46号土坑全景

2 46号土坑断面
4 49号土坑全景



59 I区 53·54·58·59号土坑

1 53号土坑全景
3 58号土坑全景

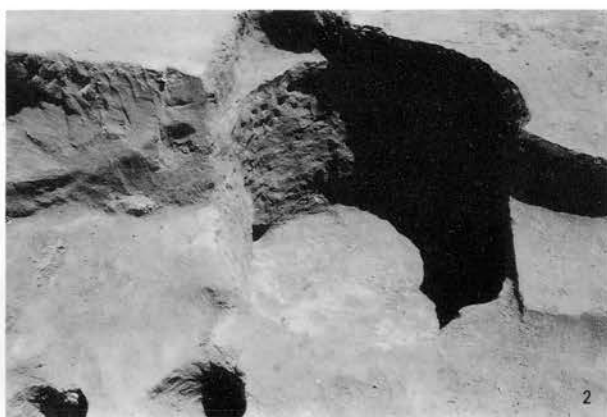
2 54号土坑全景
4 59号土坑全景



60 I区 60·64·66号土坑

1 60号土坑断面
3 64号土坑全景

2 60号土坑全景
4 66号土坑全景



61 I区 68·69·72号土坑

1 68号土坑断面
3 69号土坑全景

2 68号土坑全景
4 72号土坑全景



62 I区 74·75·77·78号土坑

1 74号土坑断面
3 77号土坑全景

2 75号土坑全景
4 78号土坑全景



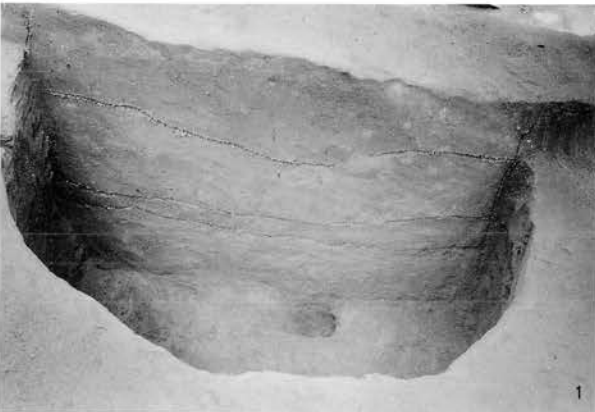
63 I区 81·86·87号土坑

1 81号土坑全景

2 86号土坑断面

3 86号土坑全景

4 87号土坑全景



64 I区 90~92·94号土坑

1 90号土坑断面

2 91号土坑全景

3 92号土坑断面

4 94号土坑断面



65 I区 94·95·100·102·103号土坑

1 94·95号土坑全景

2 100号土坑全景

3 102号土坑全景

4 55·103号土坑全景



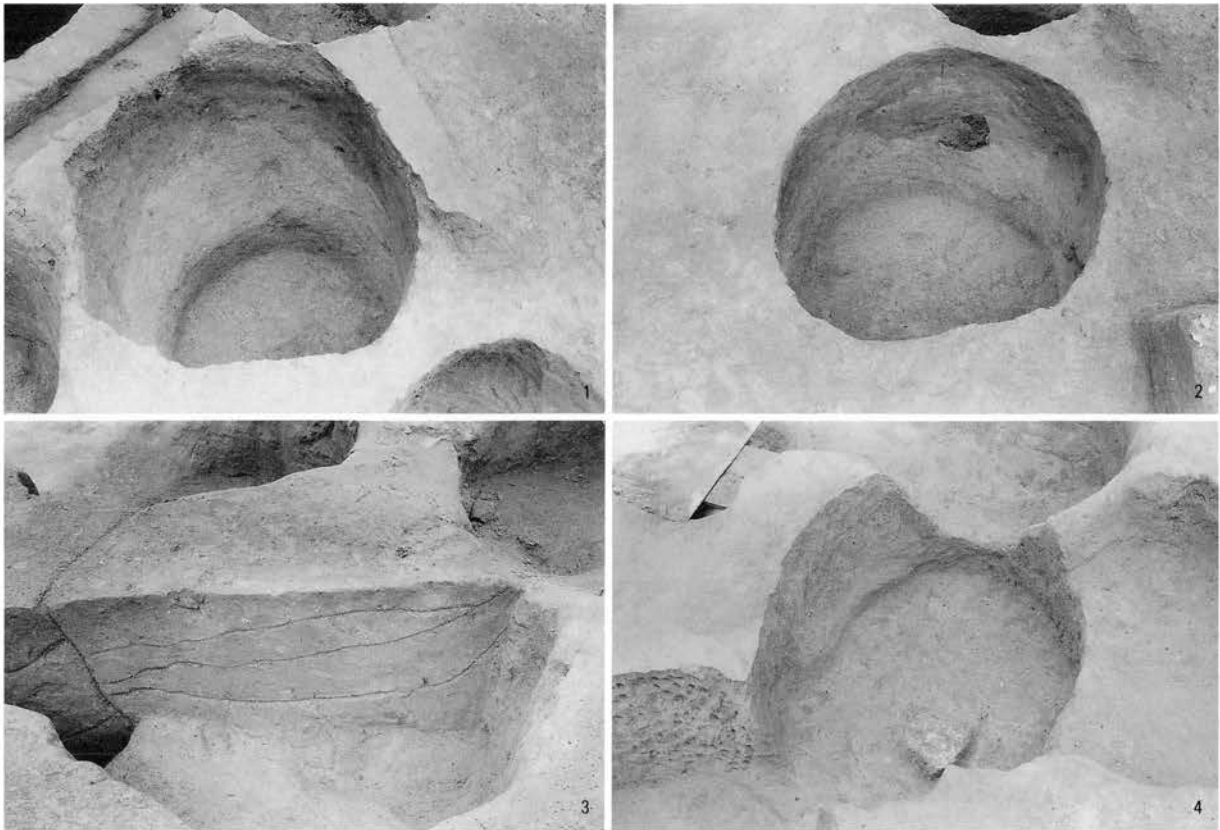
66 I区 105·106·108·113号土坑

1 105号土坑断面

2 106号土坑全景

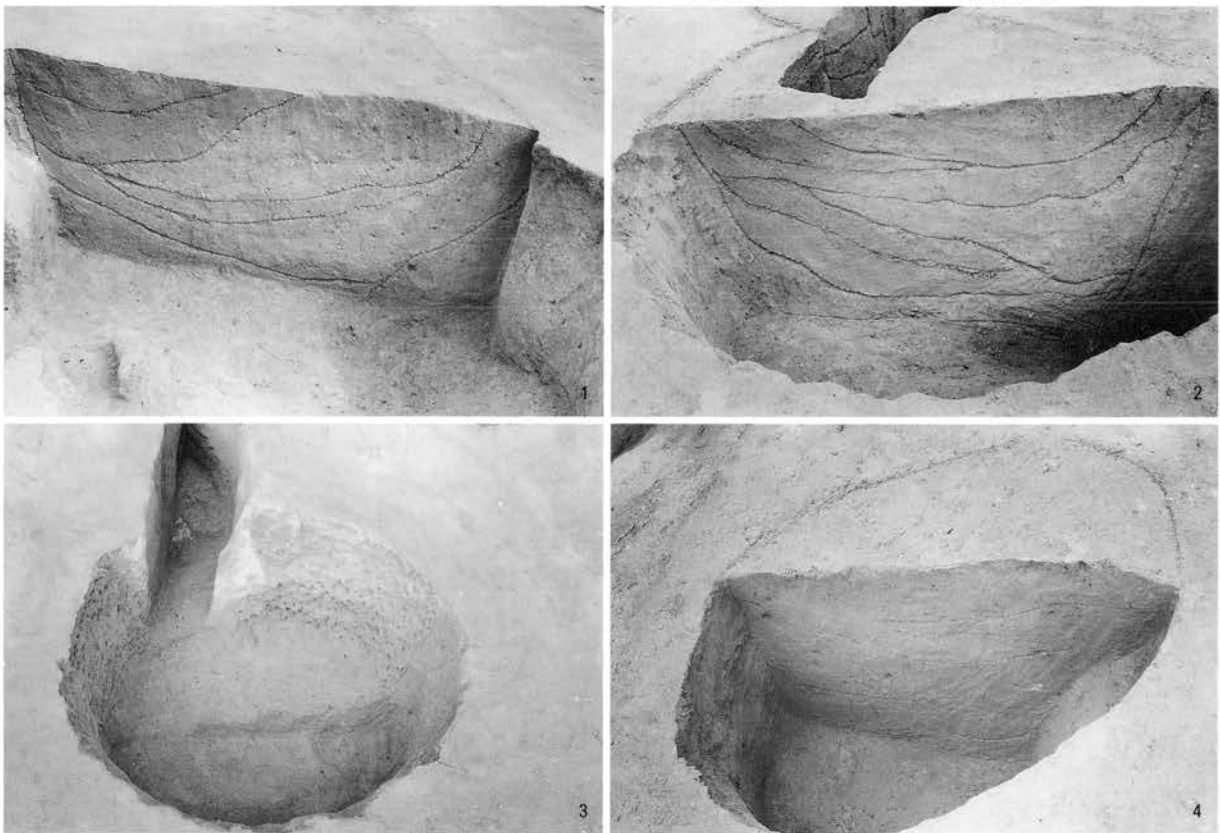
3 108号土坑全景

4 113号土坑断面



67 I区113~116号土坑

- | | |
|------------|------------|
| 1 113号土坑全景 | 2 114号土坑全景 |
| 3 115号土坑断面 | 4 116号土坑全景 |



68 I区117·118·120号土坑

- | | |
|------------|------------|
| 1 117号土坑断面 | 2 118号土坑断面 |
| 3 118号土坑全景 | 4 120号土坑断面 |



69 I区 122~124·126·128·132号土坑

1 122~124号土坑断面

2 126号土坑断面

3 128号土坑全景

4 132号土坑全景



70 I区 133·136·141·144号土坑

1 133号土坑断面

2 136号土坑全景

3 141号土坑全景

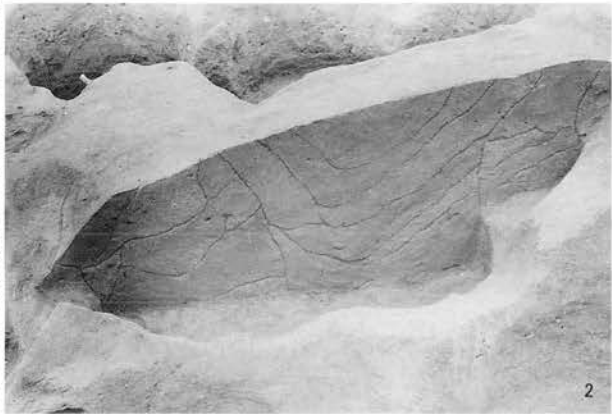
4 144号土坑断面



71 147·148·152~154号土坑

1 147·148号土坑断面
3 153号土坑全景

2 152号土坑全景
4 154号土坑断面



72 I区158~163·167号土坑

1 158号土坑断面
3 162·163号土坑全景

2 159~161号土坑断面
4 167号土坑全景



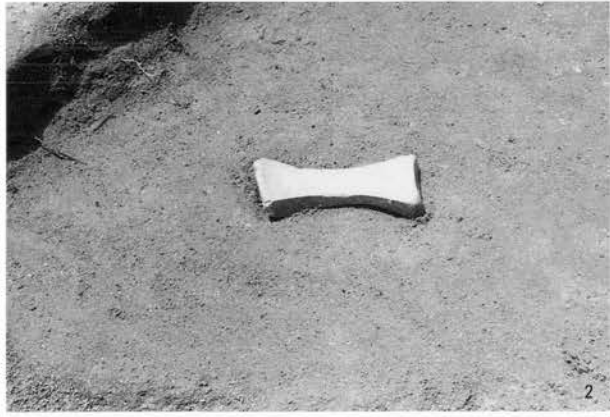
73 土器埋設遺構, 2・3号溝跡

1 1号土器埋設遺構
2 2号溝跡断面
3 2号溝跡全景
4 3号溝跡全景



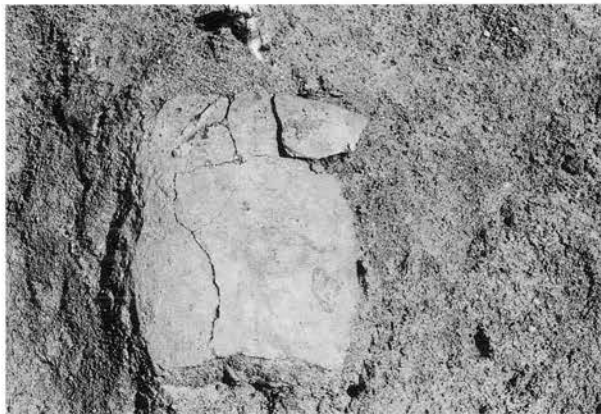
74 I区1~4号性格不明遺構

1 1号性格不明遺構
2 2号性格不明遺構
3 3号性格不明遺構
4 4号性格不明遺構



75 I区遺構外遺物出土状況

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1 M5 グリッド土師器 | 2 M4 グリッド砥石 |
| 3 O48' グリッド縄文土器 | 4 O48' グリッド縄文土器 |

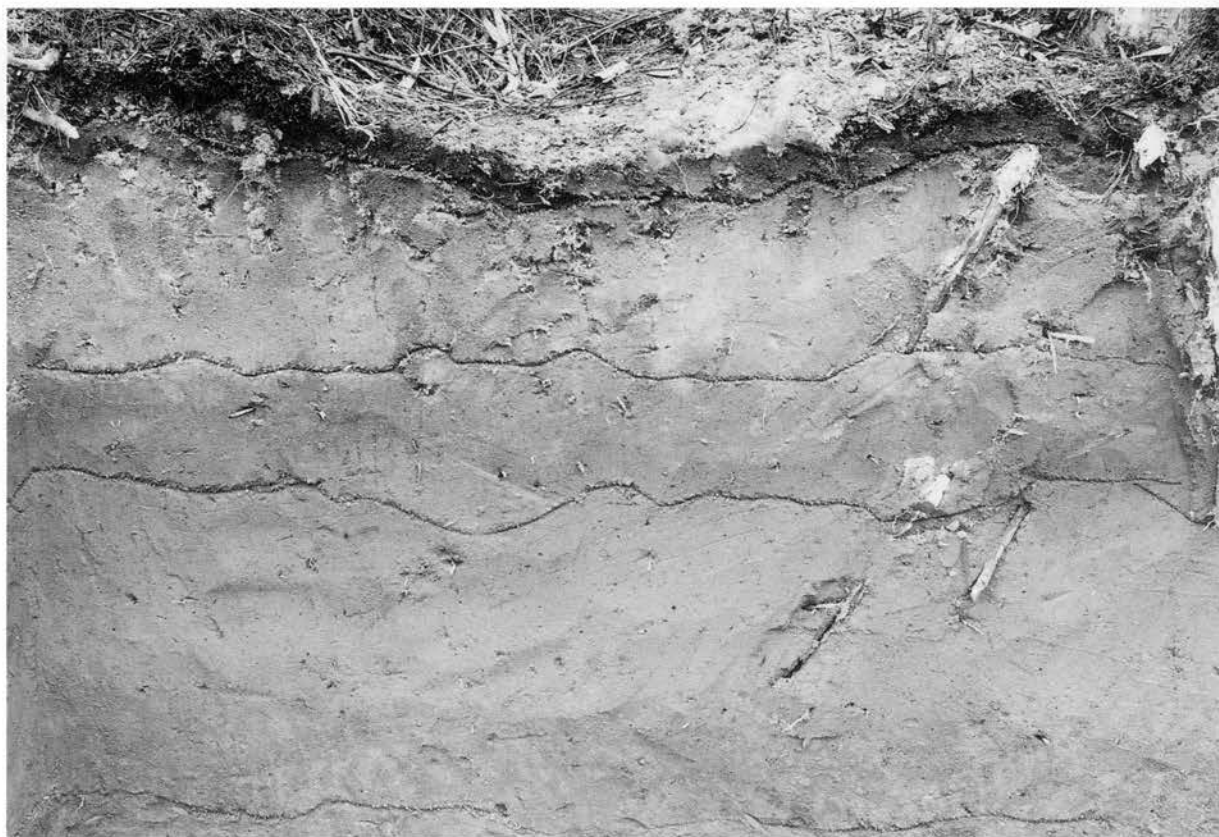


76 I区遺構外遺物出土状況

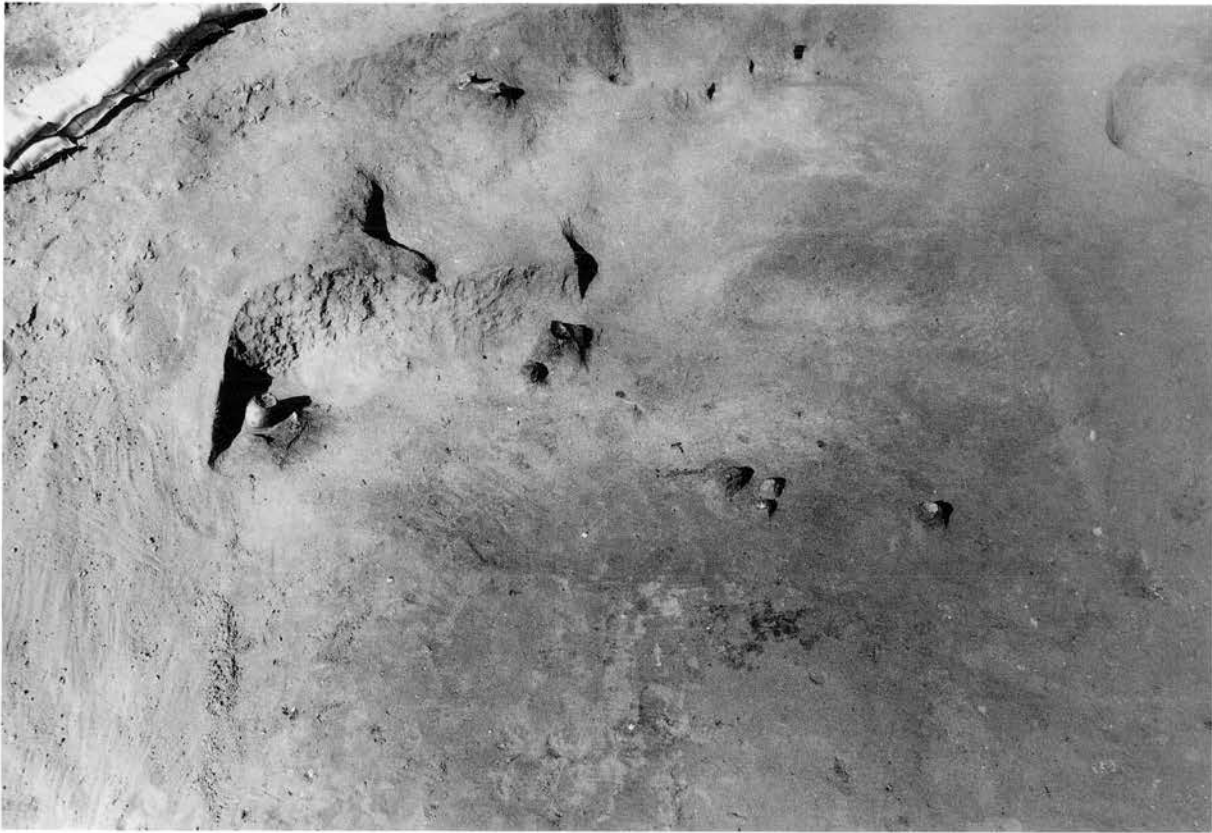
- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1 P48' グリッド縄文土器 | 2 P48' グリッド縄文土器 |
| 3 P48' グリッド縄文土器 | 4 O49' グリッド縄文土器 |



77 II 区 全 景 (東から)



78 II 区基本土層 (北から)



79 II区3号住居跡全景(東から)



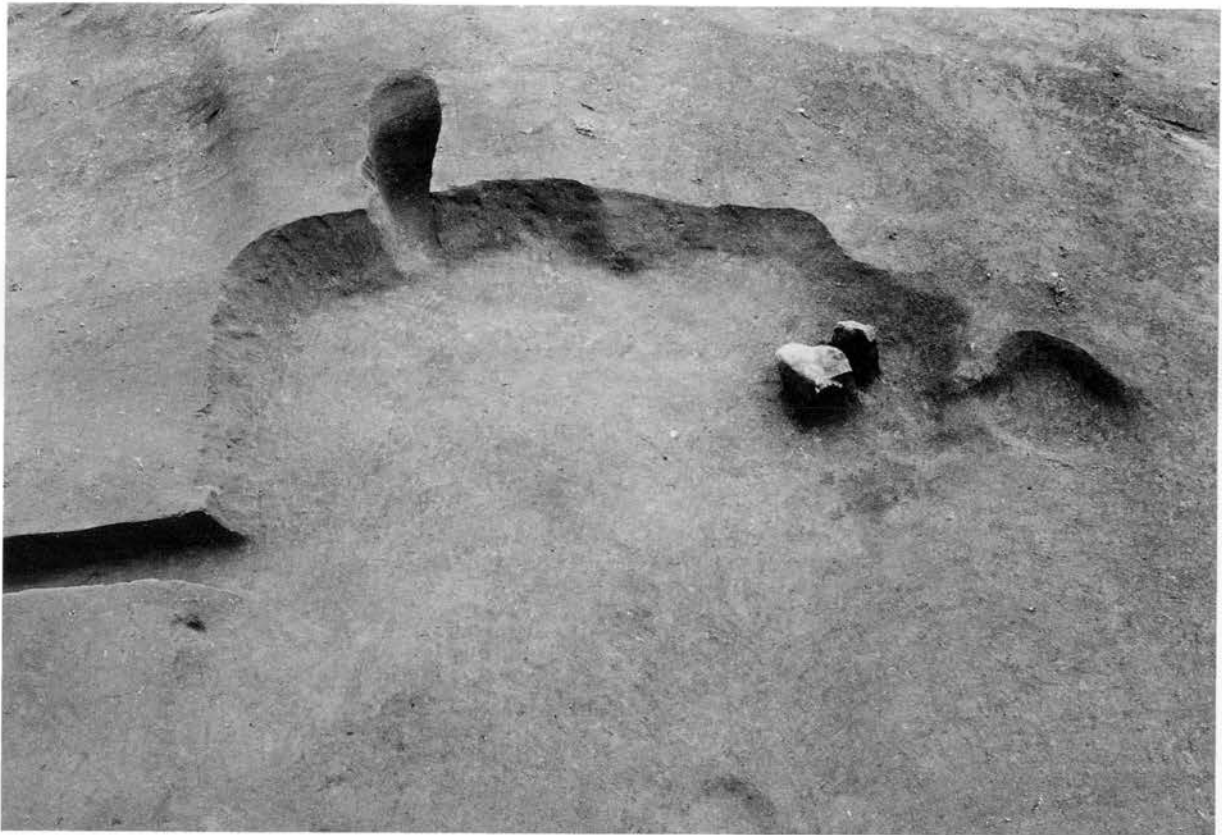
80 II区3号住居跡

1 検出状況

2 土師器出土状況

3 土師器出土状況

4 土師器出土状況



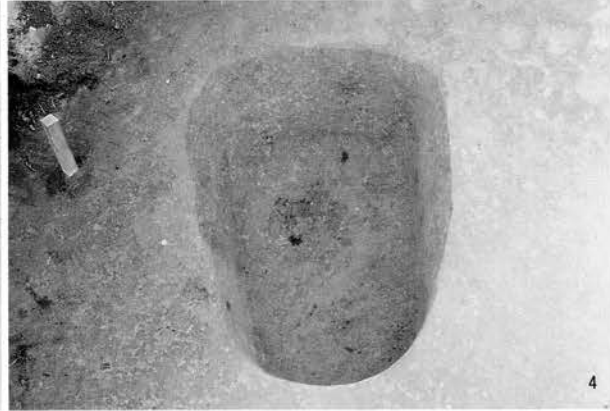
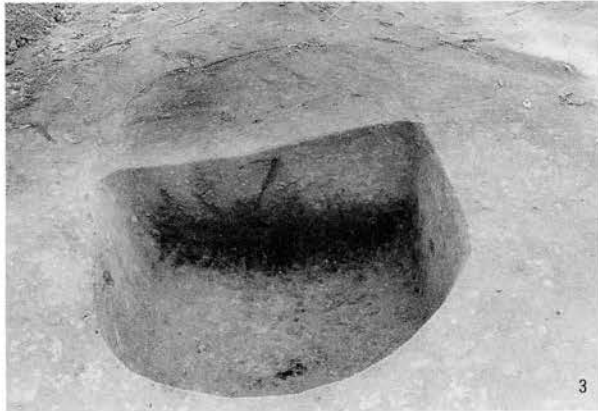
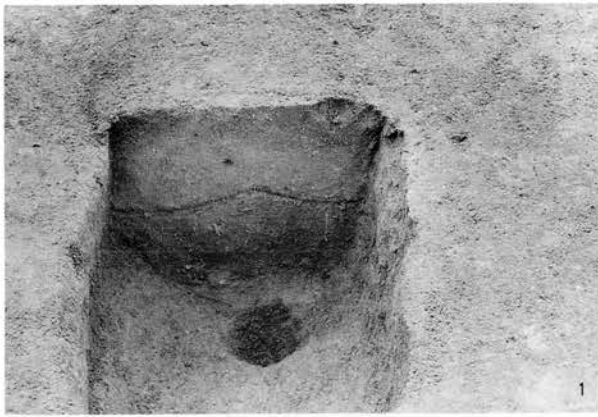
81 II区6号住居跡全景(南東から)



82 II区6号住居跡

1 断面(AA')
3 カマド断面

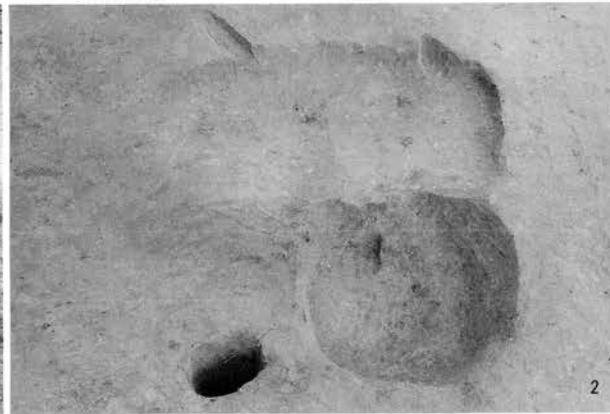
2 断面(BB')
4 土師器出土状況



83 II区 25·29号土坑

1 25号土坑断面
3 29号土坑断面

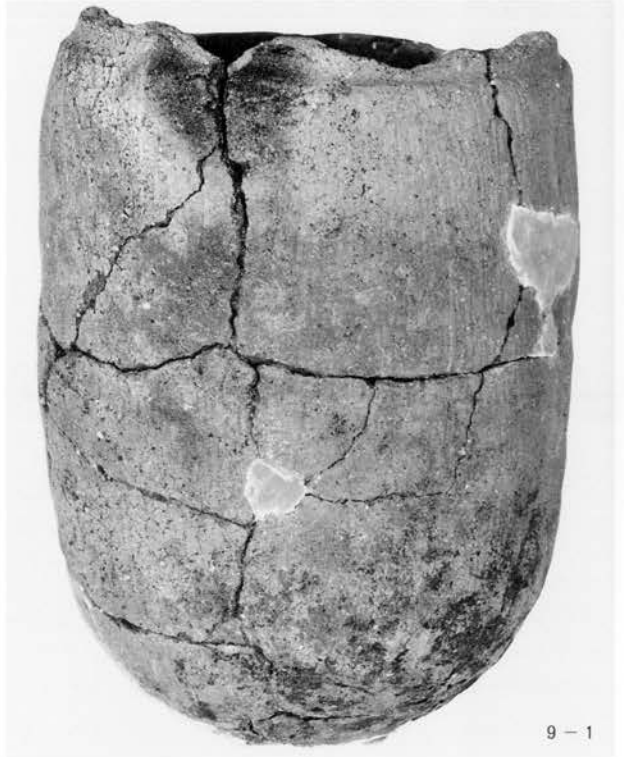
2 25号土坑全景
4 29号土坑全景



84 II区 30~32号土坑

1 30·31号土坑断面
3 32号土坑断面

2 30·31号土坑全景
4 32号土坑全景



85 I区9号住居跡出土土師器



9-2



9-3



12-2



12-3

86 I区9・10号住居跡出土土師器



12-4



12-5



13-6



13-2



13-1



13-4



13-5

87 I区10号住居跡出土土師器・須恵器



16-2



16-3



16-4



17-1



17-3



17-5

88 I区11号住居跡出土土師器



17-2



17-4



19-1



19-2



19-3



19-4

89 I区11・12号住居跡出土土師器



19-5



19-6



19-7



21-1



21-3



21-2

90 I区12・13号住居跡出土土師器・須恵器



25-1



25-2



25-3



25-6



25-4



25-7



25-5

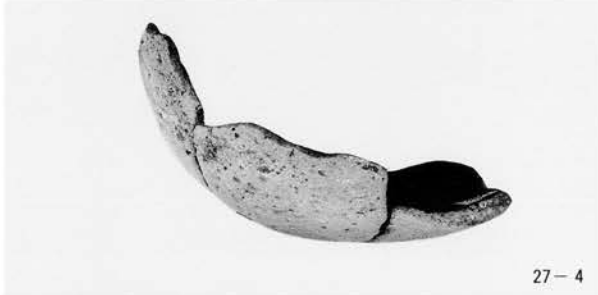
91 I区14号住居跡出土土師器



27-2



27-3



27-4



28-1



28-2



28-3



28-4



28-5



28-6

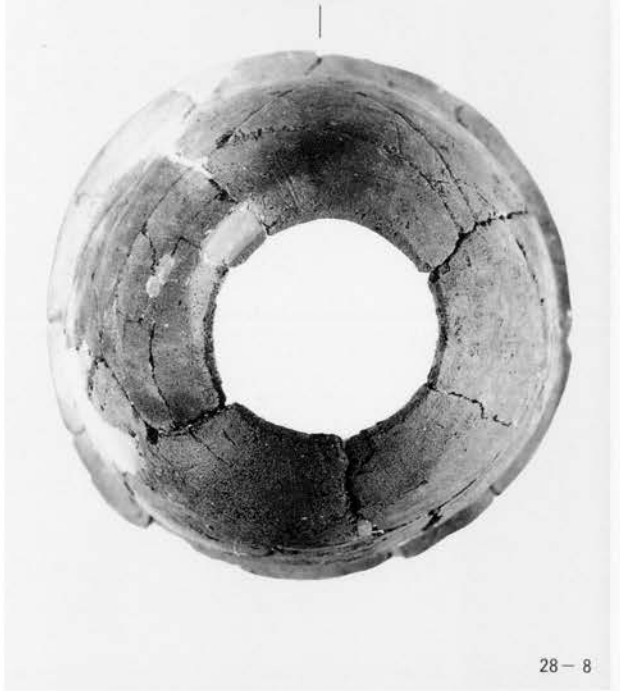
92 I区15号住居跡出土土師器



28-7



28-9



28-8



30-1



30-2

93 I区15・16号住居跡出土土師器



94 I区16号住居跡出土土師器



30-8



31-2



31-1



32-1

95 I区16・17号住居跡出土土師器



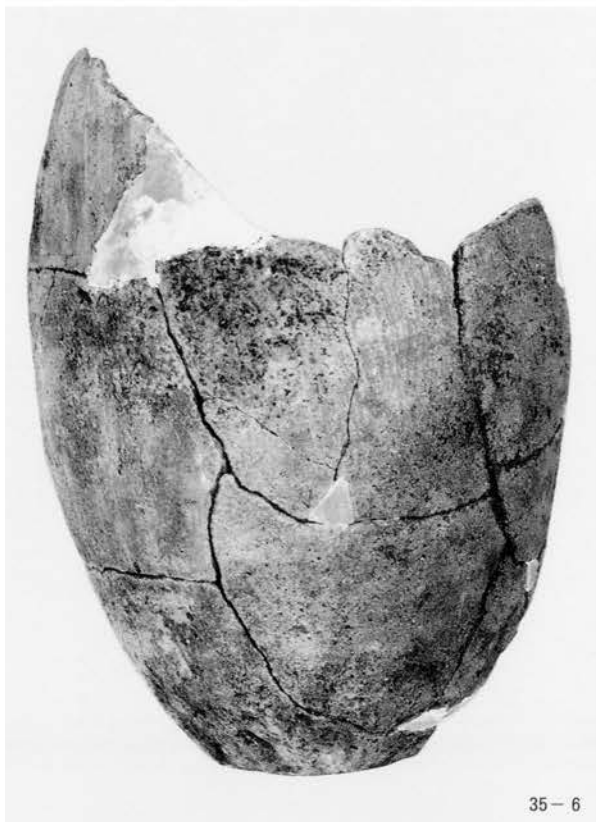
96 I区17・18号住居跡出土土師器・須恵器



35-3



35-5



35-6



35-7



37-1



37-3

97 I区18・19号住居跡出土土師器



38-2



38-1



38-3



38-5



38-6



38-7

98 I区19号住居跡出土土師器



39-1



39-2



41-1



41-2

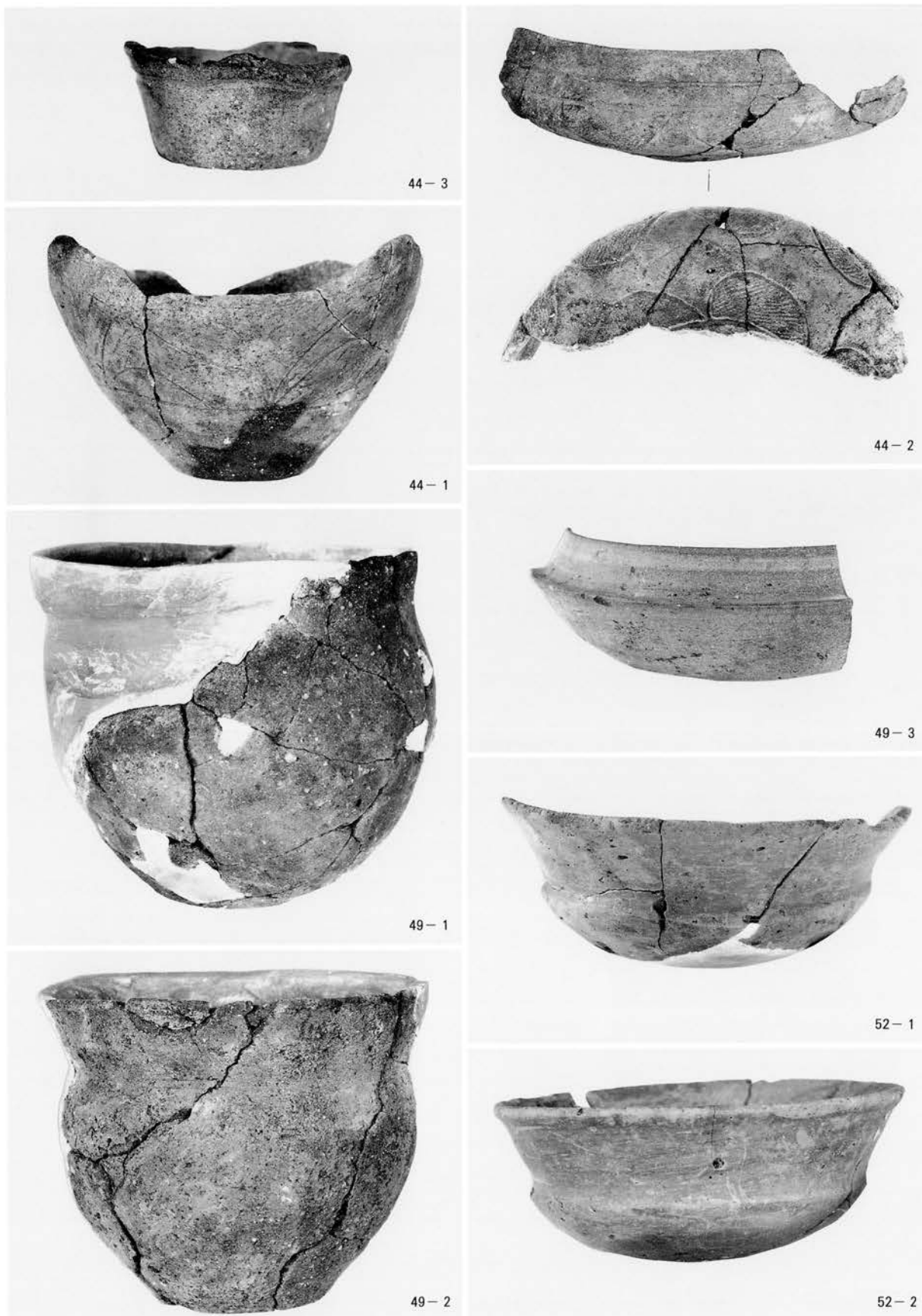


41-4



41-3

99 I区19・20号住居跡出土土師器



100 I区22・26・27号住居跡出土土師器・須恵器・縄文土器



52-3



52-4



52-5



53-2



87-5



87-4

101 I区27・28号住居跡出土土師器・縄文土器, 土坑出土土師器(1)



104 I区遺構外出土土師器(1)



133-14



134-4



134-2



134-3

105 I区遺構外出土土師器(2)

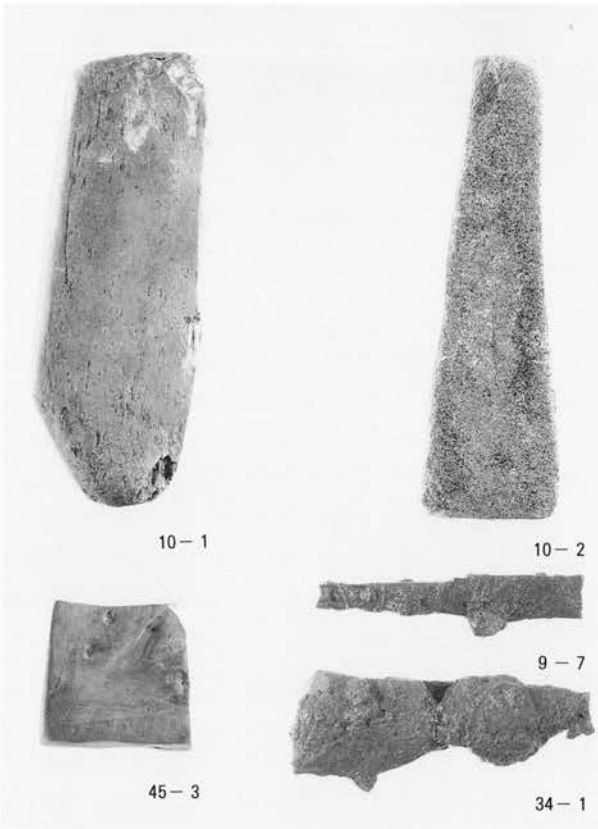


133-13



134-1

106 I区遺構外出土土師器(3)



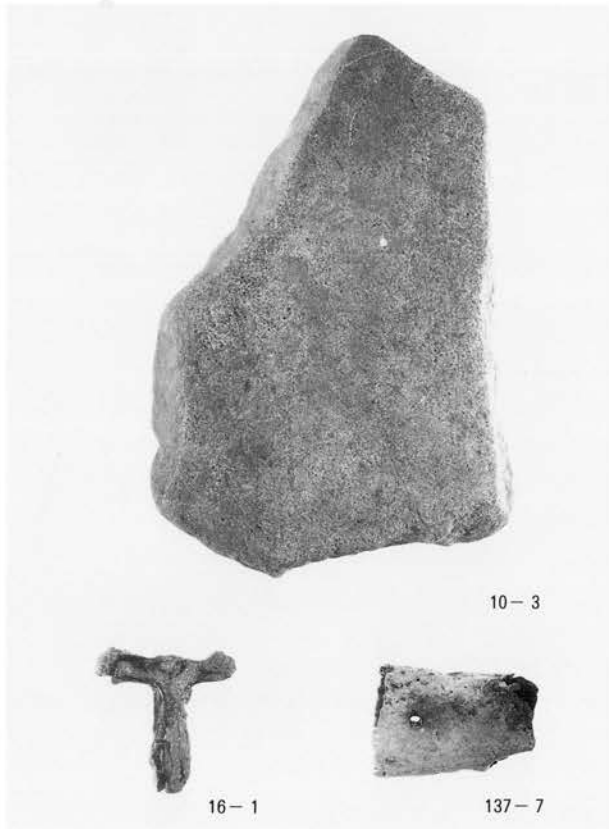
10-1

10-2

45-3

9-7

34-1

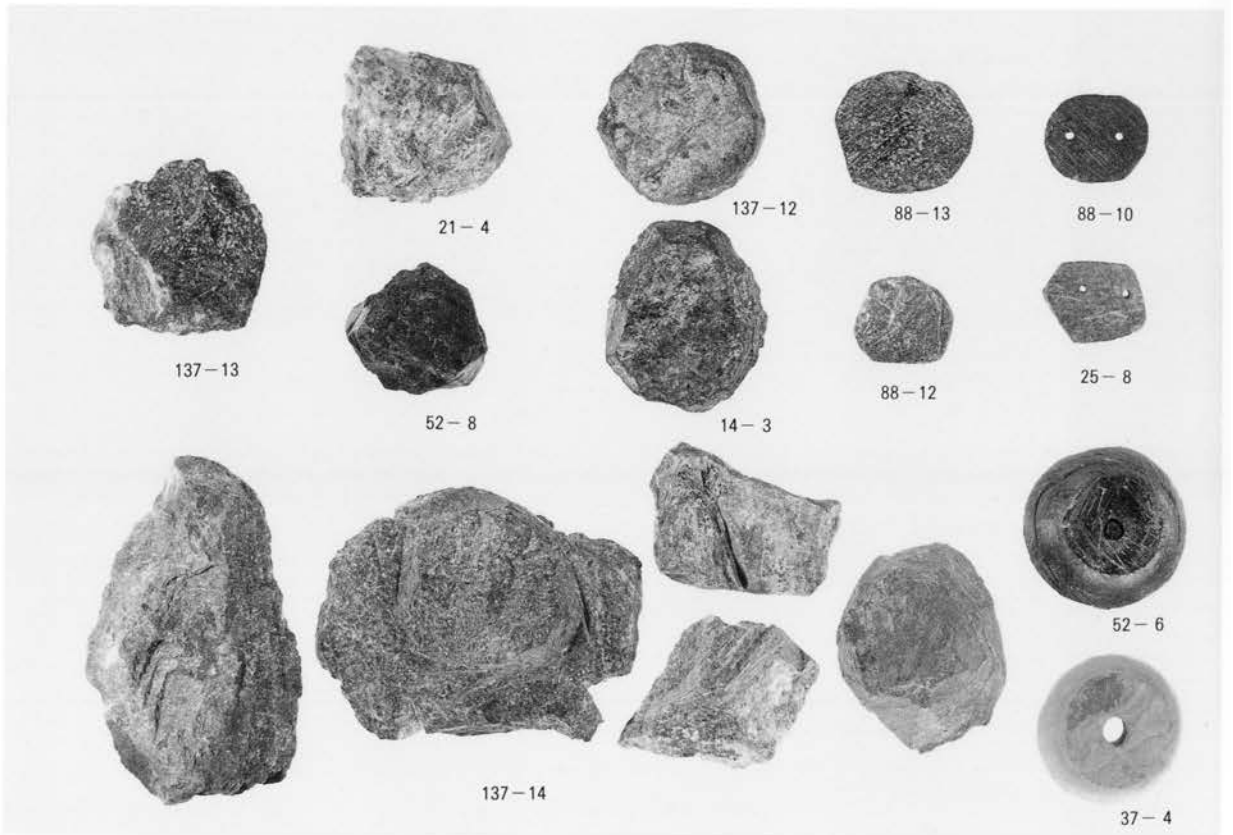
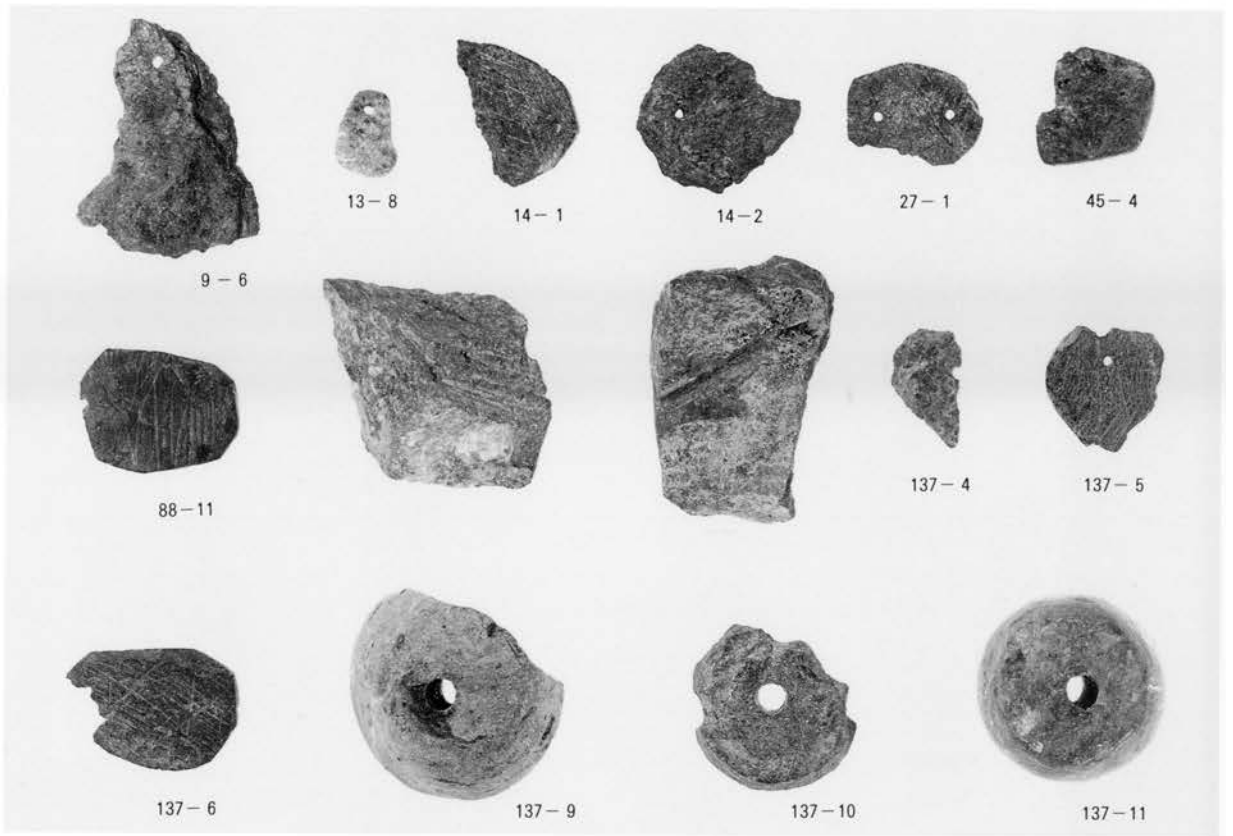


10-3

16-1

137-7

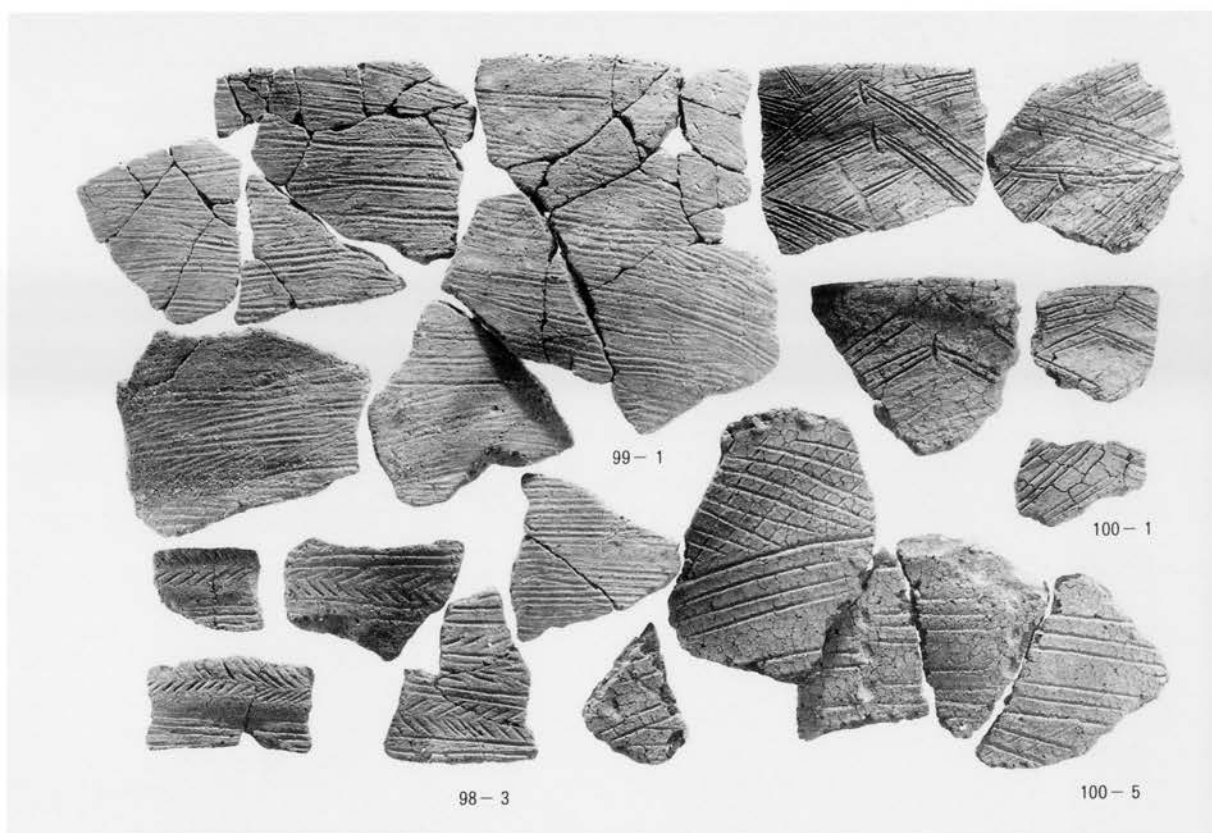
107 I区遺構内・遺構外出土石製品・金属製品



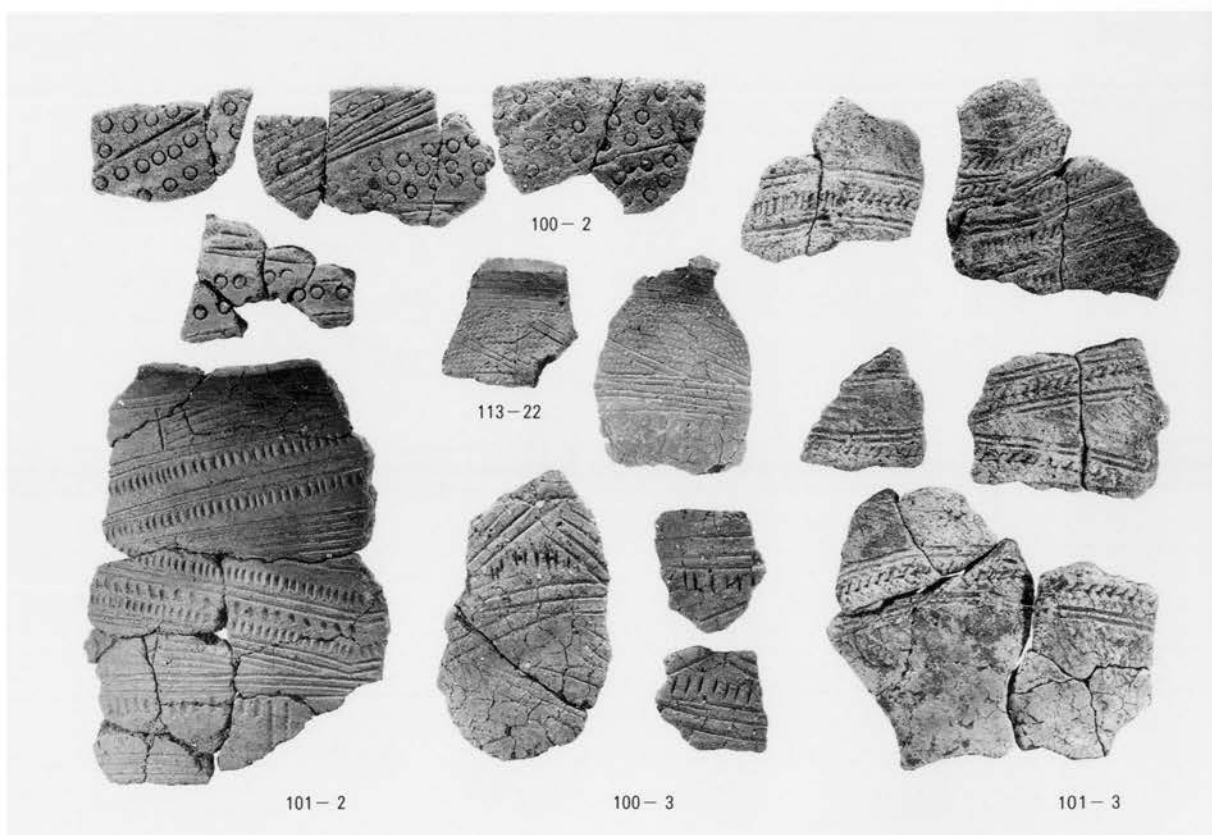
108 I区遺構内・遺構外出土石製品



109 I区遺構外出土縄文土器(1)・石器



110 I区遺構外出土縄文土器(2)



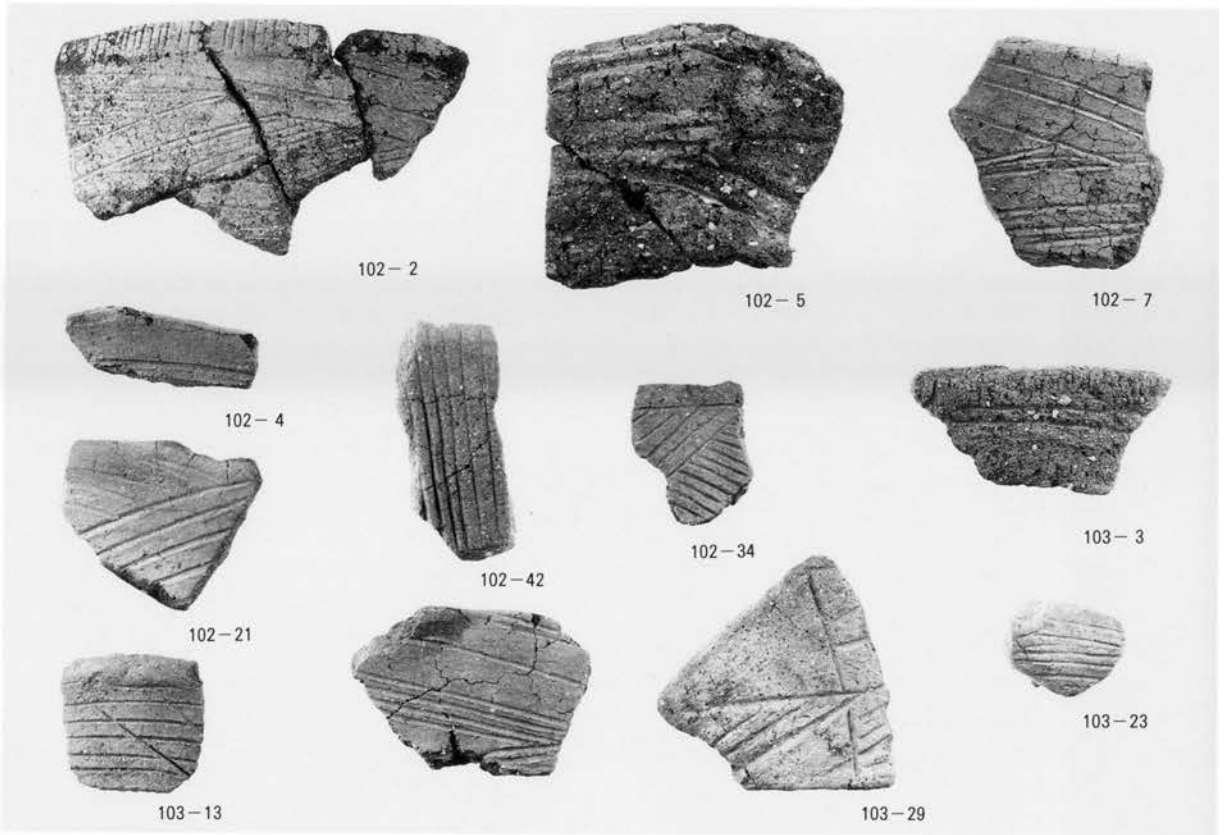
111 I区遺構外出土縄文土器(3)



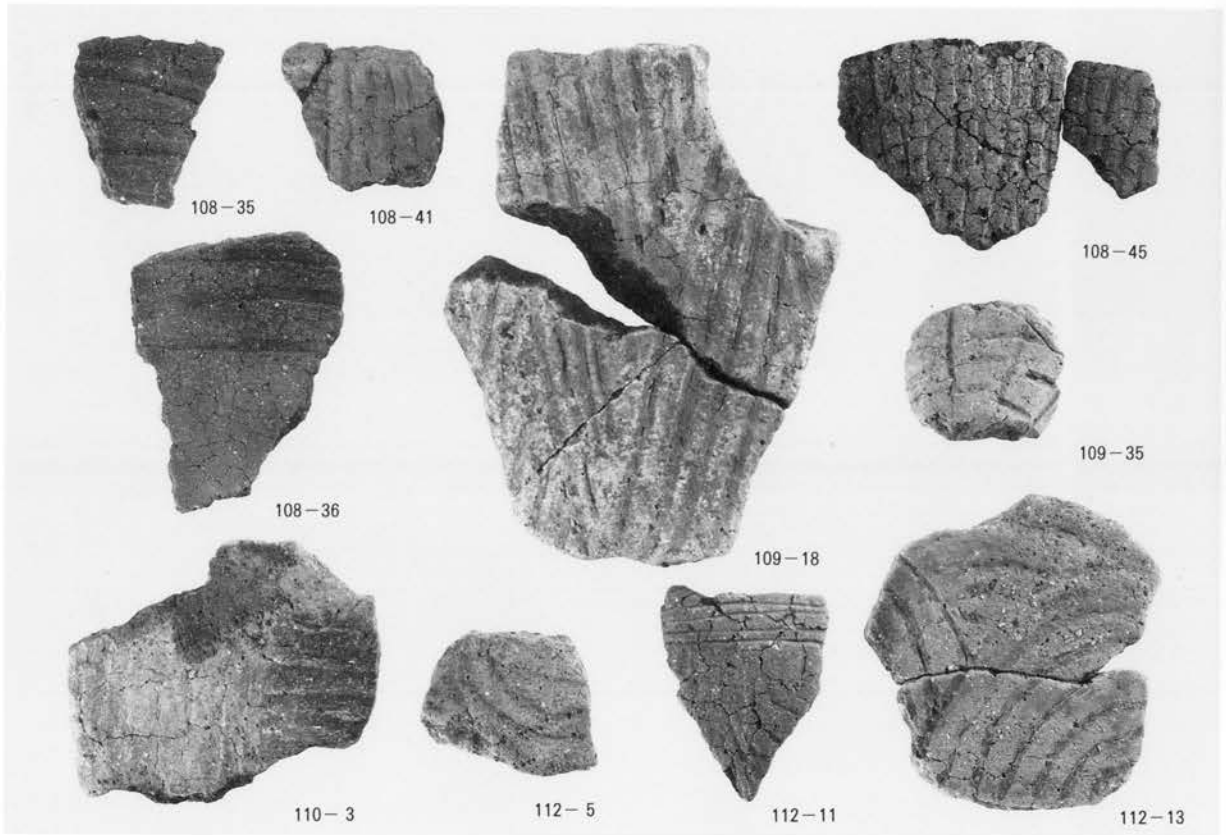
112 I区遺構外出土縄文土器(4)



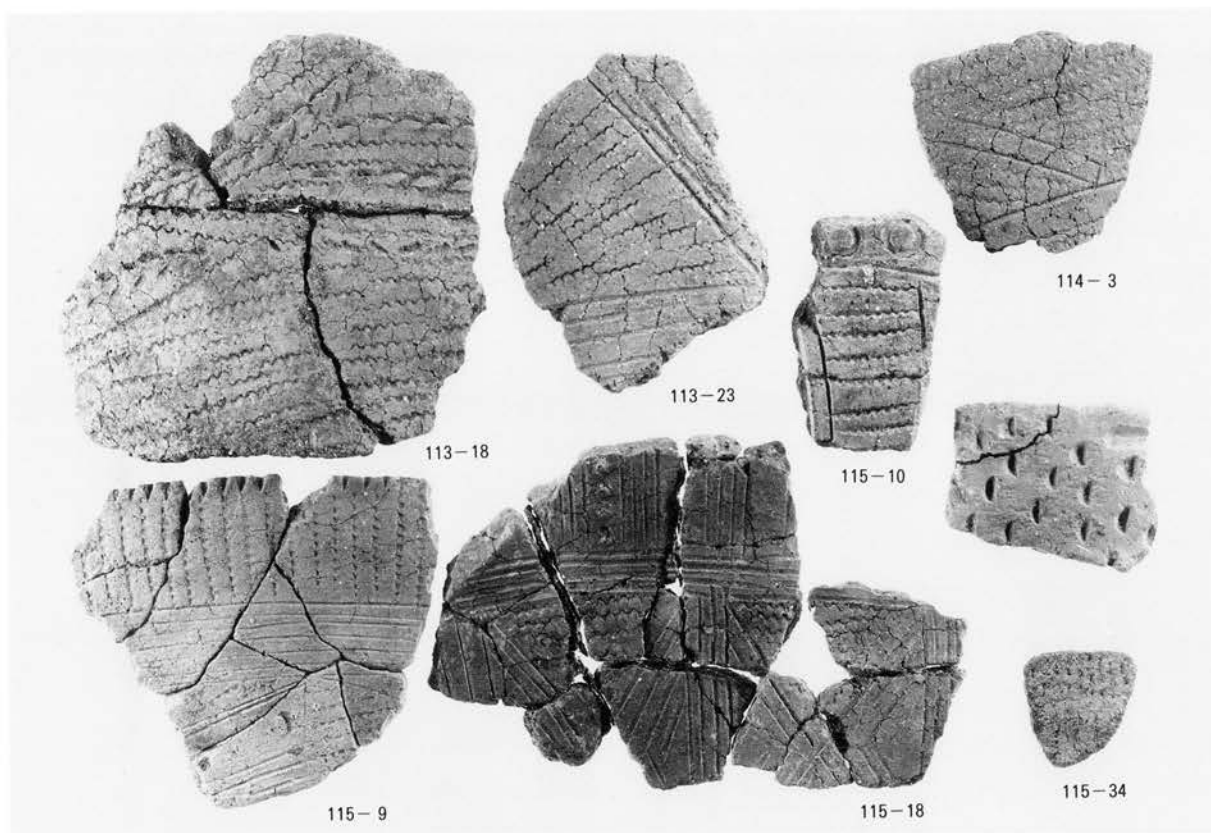
113 I区遺構外出土縄文土器(5)



114 I区遺構外出土縄文土器(6)



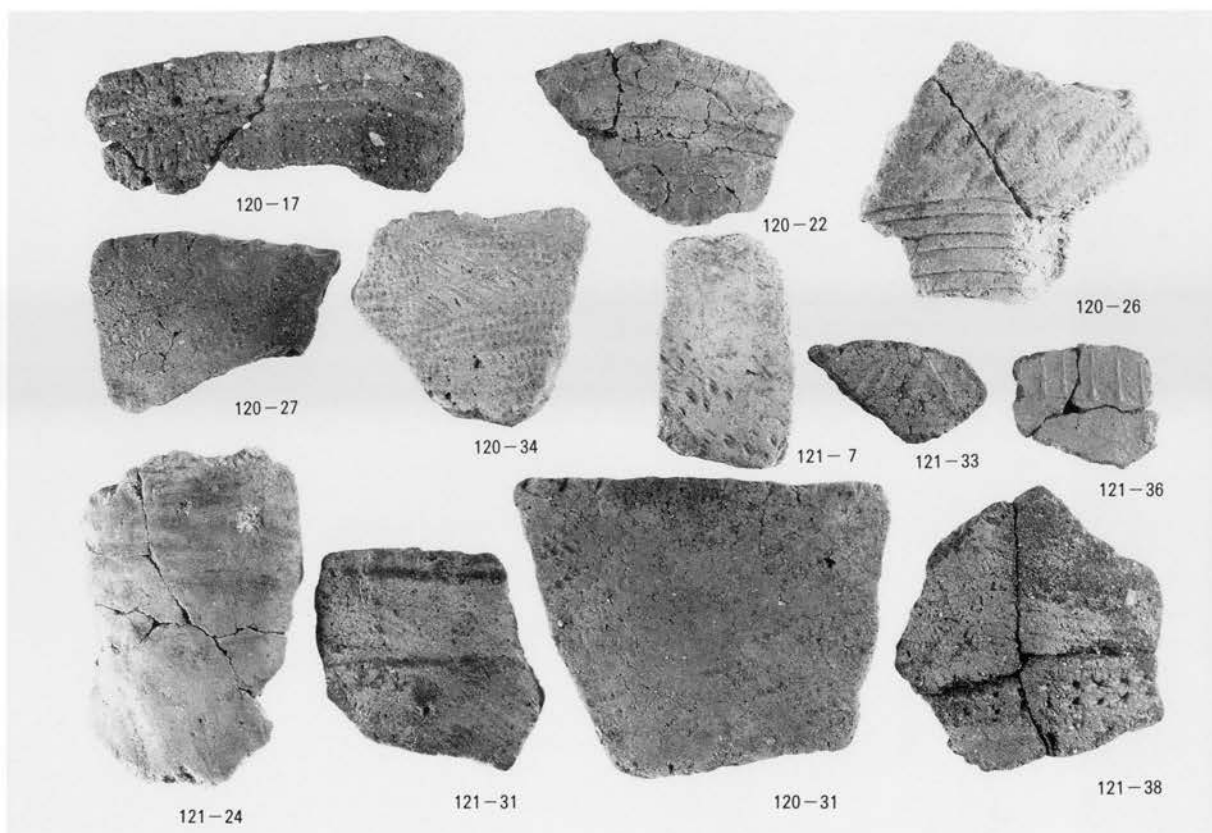
115 I区遺構外出土縄文土器(7)



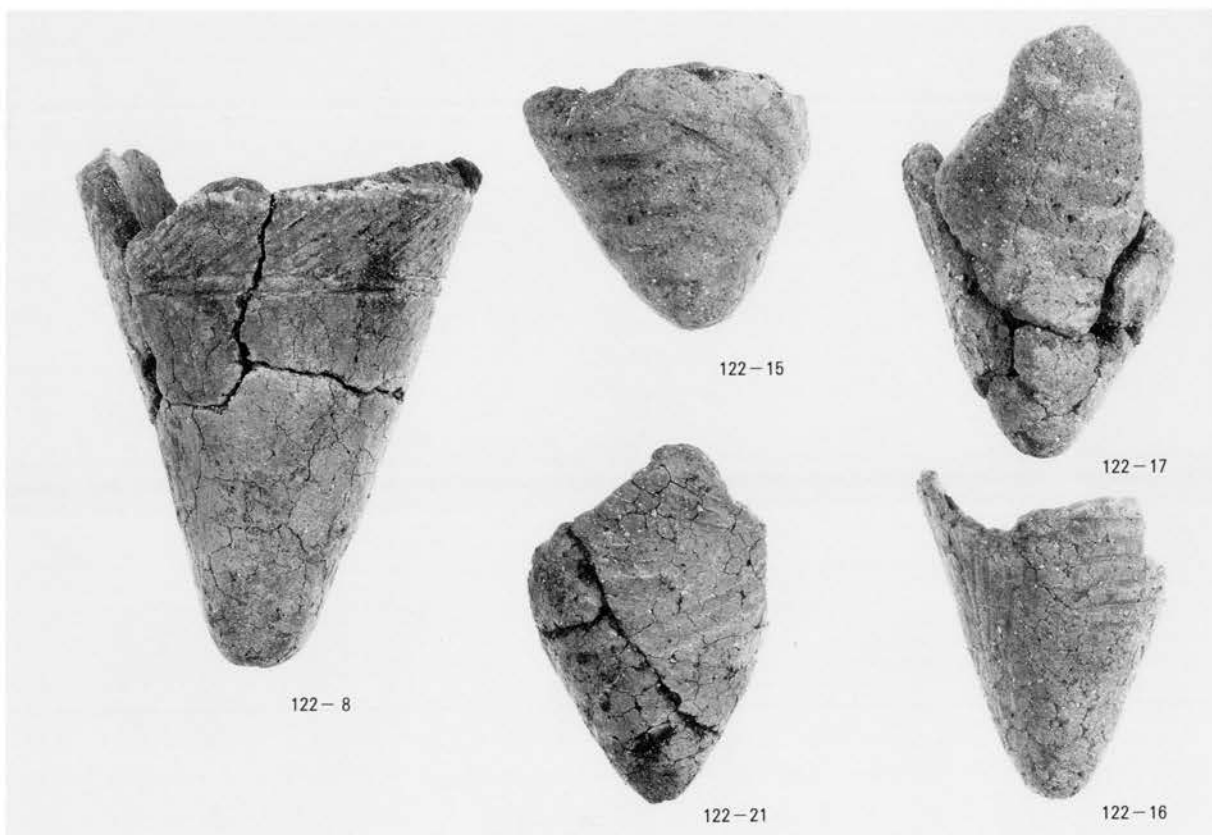
116 I区遺構外出土縄文土器(8)



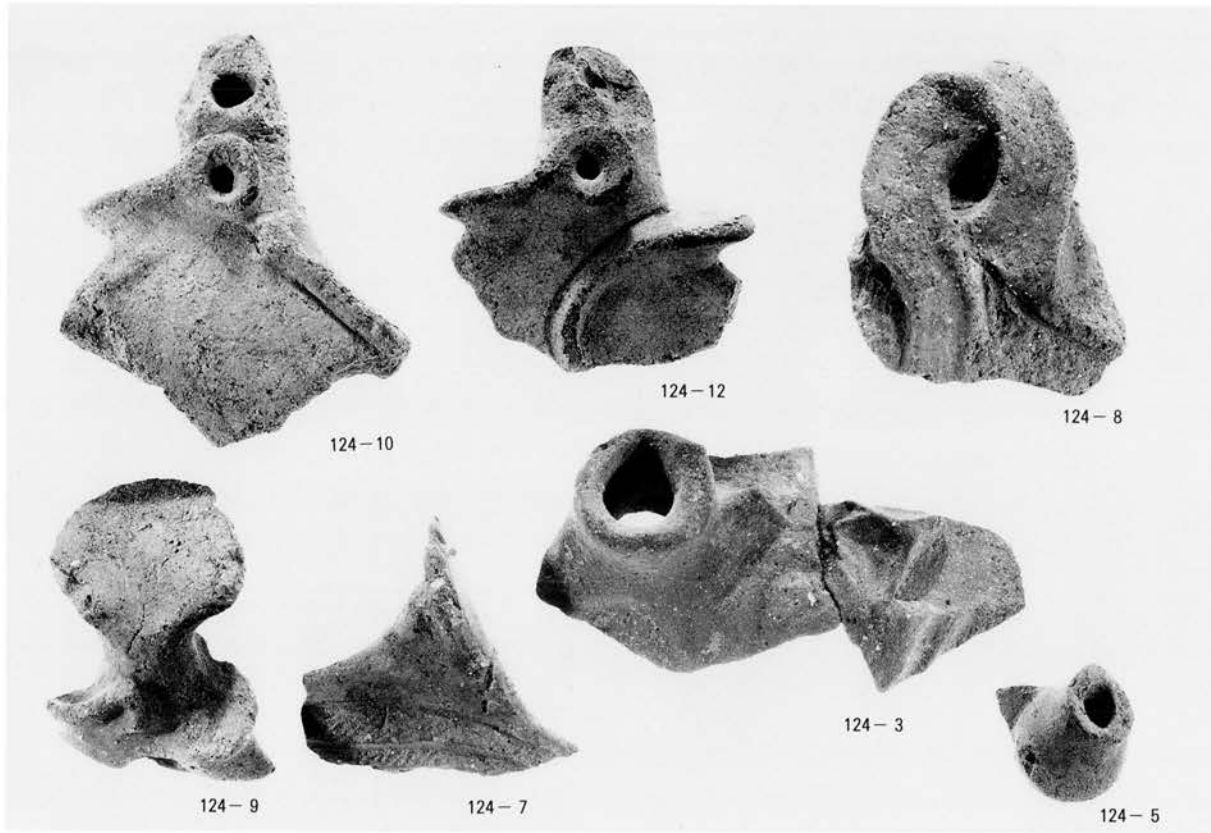
117 I区遺構外出土縄文土器(9)



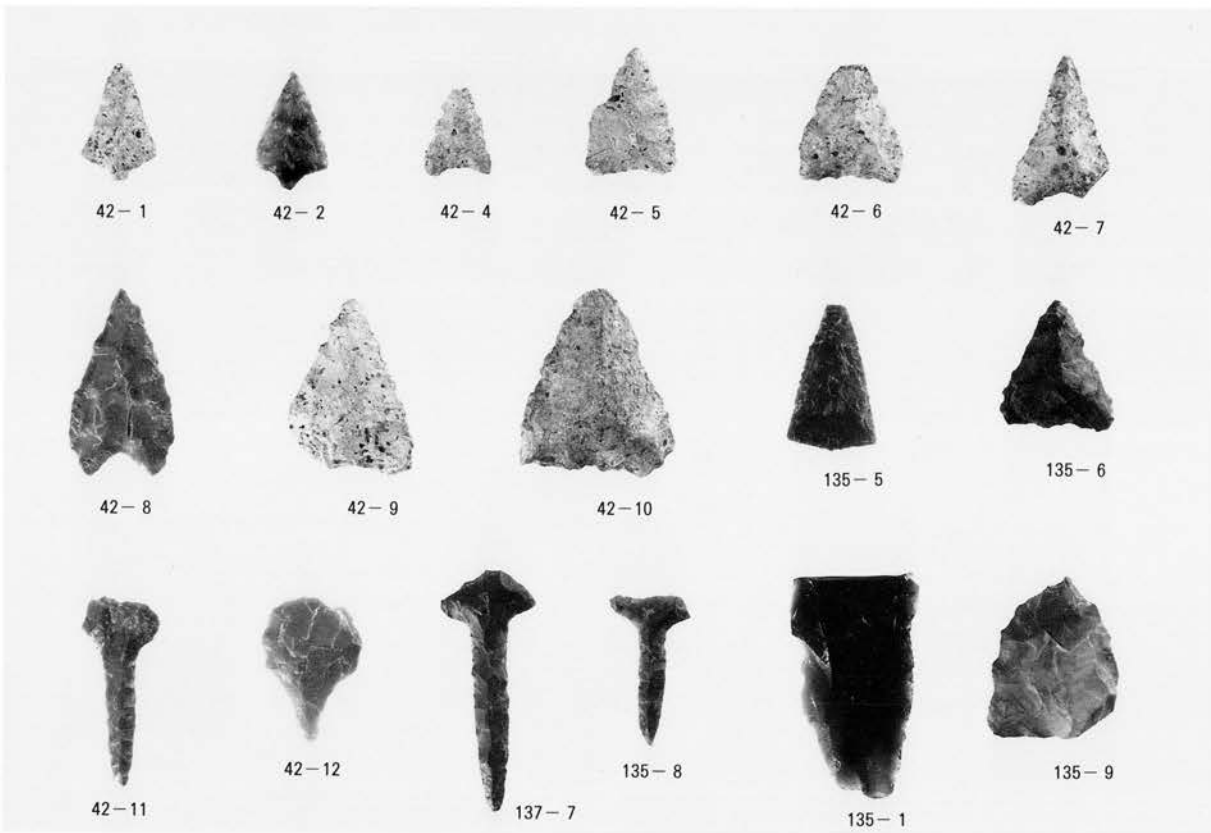
118 I区遺構外出土縄文土器(10)



119 I区遺構外出土縄文土器(5)



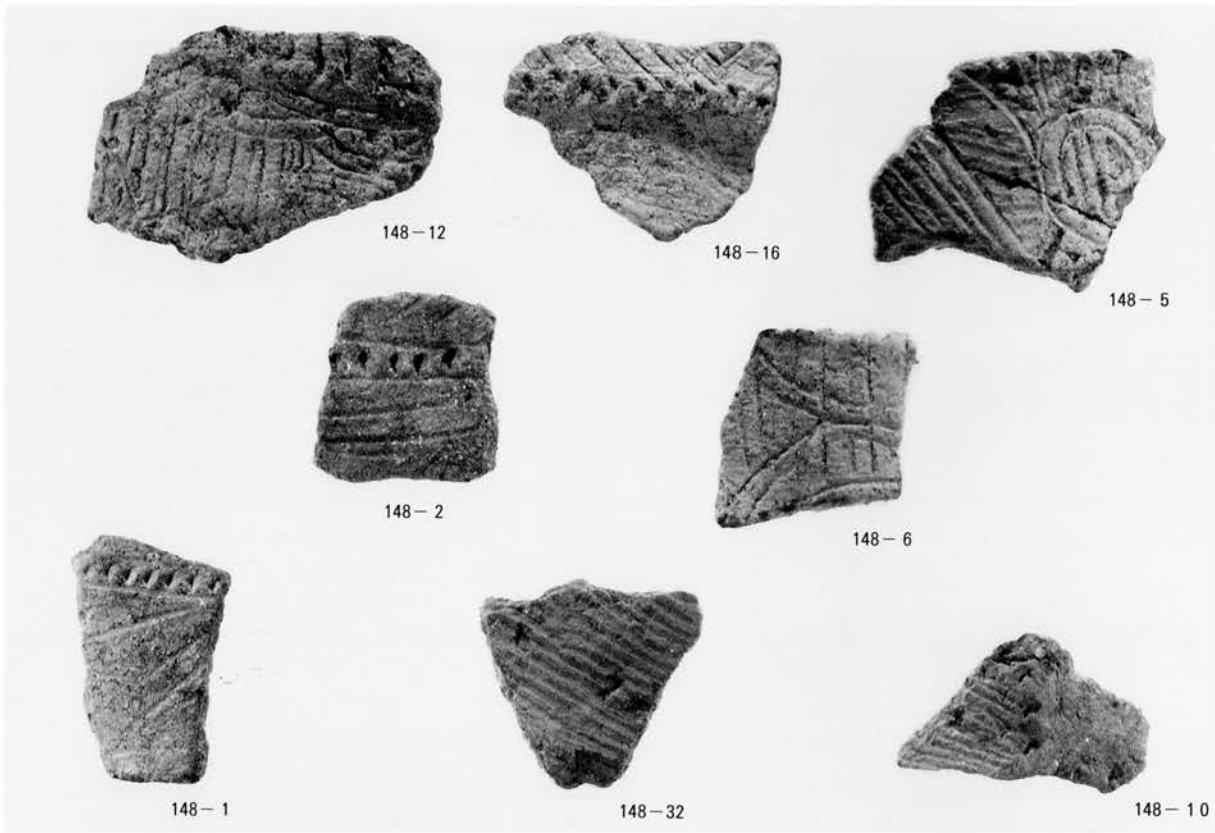
120 I区遺構外出土縄文土器 ⑫



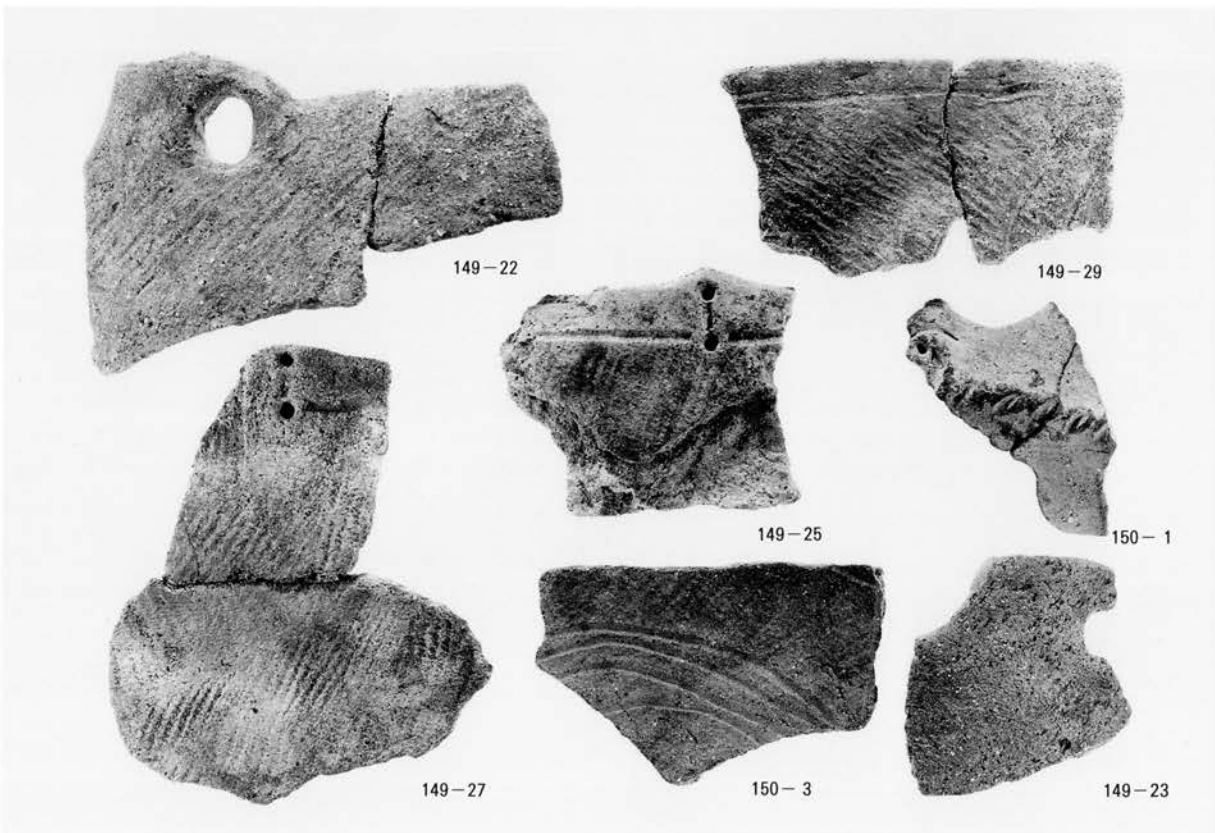
121 I区遺構内・遺構外出土石器



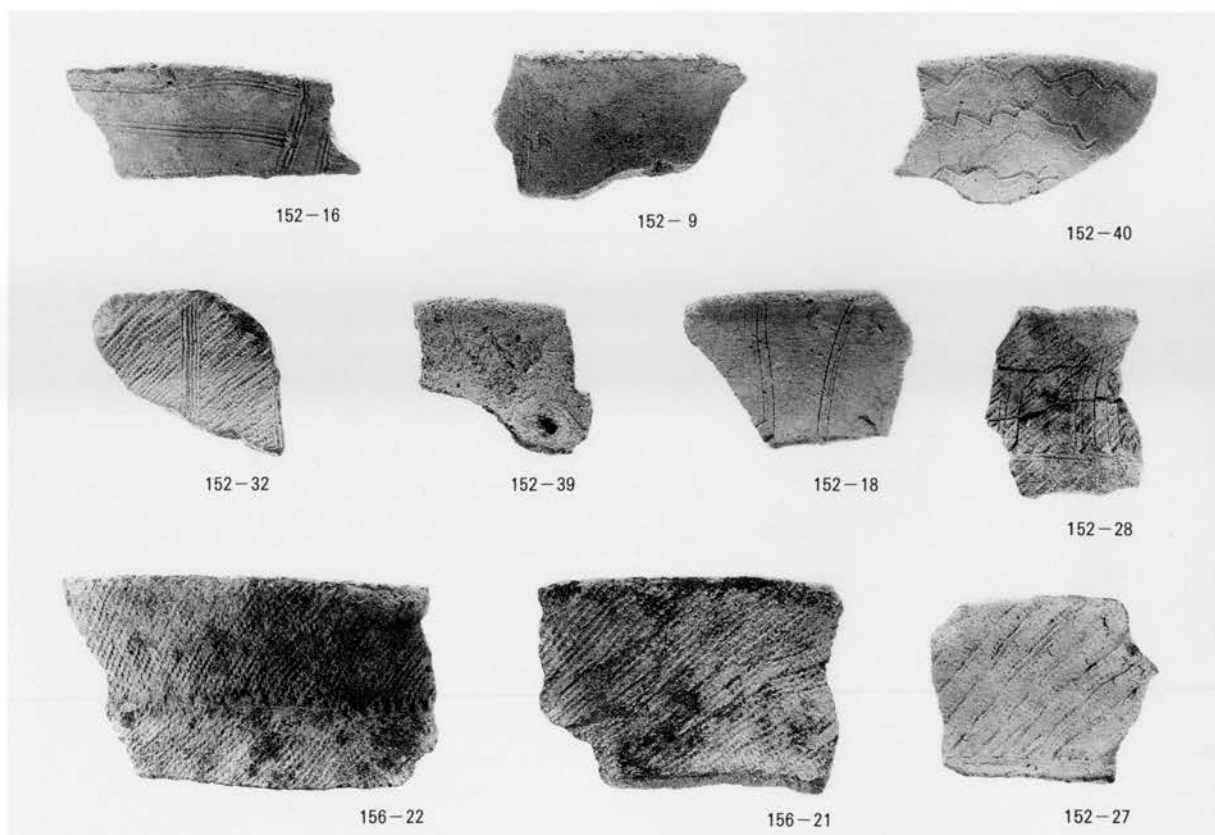
122 II区住居跡出土土師器・須恵器，遺構外出土弥生土器



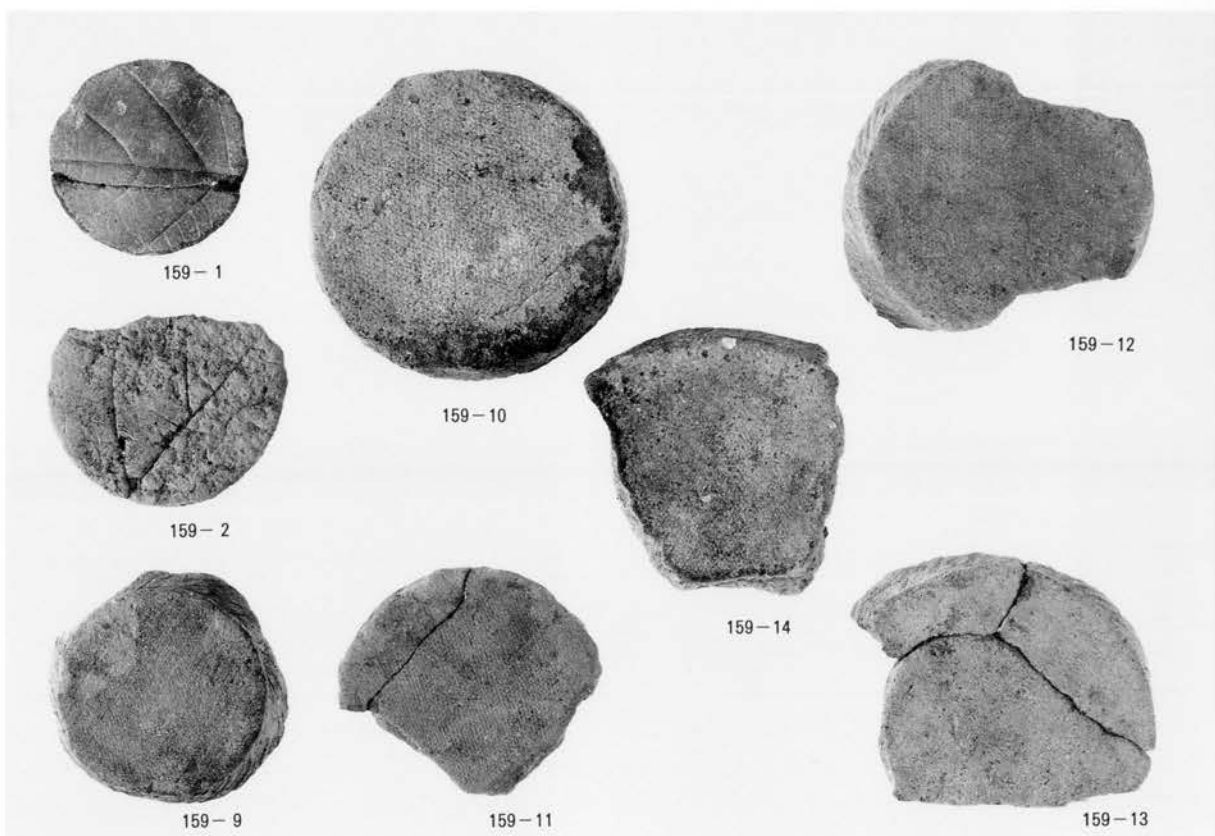
123 II区遺構外出土縄文土器(1)



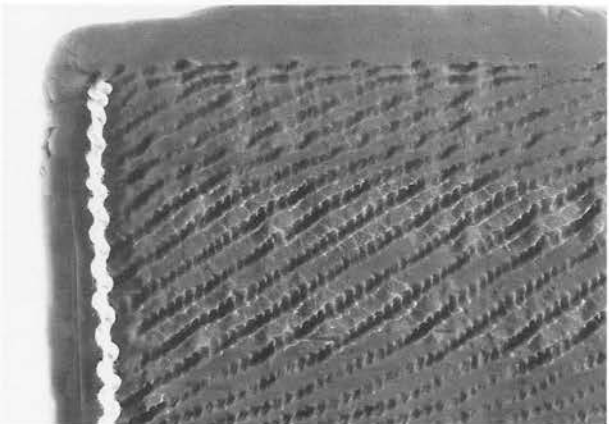
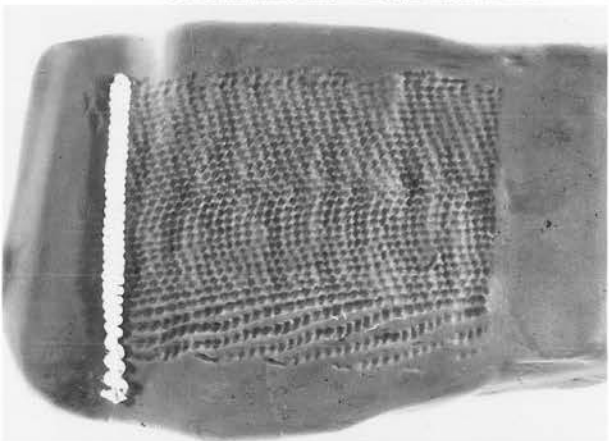
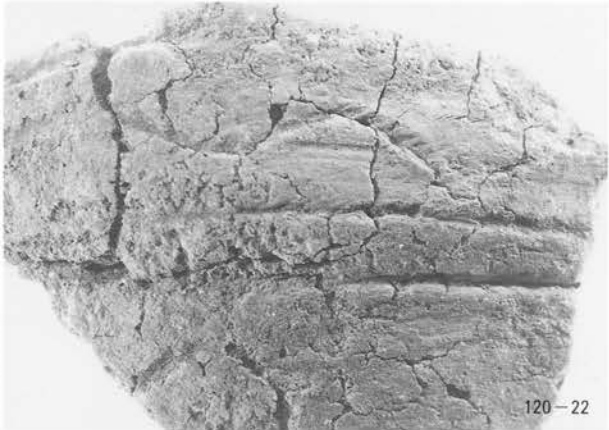
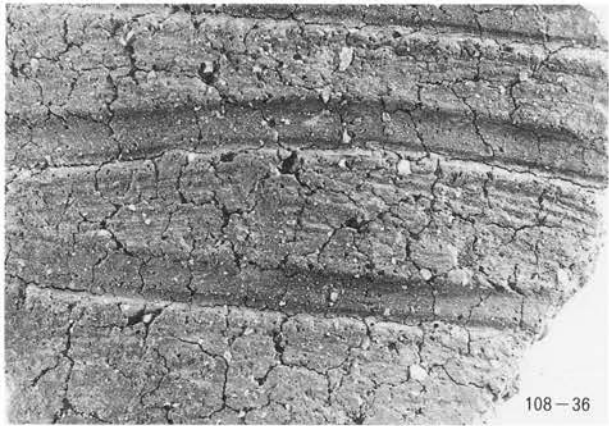
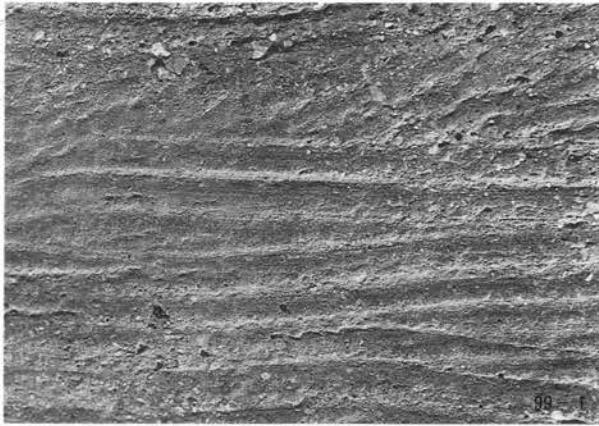
124 II区遺構外出土縄文土器(2)



125 II区遺構外出土弥生土器(1)



126 II区遺構外出土弥生土器(2)



127 縄文土器の細部と縄文原体

報告書抄録

ふりがな	じょうばんじどうしゃどういせきちようさほうこく							
書名	常磐自動車道遺跡調査報告9							
シリーズ名	福島県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第331集							
編著者名	安田 稔・高村亮一郎・渡辺悦子・大竹正浩・国井秀紀・今野 徹							
編集機関	財団法人福島県文化センター 遺跡調査課							
所在地	〒960 福島県福島市春日町5-54 TEL.0245-34-2733 FAX 0245-36-3781							
発行年月日	西暦 1996年12月20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯 〃	東経 〃	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
タタラ山	ふくしまけん し 福島県いわき市 よつらまちこみなと 四倉町小湊 あざかくた 字角田	07204	1015	37 07 10	140 55 46	19950412～ 19951102	10,300	道路（常磐自動車道）建設に伴う事前調査
所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
タタラ山	集落跡	縄文・弥生 古墳・奈良 平安	竪穴住居跡 (21) 土坑 (157) 土器埋設遺構 (1) 溝跡 (3) 性格不明遺構 (4) ピット (3) 遺物包含層 (2)	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・石器・石製品・土製品・金属製品・鉄滓		縄文時代中後期・古墳時代後期・奈良時代・平安時代の小規模な集落、円形土坑群、縄文時代早期中葉の土器が多量出土		

福島県文化財調査報告書第331集

常磐自動車道遺跡調査報告9

タタラ山遺跡

(2次調査)

平成8年12月20日発行

編集 発行	財団法人福島県文化センター (遺跡調査課) 福島県教育委員会 (〒960) 福島市杉妻町2-16 財団法人福島県文化センター (〒960) 福島市春日町5-54 日本道路公団東北支社いわき工事事務所 (〒973) いわき市内郷高坂町八反田28-1 印刷 (株)平電子印刷所 (〒970) いわき市平北白土字西ノ内13
----------	--

本報告書は中性紙を使用しています。

(本文 年史 80kg)
(写真版 アート 110kg)